號 六 第

我れを
天使の如
情の
さ
不逞
痛ま
知る
心を

右の一
雑誌『
に掲載
海道山
ること
りに収
れたの
ことに

有島武郎全集　第六巻

西方古傳

五彩の水ゆるやかに流るゝ河に沿ひて限り知られぬ草野あり。草野のなだらかなる凹み、滞りせるべき程浅き、瀦澤成りて、白蓮と紅蓮と之に薫き、紅なる莖は登りて靜なる水を筆有り。虹の彩なる胡蝶蜻蛉花を繞りて舞ひ遊び、原に茂る松の木の間より白日の中より小禽銀の鈴

「西方古傳」の一節（第一卷所載）

四〇（一九〇七）六月於麹町浮寫

西方古傳

五彩の水ゆるやかに流るゝ河に添いて限り知られぬ草
野あり、草野のなだらかなる凹み、滞(かちわた)りせらるべき
程浅き、溷澤(みづくま)成りて、白蓮(びやくれん)と紅蓮(ぐれん)と之こもごも華き、
緑なる葉い澄ことて藍なる水を捧ゆり。
虹の彩(あや)なる胡蝶蜻蛉(あきつ)花を繞りて舞い遊び、原
に茂れる松の木の間には白日の中に小禽銀(しろがね)の鈴

第六巻目次

一九一九年

序・跋・題言

講演・談話筆記

一九二〇年

序・跋

講演・談話筆記

一九二〇年——一九二一年

有島武郎全集 第六卷

評論・感想集 (其二)

一九一九年

小さき影

一

誰にあてるともなくこの私信を書き連ねて見る。

信州の山の上に在るK驛に暑さを避けに來てゐる人は澤山あつた。彼等は思ひ〳〵に豐かな生活の餘裕を樂しんでゐるやうに見えた。さわやかな北海道の夏を思はせるやうなそこの高原は、實際都會の苦熱に倦み疲れた人人を甦らせる力を十分に持つてゐた。私の三人の子供達——行夫、敏夫、登三——も生れ代つたやうな活潑な血色のいゝ子達になつてゐた。彼等は起きぬけに冷水浴をすまして朝飯を食ふと、三人顏を寄せて事々しく何か相談しながら家を出て行くのだ。暫くして私がヹランダの手欄(てすり)から眼の下に四五町程離れて見える運動場を見下すと、そこに三人はパンの子のやうに自然の中にまぎれ込んで、何かかにか人手も借らずに工夫した遊戲に夢中になつてゐる。三人が一と塊になつて砂ほじりでもしてゐるかと思ふと、テニス・コートをてん〴〵ばら〳〵に駈け廻つて、腹を抱へて笑ひ合ふ姿も見える。その濁りげのない高い笑聲が乾燥した空氣を傳つて手に取るやうに私まで屆く。母のない子のさういふはしやいだ樣子を見てゐると、それは人を喜ばせるよりも悲しくさせる。彼等の一擧一動を慈愛をこめてまじろぎもせず見守る眼を運命の眼の外に彼等は持たないからだ。而して運命の眼

は、何時出來心で殘忍な眼に變らないかを誰が知り得よう。
晝飯が終ると三人は又手に〳〵得物を持つて出かけて行く。夕餉の膳に對して彼等の口は際限もなく動く。而して夜が彼等を丸太のやうに次ぎの朝まで深い眠りに誘ひ込む。

こゝで私は彼等と共にその母の三周忌を迎へた。私達は格別の設けもしなかつた。子供達は終日を事もなげに遊び暮した。その夕方偶然な事で私達四人は揃つて寫眞を撮つて貰ふ機會が與へられた。そんな事が私には不思議に考へられる程その一日は事なく暮れた。

かうして暮して行くのは惡くはなかつた。然し私は段々やきもきし出した。K驛に來てから私はもう二十日の餘を過してゐた。氣分が纏まらない爲めにこれと云つてする仕事もなく一日々々を無駄に肥りながら送つて行く事がどうしても堪へられなくなつた。私は東京の暑さを思つた。せめてその暑さに浸つて生活しよう。而してその暑さと戰ひながら少しでも仕事らしい仕事をしてのけよう。こんな事をして暮してゐては戸棚の中に仕舞ひこまれた果物のやうに腐つてしまふに違ひない。早く歸らう。さうだん〳〵思ひつめて來ると、私はもう我慢にもそこに居殘る氣がなくなつた。

で、私は母に手紙をやつて早く山の方に來て入れかはつてくれるように頼んだ。然し母は私を休ませてやらうと云ふ心持から、自分は暑さには少しも恐れないからと云つて、容易に動きさうな樣子を見せなかつた。その心持を推してはゐながら私は矢も楯もたまらなかつた。母は遂に我を折つて八月の十三日に行つてもいゝと書き送つて來た。

二

私はすぐその前夜の夜中の一時七分の汽車で東京に歸る決心をしてしまつた。母は十三日の夜か十四日の朝でなければK驛には着き得ない。その間子供達を女中の手ばかりに任せておくのは、可哀さうでも、心配でもあつたが、私の逸る心はそんな事をかまつてゐられなかつた。それ程私は氣ぜはしくなつてゐた。

發つといふ朝、私は極く氣輕にその事を子供達に云ひ知らせた。二人は別に氣に留める風もなくそれを聞いて、いつものやうに小躍りするやうにはしやいで戶外に出かけて行つた。私は二階に上つて、讀みかけてゐた書物を忙しく讀み終らうとしたり、怠つてゐた手紙の返事を書いたり、身のまはりの物をまとめたりした。夕方になると、思ふ存分散らけておいた私の部屋も物淋しい程きちんと片付いてしまつてゐた。人手を借りずにそんな事をするのに私はもう慣れてゐたけれども、瘦せ細つたやうにがらんとなつた部屋の中を見廻すと、妙に私の心はしんみりした。

夕方になると、がや〳〵云ひながら子供達はヹランダの梯子段を上つて來た。私は急いで階下に行つた。非常に神經質で、どうかすると恐ろしく不機嫌になり勝ちな八歲の行夫は、私を見付けると「パパ」と大きな聲を出して、普段通りその日出遇つた珍談を聞かさうとするやうだつたが、私を見るといきなり少し詰るやうな顏付をして、

「パパは今日東京に歸るの」

と云つた。敏夫は割合に平氣な顏で、今朝の私の言葉は忘れてしまつてゞもゐるやうに、

「何時歸るの」

と云つた。行夫はすぐ嵩にかゝつて、

「敏ちやん何云つてるのよ、夜中の汽車だつて今朝パパが仰しやつたのに、ねえパパ」

と少し意地悪く敏夫を見やつた。敏夫は眼を大きく見張つたまゝそつぽを向いて、子供が泣く前に見せるやうな表情をした。それは兄からやりこめられた時に敏夫がいつでもする癖だつた。いつでも一人で遊び慣れた登三は、二人の兄には頓着なく、鼻唄か何か歌ひながら、臺の下に身を丸めて玩具を一生懸命に仕舞つてゐた。

夕飾を仕舞つてから行夫は段々不安さうな顔をしはじめた。四人で湯に這入る頃には、永い夏の日もとつぷりと暮れてゐた。久し振りで私と一緒に湯をつかつた彼等は、湯殿一杯水だらけにしてふざけ廻つた。然しその中にもどこか三人の心には淋しさうな所が見えた。それは私の心が移るのかも知れないと思ふと、私はわざと平氣を裝つて見せた。而して彼等と一緒に湯のぶつかいけつこをしたり、湯の中に潜つたりした。それでも私達は妙にはずまなかつた。

町からは十町も離れた山懷に建てられた私の家は、夜が來ると共に蟲の聲ばかりになつてしまつてゐた。客間と居間と食堂とを兼ねたやうな大テーブルの有る一間に私達は着物を着てから集まつた。子供達は伊太利ネルの白い寢衣を裾長に着てよろけ〳〵這入つて來た。

「パパ」

と鼻聲で云つて先づ行夫が私に凭れかゝつて來た。

「汽車が來る時までパパは寢るの……何處で寢るの」

「荷物はどうして持つて行くの」

「若しパパが眼が覺めなかつたら、汽車に乘りおくれるぢやないの」

などゝ子供によくある執念さで詰じるやうに聞きたゞし始めた。敏夫も登三も默つてはゐなかつた。私は三人に頭をまかれたり、膝に登られたり、耳を引つ張られたりしながら、出來るだけ安心するやうに彼れ是れと云ひ

聞かした。

三

見るともう就寢の時間は既に過ぎてゐた。私は少し嚴格に、寢るやうに諭した。行夫は體の力が失くなつたやうにやうやく私から離れて、就寢の挨拶も碌々せずに二階の方に梯子段を上つて行つた。何事にも几帳面で、怒らない時には柔順な敏夫は、私の父の塑像の前に行つて、

「おぢいちやま御機嫌よう、おばあちやま御機嫌よう、ママ御機嫌よう」

一々頭を下げて誰にともなく云つてから、私の所に來て、

「パパ御機嫌よう」

と挨拶した。而して梯子段の途中で大きな聲で呼び立てゝゐる兄の後を追つた。時間が過ぎたので睡たさに眼も開かなくなつた五歳の登三は、「パパ御機嫌よう」と崩れさうな聲で云つて、乳母の首つ玉にしつかりかじり付いて抱かれながら私から離れて行つた。

粗末な造作なので、私のゐる部屋の上に當る寢室では、三人の兄弟が半分怒つたり、半分ふざけてゐるらしく、どすん〳〵と痛い足音を響かせた。

暫くは三人で何か云ひ罵る聲と、乳母が登三をかばひながら、けんを持たせた聲で仲裁をする聲とが手に取るやうに聞こえた。いつもなら私が癇癪を起して、靜かに寢ないかと云つて下から怒鳴るのだが、その晩はそんな氣になれなかつた。私は耳を澄して三人の聲をなつかしいものゝやうに聞いてゐた。乳母がなだめあぐんでゐるのを齒痒くさへ思つてゐた。而して終ひには哀れになつて、二階に上つて行つて三人の間に我身を橫たへた。乳

母は默つたまゝ降りて行つた。
電燈は消してあるので寢室の中は眞暗だつた。大きな硝子窓越しには遠くに雨雲のよどんだ夏の無月の空が、潤みを持つた紺碧の色に果てもなく擴がつてゐた。雨雲が時々、その奇怪な姿をまざ〳〵と見せて、遠くの方に稻妻が光つてゐた。その度毎に靑白いほのかな光が眞暗な寢室の中にも通つて來た。
「明日はあれがこつちに來るかも知れないのよ」
行夫は枕から頭を上げて空を見やりながら、私の留守の間の不安を稻妻にかこつけてほのめかした。
その中に敏夫が一番先に寢入つてしまつた。登三はをかしな調子でねんねこ唄のやうな鼻唄を歌つてゐたが、がり〳〵と虻の刺したあとを搔きながら、これもやがて鼾になつてしまつた。寢付が惡くつて眼敏い行夫だけは背中が痒いと云つていつまでも眠らなかつた。この子は生れ落ちるとから身體に何か故障のない事はないのだ。その頃も背中にいぼのやうな堅い腫物が澤山出來て、搔くとつぶれ〳〵した。そのつぶれた跡が恐ろしく痒いらしい。私が急所を搔いてやると、いゝ心持でたまらないらしく、背中を丸めてもつと搔け〳〵と云つた。而して段々氣分がおだやかになつて、半分寢言のやうに蚊をよける工夫を色々しながら、夜具を頭からすつぽり被つて寢入つてしまつた。

四

實際その夜は東京では想像も出來ない程凉しかつた。蚊もゐるといふ程はゐなかつた。私は暑過ぎない程度に三人に夜着を着せて靜かに下の座敷に降りた。まだ九時だつた。で、汽車を待つ間に讀みさしのメレヂコフスキーの「先驅者」でも讀まうとして包みを開くと、その中から「松蟲」が出て來た。「松蟲」といふのは私の妻の

遺稿だつた。私は知らず〳〵それを手に取つた。而して知らず〳〵一頁々々と讀んで行つた。

ふとその中から妻が六歳位の時の寫眞が出て來た。それは彼女の忘れ形見の年頃の寫眞である。嘗てこんなとんきような顔をして、頭をおかつぱにした童女がたしかに此の世に生きてゐた事があるのだ。而してその童女は今は何處を探してもゐないのだ。何んの爲めに生きて來たのだ。何んの爲めに死んだのだ。少しも分らない。そんな事を思つてゐる私は一體何んだ。私はその寫眞の顔をぢつと見詰めてゐる中に、ぞつとする程薄氣味惡く恐ろしくなつて來た。自分自身や自分を圍む世界がずつと私から離れて行くやうに思へた。

私はぼんやりしてしまつて電燈を見た。何かその光だけが賴みにでもなるやうにそれを見た。灯をつける前には屹度硝子戸を引いて羽蟲の來るのを防ぐにも係らず、二匹の蛾が二本の白い線のやうになつて、くり〳〵と電燈のまはりを飛び廻つてゐた。而して硝子戸の外には光を慕つて、雨のやうに硝子にぶつかつて來る蟲の音と、遙か下の方で噴水の落ちる水音とがさやかに聞こえるばかりだつた。寂寞の中のかすかな物音ほど寂寞を高めるものはない。白紙のやうな淋しさの中のかすかな回想ほど淋しさを强めるものはない。

私の眼はひとりでに涙に潤つた。私は部屋を出て幅の廣いヹランダに行つた。頑丈な木造りの二三の椅子と卓子とが、蹲る侏儒のやうにあるべからぬ所に散らばつてゐた。而して硝子戸を漏れる電燈の片明りが不思議な姿にそれを照してゐた。ヹランダの板は露に濡れて、夜冷えがしてゐた。木や草がうざ〳〵と茂つた眼下の廣い谿谷の向うには地平線に近く狹霧がかゝつて、停車場附近の電燈が間をおいて螢を竝べたやうに幽かに光つてゐた。而してその先には矢ケ崎から甲信にかけての山脈が腰から上だけを見せて眞黑に立ち連なつてゐた。

稻妻もしなくなつた大空は、雲間に星を連ねて重々しく西に動きながら、地平線から私の頭の上まで擴がつてゐた。あすこの世界……こゝの世界。

私は椅子や卓子の間を拾ひながら、ヹランダの上を往つたり來たりした。而して子供が遊び捨てた紙切れを庭になげたり、脫ぎ散らした小さな靴を揃へて下駄箱に入れてやつたりした。ある時は硝子戸に近よつて、その面に鈴なりになつて、細かく羽根を動かしながら、光を目がけて近寄らうとする羽蟲の類を飽く事なく眺めやつたりした。如何なる科學者もその時の私ほど親切にそれらの昆蟲を見つめはしなかつたらう。如何なる白痴も私ほど虛ろな心でその小さな生き物を眺めはしなかつたらう。

五

時間を殺す爲めに私は椅子の一つに腰を下した。而して頰杖をついて遠くの空を見やりながら、默然と寂寞の中に浸り込んだ。湧くやうな蟲の聲ももう私の耳には入らなかつた。かうしてどの位の時間が過ぎたか知らない。

突然私の耳は憚るやうに「パパ、パパ……」と云ふ行夫の聲を捕へて、ぎよつと正氣に返つた。その聲は確かに二階から響いて來た。それを聞くと私はふるひつくやうな執着を感じて、出來るだけやさしく「はいよ」といらへながら、硝子戸を急ぎながらそーつと開けて二階に上つて見た。女中達は假睡して行夫の聲や私の跫音を聞きつけたものは一人もゐないらしかつた。それで私は夜の可なり更けたのを氣付いた。寢室に這入ると、行夫が半ば身を起して「登ちやん、そつちに行つて頂戴よ」といつてゐた。寢相の惡い登三がごろ〳〵と行夫の床の上に轉がりこんで來てゐたのだ。私は登三を抱き起して登三の寢床まで運んでやつた。星明りにすかして見ると行夫は大きな眼を開いて私を見ながら、

「パパ、もつと眞中に寢てもいゝの……」と譯の分らない事をいふかと思ふと、もうその儘すや〳〵と寢入つてしまつた。私はその側に横になつたまゝ默つてその寢姿を見守つてゐた。

暫くすると、今度は敏夫が又ごろ〳〵と轉つて來て、兄の胸に巢喰ふやうにちゞこまつて、二人で抱き合ふやうな形になつた。行夫は弟を覗き込むやうに頭を曲げ、敏夫は兄の脇腹に手を置き添へすや〳〵と眠つてゐた。私はその兄弟に輕く夜着を被せて、登三の帶から下をはだけた寢衣を直してやつて、そこに胡坐をかいて、ぼんやり坐つてゐた。彼等を眠りから呼びさます物音だけが氣になつた。幸にそこは淋し過ぎる程靜かな山の中だつた。

やがて私はやをら身を起して階下に下つて靜かに着物を洋服に着かへ始めた。

十二時が柱の上の方できしみながら鳴つた。暫くすると下の方の路でけたゝましい自動車のエンジンの音が聞こえ出した。私ははつと思つて二階の方に耳を澄ましたが、子供の眼を覺ましたらしい樣子はなかつた。女中が物音に假寢から起き上つて睡さうな眼をしながら食堂に出て來た。私が一時に發つといふ事を知つた義弟が、急に思ひ立つて私と一緒に歸るといひ出し、而して自動車を頼んでおいてくれたのだつた。

私は急いで靴をはいた。而して口早に女中に留守の事を色々頼まうとしたが、結局どれ程綿密に注意をして置いても出來るだけの事より出來ないと思つて、唯「留守をしつかり頼むよ」とだけ云つてヹランダに出た。そこには暗闇の中に自動車の運轉手が荷物を背負ひに來て待つてゐた。

六

私は默つて運轉手の後に續いた。細いだら〳〵道の兩側にたて込んで茂つた小松から小松に、蜘蛛のかけ渡した絲にうるさく顏を撫でられながら、義弟の家の在る所に行つた。義弟の妻なる私の妹も、その子達も眼を覺ましてゐた。暗い往來から見ると、家の内は光る飴でも解いたやうに美しく見えた。妹は用意しておいた食物の小

包などをその良人に渡してゐた。子供は子供達で銘々の力に叶ふだけの荷物をぶら下げて自動車に運んだ。人々の間からは睦まじさうに笑ひ聲などが聞こえた。私は默つてそれを見守つた。

汽車の中は中々人が込み合つてゐた。私達は僅かに向ひ合つて坐るだけの場所を見つけてそれに腰を下した。夏の盛りであるにも係はらず、レイン・コートでは凉し過ぎる位空氣が冷えてゐた。義弟は暫く私と話し合つてゐたが、やがて窮屈さうに體を曲げたなりで、うつら〳〵と淺い眠りに落ちた。

私も寢なければならないと思つた。電燈の光を遮る爲めに、ハンケチを出して細く疊んで、眼を隱した兩端を耳の所で押へた。而してしつかり腕組みをして心をしづめて見た。然し駄目だつた。カラーが膊をせめるのが氣になつてならなかつた。色々にして見るがどうしても氣になつた。據どころなく私はそれを外して、立ち上つて網の棚に仕舞ひ込んだ。頸の處はお蔭で樂になつた。然し今度は足の置場がぎごちなくつてならなかつた。平に延ばして見たり、互ひ違ひに組んで見たりしたが、どうしやうもなかつた。足は離して捨てる事が出來ない。

半夜位は寢ないでゐろと思つて私は眠るのを思ひ切つた。而してまじ〳〵と乘客の寢態などを見やつたり、東京に歸つてからすべき仕事の順序を考へたりなどした。その間にもふとすると子供達の事を考へてゐた。ぼりぼりと足を掻いた其の音。行夫の胸に巢喰ふやうに轉げて來た敏夫の姿。下駄箱の前に無頓着に脫ぎ散らかしたまゝに置かれてゐる小さい幾つかの靴。……と思ふと私は振り拂ふやうに頭を動かして、又まじ〳〵と寢亂れた乘客の姿などを見た。

汽車が上野停車場に着いた時には夜はから〳〵と明け離れてゐて、K驛では想像も出來ない蒸暑さが朝から空氣に飽和してゐた。義弟を迎へに來てゐるべき筈の自動車は故障が出來たとかで來てゐなかつた。義弟は短氣らしくタクシーの運轉手の溜りに行つて、直ぐ一臺出せといつて見たが、生憎一臺もあいたのはなかつた。

七

「自動車が子供達の眼を覺ましはしなかつたか知らん」

とふと私は思つた。目を覺ますとすれば第一に眼を覺ますのは行夫に違ひない。目を覺まして見ると、寢室の中は眞暗だ。行夫は大事な忘れ物でもしたやうに、忙がしく寢床から半身を起して、大きく開いた眼で闇の中を見廻すだらう。而して暗闇の中から侵して來る淋しさ恐ろしさにせき立てられて、小さな聲で、

「パパ」

と呼ぶだらう。然しいらへる者がないのに氣が付くと、堪らなく淋しくなつて、前後も構はず大聲に呼び立てるだらう。

「せき……せきやつて云へば……」

私を送り出した女中は、物數奇にも夜中などに汽車に乘る私の事を不平交りに噂してゐたが、行夫の聲を聞くと、

「又起きちやつたよ」

とか何んとか云つて舌打ちをしながら、ぶり〳〵と二階へ行くだらう。

「又起きたの、駄目だねえ。パパはもう行つてお仕舞ひになりましたよ。さ、早くお寢なさいまし」

さういふ突慳貪な聲を聞かされると、行夫はすつかり眼を覺ましてしまふだらう。而して一時(いつとき)も長く女中を自分の側にひき付けて置きたい欲望から、くど〳〵と私が家を出て行つた樣子などを尋ねるだらう。女中が睡さの爲めに氣を焦立てゝ、子供の心を少しも思ひやらないやうな言葉遣ひをするのが、私には十分過ぎる位想像され

た。私は自分のした事を悔やむやうな心持になつて、東京の土を激しく踏みながらあちこちと歩いた。

やうやく自動車が出來たので義弟と私とはそれに乘つた。二人は狹い座席で膝を竝べてゐたけれども、互の心は千里も隔つてゐるやうに思はれた。その頃丁度出來かけてゐた或る事業の事を義弟は考へてゐるに違ひない。私は私で、他人の眼から見れば餘りに小さな事をやきもきと考へてゐる。

自動車は、雜閙し始めた廣い往來を勢よく駈けて行つた。寢不足な私の頭は妙にぼんやりして、はつきり物を考へる力を失つたやうに、窓から見える町々の印象を取り入れた。取り入れられた印象は恐ろしく現實的なものになつたり、痛く夢幻的なものになつたりして、縮まつたり脹れたりした。

突然自動車が動かなくなつた。運轉手は素早く車臺から飛び下りて機械を調べにかゝつた。電車がその爲めにいくつも停らなければならなかつた。往來の人は自動車のまはりに人垣を作つた。

八

私はその時頭ががーんとしたやうに思つた。車外に立つどの顏も〳〵木偶のやうだつた。それが口を開き、顏をゆがめて、物をいつたり笑つたりしてゐた。車窓を隔てゝゐる爲めに、聲が少しも聞こえないので、殊更私の感じを不思議なものにしてゐた。私は人々に圍まれながら、曠野の眞中にたつた一人坊ちで立つ人のやうに思つた。普段は人事といふ習慣に紛れて見つめもしないでゐた人間生活の實相が、まざ〳〵と私の前に立ち現はれたのを私は感じた。本當は誰でも孤獨なのだ、一人坊つちなのだ。强ひてもそれを紛らす爲めに私達は憎んで見たり愛して見たりして、本當の人の姿から間に合はせに遁れようとしてゐるのだ。私はそんなことをぼんやりした頭で考へてゐた。こんな孤獨な中にゐて、しつかりと生命の道を踏みしめて行く人はどれ程悲しいだらう。……

突然自動車が動き出した。自動車を圍んでゐた人達は急に木偶から人間に還つたやうに怪我をおそれて道を開いた。私も亦奇體な妄想から救はれてゐた。而してすぐ子供達の事や仕事の事やを考へてゐた。

家に歸りつくと母は驚いて私の時ならぬ歸宅を迎へた。而して孫達が可哀さうだからと云つて大あわてに支度をして晝頃K驛に向つて發(た)つて行つた。

私は始めて安心した。安心すると同時に仕事の事がたゞ一つの執着になつて私に逼つて來た。私は單衣の袖をまくり上げて机の前に坐つた。机の上には東京特有の黄塵が薄くたまつてゐて、汽車の煤煙を水道の水で淨めた私の指先に不愉快な感觸を傳へた。暑さはもう私の胸のあたりをぬら／＼させずにはおかなかつた。それでも私は凡ての事を忘れて燒くやうに氣負ひながら原稿に向つた。

暫くして私はぎよつと物音に驚かされて机から上體を立て直した。夏の日は光の津波(つなみ)のやうに一時に瞳孔に押し寄せて來るので眼も開けなかつた。寢不足にまけ、暑さにまけ、焦慮にまけて私は何時の間にか假寢をしてゐたのだ。額にも、胸にも、背にも、腋の下にも、膝の裏にも、濃い脂汗が氣味惡くにじみ出てゐた。

誰を責めよう。私は自分に惘(あき)れ果てゝゐた。少しばかりの眠りであつたが、私の頭は急に明瞭過ぎる程明瞭になつて、私を苦しめた。

私の眼からは本當に苦しい涙が流れた。

私にはもう書く事がない。眼を覺ましてから私が書きつけておく事は是れだけで澤山だ。私は誰にあてるともなくこの私信を書いた。書いてしまつてから誰にあてたものかと思案して見た。

さうだ。この私信は矢張り私の子供達の母なる「お前」にあてよう。謎のやうなこんな文句を私の他に私らしく理解するのは「お前」位なものだらうから。

（一九一九年一月五日―十二日、「大阪毎日新聞」所載）

自己を描出したに外ならない「カインの末裔」

私は學習院の寄宿舍に入つた頃から密かに文學書を耽讀した。元來文學の方面に行きたい希望ではあつたが、家が喧しかつたし、自分の才能を疑つてゐたので、十二歳の時から小さいながらに農業に入らうと決心した。中學を卒業して、札幌の農學校に入つたが、そこでも農學の事よりは、寧ろ文學、殊に英文學に親しんだ。農學校を卒業してから外國に行つた。外國では周圍の羈絆から遁れて、主に文學を讀む事に日を送つた。日本に歸つて來ると、丁度「白樺」が創刊されたので、私もその同人となり、初めて作品を世に問ふ機會を得た。そして、大正六年七月に「新小説」に送つた「カインの末裔」などが緣となつて、文壇の一般的な注意を引くに至つた。

しかし、私の處女作は、本當をいふと「カインの末裔」ではなくて、世の中に發表したものでは「かん〳〵蟲」といふのが一番初めの作だけれども、評壇といふやうなものゝ注意を受けたのは、この作だと思ふから、その作に就いて少し言はしていたゞく事にする。私の作物には、世評では自己を主題とした主觀的のものと、他を主題とした客觀的なものと、二つあるやうに言はれてゐるけれども、私としてはさう區別された二つの種類のどちらを書き現はす場合にも、自己を書き現はしてゐるのだ。よく自己を檢察して見ると、自己といふものゝ內容は可也複雜で、其廣さにも、其深さにも、苟めの自分としては思ひも設けなかつた種々相が伏在してゐる事を發見する。さうして、其種々相の偶然的ともいふべき總和の上に、私の現在の實生活が成り立つてゐるのである。然し乍ら、創作的意志を用ゐて、その內容を檢めて見ると、そこには互に何等かの連絡をもちながら、個々にそれ相

當の獨立性をもつた幾多の生活が現存してゐる事を發見する。私はその各々に藝術的の表現を與へんとする欲望を感ずる。『カインの末裔』は一見客觀的の作物に見えながら、私としてそれが自己の描出であるといふ理由はそこに在る。

自然といふ大きな力は、私達はそれを如何に征服し、如何に共和し行くべきかをはつきりと知る事が出來ないで、常にその間に摸索の生活を續けてゐる。それは痛ましい人生の葛藤の一つだ。茲に一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男がある。而も掘り出された以上は、それが一人の人間であつて、その母胎なる自然と嚙み合はなければならない運命を荷ふと同時に、人間生活に緣遠い彼は、又人間社會とも嚙み合はなければならない。彼は人間と融和して行く術に疎く、自然を征伏して行く業に暗い。それにも拘らず彼は、そのディレンマのうちに在つて生きねばならぬ激しい衝動に驅り立てられる。それは人からは度外視され、自然からは繼子扱ひにされる苦しい生活の姿を描き出すであらう。カインの末裔なる仁右衞門は、その人である。その祖先のカインは嘆いて、「視よ汝今日斯地の面より我を逐出したまふ我汝の面を覩ることなきにいたらん我地に吟行ふ流離子とならん。凡そ我に遇ふ者我を殺さん」と云つたのは、我々の生活が又ある場合に嚙み合はねばならぬ痛ましい合言葉である。それは私をしてあの作を書かしめた。

あの作の批評は一般に好かつたさうである。しかし、或る人はあの作の無解決な、否定的な結末を物足りなく思つたに違ひないし、又或る人はその構圖の抽象的であるのを非難したやうにも覺えてゐる。それは恐らくは孰れも當つてゐるのだらう。たゞ、前者に對しては、私はあの作のうちに、人間の已むに已まれぬ生に對する執着の姿を見て貰ひたいと思ふ。それが人に與へられたどういふ運命であれ、惡い運命であれ、人は生に對する不思議な我執をもつてゐる。それが然し乍ら私達の力であらねばならぬ。その力を私達は凡ての生活の現はれに於て、

徹底的に考へて見るべきではあるまいか。後者に對しては、私の力の足りない事を、卽ち私の生活の內容が十分に反省されてゐない事を自分で反省する外はない。私の今達してゐるレベルは、何と云つてもあれだけだ。私はあの作に對しては、私があれだけの力より現はし得なかつたその點を非難し得る力をもつた人に、非難されるのに滿足しなければならないと思つてゐる。但し斷つて置く、批評は優者の仕事だ、石を以て打ち得る者がまづ石を取るべきである。この力を感じさせない批評には、私は不幸にして耳を傾ける事が出來ない。

（一九一九年一月、新潮所載）

御嶽教の中教正となつた祖母

——白い黶、愛の表象——

一番感化を受けたと云ふやうな事は瞭然云はれないが、私の母方の祖母は私が云ふのも可笑しいが、純粹の江戸風な武士の娘で、美しい姿と美しい顏との持主であつた。さうして左の頤に可なり大きな白い黶があつた。私の母を始め私達の兄弟は順繰りにそれを玩具にしやぶつたり、弄つたりした爲めに、終ひには其の黶が味噌豆位の大きさになつて、それが顏の特徴であつた。さうしてそれが彼女の愛の表象のやうであつた。二十四の時に良人に別れて、それから一人の娘(即ち私の母)と、息子とを守り育てゝ一生を過した。

私の祖母はふくよかな性質の輪廓を持つた女だつたけれど、其の底の方にはどんな男にも讓らない程の烈しい氣性が隱れてゐた。例へば、良人が死病に罹つた時なぞは、其の平癒を祈る心から熱心な御嶽權現の信者になつて、中教正と云ふ位まで貰つた程である。丁度其の頃御嶽さんからお告があつて、百年以上經つた白米を毎日良人の年だけ取つて、其の一つ〳〵に一種の呪文を唱へてそれを粥にし、病人にいたゞかせると病氣が癒ると云ふ事だつたので、祖母は非常な苦心をして其の米を集め、毎日其の行を怠らなかつたさうだ。又晩年に其の一人息子が大阪で大病に罹つた時も、一心に御嶽さんを信仰して毎朝缺かさなかつたが、或る晩神樣が夢枕に立つて、「神社の檐に一對つるしてある鰐口の一つを紛失したから、直ぐにそれを拵へて差し上げるやうに」との事であつた。祖母は不思議に思ひ乍らも翌朝早くお參りして見ると、果して鰐口が一つ紛失つてゐたので、思はず身の毛が悚立つたと云ふやうな事も云ひ傳へられてゐる。

祈れば必ず目睫の間に御神體を見る事が出來るさうだが、息子の亡くなる日にはどうしてもそれが見えなかつたので、其の時ばかりはもう駄目だと觀念したさうである。息子が亡くなると祖母は今までの自力な信仰を一切合財綺麗に捨てゝ了つた。さうして徹底的な一向宗の他力信者になつた。(茲で私は聖書の句を思ひ出す、基督が「心の貧しき者は幸福なり云々」と云つてあるが、大抵の人は其の言葉の表面的解釋から「弱者は幸福なり」と思つてるらしいけれど、眞に弱者たるを體覺するのは一種の强者でなければ出來ない事だと思ふ。純他力に入ると云ふのにも、これと同じ意味の强さが裏付けられてゐるのに違ひない。捨身になり切ると云ふのは、本當に容易の事ではない。)

それからと云ふものは占者だとか、神託だとか、又は方位だとか云ふやうな自力的な雜業は全く綺麗に捨てゝ了つた。其の自製に

杖もなく自力も捨てゝ老の坂他力任せに上る嬉しさ

と、云つてゐるが、全くさうしたすが〳〵しい境涯にゐたやうに見える。息子を亡くした祖母は、大阪から東上して當時橫濱に住んでゐた私の家に寄寓する事になつた。其の頃私の兩親は未だ若かつた上に、二人共負けず劣らず我の强い人達だつたから、二人の家庭は始終油の切れた齒車のやうに快くない軋轢方をしてゐた。私は未だ幼稚だつたけれど、其の頃の家庭の空氣を甚く怖れてゐたのを思ひ出す。其處には確かに力が充ちてゐたけれど、其の力は一度でも順調に働いてゐる事はなかつた。其處へ祖母がやつて來たのである。それは厚い氷の上を春の風が吹き渡つたやうな効果を家庭の上に及ぼした。私共の母が先づ我を折つた。而して父方の祖母がこれに續いた。父は生れつきの負けじ魂と、男子の誇りから、容易に祖母に兜を脫いだやうには見せなかつたけれど、家庭內の空氣の激變には密かに驚いてゐたやうに見える。さうして祖母の言葉にはいつでも一種の力を感じてゐた。

父がどんなに增長した時でも、祖母の柔らかな言葉は、往々にして父を變つた人のやうにした。

私としてはこれまでに遂ぞ祖母の怒つたのを見た事がない。女中なぞでも一たび使はれると子供のやうになついて、永く奉公をしつゞけた。どんな冗(くだ)らない小さな器物でも、さゝやかな料理の材料でも、祖母の手鹽にかけられると其の本質が變るかのやうに見えた。祖母は人並以上に才氣が働いて居たが、それが才氣として表面に表はれるやうな事は殆んどなかつた。何時でも、もつと大きなその性格に柔らかく包まれて其の才氣は働いた。仕事をするにも、人を動かすのにも、祖母は改つて自分の底まで暴露(さらけ)出すやうな必要はなかつたらしい。だから私達は祖母が並々ならず改まつた姿を見た事がなかつた。それでゐて祖母が終始一貫して自分も守り、人にも教へた格言(モツトー)は「一心」と云ふことであつた。平らかに送つて來たやうな生涯だつたけれど、祖母がゐなくなつた今回顧(ふりかへ)つて彼女の生涯を追想すると、成る程其處には「一心」と云ふ力がぴり／＼動いてゐる事を感ずる。

恁ういふ性格の人が、私の幼年時代にゐて私を哺育して吳れたのは、私に取つて幸ひであつたと今でも思つてゐる。

（一九一九年二月、「中央文學」所載）

批評といふもの

本間兄

私の作物に對する批評が早稻田文學に掲載されるから、その號に何か書け、今までも諸家が同じやうに書いたから、といふ極めて率直なあなたの御依賴を受けて、何か書きますと御返事はしましたが、自分の批評が載るのをまざ／＼承知してゐて、殊更に何か書くといふ事に心尤(とが)めを感じ出しました。普通の雜誌編輯者ならば默つて何か書かしておいて、突然それに批評を添へて發表するといふ事になるでせう。それなら私は多分立派に擔がれるに相違ありません。然しあなたは雜誌の編輯をなさるにはあまり率直過ぎるやうです。何故といへば、現在私は自分の事を書くのを躊躇してゐますから。然し同時に私は矢張り筆を執つてゐます。而かも聊かの不快をも感ぜずに喜んで筆を取つてゐます。その代りあなたが要求されたやうに自分の事を吹聽する氣にはどうしてもなれません。それはあなたの所謂商賣下手が惹き起した結果だとあきらめて下さい。而してこの惡い結果はあなたに取つても私に取つても恥かしい事ではないと思ひます。

で、私は自分の事は棚に上げて置いて、批評といふものに就いて少し書かせていたゞきます。私の考へでは藝術家には禮讃の心持はあつても、批評の心持はないと思ひます。自分の氣に喰はないものを彼れ是れと詮議立てをして、その氣に喰はないものが自分の好惡のスケールのどの邊に位置してゐるかを定める必要は更に感じません。ダンテは氣に喰はないものに對しては地獄篇で「唯見て過ぎよ」と一言の下に葬つてしまつてゐます。それはそんなものを無下(むげ)に卑しめる心持よりも、よいものに對する禮讃の願が急である爲めに、その他を顧みる暇が

ないからだと云へると思ひます。ロダンがゴシック寺院建築や希臘の古美術に對して持つたやうなあんな心持が、本當に物に對する藝術家の態度だと私には思はれます。或は云ふでせう。ロダンがそれ等のものを認める前には嚴正な批評的精神が働いてゐたのをお前は忘れたのか、ロダンがゴシック寺院建築の美を禮讃する爲めには、ロコヽコの惡趣味や、現代建築の沒美感が嚴めしい批評の對象として顧みられた筈である、それに氣が付かないのかと。さういふ議論は論理的に云ふと尤も至極な事です。然し私はそんな論理は屁理窟だと思ひます。藝術家はそんな論理過程は限にも留まらない早業で飛び越してしまひます。而して、端的に自分を鞭ち、慰め、引上げ、眩ます美の前に無條件的に謙遜に頭を下げてしまひます。さう云ふものが見出されない間は默つてゐます。默つてゐる間の暇つぶしに、自分を引き下げるに決つてゐる醜に對しての詮議立てなどはしてゐないと思ひます。藝術家はそんな事をしてゐるには少し忙がし過ぎるやうです。大切なのは、僻見なしに立派なものを謬たず感得する神經です。さういふ人に取つては美と醜とは、いゝものと惡いものとは、立派なものと下らないものとは、程度の差でなく絶對の差です。熱覺を司る神經細胞と寒覺を司る神經細胞とはちがつた細胞だとベルグソンは云つたやうですが、少くとも藝術家に取つては、美と醜とは全く別物であります。こゝに一束の花があるとします。花のよく判らない人は、いくつかあるその花を比べあはせて、その中から比較的美しいものを選び出すでせう。本當に花の判る人は自分の好きな花を、比較といふ過程を踏まずに拔き取ります。好きな花がなければそのまゝその花束を顧みないでせう。それでいゝのだと私は思ひます。藝術品はかうしたアップレシエーションを受ければそれで澤山だと思ひます。

一體科學的精神が生み出した比較研究といふものは極く實用的な便宜な方便であります。一つのカテゴリーの中に在る類型的ないくつかのものを集めて、互々の間の比較研究をするといふ事は實際的に都合のいゝ手段です。

然しよく考へて見ると研究が精緻になればなる程一つのカテゴリーの內容は狹小になつて、その極或る一つのカテゴリーの中には、ある一つの個體より存在し得ない事になります。例へば蜘蛛類といふ類別の中には多數の科目が含まれてゐます。然し研究が精緻になればなる程今までの類別法では不完全になつて、もつと綿密に小さな綱目を立てなければならなくなるでせう。而してその極同じ目に屬するもの例へば「ぢようらうぐも」なら「ぢようらうぐも」の中にもその生産された地方の地形、氣候、寒暖、食餌等の關係を斟酌して區別を立てなければならなくなりませう。もつと研究が綿密になればどの二匹の「ぢようらうぐも」を捕へて見てもその間にはその習性の上に、形體の上に、個性的な區別を立てなければならなくなるでせう。こゝまで科學的方法が精緻になれば、カテゴリーといふものは亡くなつて、科學の研究方法は破産しなければなりません。そこまで行けば個體が段々共通性より獨立して個性的になつて行くからです。

このやうに極く客觀的な科學研究ですら、その行きづまりは純然たる個の研究になつてしまひます。藝術品の鑑賞に於てそれが個性的であるのは勿論です。一體云ふと一つの藝術品と他の藝術品とを比較するといふのは全く不可能の事です、さうする爲めには藝術品の個性的特質はあまりに明確過ぎます。「あの作よりもこの作は優れてゐる」、から云ふ言葉は本當を云ふと意味を成さない言葉です。それは例へば雲と寶玉とを比較して、雲が寶玉よりすぐれてゐるとか、寶玉が雲よりすぐれてゐるとか云ふやうなものです。雖者から云はせれば、或る比較の標準を定める事によつて、雲と寶玉とでも比較の對象になり得ると主張するかも知れません。然しそれは雲と寶玉との本質を左右し得る論據とはなりません。

だから私には藝術家が藝術品に對する態度卽ちその藝術品の獨立性を尊重して、禮讃すべく心を虛しくして禮讃し、禮讃すべからずば、捨てゝ顧みない態度のみが、眞に藝術品を取扱ふべき態度だと思ひます。から云ふ態

度を取る事によつてのみ眞の藝術品は眞に生長します。當然本質的に異つてゐる藝術品を竝べてそれを比較研究して所謂批評なるものを成就した所が、それは畢竟藝術品を物質に引き下げて、その生命を殺す僻事に過ぎません。

批評――この頃何んの反省もなく、流行のやうに行はれてゐる批評の態度に慊らないで、私はつひこんな事を云つてしまひました。お前は自分の云つた言葉も消えて了はない中に、批評家の態度に對して批評をしてゐるのではないかと云はれゝば、私はさうであつたと口をつぐむ外はありません。さうなつたら議論もお仕舞ひです。こんな所感が何かのお役に立つでせうか。

（一九一九年、二月「早稲田文學」所載）
（同年一月十四日執筆）

松井須磨子の死

私の「死と其の前後」を藝術座の脚本研究部で試演するといふ事になつた關係から、私は初めて故須磨子氏と知り合つた。「死と其の前後」を讀んで須磨子氏は、其の女主人公になる事を拒まうとしたさうだ。それは後から本人から直接聞いた事だ。實際あの役は、須磨子氏に取つては決して嵌り役ではなかつたと云へるかも知れない。愈〻稽古に懸つてから、須磨子氏が示した熱心と努力とは、十分に私を滿足さした。稽古は凡て作者自身が舞臺監督をする事になつてゐたので、私は毎日のやうに藝術倶樂部に通つたものだつたが、須磨子氏の稽古振りは確かに際立つてゐた。急所々々には本當に涙さへ流してゐた。他の座員の科に呼吸の合はないところが出來ると、須磨子氏は苛だつて「お前さんは泣いてゐないぢやないか」と、きめつけた事などを私は思ひ出す。試演になる前前日に最後の稽古をした時などは、夕方から始めて翌朝の四時過ぎ迄殆んど休みなしに續けた。作者の私自身ですら倦怠を感じ、座員の中にはへと〳〵になつてしまつた人さへある間に、須磨子氏だけは最後迄活々とした研究的態度を落さなかつた。私はそれを見て、この人は尋常な人では確かにないと思つた。

劇の出來榮えからいふと、私のやうな劇に不馴れなものゝ眼から見ても、可なり物足らないところはあつた。例へば、當日私が須磨子氏に會ふと、いきなり自分の舞臺顏を見せて、「今日は少し眉を低く着け過ぎたやうですけれど……」と云つた。私は何んの事だかよく解らないで、「それで結構です」と答へて置いた。後で聞いて見ると須磨子氏は、亡くなつた私の妻の寫眞に似せて顏を作つたのださうだ。さうしてその寫眞に較べて自分の眉のひき方が少し低く過ぎたといふ事を、私に言ひ譯したのださうだ。こんな事は戲曲の解釋を根本的に穿き違へて

ゐた一つの例である。着物の如きも、私の註文したものより派手な、しなやかな上等品を使つた。私はそれを注意したにも係はらず、須磨子氏は最後まで改めなかつた。それから最後の夢の場で、夫から引き分けられた妻が、キッスを投げるところがある。これは臺本に小書きになつてあるものだけれども、實演上、殊に須磨子氏の實演上私は不適當だと思つたから、廢めて貰ひたいと賴んだ。それにも係はらず須磨子氏は最後まで改めなかつた。こんな事は私に一種の不滿足を與へた。

作中の人物の性格と、須磨子氏自身の性格との上にも、一寸乘り越える事の出來ない隔りがあつた。須磨子氏もそれはよく自覺してゐたらしい。初めその役を引受けるのを拒まうとしたのも、その邊の考へからだつたと思はれる。併し、須磨子氏は異常の努力を以て作中の人物の性格に入り込まうとした。さうして人々を驚かす程に、或る點までは確かに成功した。私はその努力に對して今でも感謝の意を禁じ得ないものである。兎にも角にも自分の藝に對してあれ程の執着と努力とを示すのは、世にも難有い事だ。口に大きな事を云つてゐながら、小手先で始末を着けて行かうとする人達の多い中には、これだけの事實がすでに貴い。

一面の識しかない私は、須磨子氏に對して彼れ此れいふ資格はないらしい。併し、初めて會つた時から私は、須磨子といふ人は亂暴な程に自分を赤裸々にさらけ出してゐる人だといふ感じを受けた。それが或る時には一種の壓迫的な不快をさへ與へ、或る時には非常に純眞な、すがすがしい氣持を與へた。さうしてその赤裸々の表現の底には、強い性格がまざまざと感ぜられた。しかし、私の思ふところでは、その性格は強いけれども、野生の勝つた、訓練されない、或る歪みをもつたものであつた。それが事每に他人の心にぶつかつた。須磨子氏は能くそれを知つてゐた。さうして自分でも苦しんでゐたに違ひない。しかし、それをどうする事も出來なかつた程、須磨子氏の性格は強く堅かつた。その結果があの死であつたと思ふ。とりもなほさず須磨子氏は性格の破産者

だ。しかし、我々の間には如何に多くの、破產すべき性格さへもつてゐない人間があるだらう。それから考へると、如何にこぢれてゐても、いびつでも、性格をもつてゐるといふ事は、大きな事だ。その意味で私は須磨子氏の生と死とに、同情と敬意とを表せずにはゐられない。私に取つては、他のいろ〳〵の事情といふやうなものは、畢竟第二、第三義だ。

（一九一九年二月、「新潮」所載）

和辻兄に

和辻兄

「偶像再興」をお送り下さつて難有う御座いました。その中にお書きになつたものゝ一二はまだ拜見してゐませんが、大部分は委しく拜見しました。

あなたが一人の若々しい戰士として思想界に生きてゐて下さる事を心強く思ひます。あの論文の中から推察されるあなたは（時々手紙の上で交通はしながら、私は面と向つてはあなたをお知り申さないのですから）生活のあらゆる方面に體驗を持つてお出でゞす。而してその體驗の種々相が常に顧み合つてゐます。かういふ姿は一人の思想家にとつて最も有力な武裝であると思ひます。全的な衝動はあつても、全的な自省を缺いた思想家や、一部的な特長を備へて、全部に對する不具性を物ともしない專門家が多い間に、あなたの思想の背後には統轄された健やかな力が正しく働いてゐる事を私は明かに感じさせられます。それがどんなにいゝ事でせう。それが一見あなたを際立つた天授を持たない自由思想家のやうに見せるかも知れません。又ある人はあなたを中途半端で觸角を引き込める少し臆病な探險者のやうに噂するかも知れません。然し私はさうは思ふ事が出來ません。あなたの持たれる力がそのまゝ延びて行く事によつて、その體驗が深まり強まる事によつて、やがてはそこに重々しく權威ある思想の殿堂が築かるべきだと思つてゐます。あなたの出發點をあなたの天授が謬たず選び取られた事に對して、讀者の一人としての私は幸福に感じてゐます。

「ある思想家の手紙」、「懷疑と信仰」などは、低い摸索者なる私に數多くの示唆となつてくれました。「偶像建立の

深い意味が暗示に充ちて語られてゐるのを感じます。私もそこに現はされた方向に鈍いながら眼を向けて歩いて行かうとしてゐる一人として、殊に心を牽かれました。自然科學が動物生活の動向を生存と生殖にまで押しつめたと云ふのは、何んと云つてもその偉大なる功績としなければなりません。私達はそこからもう一つ奥につき入る明確な道を與へられました。その奥にあるものは生です。その奥にあるものは力です。その生がどう生きられてゐるか、どう生きられねばならぬか。その力がどう働いてゐるか、どう働かねばならぬか。私達に殘された問題はこれです。而してあなたはそれに對して誤たず凝視の眸を向けてをられる事を私は感じます。新たな偶像はそこから生れて來なければならないのでせう。それをしも夢想家といふものは盲者です。何故なら偶像を建立する教主の來迎が豫言される時期はもう過ぎようとさへしてゐますから。而して教主は生れ出ようとしてゐますから。

道を淨めてパームの葉を敷くべき時が近づきました。その先に又十字架の暗い影が潜むのを忘れる程に私も放膽な樂天の徒ではありません。然しやがてよりよき者によつて打壞れるにしても一つの偶像の建立は、人類の進歩の一つの光榮ある記念碑です。あなたの思索が其の機緣を促す一つの大きな聲となつて響き渡ることを私は心から希ひます。若しくはあなた自身が記念碑そのものであるべき努力に進まれる事を更に希ひます。僞りなく云へば最上の人間の祈願は自己を神にまで引き上ぐる外にはないと思ひますから。

（一九一九年、二月八日拂曉）
（同年二月九日、「讀賣新聞」所載）

將來の新劇團に對する二三の註文

藝術座の首腦が倒れた爲めにその座の解散が餘儀なくされたのは遺憾ではありますが、他にもいくつかの劇團がある事ですから、新劇の前途についても、さして悲觀すべき必要はないかも知れませんが、この際私は將來の新劇團に對して二三の註文をして見たいと思ひます。

一、高等學府の教育を完全に受けた手腕のある人が奮つて劇界に投ずる事。

その譯は云ふまでもありませんが、一寸した事を云つても顔の表情だけでも（美しい醜いは別として）今後には智的表情が要求されてゐます。それはどうしても思索的な生活をした人に求める外はありません。作物の理解とか表現法とかに關しても新しい方面から人が這入つて來なければ新しい解決はむづかしいと思ひます。この事は第二義的の意味としても、俳優が社會から受ける僻見を矯正する效があると思ひます。同じ藝術家でありながら俳優だけが呼び捨てにされるといふやうな事はあつてならぬ事です。

二、演劇機關の完全なる設備。

舊劇の方には立派な設備が出來てゐます。然し委しく云ふと今の劇場は舊劇にも新劇にも向かない、而して同時に兩方の間に合ふやうな姑息な方針で建てられてゐると思ひます。

舊劇殊に時代劇、振事劇は決して濫りに新化を施すべきではなく、能樂と同様に昔のまゝな簡素な舞臺を用ゐる事によつて、却つて純粹な效果を擧げ得るものだと思ひます。油繪のバックや事々しい大道具などは何時でも

正しい藝術味を害つてゐます、然し現今のやうな大劇場ではあゝするより仕方がないのでせう。と云つてその劇場が新劇に適するかと云ふと又多くの缺點を備へてゐます。幅の割合に高さの足りないと云ふ事だの、二三を除いては見物席が飲み食ひに適して眞面目な觀賞を妨げる事だの、ある場合によつては凡ての規模が大き過ぎる事だの、この失敗は或る程度まで舊劇と新劇とが調和し得るといふ誤謬から出發してゐます。私の考へでは兩者は獨立して明確に各〻その長所を發揮すべきものだと思ひます。その爲めには新劇の演出に恰好な劇場及びその他の設備の完成を期さねばなりません。

三、女優の養成。

これは舊劇になくして新劇には焦眉の問題です。理由は知れ切つてゐます。どうすればよき女優が得られるかと云ふ實際問題になると、私の揭げた第一の要求が滿たされる事によつて割合に容易に解決されると思ひます。

四、從來の劇界の弊風から分離する事。

劇道の弊風を受けてゐる事に於ては今の新劇團も亦免れないと思ひます。この弊風は新劇の世界には初めから入れぬやうにしなければなりません。それには初めが大切です。新劇が新人によつて組織され經營されなければならないといふ私の理由はこゝからも發足してゐます。以上。

（一九一九年三月、「早稻田文學」所載）

春

春になると北海道の春を思ふ。私はどういふものか春が嫌ひだ。それは感情的にさうだと云ふよりも寧ろ生理的にさうなのだらう。若い女の人などが、すつかり上氣せ上つて、頰を眞赤にして、眼までうるませてゐるのを見たりすると、籠り切つたやうな重苦しい春の重壓が私の精神にまで襲つて來る。醱酵し切らない濁酒のやうな不純な、鈍重な、腐切れの悪い悒鬱が何處からともなく私の心と肉とをさいなんでかゝる。あの重く、暖かく、朧ろな靄――あれが私の頭にも漲り滿ちる。

然し春の回想は悪いものではない。それは直接私の肉體に働きかけて來ないからだらう。靜かな心で自然が活動に目覺めて行く様子を想像するのは快い。春になると私は北海道の春を思ふ。

雪國の生活は單調だと人は云ふやうだ。然しそれは間違つてゐる。雪に埋み盡された地面――そこには黑ずんだ常磐木の外に綠といふ色の夢にもない――が見る〳〵黑土に變り、黑土が見る〳〵若草の野に變つて行くあの華々しい變化は、雪國に越年しない人の想像する事が出來ない所だらう。

冬が北國を訪れて、眼に見る限りのものを悒鬱な黑と白とに變へてしまつてから四箇月が經つ。人の心は寒さに閉され、虐げられ、苦しめられて、危く石のやうになつてしまはうとする。道の上で行き遇ふ人も碌々顏を擧げて眼を見交はさうとはしないまでに活動力を極度まで縮めてしまふ。人は我慢の極點に足爪立つてゐる。その頃になつてやつと冬が退き始める。私の友が巧みにも老雪と云つたその雪の姿が日の光の下にさらけ出される。今まではみづ〳〵しくふうわりと眞白に降りたまつてゐたものが、知らぬ間に溶け固まつて、不溶解性の煤だの

芥だの紙屑だのが、がぢ〳〵とさゝくれだつた雪の表面に現はれ出る。晝間になつて日が照り出すと、人の往來する所だけはどろ〳〵に雪解けがして、泥炭地の水のやうな黒褐色の水が盛んに踏み固められた雪路の上を、逃げ所もなく漂ひ廻る。雪鞋をはいて歩く男のその濡れた藁は重さうにぐつしより濡れて、凍傷を防ぐための赤毛布の脚絆は水を吸ひ飽きたスポンジのやうに水氣でふくらむ。ぴちやり〳〵と汚いはねを肩のあたりまで上げながらその人達は歩いて行く。

低く空に懸つて容易に動かない綿雲が少し輕く動き始める。時には端なくもその古綿のやうな雲が破れて青空を見せる。その青空は冬の眞中に見慣れたやうな青空ではない。それは鼠幕の下された間に、舞臺裏で衣裝を着かへて幕の開くのを待つてゐたやうな青空だ。同じ青の色ではあるが同じ青さではない。眼で區別が出來ないだけそれだけ感じに於て違つてゐる。冬の四箇月間太陽の熱を、地面に達しない中にせつせと吸ひ取つておいて、それをそろ〳〵地面に向つて放射し始めるやうな色をしてゐる。冬の青空を見上げると人は一倍寒さを感ずる。今見る青空からは暖か味がしめやかに傳はつて來る。

さうかと思ふと空は又未練らしく綿雲で閉される。若し風がそれに添ひ加はると、雪の降り殘りがちら〳〵と播くやうに飛び散つて來る。若し晴れてゐた空が急に曇ると霰が夕立のやうにさーつと激しく音を立てゝ寄せて來る。而して見る〳〵擴がつた雪雲は、見る〳〵霰と共に遠く山の彼方に飛び去つて行く。而してその後には大抵赤々とした夕日が殘る。

然し何んと云つても四季の變化を逸早く感附くものは空だ。あの時には寒色の雲が跡形もなく隱れてしまつて、太陽がきら〳〵と半日を照り續ける事がある。さうした晝は妙に森閑と靜かだ。軒の積雪が下から〳〵解けて盛んな點滴が氷柱を傳つて落ち始める。雨垂れの音、四箇月間聞かないでゐたその音を聞くと、人は誰でも胸

の中に輕い動悸をさへ覺えるだらう。臺所の方で、今まで地面に凍りついてどうしても取れなかつた手桶などを、こつ〳〵敲いて持ち上げようとする音などが聞こえる。ある時は又氣溫が急にゆるんで空が春らしく薄曇る。と雨が――忘られさうだつた雨がしと〳〵と、黑ずんだ雪の上にそゝぎかゝる。雪は見る〳〵瘦せ衰へて行く。屋根に積み溜つてゐた雪がすさまじい音を立てゝ軒から辷り落ちる。どしーんといふその地響き――それは大地を惰眠から呼び覺まさうとするやうに響く。

終日聞こえてゐた點滴も夜になると聞こえなくなる。空氣はまた冴え返つたのだ。晝間休んでゐた煖爐がまた燃え始める。夜が更けた頃空遠く北の方に渡つて來た鳥の聲がかすかに聞こえて來たりする。家々の窓には灯がおそくまでともつてゐる。汚れ垢づいた良人や子供の冬着を輕やかな春の袷に代へる用意に若き妻も老いたる妻も眠りを忘れるのだらう。

川添ひの土堤に立つて見る。酒を造る爲めに寒の水を汲む所に大きく氷に孔があいてゐる。その下を水嵩の增さつた河水がどん〳〵流れるのが見える。どうかすると音を立てゝ雪の積つたまゝ氷が崩れこむ。一旦どぶんと渦卷く水の中に沈んだ氷が、反動で水の上にぴよこんと頭をあげ、水と一色になつて見る〳〵下流に流れて行く。鶺鴒が黃色と白との羽根を敏活にひらめかして二羽だけ雪の河原を飛び廻つてゐる。

南を受けた堤の雪は紙のやうに薄くなつて、彈力のある枯草の葉や、赤い實をつけた野茨や、鼠柳の灌木らしい短い幾條もの枝が現はれて出てゐる。その鼠柳の皮膚はもう赤くなつてゐる。靑くなる前に赤くなつてゐる。それを見る人はその枝の一本々々をしみ〴〵と撫でゝやりたくなるだらう。

林に這入るとそこは雪がまだ軟かで深く且つ淸い。然し踏みこんだ足が大地に達すると、そこでは雪がもう解けてゐる。落葉が先づ熱を發散し出したのだ。木は地液を吸ひ上げ始めてゐる。細かい細根から頑丈な幹に上つ

て行く養分が音のせぬ程度に音を立てゝゐるやうに思へば思はれる。默つてゐると幾萬本かの眼にあまる幹からそれが聞こえて來るやうだ。試みに砂糖楓の幹にナイフで傷をつけると、見る〳〵血液のやうに樹液が滴り落ちる。それを唇に受けると幽かな甘味が春の精のやうに舌を撲る。ばさり〳〵と風もないのに石楠の廣葉が落ちる。冬の間頑固にかじり附いて枝を離れず、吹雪にもざわ〳〵と淋しい音を立てる赤褐色なその廣葉も、小さな嫩芽の追ひ立てを喰つてはーとたまりもないのだ。

何處かで啄木鳥が木をつゝいてゐる。小鳥のしば鳴く聲も聞こえる。栗鼠が鑛物的な音を立てゝ大きな樹幹を縱橫に駈け廻つてゐる。何んの爲めのあの喜ばしさなのだらう。雪の上を見ると風の爲めに吹き折られて落ちて來た枯枝の間に、兎の糞が一寸程雪の中にもぐり込んでゐる。熱を引き易い黑い色が晴天に遇つて雪を解かしたのだ。

犬も猫も春を嗅ぎつけるのは早い。默つて雪の上に尻をついてゐた犬は、何事もないのに突然立ち上つて、立ち上つたかと思ふと無我夢中で雪の上を駈け廻る。而して悲しさうな聲をさへ立てる。と、又突然庭の隅に尻をすゑて、鼻を天に向けて眼を細めて、何かを嗅ぎ分けようとするやうに尾を振りながら鼻の先をひこ付かす。緣側の日あたりで日なたぼつこをしてゐた猫は、狂噪な犬の擧動にきつとなるが、すぐ體を丸めて自分の舌で毛なみを整へ始める。細い硬い毛が拔けてきら〳〵と光りながら小寒い空氣の中を風も無いのにたんぽゝの綿毛のやうに飛んで行く。

冬が老い盡す。あの萬有を情容赦なく鞭撻つた恐ろしくも小氣味いゝ暴王は老い盡す。冬は潔く觀念して老いて行く。

三日か四日かの風のない雲のない晴天が續く。もう地上には物蔭の外には雪がない。春は赤子の如く大地の上

に生れ出たのだ。

赤子が醜いやうに、生れたばかりの春は醜い。冬の莊嚴さを持たない裸樹はぎこちなく筋ばつた枝を空に張つて立ち竝び、糊を塗りつけたやうにべた／＼な黑土の上には、芥と枯葉と枯草とがいぎたなく粘り着いて居り、もうすつかり春らしくなつて來た大空に對し殊更憐れな對照を作る。

更に又三日か四日かの風のない雲のない晴天が續く。

北國の大地は夢のやうに變つてゐる。腐つた海草のやうになつた草の株の中央には、葉牙がによき／＼と姿を現はす。樹々の葉牙は見る／＼赤らみ脹らんで行く。而してその重みの爲めに枝は美しい弧線を空に對して描き始める。黑土は湯氣を立てゝどん／＼乾いて行く。絨毯を踏むやうな快感が履物の底に感じられる。その時雀は屋根の端に蹲まり、毛の毬のやうに丸まつて、小さな首を忙はしくかしげながら、圓らな小さな眼で天と地とを不思議さうに眺め廻す。鷄は羽ばたきしても羽ばたきしても飽きたりないやうにのう／＼と羽ばたきする。流れの中の水藻はもう新たな綠を加へて盛んに水泡を水面に送り出す。

見る／＼日當りのいゝ地面は綠に變つて來る。馬ならずとも、牛ならずとも、嚙みしめて見たいやうな寢よげな若草が叢がつて尖つた葉先を空の方へ擡げる。えぞのゐんごさく、きばなのあまな……さういふ小さな可憐な花が奇蹟のやうに白や黃の個性も今年も明かに見せてほころび始める。濕地には水芭蕉の青々とした廣葉が枯葦の間から、谷間には蕗の薹や福壽草が腐つた蕗の葉を蹴破つて、ずん／＼と延びて行く。林に這入つて木の幹を見上げると傷口といふ傷口からは樹液がねつとりと溢れ出て、そのまはりには早くも殼をぬけ出たばかりの小さな蟲達が黑々と集まつてゐる。梢を低くかすめて、水蒸氣とも雲とも別ちがたい眞白なものが絶えず形を變へながら、洗ひ上げたやうな青空を東風に送られて西へ／＼と飛んで行く。

橇は何時の間にか車になつてゐる。その轍の音が物珍らしく遙か彼方からうつとりと聞こえて來る。家々の門の前には箒目が立つ。芥取車の上には半年の間捨て置かれた廢物が堆く積まれて甘酸つぱい香りをふりまきながら、物うげに脚を運ぶ老馬に牽かれて行く。兎の害を防ぐ爲めに魚の腸の腐つたのに浸して結びつけられた古藁は、果樹の幹に物臭く垂れ下つてゐる。農夫は畑に出て土の上の乾き具合を眺めやつてゐる。十勝の方で放牧してあつた馬の群れは、生え延びた毛をくしやくしやに亂して、痩せ細つて、馬子の乘つた先頭馬の尻からのろのろと喰つ附いて歸つて來る。長く踏肥ばかりしてゐた牛共は眩しさうに眼を細めながら牛舍から連れ出される。牛糞に汚れ切つたその姿にも冬の蟄居の長さと辛さが裏書きされてゐる。

それから辛夷の花が咲き、郭公が訪れ、木の芽が木の種類によつて花よりも美しい鮮明な色に染まり、雲雀が謠ひ出し、あらん限りの春の花が一時に競ひ咲くまでには一箇月を要しないだらう。

自然の表情は或る時には實際人以上だ。少くともそれは人のやうには僞りをしない、人よりも忍耐深く、人よりも感じ易い。

私は一人の小説家として、自然よりもより多く人の姿を見つめてゐる。けれども私は屢々自然に人以上の親しみを感ずる。默つて自然の追憶に耽つてゐると、何時か深い喜びと純な pathos の中に浸つてゐる自分を見出だす。何物も何事も本當は人間程に生きてゐるのだ。

春になると私は北海道の春を思ふ。

（一九一九年四月、「新小説」所載）

往來雜記

何が一人の人に取つて最大の幸福であらう。私は始終それを念頭においてゐた。或る時ミレーの傳を調べて見たら、その言葉の中に、曲りくねつた樹が美しいとか、眞直な樹が美しいとかいふのは間違つてゐる。眞直な樹は、その樹が立つべき所にある時に美しい。曲りくねつた樹は、その樹が立つべき所にある時に美しい。而してさうでない場合に醜いのだといふやうなことが書いてあつた。ホヰットマンの詩を讀んで見ると、

「俺は或るものが偉大で、或るものが矮小だとは云はない。

その時と處とを得たものは凡て等しい」……(自己の歌)

私のいさゝかな經驗も亦同じことを私に敎へる。私が自分の仕事を見附け出して、自分をそこに箝めこむまでは、私は決して幸福ではあり得なかつた。

どんな安定な生活も、どんな幸福な家庭も、どんな親しい交遊も、それは畢竟外部的に私に附着したものだといふ感じを取り去つてはくれなかつた。それは、他人から見たら憫れむべき誤謬であるかも知れないが、私が自分で考へて、これこそ私の自分の仕事だと云ひ得るものを見出だした時に、初めて幸福の意を知つた。その時自分の所有物であつてならないものは、遠慮なく私から離れてしまつた。私も惜し氣もなく捨てゝしまつた。その後まで殘つてゐるものは、それまでは外部からの附着物のやうに見えてゐたものでも、その瞬間に、私の內部から生み出された本然の所有物になつた。それは私自身に外ならなかつた。大きな荷物を背負つては、天國の門に這入れぬといふのは本當だ。凡て持てる限りを自己の中に攝取して、外部的な附着物を持たない人のみが、誠の

幸福の門を潜ることが出來るのだらう。

仕事はその人を勤勉にする。これは小さなことではない。仕事に勤勉なれといふ倫理はうそだ。仕事を見出だせといふべきだ。仕事を見出だした以上は、勤勉であるより外に仕方がない。仕事と勤勉とは別事でない。

仕事はその人を謙遜にする。本當の謙遜は自分の仕事に誇りを持つ人のみから生れる。それだから謙遜は美德なのだ。仕事を持たぬ人の謙遜は謙遜ではない。それは卑屈か虚禮だ、shamだ。シェレーは自分の爲すべきことを見出だした時の最後の言葉として、

"……… I then controlled
My tears, my heart grew calm, and I was
meek and bold"

と云つた。仕事を見出した者の氣持を彼は存分に言ひ現はしてゐると私は思ふ。自分の領分に於て大膽であり得るものゝみが、同時に正しい謙遜を以て身を持する。

自分の性格から仕事は生れる。だから本當をいふと、仕事は見出されるものではない、生れるものだ。凡ての人が銘々獨自の仕事を生み出すことの出來る社會、さういふものが成り立つ時、人類の黄金時代は甫めて成就する。而して凡ての人は、木があるやうに、又草があるやうに、本當は自分銘々が立つべき唯一の地點をこの地球の上に持ち得べく生れてゐるのだ。

○

ホヰットマンを引き合ひに出した序でに云ふ。この詩人は日本に於けるこの頃の流行のやうだ。私のやうなものが、その講演を同志社で試みてゐることだけを云つても、その證據になるかも知れない。ホヰットマンの一愛

讀者なる私は、かういふ傾向を呪ふべき所以を知らない。然し詩人自身は私のやうなものに對して、隨分手痛い皮肉を浴せかけてゐる。それはかうだ。

「然しこれらの集を君は危險を冒すことなしに學ぶことは出來ぬ、何んとなればこれらの集と私とを君は理解し得ないだらうから。彼等は先づ君から避け逃げるだらう、而してその後にも亦――私はたしかに君から避け逃げるだらう、君が間違なく私を引つ捕へたと思ふに相違ないその時でも、見よ！君は既に君から逃げてしまつた私を見出すだらう。」

○

今年はじめて京都の晩春を見た。私の一番美しく思つたものは、柿の若葉だつた。少し黄味を持つた、玉のやうに光る、軟かい葉の一枚々々も美しいが、それが裏枝から梢の方に積み重なつて、一と色に唯青い他の樹林を背景に立つ姿は、又なく美しい。それは存分に柿紅葉の晩秋の頃の美しさを壓倒する。北海道で見る落葉松の若芽とその美を競ひ得るものは柿若葉と私が名づけたところのものだ。

私は又洛外で、强風の時に、椎の老葉が秋の末頃の他の樹のやうに參差として散るのを見た。凡てのものが競ひ育つて行く時に、ばら／＼と音を立てゝ枝から離れて行く春の落葉を見るのは、見る人にあぢけない淋しさを感じさせる。

○

私の住む旅館の部屋の前を、疏水の流れが流れてゐる。去年の秋に來た時見たのだが、その水底には一面に水藻が茂つてゐた。私は暇ある每に好んでそれを眺めやつた。暗綠の長い葉は、女の髮の毛のやうでも、風に吹きな

びいた黒い雲の群れのやうでもある。それが水の流れにゆら〳〵と搖(ゆ)られて、蛇のやうなうねりかたをした。或る時はそれが私に女性といふものゝ生活を思はせた。或る時は野に立つて何處かにさまよつて行かうとする群盲の姿を思はせた。或る時は運命そのものを思はせた。流れが淀(よど)まぬ時、素直にそれが下流に向つて流れると、そこには整つた古典的な美が現はれた。下から湧き上つて來るやうな水の勢ひに煽(あふ)られて、藻の一部がうざ〳〵と裏葉をかへしてゆるく翻(ひるが)へる時は、白晝でも物凄い鬼氣が、見るものを襲つて來た。水藻は幅が可なり廣く、緑葉がゆるくちゞれ、長さは確かに四五尺に及ぶかと思はれた。それが水底も見せず簇生(そうせい)して、この不思議な舞踊を私の眼の下に踊るのだつた。

この春はそれがすつかり刈り取られてしまつてゐる。而して水底に沈んだ空罐や、あさりの貝殼や、サイダー類の丸い鐵栓やが、亂雜に水の大きな量を通して眺められる。私は水藻を凝視する機會を失つたのを口惜しく思つた。

凝視してゐると物が見えて來るのか。水藻に特別な力があつて容赦なく私に迫るのか。

（一九一九年五月、「大阪朝日新聞」所載）

若き友の訴へに對して

ある若い友からから云ふ訴へを聞いた、その人は自分の進まうとする道が藝術の世界であるのだけれども、第一自分がその仕事によつて生活する事が出來ないし、又果して斷然他を抛つてそれを唯一の仕事と爲し得るかの自信もないのだつた。然しその人は非常に良心的な考へ方からして、自分の志す道以外の道を心なくも追つて行く事を段々慊らず思ふやうになつた。その爲めには斷然學校を廢めて、自分の實力だけで食つて行く爲めに勞働に就くのを厭ふまいとした。或る時は新聞配達夫ともなり、或る時は某商店の事務員ともなつて見た。然し結局その人は衷心の滿足を得る事が出來ないで、職業に從事したかと思ふと、耐へられなくなつてそれを廢めてしまつた。而して世話してくれた先輩や朋友に對して、屢々面伏せな心持をしなければならなかつた。例へば餓ゑても自分は心にもない仕事に沒頭する事はしまい。これならばと自分で滿足するだけの仕事が見つかるまでは、自分は人の門に食を乞はう。權利を有するもの丶如く平らかな心で食を乞はう。而してそんな擧動を輕蔑して何物をも與へずに罵言を浴びせるやうな人があつても、寛い心でその人を憐れむとも、恨むやうな事はしまい。かうまでその若い友は思ひ詰めたのださうだ。

けれども人間の命の哀しさは、か丶る不安定の日々を送る事をその友に許さなかつた。その人は復た恥を忍んで小さくとも一つの職業にありつかうとした。その結果は然し前から分つてゐるやうに失望に終るばかりだつた。自分は矢張り卑怯にも生活の保障を受けんが爲めに、自分の内部の要求とは何んの交渉もない職業によつて今日々々を生きて行かうとしてゐる。仕事をする爲めに生きなければならぬ生活にあつて、到底生きる爲めに仕

事をするさもしい心に陷つてゐる。さう思ふとそんな境涯に身を置く事が迚も我慢の出來ない事になつてしまふのだつた。而してその若い友は又もや自分の仕事をするのが針の筵の上にゐるやうに思はれ出すのだつた。

これをどうしたらいゝだらう。さう若い友は私に訴へた。

實生活に於てその友より遙かに無經驗である私は勿論權威のある答へやうをする事が出來なかつた。私はそれを恥ぢたけれども、それが事實なのだから仕方がない。私は答へる事が出來ないと云つた。然しかう云つた私の心の中にはもう一つの事が潜んでゐた。その友は今一生の大事な瀨戶際に立つてゐる。そんな大事を決するには其の人自身で決する外に道はない。そんな場合他人の意見を求めるのは——單に一種の參考として聞かうとするだけでも——それは間違つてゐる。他人の意見を聞いてその大事を決定した以上、その結果が善かつたとした所で、惡かつたとした所で、その人は一段の生長はしてゐながらも、他人の肩車に乘つて他人を見下してゐるやうな物足らなさを感ずるに相違ない。さう私は思つたのだつた。で、その若い友に向つて私は何事も云はないから斷然自分一人で考へ拔いたらいゝだらうと勸めておいた。

然し暫くして私は再びその友から同じ訴へを聞かされた。私は固よりそれに對して答ふべき特別な事は持つてゐなかつた。唯私の平生懷抱してゐる常識的な意見を獨り言のやうにその若い友に披露した。若い友は恐らくそれに一顧をだに拂はなかつたらう。さうなければならぬと思ふ。然し私は備忘の爲めに、その時云つた事をこゝに書き連ねて見る。

人は仕事をする爲めに食ふべきだ。食ふ爲めに仕事をすべきではない。これは誰にでも直ぐに受け入れらるべき言葉らしく聞こえる。然し言葉のまゝではその價値は零だ。それは單なる美辭だ。そんな事が實現され得べき世界は今我々が見渡した所地球の何處の隅にもありはしない。尤もそれには極く少數の例外はあるといふ事だけ

は云はれ得る。それは親讓りの財產で生活をしてゐる人々の身の上だ。

（即ち私如きものゝ身の上だ。）その人達は食ふ爲めに生きる事でも、仕事する爲めに生きる事でも、思ふやうな事が出來る。親讓りの財產を無反省に浪費して生きてゐる人は可なり澤山ある。仕事をする爲めにその財產を利用してゐる人もないではない。實際あれだけの仕事をするならあの人には徒食をさせても差支へないと私達が思ふやうな人も偶にはある。然しよく考へて見ると他人からさう思はれてゐる人でも、その人自身から考へて見ると後ろめたい事が數限りもなくあると私には思はれる。どれだけの仕事をすれば自分だけに與へられたやうな特權を平氣で享樂する事が出來るか——これだけの事を考へて見たばかりで、その人は深い不安に襲はれないではゐられないと私は思ふ。殆んど食ふや食はずで素晴らしい仕事を成し遂げた人々は私達の過去や周圍に星のやうに輝いてゐる。それを思ふと衣食住の安定を得てゐる人達は、餘程圖拔けた仕事をしない限り安心して自分の境涯を顧みる事は決して出來ない筈だ。だから世間が見て相當な仕事をしてゐると思つてゐる人達でも、その人自身の立場から考へると、仕事をする爲めに食つてゐるなどと恐れ多い事の云へる義理ではないと私は思ふ。

縱し一歩を讓つて親讓りの財產で心配なしに食ひながら、それに相當する仕事を仕出かした人が若干數はありとしても、さう云ふ人の人數を世界中の食ふ爲めに仕事をしてゐる人の人數に割りあてゝ見たら、どれ程の少數になるだらう。恐らくはそれは云ふにも足らないほどの小さな割合であるに違ひない。

だから現在世界に住んでゐる人の大多數は、と云ふよりも殆んど凡ては、善くとも惡くとも食ふ爲めに仕事をしてゐると云はなければならないのだ。それが虛僞のない實際なのだ。これが刻下の人間に否應なしに與へられた運命なのだ、事實なのだ。人間は仕事をする爲めに食ふべきもので、食ふために仕事をすべきではないと云ふ名言は、名言には相違なくとも、未來に黃金時代でも來た時に始めて通用する名言に過ぎないのだ。現在にあつ

てそれは衝動としては存在し得よう。然し事實としては存在してはゐないのだ。然るに人は往々立脚するのを忘れてしまつて、天國の夢を現世で履行しようとする。それは私の考へではいゝ事ではない。

何故我々は現實の生活に、今日の事實に、もつと強固な立場と誇りとを持たうとはしないのか、世界の殆んど凡ての人々が實際行つてゐる生活に自分も同じく加はる事を何故唾棄すべき事と思はねばならぬのか。その生活に這入り込み浸り切つてこそ、その人は始めてこの地上に自分の脚を立てたと云ひ得るのではないか。そこから退く所に、そこを避け疎んずる所に殘る者は唯空虚な焦躁と三文の値打ちもない不可行の理想ばかりではないか。そこには眞實の意味でいふ生活はありはしないのだ。生活の極く幼稚な樣式化があるばかりだ。食ふために仕事をするといふ生活から一歩躍進せんとする衝動を重んずる事はいゝ。さうあらねばならぬ。何故ならそれは人間の持つ本能だから。而してそれの出來る人は、その實力を確かに握つてゐる人は、さう云ふ生活から自分自身の力で躍り出るがいゝ。さういふ風にして人間は一歩々々よりよき生活に進轉する事が出來るだらう。

然しそれだけの實力を握つてゐるとしつかり自覺し得ない間に、人が爲すべき所は唯徒らな焦慮と躊躇であつてはなるまい。現實の事實である萬人共通の熔爐に身を投ずる事のみがその人を本當に生きたものにする。縱令そこから再び拔け出る事が出來ないで、遂に食ふ爲めに仕事をして一生を終へねばならぬとしても、その人の生活は現實と嚴密に結び付けられたと云ふだけで深い意味と充實とを齎らすであらう。自分の爲めに、自分の扶養して行かねばならぬ人々の爲めに眞面目に額から汗を流して働く人を見ると、それは何時でも私に悲壯な感激、正純な情念を湧き立てさせる。そこに正しく、生活がそのまゝ藝術にまで繰り上げられてゐるのを感じさせる。私はその人に向つて尊敬と感謝とを捧げたくなる。

世にはさういふ風に現實の生活に驀地に沒頭して行く事の出來ない程過繁な反省や、過敏な神經や、過度な上

品に惱まされてゐる人もあるやうだ。人々は動もするとかう云ふ人達を優れた官能の所有者、俗衆を超越した非凡人として、愛撫し、辯護し、尊敬だにしようとするのは私には不思議に思はれる。私はさういふ人のあるのを否定しない。然し同時に尊敬は出來ない。私はその種類の人を悲しい文明の犠牲者と見る。深い同情は起る。と共にその人達は結局目の前にある人間の生活からの除外者である事を拒み得ない。我々は病者老者をいたはるやうにその人達をいたはらねばならぬ。けれども現在の生活の力となり推進者となり得る質の人達ではないのを明かに知らねばならぬ。

現在眼の前にある生活が要望する人はさう云ふ種類の人ではない。それは現在の生活に躊らふ事なく這入り込んでそれを突き拔けて行く人でなければならぬ。突き拔き得ないまでも、突き拔けようとする人であらねばならぬ。そこに力と誇りとを感ずる人でなければならぬ。かう云ふ人が眞劍になつて働いてくる時に生活は始めて力が籠る。而してそこからのみ本當の藝術は生れ出るだらう。而してそこからのみ正しい要求の聲は叫び出される。食はん爲めに仕事をする生活から、仕事をする爲めに食ふ生活への一路がそこから開けて行くだらう。

この輝かしい世界共通の生活態度に足並みをそろへて行き得ない私は一種の淋しさを感じないではゐられない。私は極く少數の除外例を爲す人々の中に伍して、大多數の生活からは懸け離れた生活にあらねばならぬものの一人だと云ふ事を私はこの頃殊に痛感する。

然し私もかゝる生活を悔いまい。その生活を與へられゝばその生活を與へらるゝで、又自分を導いて行くべき仕方があらねばならぬ筈だ。心一つだ。徐々にではあるとしても、私はやがて私自身の滿足するやうな道に私を連れて行く積りだ。だから私は敢へて以上の事を云ふ。實生活の苦しみも嘗め試みずに生意氣な事を云ふとその若い友は思ふかも知れない。それにも係はらず私は自分を僞らない或る自信を以て以上の事を云ふ。

さう私に訴へて來た其の若い友に答へた。其の人は私の言葉をどう取つたか知らない。又私の言葉によつてその人のそれからの生活がどう變つたか知らない。

〔一九一九年七月、「新潮」所載〕

序・跋・題言

聖フランシス「完全の鏡」の序文

――久保正夫氏譯著――

久保正夫兄

この一文は始めからお斷り申したやうに序文でも題言でもありません。第一あなたは私のやうなものゝ書く序文などを必要となさる方ではないし、又あなたが十分の蘊蓄を傾けてお譯しになつたこの書物は、世にも尊い文獻の一つであつて、私が題言などを夢にも思ひ立つべきものではないと思ひます。

唯あなたが强ひて勸めて下さるまゝに、何んにも知らない私が單に聖フランシスの貧しい尊敬者の一人として思つたまゝを云はせていたゞく事にしたまでゞす。

地球といふ一種の生物――それは單に、空氣と水分と土塊との機械的な集合物と見るには、餘りに生きてゐます――の經來つた歷史の上には、不思議に正しい脈が搏つてゐるやうに思へます。我國で法然上人といふ稀有な善知識が現はれて、佛敎を禁厭と祕密と高踏的な哲學とから解放し、人間の生活と正しい關係に持ち來しつゝあつた時、伊太利に聖フランシスが現はれたのを、偶然の暗合とのみは云へないと思ひます。去年の秋京都に滯在してゐる間に、私は一日比叡山に參詣しました。八瀨の方から山にかゝつた時には、短い日が傾きかけてゐました。

而して黑谷の靑龍院にかゝつた時には、あたりはもう模糊とした暮靄に包まれてゐました。行手を急いでゐた私は渴き切つてゐたので、一杯の水の布施に與からうとして寺門を潜りましたが、その時寺內で夕方の勤行を報ずる鐘が唯一聲聞こえて來ました。森閑とした寂寞裡に響き渡るその鐘は寂寞そのものでした。本堂に近づくと低く經文を讀誦する聲だけが幽かに漏れて來ました。庫裡に廻つて案內を請ひましたが取次いでくれる人は更にありません。私は少し亂暴とは思ひながら斷りもなしに庖厨に赴いて、筧から惜しげもなく水甕の中に流れ落ちる山水を手杓に汲んでしたゝか飲み乾しました。淸い冷たい甘い味でした。そこを出て庭に立つと雨もよひの空の中に、秋さび切つたあたりの景色は私一人のものゝやうに眺められました。法然上人が勸化を思ひ立たれる前、この淋しい寺の中で二十餘年の間、沙漠の中の行者のやうに行ひすまされた事を思つて見ました。それは誰をでも淚ぐませるに十分です。然しこの死のやうな沈默の中からあの光明遍滿の淨土の敎へは生れたのでせうか。

私が歐洲にあわたゞしい半年程の旅行をした時、是非とも遇ひたいと思つた人はクロポトキン、是非とも訪れたいと思つた土地はアッシシでした。學校にゐる時に私は內村先生に勸められて、サバティエーのフランシス聖者傳を讀んで以來、私はこの聖者に對して心からの尊敬を持つやうになりました。殊に聖者の先驅者とも云ふべきヂアッキノ・デ・イ・フィオーレが、人生を三期に分つて豫言した言葉は深く私の心に徹しました。

「人生は三期に分つ事が出來る。第一期は天父の支配の下にある時で、人は嚴正なる律法の中に生活する。第二期は神子の支配の下にある時で、人は恩惠の中に生活する。第三期には聖靈が人を支配し、人は愛の豐滿の中に生活するだらう。第一は奴隸的服從の時期である。第二は孝道的服從の時期である。第三は自由到來の時期である。人は先づ畏懼に生き、尋で信仰に生き、最後に愛に燃えて生きるだらう。人は先づ星々の輝きを望み、尋で曙の白むを見、最後に白日の榮光に浴するだらう。第一の時期は蕁を產し、第二の時期は薔薇を生じ、第三は百

合花の時期となるだらう。」

この言葉はいかにも甘々しい女性的な調子を持つて響きます。然しその内容の深みには嚴粛な革命的な力が罩められてゐます。進歩したと稱せられる今の基督教も恐らくはこの言葉を反教的と見るかも知れないと思ひます。それを第十二世紀に、人々が基督再來の惡夢に襲はれて、今日々々を最後の審判てふ懼るべき事變の到來におびえながら過ごしてゐた時に、鳥が春の來たのを知つて歌ひ出したやうにこの言葉を公言したヂアッキノの飾らない素直な態度を私は涼しいと思はないではゐられません。かゝる新鮮な、大膽な、人間的な精神の勃興した時代を逸早く體感してその行者となつた聖フランシスの生涯が私達の時代にまで力となつて働き得る譯がすぐ了解される筈です。

フランシスは何處までもPriestとしてゞはなくMonkとして、羅馬法王廳の教權に據る事なくして、單なる一箇の宗教的自由團體の一員として、神の權威を衣した指導者としてゞはなく、人を樂しませる爲めに神から遣られた大道藝人として一生を過ごさうとしてゐた事は存分に窺はれますが、羅馬教の勢力が何んと云つても牢乎として拔き難い時代であつたものだから、思ひも寄らぬ種々の事情に逼られて、段々正統派の形式に引き入れられてしまひました。舊き皮袋に新らしき酒を盛つたやうな結果に陷りました。時代の先覺者が味はねばならぬ苦い味をフランシスもしたゝか嘗めさせられました。サバティエーも云つてゐるやうに、フランシスの晩年に悲劇的な幕を閉ぢました。新しい精神の周圍に舊い皮痂の出來て行くのを悲しみながら、聖者は終焉の息をついたのでした。嘗ては同じ事が基督の上にも起つたと思ひます。又同じ事がソクラテスの上にも起つたと思ひます。天才の翼の力は餘りに早過ぎる。後繼者がその姿を見失はない爲めには、その翼の羽毛を存分引きちぎる外に道はありません。

然し舊き皮袋は、盛られた新酒が古くならない中に破れてしまひました。私等は渇仰し隨喜してこの舊き皮袋から混々と漏れ出す酒の香に醉ふ事が出來ると思ひます。聖者が逝いてから七百年は經ちました。七百年の間には大抵のものは塵になつてしまひます。然し聖者の心は滅びません。輝いてゐます。彼の生涯から、その生活の形式、その信仰の外裝、その哲學の面紗を裂き取つて見ると、聖者は七百年の後にして尙ほ新しき現代人です。深く築いた人の力の畏ろしさをまざ／＼と感じさせられます。縱令どれ程主義に相違があらうと、どれ程性格に距離があらうと、フランシス聖者の如きは凡ての人の尊敬と愛慕とを受くべき人です。

「完全の鏡」といふ書物を私はまだ讀んだ事がありません。それがラテン語からあなたの手によつて譯されたといふ事を私は深く感謝します。飜譯が單に思想の紹介の爲めばかりになされるのも惡くはありますまい。原文と譯文とに文體や心持などに何等の共通點が見出だされないでも許さるべき事かも知れません。然しこの種の書物がさういふ待遇を受ける事は私には忍び難い事に思はれます。あなたのやうな篤學な良心的な聖者の尊敬者によつて、この事業が成就された事を私は讀者の一人として心から嬉しく思ひます。ラテン語も伊太利語も讀めない私はあなたによつて新しい心の收穫を贏ち得ます。

一九一九年三月九日

「野性の呼聲」あとがき

この書物は私が札幌で英語の教員をしてゐた頃不圖思ひ附いて教科書に使用したものだつた。元來私は英語は教へてゐたけれども何等語學の素養があるのではなし、さうかと云つて英文學に就いても嘗て組織的な研究をした覺えはなし、外國から日本に歸つて來ても、使ひ所がないから、英語の意味位が曲りなりにも取れるのでその方の教師でもさせてやらうと母校の先輩が世話をして教師にしてくれたのだから、愈〻教師になるとまごついてばかりゐた。それまで讀んでゐた書物と云つても物好きに任せて自分が面白いと思ふものだけを選り好みをして亂讀したのだから、英文學に對して系統の立つた智識と云つては皆無だつた。で教科書一つ選むと云ふ事になつてもその選擇には立派な學者の思ひも寄らぬやうな下らない心配をしなければならなかつた。長過ぎては一年間に講義がし切れない。短か過ぎては時間が餘つてしまふ。面白過ぎては學生が話の方に氣を取られて、肝腎な語學の方をおろそかにする。つまらな過ぎては英語そのものに愛想をつかす。やさし過ぎては學生が教師を馬鹿にする。むづかし過ぎては教師自身がまごついてしまふ。その邊に過不及のない教科書を尋ね出さうとするのは、無學なる私に取つては容易ならざる苦心だつた。私が退職する時學生達が送別會を開いてくれたのはい〻がその席上で『武郎君は Broken なり』と眞正面から思ひ切つた送別の辭を投げつけられて閉口するより仕方がなかつた。こんな下手糞な、無學な、い〻加減な英語の教員であつたけれども、この書物を教科書に用ゐた一年だけは有島武郎君（優等ブロークン）も大いに沽券を上げたやうだつた。學生は私の時間を待ち遠しがつた。講義が濟むと、極度の緊張がゆるんだ時に發せらる〻溜息がそこらから聞こえた。教科書の題名から思ひ附いたワイルド

會といふものが寄宿生の中に出來あがつた。私はかうして大分面目を施す事が出來た。然しこれは私が面目を施したといふよりもジャック・ロンドン氏が面目を施してゐるのだ。私は人の褌で勝相撲を取つて喜んでゐた譯なのだ。私の功績といふものを强ひて擧げるならこの書物を教科書に採用したといふ點位なものだつた。所が何もかも白狀すれば私はロンドン氏の著書を涉獵して、その中から教科書としての條件を具備してゐるが故にこの書物を擇んだ譯ではなく、ロンドン氏の著書を手にしたのはこの書物が最初で、今までの所では又最終なのだ。ふと廣告文か何かで氣が附いて私はこの書物を米國から取寄せて讀んで見た。而して是れはいゝ物だと思ふとすぐ敎科書に決めてしまつた譯なのだ。だからロンドン氏がどんな偉い文學者なのか、どんな偉くない文學者なのか、ちつとも――と云つては少し僞愚的かも知れないが、大方は知らなかつた。今度この書物に添へられる堺君の書いた小傳を讀んで始めて知つた位なものだ。

然し兎に角この書物が學生に與へた印象の甚大だつた事は爭はれない。後年私が教員をやめて東京に住まふやうになつてから、一日偶然市岡猛君と街頭で出喰はした時、市岡君は二三日內に私を訪ねると云つてゐたが、果してやつて來て、あの書物を讀んでから自分の人生觀が一變した事を感ずるので、忙がしい間から全部を譯了してしまつた。その中淸書して送るから見て見ろとの事だつた。果して大部な原稿が私の手許に屆いて來た。而して一人の農學士をしてこれだけの見當違ひの勞を惜しまぬまで熱しさせたロンドン氏の力に感心しながら、私は一通り眼を通した。私は又市岡氏の熱意に感じて何んとかして是れを市場に出したいものとも思つた。二三の書店に相談して見たけれども何しろ文壇には無名の市岡君の事だから引受けようとする人はなかつた。で、その原稿はそのまゝになつて私の手許に埋まつてゐた。その中「中外」で堺君がその譯を發表されるやうになつた。私はそれが完成されぬ中に早く市岡君の方を纏めたいと少しやきもきして見たけれども、そのやきもきのしかたが

少しだつた故か段々おくれてしまつた。尤も市岡君の譯はまづい（農學士でまづいと云はれたつて不名譽ではないと思ふ）それには大分私の責任もある。私の怪しい譯のつけ方が累をなしてゐたに違ひない。それを訂正するのは、これも白状すると私には面倒臭かつた。

その中に堺君の飜譯が出來上つてしまつた。而して邂逅の機會に市岡君の話が出ると、堺君が是非自分のものと比較したいと云はれるのでお貸ししたら、君の序文にもあるやうに多少參考になつたとの事である。市岡君の譯に對して責任を分たねばならぬ私はそれで大いに滿足を感じた。而して市岡君の熱心を記念する爲めに堺君の書物の何處かに市岡君の事を明記するやう御願ひしたら快諾して下さつた。市岡君、君もそれで滿足してくれるだらう。君のより解り易い而して手馴れた堺君の譯が出る以上は、この書物の內容を一般の讀書人と享樂したい君の志は達成される事になるのだから。

堺君は私に長い文を書いて添へろと云つて下さる。堺君は無道德的唯物主義者を以て自ら任じて居られるので、私が近頃實質以上に文壇の流行兒（！）になつてゐるのに見込みを附けて、少しでもそれを利用して本を澤山賣り出さうといふ魂膽なのだ。所が私は「愛」教の盲信者で同時に人道主義者なのださうだから、立どころに數萬言を連ねて之れに應ずると思ひの外、原稿紙六枚で御免を蒙る事にする。人道主義者の方が唯物論者よりも餘程狡い。狡い積りではないが、知らない事はさすがの人道主義者にも書けない。のみならずロンドン氏のこの名著が堺君の筆に譯されて賣れなかつたら、流行兒の私ですらがどれ程提灯を持つても無駄なのに極つてゐる。だから私は市岡君への申し譯の爲めに堺君を利用してこれだけの事を書いておく。

（一九一九年三月執筆）

「リビングストン傳」の序

――第四版の序――

私がまだ札幌農學校の學生であつた二十三の年に、夏期休暇の全部を費やして書き上げたこの書物が警醒社によつて重版されるに臨んで、豫てから機會があつたら、告白しなければならないと思つてゐた事を、こゝに明白に筆にすべき絶好の機會を得た。これは私に取つて一面悲しむべき懺悔であり、一面喜ぶべき宣言である。

私が基督教の思想に導かれたのは、主もに共著者森本君によつてゞあるといふ事は、先づ私が感謝の衷情を以て、玆に明言しなければならない事だ。それは私に種々な過去を想ひ起させる。東京に住み續いてゐたら、健康が保たれないと醫師から宣告されて、羸弱な自分の肉體をはかなみながら、見渡した地方の學校の中で、殊に私の心を牽き付けたのは札幌農學校だつた。幼稚な時から夢のやうな憧憬を農業に持つてゐたのも一つの原因ではあるが、北海道といふ未開地の新鮮な自由な感じと、私の少年期の傳奇的な夢想と結びつき、人前で怯れ勝ちだつた私の性情が、境地の靜寂を希つたのも與つて力があつた。明治二十九年の二百十日前後を、私はわざと横濱から汽船で小樽に向つた。暴風を喰つて船が避難した荻の濱の淋しい景色、後志西海岸の荒凉たる斷崕の連り、板家根（その上には多くの石が載せられてゐた）ばかりが立ち連なつた貧しげな小樽港の眺め、それらを私の若い心はどれ程感傷的な興奮を以て見やつたか。それはまざ〳〵と今でも私の胸の中に一味の哀愁を送りこむ。

札幌に着いた時には秋が十分に來てゐた。母と同國で幼い時から見知つてゐたといふ因緣から、私はその當時札幌農學校の敎授をして居られた新渡戸博士の家庭に受け入れられた。始めて面會した時、博士は一番好きな學

科は何んだと問はれた。私は正直に文學と歴史だと答へた。「それでは此の學校は見當違ひだ。」といつて、高々と笑つた博士に對して、私もはにかんだ笑ひを漏した。それも忘れられない記憶の一つだ。それでも兎も角も博士の盡力によつて、私は豫科の最上級に編入された。そこの空氣は、私が今まで學習院で慣れ親しんでゐた空氣とは全く違つたものだつた。士族の子であるが故に、華族が威勢を振つた學習院の空氣に同化し切らなかつた私は、こゝでも一種の隔てを以て迎へられなければならなかつた。級友等はたつた一人這入つて來た新入生を、不思議な動物でゞもあるかの如くに取扱つた。私は淋しく思つた。而して格別の友達といふ友達も作らずに、何んの特色もない一人の若者として日を送つた。

札幌は、といふより、札幌農學校はといつた方がいゝかも知れない。それよりも私の居た周圍はと云つた方が、なほ適切なのだらうか。ともあれ私は札幌に來てから、始めて宗教的な空氣中に浸されたやうな氣がした。私の家庭にも、母方の祖母といふものがゐた。

　　杖もなく自力も捨てゝ老の坂他力まかせにのぼる嬉しさ

さう辭世を殘したその祖母は、もと〳〵自力にかけては、男も及ばない程の女丈夫だつた。二十四で寡婦になつた彼女は、私の母とその弟とを、明治維新の際、しかも朝敵にまはつた南部藩内の名狀すべからざる混亂の間に、立派に育て上げて來た。亂雜極まる當時の社會革命の渦中にあつて、女の手一つに二人の子供を守り育てゝ行く爲めには、强い心の張りが要求されたに違ひない。その頃から祖母は自力敎の堅い信者となつた。御嶽敎の行者をすら凌ぐ程の精進と體達とを成就して、彼女が凝念すると、御嶽大權現の御姿は、何時でもまざ〳〵と念頭に威容を現はし、今日々々に起る運不運、幸不幸が豫覺される程だつた。祖母はこの神祕な力を心の頼みにして、段々に苦しい運命を開いて行つた。その中にその娘は私の父に嫁するやうになり、私の叔父になつたその息

子は、文選職工から段々挺身して、大藏省の役人になつた。而して稅務官吏として、大阪に定住するやうになつた。私の叔父といふのは、一種の人物だつたらしい。鍛はれた才能と親分肌な男性的な凉しい性情とを持つた、毛髮の潤澤な豐頰な美丈夫だつたやうに私の印象には殘つてゐる。祖母は大阪にゐて、この唯一人の男の子に凡ての愛と希望とを捧げてゐた。然るにこの私の叔父は、先天的な强酒と不休の活動とに災ひされて、十分その才幹を延ばし切らない中に早死してしまつた。叔父の病中も祖母に取つての唯一つの信賴の的は御嶽樣だつた。彼女は每日神社に參詣して、念頭にまざ〱と神容を拜して安堵してゐた。それがある日どういふ譯かどれ程念願を凝らしても、神容を拜する事が出來なかつた。而してその日に、彼女の命の綱のやうな一人子は死んでしまつた。そこの一大事が因緣となつて、祖母は一つの極から他の極へと、眼もくらむやうな飛躍をした。自力では破り切る事の出來ない障壁がある。さう祖母は心眼を開いたのだらう。それからの彼女は一切の自力を捨てゝ親鸞上人の柔和な使徒となつた。而してその頃、私等の住んでゐた橫濱の家に來て暮すやうになつた。私が祖母に對して持つ本當の記憶は、この頃から始まつてゐる。父の癇癪と母のきかぬ氣で、油氣もなくぎし〱ときしみながら動いてゐたやうな私の家には、祖母によつて一脈の春風が送られるやうに思はれた。本當の意味での宗敎といふやうなものも、その時から始めて家の中の空氣に交つて來た。その頃よく訪れて來た高田道子といふ端麗な被布姿の有髮の傳道者の面影も、私は忘れない。その人の歸つて行くのを、光が遁れて行くやうな淋しい心で見送つた私の記憶も、まだ殘つてゐる。かうして祖母は全く私の家の空氣を改造した。

私が北海道に行く時、祖母は懇々と私に信仰の必要を說いてくれた。向うに行つたら何んでもいゝから、宗敎をたよつて安心を得ろと云つてくれた。而して餞別として二圓くれた。私はそれで日頃から欲しいと思つて居た水彩畫の繪具を買つた。少し心咎めを感じながら、それを祖母に披露した時の彼女の輕い失望の顏を、餘事なが

ら私は今だに眼の前に描く事が出來る。」私は兎に角その教訓を忘れなかつた。而して札幌に行つてから、すぐ或る禪寺に修業に行つた。そこの和尚は六十を過ぎた位の氣さくな人で、時々は自分でも談話をしたが、多くは佛教大學を出たばかりの修行僧に、私達を任せてゐた。その頃、私の心の中には、本當に安心を得ようとするやうな、眞劍な要求があつた譯ではなく、謂はゞ、祖母の言葉を文字通りに實行に移して見たといふだけに過ぎなかつたけれども、規則正しく寺に通ふ事にかけては、人後に落ちなかつた。今川燒を少し買つて、懷ろに入れて胸をあたゝめながら寺に行き、歸りの夜道は、膚の暖かさ程に冷えたその菓子を喰ひながら、降りしきる雪の中を踏み分けたりした。かういふ生活が半年餘りも續いたけれども、因緣が熟さなかつたのか、私の鈍根がさせたのか、教師の力が足りなかつたのか、私はこゝから行けばといふ道の緒口(いとぐち)さへ見出す事が出來なかつた。私が朧ろげながら要求してゐる所に、教師は指の先も觸れてはくれなかつた。私はそろ／＼失望し始めてゐた。

　その時だ、森本君が突然私の生命の中に這入つて來たのは。或る日私を誘つて――その日は今でも忘れない、雨のそぼ降る陰欝な日だつた――附屬農場の奧の糧秣小屋の中で、牧草の中に臥(ね)ころびながら、君が告白した所によれば、君は以前から私に眼をつけてゐたのださうだ。而して或る機會にふと私のした事が私を朋友として君に選ばしめたのださうだ。君はその日宗教的探究の道伴(みちづ)れになれと、私に勸めた。その熱意は私を動かした。私は決心してそれを承諾した。而してその日から私の宗教的生活は廻轉した。

　森本君は、東京でも或る基督教主義の學校に學んだ所から、既に神に對する信仰を有ち、洗禮を受けてゐながらその頃恐ろしい動搖に苦しんでゐたのだ。君の告白を聞いた後の私には、君が痩せ切つて悒鬱(いふうつ)で、反抗的になつてゐる譯がよく判つた。私は君からすると、實に暢氣(のんき)なものだつた。何時でも鈍い步み方しか出來ない私は、常に森本君をいら／＼させる程暢氣だつた。而して愛想をつかしながらも、習慣的に寺通ひをつゞけてゐた。森

本君は私の心の薪に火をともす事にどれ程骨を折つたか知れない。既にもてあましてゐた苦しみの上に、どれほど強い苦しみを加へたか知れない。君の激しい眞率な言葉の鞭撻は、幾度も私を怖れさせさへした。私は幾度か、君から逃げ去らうとすら企てた。その頃外界から私達を結びつけたものは、内村先生の獨立雜誌と新渡戸博士の講話と、カーライルのサーター・レザータスだつた。その當時の森本君は、生きた獨立雜誌のやうだつた。級友からも全く孤立して、沈默を守つてゐた君が時たま演壇にでも立つと、火の様な憤激と侮蔑の言葉が、一般の基督教信徒に向つて瀉ぎ出された。勿論、その時、君は今まで屬してゐた教會を捨てゝしまつてゐた。

　私達二人は、人なき處を選んで生きた。豐平川だとか圓山だとかいふ所にだけ、人々は私達二人を見出した。森本君は精根を盡して私を、君と同じ信仰に引き入れようとあせつた。それにも拘はらず、私は往々俗世間的だつた。私は君が何故好んで級友とさへ言葉も交はさないかと怪しまねばならぬ程に、未熟で無邪氣だつた。その當時を回想すると、私は自分の稚氣を恥ぢる。

　こんな不徹底な生活を續けてゐる中にも、自然は徐ろに私に生長を强ひてゐたものと見える。それが森本君を大切な機縁として靜かに私の衷に芽ぐみ始めた。かうしてゐてはならないといふ私の不安が、段々と私にも感ぜられ出した。私はもう禪寺にも行かなくなつた。而してコンコーダンスなどを便りとしながら熱心に聖書に眼をさらすやうになつた。基督の地上生活が、朧ろげながら形を取つて私に想像されるやうになつた。森本君は罪といふ觀念に最も苦しんでゐた。罪人といふ意識は君を寢食にし不眠にした。死の誘惑は、時折り恐ろしく君の上に臨んだ。所が私には、どうしてもそれが森本君の感ずるやうには感ぜられなかつた。私は寧ろ基督の愛心の方にのみ心が牽かれた。それは私の心が、森本君の心より清淨であつたからではない。森本君は私が義を求める力の不足な爲めに、この大事を閑却するのだと云つた。罪の鋭い自覺なしには、天國の門は開かれぬと云つた。そ

れは、その當時、内村先生が極說した所であつて、森本君は又熱烈なその共鳴者であつた。私は理に於て、森本君のいふ所に一々承服しないではゐられなかつたにもかゝはらず、體驗に於ては、どうしても、その急所を探りあてる事が出來なかつた。而して唯一圖に、神との接觸のみを希つて一度もその經驗をなし得ない事を悲んだ。

然し兎まれ二人の生活は、段々緊張して行つた。級友等は、私達二人を一種の變人として、のけ者にするやうになつた。運動會などには嘗て出席した事なく、二人はその前後の休暇を利用して定山溪の淋しい溫泉場などに、二三泊の旅行をした。

ある時、私はつく〴〵自分の不徹底に堪へ切れなくなつた。此の世の生存が全く無意義に感ぜられ出した。而して自殺を企てた。私が本當に死なうと決心したのは、私の生活の前後にこの時だけだつたと云つていゝ。私は自滅を計るものゝ經驗すると思はれる凡てのものを經驗した。偶然な機會から、然しそれは森本君に見付け出された。二人は學校の事なぞは全く打ち捨てゝしまつた。二月といふ寒い盛りに、七里の山坂を越えて定山溪の溫泉に行つた。大雪の中に埋めこまれたやうな人氣のない溫泉場の汚い部屋で、獨立雜誌を俎に葱や馬鈴薯を切りなどして、五日程侘びしい自炊生活をした。その時私は始めて宗敎的有頂天とも云ふべきものに捕へられた。その有頂天が呼び起す恐るべく緊迫した性慾の發作も亦。

それまで愚圖々々に過ごしてゐた私は、この時始めて神に身を任せて生きようといふ決心をするに至つた。歸路、積雪の上に小鳥の遊び戯れてゐるのを見て、今まで知らなかつた不思議な感激の涙を流したのもその時だ。私は札幌に歸るや、すぐ兩親にあてゝ私の決心を告白した手紙を書いた。森本君も添書を書いてくれた。所が豫期した通りの返事が、兩親から私に向けて發せられた。父は私の若年の輕率と未熟な決心とを責めて、私のやうな若輩が、今にして一生の大事を決めるなどとは、生意氣も甚しいと云ひ送つて來た。母は母で、基督に對する

その頃の僻見を其のまゝ、自分の家から亂臣賊子でも出したやうに悲しみ憤つて來た。必ず信仰を飜へせ、森本君と斷て。さう兩親は諸共に私に迫つた。然し私はそのどつちの要求にも從はなかつた。祖母は私の噂を聞いて唯溜息をついたさうだ。而して私には、簡單に身體を大事にしろといふ短い手紙をくれた。

この宣言によつて、私は私自身を嚴重に縛り上げたやうなものだつた。私は淸敎徒のやうな淸い生活をし、聖書を食とし、祈禱を糧とした。割合に物慾の淡白な私は、それに苦しめられる事もなく、際立つた性癖のない私は、他人の指彈を受ける事が少く、從つて他人を憤るやうな事はなかつたけれども、怠惰と性慾とは已む時なく私の刺となつて、私が外面的に淸い生活を營む程私を苦しめ始めた。罪といふやうな意識が、始めて切實に私にも感ぜられ出した。祖母はその年の夏に他界した。屹度私を佛の恩寵の中に攝取すると云つて死んだ。私は學校を休んで上京して、暫く祖母を介抱したが、その時、改宗以來、父母とも顏を合はせた。而して旦夕に命の逼つた祖母を看護しながら、私の心は祖母に附添ふ看護婦に牽かれてゐた。緊迫した心で、淸淨な心でゐなければ、誰に對して面向けの出來ない筈の私でありながら、而して最愛の人でもあり、恩人である祖母の臨終を、眼の前に控へた嚴肅な場合に立ちながら、ある夜中に、その看護婦がふしだらな寢衣のまゝで、私の寢室に或る事を訴へに來た時には、私は必要な事だけを云ひ聞かせて、事なくその女を階下に送り返しておきながら、心の中では十分にその女の人を辱かしめてゐた。若し眞に誠實な心を持つた人であつたなら、その瞬間にその人は家を出て、死ぬか、或は賢い人になるかしてゐたらう。然し私には、それ程の誠實はなかつたのだ。私は非常な心咎めを感じながら、顏だけは、信者らしい顏をして、翌朝にはまた病床に侍してゐた。若しくは私の狂暴な心が、もつと激しいものであつたら、却つて好かつたかも知れない。さうしたら私はその女の人を辱かしめてゐたらう。而してそこから私は本當の甦生を經驗してゐたかも知れなかつたのだ。私は弱くもなり切れず、强くもなり切れ

ない本當の弱者だつたのだ。
私が札幌に歸つてからの悒鬱(いふうつ)は、すぐ森本君に氣付かれた。私は何もかも告白しなければならなかつた。森本君は義憤に等しい口氣で、私の心構へを責めてくれた。神の義を求める者が本當の愛をも感じない一人の女づれに、それ程心を傷められてゐては駄目だと云つて聞かせてくれた。私は心から自分の弱い性根を恥かしく思つた。而して行者のやうな心持で、更にこの險難の一路を經登(へのぼ)らうと決心した。
その頃私達は偶然の機會から、ブレイキーのリビングストン傳を手に入れて、二人でそれに讀み耽つた。かの阿弗利加の大探險家であり、博愛の火が燃え止まないやうな心を持つた雄々しい傳道者なる一人の英國人の業績は、どれ程私達の心を鞭ち勵ましたか知れなかつた。私達はこの偉人の生涯の委曲を深く究(きは)めようとして、圖書館の隅々を漁(あさ)つた。所がそこからリビングストンやスタンレーに關する數々の大部な書物が現はれ出た。札幌農學校の創立當時は、リビングストンが阿弗利加で活動してゐた頃だつたから、學校で教鞭を執つてゐた外國の傭(やとひ)教師達が、盛んにさうした書物を取り寄せて讀んだものと見える。其の後、誰からも顧みられずにそれらの書物は塵に埋もれて書架に列んでゐた。私達は寶石を土中から掘り起すやうにして、それらの書物を日光の射す所に持ち出して讀んだ。而して一つの大望を企てるやうになつた。それはそれ等の書物によつてリビングストンの傳を日本語で書いて見よう。而してそれを私達の札幌留學の記念にして、殘して行かうといふ事だつた。その夏の學年試驗などはいゝ加減にしておいて、二人はこの仕事に沒頭し始めた。私達の若い心は、この樂しい仕事の爲めに、殆んど凡ての事を忘れてしまつた。私達は又この仕事が、嚴肅なものである事も忘れまいとした。その夏私の家では祖母を失つた手傷から、少しでも早く癒える爲めに、一家を擧げて東北への旅に上つて、仙臺までやつて來た。東北へ旅程を向けたその目論見(もくろみ)の中には、私が家の人々と一緒になれる機會を作つてやらうと云ふ親切な心

持も、含められてゐたのだつた。父からも母からも、仙臺までは是非上つて來いと云ふ誘引の音信が來た。私の心は頻りに動いたけれども、私は强ひて自身を縛り付けるやうにして、札幌の地を離れなかつた。父母は私のこの頃の頑(かたくな)な態度を恐れもし、快(こゝろよ)くも思はなかつたやうだつた。

仕事は毎日面白い程進んだ。午前の間は互に擔當した書物を讀んでおいて、午後からは仕事場に集まつて、互に意見を戰はしながら、私が主もに筆を執つて文章を書いた。原稿用紙といふものを利用する事すら知らなかつた私達は、フールスキャップに橫書きにして、一枚々々原稿を書いて行つた。而して短い北方の夏が秋がゝつて來た時には、大體の仕事は片付いてゐた。

私達は札幌農學校を卒業する記念にするとてこのリビングストン傳の原稿を彼處此處の出版業者に賴んで見たが、引受けてくれる人がなかつた中に、警醒社が辛うじて承諾してくれた。表紙の圖案(第一版)、肖像の揮毫から地圖の製作迄私達の手一つで仕上げたこの書が活字になつて世に現はれた時は、さすがに胸に餘る滿足を感じた。

學校を卒業すると、森本君は仙臺の方の或る學校で敎鞭を執る事になり、私は一年志願兵となつて兵役に服した。私の中隊長は老功な大尉であつたが、その人は熱心な法華宗の信者で、私の基督敎信者であるのを聞き知ると、機會ある每に私を側に呼びつけて宗敎上の論議をしかけた。私も負けてゐなかつた。行軍などの時、隊の先頭に二人押し竝んで途々小むづかしい議論を大聲でやりながら步くのを他の兵士達が怪訝(けげん)な顏をして見る時もあつた。その中隊長の議論といふのは格別な影響を私に與へはしなかつたけれども、軍人の間にもこれだけ虛心で遙かに年下の靑二才と意見を戰はさうとする人もあるのかと私は好感を持つ事を禁じ得なかつた。それと共に軍隊生活といふものは私に色々な事を考へさせた。人間の社會的生活に軍隊の存在を必要としなければならないとは何んと云ふ皮肉だらう。何時でも人殺しが出來るぞといふ用意をしておいてゞなければ、人と人とが暮して行

けないとは何んと云ふ理不盡だらう。二人の人と人との間には大抵の事までは物を云へば理解の出來る世の中に、何故國と國との間にはそんな理解が不可能なのだらう。理窟を度外視して、命令一つで生命を捨てる覺悟をしてゐなければならない幾十萬人を××が莫大の費用をかけて養はなければならないとは不思議ではないか。私の中隊長は佛陀の弟子としてよくこの矛盾に堪へ得るものだと私は思つた。一年の訓練を經て軍隊を出た私は、益々××を厭ひ、何れの意味に於ても人と人とが殺し合ふ行爲を否定しようとするものになつてゐた。

明治三十六年の夏に私は渡米の途に上つた。その事を決行する動機の最大な原因は、これまで私の身邊に絡まつてゐた凡ての情實から離れて、本當に自分自身の考へで自分をまとめたいといふ心願だつた。偶然に私と同船して森本君も渡米した。其の船の中には三人の牧師も乘り込んでゐた。暢氣な船旅の間には私達はよく信仰上の話をしたものだつたが、私はいつでもその人達からは懸け離れた處にゐるのを思はせられた。財産といふ事に關して、國家といふ事に關して、宗教と藝術との交渉といふ事に關して、私はその人々の誰からも些の滿足するやうな斷定を受取る事が出來なかつた。その人達からは、私は基督教の皮を被る異教徒と見られてゐたらしかつた。而してそれは正しい觀察であつたかも知れない。私は遂に信仰を離れ去る人間となつてしまつたから。

米國での最初の一年間私の學んだ學校はクエカー宗の而かも正統派の機關だつた。そこでは宗教的色彩は極めて濃厚だつたといつていゝ。然し幸な事にはこの派には宗旨上の形式といふものは極めて自由だつた。毎週木曜日の午後の宗教的集會には、說教があるでもなく、讃美歌があるでもなく、信條の誦讀があるでもなく、會衆は唯默々として靜座するだけだつた。而して心の動いたものだけが或は跪いて祈り、立つて談つた。その數十分の靜座は私になつかしいものだつた。私はいつでも席末に獨座して勝手な事を思ひ耽つた。私は又學生中の宗教團體にも近づく機會を得た。然し私がその近附きから得た所は、團體員が習慣的に親切で善良であるといふ外の何

物でもなかつた。彼等は謂はゞ祖先の遺産によつて徒食する人々のやうだつた。彼等自身の中からは特に新しい力が生れ出てゐるとは考へられなかつた。唯そこの老校長だけは本當に信仰から鍛へ出されたやうな力を持つてゐた。私はその人に接する毎に何んとなく自分の身が省みられた。然し私の渡米の最大の目的が自分自身で考へる事にあつた故、私は敢へて人の心に觸れて見ようとは思はなかつた。一人住みの部屋を寄宿舍に與へられたのを幸ひに、私は自分だけの努力をして自分を見窮めようと勉めた。

その次の年に日露戰爭が故國で爆發した。故國で知らるゝよりも更に公平な綿密な新聞を綜合して、その戰爭の模樣を一面に想像しながら、一面に私の思索はこの大事件によつて一層緊張した。

「お前は本當の信仰上の變身を經驗してはゐない。」――是れがこの一年間に於ける私の思索の最後の斷案だつた。信仰を受け入れて以來私にはどれだけの變化が來たらう。私は私以上のもの、少くとも私以外のものであり得たらうか、私の持ち合せてゐた諸善根はその姿を變化してゐたらうか。私の血の中に潜んでゐた惡種は少しづつでも根こぎにされてゐたらうか。約言すれば、私は私以上の力を神から受けてその力によつて生活してゐるだらうか。その力が私の生活内容の全部を變化してゐないとするも、その力が段々私を變化させつゝあるのを意識する事が出來るだらうか。私は不幸にして之に否と答へるの外はなかつた。表面上私に起つた變化――それは確かに起つたとしても――は畢竟私の倫理的努力の結果に外ならなかつたのだ。十分小心で而して可なり負け惜みの強い私は、信仰を有すると自らも許し人にも思はれる所から、知らず〳〵自らに阿つて、信仰生活のやうなものを建立してはゐたけれども、容赦のない見性の結果からいふと、自分以外の超自然的な力によつて私が支配されてゐると感ずる事は自惚れにも出來なくなつて來た。私の持つてゐる善根は――若しありとすれば、それは生れたときから持つてゐた其の儘の善根だつた。何物も附け加へられてはゐなかつた。而して惡種の根も亦一つとし

て抜き去られてゐるのはなかつた。基督の言行から倫理の鞭撻を受けて自分の生活が向上してゐるのを悪いといふのではないが、それだけでは信仰の人といふ事は出來ぬ。基督の言行が生み出された其の力の源に私も冥合するのでなければ畢竟凡ての事は徒事だ。さう思はずにはゐられなくなつた。此の自覺は私に取つては恐ろしい打撃だつた。

學校が濟むと私は自分をもつと孤獨な處に連れ込む爲めに、夏の間或る瘋癲病院の看護夫となつた。そこで二箇月の間私は殆んど考へた。

一、私は宇宙の本體なる人格的の神と直接の交換をした事の絶無なのを知つた。

二、基督教の罪といふ觀念及び之に附隨する贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知つた。

第一は、私自身の經驗を容赦なく檢察した結果で理窟も何もない。第二に對しては幼稚ながら私の理性が承知出來なかつたのだ。人間に意志の自由が許されてゐない以上は罪の自覺に對する責任感も生じては來ない筈だ。責任感を持たせられる以上は、人間には神の力から全然獨立した働きがある筈だ。そんな事はあるべきではない。ないとすれば人間が所謂罪といはるべき行ひをした場合、その責任は何處にあるのだ。人にか、神にか。私が在る以上はその責任は勿論神になければならない。それなら何故の贖罪であるか。私の祖母が信じてゐた絶對他力ならその點は私にも呑みこめる。基督教の說く所のやうでは私にはそれが方便的であるか、中途半端であるとしか思はれない。こゝに虛僞がある。さう思つた。

三、未來觀に對して疑問を抱き出した。

現世の生活は未來世の生活の階梯に過ぎない。謂はゞ學校時代である。地上生活の尊さは未來世の生活に繫がれてゐるといふ自覺によつて始めて意味があるのだ。から基督教の敎理は敎へる。然し私自身の立場は全然之と

相違してゐる事を發見した。私に取つては現世の生活は現世の生活で十分だ。何等の不公平もなく何等の矛盾もない。私達がよく不公平とか矛盾とかいふ言葉で云ひ現はしてゐる生活の實狀は、寧ろ當然と云ふ言葉で置きかへられねばならぬものだと私は思つた。進化の途中に在る私達の生活の中には手違ひが生じたり、失策が起つたりするのは當然なのだ。不公平とか矛盾とか云ふ考へは自覺を有する者が甫めて發し得る言葉だが、苟くも眞に自覺を有するものが人生の不公平矛盾などと偉さうに云ひ切る事が出來るものだらうか。よしそれが出來るとしても、それを矯正すべき舞臺は現世にこそあれ、未來世にあつてはならぬ。自分が未來世で他に優れ神に慈まるべき境涯に到り得んが爲めに、現世でどれ程善根を積んでくれたとて、そんな他愛と稱する假面の下に隱れた利己主義に誰が感謝しようぞ。そんな方便的な材料に使はれる人生こそいゝ迷惑と云ふものだ。そんな目的で現世が動かされてゐる以上は、どんな善事が行はれても現世は墮落に墮落を重ねるばかりだらう。現世はやがて未來世の學校といふ資格すら失ひ去る程の虚僞に支配されるものになつて了ふだらう、現世に不公平と矛盾とがあるならそれから逃れる道は私達の欲望（もつと公平な調整された生活を得んとする）によつて人類生活の未來を改造する外に道はないのだ。出來るか出來ないか、そんな事は問題ではない。水に溺れるものは藁一條にでもすがりつく。人類生活には未來がある。眞に人類生活の缺陷を痛感する者は次の瞬間をよりよくしようと思ふ筈だ。人類生活からかけ離れた未來世に其の慰藉を求めようとするのは一寸濟度し難い程の陋劣卑賤なおべつか使ひだ。そんな人間は人類生活の裏切り者として一刻も早く此の世の生活から暇を取つて貰ふべき輩らだ。

　私は何等の不公平もなく何等の矛盾もないと云つた。この言葉は少し强過ぎて聞こえるかも知れない。然し本當に現在を正しく生きようとする人に取つてはそんな考へは起つて來まいと私は思ふのだ。それは弱い人間の事だからそんな考へに支配される瞬間の屢〻あるのは拒み得ない事だ。然し同時に私は考へて見なければならな

い。そんな考へに支配されてゐる時私は眞に正しく生きてゐるだらうかと。本當に私が正しく生きようとしてゐる時には世の中が難有過ぎて見える。不公平だとか矛盾だとかを歎ずるには自分が餘りに駄目である事を感ずる。自分を容れるには世の中が少しよく出來過ぎてゐるのを感ずる。これは少しでも正しく生きようと思ひ立つた人間の感ぜずにゐられない僞らざる眞實だ。本當な生き方をしようとすればする程、他人眼から見てその人の境遇がどれ程不公平で矛盾に滿ちてゐるらしいにしろ、その人に取つてはそんな境遇ですら十分に利用し盡してはゐないといふ憾みばかりが殘るだらう。極く概念的に見て世の中が不公平だとか矛盾に滿ちてゐるとかは云へるかも知れない。然しよく考へて見るとそれは噂に過ぎないのだ。さう私は思ふやうになつて來た。

四、日露戰爭によつて基督敎國民の裏面を見せられた。

日露戰爭の勃發と共に突然に起り來つた問題は基督敎國對異敎國のそれだつた。日本の敵に廻つた露國がその敵國なる日本に對して敵愾心を起したのは已むを得ない事であつたとしても、歐洲の他の國民も亦日本が異人種であり異敎徒であるといふ見地から一般に日本を嫉視したのは隱れもない事實だつた。それまでに行かない人々は、戰役といふ恐ろしい悲慘な事實を勝負事のやうに興味を持つて觀察してゐた。私の學んでゐた學校の同窓が日本の勝報を得る毎に投げてくれる賞讃はいゝが、その背後には小犬が大犬に勝つたのを面白がるやうな下心の潛むのを見て、私はこの上なく不愉快に思つた。唯一人のトルストイがゐた外には、基督敎國の人の心は荒野のやうであるのを見た。一體基督の血は彼等の何處に流れてゐるのだらう。基督の心は彼等の何處に通つてゐるのだらう。そこには現在の國家組織が基督の精神と根本的に相容れないか、基督の精神が更に所謂基督敎國民の中に生きてゐないか。彼等が基督の精神を體現してゐるとするなら、基督といふ人は如何に馬鹿らしい人間であつたか。この三つのいづれかを考へなければならないやうな不體裁を私は見せつけられた。先づ自分の安全が保障

されてゐるのを確かめた上で善事を行ふといふのなら、基督を待たずとも私は他の多くの哲學宗教の何れにも歸依して疚ましい所を見ないだらう。歐米の國家が國家として採用してゐる道德は異教國の道德とどれだけの差異があるだらう。私はさう疑つて見ないではゐられなくなつた。私は信奉者を見てその宗教の是非をする事の如何に不當なるかを知らないではない。然しながら同時によき樹はよき果を結ばねばならぬといふ事も教へられた。敵味方といふ關係を離れて耳を傾けさせる唯一人のトルストイ――それだけでいゝものだらうか。而かもそのトルストイは歐米の一般の信者達からは基督の精神を踏み違へた妄信者、耄碌爺として見られてゐる人ではないか。

私はこれ等の疑問を持たないではゐられなかつた。この疑問を抱いたまゝで私はその瘋癲病院を去り、ボストンに近い或る大學の大學院に這入つた。

瘋癲病院に於ける二箇月の苦役を終へてから、私は暫く費府の田舍に在る友達の百姓家で、親しみ多い家庭の歡待を受けて、稍ゝ心の暖かみを恢復してから再び身づくろひして新英州に向つた。

その頃森本君と僕との間には始終書信の往復があつた。森本君は一度瘋癲病院に訪れて來てくれた事もあつた。二人の間の書信の主題となつたものは主もに信仰上の事と戰爭の事とだつたと記憶してゐる。私は極端な非戰論を主張してゐた。又信仰に關しては絕えず懷疑の語を發してゐた。森本君の態度は私に比ぶればずつと書生論らしくない、理路の通つた、常識的のものだつた。私は實行の難易も辨へず、自分自身が矢面に立つてそれを斷行する勇氣も缺いてゐる癖に、唯我慢に自說を主張してゐたらしい。

新英州では私は不思議な米國人と共同生活をやつてゐた。彼は四十恰好の辯護士で、妙に善い事と惡い事とをちやんぽんにやる男だつた。家賃だとか出入商人の月末拂ひだとかは平氣で踏み倒して置きながら、貧乏な人

が訴訟沙汰でも起しに田舍から出て來ると、幾日でも自分の家に逗留させておいて、費用も取らずに世話をしてやつたりした。フエビヤン協會風の極く生温るい社會主義者で、同時にヘッケルの尊奉者だつた。私はよく其の人と勝手な議論をした。彼は亦私にホヰットマンを具體的に紹介してくれた一人だつた。私は其の前からこの詩人に就いて多少聞かされてはゐたが、その頃から始めてこの稀有な詩人に本當に親しむやうになつた。私は今でも彼に二つの事で感謝しなければならぬ。一つはホヰットマンの紹介者として。一つは善行惡行の通俗的な見方から私を解放してくれた事に於て。彼に接してから、人を善人とか惡人とかに片付けて見ないで、人として見るやうになつたから。

もう一つそこで私に或る力を與へてくれたものは金子喜一君だつた（彼は故人になつた。彼は優れた天分の人と云ふ事は出來なかつたらう。然し彼は確かに誠實でなくてはゐられない地上巡禮者の一人だつた。彼の生活は自らも云つた如く失敗であつたかも知れない。然し彼はその死まで勇ましく戰つた。暗いその生涯の中にきらつと光るものを少しでも殘して死んだ。歴史は永久に彼の存在を無視するだらう。沈默をして彼を葬らしめよ。それでいゝ。）彼は純粹な唯物的社會主義者だつた。而して私に其の方面の智識と熱情とを可なり潤澤に見せてくれた。それ迄の私は、家の境遇と云ひ、學校で受けた教育と云ひ、到底社會主義などを少しでも徹底的に考へて見る餘地を持つてゐなかつたので、かゝる主義や運動に關する知識は皆無だつたと云つていゝ。然し私は自分自身の經驗や基督教の與へる暗示から考へて、現代の生活には確かに何處か根本的に大きな缺陷のある事だけは朧ろげながら感じてゐたのであつた。そこに金子君がやつて來た。それから私は少しばかり其の方面の書物も漁り其の主義の人達の集會にも出席した。又唯物主義と云ふやうなものも世間が想像するやうに淺薄な所から出發してゐるものではない事を確かめる事が出來た。少數者の手から幸福を多數者に分つやうにする爲めには、實際方面

に於て社會主義が主張せられ、思索方面で唯物主義が主張されるのは無理のない事だと思ふやうになつた。現在のやうな貧富の懸隔、従つて幸福の偏頗が近代の經濟組織に胚胎されてゐるのが多いのを思へば、それを維持すべく立てられた道德は經濟組織の變革と共に一旦根本的に覆へされなければならないのは當然の事であるのだ。唯物的哲學は、その要求が產み出した一つの大きな產物と云はなければならない。假令その成立の動機に科學の誤られたる解釋が混入してゐるにせよ、又反抗的な氣分が漲つてゐるにせよ、その後ろには切迫した人類の意志が働いてゐるのを見逃す事が出來なかつた。基督教の教へる倫理の中には、この徹底的な所がないと私は思ふやうになつた。プロテスタントの基督教はこの人類の意志を十分に咀嚼してゐないと思ふやうになつた。その教へる倫理は耳にすべく美しい。然しその實行といふ事になると不可能事が要求されてはゐないか。例へば財產は神の所有だと云ふ。富者は神からその財產を最善に使用するやうな委託を受けたものだと云ふ。若し富者は此の信念さへあれば、財產は最も理想的にその働きを働き得べき筈だと云ふ。然し資產階級が富を生產し增殖する爲めには、無資產階級卽ち勞働者に倚頼しなければならぬ、假令そこにどれ程手心を加へて見ても、勞働者と資產家との利害はその終極に於て一致してはゐない。財產が純粹に精神的に取扱はれる爲めには、さう取扱はれるやうな狀態が成立しなければならない。その狀態を矛盾したまゝにしておいて、卽ち利害の相反した二階級の儼存を放置しておいて、如何に財產の處分に精神的な要求を强ひたと云つても、さうなると思ふのは無理だ。財產を處理する位置に在る人は或はその餘裕から寛大な公平な心になる事があるかも知れない。金持が天國に入るのは駱駝が針の目を潜るより難事だと云つてゐるから、基督すら貧富の懸隔がどれ程信仰の妨げになるかを知つてをられたのだらうけれども、假りに今の說教者が云ふやうに、富者が神の心を心とする事が出來たとする。而してそれは或は出來ない事ではないかも知れない。寛大な生活は屢ゝ寛大な心を造り出すから。然しながら勞働者——寛

大な富者の恩惠にあづかる者——全體はどうして平氣でそれを受けて平氣で神に感謝してゐる事が出來よう。富者が富者たる資格を損しないだけの生活をして、その生活費を差引いた殘りから、貧者に分たれた金を、假令それにどれ程難有い祝福の言葉が景物として添へられてゐたにしても、神が無代價で與へる空氣や水と同樣な心持で受取る事が出來るものか出來ないものか、それは少しばかりの常識が容易に判斷し得る所だ。私の若い友人の一人がプロテスタント教の道德は資本主義の道德だと呼んだその言葉は、確かに打つべき金砧を打つてゐると私は思つた。今行はれてゐる基督教ならば——而して信仰ある人々はさうだと斷言してゐる——私はその信徒たる事を考へ直さねばならぬと思ふやうになつた。基督は財產の私有を嚴禁してをられたと私には見える。基督によく似た聖フランシスの實行しようとした所もさうであつたと私には見える。若しさうだとすると私はその方面からも——私の無力と怯懦の爲めに——基督の信徒たる名簿から自分の名を除かねばならぬ。さうも考へた。

かうして、今の基督教に對する私の疑惑は段々深まつて行つた。私には悒鬱（いふうつ）な日が增して來た。

インガソールの淺薄ながら、熱烈な、人情的な言論を私は屢々涙を以て讀むやうになつた。健康な親愛な家庭の團欒（だんらん）する圍爐裡（ゐろり）は聖壇だ。その火は神火だ。そこに最大の幸福を見出す外に天國はない。地獄といふ言葉に增さつて人生を暗くするものはない。その責は基督教にある。かう彼が叫ぶ時に、私の心は強く共鳴した。當時の基督教徒に背信悖德（はいとく）の巨魁と迫害されて陋巷（ろうかう）で窮死したトーマス・ペインの爲めに、椽大の筆を揮つて雪辱の文章を書き、若し自分の探り出した事實が誤謬で、聊かでも基督教徒を誣（し）ふるものであるのを發見したら多額の財產を提供するとまで叫んで、正義派を以て任ずる基督教徒の頭上に大きな針を打ち込んだのを見ると、私はこの義擧に雙手を擧げようとした。ゴルキーが（國法が許さない爲めに）正式の結婚式を擧げない女優を伴つて米國に來た時、尊敬すべき紐育、莫斯頓（ボストン）等の市民達が口を揃へて氏を排斥した。それを見ても私は非常に不快に思つた。

こんな煩悶や懊惱の中に一年は過ぎた。辯護士との共同生活で、僅かばかりの學資を親許から貰つたゞけで過して來た私は、その夏休暇を勞働で過さうと思つて或る片田舍の農家に傭はれる事となつた。私はそこで確かに普通の勞働者だけの勞働を本氣でやつた。然し悲しい事には、私は弱かつた。自分の家には、財產があるといふその心持を、實行的に去勢する勇氣がなかつた。それ故私は自分の勞働で如何に油のやうな汗を流して見ても、結局それは飯事に終つてしまつた。夏の終りに私は自分に可なり愛想を盡かしながらその農場を出た。

次の一年をどうして暮さうかと自分は思ひ煩つた。過去の一年に大學で聞いた宗教史の講義などは二度と繰返す氣にはどうしてもなれなかつた。日曜每に大學のチャペルに招聘する大說敎家の說敎も、私に一時的な興奮を煽動するに過ぎなくなつた。私は元來藝術に對して心からの憧憬を持つてゐた。自分でそれに沒頭したい要求は十二分に持ちながら、一つは自分の力量を疑つたのと、一つは純藝術と基督敎との間には橫切る事の出來ない鴻溝があると思つたので（私はその頃藝術遊戲說を考へてゐた。藝術といふものは何んと云つても生活の餘裕が生み出すものだと思つてゐた。神の道を步まんとするものにそんな暢氣な餘裕があつてはならない、さう私は思つた）、私は何んでもかんでもこの衝動を抑制する事に全力を用ゐてゐた。然し私はもう我慢が出來なくなつた。破戒僧のやうな稍ゝ捨鉢な心持で、次の一年は文學に這入り込んで見ようと決心した。一種絕望的な氣分になつてゐた。

で、三年目の秋に私は華盛頓府に下つてそこの國會附屬圖書館に通ふ事にした。丁度其の頃森本君は自活の必要から取りかゝつた講演旅行からうまく行き出したので、學校の方を休んで專心その仕事に從事する事になつたので、二人は久し振りで一つ下宿屋に起臥するやうになつた。森本君の信仰は少しも動かなかつたが、その頃は實際方面の活動の爲めに大分緩漫になつてゐたやうに思ふ。從つて二人は前のやうに無氣になつて、宗敎論を戰は

す事はなくなつてしまつた。私は結局それが面倒でなくつていゝと思つた。而して毎日圖書館に通つて、餓ゑた者のやうに、讀みたいと思ふ文學書を順序もなく系統もなく、興味を便りに片端から耽讀した。私は忽ちにして自分といふものが――是れまで外界の因緣の爲めに四分五裂してゐた自分といふものが寄せ集められて自分に歸つて來るのを感じ出した。藝術に對する私の觀念が見る〳〵變つて來た。神の信仰の中に見出し得なかつた本當の自分の姿を人間らしく文豪の作物の中に見出すのを知つた。殊にトルストイは私に眞實な人間性とその生活とを啓示してくれた。トルストイの考察の結果に同意する事は出來なかつたが（そんな事が出來たら人間はお仕舞ひだ）、彼によつて人間の態度といふものを暗示された。イブセンもクロポトキンも違つた意味で私に存分の糧を供してくれた。讀み返した聖書は殊に私に數限りのない暗示だつた。私は無我夢中で自分といふ迷路を處嫌はず歩きまはつた。そこに或る他人に關する戀愛事件が突發して、それに心身を惱ましたのと、滅茶苦茶な勉强とが原因となつて、可なりひどい神經衰弱に陷つてしまつた。而して華盛頓を逃れてその近郊の百姓家に寄寓した。そこでのやゝ四箇月は私に靜思の餘裕を與へてくれたやうだつた。私は半日づゝ圖書館に通つて、半日は、遊ぶでもなく考へるでもなく暮した。而して米國に渡つてから三年目の終り、歐洲に旅立つ前に、一人の文學愛好者として、教員でもして一生を過さうといふ決心をした。それは悲しい諦めだつたが、私は貧しい頭腦の自分自らが文學者にならうといふやうな決心にはどうしてもなれなかつたのだ。

趣味と創見とに富んだ弟の生馬と共にした歐洲旅行の半年、それは私には永く忘れることの出來ない樂しい觀光の半年だつた。藝術家としての生馬の性格には、私のやうに淸敎徒的な矛盾の半面がない。從つて二人は問題がその點に行くと、互々の間に存分の理解が成立しなかつた。然しそれは私には却つていゝ事だつた。實際を云ふと私はその點に手荒く觸れられるのを恐れてゐたから。

三年半の遊學が濟んで私は日本に歸つた。明治四十年の三月の事だ。而して翌年の一月には既に札幌農科大學になつた母校の一教師として、淋しい雪國の雪の中に埋もれに行つた。その町で私の過去を知つてゐる人達は私を元のまゝの熱心な基督敎徒として迎へ入れてくれた。私はすぐ私が信徒として誕生した教會に送り込まれた。そこの日曜學校の校長にまでなつた。

その翌年の三月に私は妻を迎へた。此の一文は私の告白文だ。讀者の不快を犯しても私はありのまゝを云つて退けねばならぬ。私はこの告白文の初めの方で、自分の性慾と信仰との間に始終苦しんだと書いてゐる。この苦しみはこの場合になつても私には膠着(こうちやく)してゐた。私は極端な一種の潔癖性と、自分を戀人に與へるまでは、肉體を愛のない女に與へまいとする欲求と、自分の肉の要求の爲めに多かれ少かれ婦人を犧牲に供するのを畏れる心とから、三十一歳になるまでの肉的の關係では童貞を守り通して來た。然しそれは私が性的に潔白であつたと云ふ證明にはならない。世の信仰を持つてゐる人達はこの問題をどう解釋してゐるのか私は知らない。靈的生活に這入り得ると肉の要求を容易に退け得るものなのかも知れない。私は自分が信仰を得たと思つてゐた時でも、實際は信仰を得てゐなかつた故でもあらう、常に〳〵肉の要求に打ち負けてゐたと云ふ事を告白せねばならぬ。實際に婦人を犯さなかつた私も、心の中では常に婦人を犯してゐた。而してこの內部の葛藤に苦しめられ通した。私の敎へられたやうな信仰から云ふと、夫婦の間の××といふ事にも不自然が感ぜられた。人間の信仰が緊張すれば緊張する程靈的になると云ふのが眞ならば、夫婦の關係も肉を離れて成り立つのが理想的ではないのだらうか。靈によつて肉までが淸められるといふやうな事は一種のソピステリーと云はなければならない。靈に滿足し得た人が更に肉の滿足を求める必要が何處にある。若し信仰を持つた夫婦の間に肉の交渉を許容する理由があるとすれば、それは子孫を設けるといふ實利的な意味に於てのみ許さるべき事だ。

婚約の期間私は妻に對して純粋な靈的な考へ方をする事が出來た。今までの私の荒んだ肉慾の要求は不思議にも戀人を得てから影を潛めるやうにさへ見えた。半年の餘に亙る期間を私は無邪氣な子供のやうな清い心で過すことが出來た。物心を知つてから私はこの時位性慾を淨化し得た事はなかつた。この調子なら私は苦しい信仰との葛藤から一つ救はれる事が出來るかとさへ思つた。本當の信仰は持つてゐないと斷念した私ではあつたけれども、その信仰に至る種々な障碍物を取り除く事によつて、或は信仰に至り得るかも知れないと一縷の期待を持つてゐたので、この不思議な性慾の淨化は非常に心強く思はれるものだつた。かくて婚約の期間私と妻とが往復した手紙の中には、屢々信仰の事や清淨な生活の事やが熱心に書き綴られてゐた。

然し結婚は凡てを見事に破壞してしまつた。私達は結局天下晴れて肉の樂しみを漁るために、當然それが實現さるべき或る期間を、お預けをさせられた犬のやうに辛抱強く素直であつた事を覺らねばならなかつた。私達は子孫を設ける爲めに、祭壇に捧げ物をするやうな心持で夫婦の交りをしたか。私は斷じて否と答へなければならない。この切實な實際の經驗が私のやうな遲鈍な頭にも純靈的といふやうな言葉の內容の空虛と虛僞とを十分に示してくれる結果になつた。私は苦しんだ。何んとかしてこんな墮落した考へ(その時私はさう思つてゐた)から自分を救ふ爲めに出來るだけの事をして見ようとさへした。私は半年程妻から離れても見た。然しそんな事は結局一時的で何んにもならない事を知つた。保羅が人に勸めて「若し出來るなら人は結婚しない方がいゝ。然し結婚しないでは結婚した以上の墮落に陷るだらうから、そんな人は結婚するがいゝ」と云つた言葉は私の癪に障る言葉だつた。保羅のやうに基督教を肉から全然切り放して偏靈的にしてしまつた人(基督が始めてその奇蹟なるものを行つたのはカナの婚筵であつた。而かもその奇蹟といふのは、葡萄酒が足らなくなつたのを見て、更に潤澤に葡萄酒を供給して饗宴の興を助けたのだつた。その酒にはアルコールがどうのかうのといふやうな議論は

末の話だ、聖書をそのまゝ信じようとする人はこの事を平らかな心で考へて見るがいゝと思ふ。それは保維の馬鹿々々しい偏靈主義とは隨分かけ隔たつたものに私には思へる）から云へば、それは一種の權謀として成り立つ言葉かも知れない。が、そんなに信仰の弱者あつかひ、片輪者あつかひにされて、保維から見て眞正の基督教徒たらむには第二義第三義に墮落した結婚生活を平氣でしながら、自分達は信者であると恬然としてゐるのが、私には如何にしても情けなく癪にさはつたのだ。

結婚生活に這入つてから私は益々神聖な教會へは出席する事が出來なくなつた。私の性質は元來鈍重だから自分の造つた境遇から脫け出る事は容易にしない方で、米國にゐる時信仰から離れながら、札幌に來ても矢張り信者として通つてゐて、基督教の攻擊をする若い學者などに遇ふと頻りに其の辯證に勉めたりなどしてゐたが、愈愈自分を明らかにすべき時が來たのを抑へつけても〳〵感ずるやうになつたので、ある春私は森本君にも相談せず、妻にも告げずに、突然一枚の退會屆を私の靈の誕生地なる獨立教會に送る事にした。そこには小さいながら人々の間に驚愕が起つたやうだつた。妻は私には默つて何んにも云はなかつたが非常に不安を感じたらしかつた。森本君はかうなると私の頑固なのを知つてゐるから特別に私の背信を責めるやうな事もしなかつた。然し内村先生が札幌に來られた時、私の親友達は私を先生の前に招いて、私の立場を明かにし、内村先生の意見をも聞くやうにと斡旋してくれた。私は先生には何んと云つても敬服してゐた。で、私はその場で思ふ所を云つたのみならず、可なり長い手紙を書いて、自分の現狀を報告し、併せて先生の言論から間接ながら私が潤澤に被つた恩顧に感謝する微衷を述べた。先生は「それではまあ君の思ふ通りやつて見るがいゝだらう。」と云はれた。さう云はれた時の先生の淋しげな顏を私は今でも忘れる事が出來ない。

私はかうして信仰から離れてしまつたのだ。それからの私は精神的に孤獨なものとなつた。三十四歲で私は元

の嬰兒になつた。而してその時私は始めて自分の眼を裏返して自分といふものを見るやうになつたのだ。私が自分の眼で自分を見たのはこの時が始めてだ。檻から投げだされた野獸のやうに私にどうしていゝか解らなかつた。私は好んで自分の尊敬する先輩から離れて立つた。淋しいけれども、一度莫大の代償を拂つて自由になつた身を他人の感化の下に置くに忍びなかつたのだ。と云つて私は自分自身を律すべき法則を見出してはゐなかつた。私の心は放埒になつた。不幸か幸か外部的な實行力の極めて薄弱な私はこれと云つて目立つた亂行はしなかつたけれども、心の混亂はひどいものだつた。妻を、愛する妻を持つ身でありながら、或る人妻に思ひを寄せるやうな亂雜な心になつてしまつてゐた。その人妻も私の顏付から私の心を知つたに違ひなかつた。而して危い機會が屢〻亂暴な私の熱意を煽つた。然し幸にして私は纔かに踏み止まつた。私は神も信ずる事が出來ず、人も信ずる事が出來ず、自分も信ずる事が出來なくなつた。私は何んの爲めに生きるのだ。世の爲めに生きるのか自分の爲めに生きるのか。私共の生活の基調は何處にあるのか、何處に据ゑられなければならないのか。それがどうしても解らなくなつた。教室での仕事もいやになつた。

大正三年の秋に妻は死病に取りつかれた。私達一家族は雪國の寒さに追ひ立てられて東京に遁れて來た。病氣になつて見ると、妻といふものが私にははつきりと考へられ出した。然しその時はもう遲い。妻は大正五年の夏に死んでしまつた。その冬には父が死んだ。

この二つの事變は私には大轉機だつた。何時までもいゝ加減に自分をごまかしてゐられないと思つた。私は思ひ切つて自分を主にする生活に這入るやうになつた。もう義理もへちまもない。私は私自身を一番大切にしよう、一番可愛がらう。私は私を一番優れた立派なものに仕立て上げる事に全力を盡さう、さうしつかり腹を決めてしまつた。その後の私の生活は、失敗にせよ、成功にせよ、この一念で貫かれてゐる。

靈とか肉とか云ふ區別はない。その代りに私と云ふものがある。未來世は有るか無いか知らない。然が私が寢食し呼吸する現在がこゝにある。私は世間をかねたり、自分を疑つたりして生活の廻り道をしてゐられなくなつた。力があるかないかはやつて見なければ分らない事だ。私は凡てを擲つて子供の時からの唯一つの欲求だつた藝術の世界に飛び込んだ。私のこれからの生活は私の藝術を、卽ち私の自己を完成する爲めに用ゐられねばならぬ。藝術は私の餘裕が考へ出す遊戯ではもうなくなつた。それは私の生活そのものだ。私は金錢の事にかけては一種の低能者だ。然し父親が造つて行つた財産は可なり預かつてゐる。而して何一つ不自由のない實生活をやつてゐる。ラスキンが父の遺産の爲めに自分の思ふ通りの道を物質的に妨げられる事なく進む事が出來たのを心から亡父に感謝したといふ心持は私にもよく解る。然し私はそれだけではまだ心が痛い。低能でも何んでも自分の仕事で自分だけが食ふやうな境遇に身を置かなければ私は自分自身にすまない。この時機が何時か來る事を私は自分自身に約束しておく。その時私はどれ程すがすがしくなるだらう。

私が自己に立ち歸つてから後の感想は、斷片的ではあるが、時々種々な雜誌に發表した。同時に藝術といふものに對する考へも發表しておいた。物好きな讀者は倂せて讀んで頂きたい。その中に私は私の考へを『惜みなく愛は奪ふ』といふ標題の下に、まとめて一冊の書物とする積りである。今の私の態度を委しく說明する事はその書物に讓る事にする。

將來私が超人間的な信仰の對象を摑む事が出來て、再び信仰の生活に這入るやうな時機が來るかも知れない。その時機が來るとしても、その時機を最も早く而して確實に迎へ得る準備は、今の私の態度が最上の態度だと私だけは信じてゐる。兎にも角にも今の私には今の私があるやうにほかありやうがない。

リビングストン傳を讀み返して私が恥かしさに堪へないのは、私が心にもない大言壯語を放つてゐる事だ。そ

の時は假令信仰あるものと自分を思つて、眞面目に筆を執つたのだつたとは云へ、今にして私は自分の輕率に悯れ返る。どうぞそれを許していたゞきたい。而してこの書を讀む方は、凡ての教訓をリビングストン自身から學んでいたゞきたい。

終りに臨んでもう一言を添へる。昔の私の信仰の友の中には、今でも私の爲めに熱實な祈りをして下さる人のあるのを聞かされる。その祈りを私は信ずる事が出來ない。然しその祈りを祈るやさしい心を私はしみ〴〵難有く感ずる。それは私を引き上げる。私の心を明るくする。少くともあなた方と私とは信仰で結ばれずとも心で結ばれてゐる。それだけで今は滿足して下さい。更に又私は私の信仰生活時代の凡ての先輩朋友に對して私の訣別と感謝の挨拶を謹んで送りたいと思ふ。

これから獨りで出懸けます。左樣なら。

一九一九年三月二十二日

――第五版の序――

私がこの書の第四版に序言を書いたについて、リビングストンの生涯とは何等の交渉もない冗長な文句を長々と添へたのは、その所を得てゐないと云ふ非難を諸方から受けなければならなかつた。それは私の主意が十分に徹底しないから起ることではないかと思ふから更に一言を附記する。

私がこの傳記を公けにした時、私には勿論リビングストンと云ふ偉大な人物の性行を世に紹介したいと云ふ動機もあつたけれども、同時にリビングストンを通して私自身の信仰を世に傳へたいと云ふ動機も小さなものではなかつた。今でも私はリビングストンは傳へたい。然し私には傳ふべき信仰はない。第一の意味からは此の書を

重版すべき理由がある。第二の意味からは其の後私の信仰が如何に變化したかを明らかにして置く責任と必要とがある。

私は信仰を有たないからと云つて信仰ある人を輕蔑はしない。今の私は信仰の內容に對して無知だ。私は他人の所有物の內容に無知でありながらそれを輕蔑するやうな事はしない積りだ。だから無信仰なる私が信仰を有するリビングストンを傳へると云ふ事に矛盾はないと思つてゐる。

加之この書は森本君との共著だ。重版の時何故お前の名だけ除かなかつたかと云ふ非難もあるかも知れないが、私の名を除く位ならこの書は絕版されるのが至當だと思ふ。森本君は私が名を除くのを好まないに違ひない。私は又私でこの書の長短何れに對しても自分の名を殘して森本君と責任を分つのが至當だと思つてゐる。これが無信仰なる私がこの書物から自分の名を除かない理由である。

私は私の心持がこの小序で正しく理解されるやうにと希つてゐる。私には上に述べた理由以外にあの序文を附した事に何等の野心もなく底意もない。

第四版序言に關して諸種の雜誌新聞が加へた主要な批評を卷末に附しておく。殊に基督敎の機關刊行物が與へて下さつた批評は、今日の基督敎界が一つの思想をどれ程の關心を以て取扱つてゐるかを證據立てるものとして、私が特に後日の爲めに保存しておきたいと思ふ所のものだ。

最後に私の長序を收錄した事によつて、警醒社が受けた非難に對して、賴まれもせぬに一言しておく。警醒社が私の長序の內容を首肯してゐるかどうかを私は知らない。けれどもそれが誠實な心持で書かれたものであると認めてくれたのだ。誠實な思索を上梓する事は書肆としての名譽を寸毫も毀損するものではない。

一九一九・九・二四夜

題言

魂の醜さを凝視してその傳習的な魂の概念の後ろに潜む本體の實質を恐れなく見透すべき勇氣の缺乏が人の子を驅つて永遠の漂浪に赴かせた魔の杖ではないか。

（大正八年七月、「中央文學」題言）

「或る女」（前編）書後

創作を一切他の刊行物に發表しない事にしたので、この著作集はいはゞ私の個人不定期雜誌といふやうな譯になります。で、この稈から私一個の消息をこゝに添へて讀者諸君との連絡を取らうと思ひます。

「或る女」は發行が思つたより非常におくれました。其の責めは全く私にあります。既に半分は書き上げて發表したものだから、書き直す位は何んでもないと思つてゐましたが、實際やつて見てそれは創作をする以上に骨の折れるものだといふ事を發見しました。隨分多くの箇所を全然書き直したり訂正したりしました。元來は仕舞まで書いてしまつて一冊にして出す手筈でしたが、前編だけで今までかゝつてしまひましたから、後編は別冊にして出す事に叢文閣に頼んでやうやく承諾して貰ひました。書物の出版なぞを滅多に友達に頼むものではありません。作者よりも出版者の方が無氣になつて責め立てるのですから閉口してゐます。後編は來月一ぱいに書き終へよとの嚴命を受けてゐますが、それはさうは行かないと思ひます。但し安受合ひに受合つておきましたが。

然しこの小說は前編丈では何にもなりません。而して前編は何といつても十年も前に發表したものですから、今から見るとどれ程訂正して見ても物足らないと思はれてなりません。後編で十分纏めて見たいと思つてゐます。

「小さき者へ」を出してから私は大抵東京で暮しました。正月の三日から四五日風邪で寢ました。家族は母も私の子供三人も熱海の方に避寒してゐるので、私はがらんとした家に禪僧のやうに暮しました。子供が達者で生きてゐる事さへ確められゝば私にはかうした生活も嬉しいのです。この間福士幸次郎君に「自分の仕事を本當に持つて見ると偶には子供位犧牲にしてもいゝと思ふ」といつて叱られました。

一月の五日に松井須磨子氏と命尾壽六先生とが死亡しました。松井氏は私の「死とその前後」の女主人公を試演してくれたので私には記憶さるべき人になりました。命尾先生は謠曲の先生ですが、この人は私が持つ僅少の知己の中で非常に優れた天分の人だつたと思ひます。簡單な感想を「我等」の二月號に書いておきました。

二月の九日と十日に木田金次郎氏の習作品展覽會を弟の畫室で開きました。木田氏とは「生れ出づる惱み」の主人公のモデルにした青年漁夫です。三十六枚ほど作品がありましたが、初日には五十人、二日目には七十五人見に來て下さる方があつて、實に心持のいゝ會が出來ました。見た方は皆木田氏の自然の見方の忠實さと敬虔さとに感心しました。作品も大分賣れたので、木田氏が今年の目論見としてゐる油繪の材料位の費用にはなるかと思つて喜んでゐます。批評家でない純粹の讀者から私の作品に對する遠慮のない忠言を伺ひたいと思ひます。創作をする事のみが喜びであり樂しみである一人の作者に取つては、讀者からの反響ほど嬉しいものはありません。唯――勝手ですが、長時間の御訪問はお許し下さい。私はもつとつきつめた仕事をしたいと思ひますから。

「或る女」前編には風俗を亂すといふ名義で問題になりはしないかといふ箇所がありましたから、豫め內務省の圖書課長の横山氏の意見を求めた所が、横山氏は丁寧に見て下さつて、役所に廻つたら屹度問題になるといふ箇所がありましたから遺憾ながら全部割愛しました。圖書檢閱の機關がある以上は據ない事だと思ひましたから。横山氏のお話では文學書に對する檢閱機關の設けられてゐる國は、革命前の露西亞と歐羅巴諸國が所有する植民地だけださうです。作者も讀者も心得てゐて然るべき事だと思ひます。

「東方時論」に二號から續いて「リビングストン傳の後に」といふ一文を揭げてゐます。これは私が宗教から放れた告白です。

（一九一九年二月十七日）

「或る女」(後編)書後

相變らず愚圖々々してゐたけれども、もうどうしても餘裕がなくなつたので、私は四月の一日から、圓覺寺の塔頭の一つの松嶺院といふ無住の寺に引籠りました。本氣に作物をしようとなるとどうしても住ひ慣れた自家では出來ないのが惡い習慣です。家族の者達が身近にゐて、縱令何等の世話を燒いてくれないでも、どの位捗取つたらうなどと考へてゐてくれるなと思ふと、もう私はそれが氣懸りで思ふやうに筆を運ばす事が出來なくなるのです。札幌で教師をしてゐた頃も、よく學校を休んで市內の旅館に泊りこんで筆を取つたものです。翌日知らん顏をして學校に出ると、狹い田舍町の事とて、新聞の消息欄の中に「有島武郎氏〇〇館止宿」などと出てゐるのを發見した事などを思ひ出します。

松嶺院では階下にも廣い座敷がいくつもありましたが、若し止宿者が來た時お互に迷惑になつてはいけないと思つて、孤立した二階の二間を借りました。本當に疊や襖は汚れてゐて、天井は頭が支へる程低く、日光とては一日の間殆んど這入らないやうな所でしたけれども仕事は可なり出來ました。新聞は全く見ませんでした。一週間に一度か二度可なりゆつくり休養した外には、殆んど矻々として机の前にばかりゐました。机の上の小さな一輪挿しには椿、さつき、菜の花、海棠、山吹、薔薇といふ順序に花が挿されて、最後の薔薇が花を開き切らない中にそこを去るやうになりました。實際春の移り變りはこの二十日の間に可なり落ち付いた心で眺める事が出來ました。私はこれを副收穫として嬉しく思つてゐます。始めの中は留守居の坊さんもゐないので、大きな建物の中にはたつた一人で住んでゐました。この生活の委細はその中「雜信一束」で「我等」に寄稿したいと思つてゐ

ます。原稿は一日平均十八枚を書いた事になります。一番澤山枚數を書いた日が三十枚です。それを書いて夜の十一時頃になると、我慢にも頭が働かなくなつてしまひます。二日か三日働くのなら一日にもつと書けるかも知れませんが、十日以上も續けて仕事をしてゐると一日三十枚が最大限だと云ふ事を知りました。

二十二日に東京に歸ると慌てゝ京都の同志社に於ける講演旅行の準備に取りかゝりました。而して二十七日に東京を發ちました。完成しない「或る女」の續稿の一部分も荷物の中に這入つてゐました。同志社でも「藝術論」の去年の續きとホヰットマンを講じてゐます。

ホヰットマンと云へば、今年が丁度誕生から百年に當る故かも知れないけれども、にはかに流行し出したやうです。しかも私のやうなものがこの詩人の研究者として權威あるものゝ一人であるかの如くに或る人々から思はれてゐるのは困つたものです。こんな事には何處にでもあるか知らないが、線香花火のやうな輕率な流行は實際何よりもいやな氣がします。私なんかゞホヰットマン研究者の代表的な一人として見られるといふ事などは、日本の思想界の輕佻さを裏書きしたものと云はなければなりません。私が僭越にもこの詩人を同志社の講演の題目に選んだのは、何も私がその學者だからといふ譯ではないのです。同志社の講壇には最初から私は學者として立つてはゐないのです。たゞ一個の作家として立つてゐるのです。作家が自分を築き上げる上にホヰットマンから受けた所を、秩序も研究もなく雜然と披瀝してゐるのに過ぎないのです。

同志社講演の暇を盜んで、一昨日から私は鳥羽離宮の遺址なる京都城南の北向不動堂の方丈の一室を借りて、「或る女」の殘りを書き上げました。朝夕二度の精進の食事と、晝にはパンと牛乳とで働きました。境遇は圓覺寺ほど幽邃ではありませんが、それでも兎に角仕事は終へました。電報までよこして催促してゐる足助に早くこの稿をこれから送ります。今日はこれから京都に歸つて、明日は匆々神戸の方に行かなければなりません。

京都の春はもう過ぎました。こゝでは蚊帳を吊つて寢ました。菜種畑は結實でたわゝになつてゐます。風が吹くて椎の木から去年の葉が留度なく散り飛んでゐます。交尾期にあるかとんぼが部屋の中に幾匹も飛び込んで來ます。晝中は蟬が鳴き出してゐます。袷を着てゐた私は暑さに堪へずに單衣を着て經机に向つてゐます。

讀者諸君から「或る女」前編に對する感想を十數通受取りました。御返事をし漏れた向きもあると思ひますからこゝで感謝の意を表します。

この八月には差支へがなかつたら子供達と一緒に北海道の方に旅をして見たいと思つてゐます。子供は三人とも札幌で生れました。彼等は五年振りで自分の生れ故鄕を見舞はうとするのです。

寫眞版は私が籠つてゐた圓覺寺の松嶺院です。

最後に附加へて云つておきたいのは、この小說にはモデルがあつて、それは或る文學者とその先妻にあたる人とが用ゐられてゐると云ふ或る一部の人達の評判です。それはさうに違ひありません。然しそれは事件の極く輪郭だけからヒントを得たので、性格などは全然私が創作したものです。殊に後半の女主人公や事務長の關係は全然無根だと云つていゝのです。だからこの作物は全く私の實感の延長だとして讀んでいたゞきます。モデルに累を及ぼしたくないから一言します。

一九一九年五月十一日

「三部曲」書後

八月には子供達三人と一緒に北海道の旅を十六七日して來ました。子供達は大正三年にそこを去つてから今度が始めてゞす。長男だけは夢の斷片のやうに病める母と共に札幌を去つた時の記憶を持つてゐますが、下の二人は何事も知つてゐません。生地に行くと同樣です。津輕海峽を行く汽船も彼等には珍らしいものでした。札幌では舊知の諸君が私達に思ひもかけない好意を示してくれました。殊に森本の家族は殆んど每日私達の爲めに時間の全部を割いてくれました。私が書生であつた頃荷物を肩に背負つて雪鞋を履いて七里の道を徒步で行つた定山溪の溫泉場まで鐵道の通じてゐるのなぞも、私には色々な事を思はせる種でした。私達は一日そこにも遊びました。歸途には狩太にある農場に立ち寄つて三日程を過しましたが、その三日に亙る鬱陶しい雨の一日を岩内からK君が訪ねて來てくれました。K君は「生れ出づる惱み」のモデルにした青年漁夫です。新たに試みた二枚の油繪を持つて見せてくれました。又S君と云ふ新聞に關係してゐる人も見えました。その人の經て來そ苦しい生活經驗の話もかゝる所では珍らしいものでした。冬が去らうとする頃、根室の海岸に沿ふ砂丘の上に登つて、靜かに降りそゝぐ雨の中に耳をそばだてゝゐると、海面に張りつめた氷の破れ目が裂けて沖の方に流れ出す時、泣くとも、おめくとも、笑ふとも、訴へるともない一種の聲が汀に充ち滿ちる事などを語られて、その地方を背景にした創作の事などを思ひ耽りました。函館を船で發つ朝は物凄まじい暴風でしたが、船が出ると幸にも風が變つて、疊の上にゐるやうな凪ぎになり、子供達が一人も難儀をしなかつたのは仕合せでした。この集に挿んだ寫眞は歸航の汽船の最上甲板の上で、日を浴びながら立つ三人を寫したものです。

歸路輕井澤に立ち寄つて大學擴張講演會に出席してホヰットマンに就いて講演をしました。東京に歸つてからは、「三部曲」や大阪朝日の懸賞小說を見る事に日を費やしましたが、私の惡い癖で一日々々と安きを偷みました。殊に懸賞小說の方は、その作者が燃えるやうな待ち遠しさで發表を待つてゐるだらうとは察しながら、百八十篇に餘る大紙堆を眼の前に見ると手をつける勇氣が出ませんでした。

十月の末からは同志社に講演する爲めに又京都に行きました。今年の京都の秋は素晴らしいものでした。この度は珍らしく母を伴ひました。三人の孫の爲めに碌々くつろぐ暇もない老人はこの旅で稍〻心を慰めたかも知れません。京都ではイブセンについて思つた所を述べて見ました。思ふ所の半分も述べ盡す事の出來ない中に講演の期間は盡きてしまひました。この滯在中に絕えて久しかつたO君に會つたのは愉快でした。O君は私が書後を附する事に大不贊成を稱へる一人です。その外私の作品に對して思ふ存分の惡體口をたゝきました。私は默つてそれに耳を傾けました。しかも依然として書後を書いてゐます。O君がこれを讀んだら濟度すべからざる奴と思つてゐる事でせう。

「或る女」については色々な事を方々から聞かされました。葉子を作者の理想の女のやうに思つてゐる讀者もあります。又眞面目だと云はれる側の青年讀者の中にはあの作によつて私から離れた人もあるさうです。私はそれについて辯解も何もしますまい。結局何んと云つても作者はその作物によつて語る外には道を持ちません。作品が惡かつたら作者は何時までもその企圖した所を知られずに終るまでの事です。それは作者の甘んじて受けねばならぬ相當の刑罰です。作者に少しの男らしさがあるなら、默つてその運命に從ふ外はないのです。

私の作物に對する批評は宮島新三郞（早稻田文學）、增田篤夫（解放）、石阪養平（帝國文學）、齋藤勇（福音新報）等の諸氏によつて與へられました。私はそれ〴〵の諸君に個人的に御挨拶はしておきましたが、公けにそれ

等に對する答辯はしませんでした。公けの答辯は作物それ自身によつてさせる外にないと思ひますから。唯私はそれ等の諸君が私の藝術に對して注意を拂つて下さつた事は嬉しく思ふものです。なほ「愛一」に對する御批評に對しては、その中纏つたものを書いて著作集の中で發表する積りでゐます。

今年は度々講演をさせられました。輕井澤のそれ、東京高等女學校聯合同窓會、東京女子大學、同志社、大阪十日會、京都PL會、京都第二高等女學校同窓會等です。而して私は全く飽き〳〵してしまひました（多分聽衆がさうあつたやうに）もうこれから同志社以外にはそんな事はしない積りです。

冬が迫つて來ました。これを書いてゐても手先が凍えるのを覺えます。

一九一九年十一月二十五日

廣告文

「或る女」

畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。若しその底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢へてこの冒險を企てた。

「三部曲」

眞に驚異すべき人生文獻の舊新約聖書から、二三の寶玉を拾ひ上げて磨きをかけたものだ。

講演・談話筆記

藝術的氣分に生きよ

十九世紀の思想

二十世紀の初頭。私共の心には十九世紀から傳はつた流れがあります。私共は此の流れを如何に變へるか、又此の儘にして置くかと云ふ二問題が考へらるべきです。然らば十九世紀の思想のキィノートは何であるか、其は科學的思想、卽ち物を客觀的に見る事であります。此の科學的思想がどうして生れたかと云ふに、中世紀には煩瑣哲學が盛んで、人間と云ふものを地面から離して考へる、表面的な純理想的な哲學であつた爲め、哲學は次第に人間と離れて、哲學は哲學の歩みを取り人間は人間の歩みを取つて、哲學を以て人間を導く事が出來なかつたのです。其の時に當つて文藝復興(ルネッサンス)換言すれば科學復興の曉となりました。そして理想ではなく眞理の追究を目的として、人間世界の周圍の自然物を感情を動かさずに冷靜な態度で研究する事になつた結果、亞米利加大陸の發見、印刷術の發明、產業組織、近代組織を生んだのであります。

近代人の煩悶

此の科學的精神が自然界に働いた時は、自然科學の研究となり、ダァーウィンの進化論の如く人間の研究となりましたが、更に進んで此の科學的精神を試驗管に入れて分析すると云ふ程度迄になりました。之を文學上から云

へば自然主義と云へます。私が私自身を考へる時私から離れて冷かにどんなものかと考へるのです。私自身が私と云ふ批評家と、私と云ふ對象物に二分するのです。近代人は二元的行方をしてゐますが、之では人間は徹底しない、其處に近代人の煩悶があるのです。ハムレットは自分の父を殺し、自分の母を奪ひ、其の上自分自身さへ殺さうとしてゐる敵の叔父を目前に見ながら、又一方に叔父だつて人間の慾を持つてゐる、叔父を殺してどうするんだ、人間は皆無に歸して了ふぢやないかと彼は思ふ。卽ち客觀的彼と主觀的彼とがある。そして現代の人は實行を缺き、自分自身も其の周圍も不幸に陷らしめてゐます。これが世紀末の煩悶です。此は科學的研究的態度を人間自身に應用した不可能事を可能事と考へたことから來た間違ひであります。斯くして人生は灰色の熱のない光のないものとなるのです。私共は科學的態度を棄てなければならない。私共の心にある藝術的氣分に生きなければならない。

三種の動向

私は藝術的氣分とは如何(どん)なものかと云ふ事を說明する前に、人間生活には大體三種の動向(インクリネーション)のある事を一言したい。從來人間は智情意の生活と云つて、三種の別々な力によつて生活すると思つてゐましたが、私は此のやうに別々に離れたものでなく、純一の力(ちから)に依つて生活する、此の力が同じ所に動く時は智ともなり、續いて動く時は情となり、强く動く時は意ともなると思ふのです。又宗敎家は人間の生活を靈肉の生活とし、靈の生活を貴しとして、靈の爲めには肉も棄てなければならないと云ひます。私は靈肉は離すべからざるもので何(いづ)れを貴しとし何れを賤しとしません。今話した私共の心に働いてる或る力がだらけてる時は如何に口では崇高な事を云はうと、肉の生活であり、又實行してゐる事が肉に關する事でも其の力が緊張してゐれば靈の生活です。それで私は人間の生活を、習性的生活、智的生活、本能的生活の三種の動向(インクリネーション)とします。習性的生活とは外界がスポンジ

になつて私自身を吸收することで、即ち世俗習慣に從つた生活です。智的生活は外界物に反抗する生活で、外界を研究して行く生活です。本能生活とは、普通に云ふ本能でなく、私の言ふのは自分から進んで外界を征服して行く生活です。（談話筆記）

（一九一九年六月、「讀賣新聞」所載）

文學は如何に味ふべきか

一

「文學は如何に味ふべきか」といふよりは「私の作物を如何に讀むべきか」といふやうな勝手なお話になるかも知れません。私の作物に就いては讀者方より手紙を寄せて感想を言うて來るのや、色々な噂を傳へて來るのが可なりあります。この間も或る人より新聞の切拔きを送つて來たが、それには「或る女」の感想を記るし、その中から得た感銘を色々な言葉を以て表はし、そして最後に女を八つ裂きにした作者を呪ひたくなると云うてあります。又、北海道から來た人が確かなる話として告げた事がある。二十四五歳になる或る北海道の女の人が、許婚の人のある身を以て、偶々行つた、或る漁村の眉目秀麗なる男らしい青年漁夫と戀に落ちた。その後女は私の書いた「生れ出づる惱み」を讀んだのであつたが、その小說に書かれてある事と自分の境遇が餘りに酷似してゐる事より大いに動かされ、益々二人の間柄が深くなつた。然し次いで「石にひしがれた雜草」を讀むや、外國遊學中の夫の留守に夫の友人と道ならぬ關係を結んだ妻の行爲を、夫が歸朝後これを知り、如何にも酷なる方法を以て妻を責むる項に至つて、非常に煩悶するやうになつた。然し乍ら、次に出でた私の小說「或る女」は更に彼女の苦悶を增し終にヒステリーになつてしまつたといふ。そして次には如何なる小說が現はれるか、それに依つて自分は己れの決心を固めると云うてゐるとその人は語りました。

これ等は一二の例に過ぎないけれども、私はこれ等の事に依つて非常に心を打たれたのです。私の小說が一人

の人の生活にまでも影響したといふ事は私にとつては大いに考ふべき問題であると云はなければなりません。故に私はこの題の下に自然如何に私の作物を讀んで貰ふべきかと云ふ風にお話を進める仕儀になりさうに思ふのです。

二

さて、文學を如何に味ふべきかといふ事に就いては各々その立場があります。私は私なりに自分の立場の上から意見のある所を大體申述べて見る外はありません。斷つて置きたいのは、私は人の說を紹介する程の學者ではない事と、自說はさうどん〱新らしく變へる事が出來ない事とです。或はこの話も前に話した高女聯合同窓會及び輕井澤に於けるものを繰り返す部分があるかも知れないが、その點は諒としていたゞきたいと思ひます。

文學を如何に味ふべきかの問題を言ふには、溯つて藝術と云ふ問題に觸れなければなりません。文學は藝術の一部門であるからであります。故にこの藝術の問題を決定せば文學の問題もおのづから決定さるゝのであります。一體、我々の凡ての生活は自己と自己以外(外界)との關係より成つて居ます。自己が自覺を持たない間は、その生活は無意識の生活であつて眞の生活ではない。例へば低級なる動植物の生活の如きものがそれであつて、眞の人間の生活とは大いに異なつて居ます。故に人間の生活は意識的に爲さるゝ時に始めて眞の生活が起るのであります。而して藝術も又、この意識的生活より胚胎さるゝのである。然し生活が實用的にのみ限られる場合、例へば一刻も實生活の爲めに暇のない場合には、我々の間には藝術は生れて來ない。然し貯蓄が生じたる場合卽ち生活の餘裕が生じたる場合に始めて藝術の衝動(Impulse)が生れる。グールモン(Gourmont)の著に「高濕なき動物は如何にして幕すかを考へる。然し諸君は火といふ力を發見し、その自然の母から一人の高慢なる娘が生れ

た。その娘を文化といふ。その娘は火に盲從せず、それを以て蒸氣を走らせ……機械を動かす」と云つてゐます。人間は畢竟 tool（器械）を發見する事に依つて文化の創めを作つた。而して實際のパンの生活の餘裕をとり凡ての文化的活動が生れて來た事は委しく云ふには及ばない事です。

三

斯く藝術は人間の生活の中に生れ出たけれども、次いで藝術とは何ぞやの問題が考へられて來た。これに對して始めて定義を下したのは、恐らく獨逸の美學者バウムガルテン（Baumgarten）等であつて、藝術は美なるものを取扱ふ事を見出だし、次いで獨逸の美學者等は「美とは何ぞや」の疑問を發したのである。この美に就いては獨逸派の美學の潮流は一勢に、美とは何ぞやの探究に全力を注いだのであります。

一般には美の見方を大體三つに分つて居ます。その第一說は、美はプラトンのイデア（Idea）の如く獨立せる存在であるといふ說であり、それには內在的價値があり、その價値を吾人が探る事に依つて藝術は成立するといふ說である。

第二の說は、美は吾人の享樂する心的境地である。故に美は外部にあらずして心が美しく思ふのである。美的享樂は實生活とは關係がない。この美的享樂を純粹に表現するのが藝術であるといふ說であります。

これに依れば私の小說に依つてヒステリーを起したといふのは美的享樂ではないわけであり、又私の小說がそれを與へないといふ事になります。

第三の說は、大體眞善美の三つの中、美は眞と善とに密なる關係あるものでなければならない。美を感ずると同時に道德的になり、又宇宙の眞理を摑むことを要す。かくの如からざるものは美でないといふ說であります。

以上三つの說の中、私はその孰れを探るか。不幸にして私はその孰れをも採らない。その理由としては、第一の說に對して考ふるに、美は獨立せる存在であると考へ得又云ひ得らるゝとしても、又その價値は內在的かも知れないけれども、然し、我々はそれを味はなければ共の價値は判明しないのである。然らば我々が美を完全に見るには如何にして爲すべきか。それは人間の力では及びもつかない事である。私よりいへば、感得したるものゝみが眞である。美は我々が事物に當つて我々の切り取るその部分以外は我々には役立たない。その價値はその切り取られた部分のみである。そして我々に最も役立つものは、その切り取れるものゝみである。故に上記の假定は假定として價値が有るとしても實際の問題になりて夥しく價値を減じて來る。それ故美は獨立せる存在にして內在的價値ありとの說は實際の藝術家には餘り役に立たない說であります。

第二の說にはなか〳〵の强味がある。オスカア・ワイルド（Oscar Wilde）の藝術論の場合などに於て殊に斯かる感じを持つ。然し果して眞の藝術に接して全然利害關係を離れたる藝術があるべきであらうか。私の考ふる所に依れば、必ずそこには享樂者の生活に變化が起るべき筈である。一時的には無關心狀態あるべきも、やがて何等かの變化を伴つた生活を喚起すべき筈である。ワイルドは「貴きは藝術である。藝術の爲の生命である。我々の生活は藝術が作るものである」というてゐる。又、ラファエル前派(Pre-Raphaelitism)のロセッチ(Dante Gabriel Rossetti）の繪によつて、始めてロセッチの描いたやうな女が英國に生れたりとし、ロンドンの霧を描けるタアナア（Turner）の繪によつて、ロンドンには霧が生じたと云つてゐるが、かく考ふる時はワイルドは藝術卽藝術を主張せる如きも、藝術が如何に生活に影響せるかを考へなければならないではなからうか。だからかゝる高踏的な藝術觀にも不足があると私には思へます。

第三の說は美の獨立性を全く無視してゐる。かく言ふならば、美學は成立せぬ樣にならねばならない。綜合的

なる眞理と道德と美の關係はあらはるゝも、美を獨立せるものとする事は考へられない。美の獨立性は全然失はれる。かゝる條件を持つて行くならば、藝術はあるものゝ機關ともならなくてはならない。然し乍ら藝術は獨立せる價値と權利を有するものである以上は、美は概念的に考へられた眞とか善とかいふものと結び付いてゐねばならぬと云ふ理由はありません。

藝術が生活と直接の交渉のない一種の遊戲であると第二說のやうに考へらるゝに至つた譯を私はこゝに少し穿鑿して見たい。

四

この事を說く前に、私は人間の內部生活に對する私の考察を語りたいと思ひます。人の生活は、

一、本能的生活（Impulsive life）――自働的の生活を指して云ふ。

二、智的生活（Intellectual life）――外部の刺戟に對し內部の反撥する生活を云ふ。

三、習性的生活（Habitual life）――外界がその儘內部に働きかけて居る生活を云ふ。

以上三つから成ると思ふが、吾人の生活の大部分はこの習性的生活によつて導かれてゐます。又人間生活の他の可なり廣い部分は智的生活で成立し、外部の刺戟に對する內部の經驗から知識や道德がこの生活のお蔭で出來るので、この生活は人間に取つて大切なものであつて、また現在の吾人の生活に必要とする多くのものはこの智的生活の充實によつて滿されてゐます。現在の社會生活が吾人に要求する生活法はこの生活であつて、それ以外の生活は餘り重要視されて居りません。然しその上に私は一つの生活を置きたいと思ふ。それは實に本能的生活であ(イムパルシーヴ・ライフ)る。これは或る場合には今迄の道德を破壞し、無視してまでも、今在る生活より一步を進んで、堅固(ステーブル)なるも一向

進歩のない智的生活に對して一歩を進むる生活である、即ち平安を主とする智的生活に對する進歩を主とする生活であります。

九月の中央公論誌上に於ける中澤臨川氏のベルトランド・ラッセルの哲學に關する評論には「ラッセルは眞の哲學は實用的目的より全然離れたる抽象的(アブストラクト)なる、數學的のものでなければならない。眞の哲學は實用的な臭味から離れ、流動の不安定から救はれて永遠の觀察を爲すべきものでなくてはならない」と主張し知識の威權を立派に言ひ現はせる人であつて、ベルグソンの流動の哲學に反對し、「普遍」と云ふ絶對な實在に味到する事を主唱したが、この學者が、世界戰役の結果二箇月の獄中生活の後にはその哲學の内容に著しい變化が起り、ベルグソンの主張してゐたやうな本能的の生活を認めて來たと云ふ事が書かれてあつたと思ひます。不幸にして私はラッセルの書いたものを一字も讀んでゐませんが、氏の改說の經路を非常に意味深く思ひました。この本能的生活は下等動物——又は石が人間に迄持ち來さるゝに至つたその力から出てその力に動かされる生活であります。幾百萬年を經て石が段々有機體となり、終に人間にまで進化した、その進化を司る力であります。この力が我々に働いて居るのであつて、或る時には知識を破壞し、或る時は道德を毀してまでも働くのであります。それが如何に生活を變ずるかは誰も知らない。而して藝術とはこの力によつて人間の生み出したものを云ふのであります。

何故或る哲學者等が、藝術とは何等の努力を伴はざる、何等意志の作用なくして享樂し得られるものと考へたかは、本人が本能的生活に入つた時には、智的生活(インテレクチユアル・ライフ)に必要とせらるゝ如き努力が伴はないが故にであります。智的生活には努力とか犧牲とかゞ必要條件として考へられます。然るに本能的生活には衝動はあつても努力はありません。獲得はあつても犧牲はありません。その生活内容の經驗から美と云ふ觀念を假定した人々が美の享樂は實生活とは何等の關係なしといふたのでありませう。又藝術には無目的なりといふ說は、普通の生活は働きの

外に目的を置けるものが普通であるのに對して、本能的生活にあつては目的は生活そのものゝ中にある事より來たのでありませう。智的生活の目的は外部にある。然し本能的生活の目的は内部にある故、そこには苦しみも惱みもないのである。クリストの十字架上の苦しみもクリスト自身には何等の苦痛もなき安らかなものであつたらう。藝術も又、この本能より出づるものであるが故に他に目的はない。然し獨逸派の人々は美を假定して、美の創造は無目的であるといふのですが、これは、創作者の心持が本能的である故に衝動的であり、從つて目的なく見えると見る方が正しいと思ひます。

故に私は本能的生活が藝術を作るといひたいのであります。本能的生活そのものが藝術である。生活卽藝術である。そしてその生活を爲しつゝある人が藝術家といはるゝのである。人には多かれ少かれ本能的生活をしてゐないものはないから人は誰でも多かれ少かれ藝術家であると云ふ事が出來ます。故に其處に始めて世の云ふ藝術を鑑賞するの道が開けて來るのです。若し藝術家と云ふものが、他の人々と類を絶した特種の人間であるとするなら、どうして其の藝術家の生んだ藝術を普通の人が味ふ事が出來ませう。

然し、普通に用ゐられてゐる藝術といふ言葉は私の只今申した藝術と云ふ言葉程廣義に用ゐられてゐずに、私の所謂狹義の藝術に屬するものであります。それを一般に藝術と稱へてゐるのです。

蓋し、吾人の本能生活には一の表現を必要とする。この場合には種々あるが、物的材料を最も狹く、少く用ゐて、自己を出來得るだけ完全に表現せんとするものがこの狹義の藝術卽ち世間で云ふ藝術であります。より完全なる藝術は、より少く、純なる手段に依り、自己を出來得るだけ完全に表はさんとするものであります。藝術は官能に愬へるもの故、この事も成るべく純なる官能にアッピールするのを必要とします。それには眼若しくは耳に愬へるのが最もよろしい。彫刻、繪畫は眼に愬へるものであり、音樂は耳に愬へるものであります。一言すれ

ば、道具立て少くして生活即ち自己をなるべく人に表現せんとするものが純粋藝術の作用であります。ラスキン(Ruskin)が「藝術は一の經濟學である」と云うたのは面白い言ひ方であると言はなければなりません。

五

そこで以上に依つて簡單なれども、藝術は如何なるものか、如何にして作らるゝかゞ判明したであらうと思ひます。次に本論に入る前に、歐洲に於ける藝術的思潮が如何なる發達をなせるか、而して現在は如何に變化しつつあるかに就きて述べたいと思ひます。

大體歐洲文明の發達の跡はこれをラテン文明の時代(Latin)、ゴシック文明の時代(Gothic)、チュートン文明の時代(Teuton)及び來るべき文明の時代の四つに分つ事が出來る、今それ等の文明の推移發達を見て行きたい。

ギリシヤは東邦とアフリカより文明を吸收し、非常に華かなものを建設した。このギリシヤ人の藝術の特徵は調和(Harmony)の點にある。ギリシヤ人はその人種としては上品なる、僞りの出來ない人種であるやうである。故にこの人種の考へでは人生をごまかしては行けなかつた。これ等の人の考へには人生は儚く頽れ易いものと考へられてゐた。同時にギリシヤは非常に美しい國であつて美しい春と晴やかな夏を有してゐたが故に人心も又晴れやかなものであつたが、この聰明さから來る憂鬱とこの自然の美しさとがギリシヤ人の心によく調和したものではあるまいか。ギリシヤには光明の神であるアポロと破壞享樂の神であるデオニソスなどがあるやうに、常に相反した戰を鬪つて行つたのである。この生活がギリシヤ人の持てるものであつて、悲劇的(解決なきの意)人生觀を與へた所以である。ギリシヤ人には人生は無解決なる戰鬪として考へられてゐたのである。この無解決な爭鬪の生活から希臘人が慰藉として求め出したものは、兩極端の美しい調和の外になかつた。それが彼の藝術であ

ります。我々が今ロダンの「地獄の門」を見るに、その感は全然ギリシヤのものより受くる感じと異なるのを覺えます。ロダンは希臘藝術を渇仰した巨匠であつたけれども、時代と國民性との相違は謬たずこゝに現はれてゐます。然るにギリシヤのもの丶中には實に美しいハーモニイのあるのが見受けらるゝのである。これを我々はクラシシズムと云ひます。所がギリシヤ文明がイタリーに移つた。卽ち歐洲南部に移り、紀元五世紀から十五世紀に亙つてそこにラテン文明が起つて來た。

その中にはゴシック文明も含まれて居るが、ラテン文明は、ギリシヤ文明の入ると共にキリスト教の文明を輸入して來たのであるが、時のローマ人には藝術は起らなかつた。却つて彼等は政治的、侵略的の人民であつた。生活に餘裕なきことから藝術は生れず、政治的、侵略的に走つたのである。然し乍らローマ人の衰微に依つて文明は純羅馬人の手から解放され、そこに數多の小都市が成立し、そこに燦然たる文明が起つて來た。これがゴシック文明である。この時代の藝術は凡て陶醉(intoxication)の藝術である。そしてこれ等の才能を何處迄も進めて行かうとする心がライフより一の觀念を得んとするやうになつた。それにキリスト教の超現世の思想が加はり遂に陶醉の心を生じたのである。例へばセント・フランシス(St. Francis)の生活を考へて見ても、我々の生活より超越的なるものである事を知る。又ダンテ(Dante. A.)の「神曲」を見るも未來世に於て自己の藝術を描いて居る。かゝる事はラテン文明の陶醉の心持ではないか。かゝる時に、東ローマ帝國の滅亡と共に文藝復興期が來た。これと續いてかの宗教改善が起るやうになつた。この文藝復興期に當りて人々の智的生活は非常に高められ、この智力を何處迄も使つて人間生活の改造を爲さんとしたのであつた。實に華々しい事であるといはなければならない(この當時の事特にダ・ヴィンチに就いては、メレヂコフスキーの Forerunner (先驅者) がよく説明して吳れる)。

その中に歐洲の世界には封建制度が行はるゝ様になり、到る處に遠征とか戰爭とかゞ行はれ、遠地の文物は輸

入され來り、終に文明復興期から再興したクラシシズムを壓倒してこゝにローマンティシズム（Romanticism）の風潮が起るに至つたのである。今一應、吾人の藝術的情操をいふならば、左の三つを擧げることが出來る。

一、センティメンタリズム（Sentimentalism）――過去に表はれたるもの又は現はるべかりしものに價値を置くもの、ゴシックの文明がそれであるといへよう。

二、ローマンティシズム（Romanticism）――未來に現はれたるもの又は現はるべきものに價値を置くのであつて、ルネッサンス以後のものがそれであり、異境に對する憬れや變轉せる間に延びんとする意慾の力が其の主もなる心持である。

三、リアリズム（Realism）――現在に現はれ居るものに價値を置くもの、ローマンティシズム以後のものがそれである。

これ等の時期を經て科學の時代に入り、何事をも冷靜に見んとするものと、熱情とが爭ひ、そこにゲーテ、シラー、キーツ、シエレー等のローマンティシズムに對して主もに佛國を中心とするリアリズムの風潮が捲き起り、激烈なる對立、爭鬪の後、科學を基調とした文明卽ち近代の文明が起つて來たのである。これがリアリズムの生活である。この生活が生み出した藝術的傾向は卽ちナチュラリズム（Naturalism）と稱せらるゝものであります。これは科學の精神に依つて冷靜に、何等の私情なくその現象を取扱はんとしたものである。フローベルのマダム・ボヴァリーがその一例である。この勢が更に一變して現在我々の目前にある藝術境に發達して來たのであります。

六

前回に述べましたのは歐洲の藝術が如何なる道筋を經て現代に至れるかといふことでありました。先づ始めにこの事をもう一度簡單に繰り返して見ませう。

ギリシヤの藝術の基調(キイノオト)は調和であります。換言すればクラシシズムと稱さるゝものでありました。このギリシヤの藝術がイタリーに入るに及んで Intoxication（陶醉）の要求となりました。即ち一種のローマンティシズムが起つて來ました。その後中世紀の末に、ギリシヤ文明は再び大規模にイタリーに入り、非常に華かな文化運動を惹き起しました。文藝復興(ルネッサンス)（Renaissance）の運動がそれでありまして、それと共に宗教改革の運動が起り、次いで文明の中心はラテンよりチュートン人の手に移つたのであります。

文藝復興期が生みだした文明の結果、起つたのは再度のクラシシズムでありました。これを代表する作家としては文學の方面にラシーヌ(Racine)、コルネイユ（Corneille）などがあります。然しこのクラシックの時代は甚だ短く、次いでそれを破つてこゝにローマンティシズムの風潮が起つて來ました。それはユーゴー(Hugo)、バイロン(Byron)、シラー(Schiller)、ゲーテ（Goethe）等に依つて代表された所のものであります。これ等の運動は生命讃拜（Apotheosis of life）の運動とも云はるゝ所のものでありまして、當時の若々しいチュートン人の心に勃興した生命力を、これまでの平板な、動きの取れない生活から躍り出させようとする運動でありました。が、自然科學の發達と共にそれは下火になつて、それに對抗して起つたのが所謂ナチュラリズム（Naturalism）でありました。これより文藝の運動は如何に變轉して行つたか。

それを述べる前に本能生活に就いてもう一度私の云ひ足らなかつた所を補遺する必要があると思ひます。この事は一朝一夕にして說き盡す事の出來ない問題ではありますが、大體を言ふと、イムパルシーヴの生活といふ事はインスティンクティーヴな生活（Instinctive life）といふ言葉を以ても言ひ得るし、その方が却つて適當でありま

せう。イムパルシーヴといふと働き方が如何にも表面的になりますが、私の意味したいのはもつと根柢的なものですから、インスティンクトと云つた方がより妥當であります。然しこの言葉は往々にして極く低い限られた意味の本能を指す時に用ゐられてゐるから、その點は諸君が斟酌して下さらなければなりません。例へば肉慾と云ふやうな事は本能には相違ないけれども、本能の極く表面的な一部の働きであつて、根柢的な意味で云ふ本能から考へると、肉慾の如きは本能の働きを達成する爲めの方法の一つに過ぎないと云ふ事を了解なさるでせう。

以上の意味に於いて、私は藝術は Instinctive life であると思ひます。この生活には善惡がない。無いと云ふより善惡と云ふやうなものはその價値判斷の標準にならない。瞬間のインスティンクトの生活はその瞬間に於いて價値を有するもので、智的に卽ち考察的に價値が考量さるべきものではなく、その瞬間々々の內在の價値で十分であります。我々には比較價値が行はれて居る。然しインスティンクトの生活には比較的の價値は成り立たない。本能があらはれしものを智的生活に持つて來る時は善とか惡とかの價値批評とはなるも、それは旣に智的考察であつて生活そのものではない。この智的に定める價値を飛び越えて本能生活はそのまゝ獨立した價値を有するものであります。然るに世には智的生活と本能生活との混同が數多く行はれて居るのを見かけます。例へば、愛する者が非常に重い病氣に罹つた時に、鹿の腦の汁をとつて飲ます時は病が癒ゆると信じ、それを實行するものがあるとします。智的判斷からはかゝる事は一の迷信に過ぎないとせられても、眞に愛する者の病を思ふものにとつては、その事それ自身に智量を絕した一つの價値が生じて來るのです。この價値は善惡の標準だけでは考へられない價値であります。

七

かくして我々の中には智的活動以外に本能活動のあるのを知りました。然しこれ迄はこの本能活動はひどく無視されてゐたのでありますが、この活動は或る意味に於て智的活動以上に大切であり、要求されなければならないものであると思ひます。

何故に要求さるゝかといふ事に就いては、今本能といふ立場より歐洲文藝の立場を見て行くと、略ゞ了解して下されると思ふのです。

ギリシヤ藝術に於ける調和の要求は、畢竟するに本能と智的生活との調和を企てしものと見る事が出來る。彼等は聰明であつたが故に智的生活の大切と本能生活の大切とを知つてゐたであらう。そしてこの間の調和を圖らんとしたものがクラシシズムでありました。

中世紀に至り文明がイタリーに移り、希臘文明と共にキリスト教が移植され、地上生活より未來に對する傾向即ちローマンティシズムに於ける陶醉が起つて來た。この生活の爲めに本能生活を押し潰さんとし、爲めに本能生活に對し懷疑の眼を向けたのであります。その後クラシシズムがもう一度盛んになつた時は（それは前のクラシシズムとは多少面目を異にしてるが）、ギリシヤ人は生きる事に敏活ではあつたのに、新たに起れるものはイムパルシーヴな飛躍を缺き徒らに睿智の冷靜な働きばかりを以て地上を飾らんとし、靜學的な固定性を建設しようとした。その爲め世の中はきちんときまりのついたものとはなつたけれども、動きがとれぬやうになつたのでありますᕀ。故にそこにチュートン人種によつて哺まれたローマンティシズムが再び起つて來て、この純智的ローマンティシズムに反對し、智に代へるに本能を持つて來た。そして、その要求の昂ずるまゝに現在の生活とは全く違つた方面にその對照を造り、架空な心的冒險とか、歐洲以外の土地の生活に對する夢のやうな憧憬とかゞ藝術家と藝術鑑賞家の心を牽くやうになりました。その時の本能生活より起つた藝術は智的生活を全然無視したのであります。

然しチュートン人種の心的要求は一面にこんな夢幻的なものを持つてゐたが、他面には一部分、その反動として、恐ろしく智的な所もありました。これが前代より勃興しつゝあつた科學的精神を更に刺戟し、純粋な主智的な立場から人の生活をも自然現象の一つとして見窮めようとする傾向を生じ、それが藝術の分野にも働いて、藝術にローマンティシズムとは全然反對した一つの主潮を形成するに至りました。これがナチュラリズムであります。これは科學的精神を採り入れ、この世界を綿密な智的標準から檢察せんとしたものであつて、理想國を夢の中に建てるより、現世の生活の當體を如實に確認し、現世の理想國か否かを見んとしたものであります。それがナチュラリズムとかリアリズム等として現はれた文藝上の傾向でありまして、前者を代表するものは、前回にも申した通り、フローベル（Flaubert）、モウパッサン（Maupassant）等があり、後者を代表するものにはゾラ（Zola）などがあります。

彼等の藝術的立脚地は、自分は拭ひ淨めた鏡のやうになり、外界を歪めず矯めずそのまゝ寫し取つて、それを人に見せる事を以て最上の態度としました。從つてその人達の制作境は、作者の個性を成る可く小さくして自然をそのまゝよく見抜かうとしたものであります。これは當時のローマンティシズムを稟けた態度としては非常に有意義なものであつて、これまでの浮き足な態度と異なり、足を地に確乎とつけんとした大變立派な運動であるから歐洲を席捲したのも無理ない事でありました。

當時の精神を約めて言へば、ナチュラリズムの人々は純客觀の立場に立たんとしたものであります。即ち藝術家がその人間性を捨てゝ、全然拘束のない觀照の境地に入らねばならぬのです。これは非常に面白い事でありますが、然し乍らよく考へて見ると、これは神のみの能ふ事であつて人間の出來る事ではない。我々が意識する時には感官を通じてするものであるが、物を觀る時にはすでに見る人に個性が現はれて來るのを知らねばな

らない。そして我々のセンスは銘々異つて居るのを知る。故に異る眼より見る時にその結果はおのづからそこに差異が生ずるわけである。故に純客觀的に見ると云ふ態度は理論としては立派であるけれども、一方又、不可實行的な點に於いて破綻があると言はなければならないと思ひます。

一歩を讓つて假りにそんな事が出來たとしても、その價値は疑はれなければなりません。例へば、畫家が個性を無視して花を描く時の如き場合を言へば、それは寫眞の方が遙かに精密で、取捨選擇なく外界を取り入れてゐるが故に、この主義の立場から云ふと、よりよいことになりはしまいか。かくするならば繪畫の價値は絶無になつてしまふでありませう。故に一つの繪畫は何んと云つても畫家その人のセンスの特殊な表現でない以上はその制作は寫眞以下の價値より持たない事になります。だから寫實主義、自然主義は一個の抽象論として見ると有意義ではありますが、第一實行の不可能なる點に於いて、第二に實行され得ると假定した實際の場合の結果から來る自己矛盾に於て一つの失敗であると云はねばなりません。かう云ふ弱點によつてさしも一時歐洲の藝術を至上的に支配したこの主義も何か物足らない感じを鑑賞者に與へるやうになりました。

八

そこに氣の付いた人々があります。そしてこの人々がナチュラリズムに叛旗を掲げたのでありました。これはチュートン人種の文化領域から更に北方に棲息するスラヴ系の人々によつてなされました。即ち歐洲の主潮は更に一歩北漸したのです。即ちそれ等の人々は主觀の價値を囘復しようとしたものであつて、これが只今の藝術の一つの主潮であります。今迄のナチュラリズムは本能には重きを置いたけれども、それを唯客觀的にばかり考察せんとしたもので、かくする結果は人生を宿命的なものと見る樣にならなくてはならないのです。何故と云へば

から云ふ態度にあつては自然は勢ひ主となつて人間はその一部としてのみ考察されるからであります。これに對して作者の素質（テムペラメント）を主として見んとし、主觀的に見んとしたものが我々の現在に於ける最も強い要求であります。それは本能（イムパルス）を客觀的にのみ觀察する事の代りに如何なる場合にも主觀（サブゼクティーヴ）的に考へるものであります。卽ち人間を主體として自然卽ち外界に對するものであります。一體、本能とは內部より外界に働きかけるものをいふものであるからして、その生活は常に主觀的、一元的であります。故に自然は勢ひ藝術家の個性によつて任意に切り取られ、選擇される事になります。然らばかゝるものにして如何にして正しく自然が切りとらるゝかといふに、それは藝術家の持てる愛といふものに依る外はないのであります。この愛と云ふ本能の現はれを餘計に持てるものがその性格を通じて外界を餘計に、且つ正確に採り入れるのであつて、その愛が強められ、深められて行く時は終に凡てを抱擁して行くやうになるものであります。

かくの如くして、藝術家が外部を切り取る愛の力が深くなり強くなれば自然卽ち外界が最も如實に攝取されて作者の個性と融合し、外界が靜學的にではなく、活きたまゝで個性の中に動くやうになります。それは素質（テムペラメント）を現はしてゐる如くしてなほ自然なものであります。主觀的にして又同時に客觀的であります。そしてこの客觀こそは眞に鍛へ上げられ、錬（ね）り上げられた客觀であると云はなければなりません。自然が唯摸寫（イミテート）されたものゝみであつたならば、繪畫は單なる寫眞となり、文學は一の寫生文に終らなければなりますまい。これが價値のないものである事はいふまでもありません。我々がこゝに寫眞帖と描い畫とを比べて見てその與ふる力を見ればおのづから判明さるゝ問題でありませう。實に自然の摸寫（イミテーション）と自己の性格より生れたる力の強さは、比較すべからざる相違がある。故に眞の客觀は個性を通じての客觀でなければならないといはなければなりません。

近頃の文藝卽ち本能を主觀的に働かさんとしたものはこれを人道主義と云うて居ります。この名稱は當つて居

るか否かを知りませんが、今假りにさう呼んで置きます。勿論、今日位流派の名などに執着しない時代はないのであつて、現今は一作者卽ち一流派と見なければならない時代である事は序ながら記憶していたゞきたいと思ひます。

九

この人道主義（Humanism）と呼ぶべき北歐の藝術の特色は、第一に自己に特色を置くものであつて、自己を無視するナチュラリストに對し、自己を見んとしたものであります。自然に在る自分の姿を見るより、自分の上に堅固な立脚して自然に對する――更に適切に云へば、自然に自己を浚入する代りに、自己の中に自然を融かしこむのであります。汝とは何ぞやを見んとしたものであります。ソクラテスが「汝を知れ」と云うたのに對して、汝であれと言ふものであります。

かくすれば人は自己には大切なる魂のあるものであつて決して卑しむべきものでないといふ事を知る樣になる。我々の凡ては諸々の偉人と稱せられた人と同樣で且つそれに共通なる魂を有する事を知る樣になるでありませう。從來は如何に魂を虐待したか知れないのに對して、この魂に耳傾け、自己の尊權に賴るやうにならねばならないのであります。我々の魂は如何に不完全であるとも、善へ向ふ可能性があります。若し然らざれば、我々には生きる必要がなくなる、生きる必要のなき場合には藝術の必要もなくなります。生活の可能性なしには藝術はない、この可能性卽ち藝術であります。

それから人道主義の第二の傾向は二元より一元への道である。これは何、あれは何といふ二元的の、苦しい、力ない、打算的な、不純なる、犧牲や努力の觀念で漸く成り立つ立場（智的考察のライフの如き）より力ある、緊

張せる生活への道である。實に新らしき人道主義の生活はこの二元より一元への生活であります。

作物の考へ方に就いても、この立場に依つてする事を私は望んで居ります。私の「或る女」を讀んだ人が、見たくないものを見せられたといふやうな事及び女を八つ裂きにした作者を呪ひたくなるなど丶云うた事は少くとも私の作物を觀る立場が誤つてゐた結果ではありますまいか。「或る女」の主人公の如き女が、永い年代の間、男性による壓迫から醸し出された男性に對する叛逆心に驅り立てられ、男性との調和の道を奪はれながら、しかも男性に對して本能の命ずる執着をも捨てる事が出來ず、不知不識進んで悲劇を演ずるに至るその經路に着目して讀んで下さるなら、現在の女性が誰でも多少は感ぜねばならぬ悲しい運命に對する本然の姿を聊かなりともあの作品が語りはしないかと思ふのです。本當に自己を愛し、自己の本能を尊び、而して女性が現在如何に不當な位置におかれてゐるかを痛感する人々は、あの主人公の盲目的な叛逆と執着と蹉跌とに對して或る感銘を感じて下さる事が出來ると思ふのです。

さて、以上に掲げたやうな特色を人道主義は有して居りますが、この人道主義は自然主義に疑を起し、それを破つて行かうとしました。これ等の運動の隨一とせらる丶人にはゴーゴル（Gogol）があり、ツルゲーネフ（Turgenev）があり、イブセン（Ibsen）があり、バーナード・ショウ（Bernard Shaw）、ゴルキー（Gorky）等があります。これ等の作家の孰れを見ても從來の唯物的な、換言すれば、自然主義的な文明の缺陷を如何に見てゐるかを知り得るでありませう。卽ち私等は何等かの意味に於て從來の文化の弱點を指摘し、その文化に對して疑問を投げてゐます。

この彈劾が散々に歐洲思想界に投げられ、動搖を來たし又そこに新文化の建設が始まりました。是れが北歐文明と云はるべきものでありました。一言すれば生命改造（Reformation of life）の運動が始まつたのであります。

これ等の運動を代表する人々には文學方面に小說家、劇作家としてトルストイ(Tolstoy)、ドストヱフスキイ(Dostoevsky)、ホヰットマン (Whitman)、ストリンドベルヒ (Strindberg) 等あり。哲學方面にブランデス (Brandes)、スティルネル (Stirner)、クロポトキン (Kropotkin)、ロマン・ローラン (Romain Rolland) 等があります。これ等は大部分北歐の人々でありますが、これを見ても新らしき種族が新しき文明を作り出してゐるのを知り得ませう。その中ホヰットマンは二元的から一元的への考へ方を感情迄持ち來れる人として價値ありと信ずるし、トルストイには人生卽ち人間の魂に對する理解をよくあらはした所、ドストヱフスキイには虐げられながらなほ且つ向上せんとする人生の可能性を、ストリンドベルヒには凡ての懷疑、否定の奧底に傷ける事の出來ない人間味の籠つてゐるのを認め得ると思ひます。

これで、大體文藝に於ける傾向特色を擧げましたと同時に本能生活が如何に藝術創造に重きをなしてゐるかを了解して下さつたと思ひます。最後に私は諸君の前に私の希望を述べてこの話を終りたいと思ひます。

一〇

外國文明が日本に入つた時には男子が逸早くこれを採り入れたのでありましたが、その當時は自然主義の盛んであつた時代でありました。故に歐洲の自然主義的な考へ方は男子には理解されたのでありました。思想家には加藤弘之、中江兆民、福澤諭吉といふやうな人がありました。そしてそれは現在私の血管にも流れてゐますし、その爲め我國には隨分宿命的な人生觀に立脚した文藝も現はれたのであります。故に我々男子は、歐洲人が一度採り入れた自然主義に對する理解もないのではなく又その免疫素も持つてゐるとも言はれます。然るに女子はかゝる經驗を經過せずにゐますから、やゝもするとたゞ浮き足なロマンティックな夢に醉ふの危險があると思ひます。か

く自然主義時代の思潮に浴されない女子にはこの頃の文藝に對する十分なる理解を得ると云ふのは可なり困難ではないかと思ふのです。女子が單に夢幻的なロマンティックな感興を得る事のみを以て滿足せず、もつと生活の核心を摑む事を心がけ、所謂美とか醜とか、善とか惡とか、と云ふもの丶後に何があるかを見窮めて頂きたい。卽ち自然主義的な物の見方を十分にくゞりぬけて、その先にあるものに逢着していたゞきたい。

もう一つは諸君の實生活を考へられたい事であります。今、女性にして眞に生活を考へてる人は多くないと思ひます。私が嘗て鎌倉にあつた時、ある女の人が訪ねて來て、何よりも先づ人間らしい生活をする事を語つたので、それはい丶事だと私も思つてゐた所、數日後、その人は自分のゐる寺の男僧と酒樓に上つて騷いでゐたといふ事を聞かされました。私は考へるのに、それはそれでい丶のかも知れないが、隨分持つてまはつたやり方だと思ひます。生活が一層緊迫してゐたら、もつと手近な所に手をつけねばならぬ道があるのではないかと思ひました。

私は、諸君は良人から放された時、男子から離れた時も、卽ち女が男の助けも支配もない所におかれた場合をしつかり考へていたゞきたいと思ひます。そして、さう云ふ自覺の追求から味はる丶藝術が本當に實のある藝術觀となると思ひます。鑑賞（アツプレシエーション）の淺薄は凡てに對して愼むべき事であります。（講演筆記）

（一九一九年十一月、「女學世界」所載）

一九二〇年

文藝と「問題」

文藝の中に所謂「問題」なるものが取扱はれていゝか惡いかと云ふ事は、隨分むづかしい議論として、と云ふよりは藝術至上主義者が他派の作品を攻擊すべき題目として論議に上せられてゐる。私はこの事に就いて自分の態度を決定する上に少し考へて見ねばならなくなつた。それをこゝに言ひ現はして見ようと思ふ。

存在が「時」を切り劈(ひら)いて流れる有樣を私は稻妻の姿で考へるより適切なものはないと思ふ。力――如何にしてさう云ふものが創り出されたかを私は知らない。然しながら存在は力であつて且つ力の源だ。それが暗黑な密雲に蔽はれた空間にも等しい「時」を劈(つんざ)いて、宛ら電火のやうな勢ひで閃いて行く。而してその有り餘る程の力は稻妻が直線を描いて走る事なく、僅かの抵抗力にも强靱な曲線を描くやうに、直線よりも更に烈しい弧狀をなして、星馳(せいち)する。私達の生活も亦この凄じい流れの中にあつて終始してゐるのだ。

若し存在が常に直線に沿うて動くものならば、私達の間には「問題」は起らぬだらう。私達に動く力は過たず同一の方向を取つて疑ふ所なくひたむきに流れて行くだらう。

然しながら何等かの抵抗力が――と云ふよりは存在の流れの尖頭に積り積つた障礙物が遂に流れの力に打ち勝たうとする場合――存在の流れを一時動搖させる時、そこには必ず內部に混亂が釀(かも)し出されるだらう。その過去

と現在と未來との距離は非常に延長されるのみならず、同時同處の排列も亦甚しく擾き亂されるだらう。存在の流れの尖頭には調節作用が行はれなければならぬ。力の方向及び力點が變化する事なしには、流れが求めつゝある線上には還歸しない。此に於て私達の生活の中には、その内容と方向とを更生すべき必要と要求とが生じて來る。所謂「問題」とはこれを指すのに外ならぬ。

もつと具體的にもつと實際的に云ふならば、人類の生活に於て一つの文化が他の文化に繫がらうとする時にこの現象が牽き起される。これを稱して私達は文明の過渡期と云ふ。だから人類の持つ文化途程には、常に昂進期と衰退期と過渡期とがある。昂進期と衰退期とは之れを一直線上に置く事が出來る。而してその線の大小を以て現はす事が出來る。然しながら過渡期に至つては曲線を以てゞなければ示す事が出來ない。それは文化方向の轉換を意味するからである。

一文化の昂進期と衰退期は所謂「問題」と稱すべきものではない。そこには生命の或は緊張或は萎縮があるばかりだ。然しながら過渡期に至つてはそこに必ず「問題」が提起される。卽ち生命の不合理が感ぜられ、考察が要せられ、改正が望まれる。文化的活動の一要素である文藝が獨りこの埒外に逸してゐられる筈がない。

だから文藝の内容に「問題」の分子が織り込められてゐると云ふ事は、その作品が過渡期にあつて制作せられたる場合には當然な自然の事であり、然らざる場合には偶然若しくは不自然な事である。

ダンテの「神曲」を讀む者は、興味を感ずると否とは別問題として、兎に角その內容に「問題」の分子の極めて饒多なるを發見するだらう、又シェクスピヤの戲曲を讀む者は、物足らなく感ずると否とは別問題として、「問題」の分子の殆んど度外視されてゐるのを注意するだらう。私一箇の見る所では、この二人は藝術家として各ゝ優劣を定む可らざる地步を占めてゐる人達だ。何が「問題」と云ふ點に於て二人をかく異ならしめたのだらうか。そ

こには天稟と云ふ事が先づ考へられなければならぬ。私は然しそれにも增して大きかつたものが、時代と云ふ大きな背景に見出される事を知る。かゝる天稟の差を生み出したものが時代と云ふ背景にあるとさへ思ふ。

ダンテは中世紀の文化が將に文藝復興期のそれに繋がれようとした、その交叉點に生れて活きた人だつた。彼は自分の現在が過去と未來とに緣遠く結び付けられてゐるのを見た。その蝶番ひが甚しくゆるんでゐた。彼の周圍には端倪すべからざる價値の顚倒があつた。約言すれば有らゆる意味に於ける混亂が釀されてゐた。卓拔なダンテの天才は萬人以上にこのディレンマに惱まねばならなかつた。これは自明の理である。小さな藝術家の嗅覺が動ともするとこれを嗅ぎそこねて、傳統的な生活の安價な肯定や、殉情的な詠歎やを慕つてゐた間に、ダンテは敏感にも微風の如き氣圍氣の動搖に懶惰ではゐなかつた。ダンテが暗黑時代の幕を閉ぢ、來るべき時代の幕を擘ぐるべき巨手であつたと云はれるのはこれが爲めであらねばならぬ。此の如きダンテの作品中に「問題」の存在するのを怪しむより不合理な事はないではないか。

シエクスピヤは英國が始めて大歐羅巴に對してその確乎たる存在を認めしめたばかりでなく、將に歐洲文化の霸者たらんとする威勢の中にあつて制作した人であるのを私達は忘れてはならない。當時英國人の生活は、些少な矛盾や混亂があつたに拘らず、ひたむきに或る方向に向つてその文化的生活を遂行向上させてゐた。植付けておいたものゝ成熟期は來てその收穫にいそしまうとしてゐた。そこには過去が現在に注入し未來が手の屆くばかりの所に接近してゐた。文化の方向は平野を大河が海に潮するやうな盛容を以てまじろぎもせず直走してゐた。單にそれは英國內ばかりではなかつた。歐洲全體の空氣の中にさうした姿は認められてゐた。文藝復興期はこの時代に於て正にその凱歌を聲の限りに叫ばうとしてゐたのだ。かゝる時代に呼吸する藝術家の作品に「問題」の分子の少いのは自明の事ではないか。トルストイは「問題」に苦しみ惱まねばならぬ時代に生れ出た一人の藝術家だつ

た。彼は自分の熱意に驅られて、自分の立場からシエクスピヤを檢察した。而して「問題」卽ち生活批判の行はれてゐないその作品を飽き足らずと思つた。而してトルストイ特有の容赦のない酷烈な批評を浴せかけた。私はトルストイのこの態度をどうしても首肯する事が出來ない。（私はこゝでトルストイの批評の局部に亙つてまで云ふのではない。多くの點に於て彼の論議はその直感の銳さと良心の嚴正さとを以て讀者を十分に首肯させる事を忘れるものではない。私は玆ではトルストイをしてシエクスピヤを非難させたその主因に就いて云つてゐるのだ）トルストイのあの態度を以てシエクスピヤに近付かうとするものは、月に背いて月の影を鞭つを得たりとなす誤謬に陷る者ではないかと思ふ。

この些やかな一例が私の云はんとする所を幽かにでも暗示するだらうか。生活研究者は必ずしも藝術家たるを要せぬ。又さうでない場合が多い。然し藝術家は例外なく生活研究者であらねばならぬ、あらざるを得ぬ。生活研究者である以上は、個性の生活であらうと、社會の生活であらうと、その考察の對象とならねばならぬのは必然な事である。故に私は思ふ、文藝に「問題」の分子の混入してゐると否とはその制作品の價値を吟味する上に何等の障碍となるものではない。

勿論過渡期に際して必然起つて來る「問題」なるものは本質的に云ふと、一時的の現象として取扱はるべきものなる事は、私と雖も忘れるものではない。一時方向を變じた生活の流れがその本然の方向に轉入するときには當然價値を亡失すべき種類のものである。然るに世には、さう云ふ種類の者であるが故に藝術から排除さる可きものであらねばならぬと說く人がある。藝術家は制作を提供すればいゝのだから三度の食事を省いてしまふがいゝと主張するのが正當であるとでも云ふ樣に。三度の食事が制作品にどれ程影響するかを知るものは、或る時代に於ける藝術中に「問題」の潛在してゐるのを拒むやうな考へはないだらう。又ある時代に於ける藝術に「問題」

の潜在してゐないのを非難するやうな者はないだらう。一概にかゝる觀察をし、批評をするものは、藝術家の生活といふものを傳說の中に描かれてゐる仙人でゞもあると妄想してゐる人であらねばならぬ。私達の思想はもつと嚴しく生活と結合されてゐる。私達の本能はもつと存在の根柢と味通してゐる。

制作品が一個の肉體であれば、その上に更に「問題」と解決といふ衣を着せて置かなければどうしても承知の出來ない色々な意味の主義者と稱する者、その一個の肉體の中に問題が血となり肉となつて不可離の關係にあるものを、强ひて血を奪ひ肉を捨て去つて、有耶無耶の氣體的幻影を描き出さんとする所謂藝術至上論者、私はこの二つのものが實質ある藝術の敵であると云ふ事を忘れてはならぬ。

以上の感想には多くの點に於て不備がある事を私が一番よく知つてゐる。所謂「問題」と云ふ言葉の內容の不正確、大小雜多のリズムで織り成されてゐる人間の運命には如何なる瞬間にも多かれ少かれ昂進期と衰退期と過渡期との竝存してゐる事、これ等は更に思議を加へねばならぬ要點の一例である。然し私は自分としては表現しようと思ふものゝ精神だけは云ひ現はしたと信ずるが故に、他は凡てこれを難者の論議に任せておく。

（一九二〇年一月、「新潮」所載）

ルベックとイリーネのその後

イブセンがその最後の作として七十四歳の時、世に提供した戯曲「死者の復活する時」は、私達に取つて極めて意味の深い賜物ではなかつたか。

あの戯曲に於てイブセンは――イブセンを通じて、將に過ぎ去らんとしつゝあつた當時の藝術は――その使命と、態度と、功過とに就いて眞摯精刻を極めた告白を敢てしてゐる。私はあの戯曲に於て超絶的なイブセンの努力と、その努力にも係はらず陷らねばならなかつた醫す可らざる悒鬱とを見て取る事が出來る。イブセンは永久に沈默する前に自己に就ての總勘定をした。彼は老いても誤算をする事がなかつた。又僞る事がなかつた。いくら酒を飮んでも醉ふ事の出來ない人の物凄い冴え〴〵しさがそこにはある。彼の周圍が凡て中途半端で物を片附けてゐる間に、イブセンのみは眸を定めてぢつと自分の一生を睨みつけてゐる。而して回復する事の出來ない悔恨を以て、而も無縁の人を糺彈する程の精刻さを以て、彼自身の事業の缺陷を暴露してゐる。

戯曲の主人公アーノルド・ルベックは「眞實」に捧誓する事に於ては神の前にも疚しさを感じない嚴粛な藝術家だつた。「愚衆及び公衆卽ち『世間』の爲めに死力を盡して勞役する馬鹿らしさ」を十分に知つてゐる藝術家だつた。彼は自己の滿足の爲めに一つの大作を目論んだ。それは「復活の日」と云ふ彫刻だつた。ルベックは僥倖にもイリーネと云ふ絶世のモデルを得た。イリーネも亦ルベックに於て天から賦與された美の凡てを表現すべき巨匠を見出し得た事を知つた。而してこの貧乏な無名の若き藝術家の爲めに、妖艶な自分の肉體を望に任せて惜みなく提供したばかりでなく、親しい家族朋友からも孤獨になつてしまつた。かくて「知りもせず、思ひも設けぬ

ものを見て驚く樣子は更になく、永い死の眠りの後に目覺めて見れば、死ぬ前と少しも變らぬ自分――卽ち地上の一處女が、高く、自由な、幸福な世界に現はれ出てゐるのを發見して、聖なる歡びに滿された」その驚きの瞬間をいみじくも表現した大彫刻が出來上つた。イリーネはそれをルベックと自分との間の愛兒と名付けた。この大作によつてルベックは一躍して雷名を轟かし、その作品は忽ち美術館の貴重品となつた。

ルベックが正にその作品を完成しようとした時、彼はイリーネの手を暖く握つた。イリーネは氣息もつまる程の期待を以てそこに立つた。その時ルベックの云つた言葉は「今こそはイリーネ、私は心からお前に感謝する。この出來事は私にとつて値踏みも出來ない程尊い一揷話だ」と云つた。揷話――この一語を聞くや否やイリーネは突然ルベックの眼から姿を消してしまつた。

ルベックは無益にイリーネのありかを探した。而して彼の上には再び前のやうな藝術的衝動は歸つて來なくなつた。彼はいよ〳〵世評と云ふやうなものゝ空虛を痛感した。

旣に老境に向はうとするルベックはその雷名と巨萬の富とを擁して若き美人なるマイヤをその妻に選んだ。然しマイヤは常にルベックと埋め難い隔りの中にのみ住んだ。而してパンを思はせるやうな獵人の出現と共に容易に誘はれてルベックを離れてしまつた。

その代りに幽靈の如くに痩せ衰へて、魂を失ひ去つたものゝやうな表情をしたイリーネが突然ルベックの前に現はれ出る。

而して二人は會話の中にかう云ふ事を言ふ。

「イリーネ。――何故坐らないのです、アーノルド。

ルベック。――坐つてもいゝのか。

イリーネ。――えゝ――凍る事はないから安心なさい。まだ私は全くの氷になつてはゐませんから。
ルベック。――(彼女のテーブルの所に椅子を移して) さあ坐つた。昔のやうに私達は二人で一緒に坐る。
イリーネ。――矢張り昔のやうに……少し隔りをおいてね。
ルベック。――(近寄つて) その時はさうしてゐなければならなかつたのだ。
イリーネ。――ならなかつた。
ルベック。――(はつきり) お互の間には隔りをおかなければならなかつたのだ。
イリーネ。――それはどうしても必要だつたのでせうか、アーノルド。
ルベック。――(續けて) 一緒に私と廣い世界に乘り出さないかと私が云つた其の時、お前の答へた言葉を思ひ出せるかい。
イリーネ。――私は三本の指を立てゝ、世界の果てまでも命の末までもあなたと行きませうと誓ひました。さうしてどんな事でもしてあなたのお役に立たうと。
ルベック。――私の藝術のモデルとして……
イリーネ。――……もつと遠慮なしに云へば眞裸かで……
ルベック。――(感じて) さうしてお前は役に立つてくれた。イリーネ……大膽に……喜んで……さうして思ひ存分に。
イリーネ。――さうです、血の燃え返る若さを捧げて私は仕へました。
ルベック。――(感謝の表情) それはもうその通りだつた。
イリーネ。――私はあなたの足許に跪(ひざまづ)いてあなたに仕へました。(握り拳をアーノルドの前につき出し) それだのに

あなたは……あなたは……あなたは……

ルベック。――（禦ぐやうに）私はお前に惡い事をし向けた覺えはない。決して、イリーネ。

イリーネ。――なさいました。あなたは私の胸の奥のまだ生れ出ない天性を虐げなさいました。

ルベック。――（驚いて）私が……

イリーネ。――さうです、あなたが。私は思ひ切つて洗ひざらひ私自身をあなたの眼に曝したのです……それにあなたは一度でも私に觸らうとはなさらなかつた。

＊

ルベック。――……崇高な思想でなら兎も角、決して實際に觸れてはならぬ神聖なものだと私はお前を考へるやうになつてゐた。その頃は私も若かつたのだ。で、何んとなく、若し私がお前に觸れたら、私の肉感的な考への中にお前を引込んだら、私の魂は汚されて、私が望んでゐるやうな仕事は成就しまいと云ふ迷信を持つてゐたのだ。これには今でも多少の理窟はあると思ふが……

イリーネ。――（一寸蔑んだ風で）藝術の仕事が第一……それから第二に人間ね」

さうしてこれ等の凡てはルベックに取つて一つの挿話である事に終つたのだ。それが如何に尊い挿話であつたらうとも。この時イリーネの天性の絲の或るものは絶たれてしまつた。若い、血の熱い一人の女性が死ぬ時に必ず起るやうに、天性の絲の或るものは絶たれてしまつたのだ。かくてイリーネはその瞬間から魂を失つてしまつた。Soulless になつてしまつた。ルベックにもそれは亦同じ結果を與へた。彼にはこの挿話の結果として、衆目の見て大なる藝術とするものを生み出したにも係はらず、如何にしても滿たす事の出來ない空虚が殘された。イリーネの言葉を借りて云へば「地上生活に屬する所の愛――美しい奇蹟的なこの世の生活――たとしへないこの世の生

活——それは二人の中に死に絶えてしまつた」のだ。

ルベックはそれでも最後の努力を惜まなかつた。生涯をかけて尋ね損ねた眞の力を取り戻さうとした。而してイリーネを促して高山の頂きにそれを求める可く登つて行つた。

彼等を迎へたものは然し悲しくも眞の力ではなくして雪なだれだつた。魂を見出し得る前に彼等は千仭の谷底遠く死の地へ落ちて行かねばならなかつたのだ。

イブセンはこの戯曲を書いた後永久に沈默してしまつた。この峻烈な、無容赦な、傷ましい告白を私は嘗て聞いた事がないと云つてもいゝ。

嚴肅な自然主義の捧誓者であつたイブセンを通じて自然主義はこの傷心の叫びを擧げた。他の人からこの叫びを聞いたならば、私はそこに老齡が已むを得ず敢へてするごまかしを見出して不快に思ふだらう。或は不徹底な先走りだと云ふ侮蔑を洗ひ去ることが出來なかつたかも知れない。然しイブセンからこれを聞かされると、而してあの傲岸不屈な巨頭を垂れて時代の歩みの早さにぢつと思ひ入る誠實な老藝術家の晩年を頭に浮べると、深い哀愁と同情とを胸に湛へずにゐられない。

何處までも、力の限り戰つて、先陣に立たんとする勇ましい鬪士よ。今は安らかに眠れ。あなたの仕事は大きな偉い仕事だつた。あなたは深傷を負ひながら死ぬまで立ち上らう〳〵とする牡獅子のやうな勇ましい生涯を私達に示してくれた。あなたはもうそれでいゝ。それで云ひやうなく立派だ。

然しルベックとイリーネは生きた問題として私達に殘されてゐる。ルベックはイリーネに對して藝術家である前に人間であらねばならぬだらうか。ルベックがイリーネに對して地上生活に屬する所の愛に赴いた時、そこに藝術は生れ出るだらうか。如何にしてその愛に赴くべきだらうか。イブセンは謙遜にもこの恐ろしい謎を解くべ

き榮譽を私達に頼んで、自分は未練げもなく沈默した。

當來の藝術はこの謎を最も正しく解くものゝ上に榮えねばならぬ。イブセンの能はざりし所を成し得るものはイブセン以上の人であらねばならぬ。自然主義の成就した總和の上に築かうとする者は自然主義以上の力であらねばならぬ。

私はこれだけの事實を知る。然しこんな大きなものゝ前に立つと唯畏れるばかりだ。

（一九二〇年一月、「文章世界」所載）

美術鑑賞の方法に就いて

美術に關しての門外漢である私は美術そのものゝ內容に就いては權威ある言說をなす事の出來ないのを恐れる。然し平生、美術を愛好し、それを賞味するのを一つの大きな喜びとしてゐる私は、美術を鑑賞する方法に就いて普段思つてゐる事を申し出てもさして僭越な事ではないと信ずる。

私有にされた美術に對しての鑑賞の方法はその私有者各々の趣向に任すより外はない。公衆の鑑賞に供せらるべき美術に就いて云ふと、從來一般に行はれ來つた方法は最早や觀衆の滿足を買ひ得べきものではないと思ふやうになつた。その方法と云ふのは氣稟や表現の方法に可なりの懸隔のある美術家が一緒になつてその制作物を觀衆に示さうと云ふ方法である。これは何時その端緒を發したか私は知らない。又どうしてかゝる方法が發達したかその經路も知らない。然しながらそれ等の點を推定するのは强ち困難な事らしくはなく思へる。惟ふに近世になつて美術が漸く民衆に向つて解放され始めた時に、卽ち貴族や權力階級が漸次その威力と聲望とを失ひ始め、民衆一般の敎養が向上して、美術が限られた少數者の翫弄物であり、その客間の裝飾物である境界から救ひ出されるやうになり始めた時、ある巨匠とか、一つの流派の長者とか云ふ人がその流派を汲む人々と共に自分の藝術を一般民衆に披露する爲めに生み出したものが今日の所謂展覽會なるものゝ濫觴ではなかつたらうか。その時代にあつては展覽會は貴族の代りに或る流派の長者と云ふ權威者を見出したに相違ない。佛國が他の諸邦に先だつて公衆に向つてその國有の美術を開放し、次いて當時の美術家をしてその制作品を一堂に集めて展覽に供する施設を創めた時でも、惟ふにその出品の選定は一に限られた欽定の大家の眼識のみによつて左右されたに違ひない。

かくして客間から解放された美術ももう一度所謂大家なるものゝ桎梏の下に呻かねばならなかつた。然しかくの如き束縛も、迅速な民衆の覺醒の前には永く續かなかつた。現在我々の有する展覽會はその自由さに於て當時の組織とは比べ物にならない。勿論現在にあつても過去の因習は可なり影濃くさまよつてゐる。選者を有する展覽會はどれ程それが公平に行はれるとしても、矢張り過去の傳統を持續して成り立つてゐるものと見る外はない。

我々は同時に無選展覽會なる組織を有するに至つた。これは形式から論ずると、同じ展覽會ではあるが、その制作品の鑑別を大家に委ねる事を全くしないと云ふ點に於て、確かに一種の改革である。然しこの種の展覽會が成り立つ爲めには、一定の流派の存在を肯定せざるを得ない。その同人たるものはその藝術上の制作動因若しくは氣質に於て、互に共鳴するものである事を必要とする。

私は然し玆で考へて見たい。一體今の藝術なるものに流派なるものが存在する餘地があるだらうか。自分の藝術から類推して斷ずる事を許されるものとすれば、私は凡ての藝術は個性的であらねばならぬと思ふのである。その制作者自身の個性、氣質、技巧が嚴密に交雜なく表現される所にのみ正しい意味の藝術は成り立つのではないか。一人一流派と云ふのは私の年來の主張である。これが正しい見方であるならば、縱令無選であつても、集合展覽會なるものは、矢張り幾分か過去の無意味な傳統に煩はされた現はれだと云ふ事を拒む事が出來まい。若しそれが流派といふ事よりもつと實用的な目的から行はれてゐるとすれば、觀者に取つては益〻迷惑な事であらねばならぬ。

私は私一個として上の如き種類の展覽會に成るべく早くその實用的な、若しくは流派的な必要から解除されて、美術界から影を隱す事を望んでやまないものである。

最後に考へられるのは個人展覽會である。現今の美術鑑賞の方法としては私はこれを最上のものと考へざるを

得ない。そこには何時でも一人の藝術家が純粋に立ち現はれ、一つの流派が完全に代表されてゐる。觀衆は或る種の氣質や技巧を咀嚼し切らない内に又他の氣質技巧に煩はされる、極めて非藝術的な焦躁から、嬉しくも救ひ出される事が出來る。

加之、一人の藝術家の所産は縱令零細なものであつても何等かの意味に於てその藝術家を反影しないものはないけれども、その製作品が集成された時に勝つて力強く正當に訴へて來る事は出來ない。例へば伊太利のやうな明るい空氣の中で、絢爛な光彩を放つ大きな畫圖の間に、一枚の野心的でない素直な和蘭畫家の描いた日常生活を主題にした畫面に接して見るがいゝ。それは可なり注意深い同情ある眼を持つた人にでも無視され易い運命に遇はねばやまぬだらう。此の如き畫は和蘭の空氣を背景にした一堂の中に集められてこそ始めてその本眞の美を反影し合ふのに相違ない。如何に私の好きな畫家でもそれが唯一枚、數多の他の畫の中に介在してゐては、その畫が他の畫から嶄然頭角を現はしてゐるぞとの一種の痛快味を私に感じさせる以外、その畫から私に迫つて來る畫家の藝術味は非常に稀薄になつてしまふであらう。この意味から考へても、一人の藝術家の作品を多數に集めた展覽會が如何に有意義であるかゞ首肯されねばならぬ。

大展覽會場を破棄せよ。多數の小展覽會場を所在に起せ。而して自覺ある藝術家は自分の作品だけを提げて、獨力を以てこの小展覽會場を占領せよ。第一そこには集合展覽會で見なければならぬ有象無象の我れ勝ちな混雜がないだらう。それだけでも觀衆に取つてどれほどの恩惠であるか判らない。作家は自分一個の趣味に從つて會場の內部を隅から隅まで裝置する事が出來る。自分の作品に對して本當に關心を有する觀衆だけを作品の前に立たせる事が出來る。それだけでも作者に取つてどれ程の快事であるか判らない。縱令此の如き比較的外面的な些事は度外視しても、藝術鑑賞に一番大切な事卽ち藝術家にまでの純一な浸滲は此の種の展覽會に依らなければ到

底達成されるものでない。

雜者は或は云ふだらう。各個孤立の弊は多くの藝術の比較的な價値の設定に不便である。一堂に技を鬪はしめて始めて藝術家の價値は定まり易いと。これは藝術を角力と間違へた誤謬から來る。角力の價値は多く土俵の上の勝敗に於て決せられるけれども、藝術の優劣は比較からは定められない。例へば、或る繪の筆觸が或る他の繪の筆觸に比して拙劣であると云ふ事が必ずしも二つの繪の價値を上下しやしない。屢〻拙劣な筆觸はその繪そのもの〻尊い屬性であり得る。眞に一つの藝術が他の藝術から立ち勝らするものは、その藝術が全體として人に迫る味ひであらねばならぬ。此の如き意味の比較が可能であり得るためには、雜然と陳列された一二枚づ〻の違つた作家の作品を見較べる事の非常に不利益であるのは誰にでも看取される所であらう。

或は又云ふだらう。個人展覽會だけでは新進の作家が自己の價値を認めしめる機會を少くすると。私は寧ろそれを喜ぶものだ。現在のやうな展覽會の方式では、新進作家の不熟な技倆が餘りに迅速に認められ過ぎる。逸早く咲き誇つて、逸早く萎んで行く新進大家が藝術の空氣を濁す事を忌むものは、私の高慢らしく聞こえるこの言葉にも首肯してくれるだらう。藝術の民衆化を私は喜ぶもの〻一人ではある。然も藝術を制作する以上はそこに他の凡ての事業に立ち勝るとも劣らないだけの研究と精勵とが行はれなければならない。若しこれだけの事を爲してしかも天才を備へてゐる人であつたなら、その人には個人展覽會で自己を表現すべき機會はちやんと開けて來る。それなくして單に偶然に成功したやうな一二點の作品を以て世の視聽を牽かうといふ人々だけには表現の機會は閉されるだらう。然しこれを悲しまなければならない理由を私は發見する事が出來ないものだ。他人の光背の光を分けて貰つて、あはよくば僥倖にありつかうとするやうなさもしい機會を斷絕する個人展覽會に、自分一人だけの藝術境を開拓して、謂はゞ裸身のま〻の自分を認めて貰ふ事は藝術家に取つてはこの上もない快事であるだ

らうし、又我々觀者に取つては彼處此處に割據する藝術の宮殿に參詣して、全然纒まつた藝術家の氣稟を素直に受取るその喜びに越した喜びはない。

官設展覽會と云ふやうな、政治上で云へば御用政黨にも該當すべき膨大な團結が在る間、その跋扈專斷を制する爲めには、又一つの藝術家の大きな團結を必要とはしないかと云ふ如き議論——私には重要視さるべきものではない。そんな形勢に眩まされる爲めには我々民衆は少し進み過ぎてゐる。本當にいゝものが與へられゝば我々はそれに反應して行くだけの力は持つやうになつてきてゐる。一人の藝術家と一箇の官設展覽會とを、天秤の兩端に置いても、我々は量的評價にばかり迷はされはしなくなつてゐる。我々の要求する所は交雜なき藝術境に味到したい事にある。我々は眞にそれに餓ゑてゐる。私は今の觀衆の可なりの多數を代表して以上の事を公言しても決して獨りよがりには陷らない事を信ずるものだ。美術家は私を信じて頂きたい、而して諸君の制作の發表の方法に關して十分に考へていたゞきたいと思ふ。

これは少し餘事に亙るかも知れないが、私が辿つて來た同じ理窟から、國際聯合委員會に向つて次のやうな事を希望して見たい。それは Restoration of art to its own birthplace と云ふ事だ。委員會がこの機會に於て、各國の代表的藝術品をその假りの宿りからその生れ故鄉なる本國に返濟し合つて貰ひたいと思ふものだ。今後世界の思潮が混和し融合して、國境的差別を薄くして行くに從つて、今後の藝術に關しては私の提言は或は無益になるかも知れないが、今は既にクラシックになつた過去の藝術にあつては、その藝術の生れ故鄉との關係は假初めのものではない。劍がその鞘を慕ふやうに、それらの藝術はそれを生み出した雨と日光と水と土とを慕つてゐる。然るに彼等はその生れ故鄉から王者の威勢によつて、マムモンの黃金の光によつて、暴戾な兵士の荒くれた手によつて、かどはかされた處女のやうに、見も知らぬ異鄉に運び去られてそこに懷鄉の淚を流してゐる。ラファエ

子が縱令素晴らしい一室を提供されて、美しい帷によつて護られてゐるにせよ、それがドレスデンの畫堂の內にあつては見るに痛ましい。レムブラントの「解剖」がいかに玉座のやうな位置を與へられても、それ南歐の一角に囚はれてゐては、その所を得てゐない。それらの凡ては、この機會に、その磔刑の釘から放たれて、その生れ故鄕に歸るべきではないか。進んではティントレットとチシャンはヴェニスに、レオナルド・ダ・ヴィンチとルイニとはミランに、フラ・アンゼリコとジォットとはフロレンスにと云ふやうにまでしたいと思ふ。

諸邦の美術品が雜然と或る國の一堂に集められると云ふ事は、それ自身に利益がないではない。美術愛好者はゐながら多數の天才の作品に接する機會を容易に有し得る。エキゾチックの異味は、幽囚になつた藝術の發する特殊の匂ひだ。然しながらかゝる末端の利益や興味が、眞正なる藝術の味到に比して何たる些事だらう。日本の浮世繪に特有な價値は、それが濕ひの豐かな重い空氣と、微笑む如き溫和な日光と、藍色を基調とする一種の自然の色彩との間に置かれなければ、眞に發揮する譯には行かないと思ふ。

篤敬な基督の信者はその師の生活を知らん爲めに、難解な希臘語を學ばなかつたか。ダンテを知らうとする者は伊太利語の知識なしには眞に知る事が出來ないと云ふではないか。獨り美術に於てその除外例を見る事が出來ようか。代表的な美術制作をその生れ故鄕に返せと云ふ私の考へを、一概に見て人は笑ふかも知れない。然し私はその笑ふ人に一概に承服する事は出來ない。我々が現在の美術家の個人展覽會を要望するなら、過去の天才にも亦その特權を回收せしめねばならない。

婦人と勞働者とその他の囚虜が解放さるべき時が來た。客間に、他鄕に、永く幽囚されてゐる藝術をも亦解放せよ。而してその在るべき座席に羈束なく立たしめよ。

（一九二〇年一月、「太陽」所載）

自分に云ひ聞かせる言葉

通人

通人を以て人も許し自分も任じてゐる人がある。一體通人とは自分がたづさはつてゐる道にかけては、完全の理解を有つてゐる人の事だ。大通と人の噂する人々の中には本當にかうした種類の人がゐるやうだ。その人に取つては研究といふものゝ必要は殘されてゐない。その人が一目見さへすれば、卽座に物の眞相、卽ち善惡、良否が誤りなく分つてしまふ筈なのだ。さういふ人は偉い人にちがひない。

然し私一箇の趣味から云ふと、普通受け取られてゐる意味からの通人なるものには何うしても好意を持つ事が出來ない。例へばこゝに着道樂の所謂通人があるとする。その人には衣服について一定の趣味があつて、誰が何と云つても、自分のその趣味が第一のものだと心得てゐる。而して誰の前にでも自分の趣味で出來た服裝をして出て何の憚る所もないのみか、衣服についてはそれ以上精練された趣味はないと確信してゐる。全く無趣味な人に比べて見ると、それは確かに定見もあり、勇氣もある心構へである、行爲であると云はなければならない譯だが、私にはそこに何か物足らないものが殘されてゐる心持がする。何がそんな心持を起させるのかと思つて見ると、第一その人は自分の趣味が最上のものだと心得てゐる所に物足らなさを感じさせるし、第二自分の趣味を誇示し押し賣りしようとする所に反感を催させるのではあるまいかと私は思ふ。第一の點ではその人の趣味性に進歩の餘地が閉されてゐる。實際その人の服裝が變りつゝあるにしても、その人自身はその變化を意識しないで、自分の趣味は一定不變最高のものと思ひ入つてゐる。それ故外部から見てその人の趣味がどれ程變化してあらうとも、

その人自身に取つてはその變化が全く機械的であつて、有機的な交渉を有つてゐない。進步と變化とは違つたものだ。所謂通人と云はれる人にあつては、變化が進步と云ふ道筋を通つて現はれて來ないで、必ず停滯と云ふ形で現はれる結果になる。何故と言へば、自分の趣味性が最高だと思ひ込んでゐるその人に取つては。進步と云ふ意識なり衝動なりが全然働いてゐないからだ。さう云ふ物事の表はれは、それに接する人に如何にも心許ない思ひを起させる、それだけで濟めば先づ仔細はない。それはその人の一種の癖だとして傍人は看過してゐる事が出來る。けれども所謂通人は自分の最上優越感を無批判に抱いてゐるだけでは滿足しないで、惡い事にはこれを他人に押し賣りしようとするものだ。それは最上優越感が當然させねばおかぬ事ではあるが、かうなると、事はその人の問題ではなくなつて來る。若しその人の趣味の押し賣りが私に向けられた場合を想像すると私は平氣ではゐられなくなつて來る。惡意を持たないまでも、何うしても好意を持ち得ないと云ふ心持に支配されてしまふ。

私は今迄世の所謂通人といふものに對して、かう云ふ心持を捨て去る事が出來ないでゐた。女と遊ぶといふ事に一種の型を作つて他人眼にはその型が強ち最上のものと思へぬのに平氣でそれを珍重し過ふ人每に自分の態度を誇示して、上向き加減に顎を撫でるといふやうな人には、私は云ひ知れぬ不快をすら感ずるのだ。進步とか發達とか云ふ大事なものを取り落しておきながら無反省にもその境界に大胡坐をかいて、已れに見ならへといふ人があつたら誰でも不快を感ぜずにはゐられないと私は思ふのだが。かうした通人型の人は、色道とか酒道とか音曲とか骨董いぢりとか碁將棋とかにあるものだとばかり私は思つて來た。而して實際普通通人と云へば先づさうした種類の事柄に對して自分免許を振り廻す人を指して呼んだ稱呼であるだらう。所がこの頃私は上に揭げた樣な道にかけて何等の自信もない私は動もすると立派な通人になつてゐはしないかと云ふ事を考へるやうになつた。氣がついて見ると通人はそこにもこゝにもゐる。殊に私がなりたくないと思ふのは道德上信仰上の通人だ。

ある人の行爲が道德上の問題を惹き起す。さうするとその周圍にはきつと道德上の通人が寄り集まつて、銘々の立場からその人の行爲を彼れ是れと非議する。問題にされた人の遺傳なり、敎養なり、境遇なりが、その通人達のどれもと同じであるかのやうにその人達は天から決めてかゝる。自分ならあの場合あゝはしなかつた。然るにあの人はさういふ事をした。だからあの人のした事は道德的に罪だ。さう云ふ論法が容赦なくさし向けられる。成る程そんな場合にも表面的には境遇敎養その他の事が一わたり考へられないではない。然し道德上の通人達に云はせると、それは一應考へては見たが、結局自分の境遇なり敎養なりとさして違つてゐない事になるのだ。それであるのに、自分はそんな道德上の失態はしないのにその人はやつてゐる。怪しからんと、簡單に結論してしまふのだ。新聞の三面記事に一度眼をとほすと、さういふ實例は飽きる程毎日現はれて出て來る。「あの人は不道德な生活をしてゐはしないか」、さう頭から他人に質問するやうな人もある。さう云ふ事を云ふ時、質問した當人は、自分の行爲が最も、と云ふ事が出來なければ、より道德的であるといふ物凄まじい大自覺を持つてゐるのだ。而してその自覺を他人の道德的行爲にまで押賣りをしようとしてゐるのだ。自分の事を棚に上げてゐるかも知れないが、私は屢〻かういつた型の道德家に出遇つて、好意の持てない心苦しさを感ずる。その心苦しさには何處かで出喰はしたやうだとは思ひながら、取りとめもなかつたが、近頃になつて、それがあの所謂通人なるものから受ける心苦しさと同じであるのをはつきり知る事が出來るやうになつた。私が殊にその事を思はせられたのは松井須磨子の自殺が世に傳へられた時だつた。如何に多くの道德上の通人が多士濟々と云ふ勢ひで輩出した事よ。自分一箇の始末だけで、人は大抵手一杯であらうと思はれるのに、途轍もない大鐵槌で、あの一人の女性は四方八方から平べつたくなる程たゝきつぶされてしまつた。しかも須磨子に一面の識もなく、その性格についても知る所のない人々が、少しの躊躇もなく自由自在に鐵槌を振り舞はして、うつかりしてゐる傍觀者にまで遠慮

なく側杖を喰らはした。それは考へて見ると全く私に通人の意氣を思はせる。「あれは未信者の方ですから」………これは實際信仰的通人に對する好意の持てなさ加減を覿面に表白した言葉だ。それは神に對する信仰であらうとも、佛に對する信仰であらうとも、皇室に對する信仰であらうとも、國家に對する信仰であらうとも、凡て同じ事だ。自分と同じ信仰を持ち得ないものは、人間ではない、頼みにはならぬ、地獄に行くべきみじめな魂だと口に出さないまでも、心の奥底の方で思ふのが彼等の癖だ。だから罪人の集りであるべき筈の教會には罪人は一人もゐないで義人ばかりがある。罪人が出ればその罪人は容赦なく退會させられるからだ。かうした通人が澤山ゐればゐる程その團體の基礎は鞏固になるのかも知れないけれども、而してそれは結構な事なのかも知れないけれども、私には感情として何うも好意が持てない。

吉野博士が何處かで云つて、私は味のある言葉だと思つたが「大事な事はいゝと思ひこむ事ではない。いゝものでありたいと思ふ事だ」通人になる事から免れ得る道はたゞこの一つの外にはないやうだ。考へて見ると碁將棋や遊道の通人は實に罪がない。私は何うかしてもつと罪の深い通人にはなりたくない者だと思ふ。通人がゐないと如何なる團體の基礎も鞏固であり得ないかも知れないが、假りに通人のゐない生活を考へて見るのも一興ではあるまいか。少くとも通人のゐない社會には嘸ぞ好意が持てる事だらうと考へる。そこでは先づ何より銘々の持ち場に立つて、自分の仕事を後生大事と心懸ける、押賣りはしない。若し他人の事に口に入れる事でも起つたら、その人の行爲よりもその心の有樣を自分のものにして考へて見る。自分の方に最上優越感がないのだから、ぴちり〳〵と自分の定木にあてはめて、神のやうに他人を忖度する譯には行かない。他人に自分以上の事の出來る人があつたら、心から感心してしまふ。感心した以上はその人を稽古臺にして自分を鍛へ上げる。かうなると私には十分好意が持てさうだ。けれども通人に云はせると、そんな事をしてゐては、國家の權威がなくなり、社

會に秩序がなくなり、道德に規範がなくなり、學問に統一がなくなり、宗教に信仰の對象がなくなり、藝術に批評の餘地がなくなり、人間に勇猛性がなくなつて、生活は根柢的に覆される結果に終るだらう。さう云はれても私に取つて、矢張りかうした主張に好意を持てないのは同じ事だ。

上辷り

近頃シベリヤに行つて歸つて來た人が私に物語つて云ふには、向うで退屈まぎれに活動寫眞館にでも這入つて見ると、この頃のシベリヤの事とて、見るも慘めな服裝をして無學らしく見える觀衆が多數を占めてゐて、映畫はまた殘酷とか卑猥とか危險とか、思はず顏を背け聲を放つやうな種類のものばかりであるにもかゝはらず、見物席は靜肅を極めて、こちらは吹き出す程をかしい時でも、笑聲一つ響かせず、見るに見兼ねる卑猥な場面にも妙な懸聲などする者もないのは、つくづく不思議に思ふ程だとの事だつた。私はそれを聞くと又思ひ合せる事がある。ケレンスキー內閣の末期に、その內閣が王朝內閣と同じ外交方針を取つてゐるのが怪しからぬと云ふので、熱狂した群集が大臣を馘れと犇いて內閣に押し寄せた事があつたさうだ。時の外務大臣はその騷擾を見ると自ら二階のバルコニーに姿を現はした。群集はその有樣に益ゝ熱狂して、その白髮頭を切つて渡せとわめき立てゝ制止する餘地などはあらうとも見えなかつた。外務大臣は然しその叫喚の中にも僅かに發言の隙を見出してから云つたさうだ、「諸君にして若し否應なしに自分の首を要求すると云ふのなら已むを得ないから自分はそれに從はう。然しその前に一つの事に耳を傾けてはくれまいか。外交は露西亞の外交であつて、ロマノフ家の外交ではない。露國は交戰の當初から英佛その他の聯合國と步調を共にする事を盟つた。縱令ロマノフ家が覆つても、それは露國が覆つたのではない。露國が存立する以上は如何なる危險の前に立たうとも國の義を曲げる事は出來ない。諸

君は背信の國として露國の名が歴史の上に殘るのを選むか、それとも重義の國として靑史を照すのを望まないか」この間かの何物をも燒き盡さずにはおかぬやうに見えた群集は段々鳴りを鎭めて、老人の言葉に耳を傾け、演說が終ると一變した態度になつて、その外務大臣に好意ある挨拶を送つて、無事にその場を解散したさうだ。それも當時その場にゐ合はした日本の外交官から私が親しく聞いた所だ。その活動寫眞の觀衆が强い刺戟に慣れてゐて、日本の靑年を驚かした映畫の如きは家常茶飯事に過ぎないのだと云へばそれまでだ。又その外務大臣は巧妙な詭辯家で、激昂してゐる群集は容易に詐かれ易い鈍頭の集團に過ぎないといへばそれまでだ。

私の素朴さがさうさせるのかは知らないけれども、私にはこの二つの事實はもつと深い意味を有つものらしく考へられる。露國民には實に一面かうした冷靜なものが潜んでゐるのではないか。であればこそ人民は何百年といふ間、他國にはあり得ないやうな專制の强壓の下に忍從する事を敢てしたのだ。數知れぬ程の志士仁人が民衆の爲めに蹶起して暴戾な國法の下に、あらん限りの辛酸を嘗めたにも拘らず民衆は惰眠でも貪つてゐるかの如くに、いつまでも重い覊絆に呻きながら、彼等の辛酸を對岸の火災とでも思つてゐるやうに見えてゐた。その無感覺とも思はるべき忍耐力は傍眼にももどかしい程のものだ。大概の志士仁人なら惘れてしまつたであらう。然し志士仁人も露人に通有な忍耐力の持主であつたに違ひない。何時の時代にも民衆の爲の殉敎者は交る〳〵現れ出た。而してその强い氣魄と濃い血液とが民衆の體內に充ちる迄傳へ込まれた頃になつて民衆は徐ろに膝を立てた。

一旦膝を立てた以上は、一旦かうと理窟が分つた以上は、民衆は××も遂に××する事の出來ない×となつて現はれた。最近の露國の革命はかくの如くして地球の表面に×××××する事の出來なかつた奇蹟を演じ出だしたのではなかつたらうか。

二年前にはデモクラシーを民主主義と譯する事さへ憚られた、今日は國會議員の中で最も暗愚な一人を捕へて

見ても、恐らくはモットーの如くにこの語を云ひふらすだらう。數年前までは國家に取つて火よりも危險と思はれてゐたマルクスは動もすれば資本家にすら提唱されるやうになつた。今日クロポトキンは二人の大學助教授の職を奪つて、國憲紊亂の汚名を蒙らせようとしてゐる。來年には彼は恐らく××××××から呼びかけられるだらう。專門家でない私はかう云ふ問題については全く知る所がないと云つていゝ位正確な知識に乏しいのを自分で覺悟してゐるが、この猫の眼のやうに迅速な、氣の利いた變化をたゞ時勢の加減とばかりは思つてゐられない不安を感ずるものだ。密かに社會主義の思想家實行家が、日本でも長い間隱約の中に主義の宣傳に努力した、その努力を無視しようとするものではない。然し國外の時勢の變化につれて何の苦もなくかう變つて行く日本人の××な頭腦を私は讃美していゝのか、恥づべきなのか。恐らくかゝる問題の宣傳に從事した主義者達は餘りのあつけなさに背負投げを喰つたやうに思つてゐるのではあるまいか。

自分の畑に歸つて私のたづさはつてゐる文藝の事柄に關して考へて見ても、一つの潮流への推移は餘りに唐突で、不用意で、簡單だ。ユーゴー一人に刃向ふだけのロマンティストも出ない中に、世の中は自然主義の時代になつてしまつた。フローベル一人に拮抗するナチュラリストも出ない中に、人道主義の時世が來た。トルストイ一人を向うに廻すヒューマニストも出ない中に、ネオロマンティシズムが提唱されようとしてゐる。

一體私達の眞に求めるものは何なのだらう。海外に於ける生活若しくは思想の稀薄化と云ふ事なのか。それなら或る程度まで私達は成功してゐると云はなければならぬ。然しそれが何事に役立つのだらう。濃い水よりも薄い血の方が少しましだからと云ふのか。濃い水が血の値を有たないなら、私達は濃い血を要求しなければならないのではないか。この場合、緣の下の力持ちになる程の事を厭つてはゐられない。幾年かゝつてもいゝから本物を過たず掴みたいものだと私は願ふ。拾圓と押してあつても似而非の金貨は掴みたくないものだ。

その爲めには私達は割引の購入を愼まなければならぬ。必要なだけの代償を立派に拂つて商標の確かな商品を買ひ取らなければならぬ。電話で註文しないで、現物を調べて見なければならぬ。それはおのづから社會の要求といふよりも個性の督促がさせる事だ。社會の要求は往々にして間に合はせもので滿足する。本當の個性の督促はもつと深い處に根ざしを持つ事が出來る筈だ。例へば露國は――例を前に戻すと――その社會の狀態から云ふならば、もつと早目にもつと皮相な改革をやつてゐたら――國際的關係から云つても、國內の平和から云つても、都合がよかつたかも知れない。然し露國の社會を形成してゐる個性の眞の要求から云ふと、さう云ふ皮相な改革は恐らく益をなすよりも害を醸した事であらう。今まであすこから現はれ出た尊い思想と實行とは――世界中を霑(うるほ)してなほ餘りあるやうなそれは尊さだ――恐らくあの地には哺(はぐく)まれないでしまつたらう。それをなし遂げさせたものは實にあすこの人々の、上辷りのしない、落ち着いた、深酷な個性が然らしめたと云はなければならぬ。深い所から出た個性の督促にめいめいが忠實に從ふ事によつてのみ、本當の生命は生れ出て來る。

爲政者は外境の如何にばかりくよくよしてゐずに、大膽に、正直に、頑强にその思ふ所を實行して貰ひたいものだ。自信を以て壓迫すべきものは顧慮する所なく壓迫するがいゝ。如何なる方面にまれ權力を使用し得ると感ずるものは躊躇なくその權力の使用を徹底させるがいゝ。而してその下に個性の思想なり實行なりが萎縮してしまつたら、日本の人間は、壓迫なく權力の使用なくとも、生長の出來る質の人間ではないのだ。兎にも角にも上辷りの境界から私達は去らなければならぬ。私はこの頃になつてその事を感ずることが深くなり出した。自分を警めるためにもこれだけの事を書き留めておく必要がある。私は意氣地なしで、かゝる言葉を云ふに値しない人間だけれども、必要は私をそこまで連れて行かないとも限らない。恐ろしいその期待が同時に又願はしい事だ。

（一九二〇年三月、「改造」所載）

美術鑑賞の方法に就いて再び

早稲田文學の二月號であなた（註。本間久雄氏を指す）が私の「美術鑑賞の方法に就いて」（「太陽」一月號所載）、に關しわざ〳〵御意見を發表し下さつた事を御禮申します。私の所論の前段即ち個人展覽會の主張については全然賛成して下さいましたが、後段に於て、各藝術家の作品をその作品が生れた故郷に還送しろと云ふ私の主張に對しては、疑ひを挾んでをられます。而してあなたの仰しやるところが偶然美術といふものゝ根本問題に觸れてゐると思ひますから、延引ながらもう少し私の云はうとした所を補はしていたゞきます。

實は私があんなことを云つたのは、大部分自分の經驗の實感から來たものです。ですから私の實感が不信用なものだとしたら、あの主張の大部分は反古になる次第です。あなたが「詩的の表現」が用ゐてあると評されたやうに、實際私があれを書いた時の心持には主觀的な感情的なものが多分に含まれてゐたのでした。私は三年程米國にゐましたが、その逗留の間、私が接近し得た美術館を見物する機會は多分は一つも見逃してゐなかつた積りです。殊にボストンと、フィラデルフィヤと、ニューヨークと、ワシントンとの美術館には屢〻足を運びました。それらの美術館には、米國のことですから、本當に見本と云つてい〻程、各國各派の作品が雜多に陳列されてあるのを普通とします。私はさういふ所に這入つて行つていつも不足を感じました。もつと强い刺戟なり印象なりを受くべき筈だと思つて見るのですけれども、どうしても思ひ設けたやうな結果は得られませんでした。

それから私は半年程の短期間歐洲を駈け通りに旅行しました。その忙しい旅の間にも、然しながら所在の美術館は有らゆる機會を利用して觀てまはつた積りです。「太陽」に揭げたやうな主張を抱くに至つた最初の動因は、

フロレンスで聖マルコ寺院を訪れた時に得たものでした。そこの僧院にはフラ・アンゼリコの壁畫が昔のまゝに可なり完全に保存されてゐます。私はそこで、嘗て他では味はなかつたこの畫僧の本質を味ふことが出來たと感じたものです。不死の城市羅馬のヴァチカン宮殿の中にもフラ・アンゼリコの作品は納まつてゐますが、そこで私の受けた印象と云つたら極めて薄弱なものでした。然るにかのジョットの塔を有し、ダンテの生家を有し、サボナローラの火刑に遇つた廣場を有し、ウフィチ宮殿を有し、アルノ河を有し、ファエゾレ丘を有し、聖マルコ寺院そのものを有するフロレンスに來て、畫僧の作品が一堂に蒐められてゐるのを見ると、私は始めて作者の內部生活にまで觸れる事が出來たやうに思ひました。庵室の入口の「聖母受胎啓示」の壁畫の如きは、敬虔な宗教的情緒を以て現世の美を淨化し盡したものであつたのを今でもあり〳〵と覺えてゐます。フロレンスの自然と遺蹟とは知らず識らずの中に私の心境をかの一筆一禮の畫家にまで近づかせてゐたものと見えます。第二にこれを感じたのは和蘭陀の土地に行つて和蘭畫派の作品の蒐集を見た時でした。殊にその家庭生活やその土地の風景が、野心なくしめやかな態度で描かれた、割合に小幅な作品になると、この土地に生えてゐる草木や、平らに擴がつてゐる土壤があるやうに、他處に移してはその本然の味ひを失ふに違ひないと思はせました。あの極めて世界的な擴がりと深みとを持つてゐるレムブラントの作品でさへ、リクス畫堂は何と云ふ好適な安樂椅子を提供してゐるでせう。飴色の影と黃金のやうな光とは和蘭陀の空氣の中にあつて、殆んど自然の一部であります。

若し觀る人に流謫の不幸悲慘を感じさせる作品を擧げよとならばロンドンの大英博物館にあるフィディヤス(と稱せらるゝ)の浮彫の如きはそれでせう。霧と煤煙によつて黝ずんだ空氣の中に、その稀代の彫刻は、冷たい石疊の上に配列されてあります。彫刻されたその馬、その人があの希臘の明瑩な空氣を慕はないことが何うしてあり得ませう。その前に佇んで、少し靜かな心を持つてその古い大理石を見詰めてゐたら見る人の誰にでもその大理

石は悲しく捕虜の境涯の歎きを訴へます。この事實をあなたは強ち詩的の空想とばかり卻けはなさらないと思ひます。或は又何事にかけても功利一遍で押し通すやうな米國の大都會の眞中で、冷たい直線で區切られた大箱のやうな廣間の片隅に、ごちや〳〵と列べてある浮世繪の幾枚かを想像して下さい。その浮世繪の周圍には相當の色合ひのマットが繞らされてあるにせよ、それの揭げられてゐる壁面は眞白で石のやうに堅い漆喰です。利を求めて足も空にすれ違ふ人々の雜閙から遁れて、これらの繪の前に立つた處で私達は本當に何物を感受することが出來るでせう。そこに人は不思議にしづかな、落ち付いた、夢のやうなものを發見するには相違ありません。然し浮世繪が本當に人に與へようと望んでゐる一番大事なものは、遂にそこから流れ出て來ません。

あなたはゲーテがシエクスピヤを發見し、ゴンクールが浮世繪を發見した實例その他を擧げて、藝術がいかに超境遇的價値を有すべきであるかを說いてをられます。それは私も肯づかないことではありませんが、少くとも英國にゲーテ程のロマンティストが生れたならばゲーテ以上にシエクスピヤを發見したらうとはお思ひになりませんか。又私はゴンクールの浮世繪論なるものを讀んだことがありませんが、彼の發見は、美の珍らしい表現に對する驚異と、歐洲に發達した美學によつての科學的說明以外の何物かであつたのですか。日本人が浮世繪に對して持つてゐた無批判な態度は、官僚畫派に盲目的な價値を置いた德川時代に於ける知識階級の僻見の傳統と、明治以來田舍者によつて造られた蕪雜な趣味とが一緖になつて出來あがつたものであつて、ゴンクールは偶〻そんな障礙物を持ち合はしてゐなかつたおかげで、あれだけの發見を逸早くし得たのだと云はれませんか。兎まれゴンクールの浮世繪論を讀んだことのない私は用もない臆測を愼まなければなりません。唯これだけは確かに云へるでせう。卽ち、ゴンクールが佛蘭西にゐてあの論を書くのと、日本まで來ての後に書くのと、どちらがその論の內容を徹底的にし得たかと云ふと、勿論後の場合であつたらうと想像することです。これにあなたも御異存はな

いと思ひます。

私は中央文學の三月號を讀んで、あなたの「文學と時代との關係」なる一文に出會ひましたが、その中にあなたは明らかに、「ツルゲネーフの有名な例の「父と子」などに現はれた虛無主義の人物にしても思想にしても、その背景となつてゐるロシアの一八七〇年代の時代を知らないではその面白味の大部分がわからなくなるのであります。文藝と時代とが如何に密接不離な關係にあるか、これによつても十分に推知されることであらうと思はれます」といつて居られます。

あなたはこゝに藝術とそのミリュウとの關係の緊密なるを說くことに於て私以上のことを云つてをられると私は思ひます。私は例へば、「父と子」に於て背景となつてゐる時代を知らなければ、その面白味の大部分がわからなくなると云ふ程にはミリュウの重さを主張しないものです。私はこの作品の超境遇性をもつと強く感ずるものです。が、それは餘事に亙つたことで、假りにあなたのお考へが正當だとすると、あなたには同じお考へを造形藝術に對しても持たれるのが理の當然だと思ひます。(何故なら、あなたは私の美術に關する考へを論駁なさる時、文學上の現象《シエクスピヤとゲーテ》を例に引かれましたからその反對も亦許さるべきことゝ思ひます)造形美術が生れ出るミリュウは時代もその一つ、文化もその一つではありますが、それらに增して强いものは廣義の自然です。その作者を哺み育てた所の空氣と水と而して人とです。文學の背景たるべき時代は刻々過ぎ去つて再び私達の眼前にはありませんから、私達はその槪念を作るために已むを得ず歷史に依據しますが、美術の大背景をなす自然は人間の歷史ほどに老いほうけません。それはその精髓に於ては昔のまゝの若さを以て存續してゐます。その故に私はよい作品をその生れ故鄕に連れ歸つてやりたいと思ふだけなのです。

特にお斷り(ことわ)しておきますが、私のこの主張は過去に於ける代表的作品についてなされてゐることです。これは

「太陽」の所論を一度讀み返して下されば其處に明かに書いてあることです。私は併せて、藝術は段々郷土を超越して世界的になる傾向を持つてゐる(凡てのものがあるやうに)。だから將來の美術に就いては私の主張は無用になつて行くべきであるとも斷つてゐます。又作品は代表的な作品をと云つたので、例へば普通な浮世繪の一枚二枚が佛蘭西の美術家のアトリエにあらうとも、米國の富豪のサロンにあらうとも、それをまで回收しろと主張するのではないです。その位の程度にはそれがさうあることが却つて大切だとさへ思ふものです。私は然しミロのヴィーナスやベルベデーレのアポロは希臘で見たいし、システィーン聖母は伊太利で見たいし、デューラー、ホルバインは獨逸(殊にニュールンベルヒ)で見たいと主張したのです。この點を諒解していたゞきたいのです。日本でも宇治に行つて黄蘗の本山などを見ると、支那に飛んで行きたさうな姿をしてゐるではありませんか。

もつと功利的な立場からすると過去の美術品が秩序なく世界中に撒布される事にある意味が認められないではありません。然し私はかゝる第二義的な顧慮からして、古美術が當然占むべき座席を捨てしむるつれなさを敢てするに忍びなく思ふのです、この點も亦諒解していたゞきたいのです。

偖て私が當初に云つた美術の根本問題といふ事に觸れる場合になりました。こゝまで來ると「早稻田文學」で發表なさつたあなたの主張と私のそれとは甚だ接近したものであるのを感じます。卽ち藝術の普遍性が本來の面目でなければならないと云ふことです。

若し日本の疊や襖が佛蘭西に持つて行かれても、浮世繪が持つて行かれたやうに佛蘭西人はありがたがらないでせう。それは明かに日用の思想や品物以上の藝術の作品や思想が普遍性を有つてゐることを證據立てます。そればは然し何故でせう。この點になると諸家の意見はおのづから多樣に岐れると思ひます。私はそれを藝術家の個性に歸したいと思ひます。これが私をして將來の藝術が益々超境遇的な性質を帶びると主張せしめる根據です。

昔の藝術家は今の藝術家に比して個性的色彩が薄かつた、さう見るのは誤謬であらねばなりません。立派な藝術家はいかなる時いかなる所におかれても獨自な個性の持主であるに相違ありません。唯大體に云つて、過去に遡れば遡る程、ミリュウと云ふものが強い壓力であり、誘惑であり、モティヴであつたやうに見えます。何故ならば一つのミリュウは他のミリュウから嚴重に切り放され易かつたからです。從つて一つのミリュウの中に生活する人は容易にそれから切り放されて自分を眺めて見る餘裕を與へられないでゐました。言葉を換へて云へば、個性が表現される爲めには勢ひミリュウの堅い殼を着なければならなかつたのです。個性は時代や場所と複雜の交錯をなさねばならなかつたのです。表現藝術（私は藝術を假りに印象藝術と表現藝術との二つに分ちます。音樂及び文學の如きは前者で、繪畫、彫刻、建築の如きは後者に屬します）にあつては殊にこの束縛を受け易いのは當然なことです。

然しながら時代が進むに從つて一つのミリュウの圏は段々に擴がり且つ稀薄になつて行きます。私達はシーザー時代の羅馬人とブレトン人とをその衣類の一片を以てだも見分けることが出來ますけれども、今の歐羅巴人の國別は餘程慣れた眼でなければ見分けることが出來なくなりました。それだけミリュウは擴がつて且つ稀薄になつたのです。かうなると個性はそれ自身の面目を以て働く餘地が增大されて來ます。それ自身の面目を赤裸々に發揮しなければ、他と混同する恐れをさへ生ずるに至りました。昔は人はその獨得なミリュウを賴んで自己を顯はすことが出來ましたが、今はミリュウを賴んでなどはゐられなくなりました。のみならず個性の本然的要求なる赤裸々な自己表現の傾向は、ミリュウの桎梏のゆるむにつれて盛んになつてゐます。世界はやがて一つのミリュウに包まれるに至るでせう。日本で生れたものも伊太利の空氣も吸へば印度の日光にも曝されるでせう。若しミリュウにのみ信賴してゐたならば、藝術はひとりでに特色のないものになり了る嫌ひがあります。こゝに於てか

頼む所は各藝術家の持つ個性の味ひといふ事になつて行きます。ミリュウに支配され易い表現藝術がこのディレンマに對していかに煩悶したかは、最近に勃興した未來派若しくは立體派の藝術を考へることによつて察せられはしますまいか。ミリュウより個性への造形美術の移轉と云ふ風に考へると、私達は暗示的な色々なものをそこから汲み取ることが出來ると思ふのです。かくして私達はミリュウと云ふ異邦から個性といふ故鄕に移住しつゝあるのです。而してあなたの普遍的といふ藝術の理想境を實現せんとしつゝあるのです。かう私は考へてゐます。

だと云つて、(といふより)であるから、過去に生産された藝術を、殊に表現藝術を、そのミリュウから切り放さうとするのは物の自然に背いてゐると思ふのです。未來に於ては、場所の制約を受け易い表現藝術は却つて自由になり、時代の束縛を受け易い印象藝術が却つて不自由になると考ふべき理由がありますが、過去に於ては表現藝術は何と云つても印象藝術よりもミリュウの束縛を受ける事が多かつたのだから、かゝる藝術は成るべくその生れ出たミリュウの中に鑑賞され得べき道を與へられねばならぬ筈です。ミリュウの後に隱れた藝術家の個性はその時に、より深く感受せらるべきです。それは魚の個性が空氣中に於てより水中に於て見られる時の方がより明かになるやうに。

この意味から考へて下さつても私の主張は正當ではないかと思ふのです。あなたの御主張についてもなほ教へを受けることが出來れば本懐に思ひます。

なほこの問題からして色々なことが考へられ云はれると思ひますが、當面の議論の外に亙るのを恐れて今日はこれだけにしておきます。

(一九二〇年四月、「雄辯」所載)

藝術に就いての一考察

自然の現象、又は自然現象の機械的再現は藝術とは名づけられ得ない。物が或は事が藝術となり得る爲めには個性を不可避的に必要とする。卽ち藝術は個性の表現である。表象を媒介としての個性の表現である。

個性は自己を言ひ現はさうとする强い衝動を持つてゐる。この衝動を伴はないものは本然的には個性ではない。而して表象とは個性が自分自身を言ひ現はさうとする煩悶そのものである。人は私の云ふ煩悶といふ言葉を手段といふ言葉で書き換へるのが正當だと主張するかも知れない。然し私の經驗はさう書き換へる事を許さない。私達の個性はいはゞ啞に近い。個性はまだ正しい言語や表情を持つてはゐない。それが自己を表現する時には只ゝ吃るばかりだ。啞者の語るのを見てゐると、彼の口より發せられるものは聲と云ふよりも音である。音といふよりも煩悶である。それと同じい樣子が個性の表現にも行はれるのだ。個性はまだ〳〵眞にそれ自身を明確に表現する道を知らない。自然は個性に取つて自由自在に取り扱はれるには頑固な意地惡な素材である。個性はその前に立つてそれを取り扱ひあぐねてゐる。その姿は悲痛とさへ云へる。私達の生活を見て觀るがいゝ。それが社會的生活であれ國家的生活であれ家族的生活であれ個人的生活であれ、そこに現はれ出ようとする個性がいかに歪められ、虐げられ、滅裂にされてゐる事ぞ。あるべき生活の相は何處にも見出されてはゐない。右に左に前に後に進退動搖して安定を求めるに汲々とはしてゐるが、遂に個性を滿足すべき安定は求め出されてゐない。安定の三支點卽ち重點・力點・支點は常に過程の中にのみおかれてゐて、その終局（finality）には達してゐない。

又都會の街上を步いて見るがいゝ。如何に完成された建築物にも、如何に整頓した街路にも、人は自然の中に

見出す事の出來ないやうな煩悶と焦躁とを見出すだらう。殊にゴシック式の建築の如きは個性の煩悶そのものを見るやうだ。又例へばアミヤン寺院の前に立つて見るがいゝ。それは建築美術の完璧と稱へられてゐるものゝ一つであるけれども、この偉大な建造物を仰ぎ見て、人が受ける感じは瞬時も動きやまぬ息苦しい動搖感ではないか。安定性を最も完全に近く成就したと云はれるクラシック建造物の正面に對しても、見る人の感覺に或る敏捷さがあるならば、それから過たず受け入れられるものは、强ひて自らを諦めたやうな沈痛な憂鬱ではないか。眞直な道、曲りくねつた道、廣い道、狹い道、必要以上に清潔な道、慘ましいまでに汚ない道——私達がその上を歩き廻るのは煩悶から煩悶を歩き廻つてゐるのに等しい。而して生活とは一つの形式としての表象であるのは勿論の事だ。こんな外部的な表象の末梢にまで私達が個性表現の煩悶を見得るとすれば私達の對人關係に於て同じ現象がもつと緊迫した姿で現はれ出るのはいふまでもない。一人の理想主義者がユートピヤを描いて、貧乏のない、苦勞のない、矛盾のない未來生活を夢想する時、私達は何とはない反感をすら感ずる程に、私達とこの煩悶とは離れ難いものとなつてゐる。人生の有らゆる悲劇的の事件を憎み、恐れ、憤る間にも、そこに私達は一種の崇高な情緒を感じ、それなしには人生の意義が失はれるやうにさへ思ふのは一見不思議といはなければならない。私達の一面は一時も早く悲慘とか哀愁とかいふ惡境地から遁れ出たいと焦る。而もさう焦りながらもかゝる境地から全く救ひ出された地上生活を想定すると、何んだか持つ筈のものを奪ひ去られたやうな物足らなさを感ずる。悲劇のない生活が一體成り立つだらうかとさへ思ふ。而して地上生活の悲劇で既に十分苦しみ拔いてゐながら、私達は舞臺の上に悲劇を要求し、詩歌の中に哀愁を探り求め、音樂の底に悲痛を汲み取らんとあせり勉める。

　何故だ。それは表象が、卽ち人間活動の凡ての現はれが、個性表現の煩悶そのものに外ならないからではないか。個性は永久に自らを表現せんが爲めに煩悶する。それは善かれ惡しかれ、個性に取つては一體不可離の事實だ。

この事實が消滅するのは取りもなほさず個性そのものゝ滅却を意味する。人世が矛盾し、撞着し、悲劇的であつても、私達がそれを厭ひつゝどうしても拒み得ないのは、拒みつゝもそこから退き得ないのは、個性そのものゝ存在を固守してゐるからだ。個性の不可避的な衝動たる表現の完成に驀進しつゝあるからだ。更に言葉を換へて云へば、個性は意識的にせよ無意識的にせよ、絶えず創作にいそしむ藝術家であるからだ。

凡ての人は廣い意味に於て凡て藝術家だ。人が外來の壓迫から自由にされ、任意に行爲する瞬間には、その時その人は藝術家だ。シーザーはかくして羅馬帝國を通じて彼の個性を表現しようとした。サン・シモンは、かくして新基督教主義を通じて彼の個性を表現しようとした。茶人は點茶によつて、一人の勞働者はその箱庭によつて、その個性を表現しようとする。その心持は共に等しい。而してその表現の不完全な事も、従つてそこに現はれる煩悶の窺はれるのも共に等しい。

かくして凡ての人は已れの個性の表現の爲めに煩悶する。然し乍らその表現の方法及び程度には自から二つの道が生ずる。一方の人は粗笨であるが大膽である。一方の人は精緻であるが細心である。一方の人は表現に用ゐる素材の選擇に關して割合に無關心であり且つその方法がおほまかである。一方の人は神經質に素材を選び如何に小さな領域に於てゞあれ能ふだけ完全に個性を表現しようと企てる。政治家とか事業家とか工藝美術家とか云はれる人々は前者の典型に屬する。その人達も私はこれを廣義の藝術家と云はう。後者は世間が呼びならしてゐる藝術家、即ち私の云ふ狹義の藝術家である。彼は個性を能ふだけゆがめる事なしに表現しようとする衝動の強さの爲めに、極めて素材の選擇に敏感である。他人の感覺に訴へる場合にも能ふかぎり纖細な純粹な機能を有する機關を選ぶ。即ち觸覺や味覺に訴へるよりも聽覺視覺を選ぶ。同じ文字、同じ音調を用ゐてもそこに彼自身の意味を賦與せねば已まない。藝術家に最も特殊なスタイルはそこから生れて、その人の個性と不離な關係に入る。

又ある一方の人は個性の全體(entirety)には多くの顧慮を持たずに、個性の分解にもかゝはらず、それを表現して滿足しようとする。廣い意味の發明家學者といふやうな人々はこの階級に屬する。然るに他方の人は個性の分裂に對しては極度に神經質だ。その人は個性の統合なしには表現は不可能だとさへ感ずる。從つて表現の對象となるものは直接經驗として取り扱はれた生活である。この態度を取るものが私のいふ狹義に於ける藝術家である。

廣義と狹義との藝術生活の間には、實際には峻別さるべき境界線はない。例へば工藝美術が藝術として取り扱はるべきか否かといふやうな問題は殆んど意味を成さぬ。縱令(たとひ)それが工藝美術品と名づけらるべきものであれ、その製作者の態度が純粹な個性表現を求めてゐれば、實用的な一面があるにせよ、狹義の藝術品として取り扱ふ事が出來る。その反對は又反對である。かく考へて見ると、外界からの壓迫によつて働くのでない、內部から働き出される人間生活の諸相の凡ては藝術であつて、それは畢竟個性表現の表象であると見るのは不正當な事ではなく、より純粹な藝術とは、即ち私達が普通呼び慣はしてゐる藝術とは、

一、個性が全體として表現を求める事。

二、個性が能ふだけ純粹な表現を求める事。

三、從つて個性表現の素材と、訴へる機關とを實用味から離れた纖細なものに求める事。

四、個性表現の廣さと深さとを進んで神經質に制限するが故に、表現せんとする煩悶即ち表象は醇化され、他と混同する事の出來ぬスタイルを構出する事。等の特質を帶びるに至るのも又否易い事だといはねばならぬ。

故に個性は自己の表現を完全ならしめんとする內部よりの要求から、個性の解放と自由とに憧(あこが)れる。個性を外部的の壓迫から切り放ち、內部の要求にのみ應じて表現すべき環境を求める。これが私達の有する根柢的な藝術衝動の相である。この衝動即ち煩悶が如何なる生活の上にも過たず發見されるのに私達は注意せねばならぬ。そ

れが政治組織の上にであれ、經濟組織の上にであれ、公的生活の上にであれ、私的生活の上にであれ、現はれ出ない一瞬時もない。生活相の凡ては純粹藝術への一路を目指して煩悶してゐる。

世の所謂藝術の爲めに生きてゐる私達は、この煩悶に對して最も敏感な人々であらねばならぬ。今のやうに實際生活と藝術生活とが分離して、實際生活なるものが動もすれば藝術生活を壓倒し無視しようとする時代にあつて、藝術生活に捧誓するものゝ取るべき態度はおのづから明かであるだらう。彼等は思想なるものと實行なるものゝ間に嚴密な區別をおく。而して百の思想も一の實行に如かずと云ふ。私達は思想即實行の確信の爲めに戰はねばならぬ。カーライルは思想を“Crying deed”といつた。一つの思想が發表される。彼等はあれは一個の思想としては面白いが要するに閑人の閑問題であつて、生活の足しにはならないと云ふ。私達は一個の思想は即ち生活だといふ事を主張しなければならない。而してそれを實證せねばならない。私は思想家と呼ばれ、自らも思想家を以て任ずる人が短氣を起して、實際運動と稱するものに沒頭するのを見る時に、その自覺の不備を思ひやらずにはゐられない。主張すべき一つの思想、それは儼然たる實際運動ではないか。この確信が遂行せられ、而して受取られない生活は、個性表現の道程に於て一歩を退いた生活である。一つの藝術的作品が公けにされる。而してそれが個性表現の煩悶によつて裏書きされてゐなかつたならば、それは藝術的と云ふ事は出來ぬ。一つの藝術品は何時でも人の生活内容を一歩なりとも藝術的生活に近づけて行くものでなければならない。

世の所謂藝術――その不完全な形に於てすらも――個性解放への、即ち個性の自由なる表現への觸角として役立つべきだ。藝術と實用的生活との差違が撥無され、衣食が藝術であり、藝術が衣食である最終點への觸角として役立つべきだ。個性の自由なる表現へ、完全なる表象へ、正しく美しきスタイルへ私達の生活を導かしめよ。

（一九二〇年四月、「中央公論」所載）

婦人解放の問題

解放、解放といふ言葉が頻りに呼ばれるが、婦人の解放といふやうな事に關しても、それを呼ぶ人は果してその解放の結果を徹底的に逆視して叫んでゐるのだらうか。

婦人の解放が提唱されその相當した結果に到着した曉には、家族生活が根柢的に破壞されると云ふ事を叫ぶものは、覺悟しそれに危懼を抱いてゐないのか。若しそれを覺悟してゐないものは、而してさういふ結果に危懼を抱くものは、斷然婦人解放の提唱からその聲を潛めてもらひたいものだと思ふ。何故ならさういふ人は結局、勞働問題に於ける溫情主義者と同樣にこの問題の純一味を濁す外の用をなし得ない人々であるからだ。

かゝる根本的な問題に嘴を入れようとならば、問題が根本的であるだけに、其の實現によつて結果される根本的な生活樣式の變革と云ふ事を徹底的に考察した上で嘴を入れてもらひたい。それ無しに輕々しく斯かる事を口にするのは、第一言論の權威を安價にし、第二にそれを口にする人の恥辱となる。

到底そんな事を云ふ柄ではない人から、結局解放の不可能なやうな條件付で解放贊成の說を聞かされるのは、聞かされるものに取つて眞に堪へ得られない苦痛だ。

（一九二〇年四月、「改造」所載）

ケーベル博士小品集

（深田康算、久保勉共譯）

博士はこの書中に、『學問ある、而してあらゆる虚飾や、あらゆる自負を超越せる、決して喜劇を演ぜざる、又彼等が實際あつた所のもの以外の何者たらんとも欲しなかつた所の』云々と云つてをられる。その言葉はそのまま博士の絶好な肖像畫といつていゝだらう。實際博士（この場合私は博士といふ稱號を皮肉とか虚禮とかに陷る危險を犯す事なくして安んじて使用し得るのを喜ぶものだ）は上に引用した言葉に充實した意味に於て値する少數な人間の一人である。この事は讀者が誰でも感ぜずにはゐられまい。恐らくはこの書を讀んで何者をか失はねばならぬ人は一人もゐまい。而して恐らくは、數多くの大事な暗示を受け取らぬ人は一人もゐまい。

「論文」といふ題下に於て哲學的空想と銘打たれた「カントの百回忌に當りては」は空想と銘打たれてあるにもかゝはらず、純粹批判と理性批判との關係を存分に闡明して、カントがいかに架空的な哲學上の考察を破壞し、自らさへ再びそこに隱れる餘地を撥無しておいて、それから無上命令の論陣を建て上げたかを明快に說いて居られる。それは一見矛盾したカントの前後に亙つた言說に對する有力な辯證である。ハルトマンの追懷には博士の哲學的人格と人格的哲學とが一如の境地にまで天衣の如く溶け合つてゐるのを見る。それは實に高踏的な（而して少しも虚飾的でない）人生の詩といつていゝ。私達は世にかゝる典雅な美もあるものかと感心させられる。

「斷想」中の「神及び世界」の一章の如きに於ては、この問題に關する廣汎な文獻の色讀と沈想とを濾過して少しもそれに煩はされない自由な發想に接する事が出來る。神の世界に關しては全く五里霧中にある自分は、勿論

博士の深奥な經驗をそのまゝ攝受する事も理解する事も出來ないが、博士が誇大な若くしは虚妄な言葉を弄んで居られない事だけは容易に看取する事が出來る。而し博士の精進の心境を羨ましくさへ思ふ。

　博士の機智と洞察と明斷とを最も明白に表はし極めて人間味の勝れた一面を雄辯に語るものは「問と答」との中に隨所に發見することが出來る。これは世界的に有數な隨筆の一つと云つても決して云ひ過ぎになりはしまい。そこには驚くべき博識がある。又優れたものゝみが有する謙讓がある、上品な回避がある。針のやうな鋭利な、而して同時に老成な觀察がある。骨髓に徹するやうな彈劾がある（そこでは博士はその愛誦する、同時に面會の想像的場面を忌み嫌つてゐるショーペンハワーやニイチェ等をさへ凌駕して見える）。

　附錄のショーペンハワー及びジャン・パウルに關する論說は哲學の素人（レーピープル）には近づき難い精到な研究ではあるけれども、併しショーペンハワーの意志說を論難する理路の中には、煩瑣哲學的な倫理的推論が目立たないではないけれども、一味の獨創力は終始して閃いてゐる。その神祕主義を論じた一文に至つては、博士の性格の裏書によつて所論が生々しさを十分に發揮してゐる。

　若し強ひて言ふならば、博士が讀者に與へる物足らない一つの印象は、現前の生活に對する勇猛心の不足ではなからうか。その不足もニイチェの場合には勇猛心の不足あるが故の自己に對する不足となつて、悲壯な心內死戰の情景を描き出すけれども、博士の場合にあつては、博士はそこに不足を見出さないのみならず、一種の誇りをさへ感じて居られる事だ。博士は自らを徹底的ロマンティシストとして表白して居られるけれども、而して未來に對して大膽なる夢を描き、現前の生活に不滿を感じて居られるけれども、その何處かには過去に對して未練を繫ぐセンティメンタリストの情緒から當面の現象に厭惡を感ずる一點がないでもない。それが博士をして冒險者であるよりも時として回避者たらしめるのではないか。回避といふ事は賢明な睿智を授かつた人の通有性で

あるとはいへ、それは打ち克たれねばならぬ性質のものであるに相違ない。然し博士は、動もするとそこに安住するのを快しとせられるやうに見える。

然し現代殊に現代の日本のやうな亂雜な生活の渦中にあつて、博士のやうな纖細な感情の所有者にこれを責めるのは、恐らく責めるものゝ愚を表はす事かも知れない。博士の態度が私達の生活内容を反省せしむべき一箇の木鐸であり得よう。

博士が日本を去られる事を私はあらゆる意味に於て惜まねばならぬものだ。日本は博士の歸國によつて美しく深く物を見徹す一隻の眼を失はねばならぬだらう。東西融合の大切な楔の一つは引き抜かれねばならぬだらう。明治以來日本にあつた外國人の中で、恐らくはフエノロサ、ラフカディオ・ハーンをも除外する事なしに、誰がケーベル博士の如くわが文化及び生活の嚴正な理解者であり得たか。願はくは博士の餘生に健康と祝福とが裕かに惠まれん事を。

（一九二〇年四月、「著作評論」所載）

Sometimes with one I love, I fill myself with rage, for fear I effuse unreturn'd love;
But now I think there is no unreturn'd love—the pay is certain, one way or another;
(I loved a certain person ardently, and my love was not return'd;
Yet out of that, I have written these songs.)

—*Walt Whitman*—

I exist as I am—that is enough;
If no other in the world be aware, I sit content,
And if each and all be aware, I sit content.
One world is aware, and by far the largest to me, and that is myself;
And whether I come to my own to-day, or in ten thousandor tenmillion years,
I can cheerfully take it now, or with equal cheerfulness I can wait.

—*Walt Whitman*—

惜みなく愛は奪ふ

一

太初に道があつたか行があつたか、私はそれを知らない。然し誰がそれを知つてゐよう、私はそれを知りたいと希ふ。而して誰がそれを知りたいと希はぬだらう。けれども私はそれを考へたいとは思はない。知る事と考へる事との間には埋め得ない大きな溝がある。人はよくこの溝を無視して、考へることによつて知ることに達しようとはしないだらうか。私はその幻覺にはもう迷ふまいと思ふ。知ることは出來ない。が、知らうとは欲する。人は生れると直ちにこの「不可能」と「欲求」との間にさいなまれる。不可能であるといふ理由で私は欲求を抛つことが出來ない。それは私として何といふ我儘であらう。而して自分ながら何といふ可憐さであらう。

太初の事は私の欲求をもつてそれに私を結び付けることによつて滿足しよう。私にはとても目あてがないが、知る日の來らんことを欲求して滿足しよう。

私がこの奇異な世界に生れ出たことについては、而してこの世界の中にあつて今日まで生命を續けて來たことについては、私は明かに知つてゐる。この認識を誇るべきにせよ、恥づべきにせよ、私はごまかしておくことが出來ない。私は私の生命を考へてばかりはゐない。確かに知つてゐる。哲學者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。又深い生活の冒險者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。然し私は知つてゐる。この私の所有を他のいかなるものもくらますことは出來ない。又他のいかなる威力も私からそれを奪

ひ取ることは出來ない。これこそは私の存在が所有する唯一つの所有だ。

恐るべき永劫が私の周圍にはある。永劫は恐ろしい。或る時には氷のやうに冷やかな、凝然としてよどみ互つた或るものとして私にせまる。又或る時は眼もくらむばかりかゞやかしい、瞬間も動搖流轉をやめぬ或るものとして私にせまる。私はそのものゝ隅か、中央かに落された點に過ぎない。廣さと幅と高さとを點は持たぬと幾何學は私に敎へる。私は永劫に對して私自身を點に等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それでも點が存在する如く私も亦永劫の中に存在する。私は點となつて生れ出た。而して瞬く中に跡形もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はゐなくなるのだ。それも私は知つてゐる。而して私はゐなくなるのを恐ろしく思ふよりも、點となつてこゝに私が私として生れ出たことを恐ろしく思ふ。

然し私は生れ出た。私はそれを知る。私自身がこの事實を知る主體である以上、この私の生命は何といつても私のものだ。私はこの生命を私の思ふやうに生きることが出來るのだ。私の唯一の所有よ。私は凡ての懷疑にかかはらず、結局それを尊重愛撫しないでゐられようか。涙にまで私は自身を痛感する。

一人の旅客が永劫の道を行く。彼を彼自身のやうに知つてゐるものは何處にもゐない。陽の照る時には、彼の忠實な伴侶はその影であるだらう。空が曇り果てる時には、而して夜には、伴侶たるべき彼の影もない。その時彼は獨り彼の衷にのみ忠實な伴侶を見出さねばならぬ。拙くとも、醜くとも、彼にとつては、彼以上のものを何處に求め得よう。かう私は自分を一人の旅客にして見る時もある。

私はかくの如くにして私自身である。けれども私の周圍に在る人や物やは明かに私ではない。私が一つの言葉を申し出る時、私以外の誰が、而して何が、私がその言葉をあらしめるやうにあらしめ得るか。私は周圍の人と物とにどう繫がれたら正しい關係におかれるのであらう。如何なる關係も可能ではあり得ないのか。可能ならば

それを私はどうして見出せばいゝのか。誰がそれを私に教へてくれるのだらう。……結局それは私自身ではないか。

思へばそれは寂しい道である。最も無力なる私は私自身にたよる外の何物をも持つてゐない。自己に矛盾し、自己に蹉跌し、自己に困迷する、それに何の不思議があらうぞ。私は時々私自身に對して神のやうに寛大になる。それは時々私の姿が、母を失つた嬰兒の如く私の眼に映るからだ。嬰兒は何處をあてどもなく匍匐する。その姿は既に十分憐れまれるに足る。嬰兒は屢ゝ過つて火に陥る、若しくは水に溺れる。而して僅かにそこから這ひ出ると、べそをかきながら又匍匐を續けて行く。このいたいけな姿を憐れむのを自己に阿るものとのみ云ひ退けられるものであらうか。縱令道德がそれを自己耽溺と罵らば罵れ、私は自己に對するこの哀憐の情を失ふに忍びない。孤獨な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い淚をさそはれるのではないか。

思へばそれは嶮しい道でもある。私の主體とは私自身だと知るのは、私を極度に嚴肅にする。他人に對しては與へ得ないきびしい鞭打を與へざるを得ないものは畢竟自身に對してだ。誘惑にかゝつたやうに私はそこに導かれる。笞にはげまされて振ひ立つ私を見るのも、打撲に抵抗し切れなくなつて倒れ伏す私を見るのも、共に私が生きて行く上に、無くてはならぬものであるのを知る。その時に私は勇ましい。私の前には力一杯に生活する私の外には何物をも見ない。私は乘り越え乘り越え、自分の力に押され〳〵て未見の境界へと險難を侵して進む。而して如何なる生命の威脅にもおびえまいとする。その時傷の痛みは私に或る甘さを味はせる。然しこの自己緊張の極點には往々にして恐ろしい自己疑惑が私を待ち設けてゐる。遂に私は疲れ果てようとする。私の力がもうこの上には私を動かし得ないと思はれるやうな瞬間が來る。私の唯一つの城廓なる私自身が見る〳〵廢墟の姿を現はすのを見なければならないのは、私の眼前を暗黑にする。

けれどもそれらの不安や失望が常に私を脅かすにもかゝはらず、太初の何であるかを知らない私には、自身を措いてたよるべき何者もない。凡ての矛盾と渾沌との中にあつて私は私自身であらう。私を實價以上に値ぶみすることをしまい。私を實價以下に虐待することもしまい。私は私の正しい價の中にあることを勉めよう。私の價値がいかに低いものであらうとも、私の正しい價値の中にあらうとするそのこと自身は何物かであらねばならぬ。縦しそれが何者でもないにしろ、その外に私の採るべき態度はないではないか。一個の金剛石を持つものは、その寶玉の正しい價値に於てそれを持たうと願ふのだらう。私の私自身は寶玉のやうに尊いものではないかも知れない。然し心持に於ては寶玉を持つ人の心持と少しも變るところがない。

私は私のもの、私のたゞ一つのもの。私は私自身を何物にも代へ難く愛することから始めねばならない。

若し私のこの貧しい感想を讀む人があつた時、この出發點を首肯することが出來ないならば、私はその人に更にいひ進むべき何物をも持ち得ない。太初が道であるか行であるかを（考へるのではなく）知り切つてゐる人に取つては、この感想は無視さるべき無益なものであらう。私は自分が極めて低い生活途上に立つてゐるものであることをよく知りぬいてゐる。たゞ、今の私はそこに一番堅固な立場を持つてゐるが故に、そこに立つことを恥ぢまいとするものだ。前にもいつたやうに、私はより高い大きなものに對する欲求を以て、知り得たる現在に安住し得るのを自己に感謝する。

二

私の言はうとする事が讀者に十分の理解を與へ得なくはないかと恐れる。人が人自身を言ひ現はすのは一番容易なことであらねばならぬ。何となれば、それはその人自身が最もよく知り抜いてゐる筈の事柄だから。

實際は然しさうではない。私達の用ゐてゐる言葉は謂はゞ猟犇のやうなものだ。それは獲物を取るには役立つけれども、私達自身に向つては妨げにこそなれ、役には立たない。或は擴大鏡のやうなものだ。私達はそれによつて身外を見得るけれども、私達自身の顏を見ることは出來ない。或は又精巧な機械といつてもよい。私達はそれによつて有らゆるものを造り出し得るとしても、遂に私達自身を造り出すことは出來ない。

言葉は意味を表はす爲めに案じ出された。然しそれは當初の目的から段々に墮落した。心の要求が言葉を創つた。然し今は物がそれを占有する。吃る事なしには私達は自分の心を語る事が出來ない。戀人の耳にさゝやかれる言葉はいつでも流暢であるためしがない。心から心に通ふ爲めには、何んといふ不完全な乘り物に私達は乘らねばならぬのだらう。

のみならず言葉は不從順な僕である。私達は屢〻言葉の爲めに裏切られる。私達の發した言葉は私達が針ほどの誤謬を犯すや否や、すぐに刃を反へして私達に切つてかゝる。私達は自分の言葉故に人の前に高慢となり、卑屈となり、狡智となり、魯鈍となる。

かゝる言葉に依賴して私はどうして私自身を誤りなく云ひ現はすことが出來よう。私は已むを得ず言葉に潛む暗示により多くの賴みをかけなければならない。言葉は私を言ひ現はしてくれないとしても、その後につゝましやかに隱れてゐるあの叡智の獨子なる暗示こそは、裏切る事なく私を求める者に傳へてくれるだらう。

暗示こそは人に與へられた子等の中、最も優れた娘の一人だ。然し彼女が愼み深く、穩かで、且つ容易にその面紗を顏からかきのけない爲めに、人は屢〻この氣高く美しい娘の存在を忘れようとする。殊に近代の科學は何の容赦もなく、如何なる場合にも抵抗しない彼女を、幽閉の憂目にさへ遇はせようとした。抵抗しないといふ美德を逆用して人は彼女を無視しようとする。

人間がどうして斯程優れた娘を生み出したかと私は驚くばかりだ。彼女は自分の美德を認めるものが現はれ出るまで、それを沾らうと企てたことが嘗てない。沾らうとした瞬間に美德が美德でなくなるといふ第一義的な眞理を本能の如く知つてゐるのは彼女だ。又正しく彼女を取り扱ふことの出來ないものが、假初にも彼女に近づけば、彼女は見る〳〵そのやさしい存在から萎れて行く。そんな人が彼女を捕へ得たと思つた時には、必ず美しい死を遂げたその亡骸を抱くのみだ。粘土から創り上げられた人間が、どうしてかゝる氣高い娘を生み得たらう。

私は私自身を言ひ現はす爲めに彼女に優しい助力を乞はう。私は自分の生長が彼女の柔らかな胸の中に抱かれることによつて成就したのを經驗してゐるから。併し人間そのものゝ向上がどれ程彼女――人間の不斷の無視にかゝはらず――によつて運ばれたかを知つてゐるから。

けれども私は暗示に私を託するに當つて私自身を恥ぢねばならぬ。私を最もよく知るものは私自身であるとは思ふけれども、私の知りかたは餘りに亂雜で不秩序だ。而して私は言葉の正當な使ひ道すらも十分には心得てゐない。その言葉の後ろに安んじて巣喰ふべき暗示の座が成り立つだらうかとそれを私は恐れる。

然し私は行かう。私に取つて已み難き要求なる個性の表現の爲めに、あらゆる有緣の個性と私のそれとを結び付けようとする嚴しい欲求の爲めに、私は敢へて私から出發して歩み出して行かう。

私が饑ゑてゐるやうに、或る人々は饑ゑてゐる。それらの人々に私は私を與へよう。而してそれらの人々から私も受取らう。その爲めには假りに自分の引込思案を捨てゝかゝらう。許されるかぎりに於て大膽にならう。私が知り得る可能性を存分に申し出して見よう。唯この貧しい言葉の中から暗示が姿を隱してしまはない事を私は祈る。

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生(めば)えはじめた。

三

或る人は私を僞善者ではないかと疑つた。どうしてそこに疑ひの餘地などがあらう。私は明かに僞善者だ。明かに私は僞善者である。さう言明するのが、どれ程僞善的な行爲であるぞとの非難が、當然喚び起されるのを知らない私ではない。それにもかゝはらず私は明かに僞善者であると言明せねばならぬ。私は屢ゝ私自身に顧慮する以上に外界に顧慮してゐるからだ。それは悲しい事には私が弱いからだ。私は弱い者の有らゆる窮策によく通じてゐる。僅かな原因ですぐ陷つた一つの小さな虚僞の爲めに、二つ三つ四つ五つと虚僞を重ねて行かねばならぬ、その苦痛をも知つてゐる。弱いが故に强ひて自分を强く見せようとして、いつでも胸の中を戰慄させてゐねばならぬ不安も知つてゐる。苦肉の策から、自分の弱味を殊更に捨て鉢に人の前にあらはに取り出して、不意に乘じて一種の尊敬を、さうでなければ一種の憐憫を、搾り取らうとする自瀆も知つてゐる。弱さは眞に醜さだ。それを私はよく知つてゐる。

然し僞善者とは弱いといふことばかりがその本質ではない。本當に弱いものは、その弱さから來る自分の醜さをも悲慘さをも意識しないが故に、その人はそのまゝの境地に滿足することが出來よう。僞善者は不幸にしてただ弱いばかりでなく、その反面に多少の强さを持つてゐる。彼は自分の弱味によつて惹き起した醜さ悲慘さを意識し得る强さをも持つてゐるのだ。而してその弱さを强さによつて彌縫しようとするのだ。

强者がその强味を知らず、弱味を知らない間に、僞善者はよくその强味と弱味とを知つてゐる。人はいふだらう、僞善者の本質は、强味を以て弱味を彌縫するばかりでなく、その彌縫に無恥な安住を敢(あへ)てする點にあると。

だから僞善者は救はるゝことが出來ないのだと。から云つて聞かされると私は僞善者の爲めに辯解をしないではゐられない心持になる。私自身が僞善者であるが故に自分自身の爲めに辯解しようとするだけではない。僞善者そのものになり代つて、僞善者の一人なる私が、義人に申し出たいと思はずにはゐられないのだ。

何事にも例外はある。その例外を殊更に色濃く描くのをひかへて見て貰つたら、僞善者といふものが、强味を以て弱味を彌縫する所に無恥な安住をしてゐるといふのは、少しさばけ過ぎた見方だとは云はれまいか。私は義人が次の點に於て僞善者を信じていたゞきたいと思ふ。それは僞善者も亦心窃かに苦しんでゐるといふ一事だ。考へて見てもほしい。多少の强さと弱さとを同時に持ち合はしてゐるものが、二つの力の矛盾を感じないでゐられようか。矛盾を感じながら平然としてそこに無恥の安住をのみ續けてゐることが出來ようか。

僞善者よ、お前は全くひどい目に遇はされた。それは當然な事だ。お前は本當に不愉快な人間だから。お前はいつでも然り〳〵否々といひ切ることが出來ないから。毎時でもお前には陰險なわけへだてが附きまつはつてゐるから。お前は憎まれていゝ。辱しめられていゝ。惡魔視されていゝ。然しお前の心の隅の人知れぬ苦痛をそつと眺めてやる人はないのか。お前が人並に見られたい爲めに、お前自身にさへ隱さうと企てゝゐるその人知れぬ苦痛を一寸でも暖かく觸らうといふ人はないのか。僞善者よ、私は自身僞善者であるが故によくそれを知つてゐる。義人はすぐ隣に住むと考へられてゐる罪人(つみびと)（己れの罪を知つてそれを悲しむ人）は自分の强味と弱味との矛盾を聲高く叫び得る幸福な人達なのだ。罪人の持つものも僞善者の持つものも畢竟は同じなのだ。たゞ罪人は叫ぶ。それを神が聞く。僞善者は叫ばうとする程に强さを持ち合はしてゐない。故に神は聞かない。それだけの差だと私には思へる。よきサマリヤ人と惡しきサドカイ人とは、隣り合せに住んでゐるのではないか。僞善者なる私は屢ゝ他人を僞善者と呼んだ。今にして私はそれを悲しく思ふ。何故に私は人と人との距(へだ)てをこんなに大きく

しようとはしたらう。

から云つたとて私は、世の義人に僞善者を裁く手心をゆるめて貰ひたいと歎願するのではない。僞善者は何といつても義人からきびしく裁かれるふしだらさを持つてゐる。私はたゞ僞善者もその心の片隅には人に示すのを敢てしない苦痛を持つてゐるといふ事を知つて貰へばいゝのだ。それが私の辯解なのだ。

私もその苦痛は持つてゐた。人の前に私を私以上に立派に見せようとする虛妄な心は有り餘るほど持つてゐたけれども、そこに埋めることの出來ない苦痛をも全く失つてはゐなかつた。而して或る時には、烏が鵜の眞似をするやうに、罪人らしく自分の罪を上辷りに人と神との前に披露もした。私は私らしく神を求めた。どれ程完全な罪人の形に於て私はそれをなしたらう。恐らく私は誰の眼からも立派な罪人のやうに見えたに違ひない。私は斷食もした、不眠にも陷つた、瘦せもした。一人の女の肉をも犯さなかつた。或る時は神を見出だし得んためには、自分の生命を好んで斷つのを意としなかつた。

他人眼から見て相當の精進と思はれるべき私の生活が幾百日か續いた後、私は或る決心を以て神の懷に飛び入つたと實感のやうに空想した。弱さの醜さよ。私はこの大事を見事に空想的に實行してゐた。

而して私は完全にせよ、不完全にせよ、甦生してゐたらうか。復活してゐたらうか。神によつて罪の根から切り放された約束を與へられたらうか。

神の懷に飛び入つたと空想した瞬間から、私が格段に瑕瑾の少い生活に入つたことはそれは確かだ。私が隣人から模範的の青年として取り扱はれたことは、私の誇りとしてゞはなく、私のみじめな懺悔としていふことが出來る。

けれども私は本當は神を知つてはゐなかつたのだ。神を知り神によりすがると宣言した手前、强ひて私の言行

をその宣言にあてはめてゐたに過ぎなかつたのだ。それらが如何に弱さの生み出す空想によつて色濃く彩られてゐたかは、私が見事に人の眼をくらましてゐたのでも察することが出來る。

この時若し私に人の眼の前に罪を犯すだけの强さがあつたなら、即ち私の顧慮の對象なる外界と私とを絶縁すべき事件が起つたら、私は僞善者から一躍して正しき意味の罪人になつてゐたかも知れない。私は自分の罪を眞劍に叫び出したかも知れない。而してそれが恐らくは神に聞かれたらう。然し私はさうなるには餘りに弱かつた。人はこの場合の私を餘り强過ぎたからだといはうとするかも知れない。若しさういふ人があるなら、私は明かにそれが誤謬であるのを自分の經驗から斷言することが出來る。本當に罪人となり切る爲めには、自分の凡てを捧げ果てる爲めには、私の想像し得られないやうな强さが必要とせられるのだ。このパラドックスとも見れば見える申し出では決して虛妄でない。罪人のあの柔和なレシグネーションの中に、昂然として何物にも屈しまいとする强さを私は明かに見て取ることが出來る。神の信仰とは强者のみが與かり得る貴族の團欒だ。私は羨しくそれを眺めやる。然し私には、その入場券は與へられてゐない。私は單にその埒外にゐて貴族の物眞似(ミミクリー)をしてゐたに過ぎないのだ。

基督の教會に於て、私は明かに僞善者の一群に屬すべきものであるのを見出してしまつた。

砂礫のみが砂礫を知る。金のみが金を知る。これは悲しい事實だ。僞善者なる私の眼には、自ら教會の中の僞善の分子が見え透いてしまつた。こんな事を書き進むのは、殆ど私の堪へ得ない所だ。私は餘りに自分を裸にし過ぎる。然しこれを書き拔かないと、私のこの拙い感想の筆は拋げ棄てられなければならない。本當は私も强い人になりたい。而して教會の中に强さが生み出した眞の生命の多くを尊く拾ひ上げたい。私は近頃或る尊敬すべき老學者の感想を讀んだが、その中に宗教に身をおいたものが、それを捨てるといふやうなことをするのは、如

何にその人の性格の高貴さが足らないかを現はすに過ぎないといふことが强い語調で書かれてゐるのを見た。私はその老學者に深い尊敬を拂つてゐるが故に、而して氏の生得の高貴な性格を知つてゐるが故に、その言葉の空しい罵詈でないのを感じて私自身の卑陋を悲しまねばならなかつた。氏が凡ての虛僞と墮落とに飽滿した基督舊敎の中にありながら、根ざし深く潛在する尊い要素に自分のけだかさを化合させて、巖のやうに堅く立つその態度は、私を驚かせ羨ませる。私は全くそれと反對なことをしてゐたやうだ。私は自分が卑陋であるが故に、多くの卑陋なものを見てしまつた。私はそれを悲しまねばならない。

然し私は自分の卑陋から、周圍に卑陋なものを見出しておきながら、高貴な性格の人があるやうに、それを見ないでゐることはさすがに出來なかつた。卑陋なものを見出しながら、しら〴〵しく見ない振りをして、寬大にかまへてゐることは出來なかつた。その程度までの僞善者になるには、私の强味が弱味より多過ぎたのかも知れない。而して私は、自分の僞善が私の屬する團體を汚さんことを恐れて、而して團體の惡い方の分子が私の心を苦しめるのを厭つて、その團體から逃げ出してしまつた。私の卑陋はこゝでも私に卑陋な行ひをさせた。私の屬してゐた團體の言葉を借りていへば、私の行の根柢には大それた高慢が働いてゐたと云へる。

けれども私は小さな聲で私にだけ囁きたい。心の奧底では、私はどうかして私を僞善者から更に僞善者に導かうとする誘因を避けたい氣持がないではなかつたといふことを。それを突き破るだけの强さを持たない私はせめてはそれを避けたいと念じてゐたのだ。前にもいつたやうに外界に支配され易い私は、手嚴しい外界に圍まれてゐればゐる程、自分すら思ひもかけぬ僞善を重ねて行くのに氣づき、而してそれを心から恐れるやうになつてはゐたのだ。だから私は私の屬してゐた團體を退くと共に、それまで指導を受けてゐた先輩達との直接の接觸からも遠ざかり始めた。

僞善者であらぬやうになりたい。これは私として過分な欲求であると見られるかも知れないけれども、僞善者は凡て、僞善者でなかつたらよからうといふ心持を何處かの隅に隱しながら持つてゐるのだ。私も少しそれを持つてゐたばかりだ。

義人、僞善者、罪人、さうした名稱が可なり判然區別されて、それがびし〳〵と人にあてはめられる社會から私が離れて行つたのは、結局惡いことではなかつたと私は今でも思つてゐる。

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。その動亂の中を私はそろ〳〵と自分の方へと歸つて行つた。目指す故鄕はいつの間にか遙に距つてしまひ、而して私は屢〻蹉いたけれども、それでも動亂に動亂を重ねながらそろ〳〵と故鄕の方へと歸つて行つた。

四

長い廻り道。

その長い廻り道を短くするには、自分の生活に對する不滿を本當に感ずる外にはない。生老病死の諸苦、性格の缺陷、あらゆる失敗、それを十分に嚙みしめて見ればそれでいゝのだ。それは然し如何に言說するに易く實現するに難き事柄であらうぞ。私は幾度かかゝる悟性の幻覺に迷はされはしなかつたか。而してかゝる悟性と見ゆるものが、實際は既定の概念を尺度として測定されたものではなかつたか。私は稀にはポーロのやうには藻掻いた。然し私のやうには藻掻かなかつた。親鸞のやうには悟つた。然し私のやうには悟らなかつた。それが一體何になら う。これほど體裁のいゝ外貌と、內容の空虛な實質とを併合した心の狀態が外にあらうか。この近道らしい迷路を避けなければならないと知つたのは、長い彷徨を續けた後のことだつた。それを知つた後でも、私はやゝも

すればこの忌はしい袋小路につきあたつて、すご〳〵と引き返さねばならなかつた。

私は自分の個性がどんなものであるかを知りたいために、他人の個性に觸れて見ようとした。歷史の中にそれを見出さうと勉めたり、藝術の中にそれを見出さうと試みたり、隣人の中にそれを見出さうと求めたりした。私は多少の知識は得たに違ひなかつた。私の個性の輪廓は、おぼろげながら私の眼に映るやうに思へぬではなかつた。然しそれは結局私ではなかつた。

物を見る事、物をそれ自身の生命に於てあやまたず捕捉する事、それは私が考へてゐたやうに容易なことではない。それを成就し得た人こそは世に類なく幸福な人だ、私は見ようと欲しないではなかつた。然し見るといふことの本當の意味を辨へてゐたといへようか。摑み得たと思ふものが暫くするといつの間にか影法師に過ぎぬのを發見するのは苦い味だ。私は自分の心を沙漠の砂の中に眼だけを埋めて、獵人から己れの姿を隱し終せたと信ずる駝鳥のやうにも思ふ。駝鳥が一つの機能の働きだけを隱すことによつて、全體を隱し得たと思ひこむのと反對に、私は一つの機能だけを働かすことによつて、私の全體を働かしてゐると信ずることが屢〻ある。かうして眺められた私の個性は、整つた矛盾のない姿を私に描いて見せてくれるやうだけれども、見てゐる中にそこには何等の生命もないことが明かになつて來る。それは感激なくして書かれた詩のやうだ。又着る人もなく裁たれた錦繡のやうだ。美しくとも、價高くあがなはれても、有りながら有る甲斐のない塵芥に過ぎない。

私が私自身に歸らうとして、外界を機緣にして私の當體を築き上げようとした試みは、空しい失敗に終らねばならなかつた。

聰明にして上品な人は屢〻假象に滿足する。滿足するといふよりは、人の現象と稱へるものも、人の實在と稱へるものも、畢竟は意識の――それ自身が假象であるところの――假初めな遊戲に過ぎないと傍觀する。そこに

何等かの執着をつなぎ、葛藤を加へるのは、要するに下根粗笨な外面的見斷に支配されての迷妄に過ぎない。それらの境を靜かに超越して、嬰兒の戯れを見る老翁のやうに凡ての努力と蹉跌との上に、淋しい微笑を送らうとする。そこには冷やかな、然し皮相でない上品さが漂つてゐる。或は又凡てを容れ凡てを抱いて、飽くまで外界の跳梁に身を任かす。晝には歡樂、夜には遊興、身を凡俗非議の外に置いて、死にまでその恣まな姿を變へない人もある。そこには皮肉な、然し熱烈な聰明が窺はれないではない。私はどうしてそれらの人を彈劾することが出來よう。果てしのない迷執にさまよはねばならぬ人の宿命であつて見れば、各々の瞬間をたゞ樂しんで生きる外に殘される何事があらうぞとその人達はいふ。その心持に對して私は白眼を向けることが出來るか。私には出來ない。人は或はかくの如き人々を醉生夢死の徒と呼んで唾棄するかも知れない。然し私にはその人々の何處かに私を牽き付ける或るものが感ぜられる。私には生來持ち合はしてゐない或る上品さ、或る聰明さが窺はれるからだ。

何といふ多趣多様な生活の相だらう。それはそのまゝで尊いではないか。そのまゝで完全な自然な姿を見せてゐるではないか。若し自然にあの絢爛な多種多様があり、獨り人間界にそれがなかつたならば、宇宙の美と眞とはその時に崩れるといつてもいゝだらう。主義者といはれる人の心を私はこの點に於てさびしく物足らなく思ふ。彼は自分が授かつたゞけの天分を提げて人間全體をたゞ一つの色に塗りつぶさうとする人ではないか。その意氣の尊さはいふまでもない。然しその尊さの蔭には尊さそのものをも冰らせるやうな淋しさが潜んでゐる。

たゞ私は私自身を私に恰好なやうに守つて行きたい。それだけは私に許される事だと思ふのだ。而してその立場からいふと私はかの聰明にして上品な人々と同情の人であることが出來ない。私にはまださもしい未練が殘つてゐて、凡てを假象の戯れだと見て心を安んじてゐることが出來ない。そこには上品とか聰明とかいふことから遙かに遠ざかつた多くの vulgarity が殘つてゐるのを私自身よく承知してゐる。私は全く凡下な執着に驅られて

齷齪する衆生の一人に過ぎない。たゞ私はまだその境界を捨て切ることが出來ない。而して捨て切ることの出來ないのを惡いことだとさへ思はない。漫然と私自身を他の境界に移したら、卽ち私の個性を本當に知らうとの要求を擲つたならば、私は今あるよりもなほ多くの不安に責められるに違ひないのだ。だから私は依然として私自身であらうとする衝動から離れ去ることが出來ない。

外界の機緣で私を創り上げる試みに失敗した私は、更に立ちなほつて、私と外界とを等分に向ひ合つて立たせようとした。

私がある。而して私がある以上は私に對立して外界がある。外界は私の內部に明かにその影を投げてゐる。從つて私の心の働きは二つの極の間を往來しなければならない。而してそれが何故惡いのだ。私はまだどんな言葉で、この二つの極の名稱をいひ現はしていゝか知らない。然しこの二つの極は昔から色々な名によつて呼ばれてゐる。希臘神話ではディオニソスとアポロの名で、又歐洲の思潮ではヘブライズムとヘレニズムの名で、佛典では色相と空相の名で、或は唯物唯心、或は個人社會、或は主義趣味、……凡て世にありとあらゆる名詞に對を成さぬ名詞はないと謂つてもいゝだらう。私も亦このアンティセシスの下にある。自分が思ひ切つて一方を取れば、是非退けねばならない他の一方がある。ヂェーナスの顏のやうにこの二つの極は渾融を許さず相反いてゐる。然し私としてはその二つの何れをも潔く捨てるに忍びない。私の生の欲求は思ひの外に強く深く、何者をも失はないで、凡てを味ひ盡して墓場に行かうとする。縱令私が純一無垢の生活を成就しようとも、この存在に屬するもののゝ中から何かを捨てゝしまはねばならぬとなら、それは私には堪へ得ぬまでに淋しいことだ。よし私は矛盾の中に住み通さうとも、人生の味ひの凡てを味ひ盡さなければならぬ　相反して見ゆる二つの極の間に彷徨ふために、內部に必然的に起る不安を得ようとも、それに忍んで兩極を恐れることなく摑まねばならぬ。若しそれらを

摑むのが不可能のことならば、公平な觀察者鑑賞者となつて、兩極の持味を髣髴して死なう。人間として持ち得る最大な特權はこの外にはない。この特權を捨てゝ、そのあとに殘されるものは、捨てるにさへ値しない枯れさびれた殘り滓のみではないか。

五

けれども私はそこにも滿足を得ることが出來なかつた。私は思ひもよらぬ物足らぬ發見をせねばならなかつた。兩極の觀察者にならうとした時、私の力はどん〳〵私から遁れ去つてしまつたのだ。實驗のみをしてゐて、經驗をしない私を見出した時、私は何ともいへない空虛を感じ始めた。私が觸れ得たと思ふ何れの極も、共に私の命の糧にはならないで、何處にまれ動き進まうとする力は姿を隱した。私はいつまでも一箇所に立つてゐる。これは私として極端に堪へがたい事だ。かのハムレットが感じたと思はれる空虛や賴りなさは亦私にも存分にしみ通つて、私は始めて主義の人の心持を察することが出來た。あの人々は生命の空虛から救ひ出されたい爲めに、他人の自由にまで踏み込んでも、力の限りを一つの極に向つて用ゐつゝあるのだ。それは或る場合には他人にとつて迷惑なことであらうとも、その人々に取つては致命的に必要なことなのだ。主義の爲めには生命を捨てもその生命の緊張を保たうとするその心持はよく解る。

然しながら私には生命を賭しても主張すべき主義がない。主義といふべきものはあるとしても、それが爲めに私自身を見失ふまでにその爲めに沒頭することが出來ない。

矢張り私はその長い廻り道の後に私に歸つて來た。然し何といふみじめな情ない私の姿だらう。私は凡てを捨てゝこの私に賴らねばならぬだらうか。私の過去には何十年の遠さに亙る歷史がある。又私の身邊には有らゆる

社會の活動と優れた人間とがある。大きな力強い自然が私の周圍を十重二十重に取り卷いてゐる。これらのもの丶絶大な重壓は、この憐れな私をおびえさすのに十分過ぎる。私が今まで自分自身に歸り得ないで、有らん限りの躊躇をしてゐたのも、思へばこの外界の威力の前に私自身の無爲を感じてゐたからなのだ。而して何等かの手段を運らしてこの絶大の威力と調和し若しくは妥協しようとさへ試みてゐたのだつた。しかもそれは私の場合に於ては凡て失敗に終つた。さういふ試みは一時的に多少私の不安を撫でさすつてくれたとしても、更に深い不安に導く媒になるに過ぎなかつた。私はかゝる試みをする始めから、何かどうしてもその境遇では滿足し得ない豫感を持ち、而してそれがいつでも事實になつて現はれた。私はどうしてもそれらのものゝ前に at home に自分自身を感ずることが出來なかつた。

それは私が大膽で且つ誠實であつたからではない。僞善者なる私にも少しばかりの誠實はあつたと云へるかも知れない。けれど少くとも大膽ではなかつた。私は弱かつたのだ。

誰でも弱い人がいかなる心の状態にあるかを知つてゐる。何物にも信頼する事の出來ないのが弱い人の特長だ。しかも何物にか信頼しないではゐられないのが他の特長だ。兎は弱い動物だ。その耳はやむ時なき猜疑に震へてゐる。彼は頑丈な石窟に身を託する事も、幽邃な深林にその住居を構へることも出來ない。彼は小さな藪の中に彼らしい穴を掘る。而して雷が鳴つても、雨が來ても、風が吹いても、犬に追はれても、獵夫に迫られても、逃げ廻つた後にはそのみじめな、壞れ易い土の穴に最後の隱れ家を求めるのだ。私の心も亦兎のやうだ。大きな威力は無盡藏に周圍にある。然し私の怯えた心はその何れにも無條件的な信頼を持つことが出來ないで、危懼と躊躇とに滿ちた彷徨の果てには、我ながら憐れと思ふ自分自身に歸つて行くのだ。

然し私はこれを弱いものゝ强味と呼ぶ。何故といへば私の生命の一路はこの極度の弱味から徐ろに育つて行つ

たからだ。

こゝまで來て私は自ら任じて强しとする人々と袖を別たねばならぬ。その人々はもう私に呆れねばならぬ時が來た。私はせうことなしに弱さに純一になりつゝ、益〻强い人々との交渉から身を退けて行くからだ。ニイチエは弱い人だつた。彼も亦弱い人の通性として頑固に自分に執着した。そこから彼の超人の哲學は生れ出たが、而してそれは强い人に恰好な背景を與へる結果にはなつたが、それを解して彼が强かつたからだと思ふのは大きな錯誤といはねばならぬ。ルッソーでもショーペンハウエルでも等しくさうではなかつたか。强い人は幸にして偉人となり、義人となり、君子となり、節婦となり、忠臣となる。弱い人はまた幸にして一個の尋常な人間となる。それは人々の好き〴〵だ。私は弱いが故に後者を選ぶ外に途が殘されてゐなかつたのだ。

運命は畢竟不公平であることがない。彼等には彼等のものを與へ、私には私のものを與へてくれる。而も兩者は一度は相失ふ程に分れ別れても、何時かは何處かで十字路頭にふと出遇ふのではないだらうか。それは然し私が顧慮するには及ばないことだ。私は私の道を驀地に走つて行く外はない。で、私は更にこの筆を續けて行く。

六

私の個性は私に告げてから云ふ。

私はお前だ。私はお前の精髓だ。私は肉を離れた一つの概念の幽靈ではない。また靈を離れた一つの肉の盲動でもない。お前の外部と内部との溶け合つた一つの全體の中に、お前がお前の存在を有つてゐるやうに、私も亦その全體の中で嚴しく働く力の總和なのだ。お前は地球の地殼のやうなものだ。千態萬樣の相に分れて、地殼は目まぐるしい變化を現じてはゐるが、畢竟そこに見出されるものは、靜止であり、結果であり、死に近づきつゝ

あるものであり、奥行のない現象である。私は謂はゞ地球の外部だ。單純に見るとそこには渾沌と單一とがあるばかりとも思はれよう。けれどもその實質をよく考へて見ると、それは他の星の世界と同じ實質であり、その中に潜む力は一瞬時にして、地殼を思ひのまゝに破壞することも出來、新たに地表を生み出すことも出來るのだ。私とお前とは或る意味に於て同じものだ。然し他の意味に於て較べものにならない程違つたものだ。地球の內部は外部からは見られない。外部から見て、一番よく氣のつく所は何といつても表面だ。だから人は私に注意せずに、お前ばかりを見て、お前の全體だと窺つてゐるし、お前も亦お前だけの姿を見て、私を顧みず、恐れたり、迷つたり、臆したり、外界を見るにもその表面だけを伺つて滿足してゐる。私に歸つて來ない前にお前が見た外界の姿は誠の姿ではない。お前は私が如何なるものであるかを本當に知らない間は、お前の外界を見る眼はその正しい機能を失つてゐるのだ。それではいけない。そんなことでは縱令お前がどれ程齷齪して進んで行かうとも、急流を遡らうとする下手な泳手のやうに、無益に藻掻いてしかも一歩も進んではゐないのだ。地球の內部が殘つてゐさへすれば、縱令地殼が跡形なく壞れてしまつても、一つの遊星としての存在を續ける事が出來るのだ。然し內部のない地球といふものは想像して見ることも出來ないだらう。それと同じに私のないお前は想像することが出來ないのだ。

お前に取つて私以上に完全なものはない。さういつたとて、その意味は、世の中の人が概念的に案出する神や佛のやうに、完全であらうといふのではない。お前が今まで、宗教や、倫理や、哲學や、文藝などから提供せられた想像で測れば、勿論不完全だといふことが出來るだらう。成程私は惡魔のやうに恥知らずではないが、又天使のやうに淸淨でもない。私は人間のやうに人間的だ。私の今のこの瞬間の誇りは、全力を擧げて何の躊躇もなく人間的であるといふことに歸する。私の所に惡魔だとか天使だとか、お前の頭の中で、こね上げた偶像を持つ

て來てくれるな。お前が生きなければならないこの現在にとつて、それらのものとお前との間には無益有害な廣い距離が挾まつてゐる。

お前が私の極印を押された許可狀を持たずに、靈から引放した肉だけにお前の身賣りをすると、そこに實質のない惡魔といふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。又お前が肉から強ひて引き離した靈だけに身賣りをすると、そこに實質のない天使といふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。そんな事をしてる中に、お前は段々私から離れて行つて、實質のない幻影に捕へられ、そこに、奇怪な空中樓閣を描き出すやうになる。而して、お前の裏には苦しい二元が建立される。靈と肉、天國と地獄、天使と惡魔、それから何、それから何……對立した觀念を持ち出さなければ何んだか安心が出來ない、そのくせ觀念が對立してゐると何んだか安心が出來ない、兩天秤にかけられたやうな、底のない空虛に浮んでゐるやうな不安がお前を襲つて來るのだ。さうなればなる程お前は私から遠ざかつて、お前のいふことなり、思ふことなり、實行することなりが、一つ殘らず外部の力によつて支配されるやうになる。お前には及びもつかぬ理想が出來、良心が出來、道德が出來、神が出來る。而してそれは、皆私がお前に命じたものではなくて、外部から借りて來たものばかりなのだ。さういふものを振り廻して、お前はお前の寄木細工を造り始めるのだ。而してお前は一面に、惡魔でさへが眼を塞ぐやうな醜い賤しい思ひをいだきながら、人の眼につく所では、しらじらしくも自分でさへ恥かしい程立派なことをいつたり、立派なことを行(おこな)つたりするのだ。しかもお前はそんな蔑むべきことをするのに、尤もらしい理由をこしらへ上げてゐる。聖人や英雄の眞似をするのは——も少し聞こえのいゝ言葉遣ひをすれば——聖人や英雄の言行を學ぶのは、やがて聖人でもあり英雄でもある素地を造る第一步をなすものだ。我れ、舜の言を言ひ、舜の行を行はゞ、卽ち舜のみといふそれである。かくしてお前は、心の隅に容易ならぬ矛盾と、不安と、情なさと

を感じながら、益々高く虚妄なバベルの塔を登りつめて行かうとするのだ。

惡いことには、お前のさうした態度は、社會の習俗には都合よくあてはまつて行く態度なのだ。人間の生活はその欲求の奥底には必ず生長といふ大事な因子を持つてゐるのだけれども、社會の習俗は平和――平和といふよりも單なる無事に執着しようとしてゐる。何事もなく昨日の生活を今日に繋ぎ、今日の生活を明日に延ばすやうな生活を最も面倒のない生活と思ひ、さういふ無事の日暮しの中に、一日でも安きを偸まうとしてゐるのだ。これが社會生活に強い惰性となつて膠着してゐる。さういふ生活態度に適應する爲めには、お前のやうな行き方は大變に都合がいゝ。お前の内部にどれ程の矛盾があり表裏があつても、それは習俗的な社會の頓着する所ではない。單にお前が殊勝な言行さへしてゐれば、社會は無事に治まつて泰平なのだ。社會はお前を褒めあげて、お前に、お前が心窃かに恥ぢねばならぬやうな過大な報償を贈つてよこす。お前は腹の中で心苦しい苦笑ひをしながらも、その過分な報償に報ゆるべく、益々私から遠ざかつて、心にもない犬馬の勞を盡しつゝ身を終らうとするのだ。

そんなことをして、お前が外部の壓迫の下に、虚僞な生活を續けてゐる間に、何時しかお前は私をだしぬいて、思ひもよらぬ聖人となり英雄となりおほせてしまふだらう。その時お前はもうお前自身ではなくなつて、即ち一個の人間ではなくなつて、人間の皮を被つた專門家になつてしまふのだ。仕事の上の專門家を私達は尊敬せねばならぬ。然し生活の習俗性の要求にのみ耳を傾けて、自分を置きざりにして、外部にのみ身賣りをする專門家は、既に人間ではなくして、いかに立派でも、立派な一つの機械にしか過ぎない。

いかにさもしくとも力なくとも人間は人間であることによつてのみ尊い。人間の有する尊さの中、この尊さに優る尊さを何處に求め得よう。この尊さから退くことは、お前を死滅に導くのみならず、お前の奉仕しようとし

てゐる社會そのものを死滅に導く。何故ならば人間の社會は生きた人間に依つてのみ造り上げられ、維持され、存續され、發達させられるからだ。

お前は機械になることを恥ぢねばならぬ。若し聊かでもそれを恥とするなら、さう輕はずみな先き走りばかりはしてゐられない筈だ。外部ばかりに氣を取られてゐずに、少しは此方を向いて見るがいゝ。而して本當のお前自身なるお前の個性がこゝにゐるのを思ひ出せ。

私を見出したお前は先づ失望するに違ひない、私はお前が夢想してゐたやうな立派な姿の持主ではないから。お前が外部的に教へ込まれてゐる理想の物指にあてはめて見ると、私はいかにも物足らない存在として映るだらう。私はキャリバンではない代りにエーリヤルでもない。惡魔ではない代りに天使でもない。私にあつては靈肉といふやうな區別は全く無益である。また善惡といふやうな差別は全く不可能である。私は凡ての活動に於て、全體として生長するばかりだ。花屋は花を珍重するだらう。果物屋は果實を珍重するだらう。建築家はその幹を珍重するだらう。然し櫻の木自身にあつては、かゝる善惡差別を絶した所にたゞ生長があるばかりだ。然し私の生長は、お前が思ふ程迅速なものではない。私はお前のやうに頭だけ大きくしたり、手脚だけ延ばしたりしたゞけでは滿足せず、その全體に於て動き進まねばならぬからだ。理想といふ疫病に犯されてゐるお前は、私の歩き方をもどかしがつて、生意氣にも私をさしおいて、外部の要求にのみ應じて、先き走りをしようとするのだ。お前は私より早く走るやうだが、畢竟は遲く走つてゐるのだ。何故といへば、お前が私を出し拔いて、外部の刺戟ばかりに身を任せて走り出して、何處かに行き着くことが出來たとしても、その時お前は既に人間でなくなつて、一個の專門家即ち非情の機械になつてゐるからだ。お前自身の面影は段々淡くなつて、その淡くなつた所が、聖人や英雄の襤褸布で、つぎはぎになつてゐるからだ。その醜い姿をお前はいつしか發見して後悔せねばならなく

なる。後悔したお前はまたすご〳〵と私の所まで後戻りするより外に道がないのだ。

だからお前は私の全支配の下にゐなければならない。お前は私に抱擁せられて歩いて行かなければならない。

個性に立ち歸れ。今までのお前の名譽と、功績と、誇りとの凡てを捨てゝ私に立ち歸れ。お前は生れるとから外界と接觸し、外界の要求によつて育て上げられて來た。外界は謂はゞお前の皮膚を包む皮膚のやうになつてゐる。お前の個性は分化擴張して、しかも稀薄な內容になつて、中心から外部へ散漫に流出してしまつた。だからお前が、私を出し拔いて先き走りをするのも一面からいへば無理のないことだ。而してお前は私に相談もせずに、愛のない時に、愛の籠つたやうな行ひをしたり、憎しみを心の中に燃やしながら、寬大らしい振舞ひをしたりしたらう。而してそんな浮薄なことをする結果として、不可避的に心の中に惹き起される不愉快な感じを、お前は努力に伴ふ自らの感じと强ひて思ひこんだ、お前の感情を訓練するのだと思つた。そんな風にお前が私と沒交涉な愚かなことをしてゐる間は、縱令山程の仕事をし遂げようとも、お前自身は寸分の生長をもなし得てはゐないのだ。而してこの淺ましい行爲によつて、お前は本當の人間の生活を阻害し、生命のない生活の殘り滓を、いやが上に人生の路上に塵芥として積み上げるのだ。花屋の爲めに一本の櫻の樹は花ばかりの生存をしてゐてもいゝかも知れない。その結果それが枯れ果てたら、花屋は遠慮なくその幹を切り倒して他の苗木を植ゑるだらうから。然し人間の生活の中に在る一人の人間はかくあつてはならない。その人間が個性を失ふのは、取りもなほさず社會そのものゝ生命を弱めることだ。

お前も一度は信仰の門をくゞつたことがあらう。人のすることを自分もして見なければ、何か物足りないやうな淋しさから、お前は宗教といふものにも指を染めて見たのだ。お前が知るであらう通りに、お前の個性なる私は、渴仰的といふ點、卽ち生長の欲求を烈しく抱いてゐる點では、宗教的といふことが出來る。然し私はお前の

やうな浮薄な歩き方はしない。

お前は私のことにゐるのを碌々顧みもせずに、習慣とか輕い誘惑とかに引きずられて、直ぐに友達と、聖書と、教會とに走つて行つた。私は深い危惧を以てお前の例の先き走りを見守つてゐた。お前は例の如く努力を始めた、お前の努力から受ける感じといふのは、柄にもない飛び上りな行ひをした後に毎時でも殘される苦しい後味なのだ。お前は一方に崇高な告白をしながら、基督のいふ意味に於て、正しく盜みをなし、姦淫をなし、人殺しをなし、僞りの祈禱をなしてゐたではないか。お前の行ひが疚ましくなると「人の義とせらるゝは信仰によりて、律法の行ひに依らず」といつて、乞食のやうに、神なるものに情けを乞うたではないか。又お前の信仰の虛僞を發かれようとすると「主よ主よといふもの悉く天國に入るにあらず、吾が天に在す神の旨に遵るものゝみなり」といつてお前を辯護したではないか。お前の神と稱してゐたものは、畢竟するに極く幽かな私の影に過ぎなかつた。お前は私を出し拔いて宗教生活に奔つておきながら、お前の信仰の對象なる神を、私の姿になぞらへて造つてゐたのだ。而してお前の生活には本質的に何等の變化も來さなかつた。若し變化があつたとしても、それは表面的なことであつて、お前以外の力を天啓としてお前が感じたことなどはなかつた。お前は強ひて頭を働かして神を想像してゐたに過ぎないのだ。卽ちお前の最も表面的な理智と感情との作用で、かすかな私の姿を神にまで捏ねあげてゐたのだ。お前にはお前以外の力がお前に加はつて、お前がそれを避けるにもかゝはらず、その力によつて奮ひ起たなければならなかつたやうな經驗は一度もなかつたのだ。それだからお前の祈りは、空に向つて投げられた石のやうに、冷たく、力なく、再びお前の上に落ちて來る外はなかつたのだ。それらの苦々しい經驗に苦しんだにもかゝはらず、お前は頑固にもお前自身を欺いて、それを精進と思つてゐた。而してお前自身を欺くことによつて他人をまで欺いてゐた。

お前はいつでも心にもない言行に、美しい名を與へる詐術を用ゐてゐた。然しそれに飽き足らず思ふ時が遂に來ようとしてゐる。まだいくらか誠實が殘つてゐたのはお前に取つて何たる幸だつたらう。お前は絕えて久しく捨てておいた私の方へ顏を向けはじめた。今、お前は、お前の行爲の大部分が虛僞であつたのを認め、またお前は眞の意味で、一度も祈禱をしたことのない人間であるのを知つた。これからお前は前後もふらず、お前の個性と合一する爲めにいそしまねばならない。お前の個性に生命の泉を見出し、個性を礎としてその上にありのまゝのお前を築き上げなければならない。

七

私の個性は更に私に告げてから云ふ。

お前の個性なる私は、私に卽して行くべき道のいかなるものであるかを說かうか。

先づ何よりも先に、私がお前に要求することは、お前が凡ての外界の標準から眼をそむけて、私に歸つて來なければならぬといふ一事だ。恐らくはそれがお前には賴りなげに思はれるだらう。外界の標準といふものは、古い人類の歷史――その中には凡ての偉人と凡ての聖人とを含み、凡ての哲學と科學、凡ての文化と進步とを蓄へた宏大もない貯藏場だ――と、現代の人類活動の諸相との集成から成り立つてゐる。それからお前が全く眼を退けて、私だけに注意するといふのは、便りなくも心細くも思はれることに違ひない。然し私はお前に云ふ。躊躇するな。お前が外界に向けて擴げてゐた鬚根の凡てを拔き取つて、先を揃へて私の中に揷し入れるがいゝ。お前の個性なる私は、多くの人の個性に比べて見たら、卑しく劣つたものであらうけれども、お前にとつては、私の外により完全なものはないのだ。

かくてやうやく私に歸つて來たお前は、これまでお前が外界に對してし慣れてゐたやうに、私を勝手次第に切りこまざいてはならぬ。お前が外界と交渉してゐた時のやうに、善惡美醜といふやうな見方で、强ひて私を理解しようとしてはならぬ。私の要求をその統合のまゝに受け入れねばならぬ。お前が私の全要求に應じた時に於てのみ私は生長を遂げるであらう。私はお前が從ふ爲めに結果される思想なり言說なり行爲なりが、假りに外界の傳說、習慣、敎訓と衝突矛盾を惹き起すことがあらうとも、お前は決して心を亂して、私を疑ふやうなことをしてはならぬ。急がず、躊らはず、お前の個性の生長と完成とを心がけるがいゝ。然しこゝにくれぐれもお前に注意しておかねばならぬのは、今までお前が外面的の、約束された、習俗的な考へ方で、個性の働きを解釋したり、助成したりしてはならぬといふ事だ。例へば個性の要求の結果が一見肉に屬する慾の遂行のやうに思はれる時があつても、それをお前が今まで考へてゐたやうに、簡單に肉慾の遂行とのみ見てはならぬ。同樣に、その要求が一見靈に屬するもののやうに思はれても、それを全然肉から離して考へるといふことは、個性の本然性に背いた考へ方だ。私達の肉と靈とは、哲學者や宗敎家が概念的に考へてゐるやうに、ものゝ二極端を現はしてゐるものでないのは勿論、それは差別の出來ない一體となつてのみ個性の中には生きてゐるのだ。水を考へようとする場合に、それを水素と酸素とに分解して、どれ程綿密に二つの元素を硏究した所が、何の役にも立たないだらう。水は水そのものを考へることによつてのみ理解される。だから私がお前の望むところは、私の要求を、お前が外界の標準によつて、支離滅裂にすることなく、その全體をそのまゝ攝受して、そこにお前の滿足を見出す外にない。これだけの用意が出來上つたら、もう何の躊躇もなく驀進すべき準備が整つたのだ。私の誇りかなる時は誇りかとなり、私の謙遜な時は謙遜となり、私の愛する時愛し、私の憎む時憎み、私の欲するところを欲し、私の厭ふところを厭へばいゝのである。

かくしてお前は、始めてお前自身に立ち歸ることが出來るだらう、この世に生れ出て、産衣を着せられると同時に、今日までに亙つて加へられた外界の壓迫から、お前は今始めて自由になることが出來る。これまでお前が、自分を或る外界の型に篏める必要から、强ひて不用のものと見て、切り捨てゝしまつたお前の部分は、今は本當の價値を回復して、お前に取つては矢張り必要缺くべからざる要素となつた。お前の凡ての枝は、等しく日光に向つて、喜んで若芽を吹くべき運命に逢ひ得たのだ。その時お前は永遠の否定を後ろにし、無關心の谷間を通り越して、初めて永遠の肯定の門口に立つことが出來るやうになつた。

お前の實生活にもその影響がない譯ではない。これからのお前は必然によつて動いて、無理算段をして動くことはない。お前の個性が生長して今までのお前を打ち破つて、更に新しいお前を造り出すまで、お前は外界の壓迫に餘儀なくされて、無理算段をしてまでもお前が動く必要を見なくなる。例へばお前が外界に卽した生活を營んでゐた時、お前は控へ目といふ道德を實行してゐたらう。お前は心にもなく善行をし過すことを恐れて、控目に善行をしてゐたらう。然しお前は自分の缺點を隱すことに於ては、中々控目には隱してゐなかつた、寧ろ恐ろしい大膽さを以て、お前の心の醜い祕密を人に知られまいとしたではないか。お前は人の前では、祕かに自任してゐるよりも、低く自分の德を披露して、控目といふ德性を滿足させておきながら、欲念といふやうな實際の弱點は、一寸見には見つからない程、綿密に上手に隱しおほせてゐたではないか。さういふ態度を私は無理算段と呼ぶのだ。然し私に卽した生活にあつては、そんな無理算段はいらないことだ。いかなる欲念も、畢竟お前の個性の生長の糧となるのであるが故に、お前はそれに對して臆病であるべき必要がなくなるだらう。卽ち、お前は、私の生長の必然性のためにのみ變化して、外界に對しての顧慮から伸び縮みする必要は絕對になくなるべき筈だ。何事もそれからのことだ。

お前はまた私に歸つて來る前に、お前が全く外界の標準から眼を退けて、私を唯一無二の力と頼む前に、人類に對するお前の立場の調和について迷つたかも知れない。驀地にお前が私と一緒になつて進んで行くことが、人類に對して迷惑となり、その爲めに人間の進歩を妨げ、從つて生活の秩序を破り、節度を壞すやうな結果を多少なりとも惹き起しはしまいか。さうお前は迷つたらう。

それは外界にのみ執着しなれたお前に取つては考へられさうなことだ。然しお前がこの問題に對して眞劍になればなる程、さうした外部的な顧慮は、お前には考へようとしても考へられなくなつて來るだらう。水に溺れて死なうとする人が、世界の何處かの隅で、小さな幸福を得た人のあるのを想像して、それに祝福を送るといふやうなことがとてもあり得ないと同樣に、お前がまことに緊張して私に來る時には、それから結果される影響などは考へてはゐられない筈だ。自分の罪に苦しんで、荊棘の中に身をころがして、悶えなやんだ聖者フランシスが、その悔悟の結果が、人類にどういふ影響を及ぼすだらうかと考へてゐたかなどと想像するやうなものは、人の心の正しい尊さを、露程も味つたことのない憐れな人といはなければならないだらう。

お前にいつて聞かす。さういふ問ひを發し、さういふ疑ひになやむ間は、お前は本當に私の所に歸つて來る資格は持つてはゐないのだ。お前はまだ徹底的に體裁ばかりで動いてゐる人間だ。それを捨てろ。それを捨てなければならぬ程に今までの誤謬に眼を開け。私は前後を顧慮しないではゐられない程、緩漫な歩き方はしてゐない。自分の生命が脅かされてゐるくせに、外界に對してなほ閑葛藤を繫いでゐるやうなお前に對しては、恐らく私は無慈悲な傍觀者であるに過ぎまい。私は冷然としてお前の慘死を見守つてこそゐるだらうが、一臂の力にも恐らくなつてはやらないだらう。

又お前は、前にもいつたことだが、單に專門家になつたことだけでは滿足が出來なくなる。一體人は自分の到

る處に自分の主でなければならぬ。然るに專門家となるといふことは、自分を人間生活の或る一部門に賣り渡すとでもある。多かれ少かれ外界の要求の犧牲となることである。完全な人間――個性の輪廓のはつきりまとまつた人間となりたいと思はないものが何處にあらう。然るにお前はよくこの第一義の要求を忘れてしまつて、外聞といふ誘惑や、もう少し進んだ所で、社會一般の進歩を促し進めるといふやうな、柄にもない非望に驅られて、お前は甘んじて一つしかないお前の全生命を片輪にしてしまひたがるのだ。然しながら私の所に歸つて來たお前は、そんな危險な火山頂上の舞踏はしてゐない。お前の手は、お前の頭は、お前の職業は、いかに分業的な事柄に亙つて行かうとも、お前は常にそれをお前の個性なる私に繫いでゐるからだ。お前は大抵の分業にたづさはつても自分自身であることが出來る。しかのみならず、若しお前のしてゐる仕事が、到底お前の個性を滿足し得ない時には、お前は個性の滿足の爲めに仕事を投げ捨てることを意としないであらう。少くとも斯かる理不盡な生活を無くなすやうに、お前の個性の要求を申出すだらう。お前のかくすることは、無事といふことにのみ執着したがる人間の生活には、不都合を來す結果になるかも知れない。又表面的な進歩ばかりをめやすにしてゐる社會には不便を起すことがあるかも知れない。然しお前はそれを氣にするには及ばない。私は明かに知つてゐる。人間生活の本當の要求は無事といふことでもなく、表面だけの進歩といふことでもないことを。その本當の要求は、一箇の人間の要求と同じく生長であることを。だからお前は安んじて、確信をもつて、お前の道を選べばいゝのだ。精神と物質とを、個性と仕事とを互に切り放した文明がどれ程進歩しようとも、それは無限の沙漠に流れこむ一條の河に過ぎない。それはいつか細つて枯れはてゝしまふ。

私はこれ以上をもうお前にいふまい。私は老婆親切の饒舌の爲めに既に餘りに疲れた。然しお前は少し動かされたやうだな。選ぶべき道に迷ひ果てたお前の眼には、故郷を望み得たやうな光が私に對して浮んでゐる。憐れ

な僞善者よ。强さとの平均から常に破れて、或る時は稍〻强く、或る時は强さを羨む外にない弱さに陷る僞善者よ。お前の强さと弱さとが平均してゐないのはまだしもの幸だつた。お前は多分そこから救ひ出されるだらう。その不平均の撞着の間から僅かばかりなりともお前の誠實を拾ひ出すだらう。その誠實を取り逃すな。若しそれが純であるならば、誠實は微量であつても事足りる。本當をいふと不純な誠實といふものはない。又量定さるべき誠實といふものはない。誠實がある。そこには純粹と凡てとがあるのだ。だからお前は誠實を見出だした所に勇み立つがいゝ、恐れることはない。

起て。そこにお前の眼の前には新たな視野が開けるだらう。それをお前は私に代つて言ひ現はすがいゝ。

お前は私にこの長い言葉を無駄に云はせてはならない。私は暖かい手を擴げて、お前の來るのを待つてゐるぞよ。

私の個性は私にかく告げてしづかに口をつぐんだ。

八

私の個性は少しばかりではあるが、私に誠實を許してくれた。然し誠實とはそんなものでいゝのだらうか。私は八方摸索の結果、すがり附くべき一莖の藁をも見出し得ないで、已むことなく覺束ない私の個性――それは私自身にすら他の人のそれに比して、少しも優れたところのない――に最後の隱家(かくれが)を求めたに過ぎない。それを誠實といつていゝのだらうか。けれども名前はどうでもいゝ。或る人は私の最後の到達を私の卑屈がさせた業だといふだらう。或る人は又私の勇氣がさせた業だといふかも知れない。たゞ私自身にいはせるなら、それは必至な或る力が私をそこまで連れて來たといふ外はない。誰でもが、この同じ必至の力に促されていつか一度はその人

自身に歸つて行くのだ。少くとも死が間近かに彼に近づく時には必ずその力が來るに相違ない。一人として早晩個性との遭遇を避け得るものはない。私も亦人間の一人として、人間並みにこの時個性と顏を見合はしたに過ぎない。或る人よりは少し早く、而して或る人よりは甚だおそく。

これは少くとも私に取つては何よりもいゝことだつた。私は長い間の無益な動亂の後に始めて些かの安定を自分の裏に見出した。こゝは居心がいゝ。仕事を始めるに當つて、先づ坐り心地のいゝ一脚の椅子を得たやうに思ふ。私の仕事はこの椅子に倚ることによつて最もよく取り運ばれるにちがひないのを得心する。私はこれからでも無數の煩悶と失敗とを繰り返すではあらうけれども、それらのものはもう無益に繰り返される筈がない。煩悶も必ず滋養ある食物として私に役立つだらう。私はこの椅子に身を託して、私の知り得た所を主に私自身のために書き誌しておかうと思ふ。私はこれを宣傳の爲めに書くのではない。私の經驗は狹く貧しくして、とてもそんな普遍的な訴へをなし得ないことを私はよく知つてゐる。たゞ私に似たやうな心の過程に在る少數の人がこれを讀んで僅かにでも會心の微笑を酬ゆる事があつたら、私自身を表現する喜びの上に更に大きな喜びが加へられることになる。

秩序もなく系統もなく、たゞ喜びをもつて私は書きつゞける。

九

センティメンタリズム、リアリズム、ロマンティシズム――この三つのイズムは、その何れかを抱く人の資質によつて決定せられる。或る人は過去に現はれたもの、若しくは現はるべかりしものに對して愛着を繋ぐ。而して現在をも未來をも能ふべくんば過去といふ基調によつて導かうとする。凡ての美しい夢は、經驗の結果から生れ

出る。經驗そのものからではない。さういふ見方によつて生きる人はセンティメンタリストだ。

また或る人は未來に現はれるもの、若しくは現はるべきものに對して憧憬を繋ぐ。既に現はれ出たもの、今現はれつゝあるものは、凡て醜く歪(ゆが)んでゐる。やむ時なき人の欲求を滿たし得るものは現はれ出ないものゝ中にのみ潜んでゐなければならない。さういふ見方によつて生きる人はロマンティシストだ。

更に又或る人は現在に最上の價値をおく。既に現はれ終つたものはどれほど優れたものであらうとも、それを現在にも未來にも再現することは出來ない。未來にいかなるよいものが隱されてあらうとも、それは今私達の手の中にはない。現在には過去に在るやうな美しいものはないかも知れない。又未來に夢見られるやうな輝かしいものはないかも知れない。然しこゝには具體的に把持さるべき私達自身の生活がある。全力を盡してそれを活きよう。さういふ見方によつて生きる人はリアリストだ。

第一の人は傳說に、第二の人は理想に、第三の人は人間に。

この私の三つのイズムに對する見方は誤つてゐないだらうか。若し誤つてゐないなら、私はリアリストの群れに屬する者だといはなければならぬ。何故といへば、私は今私自身の外に依賴すべき何者をも持たないから。而してこの私なるものは現在にその存在を持つてゐるのだから。

私にも私の過去と未來とはある。然し私が一番賴らねばならぬ私は、過去と未來とに挾まれたこの私だ。現在のこの瞬間の私だ。私は私の過去や未來を蔑(ないがし)ろにするものではない。縱令(たとひ)蔑ろにした所が、實際に於て過去は私の中に滲み透り、未來は私の現在を未知の世界に導いて行く。それをどうすることも出來ない。唯私は、過去未來によつて私の現在を見ようとはせずに、現在の私の中に過去と未來とを攝取しようとするものだ。私の現在が、私の過去であり、同時に未來であらせようとするものだ。即ち過去に對しては感情の自由を獲得し、未來に對し

ては意志の自由を主張し、現在の中にのみ必然の規範を立しようとするものだ。

何故お前はその立場に立つのだと問はれるなら、さうするのが私の資質に適するからだといふ外には何等の理由もない。

私には生命に對する生命自身の把握といふ事が一番尊く思はれる。即ち生命の緊張が一番好ましいものに思はれる。而して生命の緊張はいつでも過去と未來とを現在に引きよせるではないか。その時傳說によつて私は判斷されずに、私が傳說を判斷する。又私の理想は近々と現在の私に這入りこんで來て、このまゝの私の中にそれを實現しようとする。かくて私は現在の中に三つのイズムを統合する。委しくいふと、そこにはもう、三つのイズムはなくして私のみがある。かうした個性の狀態を私は一番私に親しいものと思はずにゐられないのだ。

私の現在はそれがある如くある外はない。それは他の人の眼から見ていかに不完全な、而して汚點だらけのものであらうとも、又私が時間的に一歩その境から踏み出して、過去として反省する時、それがいかに物足らないものであらうとも、現在に生きる私に取つては、その現在の私は、それがあるやうにしかあり得ない。善くとも惡くともその外にはあり得ないのだ。私に取つては、私の現在はいつでも最大無限の價値を持つてゐる。私にはそれに代ふべき他の何者もない。私の存在の確實な承認は各〻の現在に於てのみ與へられる。

だから私に取つては現在を唯一の寶玉として尊重し、それを最上に生き行く外に殘された道はない。私はそこに背水の陣を布いてしまつたのだ。

といつて、私は如何にして過去の凡てを蔑視し、未來の凡てを無視することが出來よう。私の現在は私の魂にまつはりついた過去の凡てゞはないか。そこには私の親もゐる。私の祖先もゐる。その人達の仕事の全量がある。その人々や仕事を取り圍んでゐた大きな世界もある。或る時にはその上を日も照し雨も潤した。或る時は天

界を果から果まで遊行する彗星が、その稀れなる光を投げた。或る時は地球の地軸が角度を變へた。それらの有らゆる力はその力の凡てを集めて私の中に積み重つてゐるのではないか。私はどうしてそれを蔑視することが出來よう。私は假りにその力を忘れてゐようとも、その力は瞬轉の間も私を忘れることはない。たゞ私はそれらのものを私の現在から遊離して考へるのを全く無益徒勞のことゝ思ふだけだ。それらのものは嚴密に私の現在に織りこまれることによつてのみその價値を有し得るといふことに氣が付いたのだ。畢竟現在の中に攝取し盡された過去は、人が假りにそれを過去といふ言葉で呼ばうとも、私にとつては現在の外の何者でもない。現在といふものゝ本體をこゝまで持つて來なければ、その內容は全く成り立たない。

私は遊離した狀態に在る過去を現在と對立させて、その比較の上に個性の座位を造らうとする虛ろな企てには厭き果てたのだ。それは科學者がその經驗物を取り扱ふ態度を直ちに生命にあてはめようとする愚かな無駄な企てではないか。科學者と實驗との間には明かに主客の關係がある。然し私と私の個性との間には寸分の間隙も上下もあつてはならぬ。凡ての對立は私にあつて消え去らなければならぬ。

未來についても私は同じ事が言ひ得ると思ふ。私を除いて私の未來(といはず未來の全體)を完成し得るものはない。未來の成行きを考へる場合、私といふ一人の人間を度外視しては、未來の相は成り立たない。これは少しも高慢な言葉ではない。その未來を築き上げるものは私の現在だ。私の現在が失はれてゐるならば、私の未來は生れ出て來ない。私の現在が最上に生きられるなら、私の未來は最上に成り立つ。眼前の緊張からゆるんで、單に未來を空想することが何で未來の創造に塵ほどの益にもなり得よう。未來を考へないまでに現在に力を集めた時、よき未來は刻々にして創り出されてゐるのではないか。

センティメンタリストの痛ましくも甘い涙は私にはない。ロマンティシストの快く華やかな想像も私にはない。

凡ての缺陷と凡ての醜さとを持ちながらも、この現在は私に取つていかに親しみ深くいかに尊いものだらう。そこにある强い充實の味と人間らしさとは私を牽きつけるに十分である。この饗應は私を存分に飽き足らせる。

一〇

然しながら個性の完全な飽滿と緊張とは如何に得がたきものであるよ。燃燒の生活とか白熱の生命とかいふ言葉は紙と筆とをもつてこそ表はし得ようけれども、私の實際の生活の上には容易に來てくれることがない。然し私にも全くないことではなかつた。私はその境界がいかに尊く難有きものであるかを幽かながらも窺ふことが出來た。而してその醍醐味の前後にはその境に到り得ない生活の連續がある。その關係を私はこれから朧ろげにでも書き留めておかう。

外界との接觸から自由であることの出來ない私の個性は、縱令自主的な生活を導きつゝあつても、常に外界に對し何等かの角度を保つてその存在を持續しなければならない。或る時は私は外界の刺戟をそのまゝに受け入れて、反省もなく生活してゐる。或る時は外界の刺戟に對して反射的に意識を動かして生活してゐる。又或る時は外界の刺戟を待たずに、私の生命が或る已むなき內的の力にをかされて外界に働きかける。かゝる變化はたゞ私の生命の緊張度の强弱によつて結果される。これは智的活動、情的活動、意志的活動といふやうに、生命を分解して生活の狀態を現はしたものではない。人間の個性の働きを言ひ現はす場合にかゝる分解法によるのは私の最も忌む所である。人間の生命的過程に智情意といふやうな區別は實は存在してゐないのだ。生命が或る對象に對して變化なく働き續ける場合を意志と呼び、對象を變じ、若しくは力の量を變化して生命が働きかける場合を情といひ、生命が二つ以上の對象について選擇をなす場合を智と名づけたに過ぎないのだ。人の心的活動は三頭政治の支配

を受けてゐるのではない。もつと純一な統合的な力によつて總轄されてゐるのだ。だから少し綿密な觀察者は、智と情との間に、情と意志との間に、又意志と智との間に、判然とはその何れにも從はせることの出來ない幾多の心的活動を發見するだらう。虹彩を檢する時、赤と青と黃との間に無限數の間色を發見するのと同一だ。赤青黃は元來白によつて統一さるべき假象であるからである。かくて私達が太陽の光線そのものを見窮めようとする時、分解された諸色をいかに研究しても、それから光線そのもの丶特質の全體を知悉することが出來ぬと同樣に、智情意の現象を如何に科學的に探究しても、心的活動そのものを摑むことは思ひもよらない。歸納法は記述にのみ役立つ。然し本體の表現には役立たない。この簡單な原理は屢ゝ閑却される。科學に、從つて科學的研究に絕大の價値をおかうとする現代にあつては、歸納法の根本的缺陷は往々無反省に閑却される。

偖て私は岐路に迷ひ込まうとしたやうだ。私は再び私の當面の問題に歸つて行かう。

外界の刺戟をそのまゝ受け入れる生活を假りに習性的生活 (habitual life) と呼ぶ。それは石の生活と同樣の生活だ。石は外界の刺戟なしには永久に一所(ひとところ)にあつて、永い間の中にたゞ滅して行く。石の方から外界に對して働きかける場合は絕無だ。私には下等動物といはれるものに通有な性質が殘つてゐるやうに、無機物の生活さへが膠着してゐると見える。それは人の生活が最も緩漫となる所には何時でも現はれる現象だ。私達の祖先が經驗し盡した事柄が、更に繰り返されるに當つては、私達はもう自分の能力を意識的に働かす必要はなくなる。かゝる物事に對する生活活動は單に習性といふ形でのみ私達に殘される。

チェスタートンが、「いかなる革命家でも家常茶飯事については、少しも革命家らしくなく、尋常人と異らない尋常なことをしてゐる」といつたのはまことだ。革命家でもない私にはかゝる生活の態度が私の活動の大きな部分を占めてゐる。每朝私は顏を洗ふ。而して顏を洗ふ器具に變化がなければ、何等の反省もなく同じ方法で顏を

洗ふ。若し不注意の爲めにその方法を誤るやうなことでもあれば、却つてそれを不愉快の種にする位だ。この生活に於ては全く過去の支配の下にある。私の個性の意識は少しもそこに働いてゐない。

私はかゝる生活を無益だといふのではない。かゝる生活を有するが爲めに私の日常生活はどれ程煩雜な葛藤から救はれてゐるか知れない。この緩漫な生活が一面に成り立つことによつて、私達は他面に、必要な方面、緊張した生活の欲求を感じ、それを達成することが出來る。

然しかゝる生活は私の個性からいふと、個性の中に屬させたらいゝものかわるいものかゞ疑はれる。何故ならば、私の個性は嚴密に現在に執着しようとし、かゝる生活は過去の集積が私の個性とは連絡なく私にあつて働いてゐるといふに過ぎないから。その上かゝる生活の內容は甚だ不安定な狀態にある。外界の事情が聊かでも變れば、もうそこにはこの生活は成り立たない。而して私がこれからいはうとする智的生活の圈內に這入つてしまふ。私は安んじてこの生活に倚りかゝつてゐることが出來ない。

又本能として自己の表現を欲求する個性は、習性的生活にのみ依賴して生存するに堪へない。單なる過去の繰り返しによつて滿足してゐることが出來ない。何故なら、そこには自己がなくしてたゞ習性があるばかりだから、外界と自己との間には無機的な因緣があるばかりだから。私は石から、せめては草木なり鳥獸になり進んで行きたいと希ふ。この欲求の緊張は私を驅つて更に異つた生活の相を選ばしめる。

一一

それを名づけて私は智的生活（intellectual life）とする。

この種の生活に於て、私の個性は始めて獨立の存在を明かにし、外界との對立を成就する。それは反射の生活

である。外界が個性に對して働きかけた時、個性はこれに對して意識的の反應をする。卽ち經驗と反省とが、私の生活の上に表はれて來る。これまで外界に征服されて甘んじてゐた個性はその獨自性を發揮して、外界を相手取つて挑戰する。習性的生活に於て私は無元の世界にゐた。智的生活に於て私は始めて二元の世界に入る。こゝには私がゐる。かしこには外界がある。外界は私に攻め寄せて來る。私は經驗といふ形式によつて外界と衝突する。而してこの經驗の戰場から反省といふ結果が生れ出て來る。それは或る時には勝利で、或る時には敗北であるであらう。

その何れにせよ、反省は經驗の結果を似寄りの部門に選び分ける。かく類別せられた經驗の堆積を人々は知識と名づける。知識を整理する爲めに私は信憑すべき一定の法則を造る。かく知識の堆積の上に建て上げられた法則を人々は道德と名づける。

道德は對人的なものだといふ見解は一應道理ではあるけれども、私はさうは思はない。孤島に上陸したばかりの孤獨なロビンソン・クルーソーにも自己に對しての道德はあつたと思ふ。何等の意味に於てゞあれ、外界の刺戟に對して自己をよりよくして行かうといふ動向は道德とはいへないだらうか。クルーソーが彼の爲めに難破船まで什器食料を求めに行つたのは、彼自身に取つての道德ではなかつたらうか。然しクルーソーはやがてフライデーを殺人者から救ひ出した。クルーソーとフライデーとは最上の關係に於て生きることを互に要求した。クルーソーは自己に對する道德とフライデーに對する道德との間に分護點を見出さねばならなかつた。フライデーも同じ努力をクルーソーに對してなした。この二人の努力は幸に一致點を見出した。かくて二人は孤島にあつて、美しい間柄で日を過したのみならず、遂に船に救はれて英國の土を踏むことが出來た。フライデーが來てからは、その孤島には對人的道德卽ち社會道德が出來たけれども、クルーソー一人の時には、そこに一の道德も存在しなかつ

たと云はうとするのは、思ひ誤りでありはしまいか。道德とは自己と外界（それが自然であらうと人間であらうと）との知識に基する正しい自己の立場の決定である。だから、道德は一人の人の上にも、二人以上の人々の間にも當然成り立たねばならぬものだ。但し兩方の場合に於て道德の內容は知識の變化と共に變化する。知識の內容は外界の變化と共に變化する。それ故道德は外界の變化につれてまた變化せざるを得ぬ。

世には道德の變易性を物足らなく思ふ人が少くないやうだ。自分を律して行くべき唯一の規準が絕えず變化せねばならぬといふ事は、直ちに人間生活の不安定そのものを豫想させる。人間の持つてゐる道德の後には何か不變な或るものがあつて、變化し易い末流の道德も、謂はゞそこに假りの根ざしを持つものに相違ない。不完全な人間は一氣にその普遍不易の道德の根元を把握しがたい爲めに、摸索の結果として誤つてその一部を彼等の規準とするに過ぎぬ。一部分であるが故に、それは外界の事情によつては、修正の必要を生ずるだらうけれども、それは直ちに徹底的に道德そのものゝ變易性を證據立てるものにはならない。さう或る人々は考へるかも知れない。

それでも私は道德の內容は絕えず變易するものだと言ひ張りたい。私に普遍不易に感ぜられるものは、私に內在する道德性である。卽ち知識の集成の中から必ず自己を外界に對して律すべき規準を造り出さうとする動向は、その內容（緊張度の增減は論じないで）に於て變化することなく自存するのを知つてゐる。然し道德性と道德とが全く異つた觀念であるのは、誰でも容易に判る筈だ。私に取つては、道德の內容の變化するのは少しも不思議ではない。又困ることでもない。たゞ變へようと思つても變へることの出來ないのは、道德を生み出さうとする動向だ。而してその內容が變化すると假定するのは私に取つて淋しいことだ。然し幸に私はそれを不安に思ふ必要はない。私は自分の經驗によつてその不易を十分に知つてゐるから。

知識も道德も變化する。然しそれが或る期間固定してゐて、私の生活の努力がその內容を充實し得ない間は、

それはどこまでも、知識として又道德として嚴存する。然し私の生活がそれらを乘り越してしまふと、知識も道德も習性の閾の中に退き去つて、知識若しくは道德としての價値が失はれてしまふ。私が無意識に、たゞ外界の刺戟にのみ順應して行つてゐる生活の中にも、或は他の或る人が見て道德的行爲とするものがあるかも知れない。然しその場合私に取つては決して道德的行爲ではない。何故ならば、道德的である爲めには私は努力をしてゐなければならないからだ。

智的生活は反省の生活であるばかりでなく努力の生活だ。人類はこゝに長い經驗の結果を綜合して、相共に依據すべき範律を作り、その範律に則つて自己を生活しなければならぬ。努力は實に人を石から篩ひ分ける大事な試金石だ。動植物にあつてはこの努力といふ生活活動は無意識的に、若しくは苦痛なる生活の條件として履行されるだらう。然し人類は努力を單なる苦痛とのみは見ない。人類に特に發達した意識的動向なる道德性の要求を充たすものとして感ぜられる。その動向を滿足する爲めに人類は道德的努力に伴ふ苦痛を侵すことを意としない。この現はれは人類の歴史を莊嚴なものにする。

誰か智的生活の所產なる知識と道德とを讃美しないものがあらう。それは眞理に對する人類の倦むことなき精進の一路を示唆する現象だ。凡ての懷疑と凡ての破壞との間にあつて、この大きな力は嘗て磨滅したことがない。かのフェニックスが火に燒かれても、再び若々しい存在に甦つて、絕えず兩翼を大空に向つて張るやうに、この精進努力の生活は人類がなほ地上の王なる左券として、長くこの世に榮えるだらう。

然し私はこの生活に無上の安立を得て、更に心の空しさを感ずることがないか。私は否と答へなければならない。私は長い廻り道の末に、尋ねあぐねた故鄉を私の個性に見出した。この個性は外界によつて十重二十重に圍まれてゐるにもかゝはらず、個性自身に於て滿ち足らねばならぬ。その要求が成就されるまでは絕對に飽きるこ

とがない。智的生活はそれを私に滿たしてくれたか。滿たしてはくれなかつた。何故ならば智的生活は何といつても二元の生活であるからだ。そこにはいつでも個性と外界との對立が必要とせられる。私は自然若しくは人に對して或る身構へをせねばならぬ。經驗する私と經驗を强ひる外界とがあつて知識は生れ出る。努力せんとする私とその對象たる外界があつて道德は發生する。私が知識そのものではなく道德そのものではない。それらは私と外界とを合理的に繫ぐ橋梁に過ぎない。私はこの橋梁即ち手段を實在そのものと混同することが出來ないのだ。私はまた平安を欲すると共に進步を欲する。潤色(elaboration)を欲すると共に創造を欲する。平安は既存の事體の調節的持續であり、進步は既存の事體の建設的破棄である。潤色は在るものをよりよくすることであり、創造は在らざりしものをあらしめることである。私はその一方にのみ安住してゐるに堪へない。私は絕えず個性の再造から再造に飛躍しようとする。然るに智的生活は私のこの飛躍的な內部要求を充足してゐるか。

智的生活の出發點は經驗である。經驗とは要するに私の生活の殘滓である。それは反省——意識のふりかへり——によつてのみ認識せられる。一つの事象が知識になるためにはその事象が一たび生活によつて濾過されたといふことを必要な條件とする。こゝに一つの知識があるとする。私がそれを或る事象の認識に役立つものとして承認するためには、縱令その知識が他人の經驗の結果によつて出來上つたものであれ、私の經驗も亦それを裏書したものでなければならぬ。私の經驗が若しその知識の基本となつた經驗と全然沒交涉であつたなら、私は到底それを自分の用ゐ得る知識として承認することは出來ない筈だ。だから私の有する知識とは、要するに私の過去を整理し、未來に起り來るべき事件を取り扱ふ上の參考となるべき用具である。私と道德とに於ける關係も亦全く同樣な考へ方によつて定めることが出來る。即ち知識も道德も既存の經驗に基いて組み立てられたもので、それがそのまゝ役立つためには、私の生活が同一軌道を繰り返し〳〵往來するのを一番便利とする。而してそこに

は進歩とか創造とかいふ動向の活躍がおのづから忌み避けられなければならない。

私の生活が平安であること、而してその內容が潤色されることを私は喜ばないとはいはない。私の內部にはいふまでもなくかゝる要求が大きな力を以て働いてゐる。私はその要求の達成を智的生活に向つて感謝せねばならぬ。けれども私は永久にこの保守的な動向にばかり膠着して滿足するだらうか。

一個人よりも活動の遲鈍になり勝ちな社會的生活にあつては、この保守的な智的生活の要求は自然に一個人のそれよりも强い。平安無事といふことは、社會生活の基調となりたがる。だから今の程度の人類生活の樣式下にあつては、個人的の飛躍的動向を無視壓迫しても、智的生活の確立を希望する。現代の政治も、敎育も、學術も、產業も、大體に於てはこの智的生活の强調と實踐とにその目標をおいてゐる。だから若し私がこの種の生活にのみ安住して、社會が規定した知識と道德とに依據してゐたならば、恐らく社會から最上の報酬を與へられるだらう。而して私の外面的な生存權は最も確實に保障されるだらう。而して社會の內容は益〻平安となり、潤色され、整然たる形式の下に統合されるだらう。

然し――社會にもその動向は朧ろげに看取される如く――私には智的生活よりも更に緊張した生活動向の嚴存するのをどうしよう。私はそれを社會生活の爲めに犧牲とすべきであるか。社會の最大の要求なる平安の爲めに、進步と創造の衝動を抑制すべきであるか。私の不滿は謂れのない不滿であらねばならぬだらうか。

社會的生活は往々にして一個人のそれより遲鈍であるとはいへ、私の持つてゐるものを社會が全然缺いてゐるとは思はれない。何故ならば、私自身が社會を組立てゝゐる一分子であるのは間違ひのないことだから。私の欲する所は社會の欲する所であるに相違ない。而して私は平安と共に進步を欲する。潤色と共に創造を欲する。その衝動を社會は今繼子扱ひにはしてゐるけれども――而して社會なるものは性質上多分永久にさうであらうけれ

ども――その何處かの一隅には必ず潜勢力としてそれが伏在してゐなければならぬ。社會は社會自身の意志に反して絶えず進歩し創造しつゝあるから。

私が私自身になり切る一元の生活、それを私は久しく憧れてゐた。私は今その神殿に徐ろに進みよつたやうに思ふ。

三

こゝまでは縦令たとひたど／＼しいにせよ、私の言葉は私の意味しようとする所に忠實であつてくれた。然しこれから私が書き連ねる言葉は、恐らく私の使役に反抗するだらう。然し縦令反抗するとも私はこれで筆を擱くことは出來ない。私は言葉を鞭つことによつて自分自身を鞭つて見る。私も私の言葉もこの個性表現の困難な仕事に對して蹉つまづくかも知れない。こゝまで私の伴侶であつた（恐らくは少數の）讀者も、絶望して私から離れてしまふかも知れない。私はその時讀者の忍耐の弱さを不滿に思ふよりも私自身の體驗の不十分さを悲しむ外はない。私は言葉の墮落をも尤めまい。かすかな暗示的表出をたよりにして兎に角私は私自身を言ひ現はして見よう。

無元から二元に、二元から一元に。保存から整理に、整理から創造に。無努力から努力に、努力から超越力に。これらの各〻の過程の最後のものが今表現せらるべく私の前にある。

個性の緊張は私を拉して外界に突貫せしめる。外界が個性に向つて働きかけない中に、個性が進んで外界に働きかける。卽ち個性は外界の刺戟によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活（impulsive life）と假稱しよう。

何が私をしてこの衝動に燃え立たせるか。私は知らない。然し人は自然界の中にこの衝動の假りの姿を認める

ことが出來ないだらうか。

地球が造られた始めにはそこに痕跡すら有機物は存在しなかつた。そこに、或る時期に至つて有機物が現はれ出た。それは或る科學者が想像するやうに他の星體から隕石に混入して地表に齎されたとしても、少くとも有機物の存在に不適當だつた地球は、いつの間にかその發達にすら適合するやうに變化してゐたのだ。有機物の發生に次いで單細胞の生物が現はれ出た。而して生長と分化とが始まつた。その姿は無機物の結晶に起る成長らしい現象とは多くの點に於て相違してゐた。單細胞生物はやがて複細胞生物となり、一は地上に固着して植物となり、一は移動性を利用して動物となつた。而して動物の中から人類が發生するまでに、その進化の過程には屢〻創造と稱せらるべき現象が續出した。續出したといふよりも凡ての過程は創造から創造への連續といつていゝ。習性及び形態の保存に固着してカリバンのやうに固有の生活にしがみ附かうとする生物を或る神祕な力が鞭ちつゝ、分化から分化へと飛躍させて來た。誰がこの否む可らざる目前の事實に驚異せずにはゐられよう。地上の存在をかく導き來つた大きな力はまた私の個性の核心を造り上げてゐる。私の個性は或る已みがたい力に促されて、新たなる存在へ躍進しようとする。その力の本源はいつでも內在的である。內發的である、一つの花から採收した月見草の種子が、同一の土壤に埋められ、同一の環境の下に生ひ出ても、多樣多趣の形態を取つて萠え出づるといふドフリスの實驗報告は、私の個性の欲求をさながらに飜譯して見せてくれる。若しドフリスの Mutation Theory が實驗的に否認される時が來たとしても、私の個性は、それは單にドフリスの實驗の誤謬であつて、自然界の誤謬ではないと主張しよう。少くとも地球の上には、意識的であると然らざるとに係はらず、個性認識、個性創造の不思議な力が働いてゐるのだ。ベルグソンのいふ純粹持續に於ける認識と體驗は正しく私の個性が承認するところのものだ。個性の中には物理的の時間を超越した經驗がある。意識のふりかへりなる所謂反省によつて

は掴めない經驗そのものが認識となつて現はれ出る。そこにはもう自他の區別はない。二元的な對立はない。これこそは本當の生命の赤裸々な表現ではないか。私の個性は永くこの境地への歸還にあこがれてゐたのだ。

例へば大きな水流を私は心に描く。私はその流れが何處に源を發し、何處に流れ去るのかを知らない。然しその河は漾々として無邊際から無邊際へと流れて行く。私は又その河の兩岸をなす土壤の何物であるかをも知らない。然しそれはこの河が億劫の年所をかけて自己の中から築き上げたものではなからうか。私の個性も亦その河の水の一滴だ。その水の押し流れる力は私を拉して何處かに押し流して行く。或る時には私は岸邊近く流れて行く。而して岸邊との摩擦によつて、私を圍む水も私自身も、中流の水にはおくれがちに流れ下る。更に或る時は、人がよく實際の河流で觀察し得るやうに、中流に近い水の速力の爲めに蹴押されて逆流することさへある。かゝる時に私は不幸だ。私は新たなる展望から展望へと進み行くことが出來ない。然し私が一たび河の中流に持ち來されるなら、もう私は極めて安全で且つ自由だ。私は河自身の速力で流れる。河水の凡てを押し流すその力によつて私は走つてゐるのだけれども、私はこの事實をすら感じない。私は自分の欲求の凡てに於て流れ下る。何故ならば、河の有する最大の流速は私の欲求そのものに外ならないから。だから私は絕對に自由なのだ。而して兩岸の摩擦の影響を受けねばならぬ流域に近づくに從つて、私は自分の自由が制限せられて來るのを苦々しく感じなければならない。そこに始めて私自身の外に嚴存する運命の手が現はれ出る。私はそこでは否むべからざる宿命の感じにおびえねばならぬ。河の水は自らの位置を選擇すべき道を知らぬ。然し人間はそれを知つてゐる。而してその選擇を實行することが出來る。それは人間の有する自覺がさせる業である。

人は運命の主であるか奴隸であるか。この問題は屢々私達を悒鬱にする。この問題の決定的批判なしには、神に對する悟りも、道德律の確定も、科學の基礎も、人間の立場も凡て不安定となるだらう。私もまたこの問題に

は永く苦しんだ。然し今はかすかながらもその解決に對する曙光を認め得た心持がする。

若し本能的生活が體驗せられたなら、それを體驗した人は必ず人間の意志の絶對自由を經驗したに違ひない。本能の生活は一元的であつてそれを牽制すべき何等の對象もない。それはそれ自身の必然な意志によつて、必然の道を踏み進んで行く。意志の自由とは結局意志そのもの丶必然性をいふのではないか。意志の欲求を認めなければ、その自由不自由の問題は起らない。意志の欲求を認め、その意志の欲求が必然的であるのを認め、本能的境地に置かれた意志は本能そのものであつて、それを遮る何者もないことを知つたなら、私達のいふ意志の自由はそのまゝ肯定せられなければならぬ。

智的生活以下に於てはさういふ譯には行かない。智的生活は常に外界との調節によつてのみ成り立つ。外界の存在なくしてはこの生活は働くことが出來ない。外界は常に智的生活とは對立の關係にあつて、しかも智的生活の所緣になつてゐる。かくしてその生活は自由であることが出來ない。のみならず智的生活の樣式は必ず過去の反省によつて成り立つといふ事を私は前に申し出した。既になし遂げられた生活は――縱令それが本能的生活であつても――なし遂げられた生活である。その形は復と變易することがない。智的生活は實にこの種の固定し終つた生活の認識と省察によつて成り立つのである。その省察の持ち來たす概念がどうして宿命的な色彩を以て色づけられないでゐよう。だから人の生活は或は宿命的であり或は自由であり得るといはう。その宿命的である場合は、その生活が正しき緊張から退縮した時である。正しい緊張に於て生活される間は個性は必ず絶對的な自由の意識の中にある。だから一層正しくいへば、根柢的な人間の生活は自由なる意志によつて導かれ得るのだ。

同時に本能の生活には道德はない。從つて努力はない。この生活は必的至に自由な生活である。必至には二つの道はない。二つの道のない所には善惡の選擇はない。故にそれは道德を超越する。自由はseinであつてsol enで

はない。二つの道の間に選ぶためにこそ努力は必要とせられるけれども、唯一筋道を自由に押し進む所に何の努力の助力が要求されよう。

私は創造の爲めに遊戲する。私は努力しない。從つて努力に成功することも、失敗することもない。成功するにつけて、運命に對して謙遜である必要はない。又失敗するにつけて運命を顧みて辯疏させる必要もない。凡ての責任は――若しそれを强ひて言ふならば――私の中にある。凡ての報償は私の中にある。

例へばこゝに或る田園がある。その中には田疇と、山林と、道路と、家屋とが散在して、人々は各〻その或る部分を私有し、田園の整理と平安とに勤んでゐる。他人の畑を收穫するものは罪に問はれる。道路を步まないで山林を徘徊するものは警戒される。それはさうあるべきことだ。何故といへば、畑はその所有者の生計のために存在し、道路は旅人の交通のために設けられてゐるのだから。それは私に智的生活の鳥瞰圖を開展する。こゝに人がある。彼はその田園の外に擴がる未踏の地を探險すべき衝動を感じた。彼は田園を踏み出して、その荒原に足を入れた。そこには彼の踏み進むべき道路はない。又掠奪すべき作物はない。誰が其時彼の踏み出した脚の一歩について尤めだてをする事が出來るか。彼が自ら奮つて一步を未知の世界に踏み出した事それ自身が善といへば善だ。彼の脚は道德の世界ならざる世界を踏んでゐるのだ。それは私に本能的生活の面影を微か乍ら髣髴させる。

黑雲を劈いて天の一角から一角に流れて行く電光の姿はまた私に本能の奔流の力强さと鋭さを考へさせる。力ある弧狀を描いて走るその電光のこゝかしこに本流から分岐して大樹の枝のやうに目的點に星馳する支流を見ることがあるだらう。あの支流の末は往々にして、黑雲に呑まれて消え失せてしまふ。人間の本能的生活の中にも屢〻かゝる現象は起らないだらうか。或る人が純粹に本能的の動向によつて動く時、誤つて本能そのものゝ步みよりも更に急がうとする。而して遂に本能の主潮から逸して、自滅に導く迷路の上を驀地に馳せ進む。而して遂

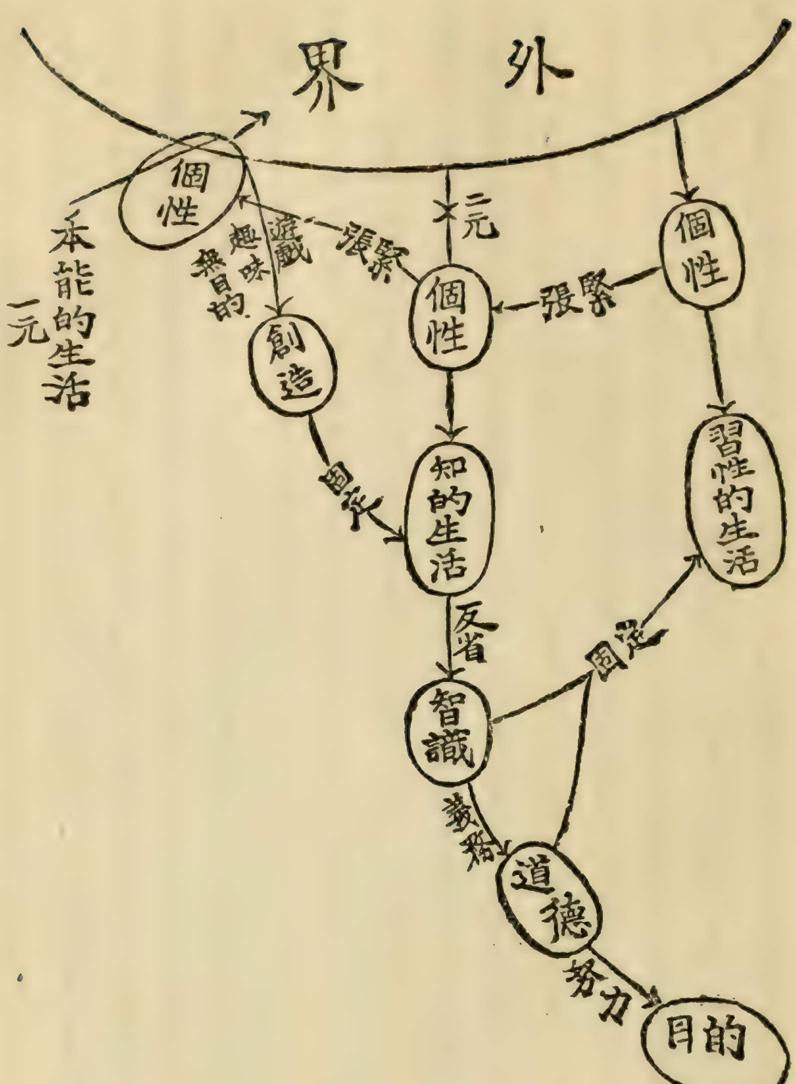
に何者でもあらぬべく消え去つてしまふ。それは悲壯な自己矛盾である。彼の創造的動向が彼を空しく自滅せしめる。智的生活の世界からこれを眺めると、一つの愚かな蹉跌として眼に映ずるかも知れない。たしかに合理的ではない。又かゝる現象が智的生活の渦中に發見された場合には道德的ではない。然しその生活を生活した當體なる一つの個性に取つては、善惡、合理非合理の閑葛藤を挿むべき餘地はない。かくばかり緊張した生活が、自己滿足を以て生活された、それがあるばかりだ。智的生活を基調として生活し、その生活の基準に慣らされた私達は動ともするとこの基準のみを以て凡ての現象を理智的に眺めてゐはしないか。而して智的生活を一歩踏み出した所に、更に緊張した純眞な生活が伏在するのを見落すやうなことはないか。若しさうした態度にあるならば、それはゆゝしき誤謬といはねばならぬ。人間の創造的生活はその瞬間に停止してしまふからだ。この本能的に對しておぼろげながらも推察の出來ない社會は、豚の如く健全な社會だといひ得る外の何物でもあり得ない。

自由なる創造の世界は遊戲の世界であり、趣味の世界であり、無目的の世界である。努力を必要としないが故に遊戲と云つたのである。義務を必要としないが故に趣味といつたのである。生活そのものが目的に達する手段ではないが故に無目的といつたのである。緩漫な、回顧的な生活にのみ圍繞されてゐる地上の生活に於て、私はその最も純粹に近い現はれを、相愛の極、健全な愛人の間に結ばれる抱擁に於て見出だすことが出來ると思ふ。彼等の床に近づく前に道德知識の世界は影を隱してしまふ。二人の男女は全く愛の本能の化身となる。その時彼等は彼等の隣人を顧みない、彼等の生死を慮らない。二人は單に愛のしるしを與へることゝ受け取ることゝにのみ燃える。而して忘我的な、苦痛にまでの有頂天、それは極度に緊張された愛の遊戲である。その外に何物でもない。しかもその間に、人間のなし得る創造としては神祕な絕大な創造が成就されてゐるのだ。ホヰットマンが「アダムの子等」に於て、性慾を歌ひ、大自然の雄々しい裸かな姿を髣髴させるやうな瞬間を讃美したことに何んの不思

よ。肉にまで押し進んでも更に悔いと憎しみとを醸さない戀こそは眞の戀である。その戀の姿は比べるものなく美しい。私は又本能的生活の素朴に近い現はれを、無邪氣な小兒の熱中した遊戲の中に見出すことが出來ると思ふ。彼は正しく時間からも外聞からも超越する。彼には遊戲そのもの丶外に何等の目的もない。彼の表面的な目的は縱令一個の紙箱を造ることにありとするも、その製作に熱中してゐる瞬間には、紙箱を造る手段そのもの丶中に目的は吸ひ込まれてしまふ。そこには何等の努力も義務も附帶してはゐない。あの純一無雜な生命の流露を見守つてゐると私は涙がにじみ出るほど羨ましい。私の生活があ丶いふ態度によつて導かれる瞬間が偶にあつたならば、私は甫めて眞の創造を成就することが出來るであらうものを。

私は本能的生活の記述を蔑ろにして、あまり多くをその讃美の爲めに空費したらうか。私は假りにそれを許してもらひたい。何故なら、私は本能的生活を智的生活の上位に置かうと思ふからだ。誰でも私のいふ智的生活を習性的生活の上におかぬものはなからう。然し本能的生活を智的生活の上におかうとする場合になると、多くの人々はそこに躊躇を感じはしないだらうか。現在人類の生活が智的生活をその基調としてゐるといふ點に於て、その躊躇は無理のないことだともいへる。單に功利的な立場からのみ考へれば、その躊躇は正當なことだとさへいへる。然し凡ての生存は、それが本能の及ぶだけ純粹なる表現である場合に最も眞であるといふ大事な要件が許されるならば、本能的生活は私にとつて智的生活よりもより價値ある生活である。若し價値をもつてそれを定めるのが不當ならば、より尊い生活である。しかも私はこの生活の內容を的確に發想することが出來ない（それはこの生活が理智的表現を超越してゐるが故でもある）。その場合私は、比喩と讃美とによつてわづかにこの尊い生活を偲ぶより外に道がないだらう。

一三


外界
個性
本能的生活
一元
遊戯
趣味
無目的
張緊
二元
個性
張緊
個性
創造
固定
知的生活
習性的生活
反省
智識
固定
義務
道德
努力
目的

一四

本能といふ言葉を用ゐるに當つて私は多少の誤解を恐れないではない。この言葉は殊に科學によつてその正しい意味から墮落させられてゐる。といふよりは、科學が素朴的に用ゐたこの言葉を俗衆が徹底的に歪め穢してしまつた。然し今はそれが固有の意味にまで引き上げられなければならない。ベルグソンはこの言葉をその正しき意味に於て用ゐ始めた。ラッセル（私は氏の文章を一度も讀んだことがないけれども）も亦ベルグソンを繼承して、この言葉の正當な使用を心懸けてゐるやうに見える。

本能とは大自然の持つてゐる意志を指すものとも考へることが出來る。野獸にはこの力が野獸なりに赤裸々に現はれてゐる。自然科學はその現はれを觀察して、詳細にそれを記述した。而してそれが人類の活動の中にも看取せられるのを附け加へた。この記述はいふまでもなく明かな事實である。然しその事實から、人類の活動の全部が野獸に現はれた本能だけから成り立つとは、科學は結論してゐないのだ。然るに人は往々にして科學の記述を逆用しようとする。これは單なる誤解とのみ見て過すことが出來ないと私は思ふ。

人間は人間である。野獸ではない。野獸が無自覺に近い心でなす所を人は十分なる自覺をもつてなしてゐるのである。若し人がその自覺を逆用して、肉にまで至る愛の要求のない場合に、單に外觀的に觀察された野獸の本能に走つたならば、それは明かに人間の有する本能の全體的な活動といふことが出來ない。同時に、人間の本能の中から野獸と共通な部分を理智的に引き離して、純靈といふやうな境地を揑造しようとするのは、明かに本能に對する謂れのない迫害である。本能は分解とは兩立することが出來ない。本能はいつでもその全體に於て働かねばならぬ。人間の本能——野獸の本能でもなく又天使の本能でもない——もその本能の全體に於て働かねばなら

ぬ。そこからのみ、若し生れるならば、人間以上の新しい存在への本能は生れ出るだらう。本能を現實のきびしさに於て受取らないで、ロマンティックに考へる所に、純靈の世界といふ空虚な空中樓閣が築き上げられる。肉と靈とを峻別し得るものゝ如く考へて、その一方に偏倚するのを最上の生活と決めこむやうな禁慾主義の義務律法はそこに胚胎されるのではないか。又本能を現實のきびしさに於て受取らないで、センティメンタルに考へる所に肉慾の世界といふ墮落した人生觀が假想される。この野獸の過去にまでの歸還は、また本能の分裂が結果するところのもので、人間を人間としての莊嚴の座から引きおろすものではないか。私の生活が何等かの意味に於てその緊張度を失ひ、現實への安立から知らず〳〵未來か過去かへ遠ざかる時、必ずかゝる本能の分裂がその結果として現はれ出るのを私はよく知つてゐる。私はその境地にあつて必ず何等かの不滿を感ずる。而して一歩を誤れば、その不滿を醫さんが爲めに、益〻本能の分裂に向つて猪突する。それは危い。その時私は明かに自己を葬るべき墓穴を掘つてゐるのだ。それを何人も救つてくれることは出來ない。本當にそれを救ひ得るのは私自身のみだ。

私の意味する本能を逆用して、自滅の方に進むものがあるならば、私はこの上更にいふべき何物をも持たぬだらう。本當をいへば、誤解を恐れるなら、私は始めから何事をもいはぬがいゝのだ。私は私の柄にもない不遜な老婆親切をもうやめねばならぬ。

一五

人間は人間だ。野獸ではない。天使でもない。人間には人間が大自然から分與された本能があると私はいつた。それならその本能とはどんなものであるかと反問されるだらう。私は當然それに答へるべき責任を持つてゐ

る。私は貧しいなりにその責任を果さう。私の小さな體驗が私に書き取らせるものをこゝに披瀝して見よう。

人間によつて切り取られた本能の流れを私は今まで漫然とたゞ本能と呼んでゐた。それは一面に許さるべきことである。人間の有する本能も亦大自然の本能の一部なのだから。然しこゝまで私の考察を書き進めて來ると、私はそれを特殊な名によつて呼ぶのを便利とする。

人間によつて切り取られた本能――それを人は一般に愛と呼ばないだらうか。老子が道の道とすべきは常の道にあらずといつたその道も或はこの本能を意味するのかも知れない。孔子が忠信のみといつたその忠信も或はこれを意味するのかも知れない。釋尊の菩提心、ヨハネのロゴス、その他無數の名稱はこの本能を意味すべく構出されたものであるかも知れない。然し私は自分の便宜の爲めに假りにそれを愛と名づける。愛には、本能と同じやうに既に種々な不純な屬性的意味が膠着してゐるけれども、多くの名稱の中で最も專門的でなく、且つ比較的に普遍的な内容をその言葉は含んでゐるやうだ。愛といへば人は常識的にそれが何を現はすかを朧ろげながらに知つてゐる。

愛は人間に現はれた純粹な本能の働きである。然し概念的に物事を考へる習慣に縛られてゐる私達は、愛といふ重大な問題を考察する時にも、極めて習慣的な外面的な概念に捕へられて、その眞相とは往々にして對角線的にかけへだゝつた結論に達してゐることはないだらうか。

人は愛を考察する場合、他の場合と同じく、愛の外面的表現を觀察することから出發して、その本質を見窮めようと試みないだらうか。ポーロはその書翰の中に愛は「惜みなく與へ」云々といつた、それは愛の外面的表現を遺憾なくいひ現はした言葉だ。愛する者とは與へる者の事である。彼は自己の所有から與へ得る限りを與へんとする。彼からは今まであつたものが失はれて、見た所貧しくはなるけれども、その爲めには彼は憂へないのみ

か、却つて欣喜し雀躍する。これは疑ひもなく愛の存する所には何處にも觀察される現象である。實際愛するものゝ心理と行爲との特徴は放射することであり與へることだ。人はこの現象の觀察から出發して、愛の本質を歸納しようとする。而して直ちに、愛とは與へる本能であり放射するエネルギーであるとする。多くの人は省察をこゝに限り、愛の體驗を十分に噛みしめて見ることをせずに、逸早くこの觀念を受け入れ、その上に各自の人生觀を築く。この觀念は私達の道德の大黑柱として認められる。愛他主義の倫理觀が構成される。而して人間生活に於ける最も崇高な行爲として犧牲とか獻身とかいふ德行が高調される。而して更にこの觀念が、利己主義の急所を衝くべき最も銳利な武器として考へられる。

さう思はれることを私は一概に排斥するものではない。愛が智的生活に持ち來たされた場合には、さう結論されるのは自然なことだ。智的生活にあつては愛は理智的にのみ考察されるが故に、それは決して生活の內部にあつて働くまゝの姿では認められない。愛は生活から假りに切り放されて、一つの固定的な現象としてのみ觀察される。謂はゞ理智が愛の周圍――それはいかに綿密であらうとも――のみを廻轉し圍繞してゐる。理智的にその結論が如何に周匝で正確であらうとも、それが果して本能なる愛の本體を把握し得た結論といふことが出來るだらうか。

本能を把握するためには、本能をその純粹な形に於て理解するためには、本能的生活中に把握される外に道はない。體驗のみがそれを可能にする。私の體驗は、縱しそれが貧弱なものであらうとも――愛の本質を、與へる本能として感ずることが出來ない。私の經驗が私に告げる所によれば、愛は與へる本能である代りに奪ふ本能であり、放射するエネルギーである代りに吸引するエネルギーである。

他のためにする行爲を利他主義といひ、己れのためにする行爲を利己主義といふのなら、その用語は正當である。何故ならば利するといふ言葉は行爲を表現すべき言葉だからである。然し倫理學が定義するやうに、他のた

めにせんとする衝動若しくは本能を認めて、これを利他主義といひ、已れのためにせんとする衝動若しくは本能を主張してこれを利己主義といふのなら、その用語は正鵠を失してゐる。それは當然愛他主義愛己主義といふ言葉で書き改められなければならないものだ。利と愛との兩語が自明的に示すが如く、利は行爲或は結果を現はす言葉で、愛は動機或は原因を現はす言葉であるからだ。この用語の錯誤が偶〻愛の本質と作用とに對する混同を暴露してはゐないだらうか。卽ち人は愛の作用を見て直ちにその本質を揣摩し、これに對して本質にのみ名づくべき名稱を與へてゐるのではないか。又人は愛が他に働く動向を愛他主義と呼び、已れに働く動向を利己主義と呼ぶならはしを持つてゐる。これも偶〻人が一種の先入僻見を以て愛の働き方を見てゐる證據にはならないだらうか。二つの言葉の中、物質的な聯想の附帶する言葉を已れへの場合に用ゐ、精神的な聯想を起す言葉を他への場合に用ゐてゐるのは、恐らく愛が他を益する時その作用を完うし得るといふ既定の觀念に制せられてゐるのを現はしてゐるやうだ。この愛の本質と現象との混淆から、私達の理解は思ひもよらぬ迷宮に迷ひ込むだらう。

一六

愛を傍觀してゐずに、實感から滑りこんで、これまで認められてゐた觀念が正しいか否かを檢證して見よう。私は私自身を愛してゐるか。私は躊躇することなく愛してゐると答へることが出來る。私は他を愛してゐるか。これに肯定的な答へを送るためには、私は或る條件と限度とを附することを必要としなければならぬ。他が私と何等かの點で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することが出來ない。切實にいふと、私は已れに對してこの愛を感ずるが故にのみ、已れに交渉を持つ他を愛することが出來るのだ。私が愛すべき已れの存在を見失つた時、どうして他との交渉を持ち得よう。而して交渉なき他にどうして私の愛が働き得よう。だから更に切實に

いふと、他が何等かの狀態に於て私の中に攝取された時にのみ、私は他を愛してゐるのだ。然し己れの中に攝取された他は、本當をいふともう他ではない。明かに己れの一部分だ。だから私が他を愛してゐる場合も、本質的にいへば他を愛することに於て己れを愛してゐるのだ。而して己れをのみだ。

但し己れを愛するとは何事を示すのであらう、私は己れを愛してゐる。そこには聊かの虛飾もなく誇張もない。又それを傲慢な云ひ分ともすることは出來ない。唯あるがまゝをあるがまゝに申し出たに過ぎない。然し私が私自身をいかに深くいかによく愛してゐるかを省察すると問題はおのづから別になる。若し私の考へる所が謬つてゐないなら、これまで一般に認められてゐた利己主義なるものは、極めて功利的な、物質的な、外面的な立場からのみ考察されてはゐなかつたらうか。卽ち生物學の自己保存の原則を極めて安價に否定して、それを愛己の本能と結び付けたものではなかつたらうか。「生物發達の狀態を研究して見ると、利己主義は常に利他主義以上の力を以て働いてゐる。それを認めない譯には行かない」といつたスペンサーの生物一般に對しての漫然たる主張が、何といつても利己主義の理解に對する基調になつてゐはしないだらうか。その主張が全事實の一部をなすものだといふことを私も認めない譯ではない。然しそれだけで滿足し切ることを、私の本能の要求は明かに拒んでゐる。私の生活動向の中には、もつと深くもつとよく己れを愛したい欲求が十二分に潜んでゐることに氣づくのだ。私は明かに自己の保存が保障されたゞけでは飽き足らない。進んで自己を押し擴げ、自己を充實しようとし、而して意識的にせよ、無意識的にせよ、休む時なくその願望に驅り立てられてゐる。この切實な欲求が、かの功利的な利己主義と同一水準におかれることを私は退けなければならない。それは愛己主義の意味を根本的に破壞しようとする恐るべき傾向であるからである。私の愛己的本能が若し自己保存にのみあるならば、それは自己の平安を希求することで、智的生活に於ける欲求の一形式にしか過ぎない。愛は本能である。かくの如き境地に滿足す

る譯がない。私の愛は私の中にあつて最上の生長と完成とを欲する。私の愛は私自身の外に他の對象を求めはしない。私の個性はかくして生長と完成との道程に急ぐ。然らば私はどうしてその生長と完成とを成就するか。それは奪ふことによつてゞある。愛の表現は惜みなく與へるだらう。然し愛の本體は惜みなく奪ふものだ。

アミイバが觸指を出して身外の食餌を抱へこみ、やがてそれを自己の蛋白素(プロトプラズム)中に同化し終るやうに、私の個性は絶えず外界を愛で同化することによつてのみ生長し完成してゆく。外界に個性の貯藏物を投げ與へることによつて完成するものではない。例へば私が一羽のカナリヤを愛するとしよう。私はその愛の故に、美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛撫とを與へるだらう。人は、私のこの愛の外面の現象を見て、私の愛の本質は與へることに於てのみ成り立つと速斷することはないだらうか。然しその推定は根柢的に的をはづれた悲しむべき誤謬なのだ。私がその小鳥を愛すれば愛する程、小鳥はより多く私に攝取されて、私の生活と不可避的に同化してしまふのだ。唯いつまでも分離して見えるのは、その外面的な形態の關係だけである。小鳥のしば鳴きに、私は小鳥と共に或は喜び或は悲しむ。その時喜びなり悲しみなりは小鳥のものであると共に、私にとつては私自身のものだ。私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私そのものである。私にとつては小鳥はもう私以外の存在ではない。小鳥ではない。小鳥は私だ。私が小鳥を活きるのだ。(The little bird is myself, and I live a bird)“I live a bird”……英語にはこの適切な愛の發想法がある。若しこの表現をうなづく人があつたら、その人は確かに私の意味しようとする所をうなづいてくれるだらう。私は小鳥を生きるのだ。だから私は美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛撫とを外物に恵み與へた覺えはない。私は明かにそれらのものを私自身に與へてゐるのだ。私は小鳥とその所有物の凡てを殘す所なく外界から私の個性へ奪ひ取つてゐるのだ。見よ愛は放射するエネルギーでもなければ與へる本能でもない。愛は掠奪する烈しい力だ。與へると見るのは、愛者被愛者に直接の交

渉のない第三者が、愛するものゝ愛の表現を極めて外面的に觀察した時の結論に過ぎないのを知るだらう。
かくて愛の本能に從つて、私は他を私の中に同化し、他に愛せらるゝことによつて、私は他の中に投入し、私と他とは卷絹の經緯の如く、そこにおのづから美しい生活の紋樣を織りなして行くのだ。私の個性がよりよく、より深くなり行くに從つて、よりよき外界はより深く私の個性の中に取り込まれる。生活全體の實績はかくの如くして始めて成就する。そこには犧牲もない。又義務もない。唯感謝すべき特權と、ほゝ笑ましい飽滿とがあるばかりだ。

一七

目を擧げて見るもの、それは凡てが神祕である。私の心が平生の立場からふと視角をかへてゐる時、私の目前に開かれるものはたゞ驚異すべき神祕があるばかりだ。然しながら現實の世界に執着を置き切つた私には、かゝる神祕は神祕でありながらあたり前の事實だ。私は小兒のやうに常に驚異の眼を見張つてゐることは出來なくなつた。その現實的な、散文的な私にも、愛の働きのみは近づきがたき神祕な現はれとして感ぜられる。
愛は私の個性を哺くむために外界から奪ひ取つて來る。けれどもその爲めに外界は寸毫も失はれることがない。例へば私は愛によつてカナリヤを私の衷に奪ひ取る。けれどもカナリヤは奪はるゝことによつて幸福にはなるとも不幸福にはならない。かの小鳥は少くとも物質的に美しい籠（それは醜い籠にあるよりも確かにいゝことだらう）と新鮮な食餌とを以て富ませられる。物質の法則を超越したこの神祕は私を存分に驚かせ感傷的にさへする。愛といふ世界は何といふいゝ世界だらう。そこでは白晝に不思議な魔術が絶えず行はれてゐる。それを見守ることによつて私は凡ての他の神祕を忘れようとさへする。私はこの賜物一つを持ち得ることによつて、凡て

の存在にしみ〴〵とした感謝の念を持たざるを得ない。

愛は與へる本能をいふのだと主張する人は、恐らく私のこの揚言を聞いて哂ひ出すだらう。お前のいふことは夙の昔に私が言ひ張つた所だ。愛は與へることによつて二倍する、その不思議を知らないのか。愛を與へるものは與へるが故に富み、愛を受けるものは受けるが故に富む。地球が古いほど古いこの眞理をお前は今まで知らないでゐたのか、と。

私はそれを知らないではない。然し私はその提言には一つの條件を置く必要を感ずる。愛が與へることによつて二倍するといふ現象は、愛するものと愛せられたるものとの間に愛が相互的に成り立つた場合に限るのだ。若しその愛が完全に受け取られた場合には、その愛の惠みは確かに二倍するだらう。然し愛せられるものが愛するもののあることを知らなかつた時はどうだ。或はそれを斥けた時はどうだ。それでも愛は二倍されてゐる事と感ずることが出來るか。それは一種感情的な自覩の假想に過ぎないのではないか。或は人工的な神祕主義に強ひて一般的な考へを結び付けて考へる結果に過ぎないのではないか。

若し愛が片務的に動いた場合に、愛するといふことを恩惠を施すといふ如く考へてゐる人には、愛するといふ行爲に一種の自己滿足を感ずるが故に、愛する人の受ける心の豐かさは二倍になると主張するなら、それは愛の作用を沒我的でなければならぬと強言する愛他主義者としてはあるまじきことだといはねばならぬ。その時その人は愛することによつて明かに報酬を得てゐるからである。報酬を得て（それが人からであらうと、神からであらうと）、若しくは報酬を得ることを期待し得てする仕事が何で愛他主義であらうぞ。何で他に殉ずる心であらうぞ。愛するのは自分のためではなく、他人のためだと主張する人は、先づこの邊の心持を僻見なく省察して見る必要があると思ふ。彼等はよく功利主義々々々々といつて報酬を目あてにする行爲を蛇蝎の如く忌み惡んでゐる。然

るに彼等自身の行爲や心持にもさうした傾向は見られないだらうか。その報酬に對する心持が違ふ。それに比べものにならぬ程凡下の功利主義より高尚だといはうか。私にはそんな心持は通じない。高尚だといへばいふ程それがうそに見える。非常に巧みな、而して狡猾な假面の下に隱れた功利主義としか思はれない。物質的でないにせよ、純粹に精神的であるにせよ（そんな表面的な區別は私には本當は通用しないが、假りにある人々の主張するやうな言葉遣ひにならつて）、何等かの報酬が想像されてゐる行爲に何の獻身ぞ、何の犧牲ぞ。若し僞善といひ得べくんば、これこそ大それた忌はしい僞善ではないか。何故なら當然期待さるべき功利的な結果を、彼等は知らぬ顏に少しも功利的でないものゝ如くに主張するからだ。

　或はいふかも知れない。愛するといふことは人間內部の至上命令だ。愛する時人は水が低きに流れるが如く愛する。そこには何等報酬の豫想などはない。その結果がどうであらうとも愛する者は愛するのだ。これを以てかの報酬を目的にして行爲を起す功利主義者と同一視するのは、人の心の絕妙の働きを知らぬものだと。私はそれを詭辯だと思ふ。一度愛した經驗を有するものは、愛した結果が何んであるかを知つてゐる、それは不可避的に何等かの意味の獲得だ。一度この經驗を有つたものは、再び自分の心の働きを利他主義などとは呼ばない筈だ。他に殉ずる心などとはいはない筈だ。さういふことはあまり勿體ないことである。

　愛は自己への獲得である。愛は惜みなく奪ふものだ。愛せられるものは奪はれてはゐるが、不思議なことには何物も奪はれてはゐない。然し愛するものは必ず奪つてゐる。ダンテが少年の時ビヤトリスを見て、世の常ならぬ愛を經驗した。その後彼は長くビヤトリスを見ることがなかつた。而してたゞ一度あつた。それはフロレンスの街上に於てだつた。ビヤトリスは一人の女伴れと共に紅い花をもつてゐた。而してダンテの挨拶に對してしとやかな會釋を返してくれた。その後ビヤトリスは他に嫁いだ。ダンテはその婚姻の席に列つて激情のあまり卒倒し

た。ダンテはその時以後彼の心の奥の愛人を見ることがなかつた。而してビヤトリスは凡ての美しいもの〻運命に似合はしく、若くしてこの世を去つた。文獻によればビヤトリスは切なるダンテの熱愛に觸れることなくして世を終つたらしい。ダンテの愛はビヤトリスと相互的に通ひ合はなかつた（愛は相互的にのみ成り立つとのみ考へる人にこ〻に注意してほしい）。ダンテだけが、祕めた心の中に彼女を愛した。しかも彼は空しかつたか。ダンテはいかにビヤトリスから奪つたことぞ。彼は一生の間ビヤトリスを浪費してなほ餘る程この愛人から奪つてゐたではないか。彼の生活は寂しかつた。靦腆であつた。然しながら強く愛したことのない人々の淋しさと比べて見たならばそれは何といふ相違だらう。ダンテはその愛の獲得の飽滿さを自分一人では抱へきれずに、「新生」として「神曲」として心外に吐き出した。私達はダンテのこの飽滿からの餘剩にいかに多くの價値を置くことぞ。ホヰットマンも嘗てその可憐な卽興詩の中に「自分は嘗て愛した。その愛は酬いられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだ」と歌つてゐる。

見よ、愛がいかに奪ふかを。愛は個性の飽滿と自由とを成就することにのみ全力を盡してゐるのだ。愛は嘗て義務を知らない。犧牲を知らない。獻身を知らない。奪はれるものが奪はれることをゆるしつ〻あらうともあるまいとも、それらに煩はされることなく愛は奪ふ。若し愛が相互的に働く場合には、私達は爭つて互に互を奪ひ合ふ。決して與へ合ふのではない。その結果、私達は互に何物をも失ふことがなく互に獲得する。人が通常いふ愛するものは二倍の惠みを得るとはこれをいふのだ。私は豫期するとほりの獲得に對して歡喜し、有頂天になる。而して明かにその獲得に對して感激し感謝する。その感激と感謝とは僞善でも何でもない。あるべかりしものがあつたについての人の有し得るおのづからの情である。愛の感激……正しくいふとこの外に私の生命はない。私は明かに他を愛することによつて、凡てを自己に取り入れてゐるのを承認する。若し人が私を利己主義者と呼ばうと

ならば、私はさう呼ばれるのを妨げない。若し必要ならば愛他的利己主義者と呼んでもかまはない。苟も私が自發的に愛した場合なら、私は必ず自分に奪つてゐるのを知つてゐるからだ。

この求心的な容赦なき愛の作用こそは、凡ての生物を互に結び付けさせた因子ではないか。野獸を見よ、如何に彼等の愛の作用(相奪ふ狀)が端的に現はれてゐるかを。それが人間に至つて、全く反對の方向を取るといふのか。そんな事があり得べきではない。たゞ人間は nicety の假面の下に自分自らを瞞着しようとしてゐるのだ。而して人間はたしかにこの僞瞞の天罰を被つてゐる。それは野獸にはない、人間にのみ見る僞善の出現だ。何故愛をその根柢的な本質に於てのみ考へることが惡いのだ。それをその本質に於て考へることなしには人間の生活には遂に本當の進歩創作は持ち來されないであらう。

智的生活の動向はいつでも本能を墮落させ、それを第二義的な狀態に於てのみ利用する。智的生活の要求するものは平安無事である。この生活にあつては、愛の本質よりもその現はれが必要である。内部の要求はさもあらばあれ、互に與へ合ふ事さへやれば、それで平安は保たれてゆく。それ故に倫理道徳は義務と獻身との德を高調する。人は遂にこの固定的な概念にあざむかれる。而して愛のない所に、愛が行ふのと同じ行ひをする。卽ち愛の極印なき所有物を外界に向つて恥ぢることもなく放射する。けれども愛の極印のない所有物は、一度外界に放射されると、またとはその人に返つて來ない。その時彼にとつては行爲の結果に對する苦い後味が殘る。その後味をごまかすために、彼は人の爲めに社會の爲めに義務を果し、獻身の行ひをしたといふ諦めの心になる。而してそこに誇るべからざる誇りを感じようとする。社會はかくの如き人の動機の如何は顧慮することなく、直ちに彼に與へるのに社會人類の恩人の名を以てする。それには智的生活にあつては奬勵的にさうするのが便利だからだ。そんな人はそんな事は齒牙にかけるに足らないことのやうに云ひもし思ひもしながら、衷心の滿ち足らなさから、

知らず〳〵それを齒牙にかけてゐる。かくてその人は愛の逆用から來る冥罰を表面的な概念と社會の賞讃によつて塗抹し、社會はその人の表面的な行爲によつて平安をつないで行く。かくてその結果は生命と關係のない物質的な塵芥となつて、生活の路上に醜く堆積する。その堆積の餘弊は何んであらう。それは誰でも察し得る如く人間そのものゝ死ではないか。

一八

愛は個性の生長と自由とである。さうお前はいひ張らうとするが、と又或る人は私にいふだらう。この世の中には他の爲めに自滅を敢へてする例がいくらでもあるがそれをどう見ようとするのか。人間までに發達しない動物の中にも相互扶助の現象は見られるではないか。お前の愛己主義はそれをどう解釋する積りなのか。その場合にもお前は絕對愛他の現象のあることを否定しようとするのか。自己を滅してお前は何ものを自己に獲得しようとするのだ。と或る人は私に問ひ詰めるかも知れない。科學的な立場から愛を說かうとする愛己主義者は、自己保存の一變態と見るべき種族保存の本能なるものによつてこの難題に當らうとしてゐる。然しそれは愛他主義者を存分に滿足させないやうに、又私をも滿足させる解釋ではない。私はもつと違つた視角からこの現象を見なければならぬ。

愛がその飽くことなき掠奪の手を擴げる烈しさは、習慣的に、なまやさしいものとのみ愛を考へ馴れてゐる人の想像し得る所ではない。本能といふ言葉が誤解をまねき易い屬性によつて煩はされてゐるやうに、愛といふ言葉にも多くの歪んだ意味が與へられてゐる。通常愛といへば、すぐれて優しい女性的な感情として見られてゐはしないか。好んで愛を語る人は、頭の軟かなセンティメンタリストと取られるおそれがありはしまいか。それ

は然し愛の本質とは極めてかけ離れた考へ方から起つた危險な誤解だといはなければならぬ。愛は優しい心に宿り易くはある。然し愛そのものは優しいものではない。それは烈しい容赦のない力だ。それが人間の生活に赤裸のまゝ現はれては、却つて生活の調子を崩してしまひはしないかと思はれるほど容赦のない烈しい力だ。思へ、ただ假初めの戀にも愛人の頰はこけるではないか。愛によつて外界から奪ひ得るものゝ凡てを奪ひ取らうとする。愛は手近い所からその事業を始めて、右往左往に戰利品を運び歸る。個性が强烈であればある程、愛の活動も亦目ざましい。若し私が愛するものを凡て奪ひ取り、愛せられるものが私を凡て奪ひ取るに至れば、その時に二人は一人だ。そこにはもう奪ふべき何物もなく、奪はるべき何者もない。

だからその場合彼が死ぬことは私が死ぬことだ。殉死とか情死とかはかくの如くして極めて自然であり得ることだ。然し二人の愛が互に完全に奪ひ合はないでゐる場合でも、若し私の愛が强烈に働くことが出來れば、私の生長は益〻擴張する。而して或る世界が――時間と空間をさへ撥無するほどの擴がりを持つた或る世界が――個性の中にしつかりと建立される。而してその世界の持つ飽くことなき擴充性が、これまでの私の習慣を破り、生活を變へ、遂には弱い、はかない私の肉體を打壞するのだ。破裂させてしまふのだ。

難者のいふ自滅とは畢竟何をさすのだらう。それは單に肉體の亡滅を指すに過ぎないではないか。私達は人間である。人間は必ずいつか死ぬ。何時か肉體が亡びてしまふ。それを避けることはどうしても出來ない。然し難者が、私が愛したが故に死なねばならぬ場合、私の個性の生長と自由とが失はれてゐると考へるのは間違つてゐる。それは個性の亡失ではない。肉體の破滅を伴ふまで生長し自由になつた個性の擴充を指してゐるのだ。愛なきが故に、個性の充實を得切らずに定命なるものを繫いで死なねばならぬ人がある。愛あるが故に、個性の充實

を完うして時ならざるに死ぬ人がある。然しながら所謂定命の死、不時の死とは誰が完全に決めることが出來るのだ。愛が完うせられた時に死ぬ、即ち個性がその擴充性をなし遂げてなほ餘りある時に肉體を破る、それを定命の死といはないで何處に正しい定命の死があらう。愛したものゝ死ほど心安い潔い死はない。その他の死は凡て苦痛だ。それは他の爲めに自滅するのではない。自滅するものゝ個性は死の瞬間に最上の生長に達してゐるのだ。即ち人間として奪ひ得る凡てのものを奪ひ取つてゐるのだ。個性が充實して他に何の望むものなき境地を人は假りに沒我といふに過ぎぬ。

この事實を思ふにつけて、いつでも私に深い感銘を與へるものは、基督の短い地上生活とその死である。無學な漁夫と稅吏と娼婦とに圍繞された、人眼に遠いその三十三年の生涯にあつて、彼は比類なく深く善い愛の所有者であり使役者であつた。四十日を荒野に斷食して過した時、彼は貧民救濟と、地上王國の建設と、奇蹟的能力の修得を以ていざなはれた。然し彼は純粹な愛の事業の外には何物をも擇ばなかつた。彼は智的生活の爲めには、即ち地上の平安の爲めには何事をも敢へてなさなかつた。彼はその母や弟とは不和になつた。多くの子をその父から反かせた。ユダヤ國を攪亂するおそれによつてその愛國者を怒らせた。では彼は何をしたか。彼はその無上愛によつて三世に亙つての人類を自己の內に攝取してしまつた。それだけが彼の已むに已まれぬ事業だつたのだ。彼が與へて與へてやまなかつた事實は、彼が如何に個性の擴充に滿足し、自己に與へることを喜びとしたかを證據立てるものである。「汝自身の如く隣人を愛せよ」といつたのは彼ではなかつたか。彼は確かに自己を愛するその法悅をしみ〴〵と知つてゐた最上一人といふことが出來る。彼に若し、その愛によつて衆生を攝取し盡したといふ意識がなかつたなら、どうしてあの目前の生活の破壞にのみ圍まれて晏如たることが出來よう。而して彼は「汝等も亦我にならへ」といつてゐる。それはこの境界が基督自身のものではなく、私達凡下の衆も亦同じ道を步

み得ることを、彼自身が證言してくれたのだ。

やがて基督が肉體的に滅びねばならぬ時が來た。彼は苦しんだ。それに何の不思議があらう。彼は自分の愛の對象を、眼もて見、耳もて聞き、手もて觸れ得なくなるのを苦しんだに違ひない。又彼の愛の對象が、彼ほどに愛の力を理解し得ないのを苦しんだに違ひない。然し最も彼を苦しめたものは、彼の愛がその掠奪の事業を完全に成就したか否かを迷つた瞬間にあつたであらう。然し遂に最後の安心は來た「父よ(父よは愛よである)我れわが身を汝に委ぬ」。而して本當に神々しく、その辛酸に痩せた肉體を、最上の滿足の爲めに脚の下に踏み躙つた。

基督の生涯の何處に義務があり、犧牲があるのだらう。人は屢〻いふ、基督は有らゆるものを犧牲に供し、救世主たるの義務の故に、凡ての迫害と窮乏とを甘受し、十字架の死をさへ敢へて堪へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼にならつて、犧牲獻身の生活を送らなければならないと。私は私一個として基督が私達に遺して行つた生活をかく考へることはどうしても出來ない。基督は與へることを苦痛とするやうな愛の貧乏人では決してなかつたのだ。基督は私達を既に彼の中に奪つてしまつたのだ。彼は私の耳に囁いていふ、「基督の愛は世の凡ての高きもの、淸きもの、美しきものを攝取し盡した。惡しきもの、醜きものも又私に攝取されて淨化した。眼を開いて基督の所有の如何に豐富であるかを見るがいゝ。基督が與へ且つ施したと見えるもの凡ては、實は凡て基督自身に與へ施してゐたのだ。基督は與へざる一つのものもない。しかも何物をも失はず、凡てのものを得た。この大歡喜にお前も亦與かるがいゝ。基督のお前に要求するところはたゞこの一つの大事のみだ。お前が縱令凡てを施し與へようとも永遠の生命を失つてゐたらそれが何になる。お前は僞善者を知つてゐるか。それは犧牲獻身といふ美名をむさぼつて、自己に同化し切らない外物に對して浪費する人をいふのだ。自己に同化し切つたものに施すのは卽ち自己に施すのだといふ、世にも感謝すべき事實を認

め得ない程に、愛の隱れ家を見失つてしまつた人のことだ。浪費の後の苦々しい後味を、强ひて笑ひにまぎらすその歪んだ顏付を見るがいゝ。それは悲しい錯誤だ。お前が愛の極印のないものを施すのは一番大きな罪だと知らねばならぬ。而して愛の極印のあるものは、假令お前がそれを地獄の底に擲たうとも、忠實な犬のやうに逸早くお前の膝許に歸つて來るだらう。恐れる事はない。事實は遂に傳說に打勝たねばならぬのだ」と。

本當にさうだ。私は愛を犧牲獻身の德を以て律し縛めてゐてはならぬ。愛は智的生活の世界から自由に解放されなければならぬ。この發見は私にとつては小さな發見ではなかつた。小さな弱い經驗ではあるが、私の見た所も存分にこれを裏書きする。私が創作の衝動に驅られて容赦なく自己を檢察した時、見よ、そこには生氣に充ち滿ちた新しい世界が開展されたではないか。實生活の波瀾に乏しい、孤獨な道を踏んで來た私の裏に、思ひもかけず、多數の個性を發見した時、私は眼を見張つて驚かずにはゐられなかつたではないか。私が眼を据ゑて憚りなく自己を見つめれば見つめるほど、大きな眞實な人間生活の諸相が明瞭に現はれ出た。私の內部に充滿して私の表現を待ち望んでゐるこの不思議な世界、何だそれは。私は今にしてそれが何であるかを知る。それは私の祖先と私とが、愛によつて外界から私の裏に連れ込んで來た、謂はゞ愛の捕虜の大きな群れなのだ。彼等は各々自身の言葉を以て自身の一生を訴へてゐる。而して私の心にさへよき準備ができてゐるならば、それを聞き分け、見分け、その眞の生命に於て再現するのは可能なことであるのを私は知る。私は旣に十分に持つてゐる。藝術制作の素材には一生かゝつて表現してもなほあり餘るものを持つてゐる。外界から奪ひ取る愛の働きを無視しては、どうしてこの明らさまな事實を說明することが出來ようぞ。しかも私の愛はなほ足ることを知らずに奪はうとしてゐる。何んといふ飽くことを知らぬ烈しいそれは力だらう。

私達を貫く本能の力强さ。人間に表はれたゞけでもそれはかくまでに力强い。その力の總和を考へることは、

私達の思考力のはかなさを暴露するやうなものであらうけれども、その限られた思考力にさへ、それは限りなく偉大な、熱烈なものとして現はれるではないか。

一九

私は他を愛する形に於て凡てを私の個性の中に奪つてゐる。私はより正しきものを奪ひ取らんが爲めに、より善く、より深く愛せねばならぬ。自己を愛することが且つ深く且つ善いに從つて、私は他から何を攝取しなければならぬかをより明瞭にし得るだらう。

愛する以上は、憎まねばならぬ一面のあるのを忘れることが出來ない、愛憎のかなたにある愛、さういふものがあるだらうか。憎愛の二極を撥無して、陰陽を統合した太極といふやうな形の愛、それは理論的に考へて見られぬでもないことではあるが、かくの如きものが果して私達人間の生活を築き上げてゆく上になくてはならぬ重大問題だらうか。少くとも私には、それは欲求であり得る外價値を持つてゐない。神の世界に於ては、或は超越的形而上學の世界に於ては、かゝることは捨ておかれぬ喫緊事として考へられねばならぬだらう。然しながら一箇の人間としての私に取つては、それよりも大切な事は私が愛し且つ憎むといふ動かすことの出來ない嚴然たる事實があるばかりだ。この一見矛盾した二つの心的傾向の共存は、私をいらだゝせ且つ不幸にする。何故ならば、私の個性はいかなる場合にも純一無雜な一路へとのみ志してゐるからである。

然しながらよく考へて見ると、愛と憎みとは、相反馳する心的作用の兩極を意味するものではない。憎みとは人間の愛の變じた一つの形式である。愛の反對は憎みではない。愛の反對は愛しないことだ。だから、愛しない場合にのみ、私は何ものをも個性の中に奪ひ取ることが出來ないのだ。憎む場合にも私は奪ひ取る。それは私が

憎んだ所の外界と、而して私がそれに對して擲つたおくりものとである。愛する場合に於ては、例へば私が飢ゑた人を愛して、これに一飯を遣つたとすれば、その愛された人と一飯とは共に還つて來て私自身の骨肉となるだらう。憎しみの場合に於ても、例へば私が私を陥れたものを憎んで、これに罵詈を加へたとすれば、憎まれた人も、その醜い私の罵詈も共に還つて來て私の衷に巣喰ふのだ。それには愛によつての獲得と同じやうに永く私の衷にあつて消え去ることがない。愛はそれによつて、不消化な石ころを受け入れた胃腑のやうな思ひをさせられる。私の愛の本能が正しく働いてゐる限りは、それは愛の衷に溶けこまずに、いつまでも私の本質の異分子の如くに存續する。私は常住それによつて不快な思ひをしなければならぬ。誰か憎まない人があらう。それだから人間として誰か悒鬱な眉をひそめない人があらう。人間が現はす表情の中、見る人を不快にさせる悒鬱な表情は、實に憎みによつて奪ひ取つて來た愛の鬼子が、彼の衷にあつて彼を刺戟するのに因るのではないか。私はよくこの苦々しい悒鬱を知つてゐる。それは人間が辛うじて到達し得た境界から私が一歩を退轉した、その意識によつて引き起されるのだらう。多少でも愛することの樂しさを知つた私は、憎むことの苦しさを痛感する。それはいづれも本能のさせる業ではあるけれども、愛するより憎むことが如何に樂しからぬものであるかを知つて苦しまねばならぬ。恐らくはよく愛するものほど、强く憎むことを知つてゐるだらう。同時に又憎むことの如何に苦しいものであるかを痛感するだらう。而してどうかして憎まずにあり得ることに對して骨を折るだらう。

憎まない、それは不可能のことだらうか。人間としては或は不可能であるかも知れない。然し少くとも憎惡の對象を減ずることは出來る。出來る筈であるのみならず、私達は始終それを勉めてゐるではないか。愛と憎みとが若し同じ本能から生れたものであるとすれば、それは必ず成就さるべきものだ。如何なるものも、或る視角から憎むべきものならば、他の視角から必ず愛すべきものであることに私達は氣附くだらう。こゝに一つの器があ

る。若しも私がその器を愛さなかつたならば、私に取つてそれは無いに等しい。然し私がそれを憎みはじめたならば、もうその器は私と嚴密に交渉をもつて來る。愛へはもう一步に過ぎない。私はその用途を私が考へてゐたよりは他の方面に用ゐることによつて、その器を私に役立てることが出來るだらう。その時には私の憎みは、もう愛に變つてしまふだらう。若し憎みの故にその器を取つて直ちに粉碎してしまふ人があつたとすれば、その人は愛することに於ても亦同樣に淺くしか愛し得ない人だ。愛の強い人とは執着の強い人だ。憎みの場合に於いても、かゝる人の憎みは深刻な苦痛によつて裏付けられる。從つて容易にその憎しみの對象を捨てゝはしまはない。而してその執着の間に、ふとしたきつかけにそれを愛の對象に代へてしまふだらう。

かくして私の愛が深く善くなるに從つて、私はより多くを愛によつて攝取し、攝取された凡てのものは、あるべき排列をなして私の衷(うち)に同化されるだらう。かくて私の衷にある完き世界が新たに生れ出るだらう。この大歡喜に對して私は何物をも惜みなく投げ與へるだらう。然しその投げ與へたものが如何に高價なものであらうとも、その歡喜に比しては比較にもならぬほど些少なものであるのを知つた時、況してや投げ與へたと思つたその贈品すら、畢竟は復た自己に還つて來るものであるのを發見した時、第三者にはたとひ私の生活が犧牲と見え、獻身と見えようとも、私自身に取つては、それが獲得であり生長であるのを感じた時、その時、私が徹底した人生の肯定者ならざる何人であり得よう。凡ての人がかくの如く本能の要求によつて生活し、相交渉した時、そこに本當の健全な社會が生れ出ないで何が生れ出よう。凡ての行爲が義務でなく遊戲であらねばならぬとの要求が眞に感ぜられた時、人間の生活がこれから如何に進展せねばならぬかの示唆は適確に與へられるのだ。この本能を抑壓する必要のある、若しくは抑壓すべき道德の上に成り立たねばならぬとの主張の上に据ゑられた人類の集團生活には見遁すことの出來ないうそがある。このうそを、あらねばならぬことのやうに力說し、人間の本能を

その從屬者たらしめることに心血を瀉いで得たりとしてゐる道學者は災ひである。卽ち智的生活に人間活動の外圍を限つて、それを以て無上最勝の一路となす道學者は災ひである。その人はいつか、本能的體驗の不足から人間生活の足手まとひとなつてゐた事を發見する悲しみに遇はねばならぬだらうから。

二〇

愛せざる所に愛する眞似をしてはならぬ。憎まざる所に憎む眞似をしてはならぬ。若し人間が守るべき至上命令かあるとすればこの外にはないだらう。愛は烈しい働きの力であるが故に、これを逆用するものはその場に傷けられなければならぬ。その人は癒すべからざる諦めか不平かを以てその傷を繃帶する外道はあるまい。

×

愛は自足してなほ餘りがある。愛は嘗て物ほしげなる容貌をしたことがない。物ほしげなる顏を愼めよ。

×

基督は「汝等互にさばくなかれ」といつた。その言葉は普通受け取られてゐる以上の意味を持つてゐる。何故なら愛の生活は愛するもの一人にかゝはることだ。その結果がどうであつたとした所が、他人は絕對にそれを判斷すべき尺度を持つてゐない。然るに智的生活に於ては心外に規定された尺度がある。人は誰でもその尺度にあてはめて、或る人の行爲を測定することが出來る。だから基督の言葉は智的生活にあてはむべきものではない。基督は愛の生活の如何なるものであるかを知つて居られたのだ。たゞその現はれに於ては愛から生れた行爲と、愛の眞似から生れた行爲とを區別することが人間に取つては殆んど不可能だ。だから人は人をさばいてはならぬのだ。しかも今の世に、人はいかに易々とさばかれつゝあることよ。

犧牲とか、獻身とか、義務とか、奉仕とか、服從の德の說かれる所には、私達は警戒の眼を見張らねばならぬ。かくて神學者は專制政治の型に則つて神人の關係を案出した。かくて政治家は神人の例に則つて君臣の關係を案出した。社會道德と產業組織とはそのあとに續いた。それらは皆同じ法則の上に組立てられてゐる。そこには必ず治者と被治者とがあらねばならぬ。而して治者に特權である所のものは被治者には義務だ。被治者の所有する所のものは治者の所有せざるものだ。治者と被治者とは異つた原素から成り立つてゐる。かしこには治者の生活があり、こゝには被治者の生活がある。生活そのものにかゝる二元的分離はあるべき事なのか。兎にも角にも本能の生活にはかゝる分離はない。石の有する本能の方向に有機物は生じた。有機物の有する本能の方向に諸生物は生じた。諸生物の本能の有する方向に人間は生じた。人間の有する本能の方向に本能そのものは動いて行く。凡てが自己への獲得だ。その間に一つの斷層もない。百八十度角の方向轉換はない。

×

今のやうな人間の進化の程度にあつては、智的生活の棄却は恐らく人間生活そのものゝ崩壞であるであらう。然しながら、その故を以て本能的生活の危險を說き、壓抑を主張するものがあるとすれば、それは又自己と人類とを自滅に導かうとするものだといはれなければならぬ。この問題を私がこのやうに抽象的に申し出ると異存のある人はないやうだ。けれども假りにニイチエ一人を持ち出して來ると、その超人の哲學は忽ち四方からの非難攻擊に遭はねばならぬのだ。

×

權力と輿論とは智的生活の所產である。權威と獨創とは本能的生活の所產である。而して現世では、いつでも

前者が後者を壓倒する。

釋迦は龍樹によつて、基督は保羅によつて、孔子は朱子によつて、凡てその愛の寶座から智慧と聖德との座にまで引きずりおろされた。

×

愛を優しい力と見くびつた所から生活の誤謬は始まる。

×

女の持つ愛はあらはだけれども小さい。男の持つ愛は大きいけれども遮られてゐる。而して大きい愛は屢〻あらはな愛に打負かされる。

×

ダギンチは「知ることが愛することだ」といつた。愛することが知ることだ。

×

人の生活の必至最極の要求は自己の完成である。社會を完成することが自己の完成であり、自己の完成がやがて社會の完成となるといふ如きは、現象の輪廻相を說明したにとゞまつて、要求そのものをいひ現はした言葉ではない。

自己完成の要求が誤つて自己の一局部のそれに向けられた瞬間に、自己完成の道は跡方もなく崩れ終る。

×

一人の人の個性はその人の持つ過去全體の總和に過ぎないとある人はいふだらう。否、凡ての個性はそれが持つ過去全體の總和に「今」が加はつたものだ。而して「今」は過去と未來とを支配し得る。

×

ラッセルは本能を區別して創造本能と所有本能の二つにしたと私は聞かされてゐる。私はさうは思はない。本能の本質は所有的動向である。而してその作用の結果が創造である。

×

何故に戀愛が屢〻藝術の主題となるか。藝術は愛の可及的純粋な表現である。而して戀愛は人間の他の行爲に勝つて愛の集約的な、而して全體的な作用であるからだ。

×

試みに沒我的愛他主義者に問ひたい。あなたがその主義を主張するやうになつてから、あなたはあなた自身に何物をも與へなかつたのですか。縦令何ものかを與へたとしても、それは全然他を愛する爲めの生存に必要なために與へたのですか。然し與へられない爲めに悶死する人がこの世の中には絶えずゐるのですね。それでもあなたはその人達を助ける爲めに先づ自分に必要なものを與へてゐるのですか。そこに何等かの矛盾を感ずることはありませんか。

×

私は自分自身を有機的に生活しなければならない。そのためには行爲が内部からのみ現はれ出なければならない。石の生長のやうにではなく、植物の萠芽のやうに。

×

一艘の船が海賊船の重圍に陷つた。若し敗れたら、海の藻屑とならなければならない。若し降つたら、賊の刀の錆とならなければならない。この危機にあつて、船員は銘々が最も端的にその生命を死の脅威から救ひ出さう

とするだらう。而してその必死の努力が同時に、その船の安全を希はせ、船中にあつて彼と協力すべき人々の安全を希はせるだらう。各員の間には言はず語らずの中に、完全な共同作業が行はれるだらう、この同じ心持で人類が常に生きてゐたら。少くとも事なき時に、私達がこの心持を蔑ろにすることがなかつたならば。

×

習性的生活はその所產を自己の上に積み上げる。智的生活はその所產を自己の中に貯へる。本能的生活は常にその所產を捨てゝ飛躍する。

二一

私は澱みに來た、而して暫く渦紋を描いた。

私は再び流れ出よう。

私はまづ愛を出發點として藝術を考へて見る。

凡ての思想凡ての行爲は表象である。

表象とは愛が己れ自ら表現するための煩悶である。その煩悶の結果が卽ち創造である。藝術は創造だ。故に凡ての人は多少の意味に於て藝術家であらねばならぬ。若し謂ふところの藝術家のみが創造を司り、他はこれに與らないものだとするなら、どうして藝術品が一般の人に訴へることが出來よう。藝術家と然らざる人との間に愛の斷層があるならば、藝術家の表現的努力は畢竟無益ではないか。

一人の水夫があつて檣の上から落日の大觀を擅まにし得た時、この感激を人に傳へ得るやう表現する能力がなかつたならば、その人は詩人とはいへない、とある技巧派の文學者はいつた。然し私はさうは思はない。その莊

嚴な光景に對して水夫が感激を感じた以上は、その瞬間に於て彼は詩人だ。何故ならば、彼は彼自身に對して思想的にその感激を表現してゐるからだ。

世には多くの啞の藝術家がゐる。彼等は人に傳ふべき表現の手段を持つてはゐないが、その感激は往々にして所謂藝術家なるものを遙かに凌ぎ越えてゐる。小兒――彼は何といふ驚くべき藝術家だらう。彼の心には習慣の痂が固着してゐない。その心は痛々しい程にむき出しで鋭敏だ。私達は物を見る處に物に捕はれる。彼は物を見る處に物を捕へる。物そのものゝ本質に於てこれを捕へる。而して睿智の始めなる神々しい驚異の念にひたる。そこには何等の先入的僻見がない。これこそは純眞な藝術的態度だ。愛はかくの如き階級を經て最も明かに自己を表現する。

けれども私達の多くはこの大事な一點を屢々顧みないやうな生活をしてはゐないか。ジェームスは古來色々に分派した凡ての哲學の色合は、結局それをその構成者の稟資(temperament)に歸することが出來るといつてゐる。これは至言だといはなければならぬ。私達の生活の樣式にも亦同樣のことがいはれるであらう。或る人は前人が殘し置いた材料を利用して、愛の(卽ち個性の)表現を試みようとする。又或る人は愛の純粹なる表現を欲するが故に前人の糟粕を嘗めず、彼自らの表現手段に依らうとする。前者はより多く智的生活に依據し、後者はより多く本能的生活に依據せんとするものである。若し更にジェームスの言葉を借りていへば、前者を strong-minded と呼び、後者を tender-hearted と呼ぶことが出來ようか。

智的生活に依據して個性を表現しようとする人は、表現の材料を多く身外に求める。例へば石、例へば衣裳、例へば軍隊、例へば權力。而して表現の量に重きをおいて、深くその質を省みない。表現材料の精選よりもその排列に重きをおく。「始めて美人を花に譬へた人は天才であるが、二度目に同じことをいつた人は馬鹿だ」とヴォ

ルテールがいつた。少くとも智的生活に固執する人は美人を花に譬へる創意的なことはしない。然しそれを百合の花若しくは薔薇の花に譬へることはしない限りでない。その點に於て彼は明かに馬鹿でないことが出來る。十分に智者でさへあり得る。然しその人は個性の表現に於て delicacy の尊さを多く認めないで、亂雜な成行きに委せやすい。所謂事業家とか、政治家とか、煽動家とかいふやうな典型の人には、かゝる傾向が極めて多くあり易い。

全く實用のためにのみ造られた眞四角な建築物一つにも、そこに個性の表現が全然ないといふことは出來ない。然しながらその中から個性を、卽ち愛を搜し出すといふことは極めて困難なことだ。個性は無意味な用材の爲めに遺憾なく押しひしがれて、おまけに用材との有機的な關係から危く斷たれようとしてゐる。然し個性が全く押しひしがれ、關係が全く斷たれてしまつたなら、その醜い建築物といへどもそこに存在することは出來ないだらう。それは何といつても、かすかにもせよ、個性の働きによつてのみの存在をつなぎ得るのだ。けれども若し私達の生活がかくの如きもののみによつて圍繞されることを想像するのは寂しいことではないか。この時私達の個性は必ずかゝる物質的な材料に對して反逆を企てるだらう。

かゝる建築物の如きものが然しもつと見えのいゝ形で私達の生活をきびしく取り圍んでゐることはないだらうか。一人の野心的政治家があるとする。彼は自己の野心を滿足せんが爲めに、卽ち彼の衷にあつて表現を求めてゐる愛に、粗雜な、見當違ひな滿足を與へんが爲めに、愛國とか、自由とか、國威の宣揚とかいふ心にもない旗印をかゝげ、彼の奇妙な牽引力と、物質的報酬とを以て、彼には無緣な民衆を煽動する。民衆はその好餌に引き寄せられ、自分等の眞の要求とは全く關係もない要求に屈服し、過去に起つた或る同じやうな立派な事件に、自分達の無價値な行動を强ひて結び付けて、そこに申譯と希望とを築き上げ、而してその大それた指導者の命令のまにまに、身命をさへ賭してその事業の成就を心がける。而して、若し運命がその政治家に苛酷でなかつたならば、彼

は尨然たる國家的若しくは世界的大事業なるものを完成する。然しそこに出來上つた結果はその政治家の肖像でもなく、民衆の投影でもなく、粗雜な不明瞭な重ね寫眞に過ぎない。而してそれは當事者なる政治家その人の一生を無價値にし、民衆全體の進歩を阻止し、事業そのものは、段々人間の生活から分離して、遂には生活途上の用もない瓦礫となつて、徒らに人類進歩の妨げになるだらう。このやうな事象は、その大小廣狹の差こそあれ、私達が幾度も繰り返して遭遇せねばならぬことなのだ。しかも私達は往々その悲しい結果を曉らないのみか、かくの如きはあらねばならぬ須要のことのやうに思ひなし易い。

けれども幸ひにして人類はかくの如き稟資の人ばかりからは成り立つてゐない。そこにはもつと愛の純眞な表現を可能ならしめようとする人がある。さうしないではゐられない人がある。そのためには彼は一見彼に利益らしく見える結果にも惑はされない。彼には專念すべきたゞ一事がある。それは彼の力の及ぶかぎり、愛の純粹な表現を成就しようといふことだ。縱令その人が政治にかゝはつてゐようが、生產に從事してゐようが、稅吏であらうが、娼婦であらうが、その粗雜な生活材料のゆるす限りに於て最上の生活を目指してゐるのである。それらの人々の生活はそのまゝよき藝術だ。彼等が表現に役立てた材料は粗雜なものであるが故に、やがては古い皮袋のやうに崩れ去るだらうけれども、そのあとには必ず不思議な愛の作用が殘る。粗雜な材料はその中に力強く籠められる愛の力によつて破れ果て、それが人類進歩の妨げになるやうなことはない。けれども愛の要求以上に外界の要求に從つた人たちの建て上げたものは、愛がそれを破壞し終る力を持たない故に、いつまでもその醜い殘骸をとゞめて、それを打ち壞す愛のあらはれる時に及ぶ。

愛の純粹なる表現を更に切實に要求する人は、地上の職業にまで狹い制限を加へて、思想家若しくは普通意味せられるところの藝術家とならずにはゐられないだらう。その人々は愛が汚されざらんが爲めに、先づ愛の表現

に役立たしむべき材料の嚴選を行ふ。思想に增して純粹な材料を、私達人間は考へつくことが出來ない。哲人又は信仰の人などゝいはれる人は――若しそれがまがひものでなかつたなら――こゝにその出發點を持つてゐるに違ひない。普通意味せられるところの藝術家、卽ち藝術を仕事としてゐる人々は思想を具象化するについて、思想家のやうに抽象的な手段によらず、具體的な形に於てせんとするものだ。然しながらその具體的な形の中、及ぶだけ純粹に近い形に依らうとする。その爲めに彼等は洗練された感覺を以て洗練された感覺に訴へようとする。感覺の世界は割合に人々の間に共通であり、愛にまで直接に飜譯され易いからである。感覺の中でも、實生活に緣の近い觸覺若しくは味覺などに依るよりも、非功利的な機能を多量に有する視覺聽覺の如きに依らうとする。それらの感覺に訴へる手段にも亦等差が生ずる。

同じ言葉である。然しその言葉の用ゐ方がいかに藝術家の稟資を的確に表はし出すだらう。或る人は言葉をその素朴な用途に於て使用する。或る人は一つの言葉にも或る特殊な意味を盛り、雜多な意味を除去することなしには用ゐることを肯んじない。散文を綴る人は前者であり、詩に行く人は後者である。詩人とは、その表現の材料を、卽ち言葉を智的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて內部生命の發現を端的にしようとする人である。だからその所産なる詩は常に散文よりも藝術的に高い位置にある。私は僅かばかりの小說と戲曲とを書いたものであるが、そのさゝやかなる經驗からいつても、表現手段として散文がいかに幼稚なものであるかを感じないではゐられない。私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい程の廻り道をしなければならぬ。數限りもない捨石が積まれた後でなければ、そこには私は現はれ出て來ない。何故そんなことをしてゐねばならぬかと、私は時々自分を齒がゆく思ふ。それは明かに愛の要求に對する私の感受性が不十分であるからである。私にもつと鋭敏な感受性があつたなら、私は凡てを捨てゝ詩に走つたであらう。そこには詩人の世界が截然

として創(つく)り上げられてゐる。私達は殆んど言葉を飛躍してその後ろの實質に這入りこむことが出來る。而してその實質は驚くべく純粹だ。

或はいふ人があるかも知れない。私達の生活は昔のやうな素朴な單純な生活ではない。それは見透しのつかぬほど複雜になり難解になつてゐる。それが言葉によつて現はされる爲めには、勢ひ周到な表現を必要とする。詩は昔の人の爲めにだ。而して小說と戲曲とは今の人の爲めにだ、と。

私はさうは思はない。表現さるべき最後のものは昔も今も異ることがないのだ。縱令(たとひ)外面的な生活が複雜にならうとも、言葉の持つ意味の長い傳統によつて蕪雜になつてゐようとも、一人の詩人の徹視はよく亂れた絲のやうな生活の混亂をうち貫き、言葉をその純粹な形に立ち歸らせ、その手によつて書き下された十行の詩はよく、生の統流を眼前に展くに足るべきである。然しそれをなし得るためには、詩人は必ず深い愛の體驗者でなければならぬ。出でよ詩人よ。而して私達が直下に愛と相對し得べき一路を開け。

私は又詩にも勝つた表現の楔子を音樂に於て見出さうとするものだ。かの單獨にしては何等の意味もなき音聲、それを組合せてその中に愛を宿らせる仕事はいかに樂しくも快いことであらうぞ。それは人間の愛をまじり氣なく表現し得る樂園といはなければならない。ハアモニーとメロディーとは眞に智的生活の何事にも役立たないであらう。これこそは愛が直接に人間に與へた愛子だといつていゝ。立派な音樂は聽く人を凡ての地上の羈絆から切り放す。人はその前に氣化して直ちに運命の本流に流れ込む。人間にとつては意味の分らない、餘りに意味深い、感激が熱い淚を誘ひ出す。而して人は强い衝動によつて推進の力を與へられる。それが何處へであるかは知られない。たゞ望ましい方向にであるのは明かに感知される。その時人は愛に乘り移られてゐるのだ。

美術の世界に於て、未來派の人々が企圖するところも、またこの音樂の聖境に對する一路の憧憬でないといへ

ようか。色もまた色そのものには音の如く意味がない。面もまた面そのものには色の如く意味がない。然しながら形象の模倣再現から這入つたこの藝術は永くその傳統から遁れ出ることが出來ないで、その色その面を形の奴婢にのみ充てゝゐた。而して印象派の勃興はこの固定概念に幽かなゆるぎを與へた。色は物象の面と空間とを埋めるために、面は物象の量と積とを表はすためにのみ用ゐられた。而して印象派の勃興はこの固定概念に幽かなゆるぎを與へた。卽ち繪畫の方面に於て、色と色との關係に價値をおくことが考へつけられた。色が何を表はすかといふことより、色と色との關係の中に何が現はれねばならぬかと云ふことが注意され出した。これは物質から色の解放への第一步であらねばならぬ。併しこの傾向は未來派に至つて極度に高調された。色は全く物質から救ひ出された。色は遂に獨立するに至つた。

然し音樂が成就しただけのことを未來派は繪畫に於て成就し得てゐるだらうかといふ問題はおのづから別に考へられなければならぬ。私はこれらの藝術に對して何等具體的の知識を持つてゐるものでない。だから私はかゝる比較論に來ると口をつぐむ外はない。けれども未來派の傾向を全然斥けらるべきものだと主張する人に對しては、私は以上の見地からこの派の傾向の可能性を申し出ることが出來はしないかと思つてゐる。若し物象が具象化されなければ滿足が出來ないと人がいふならば、その人の爲めには、文學の領內に詩と小說とが併存するやうに、これまでのやうな繪畫を存續させておくのも亦妨げないだらう。然しながら美術家の個性が益〻高調せられねばならぬ時はやがて來るだらう。その時になつて未來派のやうな傾向が起るのは、私の立場からいふと、極めて自然なことであるといはねばならぬのだ。

人間は十分に惠まれてゐる。私達は愛の自己表現の動向を滿足すべき有らゆる手段を持つてゐる。厘毛の利を爭ふことから神を創ることに至るまで、僞らずに內部の要求に耳を傾ける人ほど、彼は裕かに惠まれるであらう。凡ての人は藝術家だ。そこに十二分な個性の自由が許されてゐる。私は何よりもそれを重んじなければならない。

二三

私はまた愛を出發點として社會生活を考へて見よう。

社會生活は個人生活の延長であらねばならぬ。個人的欲求と社會的欲求とが軒輊するといふ考へは根柢的に間違つてゐる。若しそこに越えることの出來ない溝渠があるといふならば、私は寧ろ社會生活を破壞して、かの孤棲生活を營む獅子や禿鷹の習性に依らう。

然しかゝる必要のないことを私の愛は知つてゐる。社會生活に對する概念の中に誤つた所があるか、個人生活の概念の中に誤つた所があるかによつて、この不合理な結論が引き出されると私は知つてゐる。

先づ個人の生活はその最も正しい內容によつて導かれなければならぬ。正しき內容とは何をいふのか。智的生活が習性的生活を是正する時には、私は智的生活に從つて習性的生活を導かねばならぬ。本能的生活が智的生活を是正する時には、私は本能的生活に從つて智的生活を導かねばならぬ。卽ち常に習性的生活の上に智的生活を、智的生活の上に本能的生活を置くことを第一の仕事と心懸けねばならぬ。正しき內容とはそれだけのことだ。

習性的生活と智的生活との關係についてはいふまでもあるまい。習性的生活が智的生活の指導によつて適合を得なければならないといふのは自明のことであるから。

然しながら智的生活が本能的生活によつて指導されねばならぬといふことについては不服を有つ人がないとはいへない。智的生活は多くの人々の經驗の總和が生み出した結果であり約束であるが、本能的生活は純粹個性內部の衝動であるが故に、必ずしも社會生活と順應することが出來ないだらうとの杞憂は起りがちに見えるからである。

けれども私は私の意味する本能的生活の意味が正しく理解されることを希ふ。本能の欲求はいつでも各人の個性全體の上に働く所のものだ。その衝動は常に個性全體の飽滿を伴つて起る。この例は卑陋であるかも知れないが、理解を容易ならしむる爲めにいつて見ると、こゝに一人の男がゐて、肉慾の衝動に驅られて一人の少女を辱かしめたとしよう。肉慾も一つの本能である。その衝動の滿足を求めたことは、そのまゝ許されることではないか。さう或る人は私に詰問するかも知れない。私はその人に問ひ返して見よう。あなたが考へる前に先づあなたをその男の位置におけ。あなたが肉慾的にのみその少女を欲してゐるのに、あなたはその少女に近づく時（全く固定的な道德觀念を度外視しても）、何等の不滿をもあなたの個性に感じなかつたか。あなたはまたあなたと見知らない少女の姿全體に、極度の恐怖と憎惡とを見出したらう。あなたはそれに少しでも打たれなかつたか。而してそこに苦い味を感じなかつたか。若しあなたに人並みの心があるなら、私のこの問に應じて否と答へるの外はあるまい。だから私はいふ。その場合あなたが本能の衝動らしく思つたものは、精神から切り放された肉慾の衝動にしか過ぎなかつたのだ。だからあなたはその衝動を行爲に移す第一の瞬間に既に見事に罰せられてしまつたのだ。若しあなたが本當に本能の（個性全體の）衝動によつてその少女を欲するなら、あなたは先づその少女にあなたの切ない愛を打ち明けるだらう。而して少女が若しあなたの愛に酬いるならば、その時あなたはその少女をあなたの衷に奪ひ取り、少女はまたあなたを彼女の衷に奪ひ取るだらう。その時あなたと少女とは二人にして一人だ（前にもいつた如く）。而してあなたは十分な飽滿な感じを以て心と肉とにおいて彼女と一體となることが出來る。その時、その事の前に何等の不滿もなく、その事の後には美しい飽滿があるばかりだらう。（これは餘事に亙るが好奇な人のために附け加へておく。若し少女がその人の愛に酬いることを拒まねばならなかつた場合はどうだ。その場合でも彼の個性は愛したことによつて生長する。悲しみも痛みも亦本能の糧だ。少女は永久に彼の衷

に生きるだらう。而して更に附け加へることが許されるなら、彼の肉慾は著しくその働きを減ずるだらう。そこには事件の精神化がおのづから行はれるのだ。若し然しその人の個性がその事があつたために分散し、精神が麋爛し、肉慾が昂進したとするならば、もうその人に於て本能の統合は破れてしまつたのだ。本能的生活はもうその人とは係はりはない。然しそんな人を智的生活が救ふことが出來るか。彼は道德的に强ひて自分の行爲を律して、他の女に對してその肉慾を試みるやうなことはしないかも知れない。然しその瞬間に彼は僞善者になり了せてしまつてゐるのだ。彼はその心に姦淫しつゞけなければならないのだ。それでもそれは智的生活の平安の爲めには役立つかも知れない。けれどもかくの如き平安によつて保たれる人も社會も災ひである。若し彼が或る動機から、猛然としてもとの自己に眼覺める程緊張したならばその時彼は本能的生活の圏内に歸還してゐるのだ。だから智的生活の圏内に於ける生活にあつてこそ、知識も道德もなくて叶はぬものであるが、本能的生活の葛藤にあつては、智的生活の生んだ規範は、單にその傷を醜く蔽ふ繃帶にすらあたらぬことを知るだらう)。その時精神は精神ではなく、肉慾は肉慾ではない。兩者は全くその區別を沒して、愛の統流の中に溶けこんでしまふ。單なる形の似よりから凡ての現はれと同じものと見るのは、甚しき愚昧な見斷である。

この一つの例は私の本能に對する見解を朧ろげながらも現はし得たではなからうか。かくの如く本能は、全體的な而して內部的な個性の要求だ。然るに智的生活はこれとは趣きを異にしてゐる。縱令智的生活は、長い間かかつた、多くの人の經驗の集成から成り立つものだとはいへ、その個性に働く作用はいつでも外部からであつて、しかも部分的である。その外部的である譯は、それが誰の內部生活からも離れて組み立てられたものであるからだ。それは生活の全部を統率するために、人間によつて約束された規範であるからだ。それなら何故部分的であるか。智的生活にあつては義務と努力とが必要な條件として申し出られてゐるからだ。義務にも努力にも、人間

の欲求の或る部分の棄捨が豫想されてゐる。或る欲求を壓抑するといふ意識なしには、義務も努力も實行されはしない。卽ち個性の全要求の滿足といふ事は行はれ得ない約束にある。若しかゝる約束にある智的生活が生活の基調をなし、指導者とならなければならぬとしたら、人間は果して晏如としてゐることが出來るだらうか。私としてはそれを最上のものとして安んじてゐることが出來ない。私はその上に、私の個性の全要求を滿足し、しかもその滿足が同時によいことであるべき生活を追ひ求めるだらう。而してそれは本能的生活に於て與へられるのだ。本能的生活によつて智的生活は内面化されなければならぬ。本能的生活によつて智的生活は統合化されなければならぬ。かくいへば、私が、本能的生活は智的生活を指導せねばならぬと主張した理由が明かになると思ふ。

然らば社會生活は私がいつた個人の生活過程を逆にでも行かねばならぬといふのか。社會生活にあつては、智的生活をもつて本能的生活の指導者たらしめ、若しくは習性的生活をもつて智的生活の是正者たらしめねばならぬとでもいふのか。若し果してさうならば、社會生活と個人生活とはたしかに軒輊するであらう。私にはさうは思はれない。社會の欲求も亦その終極はその生活内部の全體的飽滿にあらねばならぬ。縱令現在、その生活の基調は智的生活におかれてあるとも、その欲求としては本能的生活が目指されてゐねばならぬ。社會がその社會的本能によつて動く時こそ、その生活は純一無雜な境地に達するだらう。

こゝで或る人は多分いふだらう。お前の言葉は明かにその通りだ。進化の過程としては、社會も亦本能的生活に這入ることを、その理想とせねばならぬ。けれども現在にあつては、個人には本能的生活の消息を解し、それを實行し得る人があるとしても、社會はまだかゝる境地に達せんには遠い距離がある。かゝる狀態にあつて、個人生活と社會生活とが軒輊するのは當然なことではないかと。

私はこの抗議を肯じよう。然しこの場合、改めねばならぬのは個人の生活であるか、社會の生活であるか、ど

ちらだ。兩者の間に完全な調和を持ち來すために進歩させねばならぬ生活は、どちらの生活だ。社會生活の現狀を維持する爲めに、私達はこゝまで進んで來た個人生活を停止し若しくは退歩させて、社會生活との適合に持ち來さねばならぬといふのか。多くの人はさうあるべき事のやうに考へてゐるやうに見える。私は斷じてこれを不可とする。

變らねばならぬものは社會の生活樣式である。それが變つて個人の生活樣式にまで追ひ付かねばならぬ。

國家も產業も社會生活の一樣式である。近代に至つて、この二つの樣式に對する根本的な批判を敢へてする二つの見方が現はれ出た。それは個性の要求が必至的に創り出した見方であつて、徒らなる權力が如何ともすべからざる一個の權威である。一時は權力を以て壓倒することも出來よう。然しながら結局は、現存の國家なり產業組織なりが、合理的な批判を以てそれを打壞し得るにあらずんば、決して根絕することの出來ない見方である。私のいふ二つの見方とは、社會主義であり、無政府主義である。

この二つの主義のかくまでの力强さは何處にあるか。それは、縱令不完全であらうとも、個性の全的要求が生み出した主義だからである。社會主義者は自ら人間の社會的本能が生み出した見方であると主張するけれども、その主義の根柢をなすものは生存競爭なる自然現象である。生存競爭は個性から始まつて始めて階級爭鬪に移るのだ。だからその點に於て社會主義者の主張は裏切られてゐる。無政府主義に至つては固より始めから個性生活の絕對自由をその標幟としてゐる。

社會主義はダーウィンの進化論から生存競爭の原理を拔いてその主張の出發點としたことは前に述べた通りだ。クロポトキンはこれに對立して無政府主義を宣言するに當り、進化論の一原理なる相互扶助の動向を取つてその論陣を堅めた。兩者共に、個性から發して動植物兩界の致命的要素たる本能であるとせられてゐる。一方の

主義者は生存競爭の爲めの相互扶助だと主張し、一方の主義者は相互扶助の爲めの生存競爭だと主張する。私はこゝで敢へて主義者の見地を裁斷しようとも思はないし、又私の自然科學に對する空疎な知識はそれをすることも許しはしない。

然し私はかういふことを申し出して見たい。ケーベル博士がそのカント論に於て「生物學に於て取り扱はれる動物本能は、畢竟人間にある本能の投影に過ぎない。認識作用が事物に適合（コンフォーム）するのではなく、却つて事物（現象としての）が認識作用に適合するのである」といつた言葉は、單に唯心論者の常套語とばかりはいひ退けてしまふことが出來ない。そこには動かすことの出來ない實際的睿智が動いてゐるのを私は感ずることが出來る。惟ふに動物には、ダーウィンが發見した以外に幾多の本能が潜んでゐるに相違ない。而してそれがより以上の本能の力によつて統合されてゐるに相違ない。然しながら十九世紀の生物學者は、眼覺めかけて來た個性の要求（それは十八世紀の佛國の哲學者等に負ふ所が多いだらう）と社會の要求との間に或る廣い距離を感じたのではなかつたらうか。而して動物中に行はれる現狀打破の本能を際立つて著しいものと認めたのではなかつたらうか。然しその時學者達の頭の中には、個性は社會を組織する或る小さな因子としてのみ映つてゐたらう。加之科學的研究法の必然的な條件として、凡てのものを二元的に見ることに慣らされてゐた。彼等はひとりでに個性と社會とを對立させた。從つてその結論も個性と社會との中、個性に重きを置いた場合には生存競爭として現はれ、社會に重きを置いた場合には相互扶助として現はれたのだ。然し前者には社會が、後者には個性が、少しも度外視されてゐはしない。

私達はこの時代的着色から躍進しなければならぬと私は思ふ。私は個性の尊嚴を體驗した。個性の要求の前には、社會の要求は無條件的に變らねばならぬことを知つた。而して人間の個性に宿つた本能卽ち愛が如何なる要

求を持つかを背んじた。而して更に又動物に現はれる本能が無自覺的で、人間に現はれる本能が自覺的であるのを區別した。自覺とは普遍智の要求を意味する。個性は最早個性の社會に對する本能的要求を以て滿足せず、個性自身、その全體の滿足の中にのみ滿足する。そこには競爭すべき外界もなく、扶助すべき外界もない。人間は愛の抱擁にまで急ぐ。彼の愛の動くところ、凡ての外界は卽ち彼た。我の正しい生長と完成、この外に結局何があらうぞ。

（以下十餘行內務省の注意により抹殺）

私はこの本質から出發した社會生活改造の法式を說くことはしまいと思ふ。それはおのづからその人がある。私は單にこゝに一個の示唆を提供することによつて滿足する。私が持つて生れた役目はそれを成就すれば足りるのだから。

宗教も亦社會生活の一つの樣式である。信仰は固より人々のことであるが、宗教といへばそれは旣に社會にまで擴大された意味をもつてゐる。而して何故に現在の宗教がその權威を失墜してしまつたか。昔は一國の帝王が法王の寬恕を請ふために、乞食の如くその膝下に伏拜した。又或る佛僧は皇帝の愚昧なる一言を聞くと、一揖を殘したまゝ飄然として竹林に去つてしまつた。昔にあつては何が宗教にかくの如き權威を附與し、今にあつては、何が私達の見るが如き退縮を招致したか。それは宗教が全く智的生活の覊絆に自己を委ね終つたからである。宗教はその生命を自分自身の中に見出すことを忘れて、社會的生活に全然適合することによつて、その存在を僥倖しようとしたからだ。國家には治者と被治者とがあつて、その間には動向の根柢的な衝突が行はれる。宗教は無反省にもこの概念を取つて、自分に適用した。神（つまり私はこゝで信仰の對象を指してゐるのだ。その名は何んでもいゝ）は宗教界にあつて、國家に於ける主權者の位置にある。彼は人からあらゆる捧げものを要求する。

人の生活は畢竟神の前にあつては無に等しい。神は凡ての權能の主體である。人は神の前にあつて無であることを榮譽としなければならない。神に對し自己を犧牲にすることが彼の有する唯一の權利（若しさういふ言葉が使へるなら）である。神の欲する所と人の欲する所との間には、渡らるべき橋も綱もない。神と人とは全く本質を異にした二元として對立してゐる。

國家の組織が無反省にそのまゝ人民によつて肯定せられてゐた時代には、この神人關係の概念も亦無反省に受取られることが出來たらう。然し個性の欲求が、愛の動向が、體達せられた今にあつては、この神人關係の矛盾は直ちに苦痛となつて、個性によつて感ぜられる。生活根源の動向は凡て同じ方向に向上しなければならぬ。私達は既に石から人間に至るまでの過程に於て、同じ方向に向上して來た本能の流れを見た。私達の內部生命は獲得によつてのみ向上飛躍するのを見た。然るに現存の宗教は、神にのみその動向を認めて、人間にはそれを拒まうとしてゐるではないか。

或る人は私に告げるであらう。時勢に取り殘されたるものよ。お前は神人合一の教理が夙の昔から叫ばれてゐるのを知らないのか。神は人間と對立してゐるやうなものではない。實に人間の衷にあつて働くべきものだ。人間は又神の衷にあつて働くべきものだ。神と自己とを對立させるが故に、人間は墮落するのだ。神の要求はそのまゝ人間の要求でなければならぬのだ。お前はそれをすら知らないで、一體何んの囈言をいはうとするのだと。

然らば私はその人に向つて問ひたい。それなら何故今でも教壇の上からやむことなく犧牲の義務と獻身の德とが高調して說かれなければならないのだらう。神は嘗て犧牲を拂ひ獻身を敢へてしたか（基督教徒はこゝで基督の生涯を引照するだらう。然し基督の生涯が犧牲でも獻身でもないことは前に說いた）。然るに現在教壇からは、神にないものが人間にあらねばならぬとして要求されてゐるのはどうしたことなのか。私はそれが人間性の根本に

對する理解の不十分から來てゐるのではないかと疑ふ。而してその疑ひに全く理由がないではあるまいと思ふ。神人合一といふ概念だけは自然の必要から建て上げられた。それは政治に於て、專制政體が立憲政體に變更されたのとよく似てゐる。その形に於ては或る改造が成就されたやうに見える。立法の主體は稍〻移動したかも知れない。しかも治者と被治者とが全く相反した要求によつて律せられてゐる點に於ては寸毫も是正されてはゐないのだ。神と人とは合一する。その言葉は如何に美しいだらう。然しその合一の實が擧がつてゐなかつたら、その美しい空論が畢竟何の益になるか。

私はかくの如き妥協的な改良說を一番恐れなければならない。それはその外貌の美しさが私をあざむきやすいからである。

宗教が國家の機械、卽ち美しい言葉でいへば政務の要具たることから自分を救ひ出さねばならぬことは勿論であるが、現存の國家がその據りどころとする智的生活、その智的生活から當然抽出される二元的見斷から自分自身を救ひ出して、愛の世界にまで高まらなかつたら、それは永久にその權威を囘復することが出來ないだらう。

私は神を知らない。神を知らないものが神と人との關係などに對して意見を申し出るのは出過ぎたことだといはれるかも知れない。然し宗教が社會生活の一樣式として考へ得られる時、その樣式に對して私が思ふ所を述べるのは許されることだと思ふ。私の態度を憎むものは、私の意見を無視すればそれで足りる。けれども私は私自身を無視しはしない。

敎育といふものに就いても、私はこゝでいふべき多くを持つてゐる。然し聰明な讀者は、私が社會生活の部門について述べて來たところから、私が敎育に對して何をいはうとするかを十分に見拔いてゐられると思ふ。私は徒らな重複を避けなければならない。然しこゝにも數言を費すことを許されたい。

子供は子供自身の爲めに教育されなければならない。この一事が見過されてゐたなら教育の本義はその瞬間に滅びるのみならず、それは却つて有害になる。社會の爲めに子供を教育する――それは驚くべく悲しむべき錯誤である。

仕事に勤勉なれと教へる。何故正しき仕事を選べと教へないのか。正しい仕事を選び得たものは懶惰であることが出來ないのだ。私は嘗て或る卒業式に列した。そこの校長は自分が一度も少年の時期を潜りぬけた經驗を持たぬやうな鹿爪らしい顏をして、君主の恩、父母の恩、先生の恩、境遇の恩、この四恩の尊さ難有さを繰返し繰返し說いて聞かせた。かのいたいけな少年少女たちは、この四つの重荷の下にうめくやうに見やられた。彼等は十分に義務を教へられた。然し彼等の最上の寶なる個性の權威は全く顧みられなかつた。美しく磨き上げられた個性は、恩を知ることが出來ないとでもいふのか。餘りなる無理解。不必要な老婆親切。私は父である。而して父である體驗から明かにいはう。私は子供に感謝すべきものをこそ持つて居れ、子供から感謝さるべき何物をも持つてはゐない。私が子供に對して拂つた犧牲らしく見えるものは、子供の愛によつて酬いられてなほ餘りがある。それが何故分らないのだらう。正しき仕事を選べと教へるやうに、私は、私の子供に子供自身の價値が何であるかを教へてもらひたい。彼はその餘の凡てを彼自身で處理して行くだらう。私は今假りに少年少女を私の意見の對象に用ゐた。然し私はこれを中等教育にも高等教育にも延長して考へることが出來ると思ふ。學問の內容よりも學問そのものを重んじさせるといふこと、知識よりも暗示を與へるといふこと、人間を私の所謂專門家に仕立て上げないことなど。

私は更に愛を出發點として男女の關係と家族生活とを考へて見たい。

今男女の關係は或る狂ひを持つてゐる。男女は往々にして爭鬪の狀態におかれてゐる。かゝる僻事はあるべからざることだ。

どれ程長い時間の間に馴致されたことであるか分らない。然しながら人間の生活途上に於て女性は男性の奴隷となつた。それは確かに筋肉勞働の世界に奴隷が生じた時よりも古いことに相違ない。

性の殊別は生殖の結果を健全にし確固たらしめんがために自然が案出した妙算であるのは疑ふべき餘地のないことだ。その變體が色々な形を取つて起り、或る時はその本務的な目的から全く切り放されたプラトニック・ラヴともなり、又かゝる關係の中に、人類が思ひもかけぬよき收得をする場合もないではない。私はかゝる現象の出現をも十分に許すことが出來る。然しそれは決して性的任務の常道ではない。だから私が男女關係の或る狂ひといつたのは、男女が分擔すべき生殖現象の狂ひを指すことになる。男女のその他の關係がいかに都合よく運ばれてゐても、若しこの點が狂つてゐるなら、結局男女の關係は狂つてゐるのである。

既に業に多くの科學者や思想家が申し出たやうに、女性は產兒と哺育との負擔からして、實生活の活動を男性に依託せねばならなかつた。男性は野の獸があるやうに、始めは甘んじて、勇んでこの分業に從事した。けれども長い歲月の間に、男性はその活動によつて益々その心身の能力を發達せしめ、女性の能力は或る退縮を結果すると共に、益々活動の範圍を狹めて行つて、遂にはその活動を全く稼穡の事にのみ限るやうになつた。かうなると男性は女性の分をも負擔して活動せねばならぬ故に、生活の荷は苦痛として男性の肩上にかゝつて來た。男性はかくてこの苦痛の不滿を癒すべき報償を女性に要求するに至つた。女性は然しこの時に於ては、實生活の仕事の上で男性に何物をか提供すべき能力を失ひ果てゝゐた。女性には單に彼女の肉體があるばかりだつた。而してそ

の點から prostitution は始まつたのだ。女性は忍んで彼女の肉體を男性に提供することを餘儀なくされたのだ。かくて女性は遂に男性の奴隷となり終つた。而して女性は自らが在る以上に自分を肉慾的にする必要を感じた。女性に殊に著しい美的扮装（それは極めて外面的の。女性は屡〻練絹の外衣の下に襤褸の肉衣を着る）、本能の如き嬌態、女性間の嫉視反目（姑と嫁、妻と小姑の關係はいふまでもあるまい。私はよく婦人から同性中に心を許し合ふことの出來る友人のないことを聞かされる）はそこから生れ出る。男性は女性からのこの提供物を受取つたことによつて、又自分自らを罰せなければならなかつた。彼は先づ自分の家の中に暴虐性を植ゑつけた。專制政治の濫觴をこゝに造り上げた。而して更に惡いことには、その生んだ子に於て、彼等以上の肉慾性を發揮するものを見出さねばならなかつた。

これは私がいはないでも多くの讀者は知つて而して肯んずる事實であらうと思ふ。私はこゝでこの男女關係の狂ひが何故最も惡い狂ひであるかをいひたい。この墮落の過程に於て最も惡いことは、人間がその本能的要求を智的要求にまで引き下げたといふ點にあるのだ。男女の愛は本能の表現として純粹に近く且つ全體的なものである。同性間の愛にあつては本能は分裂して、精神的（若し同性間に異性關係の假想が成立しなければ）といふ一方面にのみ表現される。親子の愛にしても、兄弟の愛にしても皆等しい。然し男女の愛に於て、本能は甫めてその全體的な面目を現はして來る。愛する男女のみが眞實なる生命を創造する。だから生殖の事は全然本能の全要求によつてのみ遂げられなければならぬのだ。これが男女關係の純一無上の要件である。然るに女性は必要に逼れるまゝに、誤つてこの本能的欲求を智的生活の要求に妥協させてしまつた。即ち本能の欲求以外の欲求、即ち單なる生活慾の道具に使つた。而して男性は卑しくもそれをそのまゝ使用した。これが最も惡いことだつたと私は云ふのだ。これより惡いことが多く他にあらうか。

樂園は既に失はれた。男女はその腰に木の葉をまとはねばならなくなつた。女性は男性を恨み、男性は女性を侮りはじめた。戀愛の領土には數限りもなく假想的戀愛が出現するので、眞の戀愛をたづねあてるためには、女性は極度の警戒を、男性は極度の冒險をなさねばならなくなつた。野の獸にも生殖を營むべき時期は一年の中に定まつて來るのに、人間ばかりは已む時なく肉慾の爲めにさいなまれなければならぬ。しかも更に惡いことには、人間はこの運命の狂ひを悔いることなく、殆んど捨鉢な態度で、この狂ひを潤色し、美化し、享樂しようとさへしてゐるのだ。

私達は幸ひにして肉體の力のみが主として生活の手段である時期を通過した。頭腦も亦生活の大きな原動力となり得べき時代に到達した。女性は多くを失つたとしても、體力に失つたほどには腦力に失つてゐない。これが女性のその故郷への歸還の第一程となることを私は祈る。この男女關係の墮落はどれ程の長い時間の間に馴致されたか、それは殆んど計ることが出來ない。然しそれが墮落である以上は、それに氣がついた時から、私達は樂園への歸還を企圖せねばならぬ。一人でも二人でも、そこに氣付いた人は一人でも二人でも忍耐によつてのみ成就される長い旅に上らなければならない。

私はよくそれが如何に不可能事に近いとさへ思はれる困難な道であるかを知る。私も亦その狂ひの中に生れて育つて來た憐れな一人の男性に過ぎない。私は跌(つまづ)きどほしに跌いてゐる。然し私の本能のかすかな聲は私をそこから立ち上らせるに十分だ。私はその聲に推し進められて行く。その旅路は長い耽溺の過去を持つた私を寂しく思はせないではない。然しそれにもかゝはらず私は行かざるを得ない。

この男女關係の狂ひから當然歸納されることは、現在の文化が男女兩性の協力によつて成り立つものではないといふ事だ。現時の文化は大は政治の大から小は手桶の小に至るまで悉く男子の天才によつて作り上げられたも

だといつていゝ。男性はその凡ての機關の恰好な使用者であるけれども、女性がそれに與かるためには、或る程の度まで男性化するにあらざれば與かることが出來ない。男性は巧みにも女性を家族生活の片隅に祭りこんでしまつた。しかも家族生活にあつても、その大權は確實に男性に握られてゐる。家族に供する日常の食膳と、衣服とは女性が作り出すことが出來よう。然しながら饗應の鹽梅と、晴れの場の衣裳とは、遂に男性の手によつてのみ巧みに作られ得る。それは女性に能力がないといふよりは、それらのものが凡てその根柢に於て男性の嗜好を滿足するやうに作られてゐるが故に、それを産出するのも亦おのづから男性の手によつてなされるのを適當とするだけのことだ。

地球の表面には殆んど同數の男女が生きてゐる。而してその文化が男性の欲求にのみ適合して成り立つとしたら、それが如何に不完全な内容を持つたものであるかゞ直ちに看取されるだらう。

女性が今の文化生活に與らうとする要求を私は無下に斥けようとする者ではない。それは然しその成就が完全な女性の獨立とはなり得ないといふことを私は申し出したい。若し女性が今の文化の制度を肯定して、全然それに順應することが出來たとしても、それは女性が男性の嗜好に降伏して自分達自らを男性化し得たといふ結果になるに過ぎない。それは女性の獨立ではなく、女性の降伏だ。

唯外面的にでも女性が自ら動くことの出來る餘地を造つておいて、その上で女性の眞要求を尋ね出す手段としてならば、私は女權運動を承認する。

それにも增して私が女性に望む所は、女性が力を合せて女性の中から女性的天才を生み出さんことだ。男性から眞に解放された女性の眼を以て、現在の文化を見直してくれる女性の出現を祈らんことだ。女性の要求から創り出された文化が、これまでの文化と同一内容を持つだらうか、持たぬだらうか、それは男性たる私が如何に努

力しても、臆測することが出來ない。而して恐らくは誰も出來ないだらう。その異同を見極めるだけにでも女性の中から天才の出現するのは最も望まるべきことだ。同じであつたならそれでよし、若し異つてゐたら、男性の創り上げた文化と、女性のそれとの正しき抱擁によつて、それによつてのみ、私達凡ての翹望する文化は成り立つであらう。

更に私は家族生活について申し出しておく。家族とは愛によつて結び付いた神聖な生活の單位である。これ以外の意味をそれに附け加へることは、その內容を混亂することである。法定の手續と結婚の儀式とによつて家族は本當の意味に於て成り立つと考へられてゐるが、愛する男女に取つては、本質的にいふと、それは少しも必要な條件ではない。又離婚即ち家族の分散が法の認許によつて成り立つといふことも必要な條件ではない。凡てかゝる條件は、社會がその平安を保持するために案出して、これを凡ての男女に强制してゐるところのものだ。國家が今あるがまゝの狀態で、民衆の生活を整理して行くためには、家族が小國家の狀態で强國に維持されることを極めて便利とする。又財產の私有を制度となさんためには、家族制度の存立と財產繼承の習慣とが缺くべからざる必要事である。これらの外面的な情實から、家族は國家の柱石、資本主義の根據地となつてゐる。その爲めには、縱令愛の失はれた男女の間にも、家族たる形體を固守せしめる必要がある。それ故に家族の分散は社會が最も忌み嫌ふ所のものである。

おしなべての男女も亦、社會のこの不言不語の强壓に對して柔順である。彼等の多數は愛のない所にその形骸だけを續ける。男性はこの習慣に依賴して自己の强權を保護され　女性はまたこの制度の庇護によつてその生存を保障される。而してかくの如き空虛な集團生活の必然的な結果として、愛なき所に多數の子女が生產される。而して彼等は親の保護を必要とする現在の社會にあつて（私は親の保護を必要としない社會を豫想してゐるが故

にかくいふのだ）親の愛なくして育たねばならぬ。而して又一方には、縱令愛する男女でも、家族を形造るべき財産がないために、結婚の形式を取らずに結婚すれば、その子は私生兒として生涯擯保の擯斥を受けねばならぬ。」

社會からいつたならば、かゝる缺陷は縱令必然的に起つて來るとしても、なほ家族制度を固執することに多分の便利が認められよう。然し個性の要求及びその完成から考へる時、それはいかに不自然な結果を生ずるであらうよ。第一この制度の强制的存在のために、家族生活の神聖は、似而非なる家族の交雜によつて著しく汚される。愛なき男女の結合を强制することは、そのまゝ生活の墮落である。愛によらざる產子は、產者にとつて罪惡であり、子女にとつて救はれざる不幸である。愛によつて生れ出た子女が、侮辱を蒙らねばならぬのは、この上なき曲事である。私達はこれを救はなければならない。それが第一の喫緊事だ。それらのことについて私達はいかなるものゝ犧牲となつてゐることも出來ない。若しこの欲求の遂行によつて外界に不便を來すなら、その外界がこの欲求に適應するやうに改造されなければならぬ筈だ。

愛のある所には常に家族を成立せしめよ。愛のない所には必ず家族を分散せしめよ。この自由が許されることによつてのみ、男女の生活はその忌むべき虛僞から解放され得る。自由戀愛から自由結婚へ。

更に又、私は戀愛そのものについて一言を附け加へる。戀愛の前に個性の自己に對する深き要求があることを思へ。正しくいふと個性の全的要求によつてのみ、人は愛人を見出すことに誤謬なきことが出來る。而して個性の全的要求は容易に愛を異性に對して動かさせないだらう。その代り一度見出した愛人に對しては、愛はその根柢から搖ぎ動くだらう。かくてこそその愛は强い。而して尊い。愛に對する本能の覺醒なしには、縱令男女交際にいかなる制限を加ふるとも、いかなる修正を施すとも、その努力は徒勞に終るばかりであらう。

二四

もう私は私の饒舌から沈默すべき時が來た。若し私のこの感想が讀者によつて考へられるならば、部分的に於てゞなく、全體に於て考へられんことを望む。殊に本能的生活の要求を現實の生活にあてはめて私が申出た言葉に於てさうだ。社會生活はその總量に於て常に顧慮されなければならぬ。その一部門だけに對する凝視は、往々にして人を迷路に導き込むだらう。

私も亦部分的考察に走り過ぎた嫌ひがないとはいへない。私は人間に現はれた本能卽ち愛の本能をもつと委しく語つてやむべきであつたかも知れない。然しもう云はれたことは云はれてしまつたのだ。

願はくは一人の人をもあやまることなくこの感想は行け。

二五

あまりに明かであつて、しかも往々顧みられない事實は、一つの思想が體驗的の檢察なしに受取られるといふことだ。それは思想の提供者を空しく働かせ、享受者を空しく苦しめる。

二六

ニイチエが「私は自分が主張を固執するために燒き殺される場合があつたら、それを避けよう。主張の固執は私の生命に値ひするほど重大なものではない。然し主張を變じたが故に燒き殺されねばならぬといふのなら、私は甘んじて燒かれよう。それは死に値ひする」といふ意味のことをいつたさうだ。この逆說(パラドックス)は正しいと私は思

ふ。生命の向上は思想の變化を結果する。思想の變化は主張の變化を豫想する。生きんとするものは、既成の主張を以て自己を金縛りにしてはなるまい。

二七

思想は一つの實行である。私はそれを忘れてはゐない。

二八

私の發表したこの思想に、最も直接な示唆を與へてくれたのは阪田泰雄氏である。この機會を以て私は君に感謝する。その他、內面的經驗に關りを持つた人と物との凡てに對して、私は深い感謝の意を捧げる。

二九

これは哲學の素養もなく、社會學の造詣もなく、科學に暗く、宗教を知らない一人の平凡な僞善者の僅かばかりな誠實が叫び出した訴へに過ぎない。この訴へから些かでもよいものを聽き分けるよい耳の持主があつたならば、而してその人が彼の爲めによき環境を準備してくれたならば、彼も亦僞善者たるの苦しみから救はれることが出來るであらう。

凡てのよきものゝ上に饒かなる幸あれ。

（一九二〇年三月十五日――三十一日）

價値の否定と固定と移動

畢竟私達の生活は各瞬間に於ける當面の事象に對する價値設定の連續と見る事が出來る。單に評價といふ心理的過程がさうであるばかりでなく、評價によつて他の事象から一つの事象を對象として擇び取る事も、その擇び取つた事象に對して働きかける活動も、矢張り價値設定の圏外に逸し去る事は出來ない。機械的な筋肉活動であつても、その活動の當體が人間である以上は、その活動の各過程は、意識的であるにせよ無意識的であるにせよ、價値判斷の篩を潜つた上で行はれてゐるのを知らねばならぬ。卽ち私達は價値の世界の中にあつて甫めて生存の可能性を有し得るのだ。若しこの世界を價値と見る事が出來なくなり、從つて價値的選擇が不可能になつたならば、實生活の上にも、形而上生活の上にも、私達の生存は、可能性を失ふまでに脅かされねばならぬだらう。

こゝに於て私達は價値標準の所在と云ふ問題に逢着する。世界が價値そのものであると云ふ事は旣に云つた。私達自身も亦一個の價値である。然し不動の價値標準はどこに存在してゐるのか。それは自己の中にあるのか。自己と所緣との交渉する所に必然的に起生するものであるのか。或は又價値は嚴存するとしてもその評價を可能ならしめる標準なるものは賴るべからざる假象に過ぎないのか。卽ち價値標準の嚴存は否定されねばならないのか。この三樣の見方の相違によつて生活の相は全く體面を異にせねばならぬ結果となるだらう。

聰明な、從つて生活に對して回避的な態度に傾く人々は價値標準の假象に過ぎない事を主張するに違ひない。實際私達が承認する評定價値の內容は刻々に變化流轉して終局する所がない。相反した性質の事象が價値の上に於ては同等となつたり、同じ性質の事象が時間の配列上價値を異にしたりするやうな例は、殆んど凡ての場合に

於てさうだと考へられるほど、遍在してゐる事を發見する。かくの如き現象に鈍感であり得ない人々は、價値標準といふ概念によつて信頼が裏切られ、愚弄されるのを厭つて、そこに高踏的な態度を持たうとする。標準をあてはめ得ない價値は縱令それで實在的の權威を持つてゐるとしても、生活内容に交渉する何者でもないといふ諦觀に籠らうとする。その人の生活はよし外部の雜多な價値標準によつて取り圍まれ、その影響を受けて心にもない動亂の中に捲きこまれるにもせよ、自分だけは斷じて價値の評定を敢へてしまいと云ふ態度を取るが故に、その人は勢ひ懷疑、高踏、否定の一路をしづかに氣高く辿つて行く。而して或はその安定を、價値生活の沒却される彼岸を、或は存在の否定卽ち虛無の境界そのものを瞻望して、地上生活の不滿を慰めようとする。かゝる人々の冷靜な、聰明な、或る意味に於て徹底した態度は、人生を不思議に淨化し、整頓し、深味へ導く。ストア學派の捧誓者、徹底した中世の神祕主義者、釋迦の法燈を傳へる淨土渴仰者、近代の消極的虛無主義者の中などに、私達は屢〻この傾向を體現する人達を見出すだらう。

次には自己の中に價値標準の嚴存する事を信ずる人がある。その人々の信ずる所によれば、價値の評定は自己の中にあつて、所緣にも、又所緣との交渉の中にもあるのではない。如何なる時、如何なる所におかれても、所緣は自己に對して價値發生の上からいふと隷屬の位置にしかあり得ない。自己がいつでも決定的な唯一の要素である。同時に一つの自己と他の自己との間には、若しそれが正當になされるなら、價値評定の上に竝行した一致が成り立つべきである。(若しそれが許されなかつたならば、或る一個の自己の價値評定が何の權威を人生に對して持ち得ようぞ。正當になされた價値評定が萬人に適應せらるればこそ價値評定である。さうでなかつたならばそれは必然私が第一の場合として擧げた價値否定の懷疑主義と一致せねばならぬ)。卽ち或る自己の價値評定が、正當になされた場合にあつては、それは當然他の自己を首肯させ、而してそれが恆定價値としていかなる場合にも

眞であるのだ。價値標準が上述の如く竝行し若しくは共通であるといふ事は、直ちに自己の背後に或る不變的存在を想定せしめなければ已まない。畢竟自己の內に見出される價値標準は、この不變的存在の分化したものであるのだ。如何なる自己もその本源をこの自己背後の存在から得てゐるであらうから、別々の個性の間にも共通な判斷が現はれて來るのだ。變遷已む時のない道德概念にもその底流には一貫した不變な力がある。存廢常なき思想の根柢にも動かす事の出來ない思想といふものそのものがある。絕えず變化して見える價値を總括して嚴然として滅びぬ價値がある。人は皆この恆久の泉からその生命の養分を汲み取つてゐるのだ。人は不完全なるが故に、この泉から汲み取つた水をかき濁してゐる。然しこの悲むべき狀態は過程に過ぎない。人はいつかその本然の泉と同質の存在にまで自分を洗練するであらう。價値評定が人々相異るにも係はらず、何處かの點で一致を感ずるのは、この可能性を豫想させるのだ。かうその人々は信じてゐる。カントの所謂規範命令の命題の如きはこれを意味するものではあるまいか。

理想家の典型に屬する人々の大部分は恐らくはこの種類の價値論の捧誓者といふ事が出來よう。彼等は又一種の保守主義者でもあり得る。その人々の世界には必ず何等かの形を取つて神若しくは神々が出現する。その人々は前の種類の人々のやうに生活を回避する事をしない。又疑ふ事をしない。反對にその人々の世界には不斷の努力と折伏とがある。燃える希望はその人達に熱意を與へる(熱意である、熱そのものではない)。又不可避的に生活に樣式を創立する。築きなほす代りに建て增さうとする。その建築材料は屢々粗笨であつても、粗笨なるが故に捨てるやうな事はしない。價値の懷疑に沈潛する人々が手を拱いて靜かに眺めてゐる間に、この人達は建て上げる、何物をか建て上げる。縱令(たとひ)それが懷疑派の苦笑を買ふやうなものであつても、兎も角この人々は子孫に遺して行くべき記念碑を建設する。正統派の基督敎徒、佛敎徒中の自力宗の信徒、愛國者、精神主義者といふやう

な人々は、悉くこの種の價値觀を採つて立つものといふ事が出來るだらう。

この人々は私達の生活に方向を暗示し、堅固性を加へ組織制度を提供する。何故ならその人々は價値の固定性を確信するからである。價値の進化を信ずるけれどもその流動を信じないからである。その人々は自己からいつでも出發しながら自己以外のもの丶爲めに生きる。自己を生きるのは結局自己以外の、若しくは自己以上の或るものを完成する爲めにである。だからその人々の後世に殘さんとするものは自己の生活ではなくして、その生活が築き上げた殿堂である。

偖て第三に私は價値の移動流轉を信ずる傾向を擧げて見ようか。既に察せられてゐるかも知れないが、今の私はこの傾向に一番深い共鳴を感ずるものだと云はなければなるまい。價値は自己と所緣とが交渉する所に必然的に起生するものである、さうこの種類の人々は信じてゐるのだ。世界は價値であると見るのに異存はない。然しながら發動しない價値は――その言葉の性質上價値といふ事は出來ない。價値は一般に比較から生ずると考へられてゐるが、假りに絕對價値の存在を許すとしても、若しその價値が能動的狀態におかれてなければ（委しく云へばこの云ひ現はしは論理的でない。能動的でないといふやうなものは言葉の綾の外には實際存在しないのだ）、價値ではない。人はよく潛勢的であつてもエネルギーはエネルギーであつて、その存在を否定する事が出來ないといふ理窟をすぐ價値の問題にもあてはめようとするやうだけれども、靜學的な價値といふやうな事は實際は考へられない命題である。自己が働く時、卽ち所緣との交渉を持つに至る時、何時、何處にでも價値は生まれるのだ。その力學的な意味に於て世界は價値であるのだ。私達は所緣から切り放された自己の中に價値を見出す事が出來ない。又自己に臨まれない所緣の中に價値を索り出す事が出來ない。從つて價値が生ずる爲めには自己と所緣及びその相互的交渉を必要とする。所が人間が生存する限りこの交渉は隨處隨時に絕える事がない。この意味

に於て私達は世界を價値と見ることが出來るものだ。

それなら自己と所緣との交渉に生まれる價値は何を標準として決定されるか。それはいふまでもなく自己である。然しながら自己が有する價値標準は價値固定論が信ずる如く一定したものではない。自己の中にあつて價値標準は常に流動變化してゐる。私はこの點に關して考へて見よう。

價値固定論者の考へる所に從へば、價値標準は凡ての自己の背後に嚴存してゐるのだ。縱令自己と所緣とがいかに交渉しようとも、その價値を評定する者はこの既存の標準に依るのだ。卽ち延いて自己の固定性とを肯定する事によつてのみ成り立つ所信である。然し私達は自己及び所緣の固定性を全く信ずる事が出來ないものである。ベルグソンがいつたやうに自己も所緣も不休の變化と擴大とを經驗してゐるものである。從つて自己の背後に實在的價値標準が嚴存するとしても自己がその價値標準に對する關係は瞬時も同一ではあり得ないのだ。その關係が同一であり得ない以上、どうしてその價値標準と自己との間の價値標準が恆久不變であり得ようぞ。かの如くして價値標準の主體は自己に還つて來ねばならない。

所が同じ理法が自己と所緣との交渉の上にもあてはまるだらう。卽ち自己の所緣も、又その交渉の狀態も變化してやむ時がない故に、そこに生ずる價値標準も亦その時毎に變化するのである。

人はこゝで詰問するに違ひない。お前のいふのがその通りだとするならば、謂ふところのお前の價値標準なるものは、價値否定論者の考へるのと同樣に假象に過ぎないではないかと。それは違ふ。價値否定論者は、轉々變化してやまないが故に、直ちにそれを假象と看做さうとするのだが、私達の立場からいふと、各瞬間に於ける價値標準は、それが正當になされてゐる限り（といふのは自己の所緣に交渉する狀態が緊密にして必要缺くべからざるものである限り）、その各瞬間に於ては眞實にして動かす可からざるものであるのだ。それは決して單なる假

象ではない。何故ならばそれに信頼する事なしには生命の生長は直ちに閉止するからである。價値否定論の誤謬は恐らくは、經驗と反省との形式に於てのみ價値評定の作用を考へるからではないか。生命が生命として働くのは現在の外にはない。過去にはそれが物質化し、未來にはそれが空想化する。物質化した生命はたしかに生命の假象に過ぎない。それは單に價値標準の一事ばかりではない。

難者は又詰問するかも知れない。既にお前が刹那々々に於ける自己と所緣との交渉の上に於ける價値標準を肯定するならば、何故に價値固定論者のいふ本元的價値標準と自己との交渉に於ても同じ事を云はないかと。私達は根元的價値標準を假定し自己との交渉を考へて見る時、同じ事をいふのを少しも躊躇するものではないけれども、これが價値固定論者の精神と形に於てこそ多少の相似はあれ、その根柢に於てどれ程隔つてゐるかは、難者と雖もすぐ思ひ到る事が出來る筈だ。卽ち前者に於ては自己は最後の固定へだが、私達に於ては自己は不窮の流動へだ。前者に於ては自己と所緣との關係が不動の原理によつて決定せらるべきを豫定してゐるが、私達は兩者の關係が各〻の刹那にあつての外は、恒久に變化すべきを本體と見てゐるのだ。

約言すれば私達はリヤリストの立場にあらうとするものだ。私達は自己以外には固定的な殿堂を子孫に遺さうとはしない。生命以外のものを假象若しくは象徵と見る。だから私達は建てゝは崩し、建てゝは崩しする小兒のやうだ。而して小兒のやうに建てる時にも崩す時にも同じ興味の中にありたいと願ふ。私達に取つて大事なものは建て上げられたものではなくして、それを建てつゝある時の心持だ。これは價値否定論者には憫笑に値するに違ひない、價値固定論者には侮蔑をすら感ぜしむるに違ひない。然し私達のやうな立場の人々も生活に實際は何かをしてゐないとは限らない。その人々の中からは必ず無賴な生命浪費者が出たらう。又既定制約の破壞者が現はれたらう。然したゞそれらだけが凡てゞはないやうに見える。

私はこのしかつめらしい考察をもつと具體的な境界に引きおろして來る誘惑を感じないではない。然しそれは凡て私の惡い頭がさせた非論理的なこの考察を終りまで我慢して讀んで下さつた讀者の物好きに任せておく。若し讀者がその物好きを笑ひ捨てなかつたなら、或は私のこの所感は少しばかりの貢獻をなし得るかも知れないと思ふ。

（一九二〇年五月、「人間」所載）

信濃日記

一九一六・八月十日

人々が私を慰めるために、信濃の山の方にでも行つたらいゝだらうと勸めてくれてゐたが、この日父とNとに伴はれて輕井澤に發つことになつた。父も九日以來少し健康を害ねてゐるやうに見えた。齡をとつてから逆緣に遇はねばならなかつたので、その心は私以上に痛んでゐる。午後の二時頃に輕井澤に着いた。三人の子供達は待ちくたびれてゐたやうに狂喜して私を迎へた。彼等は何事が起つたかも知らずにゐたのだ。

淨月庵と名づけられた父の小さな別墅は居心地のいゝ家だつた。輕井澤の盆地を南に見渡して、薄の生え茂つた山の中腹に建てられた二階家だ。二間しかない階下の部屋の中、客間を兼ねた食堂は黑木造りで、竹細工の椅子と卓子がおかれてあつた。もうこの邊は十分秋らしかつた。篠つくやうに降る雨と風の中に、色の淋しい草花が薄と共に靡き動いてゐた。私は本當は子供等も打捨てゝ一人きりでゐられる所に行きたかつた。然しまはりの人々の親切を一がいに振り切ることも出來ない私は、盆燈籠のやうに自分を思つて見たりした。眞白な紙で弱々しく造りなされた燈籠のその中に、まじろぎもせずに紅い燈がともつてゐる。私は實際薄い白紙のやうに體が萎え疲れ切つてゐたのだ。

日が雨の中に暮れて行つた。

八月十一日

生馬が曉子を連れて東京の方から來るので、午後子供達を連れて迎へに行つた。子供達は曉子の來たのをこの上なく喜んだ。雨が降りつゞいて退屈なまゝに部屋の中を飛び廻つて騷ぐ。東京では雨が降らないといふのにこゝではこんなに降るのだ。風が東か南から吹きさへすればこゝでは大抵雨になる。それは太平洋の濕氣を含んだ空氣が流れて來て、淺間山に連なる山脈によつて冷やされるからだ。淺間山の煙が輕井澤の方に靡く時には空はいつでも美しく晴れる。

夜になると降雨に風さへ加はつて、板屋根にたゝきつけられる雨滴の音は殊に烈しい。子供達が寢入つてから父と四方山の話をした。父もおとなしくなつた。私のいふことに耳を傾けるといふのが既に前にはなかつたことだ。今後日本の問題になるのは何んだらうと私に尋ねた。父はそれによつて私がこれからどう歩いて行くかに竊かなさぐりをいれたらしい。勞働者と婦人と小兒――この三つが一番根柢的な問題になるのではないかと思ふと私は答へた。その言葉は父にとつては或る脅かしであつたに相違ない。然し父は默つたまゝで私のいふことを聞いて考へてゐた。父は老いて弱つたと私はその時もさう思つた。

子供達の目方。

行光――四貫六百。曉子――四貫百。敏行――三貫八百。行三――三貫五百三十。

八月十二日

小休みもなく雨は降りつゞけてゐる。かう雨がつゞくとこゝの氣溫はひどく低下する。それは札幌を私に思ひ出させる。氣溫ばかりではない、輕井澤は多くの點に於て札幌と類似のものを持つてゐるやうだ。夜明けは札幌ほど冷え込むことはないが、空氣の輕さは殆んど相等しい。土質は全然違ふ（札幌は沖積土、輕井澤は火山礫）が

植物の生え具合には非常な類似がある。精進場川といふ小流の對岸に連なる山に育てられた落葉松の林から、離れ山の樹のない斜面に眼をやつてゐると、眞駒內に近い丘陵を思ひ出す事が出來る。八月には似合はず寒い雨の中にそれらの物象が淋しく濡れてゐる樣子は誰にでも北海道の一角を聯想させるだらう。

くさ〳〵して來た。もう雨から免れなければゐられないやうな焦慮に驅り立てられる。私を慰めるために私をこゝに伴れて來た父は、私以上に鬱ぎ込んで見えた。私は試みに父に山を下らうではないかと提議して見た。父は一も二もなく贊成した。

午後雨を犯して西に向ふ汽車に投じた。追分に達するまではひどい雨だつたが、小諸までくるともうそこには雨が降つてゐたやうな氣配もなかつた。道は乾いて、道行く人に雨傘を持つたものは一人もなかつた。ぎら〳〵するやうな眞夏の日が千曲川の白い河原を照してゐた。そこには未だ夏が十分に殘つてゐる。輕井澤の方を振返つて見ると、雷電を孕んだやうな黑い雲が眞黑にうづをまいてゐた。二時間近くを汽車に搖られて、戶倉といふ停車場に降りて、人力車で上山田溫泉へ行つた。窓は全く霽れ亙つてゐたけれども、千曲川に渡したあやしい橋を渡る時などは、吹き飛ばされさうな風だつた。千曲川は山國に似つかはしいいゝ河だ。河原の大きなごろた石は白く、水は殊更に靑い。それが可なりな早瀨をなして、河底を音高くこすり流れて行く。上山田といふ溫泉は出水でもしたら水がつくに違ひないと思はれる程低い平ら地に建てられた淋しい溫泉場で、車夫に案內された宿屋といふのは殊にひどい所だつた。父も私も宿屋のよしあしなどはさして氣にする方ではなかつたけれども、これはひどいと思つた。家族の部屋のやうな散らけた薄暗い所を通りぬけて、二階の四疊半に案內されたが、一寸坐りこむ氣にはなれないやうな所だつた。すぐ蚤が足許から二人を襲ひはじめた。共同湯に出かけたら男女混浴で、私達を乘せて來た二人の車夫にも出喰はした。湯もさう潤澤ではないらしく、可なりよごれてゐた。

二人は早くから蚊帳を吊つて貰つて寢ようと試みたが、孔があつて蚊が無遠慮に襲つて來るので蚊に弱い私は眠ることが出來なかつた。仕方なくそつと蚊帳を出て、一間の腰窓の所に行つて裏庭を見おろしながら二時までぢつとしてゐた。月のすぐれていゝ晩だつた。窓の下には大きな柳と夾竹桃とが二本その枝先を欄干の所までとどかせて、いつの間にか吹きしづまつた夜風にそよ〳〵と動いてゐた。柳の葉も夾竹桃の葉も唯一色の黑い小さな鮎の群れのやうにしか見えなかつた。その間に、蚯蚓だと云ひならはされるあの單調に長く音を引く聲も交つてゐた。何んでもを靜かに地の中に引き込んで行くやうなその聲は、秋の近いのを警める。遠くの方で千曲川がかすかな川音をたてゝゐる。月の光は廂間に夜露の宿つてゐるのをほのかに語つてゐる。父はと見ると半日の旅にすら疲れ果てゝ深い鼾になつてゐる。私は宿屋の浴衣に冷たさを覺えながら、いつまでも寢つくやうな氣にはなれなかつた。やうやく一人になつたといふ喜びが私を甘く悲しませた。ぢつと首を垂れて何かを見つめてゐると、大氣の中に私語くやうな聲を聞くけれども、聞いたなと意識した瞬間にはその聲はもうなかつた。私は欄干に手をかけてそれをゆすつて見た。一寸力を出しさへすれば、もり〳〵と音をたてゝ折れてしまひさうに脆く私の手に感ぜられた。それでも階下で二時の時計が鳴るのを聞くと、私は寢なければならないものゝやうに又蚊帳にもぐり込んだ。而して曉が白んで父が眼をさました頃まで何事も知らなかつた。

八月十三日

二三日をこゝで過すつもりで來たけれども、我慢がし切れずに私達は別所溫泉といふのに引越すことにした。今日は日本晴に空が晴れて、汽車の中は九十度といふ溫度を示した。今更に輕井澤が戀はれるやうな日となつた。上田で馬車の出る間に三十分程の餘裕があつたので、大いそぎでHを尋ねた。Hは今上田蠶絲學校の先生をして

ゐる。士族町とでもいふやうな古い軒並みの町を息せき切つて歩いて、汗をふき〳〵家を尋ねると、Hは驚いて玄關に現はれ出た。開いた玄關の襖の彼方にはその細君がいた〳〵しくやつれて床の上に臥てゐた。今度は私が驚いてしまつた。高等女學校に教鞭を取つてゐるその細君は生徒と共にしなければならぬ駈足が因になつて、膝關節に激烈な炎症を起したのださうだ。細君は一箇月程もたつた今でも寢返りも出來ない位の苦痛に呻吟してゐた。しかもHは遠からず海外に留學をするのださうだ。札幌以來遇はないでゐた二人は、私の訪問をなつかしがつてくれたけれども、私はゆつくりしてはゐられないので、汗をふき〳〵又停車場側の馬立所まで歸つて行つた。

圓太郎馬車に久しぶりで乘つて、白くぽく〳〵とほこりの立つ堅い縣道を走らせながら、私は始めて養蠶地なる信州の田舍を眺めやつた。私に殊に目立つて見えたのは宏大な養蠶所の白い壁だつた。直線から成り立つ二棟造りの屋根も際立つてゐた。それらの白い大きな建物が眞青な田圃のこゝかしこに、木叢に圍まれて散在してゐる姿は、裕かなその地方の生活の有樣を思はせる。私はまたそこら中に平地があるのにもかゝはらず、可なり不便らしい山の中腹にいくつもの村のあるのに氣附いて、その譯を土地の人に尋ねて見た。土地の人は親切に、信州は何といつても山國だから、平地の面積には限りがある。それを出來るだけ生産的に使ふために、德川時代には平地に住家を建てることを嚴禁したものだと敎へてくれた。それはさうありさうなことにも思へた。而してあの山の中に住ひ慣れた人々は、今でもその習慣を容易に捨てようとはしないのだらう。夜などその邊を通ると高所に見える灯の群れが、ふと旅人に伊太利を思はせたりする。

別所はいゝ溫泉場だつた。遠くから望まれてゐた男神女神の二山の間から流れ下る逢初川といふ小溪を中に挾んで立ち連なつた旅籠は、こゝの起原の古さを自ら物語つてゐる。狹い格子の入口を持つた太い柱の家は、屋號を書いた懸行燈をもつて、そここゝに殘つてゐる。私達は板屋といふ家の別館に案内されて、その離れのやうな所に

落ちついた。湯嫌ひな私にも懷しまれる湯の匂ひが私の心を和やかにしてくれた。私はその夜夢も見ずに眠つた。

八月十四日

早起きな父よりも早く眼覺めて、そつと戸を繰つて庭に出ると女中が寢卷のまゝで表の門を開けてゐる所だつた。暑さを思はせるやうに空は淡く霞んで殘りなく晴れてゐた。逢初川に沿うて少し下つて、左に折れて淨樂寺と安樂寺とを訪れた。淨樂寺の裏山には見事な經藏の四重の塔がある。森林と松杉の茂つた中に、千年の餘を經ると稱せられるその塔は、完膚なきまでに木部が蟲に喰はれて寂然と立つてゐる。八角形に面を取つたその建築は今でも見る人に勝れた壯美な感じを覺えさせる。その周圍には古い墓が所せまく立ちならんでゐた。私はそこに少しの間默つて立つてゐた。而してそこを降りて本堂の前まで來ると朝の勤行の鐘がさわやかな夏の空氣を動かして鳴り出した。私はどういふものか鐘の聲を聞くと身が引きしまるやうな心持がする。梵鐘――あれは東洋人にはなくてならぬ音だ。不圖あの聲に出喰はすと私は思はず泪しようとする時がある。山門まで來ると太陽は勇しくその輝かしい光を凡てのものゝ上に投げはじめた。

朝食をすますと、父が輕井澤に歸らうといひ出した。老いたものに取つては、自分の常住の家ほど居心地のいい所はないのだらう。馬車から見ると淺間山に立つ煙は下野の方に流れてゐる。黑い銀河のやうに澄み亙つた青空を淡く立ち割つて遠く〳〵靜かに流れてゐる。輕井澤に着いたら子供達は私の歸るのを待ち遠しがつてゐた。

八月十八日

Y子の遺稿を整理し終つた。旅から歸つてから毎日毎夜私は殆んどそれのみに沒頭してゐた。それに何といふ

名をつけようかと相談した。八月だ。稻妻、花野、さび鮎、芙蓉、霧、鈴蟲などと季寄せの言葉を案じて父は遂に「まつむし」と決めてくれた。明日は東京に歸らう。而して遺稿の出版を急がう。晝飯を父や岳父などとホテルでしたゝめたら、卓上にまつむし草が一かたまりさしてあつた。その薄紫の淋しい花を見ると、私はすぐその花をY子の遺稿の表紙のデザインに用ゐようと思ひさだめた。

花といへば輕井澤の花は美しい。こゝから沓掛あたりにかけての野の花の色は、高原の空の澄めるが如く澄んでゐる。萩は野草の間に交つて雜草のやうにその細々とした枝をたわましてゐた。龍膽の壺のやうな花はつゝましく空の靑さを吸ひ入れてゐる。桔梗は殊に雲場ケ原を布くが如くに飾る。つりがね草、月見草はその大輪な花瓣を物淋しげに開いてゐる。まつむし草は叢になつて一時にその紫の眼を見開く。幾度聞いても忘れる名だけれども、粉のふいたやうな廣葉をもつて、軟かい莖が人丈けよりも高く生え延びるあの草は私の好むものだ。その草が勢込んで高々と茂る姿はいかにも高原の荒涼とした感じにふさはしい。併しこの草ほど季節に從つてその色の變化を見せる草はない。夏が老いて秋じみて來るとその頂に白い花を咲かせ、それがやがて樺色の實に代へられる。而してその廣葉は根本の方から裂け枯れてゆく。誰の杖のいたづらな仕事か、すぽりと莖がへし折られて道の方に傾き倒れてゐるのなぞを見ると「秋が來るな」とかこたないではゐられないやうな氣がする。それから薊、山牛蒡、二つながら一種の鬼氣を含んで草かげに潛んでゐる。葛、木いちごの白い花。晝顏、とらのを。それらの凡てを抱いてかやと薄との草原がこの土地の盆地に擴がつてゐる。八月の中ばには薄に穗が出る。九月に入ると草原は一面に白髮の如くになる。そこを冷たい風が靜かに過ぎて行く。

不幸にして輕井澤では眼に立つやうな森林を見ることが出來ない、多くは近頃になつてから植樹されたものだ。けれどもその或る部分に森々と茂り亙つた木立がなかつたといふことは出來ない。Nの家の塀代りに使つて

ある木の根の堆積を見ると、その邊には遠からざる過去に二かゝへも三かゝへもするやうな大樹が茂り合つてゐたのを想像することが出來る。無慈悲なる人の手よ。その手は遂に森林の靈域を化して無味な荒原にしてしまつた。けれども規則正しく植ゑなされた人造林にも亦ちがつた趣がないではない。それは特に落葉松に於て見ることが出來る。防火線を處々にひかへて、苗床のやうに林立する圓錐形の樹木は、さながら天鵞絨のやうな柔かさを以て、山の膚を被うてゐる。夏にはそれはよい程の白さをもつて青い。秋が深まるに從つて黄金の色となり樺となる。試みにその林の中に分け入ると、錆びた針のやうなその葉が、さゝやかな風にもたまりかねて、ほろほろと頭といはず肩といはず佇む人の上に降りかゝる。

八月二十日

昨日輕井澤から歸京した。母だけが一人で留守居してゐた。Kが自分の所で出來た葡萄をY子に供へるといつて持つて來てくれた。彼も肺を病んでゐるのだ。私は表紙のデザインをするためにまつむし草を持つて歸つたが萎れてしまつたからKに探してくれないかと頼んで見た。

八月二十二日

雨が降りはじめた。母が一人で輕井澤に發つて行つた。東京には私だけが獨り殘つた。少し冷たく覺えるやうな日だつた。夕刻にKから三輪ほどのまつむし草が屆いて來た。鴻の臺の練兵場の近所にもとは澤山咲いてゐたのを記憶してゐたので、丁稚をつれて雨の中を捜しまはつたけれども、遊びに來る人に根こそぎ取つてゆかれて、僅かに數輪しか見出すことが出來なかつたとのことだつた。肺病のくせに雨に濡れながら半日を捜し廻つてくれ

たのかと思ふと、彼のまめやかな心が嬉しくつてたまらなかつた。しかもその花の何といふ貧弱さよ。輕井澤のそれがまつむし草なら、東京近在のそれはまつむし草とはいはれない程だ。私は今更にあの花に裕かな輕井澤の野を思ひやつた。

八月二十四日

出版の用事がすんだから今朝又汽車で輕井澤に向ふ。汽車の中は蒸すやうに暑かつた。けれども上野の廣小路を通る時、柳の葉がちらり〳〵と落ち始めたのを注意してゐた。夏は東京にさへもう永くとゞまらうとはしてゐないのだ。

八月二十五日

一日曇つて時々雷鳴がした。雷に對しては、其の到來を豫言が出來るほど敏感な私の頭は終日重かつた。それは東京にでもあるやうな不快な一日だつた。輕井澤ではこんなことは珍らしい。輕井澤の雷は一つの名物であり痛快なものゝ一つだ。

普通それは東南方から海上の空氣に伴つて來る。外人によつて Prospect Point と稱せられる矢ケ崎の突角が隱見するほどに密雲がふさがり始めると、水のやうに冷え〴〵する風が水分を十分に含んで、私の住んでゐる家から眺められる谿谷に吹き落ちて來る。黑雲はもく〳〵と渦卷きながら見る〳〵地に近く漲つて行く。乾き切つてはしやいだ屋根板に霰のやうな音を立てゝ大粒の雨が間遠に落ちて來る。それに氣づくと私達は十分戸障子の備へをしなければならぬ。やがて脅かすやうに遠雷が底力のある響を傳へはじめて、稻妻がきら〳〵と黑雲をもれ

てひらめく。一陣二陣強風が草木を靡かして過ぎると見るまもなく、さら／＼と雨脚がしげくなつて來て、すはといふ暇も與へず盆を覆へすばかりに降りそゝぐ。紫の光が走る。又薄墨のやうな闇になる。その闇の中を地をとゞろかして雷が鳴り亙る。盆地の四方をかこむ山々が、一つ一つその響きに答へる。引きつゞいて又紫電が飛ぶ。飛ぶと思ふ間もなく轟然として雷が鳴る。もうさうなると天も地も一個の渾沌だ。雲と雲との間に、雲と地との間に電光は綾をなして入り亂れる。嘈々と降りしきる雨と、それを驅使する雷鳴とは耳からたゝき込まれて頭の髓に沁みとほる。さうなると今まで重かつた私の頭は急に輕くさわやかになつて、殆んど生命の危きを忘れて戶のすき間から電光のひらめきを見守るのだ。時には指の先などに電氣が傳はつてちか／＼する事がある。

かゝる雷電の過ぎ去つた後の心のさわやかさ。存分に攪拌され純化された空氣が適度の濕氣を含んで、輕く萬象の上に漂ひ、洗ひすまされた空が雲一片もなく澄み切つて、夕暮れの色に光り、噴火砂利の土質は僅かに流れ水の痕をとゞめてしつとりと砂塵を絕ち、草叢の間にかけた蜘蛛の巣が殘らず輝き出て、葉蔭に逃げかくれてゐた昆蟲の類が、身づくろひしながら羽根を擴げて涼しい夕方の空氣の中に舞ひ出して來る。而して遠い森の中では事もなげに鶯が啼きはじめる。それは新しい天地の創造だとさへいへる。

けれども今日はさうでなかつた。人々は何となく思ひ屈したやうに一日を過した。晩になつてから私は兩親と何かしんみり話をしてゐた。と、ふと氣がついて見ると、四つになる敏行がソファの上に坐つたまゝ一人でしくしく泣いてゐた。何のいはれもなく唯しく／＼泣いてゐる。

私も自分の子供の時のことを思ひ出す。遊び草臥れて一人になつた時など、どうかした拍子にふと故のない哀愁が小さな胸に迫つて來る。……人間といふものはあんな年から寂しさを祕密な持ち物として生れて來るのだと見える。故もなく子供の泣くのを見るのにまして物寂しく恐ろしいものはない。

大きな事件は時間を滅却する。それは遠い昔に起つたやうにも思はれ、今起りつゝあることのやうにも思ひなされる。

八月二十七日

この日は家の者達と精進場川の停車場から輕便に乘つて鶴溜に下りた。こゝは輕井澤の中でも色の多い所だ。子供達は蝶のやうに花の中に分け入つた。そこからは輕井澤と沓掛とが一眸の中に眺められる。高原の特長は空が高く山が低いことだらう。空が高く見えるのは地平線が廣いからだらう。山は低いといふより、その中腹から上のみを現はしてゐるやうに見える。こゝから見やられる信甲の山波は皆さういふ姿をしてゐる。この高原の特質は氣高い感じを與へる。恐らく輕井澤の盆地は太古は湖沼であつたのではなからうか。輕井澤の隧道が開鑿された時、そこから驚くべき出水がして一時その工事を難澁にしたと傳へられてゐる。あの一面の平原に水が溜つてゐたことを想像して見る。それはどの位美しいものであつたか知れない。四方の山々の靑葉と紅葉とが時節時節にその影を蘸した様を想像すると驚くべき幽邃な情景が心眼に浮んで來る。

八月三十日

野が何處となく黃ばんで來た。一株の草を見るとその葉の一二枚は必ず黃葉になつてゐる。エメラルドのやうだつた木々は、やゝ乾いた綠の色に變つてゆく、夜のひき明けから家の周圍に聞こえる小鳥のにぎやかな啼き聲の中に靜かな蟲の聲が澄み切つて目だち始めた。Y子を私から奪ひ去つた八月は逝く。而して夏は逝く。

（一九二〇年六月、「新家庭」所載）

イブセンの仕事振り

これは私の一つの推察に過ぎない。中つてゐるかゐないかは元より私自身保證することが出來ない。去年の秋と今年の春と二回にかけて私はイブセンに關する感想を同志社大學で講演した際、私は次のやうな發見をして、且は驚き、且は自分を顧みて自分の仕事振りを恥かしく思つたのだつた。それをこゝに書き留めて置く。

一八七九年にイブセンが五十一歳の時、「人形の家」を書いた。「青年同盟」や「社會の柱石」を書いてほゞ自分の表現法についての方向を見出し始めてゐた彼は「人形の家」に於て遂に他と紛れることのない獨自な藝術境を開拓したといつていゝ。イブセンの未來は、この一作によつてしつかりとそのきまりがついた。「操人形の絲が人眼に立たなくなつた最初のイブセンの戲曲」であつた。この作が讀書界に莫大な反響を起し、劇界に重大な寄與であつたのは勿論であるが、同時に作者に對する憎惡と酷評とが四方八方から起つた有樣は、イブセンの生涯に取つて未曾有であつた。虛無主義者、神聖なる家庭の破壞者、人情に對する低能者等の罵詈雜言はイブセンの身邊に十字火の如く集つた。

イブセンは平氣でゐることが出來なかつた。一人の良心的な作者に取つて、その作者が十分の自信と好意とを以て作物をした場合にあつて、有識者と社會が許してゐる人々から此の如き無理解な無同情な反響を投げつけられて默つてゐられないのは當然である。

「世には二種類の精神的方向卽ち二種の良心がある。その一つは男性の、而して他の一つは、男性のそれとは全

然異質な女性の良心である。この二つの良心は相互の間に理解がない。而して實際生活に於いては女性はいつでも男性の法則によつて判斷せられてゐる。それはまるで彼女は女性ではなくして男性であるかの如く。

女子は現在の社會にあつては、全然男性化した現在の社會にあつては彼女自身であることが出來ない。今の社會の法則は男性によつて組み立てられ、而してその法律制度の下にあつては、女性の行動は男性的見地からのみ批判される。

彼女は僞替僞造を敢へてし、しかもそこに誇りを感じた。何故ならば、彼女は良人の生命を救はんが爲めに、愛情によつてそれをなしたからである。しかも良人なる人は凡下な名譽心なるものにかゝづらつて、法律の味方になり、問題を男性的な視角のみから見た。

精神的衝亂。主權に對する信念の爲めに壓倒せられ混亂せられて、彼女は道德的權威に對する信念及び育兒の能力に對する自信を失ふに至つた云々」

これはイブセンがこの戲曲を書き下すに當つて、草稿の劈頭に書き記した言葉だつた。しかもイブセンのこの美しい底意は無視されたばかりでなく、汚されようとしたのだつた。藝術家らしく自分を明かにしようとしたイブセンは、攻擊に對して物々しい辯解や論難はしなかつたが、二年後に公けにした「幽靈」に於て攻擊に對する反證を示した。「幽靈」が「人形の家」の反證の爲めに書かれたといふ事實は、イブセンの評論家の中にも指摘した人が數多い。イブセンはこの戲曲に於て、女性が全く理解せられず、單に男性の自由な、我儘な、若しくは放恣な生活が結果する手傷を、柔順に、やさしく、つぶやくことなく押し拭ふ看護婦としてのみ役立つ境涯の中に、一人の堅忍な婦人をおいた。彼女は凡ての內心の要求を、習俗的な義務の埒內に閉ぢこもつて、妻としては良人の最上の保護者であり、母としては子供の無上の味方であらうと努めた。而してノラの如く破壞すべきものを破壞

せずに堪へ忍ばうとした彼女は、最後にいかなる收穫を刈り取らねばならなかつたか。

ノルウェーの讀書界はその戲曲に對して、「人形の家」以上の敵意を示した。スカンディナヴィヤのあらゆる劇場はこの劇の公演を拒んだ。一萬部の初版は十二年目にやうやく再版を出した。

「私は『幽靈』に對する激昂は起りさうなことだと思つてゐた。然し起りさうだといふので手加減をする氣にはなれない。それは卑劣なことだ」

と彼はその友人に書いてゐる。而して故國の人達の智力が愚劣で、緩漫であることに殆んど絕望して「我が國は詩を要せず」といつて、藝術的活動を放擲しようとさへしたのだつた。

この頃からイブセンは殊に所謂多數者といふものに對して疑ひを持つやうになつて來た。而してイブセン自身も本國民の評價によれば上流社會にも入れられず、民衆からもよく思はれない立場にゐた。一八八二年にブランデスに與へた手紙の中に彼は露骨な苦々しさを以て「私は如何なる場合にも多數を有する黨派の側に加はることは出來ません。ビョルンソンは『多數は常に正しい』と云ひます。……然し私はそれと反對に『少數は常に正しい』といはなければならない」と書き送つてゐる。

イブセンのこの心持は彼に一つの戲曲の主題を提供した。一八八二年の春書肆のヘーゲルに送つた手紙の中に「今度は素晴らしく平和な戲曲を書くことになるだらう。政治家も、富豪も、その細君達も安心して讀めるやうなものにする」といつてゐるが、これは恐らく「幽靈」で商賣上の不安を感じ始めた出版業者に對する氣休めの言葉とも見れば見られる。

成程この年に書いた戲曲「人民の敵」は、イブセンのものとしては、手綱をゆるめて、抑へてゐたイブセンの極く内部の血性をそのまゝ迸らしたやうなもので、非常に明るい感じのするものではあるが、其の明るさの裏に

潛められてゐる義憤は何人と雖も見逃すことが出來ないだらう。眞理は功利的の結果と結び附いた時にのみ眞理として公認される。さもなければ、忽ち危險な厄介物として、資本家からも、中産階級からも、民衆そのものからも、否應なしに蹂み躙られ、押し虐げられる。眞理を見出したものは、唯獨りになつて眞理を愛護する時に最も強い。かうイブセンは自分の苦い經驗の結果を煎じつめて疾呼した。

然しながらイブセンはやがて靜かに落ち着くと、多血的に思ひ上つて叫んだ自分の態度を皮肉な眼で見るべく餘儀なくされた。病的にまで自己內省の激しい彼は、自分の叫びのドン・キホーテ的なのに胸がむづかゆかつたに違ひない。而して彼の例の何事をも抑へつけ抑へつけて、じり〳〵と油を搾るやうな態度に還つた。

一八八四年、彼が五十六歲の時「野鴨」を書いた。この頃彼は羅馬に逗留してゐたが、毎日定刻になると一定したカフェーに行つて、一定した座席につき、自分の顏を新聞で隱して、傍の鏡に映る來客の樣子をまじ〳〵と見つめる有名なカフェー通ひが始まつた。彼がその時どんな心持でゐたかを私はほゞ想像することが出來る。その眉の間には一種厭人的な皺がたゝまれ、そのくぼんだ眼と堅く引き結んだ唇には、氷のやうに冷たい意慾的な皮肉の色が潛んでゐたことだらう。それは他人に對するよりも已れ自身に向けられたものであり、已れに何等かの交涉を持たうとして近寄る人に向けられたものであつたに違ひない。

「野鴨」のグレガースなる青年に於て、イブセンは容赦なく自分自身を戲畫的に表現した。グレガースは幼少の時からイブセンの所謂病的な良心（sickly conscience）の持主であつた。雄々しい心を持つた人ならば、見も返らぬやうな瑣末なことにまでくよ〳〵と焦ら立つて、その眞相を申し出ずにはゐられない質の男だ。而して肝腎の自分自身は結局爲すべき何事をも持つてはゐないのだ。他人のことゝ云へばおせつかいにも何處の隅にも鼻を突つ込んで虛僞といふものを嗅ぎつける。而してそれを明るみへさらけ出して、天職を成就した氣持になる。かくして

彼は唯一人の幼友達の家庭生活を支離滅裂にし、天使のやうに好意に滿ちて邪氣のない少女を空しく犬死させる。徹底的に見て、裸かな眞實の上には地上の生活は瞬時でも可能ではあり得ない。愛といふ衣をかけた無害な小さな虛僞の上に凡俗の生活は最上に成り立つことが出來る。少しの生活經驗をだに持つた人ならば、誰でも氣附くべきこの有りふれた事實を、グレガースは彼自ら英雄的と思惟する。結局利己的な行動によつて片端から破壞して得たり顏をしようとする。何等の子供染みた自己肯定！　何等の安價なる眞理探究！

世の人はよくこの戲曲を評して極度に陰慘な悲劇としてゐるやうだが、私にはそれが多分に嘲笑的な要素を交へた喜劇のやうにしか映らない。あの眞理探究の勇者らしく見える主人公グレガースは、自己の失敗を十分味識して屈辱の爲めに頭を被はねばならぬ破局に來ても、依然として眞理の勇者としての馬鹿らしい無策な自己の誇りを悟らないでしたり顏をしてゐる。イブセンの自分自身に對する痛ましい反噬は殆んど氣息苦しい程極度に達してゐる。この劇に於て、イブセンは「社會の敵」の陽氣な自己肯定から一飛びに退縮して陰氣な自己嘲笑を試みた。そのコントラストは實に著しい。

然しこれでもイブセンは一度手許にたぐり込んで自己省察の綱をゆるめようとはしないのだ。丁度彼が「人形の家」の異れる場合を想定して、「幽靈」を書いたやうに、一八八六年に出した「ロスメルス・ホルム」にあつては、「人民の敵」の場合の醫師ストックマンとは全然異つた典型の人物をあてはめた。それは牧師ロスメルスである。尤もストックマンもロスメルスも或る共通點を有つてゐないではない。その性格の極めて眞摯である點、誠實である點、或る勇氣を持つてゐる點などはそれである。然しながらストックマンが貧賤から身を起し、科學者であり、從つて眞理の追求者であり、實行力を有する現實主義者であるに反して、ロスメルスは世襲的な紳士閥の家に生まれ、神學者であるが故に道德の追求者であり、瞑想的傾向を有する殉情主義者であるなどはおのづか

らその著しい相違を物語つてゐる。イブセンは自分がさうあるまいと心懸けてゐたにもかゝはらず、潤澤にロスメルスの有するやうな性格を植ゑつけられてゐるのだ。彼は幼少から極度の貧乏によつて鍛はれたけれども、その家はその地方唯一の名家であつた。彼は戯曲に自然主義を導き入れた先驅者であつたにもかゝはらず、彼の性格の根柢には習性的には習性的な道德に對する憧憬執着があつた。而して彼が瞑想的であり、從つて一種殉情的な分子を捨て去ることの出來なかつたのもロスメスてに似たところがある。だからストックマンはどちらかといふと、彼があり得たいと望む姿であつて、ロスメルスこそは、避けようとしてゐたにもかゝはらず、彼の眞の肖像畫であつたのだ。彼はこの悲しい一身の矛盾を見通さねばならぬ勇氣を悲しくも持ち合はせてゐた。彼は自己の肖像を新しい苦痛を以て描き直さねばならぬのだ。

ロスメルスも亦ストックマンのやうに虛僞から蹶起して眞理を擁護せねばならぬ立場に立たせられた。眞摯な彼の性格はそれを彼に要求した。而して迫害はストックマンの場合と同じに、少數者と多數者の兩面から襲つて來た。「人民の敵」に於てストックマンを勇氣づけた親友ホルスターは、「ロスメルス・ホルム」に於てロスメルスを沮喪させる舊師ブレンデルとなつて現はれた。ロスメルスはブレンデルが一たび新人となつて立つのを見たが、幾干もなく砂塔の崩れるやうに存在を失ふその姿を見送らねばならなかつた。過去(白い馬によつて現はされた)は始終ロスメルスを威脅してやまない。一旦眞理の光明に振ひ起つた彼も一歩々々戰ひながら退かねばならぬはめになつた。この時に當つてその周圍にむらがり集まる敵人の冷刻な情容赦のない態度は殊にこの劇に於て力強く描かれてゐる。ストックマンは敗殘の中にも一脈の血路を開くことを忘れず、その一敗地に塗れた所に起き上つて、自分の志をつぐべく、頑兒等の敎育によつて、捲土重來の地盤を築かうとしたけれども、ロスメルスは消極の頂點まで退き去つて、そこに無殘な死處を探らうとした。彼は最後の瞬間に於てもひたむきに自分自身をのみ

信ずることが出來ず、レベッカの彼に對する愛情を事實によつて證明させて後やうやく自分といふもの丶力に信頼を持つことが出來た。而して利己主義者らしいストックマンが結局實際の愛人主義者で、利他主義者と自分自身でも信じてゐたロスメルスが到底高踏的な利己主義者に過ぎない事實を悲しくも證明せねばならなかつた。

イブセンはこの戯曲に於てしたゝか自分自身を鞭つと共に、世の中の人々が如何に彼の好意を凡ての不愉快な暗色もて塗りつぶし、一同指を擧げて「あの無力無恨なる反逆者の正體を見よ」と罵り笑つたかを痛烈に描いた。相對峙する敵手の間には、埋めがたい鴻溝が掘り開かれてゐる。而して兩方ともに有り餘る程の缺陥を持ちながら、互ひを誣ひ合つてゐる。

イブセンは以上五篇の戯曲に於て、宛ら大きな振子が搖れ動くやうに、一方の極から他方の極へと大きな弧を描いてその性格の內部を搖れ動かした。「人形の家」によつて世人がイブセンに與へた手傷は、イブセンをしてかくばかり大きな叫聲をつぎ〳〵に發せしめた。然しながら誰でも注意し得るやうに、振子の搖れ方は後のもの程段々小さくなつて行つてゐる。「人形の家」と「幽靈」との間の振子の距離は、「人民の敵」と「野鴨」に於てより短かくなつた。「ロスメルス・ホルム」に於て見出される個性と環境との葛藤は、遂に第六番目の戯曲「海の夫人」に於て完全に埋め盡されんとしてゐる。振子は「海の夫人」に於て靜止の狀態に還らんとする。

一八八八年、イブセンが六十歳の時發表した「海の夫人」こそは、イブセンの全著作を通じて最も陽氣な作品といつていゝ。イブセンはこの戯曲に於て、民衆に向つて好意を以て和らぎの手を伸ばしてゐるやうに見える。「私は私自身を容赦なく省察し、容赦なく鞭つた。それは君達自身の眼が見た通りだ。私は又君達を容赦なく解剖した。それは藝術家たる私にとつてさうあらねばならぬことなのだ。君達は本當にあんな姿をしてゐるのだ。君達の顔はそれに對して不服を申し出ようとも、君達の心は私のした所を肯くだらう。いつまでもお互ひに詐る

ことをしまい。私はこゝに一つの戯曲を書いた。それは如何にして君達が一人の藝術家を受取るべきか、又如何にして一人の藝術家が君達に奉仕し得るかを語らうとしてゐる。願はくは私の申し出を認めてくれ給へ。而して平和の握手の手を君達も私にさし伸べてくれ給へ」と。

「ロスメルス・ホルム」に於て私達は人生の內容を創造革新すべき創造的能力が、如何にして既定道德の桎梏に虐げられ、創造的能力の死滅と共に、道德そのものゝ退縮を來したかを描き示された。「海の夫人」に於て、創造的能力が既定道德の寛容により、如何に正しく生活の境界內に滲み込み、そこに生活の新しき力となつて働くに至るかを、イプセンは描き出した。

エリーダは海によつて象徵される無道德の大威力ある世界に對する憧れを白絲の如き處女時代の胸に宿した女であつた。狹い寂しい家庭生活に捕はれ、そこに豫め定められたしきたりに從はねばならぬ身でありながら、砂濱に打ち上げられた人魚のやうに、絕えず自由な力に充ち滿ちた海を忘れることが出來なかつた。彼女は幾度かある限りの意力を用ゐて、定められた運命に從順であらうとしたにもかゝはらず、やゝもすれば自分の意志よりも更に大きな意志によつて、見も知らぬ不思議な世界に引きずられて行かうとするのだ。エリーダの良人――それは「ロスメルス・ホルム」に於ける校長クロールのやうな死道學者ではなかつた――はそれが爲めに極度の煩悶を强ひられ、二人の娘はこの第二の母に對して冷淡な異鄕人でなければならなかつた。エリーダの住む避暑地に最後の便船が來、而してそれが去つて夏が空しく淋しい秋に繫がらうとする瞬間に、恐ろしい大試練がこの一家の上に來た。海から來た男は避くべからざる意力を以てエリーダを海に連れて行かうとする。エリーダはあらん限りの力に賴つてこの男の手から遁れようと藻搔くけれども、凡ての力は彼女を引き留むべき强さを有つてはゐない。エリーダの良人は遂に最後のけなげな決心に到達した。この上は良人たるの特權を捨てる外はない。エリ

ーダに絶對の自由を與へる外はない。さう彼は思つたのだ。

「エリーダ。――あなたは私をこゝに留めてお置きになれます。あなたはその權力を持つていらつしやるから、それをお用ゐになるでせう。然し私の心の――私の思想の全部――避けがたい憧れと望み、それをあなたは縛つておゝきにはなれません。私の心は、私といふものは、創り出された不可知の世界を戀ひ慕つて悶えます。それをあなたが妨げようとなさつても無駄です。

ワンゲル。――（深く悲しんで）それはよく分る、エリーダー！ 一歩々々あなたは私からすりぬけて行くのだ。絶大な無限――不測の世界――に對するあなたの憧憬は、このまゝではあなたを狂亂させさうにさへ見える。

エリーダ。――さうです〳〵。私はたしかにさう思ひます。何か眞黒な音のない翼が私の上に迫つて來てゐるやうです。

ワンゲル。――そんな結果にならせてはおけない。あなたを救ひ出す道はない――少なくとも私だけにはさう見える。だから――だから、この場で私は今までの關係を斷絶しよう。さあ、今こそあなたは十分の存分の自由さで自分の行きたい道を決めるがいゝ。

……………………………

エリーダ。――今こそ私はあなたに歸ります。今こそそれが出來ます。私は自由にあなたに行けるのですもの。私自身の自由な意志で、而して私自身の責任で。

最後の瞬間に於て、今まで彼等を脅かしてゐた運命は倏忽として一轉した。エリーダは全く海の誘惑から解放され、同時に海の自由さと人間らしい責任とを以てその良人の本當の妻となり、二人の娘の誠の母となつた。而

して華やかな浴客達は、夏を奪ふやうに船に乘つて、その避暑地から去り、後には淋しい秋と、海峽を氷で閉ぢつける冬が來るのだけれども、そこには暖かい人間の生活が積雪の中にも樂しく力強く送られようとするのだ。

イブセンはエリーダに於て人生の一人の鬪士として民衆に訴へてゐるのだ。あの傲岸な詩人が先づ自分から和睦の手を伸ばすその心持を思ひやると、一種のしめやかさを覺えずにはゐられない。そこに彼の悲しい心持とすぐれた大きさとが忍ばれる。

以上は勿論私の推察である。然し物好きな讀者があるなら、試みに自分でこの六つの、次ぎ〳〵に發表された六つの戲曲を讀んで見るのも一興かも知れない。「人形の家」から「海の夫人」に至る六つの戲曲は、私にはイブセンを主人公とした六幕の大きな一つの劇詩として映ずる。イブセンは五十一から六十までの間、即ち人生の一番大事な働き盛りを、一つの題材の下に苦しみ拔いた。この一つのものに武者ぶりついて、十年の間藻掻き續けたイブセンの仕事振りに私は驚嘆して了つた。自己及び仕事に對してあれ程の眞劍さと執着とがあつて甫めてイブセンだけの仕事が成就されるのだと思つた。彼のこの絕大な仕事の前には私如きは如何に小さな侏儒であるよ。

（一九二〇年七月、「新潮」所載）

「槐多の歌へる」

――(村山槐多著)――

去年の二月二十八日、齡二十四で病歿した一靑年畫家の遺稿である。日記と長短の詩と感想及び書簡が集めてある。彼は自らの生活を血液主義といつた位、强健精剛な肉と熱烈純淸な魂との讃美者であつた。彼の色彩は赤と紫と金とであつた。彼は荒蕩なディオニソス的な欲念を四肢とし、樂園の消息に純粹に精通した嬰兒のトルソとを持つた一個のセンタウルであつた。彼は奇怪なこの二つの矛盾に苦しみながら、しかも一個の完全な生として終始した。妥協の餘地なきほどに彼はつきつめて生きてゐた。この集には彼の十八歲の頃からの思想が集められてあるが、その頃のものには、最早内部の煩悶を殆んど伴はない詩人たる彼が現はれてゐる。その詩は實に美しく獨自的である。

『君は行く暗く明るき大空のだんだらの
薄明りこもれる二月

曲玉の一つらのかざられし
美しき空に雪
ふりしきる頃なれど
書故に消えてわかたず』……「二月」より

『美しき空に濡れて
二人歩みを共にすれば
この時銀鎖は薄明の空氣を曳きて
きら〳〵と二人に鳴る

美しき樂音連續す
されば空は恍惚たり
二人は歩む
きら〳〵と春の光ひかる

美しき空の下
Xの形に燈きら〳〵と戰動す
あゝ都大路に
恍惚として二人は歩みたり』……「空」

『たゞ鬼薊
紫に人を睨み
とめどなき狂女が涙に

物凄く濡れたり

恐ろしき鬼薊
その銀に霞みたる莖に觸るゝ時
何故に痛みを用すか
女の毛の如き痛みを』……「鬼薊」

『げに君は夜とならざるたそがれの
美しきとゞこほり
げに君は酒とならざる麥の穗の
靑き豪奢

すべて末路を持たぬ
また全盛に會はぬ
涼しき微笑の時に君はあり
とこしなへに君はあり』……「君に」より

『吹き荒む西の喇叭は
氣鋭き空の豪奢に

桃多の歌へる

泥醉の赤き都は
今覺めぬ眞晝まん中
何となく汗じみし君
けふわれの心に君が形は
殺したる蜜蜂の腹に蜜見たるが如く
たゞ甘くたゞあはれなり』……「醉へる時に」より

『女の血潮、紫の旗のはためき
孔雀の涙、孔雀の毛、心臟
西洋の金貨、綠、群靑、
靜脈を露出した山々の色

あゝ苦しく暑い湯釜の
百度に達する刹那も午後の時
美しい風景が今汗みどろになつて
泣いてゐる、泣いて居る

働く若い娘、その屑と頰、麥の芽
赤い動脈、血の流れる田、山

寶玉の光輝、天の叫び
私は彈丸の樣にこの風景の中を飛び行く』……「午後の紫野」より

十九歲の時東京に出て美術院の研究所に出入するやうになつてから、彼の生彩ある空想は、現實の辛味によつて一々味づけられた。彼は頑童のがむしやらな態度で臆することなく、それにぶつかつた。けれども現實は未經驗な二十歲の青年にはさすがに强大過ぎるものだつた。彼は藝術的大望にも性慾にも日常の起居にも到るところで躓かねばならなかつた。彼が眞摯であるだけその躓きは大きく烈しかつた。

『汝は愚鈍——沈默たれ
汝は醜人なり、貧民なり
汝は磨かざるダイヤモンドなり
汝は汚人なり、汚なきやんちやなり
汝は惡人なり、惡戲者なり
汝は大膽無類なる無賴漢なり

…………………

來るものに抗らひこれを打つ
負けるな
何物にも負けるな
汝自らを愛し拜せよ
汝こそ全能なり
その證左をたゞ汝のエの上にのみ示せよ

一切の社會的分子を排斥せよ……

出來るだけの事を正直に極めて正直に俺はして行かう
俺が惡い時は惡くならう
俺が愚な時には愚にならう
その外にどうして人間としての道があるのであらうか、俺の道があらうか
一切のまどはしにまどはされぬ
もう一人のまねはしない
この事を痛切に俺は感じてゐる
すべての手段と云ふ事は忌むべきことだ、とりわけ空なる物を空ならずと見せる手段は』……

彼は敢へてかう大膽に叫ぶと共に、二十二歳の折の五月のある日の日記の中には、悲しむべき自己に對する鞭撻がある。

『女の卑しき姿が自分の眼をさました、俺の世界の形相は是であつたか、俺は覺めた。一切から。……

第一に、日々何事か仕事する事、その仕事は自分に命の種を與へ得るものでなければならぬ、又心の領域をきずつけぬ物でなければならぬ。

第二に、靈を曇らせる一切の行爲を禁ずる事例へば飮酒、喫煙、耽色等。

第三に、よき知識を多く吸收する事、知識は浮華なる情慾を調整し、眞正の快樂を與へ吳れるであらう。……』

このあたりの彼には生命の不自然な分裂が著しい。從つてその詩にも初年に見られるやうな純粹な感激が溢れ出ないで、冷たい理智の反芻が窺はれる。彼は幾度か理智的に自分を律しようとして、しかも情熱の爲めにその

桎梏を蹴つて、七顚八倒した。その狀は弱い心を寒からしめるに足るほどだ。彼を容易に悟り切らせることの出來ないものが毒菌の如く簇々とその內部に生え茂つてゐたにちがひない。

『女、女、
またお前はおれをひく
おれの心は噴水の樣にお前の方へと高まる
ひくのをよして吳れ
おれは度々しくじつたではないか
愚かにも引かれるまゝにひかれた爲に、

助けてくれ
助けてくれ』

『吞氣者と人が自分を言つた、
人の世はそれ程までに苦しいものか知らん、
自分は可成りに苦しみあくせくしてゐるではないか』

彼はかういふ風にして藻搔き苦しんだ。而して僅か三四年の間に、いぢけ切つた人生の行路病者が夢みもしなかつた數々の經驗を心の底から味つた。彼は一躍して複雜な曲折を有する人間になつた。一面には持つて生まれたまゝの赤兒のやうな神々しい良心を捨てることなしに。それ故にその晚年の思想は初年の詩的高翔に立ち歸りながら、しかも十分の實感味を以て裏付け始められてゐる。恐らく彼に健康が續いてゐたら、又彼は大なる次の顚

倒を苦しく味はねばならなかつたかも知れない。而して他の高峯に向つて飛躍したかも知れない。然し不幸にして肺患がこの無謀に近いまで勇ましいセンタウルを斃してしまつた。

晩年の彼の思想、

『あしたに神を思ひ
夕べに罪を犯しぬ
美しき空と
醜くき嵐と
絶えず戰ふわが身の上に

さびしさ極りて
しづかに居がたくなりつ
さてわれは身を動かし
美しきわざか
惡しき業をなすなり』……

『友よ
わが風貌とわが業とは醜くし
されどわが心は
白き鳩の如く淸く

君にくちつけつゝあり』……

『一切は墓場の上の幻だ
私のやる事は
私の生は
みんなそれだ

私は何も怖くない
私はその底それ自身
虚無だ』……

『勝て、勝て、勝て、
一切は善い、
一切は善い、
自分を尊べ
自分の行をたゝへろ
その美しさに
ほれぼれと
自分に見入れ
槐多の歌へる

それでいゝのだ
それが絶對なのだ』……

『古いへうたんが木に吊るさがつてしんとしてゐる』……

『ためらふな、恥ぢるな
まつすぐにゆけ、
汝のガランスのチューブをとつて
汝のパレットに眞直につき出し
まつすぐにしぼれ
そのガランスを眞直に塗れ
生のみに活々と塗れ
一本のガランスをつくせよ
空もガランスに塗れ
木もガランスに描け
草もガランスにかけ
□□をもガランスにて描き奉れ
神をもガランスにて描き奉れ

ためらふな、恥ぢるな
まつすぐにゆけ
汝の貧乏を
一本のガランスにて塗りかくせ』……「一本のガランス」より

死ぬ前の年の末に、彼がどうしても心から離れさすことが出來ず、しかも彼をすげなく退けたお玉さんに對して書き殘した手紙の如きは、詩人として人としての彼のよき肖像畫である。それは聖徒の神に對する有頂天な祈りの心と全く相等しい。

少しばかりのエネルギーを、火を、使ひへらさない爲めに、小さな美しい牢獄に閉ぢこもつて、完全であり得た人はないではなかつた。凡てを燒き盡してもなほ悔いないまでに、自己を延ばし延ばした槐多氏の如きは、わが藝術界に於て稀有なことだといへると思ふ。あれだけの生得の良心と、あれだけの大膽な冒險力とを兼ね備へた人は珍らしい。彼は彼自身に於て完全に新しい生活の型を創立した。『槐多の歌へる』はその記念的宮殿である。

『みなさま御覽なされ
私の指さす方を
總體が一つの樂器だ
絕えずうめき鳴りきしめく
柱に、天井に、床に、それぞれ樂器が埋めてある
絕えないオルケストラ
耳をすまして御覽なされ

總體が一つの香料だ
椅子も王座も玄關も屋根も皆にほふ
蜜蜂が數萬御殿へ日毎に集まつて狂ひ死ぬ
こゝからその有様は見えますまいて
だがにほひはつたはりませうがな

ところがこのすばらしい宮殿には
たつた王様がひとりぽつちでお住ひだ

皆様御覽なされ
王様が窓から見える
黄金のパレットを手にして
畫を描いて居られる
みなさま土下座をなされたい
王様がお出ましだ

王様はこれから淺草へ行幸だ
泡盛を呑みに『……「宮殿指示」より

〔一九二〇年八月、「著作評論」所載〕

愛

――米川正夫氏に――

私の「惜みなく愛は奪ふ」については嚮に石坂養平氏が本紙に感想を寄せられましたが、石坂氏があれを發表する前、同氏とは私信を再三往復して意見を述べ合つて居ますから、それ以上云ふ氣にはなれないので、發表された感想に對してはお答へをせずにしまひました。石坂氏とは或る點以上にはお互の間に理解が成り立ち得ないのを感じたからです。この上は石坂氏は石坂氏の道を歩まれるがいゝし、私は私の道を歩いて行く外はありません。これは餘計なことかも知れないが、序でだからこゝに一言させて貰ひます。

あなたが私のものを注意してお讀み下すつたことを感謝します。大體に於てあなたは私の考へを受け入れて下さいましたが、その議論の最後の所で、私に對する不滿を述べて居られるやうに思はれます。それに對してお答へをして見ます。

愛は個性に於ける本能の現はれであつて、本能はその本然の力を以て働く外に、他の力によつて働かしめられることはない。だから本能の働きには努力といふものはない。又本能は自己に奪ひ、自己に生長する力である。それだから愛の作用は常に愛それ自身の爲めであつて、その外の何者の爲めでもない。かういふ私の立場に對してあなたは一應の理解と承認とを許された後、けれども人間としてこの純一無垢の眞愛の境地に達する爲めには、愛の周圍にまつはり附いてる强固な殼を破り去る爲めには、努力して愛する(愛しようとする)ことも、他の爲めに愛するといふことも必要とせられなければならない。この努力なしには、最後の愛には實際に於て到達するこ

とが出來ない。この準備的努力の過程を有島は輕蔑さへしてゐる。それは正しい見方とはいへないと云つてゐられます（今私の手許にはあなたの論文がないので、あなたの筆にされた言葉通りを拔萃することが出來ないのを殘念に思ひますが、實質に於ては考へちがひをしてゐないつもりです。若し考へちがひをしてゐたら更に御教示を煩はします）。

智的生活を論じた所で私は努力の生活に對して十分の尊敬を拂つて居るつもりです。愛に純粹になり得ないでしかも愛に行かうとする人間內部の包みがたき欲求は、人間をして努力の生活を將來せしめることは誠にあなたの仰有る通りです。然し努力の生活である以上は、それはどこまでも智的生活の圈內に入るものです。何故ならば愛しようと努力する場合を例として考察して見るなら、愛しようとするのは動向であつて、愛の純粹の體驗ではありません。愛は概念としては働いてゐません。概念はいつでも自己と環境との結合によつてのみ形成されるものであります。愛も概念としての愛は既に外界に存在してゐる愛の概念的範疇に依據して組立てられなければなりません。卽ち努力的の愛は內部より自發的に生み出されないで、外部の刺戟に對する內部の反應として生じて來るのです。だからそれは智的生活の圈內に入るべきものです。それを私は卑しめようとは夢にも思ひません。

それは人間が最上の生活に對して憧憬猛進する一路を明かに示す現はれだとさへ讃美してゐます（拙著智的生活の部參照）。然しこの程度の生活が純愛の生活を將來すべき過程をなすものだから、純愛の生活と同等の重さと高さとに見られねばならぬとならば、私は極力それに反對しなければなりません。自己の生命以外に模型を求めて、それに適合するやうに愛を働かせる生活ならば、從來十分に承認され尊敬されてゐます。私はあの論文に於てその上に純粹愛の境地を求め、それを凡ての在來の生活の上におき、純粹愛の境地のみが人間の生活中に於て眞實の意味に於て尊い唯一の境地だと主張したいのです。勿論今まで〻もかゝる生活は何等かの瞬間に凡ての人によ

つて導かれてゐるのですが、今までの人はその價値を私が見るやうには見てゐなかつたと思ふのです。要するに私は無かつたものを有らしめようとするのではなく、旣にあつたものに對して價値の評價をしなほさうとしたのです。それなら何もそれはお前を待つて後に知り得る問題ではないといふ人があるかも知れません。然しながら私達が自然に持つてゐる道德なり、知識なり、習慣なりは、實際に於て私が考へてゐるやうには考へられてゐないのをどうしませう。「智的生活を最上最勝の生活標準とする考へから脫して、本能的生活を遙かなるその上位におくにあらざれば私達の生活はもう行きつまります」前途に晴やかな自由な光明は認められません。そこを考へていたゞきたいのです。智的生活の優越權を覆へす革命がなかつたならば、それが破壞されなかつたならば、窒息のみが殘されるでせう。それを考へていたゞきたいのです。

　終りに――これは直接あなたの議論に關係してゐないかも知れませんが――私はあの感想文を活字になつた後讀みかへして自分でかういふ發見をしました。それはあれは私の內部生活の偶像破壞の爲めに書かれたものであつて偶像建設の爲めにではないといふことです。從つてあの議論は一體の調子が否定的です。私はいつかもつと肯定的なものを發表する機會のあることを望んでゐます。然しそれは五年後のことか、十年後のことか分りません。然しその時が來ても私は恐らくは本能的生活と智的生活をと同一水準に於て評價するやうなことはしないと思ひます。本能的生活の上位に更に尊い生活を見出すか、若しくは本能的生活の基礎の上に具體的な生活樣式を建立するかの何れかだと思つてゐます。

　若し私があなたの見方を誤つて理解してゐたら更に敎へて下さい。若し誤つてゐなかつたら私の申し出でをもう一度考へて見て下さい。

（一九二〇年八月二十九日、「時事新報」所載）

「悲痛の哲理」

――岩野泡鳴著――

これは合評にする積りであつたのであるが、讀了して來た人が少なかつた爲めに、銘々が簡單な感想を書くことになつたから、私も自分だけに考へたことを書き留めておく。

この書には「悲痛の哲理」と「新自然主義」と「半獸主義」とが合載されてゐる。私は以前から泡鳴氏のこれらの論文を讀みたいと思ひながら此の頃までそれを怠つてゐたのであつたが、而して「半獸主義」などに對する世間一般の評判に多少釣られてゐたが、最近に讀んで見ると全く違つた感銘を受けた。而して世間の評判の今更にあてにならない愚かなものであることを感ぜずにはゐられなかつた。氏の生前このことを氏に表白することの出來なかつたことを私は殘念に思ふ。

これらの論文殊に「半獸主義」は氏の人生哲學であるが、その中には氏の特異な性格によつてのみ生み出された創見があることを十分に感じさせられる。それは決して讀書から來た架空の構想ではない、生活の窮極的緊張狀態の把握に對する理解などには、氏の實感が確かに動いてゐる。その境地にあつては絕對の主體たるべきものは唯個性であつて、個性のみが存在の核心であり、當體であるとの主張及びその境地にあつては各瞬間の現在が過去及び未來を吸收して、そこに自爆燃燒の生命を現出するといふ見地は、私の深く賛同せざるを得ない處だ。唯それが自爆であるが故に從つて自食であり、自食であるが故に悲壯であり、悲壯の中から眞實の意味の尊敬が生まれるといふ段になると私には異存がある。悲壯とか尊敬とかいふことは、假りにかゝる生活が客觀せられた

時の現はれであつて、かゝる生活を生活しつゝある當體それ自身にとつては、かゝる思議を納るべき餘地はない筈だ。その生活者にとつては悲壯の代りに飽滿があり、尊敬の代りに自然（naturalness）があるのだ。泡鳴氏が悲壯とか尊敬とかいふ客觀的事實を生活そのものゝ內容と見たことは（而してそれを重要な內容と見たことは自分から自分の哲學を悲痛の哲理と稱したのでも知ることが出來る）、議論と內生活との間に或るゆるみがあつたことを思はせはしないだらうか。

私はこの書から一つの截然たる體系を得ることの出來ないのを知つてゐる。氏の哲學と氏の國家主義とが果して說かれてあるが如く連絡せしめらるべきものであるかどうか知らない。然しながらこの書の此處かしこには十分の示唆に富んだ實際的な言葉を見出すことが出來るし、此の書の中には普通の意味でいふ比喩ではなく、象徵といふべき境地にまで切り込んだ、卽ち詩の魂を持つた表現があることを發見する。人はこの書を讀んで悔いることをしないと思ふ。

この書は確かに多くの發足點を含有した書物の一つである。

（一九二〇年十月、「著作評論」所載）

文藝家と社會主義同盟に就いて

社會主義聯盟に文藝家が加はつたことをどう思ふかとのお尋ねですが、私はその文藝家の心持を臆測して彼れ是れ批評がましいことをいふことは出來ません。他人の心持にまで立ち入つておせつかいじみた批評をする必要も能力も私にはないのです。たゞこの事だけは分つてゐます。それはかゝる問題が問題になりさうもないといふことです。實にあたり前以上にあたり前のことのやうに思へるのです。

私自身はどうだと尋ねられると、その聯盟に加入するのには何の後ろめたさも苦痛も感じません。寧ろそれに加入した方が氣が樂な位です。私は決して社會主義の理解者だなどゝ大きな口をきくことは出來ませんが、僅かばかり聞き嚙つたり、讀みかじつたりした所からいつても、社會主義といふものが當然將來の社會生活を指導すべきものであるのを疑ふことが出來ません。及ばずながらそれに加はつて、少しでも貢獻が出來るならうれしいことだと思ふ位です。それなら何故お前はそれに加入しないかとお尋ねになるでせう。それは第一、先程私が後ろめたくないといつたのと違つた意味で後ろめたく感ずる所があるからです。私が有產階級じみた生活をしてゐるからです。堺枯川氏は印稅を貰つてゐることにすら後ろめたさを感ずるといつてゐられます。そこまで突きつめて考へると、現代に生活してゐる人は（全くの無職業者を除く外は）一人殘らず後ろめたさを感じなければならないでせう。然しそれ程ピューリタン式に考へないでも、私の生活は餘りに有產階級者的です。私見たやうなものが聯盟に這入るのは會の內容を汚します。第二に私は自分の職業上絕對に自由な立場に自分を置きたいと思ひます。將來共にこの方針は續けて行きたいと思ひます。殊に社會主義運動は實行的の目的を多量に含んではゐま

すが、一面深い思想上の問題にも觸れてゐます。その方面の問題が會の名によつて宣言されるやうなことがあつた時、何等かの束縛を感ずるやうなことがあつてはいやです。その時には脫會すればいゝではないかといはれるかも知れませんが、その位なら始めから這入つてゐない方が便利です。永久的の會といつては、私は現在著作家組合に籍を置いてゐるものですが、私の見る所を以てすれば、この會は全然思想問題を離れた會であります。少くともさうあることが出來得べき性質の會です。だから私は加盟してゐます。その他には何等の會にも這入つてゐません。

私は元來臆病者で、億劫者ではありますが、兎に角一人で少しづつでも氣の向く方に步いて行きたいと思つてゐます。それで社會主義の諸君の道を後ればせながらにも跟いて行くことが出來れば、一人で步いてゐるのでも、強ち[あながち]お邪魔になるやうなことはないと思ひます。

（一九二〇年十一月、「人間」所載）

序・跋

水野仙子氏の作品について

――水野仙子集の跋――

仙子氏とは、とう〳〵相見る機會が來ない中に、永い別れとなつた。手紙のやりとりがはじまつたのも、さう久しい前からのことではない。またその作品にも――創作をはじめて以來、殊に讀書にものうくなつた私は――殆んど接したことがないといつてい丶位ゐで過して來た。そのうちに、仙子氏は死んでしまつた。その死後、私は遺作のかず〳〵を讀ましてもらつて、生前會つておくべき人に、會はずにしまつたといふ憾みを覺えることが深い。

仙子氏は、作者として、普通いふ意味で不幸だつた人の一人に屬すると思はれる。彼女の作品は恐らく少數な讀者によつてのみ鑑賞された。評壇もその作品に注意することが極めて吝かであつたらしい。然し仙子氏はそんな取り扱ひを受くべき人ではなかつたと私は思はざるを得ない。

仙子氏の藝術的生活には凡そ三つの内容があつたやうに思はれる。第一に於て、彼女は自分の實生活を核心にして、その周圍を着實に――年若き女性の殉情的傾向なしにではなく――描寫した。而してそこには當時文壇の主潮であつた自然主義の示唆が裕かに窺はれる。第二に於て、作者は成るべく自己の生活をバック・グラウンドに追ひやつて、世相を輕い熱度を以て取り扱つて、そこに作家の哲學をほのめかさうとしたやうに見える。第三に至

つて、作者は再び嚴密に自己に立ち還つて來た。而して正しい客觀的視角を用ゐて、自己を通しての人の心の働きを的確に表現しようと試みてゐる。

この集には第一の作品は多分はもらされてはゐるけれども、「十六になつたお京」、「陶の土」、「娘」、「四十餘日」の如きはその代表的なものといつていゝだらう。そこには殉情的な要求から來た自己陶醉に似た曖昧な描寫がないではないけれども、その觀察の綿密で、而して傳習的でない點に於て、彼女の末期の作品に見られる骨組みの堅固さを見せてゐる。而してその背後には凡てのよいものも悪いものも、はかない存在の緣から切り放されて、忘却のあなたに消え去つて行く、その淋しい運命に對しての暖かい冷やかさが細々と動いてゐる。少女から處女の境界に移つて行く時の不安、懷疑、驚異、煩悶、つぎ〳〵に心内に開けてゆく見も知らぬ世界、而して遂には生活の渦中に溶けこんで何んの不思議でもなくなつて行くそれ等の不思議な變化、さうしたものが僅かな皮肉に包れたやみがたい女性の執着によつて表現されてゐる。是等の作品の中には、作者の眞摯な藝術的熱情と必至的な創作慾とが感ぜられて快い。

然し第二の作品に來ると、ある倦怠が感ぜられないでもない。「一粒の芥子種」、「夜の浪」、「淋しい二人」などがそれである。作者はこゝで自分の持つてゐるものを現はすために不必要な多くの道具立てに依らうとした所が見える。それは現さうとするものが、まだ十分に咀嚼されてゐないのを示してゐる。固よりかゝる作に於ても仙子氏は自分のよい本質から全く迷ひ出てはゐない。ある箇所に來ると心ある讀者は一字々々にしがみ附かないではゐられなくなる。「淋しい二人」の中の秋の景色の描寫の如きは、今まで提供された秋の描寫のどれに比べて見ても決して恥づる必要のないものであるとうなづかされる。けれども全體としての感銘は、作者の生活に或る一時的なゆるみが起つたのを感じさせないではおかない。

作者の畏れなければならないのは、その人の生活だといふことを今更の如く感ずる。第二の作品に比べると、私の意味する第三の作品は何んといふ相違だらう。それは作者の生活が或る强い緊張の中にあつたことを十分に感得させる。殊に私は「道」とか、「嘘をつく日」とか、「輝ける朝」などに感心してしまつた。「道」の如きは、あれ一つだけで仙子氏の藝術家としての存在を十分に可能ならしむるに足ると思ふ。あの無容赦な自己批判、その批判の奧から痛々しく沁み出て來る何うすることも出來ない運命の桎梏と複雜な人間性。而してその又奧から滲み出て來る心の美しい飛躍、そこには確かに生命の裏書きのしてある情景がある。それは單なる諦觀ではない。壞れるものを壞し終つた後に嚴然として殘る生活への肯定である。あゝいふ作品を一つ書き上げることがどれ程の痛い體驗と苦悶とを値したか。それは恐らく創作の經驗を有つものがおぼろげながら察し得る境地だらう。「輝ける朝」、「嘘をつく日」、これらは作者の性格のまがふ方なき美しさをはつきりと、しかも何等の矯飾なく暴露してゐる。こんな作を生んで死んで行つたこの若い作者は尊い。あんな涙を心にためてゐながら、うつかり眼に浮かばせなかつた程奧行きの深かつたその性格は美しい。あすこまで行くと仙子氏は概念的な女性といふものから脫して見事な人になつてゐる。女流作家として仙子氏をまつことはもう出來ない。

違つた意味に於て「醉ひたる商人」、「お三輪」の如き作品も亦深く尊重されなければならないと思ふ。それは人間性の習作と見て素晴らしい效果を收めてゐる。あれだけにしつかり物を見る眼があつて、自己への徹底が强い響きを傳へるのだなといふことを首肯させる。輕妙に見えるユーモアと皮肉との後ろに、作者は個性と運命とに對する深い洞察と同情とを寄せてゐるのではないか。

私は一々の作品に對してもういふことをしまい。仙子氏はその心底に本當の藝術家の持たねばならぬ誠實を持つてゐた。而してその誠實が年を追ふに從つて段々と光を現はして來てゐる。この作者はいゝ加減な所で凋落す

べき人ではなかつたに違ひない。年を經れば經るほど本當の藝術を創り上ぐべき素質を十分に備へてゐたことが、その作品によつて窺はれる。十分の才能を徹視の支配の下におき、女性としては珍らしい程の徹視力を自分の性格と結びつけてゐたのはこの作者だつた。だからその藝術が生長するに從つて益々根柢の方へと深まつて行つたのだ。この點に於て彼女の道は極めて安全だつた。しかもその道が僅かに踏まれたばかりで彼女は死んでしまつたのだ。

（前略） ところが體が惡くなつて來るために、頭がよくなつて來るのか、それともあまり頭が明晰になり過ぎるために體を倒してしまふのか、どつちが原因だかいつも分りませんが、とにかく少し具合が惡くなつて來ると却つて手紙なども書きたくなります。今度だつて惡寒から熱、惡寒から熱といふしつきりなしのすきをねらつて――しかし今はもう惡寒はやみましたから御安心下さいまし――すきをねらつてといふよりもすきを掠奪して、よく手紙を書きます。頭がなんでも何かさせないではおかないのです。それに自分でも恐ろしいほどはつきりして來て、もくろんでゐるある長いものゝ中の主人公や女主人公が、惱んだり、苦しんだり、愛したり、愛さなかつたり、墮落したり、救はれたりしてゐるのと一所になつて、自分も苦しんだり泣いたりしてゐます。私の眼にはこの頃涙が絶えません。それはいつの間にか泣いてゐるので、みんな空想の事件や、感情のためなんです。群雄割據のやうにいろんな話が一時に頭を擡げて來て、たつた一人の私をひつぱり凧にしてゐます。若し今この要求のまゝに從つたら、こつちを二三枚、あつちを二三枚といふやうに頭だけのものがいくつも出來て、それでおしまひになつてしまふでせう。自分ではちやんと、到底その一つだつても完成しきらないのをよく知りぬいてゐますもの。これが病氣に惡いんだといふこともよく知つてゐますから、讀むこと又書くことは勿論、どんなにいゝ言葉や場面がうかんで來ても、それを拭き消し拭き消ししてゐます。……（中略）病氣を

してからもう足かけ四年になります。暗いことを忘れかけると思ひ出させられ思ひ出させられしてさん〴〵生殺しの目にあはされました。隨分よくこらへたつもりだけれども、それでもまだ足りないなら、いくらでもお前の滿足するまでこらへようなどゝ齒をくひしばる下から、とてつもない侮蔑の色がわが口許にのぼつてゐるのにこの頃よく氣がつきます。なぜだか分りません。反抗かしらとも思つてみるけれど、どうもちがひます。もつと〳〵靜かな強い心なのです。傲然として最も大きい恐怖の上に立つてゐるのです。なんにも怖くないのです。――ことによつたら、人が何等の事件的原因なくして、自殺を誘惑されるのは、こんな時ではないか知らなどゝも思ひました。（下略）

これは仙子氏が死ぬ年の正月に、私にあてゝ送つてくれた手紙の一節だ。彼女の胸の中にどれほど實感から生れた素材が表現を待つて潜んでゐたかを知ることが出來ると共に、死を始終眼前においてゐねばならなかつたその心に、どんな力の生長が成就されつゝあつたかは、おぼろげながらも察することが出來る。

最もいゝのは仙子氏が野心家ではなかつたことだらう。實生活の上に彼女がどれほどの覇氣を持つてゐたかは知らない。又創作家としてどれ程の矜恃を持つてゐたかそれも知らない。少くとも仙子氏には自己の能力を方圖もなく買ひ被つて、自分に背負投げを喰ふやうな醜いことは絕對にしなかつたといつていゝだらう。いかなる野心があつたにしても、少くとも彼女は自分の取り扱ふ藝術そのものに對してはいつまでも謙抑な處女性を持ち續けてゐた。自分の持つ心の領土の限界を知り、そこから苛察に亙らないだけに貢物を收める勝れた聰明な頭腦を持つてゐた。だからその作品には汚すことの出來ない純眞な味ひが靜かに充ち滿ちてゐる。これは一人の藝術家にとつて、やさしく見えて決してやさしくない仕事だといはなければならない。極めて眞摯な性格のみがこのことを成就し得る。

仙子氏はまた自分の心を、若しくは生命力を外界の影響にわづらはされることなく見つめることの出來た一人だと思ふ。氏の藝術は大體に於て自然主義風な立場の上に創造されてゐるといつてい〻。しかも氏は主義に依據するよりも、それ以上にいつでも自分の心に依據してゐた。だから作品の內容には、いつでも機械的な仕組み以上に溢ひのあるハートが働いてゐる。如何に皮肉に物を見てゐる場合でも、如何に冷靜に生活を寫してゐる場合でも、その底には不思議にも新鮮な生命よりの聲が潜んでゐる。一箇の無性物の描寫に於ても、例へば、手の平に載せた生みたての鷄卵を「手の平に粉を吹くばかりに綺麗な恰好のよい玉子」といつたり、冬の夜寒の病室の電燈を「電燈は夜の世界から完全にこの一室を占領したのに滿足したらしく、一時自信をもつてその光輝を强めたけれども、やがて彼はその已れの仕事になれた。さうして最早一定の動かない光をのみ、十分な安心と僅かなる倦怠との中に發散した。恰も私一人の上には、それで十分であると見きはめをつけたかの如く」といつてゐるのなぞは、無數なか〻る例の中から、勝手に一二を引き拔いて見たに過ぎぬ。

明治以來出現した女流作家の數は少くない。その人達の中には、私のやうに云つたなら、讚辭を呈し切れないやうな作家が他に澤山あるのかも知れない。讀書に怠慢な私はか〻る比較をする知識を持つてゐない。然し私にとつてはそんなことはさしたる問題ではない。私はたゞ感心したものを感心したやうに云ひ現はせばそれで滿足が出來る。未熟な作家の一人なる私の考へが、仙子氏の迷惑にならないで濟めばそれで嬉しい。私はどうしても惜しい人が早死したと思ふ。私の前には美しく完成さるべかりし藝術品の痛ましい破片がある。書いても書いても、その總量が遂に藝術品たり得ざる人の多い中に、この破片は美しい。完成されぬ表現の中に、一つのよい心が殘された。永く殘された。多くの人はこの心に接する事によつて、痛い運命の笞の傷を親切に撫で慰められるだらう。

（一九二〇年四月二十五日深更）

「惜みなく愛は奪ふ」書後

これは「三部曲」の書後に記すべきであつたが、落してゐたのでこゝに云ひ足します。「大洪水の前」の中にナアマが唄ふ歌がありますが、あれは私の作つたものではありません。二十代で死んだ永野武三郎（號は用無）氏の作つたものです。この人は三一神學校の生徒で、卒業しない中に肺患に犯されて早世しました。今から二十何年といふ前のことです。あの詩は「用無遺稿」といふ非賣の本の中にあつたのです。私は、この詩人の生きてゐた間には、その存在をすら知りませんでした。その人のものを自分の戯曲に取り込むにあたつて、誰の許諾をも得ることが出來ないのは悲しいことです。私はこの詩に附すべき樂譜がほしかつたので、近衞君にお頼みして見ましたら、快く承諾して下さつたことを非常にうれしく思つてゐます。近衞君は作曲の爲めにヘブリューのメロディーをわざ〳〵研究し、十分の推敲を積まれた爲めに、「三部曲」の最初の出版には間に合ひませんでしたが、今後重版のものには添へることになつてゐます。音樂の理解のある方には是非それを見ていたゞきたいと思ひます。近衞君は今までの作品の中でも自信があるものだと云つて居られますから。

「三部曲」の批評は賀川豐彦氏が大正日日新聞でせられた外には、私の眼には留りませんでした。然し私信として有益な注意や所感を傳へて下さつた方はありました。ある友人の如きは「聖餐」のやうなものは絶版にしなければいけぬと警戒してくれられました。それには私のユダの見方が月並みであること、ペテロが聖書に現はれたその人とは似てもつかぬ考へ方の下に描寫されてゐること、一般の事實に史實と矛盾してゐる箇所の多いこと、最後に基督の言葉の引用が支離滅裂であること等が重な缺點として指摘されてありました。私はその友人の憚りな

い忠言を感謝はしてゐますが、今の處あれを絶版にすべき必要は少しも感じてはゐません。又史實の相違等も訂正すれば訂正し得る所もありますけれども敢へてそのまゝにしておきます。どうせ私のやうに聖書歴史の專門的研究をしてゐない人間は、縱令(たとひ)氣のついた處だけを訂正するとした所が、外にも色々の間違ひをしてゐるにちがひないのを思つたからです。基督の言葉の引用が支離滅裂であるといふやうな非難は私の深く考へねばならぬところですが、その點については私はまだ訂正の必要を感じません。今の私に取つてはあれはあれで十分だと思つてゐます。

去年の秋の末に私の「死と其の前後」がエラン・ビタルの同人によつて京都で公演されました。私はそれを見る機會を失ひました。同人諸君が十分の熱心を以てあれを演じて下さつたことを喜んでゐます。こゝで序でに申しておきたいのですが、今後私の劇を公演して下さる場合には是非とも私にお申し出を願ひます（エラン・ビタル社は勿論私に相談して下さつたのです）。

「三部曲」を出してからの私の生活にはこれと言つて格別變つたこともなく過ぎました。唯二三の所に引張り出されて作品の朗讀をした位のものです。「惜みなく愛は奪ふ」を書き上げたのは僅か半箇月ばかりの間に於てゞはありましたが、あれをあれまでに頭の中で纏めるためには少くとも五年以上の間を要しました。あれは兎も角も私が今までに達し得た思想の絶頂です。あれだけでも、然しながら、實感的に生活に引きあてゝ考へて下さる讀者があつたら多少の暗示となることが出來ることは堅く信じてゐます。然し私はあすこに安坐(あぐら)をかいて休み込まうとは思ひません。遠からざる將來に於て、私は再び論文の形で自分を表現しなほさねばならぬ時の來るのを知つてゐます。

批評をしろといつて私に作品を送つておよこしになる未知の作家が多少あります。朝日新聞の懸賞小説の選者

などになつた私の申分としては、矛盾のやうですけれども、私はどうかこの責任の重い、而して私の能力を越えた仕事から私を許していたゞきたいと願ひます。今後私は決して選者などは引受けぬつもりですから。若し作品の批評となら、專門に批評の仕事をしてゐる有力な諸君が澤山ゐますから、さういふ人にお賴みなさるのが一番いゝことだと思ひます。批評家諸君はまた未知の藝術品を世に薦むべき責任を有つて居られるのですから、喜んで需めに應ぜられることだと思ひます。作者には成るべく創作を專念にするやうに仕向けていたゞきたいと思ひます。

私の著作集は今後多分一年に二回位しか出すことが出來まいと考へてゐます。その邊が今の處私の力一杯のやうです。

私は今同志社の講演の爲めに京都に來てゐます。京都は今若葉の盛りです。樹といふ樹が各〻の種類に應じて濃淡を異にし綠に輝いてゐる樣は一つの偉觀といつていゝと思ひます。花時には地方の旅客がうるさい程流れこむ癖にこの頃になると非常に減じてしまふのは奇怪な現象といつてもいゝでせう、私のやうなものに取つては難有いことではありますけれども。今日も一人の友人と若王寺から登つて、東山の頂を新島先生の墓から將軍塚の方まで步き廻りました。雨に洗はれた空に漂ふ雲の色はもう夏でした。

志してゐる京都の研究が思ふやうにはかどりません。

（一九二〇年五月八日夜）

「旅する心」書後

「惜みなく愛は奪ふ」を發表してから又あわたゞしい月日が流れました。この論文に對する反響は、公けにされたものは私の知つてゐる範圍では石坂養平氏と米川正夫氏とがあるばかりだつた。然し個人的には非常に緊密に考へた感想を漏らして下さつた友人が可なり多かつた。私はそれを大變嬉しく思つて感謝してゐる。あの論文が出版せられてから讀み返して氣がついたことだけれども、あれは現在私の持つてゐる心持を積極的に現はした積りでゐたのだつたが、強ちさうでないのに氣がついた。あれは私自身の偶像破壞の運動であつたのだ。私の價値判斷の準備の變更であつたのだ。あれから出發して私の究極的な哲學は組み立てられねばならぬのだつた。それが十年の後に成就されるか、二十年の後に到達されるか、それは私自身にも判りません。私は兎も角あの方面に自分の生活を導いて行きたいと思つてゐます。讀者も私のこの心持を念頭においてあの論文を讀んで下さるなら、私が何故「愛は奪ふ」と殊更らな言葉遣ひをしたかゞ第一分つていたゞけると思ひます。少くとも「愛は與ふ」といふより「奪ふ」といつた方が遙かに眞に近い表現であるといふことが分つていたゞけると思ひます。十全な、中庸を外れない、毒氣の更にない、公正な考へ方などはまだ〳〵私の柄にはありません。

第十一輯の書後で、「三部曲」の中にあるナアマの歌の樂譜を「三部曲」中に挿入するやうにいつておきましたが、さうする爲めには本の定價を高めなければならないし、既に本を買つた方に樂譜だけ配附する方法についても困難があるし、樂譜の讀める人の數は割合に少數でありますから、本に一々添附した處が便利を受ける人の數は自然限られることになると思つたので、違約ですが、樂譜は樂譜として別に販賣することにして貰ひました。

方は喜んで下さると思ひます。

それは矢張り叢文閣から出すことになつてゐます。近衞君の自信のある作品でありますから、音樂に理解のある方は喜んで下さると思ひます。

「運命の訴へ」といふ創作の豫告をしておいた通り、私はこの夏材料を集めたり、考へをまとめたりした上で執筆にかゝりました。而して百頁ほど書き上げたのでした。所がどうしても氣に入りません。書いたものゝ上に薄い皮のやうなものが出來て、私の心持とどうしてもぴつたりそぐはないのです。私はその薄い皮を破らうとして相當に働いて見たつもりですけれどもどうしても破れません。私は全く失望して執筆を廢してしまひました。それから私は力が拔けてしまひました。過去の仕事までが全く無價値に思はれて來ました。頭も生理的に害はれてゐた。それも手傳つたのですけれども今度といふ今度ほど迷ひこんでしまつたことはありません。私は暫く默つてゐたいと思ひます。何時この落潮が恢復するか自分でも知ることが出來ないのです。それでその申し譯といふのではないが、已むを得ず舊稿「旅する心」を出版して貰ふことにしました。せめては伊太利の旅行記を完成してから發表したかつたのですけれども、今はその氣力さへなくなつてゐます。これから豫告はしないことにします。

一時講壇に立つことは斷念したのでしたが、一寸したことから自分に對してしてゐた約束が破れて、最近に私は可なり度々講演といふものをせねばなりませんでした。輕井澤夏期大學、玄文社主催の劇に關する講演、謠曲界主催の謠曲に關する講演、新人社主催の講演等です。これから先も三つ程果さねばならぬ約束があります。かういふことをおめ〳〵と承諾した自分が憫笑されます。

今度の輯には自分で描いた畫を入れましたが、あれは普通に意味される畫といふつもりではありません。畫にはなつてゐなくとも、少くも寫眞、殊に寫眞版よりはあゝいふものでも、見た感じが深いといふ私の平生の考へからしたことです。

（一九二〇年十月十日）

廣告文

「惜みなく愛は奪ふ」

一つ、而してたゞ一つの規範の上に生活しようとする私の欲求は、私をして私の自個を規範そのものたらしめました。この小さな論文は凡てこの立場の上に創り出されてゐます。凡てが始まる前に人はこゝから始めなければならないと私は信じます。私は私にとつて大事なこの思想を公然と容赦なき検察に供します。少くとも五年以上の歲月を折りたゝんで築き上げたこの論文は、私にある深い自信と愛着とを持たせずにはおきません。

講　演・談　話　筆　記

内部生活の現象

第一講

私はこの講演を「內部生活の現象」と題しましたが、この題は決して私の云はんとするものゝ全部を現はして居る譯ではありません。先づ私共の內部生活の現象を考察して後、私の藝術論にも觸れるつもりですが、それはずつと後のことで、只今は本論に入る前に少し序說を述べてみたいと思ひます。

西洋の諺に、文學者の話を聞く程つまらないものはないといふことがあります。若しそれが事實なら、文學者である私の話を聞くのは面白くないにきまつてゐます。第二に、私は今宗教上の信仰を失つて居りますから、皆さんの中にはきつと私の話にあき足りないと仰しやる方があるでせう。然しそれだと云つて私は自分の持たないものを取り出してお目に懸ける譯には行きませんから、それは皆さんの不運だと諦めていたゞくより仕方がありません。猶また人の意見を聞いて直ちにそれを取り容れるのは誤りですから、私の話を聞いたために道を誤る方が皆さんの中から出來るとしたら、それは誤る人が惡いので、決して私の責任ではありません。又私は學者ではないから、私の話は論理を追ひ、組織立つては居りません。だから散漫でお解りにくいかも知れませんが、それは我慢していたゞきたい。それから私は知識あるが故に話すのではないのですから、私の話から知識を得ようとする

のは無理です。一體知識といふものは自分で構成すべきもので、人から與へられて役に立つものは斷片的な暗示にすぎないのです。かつてホヰットマンが三十二三の頃大工の仕事に從事してゐた時、ある晝休に食事をしながらエマアソンの論文を默讀してゐると、その中の或る一句に刺戟せられて感激を得、それから斷然詩人として立たうと決心したといふ話がありますが、この意味に於て私の話が皆さんの知識構成に何等かの暗示を與へ、皆さんの中に沸々とわき立つてゐるものを煮えくり返すことが出來たら嬉しうございます。最後に一言しておきたいのは、私はあまり女の方に話をしたことがありませんので、いつも用語の亂暴なために失敗するといふことです。ずゐぶんお聞き苦しい言葉も出て來るでせうが、そこは我慢して聞いていたゞきたい。

さて本論に入りまして、私の話は分解より綜合へ、アナリシスよりシンセシスへとでも申すべきものでありま す。二十世紀の初期に生活しつゝある私共の内部には、何んといつても未だ十九世紀の末流が波打つて居ります。この流れとは如何なるものか、これを如何に變ふべきか、如何に導くべきかといふことは、私共の前に掲げられた大きな問題であります。私共は先づこの流れを溯つて、その水源をつきとめて見ねばなりません。

中世紀のスコラ哲學全盛時代に於て專ら行はれてゐた考察法は純理想的なもので、現世は汚れたるもの、理想に生きんとするものは須く汚れたるこの世の生活を否定せねばならぬと說きました。斯くの如き哲學と生活との分離の結果として、人間は地上の歩みを何處に向けていゝか解らなくなりました。こゝに於て、天上の夢に、おろそかにせられてゐた地上の歩みを確かにせねばならぬ。架空的な理想に到達することをのみ夢みてゐるクラシック・フィロソフィーを否定して、もつと手近な自然と人間とを如實に見なければならぬと叫んだのが、文藝復興(ルネッサンス)の運動だつたのであります。眞理は人間とそれを圍繞する外界の中にあるのだといふ立場から、冷靜な態度をもつて人間と自然との研究に沒頭し初めた結果として、今まで全く知らなかつた新世界に目覺めました。アメリカ大

陸の發見、印刷事業、火藥製造の創始、產業制度の革新勃興が相次いで現はれ、人間生活の內容が俄かに豐富になつたので、人々は「これこそ人間生活の眞相だ」と思ふやうになりました。このやうに冷靜な態度で凡てのものを硏究する科學的精神は、十九世紀から現代に流れてきた主潮の基調をなすもので、私共の頭にはこの精神が深く沁み込んでゐると思ひます。

他面に於いて科學的精神は眞理を見通すことであります。この傾向はダーウィンが進化論を唱へ出して以來益々盛んになつて、終には自然物を對象とした場合のみに止まらず、人間生活をも人間自身をも冷たい頭をもつて硏究するやうになりました。斯くの如き人間の客觀化は、文學に於ては自然主義となつて現はれてきました。自然主義に於ては自己を全然沒却して、或は自己を自分から切り離して、これを冷やかに觀察し、批評し、一度切り離した自己を文學の形式に於いて再現せしめるので、その結果として自己と自己の觀察の對象とを同時に見るといふ二元的見地に立たねばならなくなつたのであります。

心理學に於ける自由意志論と運命論との對立の如きも、自己の生活を冷やかに見ようとした結果であります。若し意志が自由なものだとすれば、私共は醉生夢死の生活からのがれて自分の道を開かうとするに違ひありません。しかも私共がいざ自分の道を開かうとする時に、私共の力では如何ともすることの出來ぬ宿命の力が、強く又冷たく私共の上にかゝつて來るのを感ぜずには居られせません。他面に於て私共は身にふりかゝつて來る不幸を宿命のためと思つてあきらめても、どうかしてこの宿命からのがれようとする強い衝動のあるのを否定するわけにゆきません。凡て斯くの如き二元的の生活內容を持たねばならぬといふ所に、現代的煩悶があり、生命の退縮が起ります。

一例を擧げれば、有島が有島を批評するとしますと、その批評はどんなに鋭くても、細かでも、有島を批評す

ることによつて有島は少しも生きることが出來ません。勿論批評の對象としては幾分固定的な有島といふものが出て來るかもしれませんが、それによつて力を得ることは出來ません。この自己批評の悲劇として最も代表的のものは「ハムレット」だと思ひます。彼は鋭い批評眼をもつてゐた。彼には透徹した理智がそなはつてゐた。しかし絶えまなき自己批評の結果は、死ぬまぎはまでその思想を實行に移すことが出來なかつたのです。斯くの如く自己批評は他人を不幸に陷れ、自分もまた煩悶に煩悶を重ねたあげく死んでしまふ位のもので、到底強く生きて力を生むことは出來ないのです。これが私の所謂世紀末の煩悶であります。デカダンの悲劇であります。

斯くの如く科學的精神が自己分離や自己批評の悲劇を生み、煩悶の種になつたとすれば、そこには何等かの誤謬があるに違ひありません。私一個の考へる所によれば、外界に向けてこそ有利な科學的態度を、自己――内界にまで及ぼしたことが間違つてゐたのだと思ひます。人間は自然を支配して居るものですから、私共は冷やかな眼で自然を凝視することは出來るにしても、この同じ冷やかな眼を私共自身に向けることは、到底不可能だと云はねばなりません。この不可能事を可能と見たために、私共は生活の力を缺き、人生は熱も光りもない灰色のものとなつてしまつたのであります。

人間は人間を生きなければなりません。人間が人間に生きて初めて人生は力に充ちた光彩あるものとなり、ここに生活の進步が起るのです。從來の科學的態度が生活を停滯せしめ、固定せしめ、退化せしむるに反し、そのまゝの自己を進めてぶつかつて碎ける所に、眞の進化的の力が見られると思ひます。私はこの講演に於て、從來人間の硏究をする場合にも行はれてゐたやうな科學的態度を棄てゝ考へてみるつもりです。

今日まで人間の眞理は智、情、意の三つに分けられるものゝやうに思はれて居りました。しかし渾然たる一をなしてゐる人の心を、さうはつきり三つに分けられるものではありません。なるほど知識の分子、感情の分子、

意志の分子といつたやうなものはあるやうにも思はれますが、果して何處までが知識の領分であり、何處までが感情の領域であり、何處までが意志の領地であるかといふことは、到底明言することが出來ません。私は斯くの如く人の心を俎の上にのせて解剖するやうな態度をやめて、私自身の見方から暫く私共の内部生活の現象を考察してみたいと思ひます。

私の立場から見ると、私共の生活には三種の動向があります。一口に生活と云つても、それはパンを食べる生活のみを意味するのではありません。さうかといつて實生活からかけ離れた純哲學的生活を云ふのでありません。「生活とは人間と自然との調節の仕方をいふ」とオイケンは云つて居りますが、私の所謂生活もこの邊の所を意味するので、時にはパンの問題に觸れることもありませうし、又心靈的方面に觸れることもあるだらうと思ひます。

――火のやうな、間隙のない燃燒の生活――といふやうなことが、この頃一部の思想家や藝術家の間に盛んに稱へられて居りますが、若し彼等の所謂燃燒の生活といふやうなものをつゞけ得るものだとすれば、何も生活の三動向などを說く必要はありません。しかし私共は果して間斷なき白熱狀態に堪へ得るでせうか。時に遲緩あつてこそ、五十年の命數を保ち得るのではないでせうか。私は生活が常に燃燒し得るものとも思はず、又これを知情意に分解することも出來ないと考ふるが故に、純一な力が如何なる方面に動くかといふことを見極めて、その力の動き方に從つて三つの動向を見出したのであります。

私共の生活を考へてみますと、第一になまぬるい生活があり、これに對して緊張した生活があります。しかしかういつたからとて私共の生活が判然と二分せられてゐるといふ譯ではなく、全體としての力の働き方によつて、それがなまぬるくも見え、緊張しても見えるのです。この一元的な力の働き方によつて生活の緊張度に差異を來

す。その差異によつて私は生活を

一、習性的生活

二、智的生活

三、本能的生活

の三つに分けることが出來ると思ひます。

然らば習性の生活とは何んであるか、智的生活とは、本能的生活とは、如何なるものであるかといふことを、これから順次に述べて行きたいと思ひます。

一、習性的生活――外界が自己に働きかける場合、働きかけて來る外界を自己がそのまゝに吸收する生活を私は習性の生活と名づけます。これは全然消極的な、最も緊張力の弱い、だらけた生活であります。私共は朝起きて洗面所に行く。そこに昨日と同じ洗面器があれば、前日と同じやうに顔を洗ふにちがひありません。習性の生活とはつまりかうした生活を云ふので、この生活に於ては外界を取り入れるばかりで、決して働きかへさないのであります。チェスタートンが「改革者は改革する點に於ては改革者であるけれど、その衣食住に於ては凡人と毫も異なる所がない」と云ひましたが、普通人の衣食のことなどは明かにこの習性の生活に屬するものであります。

今この生活の特徴を擧げて見ますと、習性の生活は反復の生活狀態であります。「女の美を薔薇にたとへたのは詩人である。しかし二度目に女を見て薔薇のやうだと叫んだのは馬鹿である」とヴォルテールは云ひました。この意味から云へば、習性の生活は人間の衷にあるフールの生活であります。又、懶惰で、活氣なく、興味を感ぜぬインディファレントな狀態も、この生活の特徴であります。

習性の生活は私共の生活のかなり大きな部分を占めて居ります。又私共の生活から習性の生活の分子を除いたら不便で仕方がないでせう。屋外に育つた犬の子を急に座敷の中に入れた時のやうに、若し習性の生活がなくなつたら、今まで安定の狀態にあつた凡てのものが皆不安定になつてあぶなつかしくて煩瑣で仕方ないでせう。

二、智的生活――習性の生活に於ては無意識に外界を吸收してゐたものが、智的生活に於て初めて內界と外界との間に意識的交渉が起るのであります。それ故若し外界が內界にぶつかれば必ず反射作用を起します。そして習性の生活に於て全然その征服の下にあつた自然に對して反抗の戰ひを挑むやうになるのであります。知識と道德とは智的生活によつて起されます。一例をあげれば、今この卓上のコップに手をぶつけて、ひつくりかへすとします。幾度もこの經驗を重ねて行く中に、私共は手をコップにぶつければ、ひつくりかへるものといふことを知ります。これが知識であります。所が、も一歩進んで、手をぶつければひつくりかへるものなるが故にコップにはそつと手をかけねばならぬといふことが分ります。これが一つのプリンシプルであり、この原則の集まつたものが道德なのであります。

智的生活は經驗、省察、努力の三要素から成つて居ると思ひます。卽ち外界に對する反射が經驗であり、その經驗の意味を知らうとすることが省察であり、省察の結果どうしたらいゝだらう、どうせねばならぬかといふ原則によつて、行爲を律するのが努力であります。それ故智的生活は努力の生活と云ふべきであります。敎育は數百代の昔から代々の祖先の經驗して來た所に基いて、如何に外界に當るべきかといふことを敎へるのでありま す。道德は實に智的生活の所產で、これなくしては人間の生活も禽獸と何んの選ぶ所ないものになつてしまひます。私共の生活はこれあるが故に大した間違ひなく、平和な狀態を續けることが出來るのだと思ひます。

然らば私共はこの智的生活までの生活で滿足の出來るものでせうか。私はこれに少しく批評を加へて見たいと

思ひます。第一に智的生活に於て理性は過去の經驗を集めて分類する働きをなすので、新生活に入つた時、新事實にぶつかつた時、新しい經驗の起つた時、役に立ちません。又理性の生んだものは固定的法則のみですから、それ以上に緊張した力が加はらぬ限り、生き、動き、進むことが出來ないのであります。科學はこの智――理性によつて凡てを解決することが出來、又人間を考へることが出來ると思つて居りましたが、その結果は凡てをただ統計的に研究するばかりで、人間自身動き進むことが出來なくなつたのであります。これが私の不滿とする第一の點であります。

第二に私の不滿なのは、智的生活が二元的であるといふことであります。卽ち理性は自己にまで科學的態度をとる故に、前に科學的精神の所に於て詳說せる如く、遂には自己の內部に自己對象を見るの結果に陷り、智より見たる人と、人より見たる智との間に割れ目が出來るやうになるのであります。

「汝の過去に犯せる罪過は何時までも汝を苦しめるであらうと因果論者は云ふ。しかし現在を定めるものは過去ではなく、却つて現在が過去を定めるのである。現在が善に集中せる時には過去の罪過は小となり、現在の墮落せる場合には過去の惡は益〻大きくなる」とメーテルリンクは云つてゐます。過去の經驗は力强いものです。それに基いた理性の生活もなくてならぬものにはちがひありません。しかし私共は現在の生活の緊張度如何によつては、この力强い過去の經驗をも又未來をも支配し得るのだといふことを忘れてはなりません。

ロダンが「智は美を創造することが出來ぬ」と云ひました。智は手垢ですりきれた古物のやうなもので、それだけでは何物をも創造することが出來ないのです。そんなら創作とは如何なる力によつて成就せられるか、第一義的經驗とは何んであるか、單に整理と平和とに終つてゐた生活がどうして創造と進步との生活に變ることが出來るか、こゝに於て私共は第三の本能的生活に入らねばならなくなります。

三、本能的生活——本能的生活とは自然に對して人の方から働きかける生活のことです。その力源は自己であり、自己對象即ち自然對象といふことになるのであります。自己對象の經驗は生きた結果から生れるのではなく、自己が生きるその事自身なのであります。この邊の所は私の言葉に盡せませんから、若し詳しく知りたいと思ふ方は、西田博士の「純粹經驗」に關する論說を參照なさつて下さい。

エレン・ケイの著せるベルンハーゲン女史の傳の中に「ライフとは死んだ反復（レペティション）ではなく、洞察（インサイト）から洞察に飛躍する發達そのものだ」といふ句があります。私共の自由はこの洞察を通じてのみ得られるのでありませう。

自己の生活は無類です。多數の經驗の共通點を集めたのが智なら、本能的生活に於ける經驗は純一の創造となります。純粹な經驗は實感的です。智は先祖と隣人の經驗から割り出したものですが、本能生活に於ける經驗は自分自身の實感そのものなのであります。本能的生活は努力によつてなされるのではなく、必至の勢でなされるのです。謂はゞ趣味と云つてもいゝ、道樂と云つてもいゝ。智的生活に於ては「ねばならぬ」と迫り來るものがある故に、時には犧牲獻身の努力をせねばなりませんが、本能的生活に於ては自分勝手にやらずには居られなくなつてするに至るのですから、よしそれは外見的には犧牲に見えても、獻身に見えても、その人自身にとつては犧牲でも獻身でも況して努力でもありません。却つて我儘勝手にしはうだいのことをしてゐるのであります。岐路に入るかもしれませんが、私共の生活は何を基調にして導かれてゐるのだらうと問うて見ます。私共は平和幸福ならんがために活動してゐるのである。より高くより深くよりよき意味に於ける幸福を求めてゐるのであると云へば立派に聞こえます。しかし私共は共處に止まるべきではありません。時には幸福を棄てゝも進歩を取らねばなりません。幸福と安全と便利とは智的生活の目的とする所で、進歩は本能生活に屬するものです。しかも進歩は幸福よりより根柢的なものです。理性の生活は又如何に過去の經驗を應用するかといふ點に於て役に立つもので

す。所が本能的生活に於ては、時には智的生活の事實とコインサイドすることもあるでせうが、それは偶然の事で、屢々平和を破つても、幸福を虐げても、進歩しようとするのであります。

話を後にもどして私は前に運命と人間とを別々に考へるのは十九世紀の誤れる科學的態度のためだと申しましたが、そんなら私の哲學に從つてこの二つのものは一元的に考へられるのだらうかといふ疑問が起つてまゐります。一體人間にはより高き生に進まうとする本能があります。この本能は私共の肉體を永續せしめんとする要求を生みます。肉體ばかりではなく自己をも自己と交渉をもつてゐる外界をも永續せしめんとします。肉體をつゞけるためには、食物を取つたり藥を飮んだりまじなひをしたりします。自己保存の要求は信仰となり哲學となつて、魂の永存を說いたり實在との結合を論じたりします。第三に於ては友情、戀愛、藝術などによつて自己を囲繞する人との聯絡をなるべく長く殘さうとします。しかしながら、これらのものは結局私共の欲念を充たさうために、運命をごまかしてゐるのではないでせうか。醫藥も人間の壽命を延ばす力をもつて居りません。哲學も畢竟一つの心に浮んだ概念に過ぎません。その概念が永續すると說くなら、それは信じてゐるものにのみ眞理なので、到底萬人を首肯せしむることは出來ないでせう。愛も藝術も終には亡び去つてしまふでせう。から冷かに私共の存在を考へてくると、何だかはかないやうな氣もちがします。

物理學上の第一原因は不明ですが、ある一つのエネルギーによつて起された一つの運動が、池の眞中に落された石から波紋がだん〳〵に水面に擴がつてやがてもとの靜止狀態に歸るやうに、やがて元の平均に復すると見ることが出來ると思ひます。物理學の法則は新しい力の加へられることを豫想しないで、或る原因によつて起された力の不平均が幾百萬年かの後に波紋の死に失せたあとの水の面のやうに空々寂々たるものになるといふ假定の上にたてられてゐるのであります。この見地よりすれば、冷酷なる運命の力は萬物を滅亡に導き、遂には運命自

身すら自滅して無に歸するやうに思はれます。

そんならどうせ空に歸すべき我々に、何んで生きんとする本能の必要があらうといふ疑問が起ります。一體生きるといふことは亂雜な關係を一番正しい關係に歸さんとすることです。本能的生活に於て現在の智をも道德をも破るのは、よりよき調和の狀態をつくり出すためであります。そしてこの調和が完全な關係にまで進む場合には、私共は靜止するにちがひありません。さうすれば私共の行く所はつまり自然の行く所と同一なのであります。

若し運命の行きつく所が靜止であり滅亡であるならば、自ら手を下して自殺する者こそ運命に同行するのではないかと、お思ひになる方があるかも知れません。しかし運命の力に生み出されて自然に生き且つ死すべきさだめの私共が、故意に自ら生命を斷つといふことは、全體として調和に進みつゝある關係を破り、運命の力に反抗することで、つまり運命の行きつく時を遲くすることになるのであります。

私共は運命の力の下であると申しますが、同時に私共は運命の力の上にあつてそれを支配することも出來るのであります。私の說かんとする一元的見方は、生活を緊迫せしめ、自己對外界の力となつて生活をよりよくすることが出來る――つまり運命を支配する所まで行くのであります。

第二講

前回に於いて私は、私共の生活に三つの動向が竝存してゐること――生活の緊張度によつて私共の生活を習性の生活、理性の生活、及び本能的生活の三つに分けることが出來ることを述べ、その各生活を簡單に說明しましたが、今まで生活を主體にして考察してゐた人は、主に私の所謂第二の生活動向卽ち智的生活までを考察してゐたと思ひますので、それは委しく云はないことにして、今日は第三の本能的生活の內容に立ち入つて少しく詳論

してみたいと思ひます。

本能的生活は全然新たなるものを創造する生活であります。例をドフリスの突發變生說(ミュウテーション・セオリー)にとつて見ませう。一體ミュウテーション・セオリーはドフリスの發見にかゝるものゝやうに思はれて居りますが、實際に於てはダーウィンの進化論の中にも、その萠芽とも見るべき說が含まれてゐるので、たゞダーウィンの後繼者が、進化の途次、外界に適應するために新しき種が徐々に生じて來るのだといふ點にのみ力を注いだために、いや新種は思ひがけない時に突發するものだと稱へたドフリスは、ダーウィンの一派に屬さぬものゝやうに思はれて來たのでありま す。彼に從へば、變化は順次に寄せ來るのではなく、ある場合には突發的に生れて來るといふので、月見草は他の新種に移らんとしつゝある代表的な植物だとして居ります。試みに一つ花からとれた實を同じ環境の中に育てて見ます。注意して見て居ると、一つ〳〵の芽が同じ親から生れて公平に育てられた兄弟とは思へぬ程、葉や花の形に著しい變化が見られるのであります。これは月見草の內的本能の現はれとでも申しませうか、とにかくめい〳〵の月見草はよりよく、より高くならんがために、樣々な試みをなしつゝあるのが觀察されます。

人間にあつてもこの強い要求なり本能なりは、一人々々の人間の內部に、積極的に外界を創造しようとする衝動となつて現はれてゐます。獨り人間のみに限りません。生きとし生けるもの凡ての中に働いて居ります。或るものはこの力を神と云ひます。道と呼ぶ人もありませう。從來の人は人間の內部に働けるこの力を愛と呼んで來ましたから、假りにこの愛といふ名稱を借りませう。

そんなら愛とは何を意味するのでせう。物事を概念的に大ざつぱに考へることに慣れた私共は、愛といふものをもコンヴェンショナルに考へて居りはしないでせうか。そして私共の求めてゐる或る物から離れた結論に陷つて居りはしないでせうか。

パウロはコリント書の中に「愛は惜みなく與へ」と申して居ります。成程愛は與へる如くに見える一面をもつてゐるかも知れない。しかしパウロの捕へたのは愛のごく表面的な現象で、これを以て愛は放射的エネルギーであるとして、その假定の上に利他的哲學なり道德なりをたてるのは謬つてゐると思ひます。私に云はせれば、愛は惜みなく奪ふものです。私の小さい愛の經驗は私にかう敎へてくれます。愛の外面的表示は放射的なると同時に、その實際は吸引する勢力です。惜みなく與へるやうに見えるのは假象で、實は惜みなく奪ふ力です。こんなデリケートな問題に立ち入ると、言語に表はしがたいのが悲しくなります。

普通にいふ利他主義は人のためにする行爲を云ひ、利己主義とは己れのためにする行爲そのものを指すのなら、それで差し支へないでせうが、人にいゝ事をしてやらうとする心持、自分にいゝ事をしようとする心持を、利他と云ひ利己と呼ぶのは間違つてゐると思ひます。前の心持を愛他と云ひ、後者を愛己と云へば、やゝ十分に私の心持を現はすことが出來ます。私はこの愛己主義をとるのです。

今かりに私が私自身に「お前はお前自身を愛するか」と問うて見ます。私は端的に「イエス」と答へることが出來ます。「そんならお前は自分を愛する如く他を愛してゐるか」と訊かれた時、私は躊躇せずには居られません。他人を愛するには條件があります。「私は私を愛する故に他人を愛す」といふのです。若し茲に「お前は他人を愛するか」と問かれて、「然り」と直言し得るものがあつたとすれば、それは神か、でなければ僞善者です。人間は本然的に自己を愛する程他人を愛して居ないのです。凡てはこの事實から出發せねばなりません。

「お前はどのやうにして他人を愛するか」と問うて見ます。私は自分を愛し得る故にのみ他を愛します。若し自分に愛着がなければ自殺してしまふより外ありますまい。もつと切實に云へば、私は他が自分の內部に攝取せられ同化(アシミレート)せられた時にのみ他を愛することか出來ます。しかも攝取せられた他は、自己にして他にあらずではな

いか。私は畢竟自分を愛するより外ないのです。

キリストは他愛主義を極端に說いたやうに思はれてゐますが、實は決してさうでありません。「汝の欲する所を他人に施すべし」とは自分の生活その物を他に行へとの意味で、純然たる愛己主義の現はれです。「汝の欲せざる所を人に行ふ勿れ」との孔子の敎へも同樣に解することが出來ます。

私が私自身を愛してゐることは眞實です。決して僞善ではありません。しかし私は私自身をどれ程深く、どれ程よく愛して居るでせうか。これには端的に答へることが出來ません。從來ヒューム、ホッブス等によつて稱へられた利己主義は、功利的な立場からのみ考へられて居りました。生物發達の狀態を考察して見ると、生物はその自己保存上他を排し自己の利を第一に考へねばならなかつた、生物の一である人間に於ても同じことであるといふ原理の上に、スペンサー等の利己的功利的倫理は立てられてきたのでした。この意味に於ける利己主義は、自己保存の本能にのみ重きをおいて、如何に私自身をよりよくせんかといふことをおろそかにした點に於て缺陷を持つてゐます。しかしエゴイズムの定義をさぐつて見ますと、自己の幸福のために自分自身で自己の生活を完成せしむるといふ意が明かに現はれて居ります。この意味に於けるエゴイズムは、私の所謂愛己主義に近いもので、單に小さな自己の幸福を目的にするのではなく、自己をおし擴げ、自己の內容を充實せしめ、より高くより深くよりよく生きようとするものであります。この內部より溢れて來る强い要求に驅られて進むのが本能的生活だと思ひます。

アミイバがその觸指を伸ばして食物をかゝへ込み、やがてそれを自分のものとしてふくれ擴がり、終には幾つにも幾つにも分裂するやうに、私共は外界に愛を投げ與へることによつて生長するのではなく、外界を取り入れて自己に同化することによつてこそ生長することが出來るのであります。例へば私が一羽のカナリヤを飼つてゐる

とします。私はそれに美しい籠と新鮮な青菜とやむ時なき愛撫を與へるでせう。他人はそれを見て愛は惜みなく與ふるものだと云ふかもしれません。私はカナリヤを愛するが故に惜みなく與へました。しかし止つて考へてみれば、私がカナリヤを愛すれば愛する程、カナリヤは自己と同化してきます。二人の間に交感が生じてきます。私はカナリヤを自分の内部に取り込んで、我自身カナリヤになりつゝあるのです。卽ち私はカナリヤであり、私はカナリヤを生きるのです(I am a bird. I live a bird.)それ故、前に私がカナリヤに與へたやうに見えた美しい籠も、みづ〳〵した青菜も、やむ時なき愛撫も、實は私自身に與へてゐたのです。他人が私の愛を與ふるものと見たのは現象であり、姿であつたので、內的に私は私自身に與へてゐたのです。カナリヤに投げかけた私の愛と、私の內部に同化せられ、私自身のものとなつたカナリヤとは、錦の縱と横との絲のやうにしつくりと織り込まれて、そこに美しい模樣を描き出すでせう。愛が深くなればなる程、三つの世界の密接の度が强められるのです。

愛は相互的である、與へ合つたものに潤されて一種の嬉しさを感ずるものだと從來の人々は說きました。しかし私は、愛は一方だけで成立するものだと思ひます。ダンテのビアトリチエに於ける愛は、打ちあけぬ片戀でありました。ビアトリチエは幼い折りにふと瞳を交はした少年の存在を忘れてゐたかもしれません。それにもかゝはらずダンテの彼女に對する憧憬は、「神曲」となつて生れ出て來たのです。それ故、愛の本質としては相互的なるを要しません。假令對者は嫌つてもはねかへしても、自分は何處までも對者を奪ひ取つて、自分のものにしないではおきません。

或る人は他人を愛するが故に自己を殺してなほ悔いません。自己を殺して何んの自己ぞやとおとがめになる方があるでせう。しかし私の謂ふ愛とはなまやさしいものではありません。容赦のない、きびしい、烈しい力です。そしてこの力の內部に働いた時には、條件も何も考へずに、たゞ他を取り入れんとするものです。キリストは愛

の人であつた。彼は強く內部に燃える愛の力をもつてゐた。彼の絕え間なく奪はんとする愛の力を、彼の肉體は如何ともすることが出來なかつた。彼の烈しい愛の力が凡てのものを抱き込んだ時、彼は十字架を負うて我とわが肉體を破らねばならなかつた。肉は自己を築く機械の一つではありますが、あまり大事なものではありません。自己を生長せしむるためには時には甘んじて之を破らねばならないのです。

から考へて見ますとキリストの生涯の何處に義務があり、犧牲があるでせう。この境地に於いては犧牲とか獻身とかいふやうなものはありません。愛の生活に犧牲とか義務とかいふものを要求するのは、愛の眞味を解せざるものゝだぼらにすぎません。愛のために身を犧牲にするものは、犧牲になること自身に歡喜を見出して居るので、その行爲に對する他人の稱讃はお景物のやうなものです。たゞ眞の愛を見出さぬ者はこの歡喜が分らないために、さぞ苦しいだらう、他人のために身を殺すなんてえらい事だと、飛んだ同情をよせたり、感心したりします。

この事に關して私が嘗て或る雜誌に書いたものがありますから、少し讀んでみます。

――この事實を思ふにつけて每時でも私に深い感銘を與へるものは基督の短い地上生活とその死である。無學な漁夫と稅吏と娼妓とに圍繞された、人目に遠い、三十三年の生涯にあつて、彼は比類なく深い善い愛の所有者であり使役者であつた。彼が與へてやかまなかつた事實は、如何に自己の擴張の廣大なのに滿足し、その自己に與へることを喜びとしたかを、證據立てるものである。やがて彼が、肉體的に滅びねばならぬ時が來た。彼は苦しんだ。それに何んの不思議があらう。彼は愛の對象を、眼もて見、耳もて聞き、手もて觸れ得なくなるのを苦しんだにちがひない。又肉體の亡失そのものを苦しんだにちがひない。又彼の愛の對象が彼ほどに愛の力を理解し得ないのを苦しく思つたにちがひない。然し最も彼を苦しめたものは、彼の愛がその攝取の事業を完成したか

否かを迷つた瞬間であつたであらう。然し遂に最後の安心は來た。而して神々しくその肉體を脚の下に踏みにじつた。

彼の生涯の何處に犧牲があり義務があるのだらう。世の人はいふ、基督は有らゆるものを犧牲に供し、救世主たるの義務の故に凡ての迫害と窮乏とを敢へて堪へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼にならつて犧牲獻身の生活を送らなければならないと。私は私として彼の我等に遺した生活をかく考へることはどうしても出來ない。基督は與へることを苦痛とするやうな愛の貧者では斷じてない。基督は私の耳に囁いて云ふ「基督の愛は世の凡ての高きもの、淸きもの、美しきものを攝取し盡した。眼を開いて基督の所有の如何に豐富であるかを見るがいゝ。基督が與へ、施したと見える凡てのものは、實は凡て基督自身に與へ、施してゐたのだ。基督は何をも失はない。而して凡てのものを得た。この大歡喜をお前も亦味ふがいゝ。基督のお前に要求する所は唯この一事あるのみだ。お前は僞善者を知つてゐるか。自己に施しせず、他に施しせるものを僞善者といふのだ。自己に同化しない外物に對して浪費するものを僞善者といふのだ。浪費の後の苦々しい after-taste を、强ひて笑にまぎらすその歪んだ顏付を見ろ。それが僞善の肖像だ」と。——

私は嘗て學生時代に、又在米時代に、人間を知らうとして文學書をあさつたり歷史を讀んだりしましたが、さつぱり人間といふものが解りませんでした。歸朝後つゞけざまに不幸に遭遇して、とう〳〵文學に飛び込んでしまひました。そこで私は雲をつかむやうに漠然とした文學書を棄てゝ、私自身を內觀し初めました。ところが、見れば私の內部には祖先より外界より鎖につながれて引つぱり込まれてゐる種々雜多な人間がうじや〳〵してゐました。私の小說に現はれて來る人々は皆私の內に見出された人間です。自己を內觀し、自己を愛することを知つて後に、人の傳記を讀み、歷史を調べ、人を見る時に、それは悉く我の立場から見るために批評する所ではな

く、心からアップリシェートせずには居られません。

斯くの如く私は私を愛し、よく深く愛するにつれ、何を愛し、何を棄て、何を取り入れたらいゝかといふ問題が起ります。こゝに愛と憎みとの念が強くなつてきます。私は愛すべきものは愛し、憎むべきものは憎むがいゝと思ひます。さうしたら世の中はもちつと簡單になるでせう。そして人間世界はよくなりたい人と、どうでもかまはない人との二つに分れ、その何れかゞ榮え、何れかゞ亡びるでせう。

ところが、私共は深く愛するにしたがつて、憎むことの如何につらいかといふことを知ります。憎むのは苦しい。どうかして愛することは出來ないであらうかともがく結果、私共は今まで憎いと思つてゐたものゝ他面に愛し得る方面を見出します。そして遂にはあのホヰットマンのやうに凡てをくるめて自己の中に取り入れ、主客の合一した自己の世界を成立させることが出來るのだと思ひます。かゝる生活に於ては過去や未來は何んでもない、現在こそ凡ての過去の總價にも代へがたい程尊いものなのであります。この生活に於いては現在からよりよく、より淸く、より美しきものを攝取することによつて、現在そのものよりよく、淸く、美しきものとせんがために全力を盡すので、過去や未來を夢みてゐる暇なんかありません。かゝる立場から過去の歷史を讀む時に、歷史をつくるものは現在の自己の頭なり、生活なりであつて、歷史は決して過去の記錄ではなくなります。未來も亦自分の現在に取り込んで考へた實體的眞實の未來になります。それ故現在に於ける自己の向上は、過去をも又未來をもよくし、自己の充實は人類の未來をそのまゝに希望に充ちたものにすることが出來るのであります。

第三講

前回に於いて私は、第三の生活動向卽ち本能生活を論じ、私共の內部に在る愛の現はれ方と働き方に就いて語

りました。今日は本能生活の實際の現はれ方を示す一例として、私の藝術論に入る前にこの前に云ひ殘した愛の問題を少しく述べてみたいと思ひます。

私が殊更に私の論ずる所を愛己主義と名づけて利己主義と區別したのは、愛と利との間に非常な間隔があるからです。一體愛は大事にすることであつて利することではありません。それ故己れを愛することは決して我利を貪ることにはならないのであります。若し私共が寶石を大事にする如くに私共自身を大切にしたら、私共の自己は美化せられて益〻光を増し、それと同時に自己と外界との關係も美しく調和せられるやうになるでせう。これにひきかへ、私共が自己を蔑ろにする時に、私共の內部に自己分散が起つて來て、何物にも代へがたき寶玉をも犬や豚に投げ與ふるが如き恐ろしい結果を生むのであります。自己を眞に愛し得ないものが、どうして他を愛し外界を愛し得るでせう。私共は自己を蔑ろにして外界に向ふ時、未來永劫まで癒やされぬ傷を殘さねばならないのであります。

マックス・ノルドーが文明病を論じた所に、戀愛小說を讀んで、すぐそれに同化せられた青年は、自分の持つて生れた觸角が中途から曲つてしまつてゐるのに氣が付かないで、丁度同じやうに曲つた觸角をもつた女と戀に陷つて結婚する、然るに觸角はさういつまでも曲つたなりで居ないから、結婚後暫くたつとお互にどうしても合はなくなつてしまふ、かうして家庭の不和は起るのだといふやうなことを申して居りますが、自己を愛することを知らず、又これを育てんとする眞實な要求から動くのでないものは、戀愛のみに限らず凡ての外界との關係に於て、斯ういふ風な恐ろしい結果を生むのであります。

凡ての倫理は自愛を基として生れて來なければなりません。勤勉に就いて申しませうなら、自己を眞に愛するものは自分にそぐつた仕事を見つけざるを得ません。自分にそぐつた仕事を見出す以上は、お前は勤勉でなけれ

ばならぬと說かれないでも、どうしても勤勉ならざるを得なくなります。この故に私は倫理の先生か、勤勉なれと說く前に、お前に最も適した仕事を見つけよと敎へ、又さういふ風に敎へ子を導くのが第一の緊要事だと思ひます。近頃行はれてゐる均一的な敎育が效の少い所以であります。

自己を愛し、自己を知るものは他人の偉大を痛切に感じることが出來ます。私共が心から大事にしてゐる自己を釋迦の如き大天才と比較する時に、私共はその天才の偉大に驚き、省みて自己の如何に小なるかを知ると同時に自ら謙遜ならざるを得なくなります。釋迦はその事業のために、妻子を棄てました。しかしその代り幾十萬の人を救ふことが出來ました。彼の如き天才は多少の犧牲を他に拂はしてもいゝのです。しかし省みて私は私の事業のためにさう易々と妻子を棄てることがどうして出來ませう。世の中には隨分無反省に、他人に回收の出來ないやうな犧牲を拂はして平氣で濟ましてゐる人があります。それは本當に自己を愛せず從つて他を愛することが出來ないことから牽き起される僻事です。自己を十分に愛し檢察して見るならば大抵の人は本當の意味で謙遜ならざるを得ません。かつてロダンがギリシヤの彫刻の破片を見て書いた文章を讀んだ時、彼の態度が如何にもテンダーであり、ハムブルであるのに感心したことがあります。ロダンの如き自愛に徹した藝術家なればこそ、眞にギリシヤ彫刻の美を解し、その前に已れを低うすることが出來るのでせう。謙遜の德は自己を省みて、より高くならんがために一段を登る行程の如何に苦しきかを知り、より高き所にある偉大なるものゝ前に自ら頭を下げることであります。

扨て私の藝術論に入りまして、一體藝術とは何んだらうと問うて見ます。從來藝術とは美を扱ふものゝ意に解されて居りましたが、私の所說に從へば、創造する凡ての働きは藝術であります。永井荷風氏のずつと前に書いた文章の中に、藝術はアイディヤではなくて、そのアイディヤの表現如何である。帆柱にすがつて夕暮の美景に見

入る水夫は、自然の詩境を味つてゐるとしてもそれを表現し得ない點に於て彼を詩人といふことは出來ないといふやうなことが論じてありました。しかし私の立場よりすれば、その水夫は詩は作らなくても彼の胸に或る美景が創造せられてゐる以上、彼を藝術家と稱へることが出來ると思ひます。かう考へて來ると、今まで藝術家と考へられてきた人々のみを藝術家と呼ぶことは出來ません。史上に不朽な事業を殘した英雄も學者も、――カール・マルクスや、クロムウェルや、ワシントンの如き人々も藝術家と云はねばなりません。私共は創造的生活をしたその瞬間に、そのまゝにして藝術家となることが出來る、又その時の生活はそのまゝに一個の藝術なのです。

少しく智的生活とこの意味に於ける藝術との關係を申し上げませうなら、堂々たる學者教授連でも、單に多くの古書をあさつて、それを re-arrange するに止まるものは、普通卑しんで使はれる意味の勞働者に過ぎません。これに反して無敎育な一勞働者も、請負人から云ひつけられた仕事に自分の個性を刻みつけたものは藝術家であるといふことが出來ます。つまり第二の生活動向のみによつて動くのは、その仕事が如何に高尙に見えても藝術と稱へることが出來ないけれども、一度第三の生活動向に入つた場合には――私共の內部に愛の働く場合には、如何なる生活方法であれ、その生活それ自身が藝術なのであります。

私共が生きて行くといふことは、外界を如何にして自己の中に取り入れようか、又如何に自己を云ひあらはさうかといふことであります。自己を發表するといふ點からは、殘酷な戰爭も、やさしく美しい細工物も、その手段の一つです。この自己表現に使ふ道具をシムボル――表象――といひます。或る者は文學を通じて自己を表はすでせう。一つの建築の中にも立派な自己表現が認められ得る場合があります。何によつて自己を表現するか、その表現の道具によつて藝術は廣義の藝術と狹義の藝術との二つに分れます。

「みどりいろの悲しみ」と云つた風に、神經質な詩人はなるべく實用から遠いシムボルを用ゐて、出來るだけ純

な自己を表現しようとします。同じ美しさ快さを現はすにも、味覺や觸覺の如き實用と關係の近い官能に訴へますと、それだけ感じが濁つてきます。それ故詩人は味覺や觸覺などよりずつと實用的でない視覺に訴へて、極度まで純化せられた感情を現はさうとするのです。しかも耳は眼より以上に實用から遠い官能でありますから、音樂は最も純化せられた藝術であり、音の關係であるメロディーやハーモニーは、作者の心持をそのまゝに聽衆に傳へるものです。この意味から云へば私共の書いて居る小說は、實用的な道具を澤山使はねばならないから、蕪雜な表現法と云はねばなりますまい。これに反して詩人の所謂「みどりいろの悲しみ」はずつと純化せられた、純粹な表現とでも申しませうか、それだけ敏感な讀者の胸にはそのまゝの響を與へるにちがひありません。前述の創造的活動全體を廣義の藝術とすれば、何等かの實用を離れたシムボルを借りて自己を表現せんとする創造的活動は狹義の藝術と稱すべきでありませう。而して私の云ふ狹義の藝術なるものが、現在一般に用ゐられてゐる藝術と云ふものに吻合します。

　然しながら何處までが廣義の藝術であり、何處からが狹義の藝術に屬すべきものであるかといふことは、私共の明瞭に區別し得る所でありません。文展に何故工藝美術品を入れないのかといふ議論が一部の論者の中に戰はれましたが、實際工藝品と美術品との間にははつきりした區別をたてることが出來ない。卽ち實用を目的とする工藝品の中にも立派な藝術味があり、藝術品の如くに思はれてゐる美術品の中にも藝術品とは云はれないやうなものがあるのであります。强ひてこの二者の間に區別を立てようとすると、私共は先づ藝術とは何んぞやと問うてかゝらねばなりません。藝術とは美を現はすものだといひます。然らばその美とは何んでせう。古來多くの學者はこの問題を考へに考へて、何とかこぢつけの理窟を立てるために一生を空費しました。美とは我々に快感を與へるものだと或る學者は云ひました。美は直接利害關係のないもの、倫理學上の德と結びつくべきものだと云

つた人もあります。生活に餘裕の出來た時、頭を休めるために空想的に作り出したのが美だと說いた人もあります。この問題に關しては秋の講演の時に詳論するつもりですが、兎に角私の說に從へば、藝術の對象は美に非ずして、創造なのであります。

話が非常に抽象的になつてきましたから、今度は少し私の說を實際問題――近頃盛んに論議せられてゐる婦人問題やデモクラシーの問題にあてはめて考へて見ようと思ひます。二つの考へ方が婦人の問題に關して我々の間に戰はされて居ると思ひます。その一つは昔ながらの三從の敎を固守して女の能力を男子以下のものと假定し、女は如何なる場合にも男の指導に依賴すべきものと說き、少しでも毛色の變つた女を極端に排斥して、古きまゝの婦人の生活を要求してゐます。その二つは之に反して社會生活、委しく云へば經濟狀態や家庭の考へ方の全然一變せる今日、獨り女をのみ昔のまゝに止めておかうとするのは無理である。若し現在女の能力が男に劣つて居るとすれば、それは長い間の男性の壓迫の生んだ結果で、生活の改造のためには吾人は進んで眠れる女の頭腦を啓發して、男と同じ高さに引き上げねばならぬ。男に隷屬せる今までの境地から女を救ひ出して、獨立せる一個の存在物たらしめ、男と均等の能力を恢復して、社會生活の仕事を共有せしめねばならぬ。所謂職業婦人がその結果として生れるのは當然であると主張します。小さい區別を無視して考へると、婦人に對する世論の立場は大體この二つの意見によつて代表させることが出來ます。私としては第一の見方には全然賛成することが出來ません。第二の見方には婦人覺醒の過程として賛成することが出來ますけれども、それが結論であると考へることは到底できません。

第一の論者から云ふと、現代の婦人が覺醒しかけた結果として、自由奔放な思想が婦人の生活に加味せられ、或る方面の人達の間には曾て見られなかつたやうな様々な缺點やふしだらが見出されるといふことは、いまはし

い事のやうに考へられるでせう。と云つて、その事あるが故に、女は矢張り昔のまゝの女なれと說くのは間違つてゐると思ひます。數千年の長い間、壓迫に壓迫せられ、束縛に束縛を重ねられて來た婦人達が、その縄目のゆるみかけて來た時にむほんを起すのは當然のことであります。これ等の婦人は先祖の代から積りに積つた重荷の下に長く耐へてゐた鬱憤を晴らさうために、意識的にか或ひは無意識的にか思ひきつて復讐しつゝあるので、過渡期に於ける氣の毒なマーティアといふべきです。唯私はかうした根強い復讐のためにかけがへのない一生を空費し浪費せねばならぬ人々の運命を悲しく思ひ嘆くものです。一方には又積極的に覺醒しようとする人々の間に、男女に能力の差別はない、男のする事は何んでも女が爲し得るし、爲さねばならぬといふ意氣込みで突進する人人もあります。さうしてその人々は男子の干與する政治なり、生產なり、敎育なり、事業なりに入つて行かうとしてゐます。それは明かに惡い傾向ではありません。然しながらそれは女子に對して結局非常に不利益な活動であらねばなりません。私は女子が男子の隷屬者でないと思ふが故に、女子は男子と同じ水準の上で女子獨得の地步を占むべきものだと思ふが故に、以上述べて來た二つの態度の何れにも結局同意することが出來ません。ルイス・モルガンの說を待たないでも、過去の或る時代に於て女子が男子よりも優秀な位置にあつたことは公定の事實です。しかし長い間に男子は或る若干の理由から、漸次女子を壓制征服して、男子を基調とした社會生活を造つてしまひました。これが現在の狀態です。それ故今日の社會はその活動のどの方面を考へてみても、全然男性的です。男子のアイディヤに基いて出來上つてゐます。だから女子が現在の社會活動に入り込んで行つたとしても、その活動は何時でも男子の能力なり體力なりに都合のいゝやうにそして女子には不都合なやうに出來上つてゐるのです。卽ち女子は出發點からしてハンディキヤップを附けられてゐることになります。例へば政治的の活動に女子が參加するとしても、その色彩を多少變化することが出來ませうけれども、女子が或る程度まで男性化する

ことなしには、今のまゝの政治にあづかることが出來ない結果になります。それはとりもなほさず違つた形式で男性の征服に甘んずることなのです。古への女性に課せられた三從主義とは一見非常に異つたやうに見えながら、その實質に於ては相去ること遠くないと私は信ずるものです。

そこで私は女子の天才に、換言すれば女子獨得の本能的生活に女子の解放を期待せずには居られません。天才とは自分自身を明確に知りぬき、さうしてそれを明かな形で表現し得る事です。女性に就いて云へば、女子が今まで男子から蒙つてゐた凡ての感化影響から全然獨立して、女性自身として考へ且つ行ふことです。これが本當の女子の覺醒であり解放でなければなりません。女子の固有の立場から人類の生活を觀察し、解決することです。そこには必ず今の我々の有つてゐる生活樣式とは面目を異にした姿が現はれて來るべき筈です。女子の立場からは、今あるやうな政治、信仰、事業、藝術は、全く形の異つた或る他の樣式によつて充たされるべきものであるのに相違ありません。それが如何なるものであるかは、私共男性が如何に摸索しても到底發見し得ない所のものです。その發見を私は女子の天才に待ちたいと思ふ。かくして男子の立場からの生活樣式と、女子の立場からのそれとが調和結合したその上に人類の生活が建て上げられた時に、初めて男女は同じ水準の上に同じ權利と義務とを共有して、完全な生活を建設し得るものと私は信じます。

だから私の女性に望む所は、女性の中から眞の天才が現はれることです。卽ち女子が智的生活から本能的生活に突入して、そこに本當の自己を見出すことです。女性全體が力を合せて自分の間から眞の天才を生み出さうと祈ることです。その外にこの問題に對する根本的の解決は不可能だと思ひます。

民本主義の運動にしても、眞に自己の尊嚴の承認せられぬ中は、男女關係を從來行はれた說で徹底しようとするのが不可能であると等しく、到底成功することは出來ません。しつかりした內容なしに上つつらな運動にひか

れてゆく生活は、外にばかり大きく擴がつて行くばかりで、根柢となるべき自己はからつぽになつてしまひます。ところが一度價値を自己に移すと、考へ方が全然一變して、今まで外に擴げてゐた自己を內的に深くしようとする。同時に愛憎の區別がはつきりとしてきて、我慢にも今までの虛飾をつゞけられなくなります。かうした經驗の後に、片輪な不均等な社會生活に目醒めて叫び出すデモクラシーの思想には、力強い眞理が含れてゐるにちがひありません。私はデモクラシーの運動に反對する譯ではないのですが、たゞ內的に進步しないものを外に引つ張らうとする方法に不滿をもつものです。私に云はせれば、自己承認のない自己に不忠實なものをそゝのかして外的に飛躍させる前に、自己に立ちかへれ、自己に忠なれと叫びたいのです。

兎に角現代の文明は病的な發育をなしつゝある片輪であり、社會生活もそれにつれてだん〳〵不均等な變調なものとなりつゝあります。例を文藝上の作品にとつても、いたづらに銳く病的になつて神經の末梢のみがふるへてゐるやうなものが多い。しかし文藝はもつと健全(ホールサム)なものであると思ひます。作家の神經にもつと全體的に銳く働くべきであります。私はこの凡てに於て不健全な現代人の生活が、私共各自が自己に歸り、自己に根ざした生活を築き上げることによつて、よりよきものになるだらうと信ずるものであります。(講演筆記)

(一九二〇年一月、「婦人の友」所載)

イブセン研究

目次

第一部　北歐文學概觀

一　緒言

イブセン研究といふのが私の演題となつて居るのでありますが、實は研究と云ふ程系統立つたものではないの

で、寧ろイブセン雜感とでも申した方が適當かと思はれる。何はともあれ、イブセンに就いてのお話のデテイルに立ち入る前、少しく北歐文學の概觀に就いて述べてみたい。

二　中歐文學の特長

歐洲の文化史を通觀するに、文化が南から北へと移つて行く時には、必ずこの未開と考へられる者によつて、南の文化が抵抗に遇ひ、檢査を受けるといふことが一の特色である。之れに反して、この文明が南漸する際には、殆ど何等の抵抗もエクザミネーションをも受けずして、其の儘受け容れられるのが常である。

ルネッサンスの文化が近代文化に繫がる所、チュートン民族を中心とせる中歐文化が起り、更に之れが北歐に移るに當つても、今述べたやうに抵抗や、試驗に出くはしたのであつた。否、現にかゝる事が多少行はれつゝあるのである。而して此のチュートン文化、即ち中歐文化の特色は二つあるといふことが出來る。其の一つはルネッサンス王朝時代に至る間に起つた、新クラシシズムに對するチュートン文明、即ち中歐文明の反抗として起つたロマンチシズムであつて、他はルネッサンスより發してゐる。一つの精神活動の方面として表はれた所の、純客觀的態度に基いた、人生乃至自然に對する科學的研究これである。

ロマンチシズムの一種と考へらるゝものは、中世紀にも見られるのであるが、中世のそれは超自然的、神祕的色彩を帶びてゐる。ユーゴーやシャトー・ブリアンに依つて、十九世紀の前半フランスに起つた所のローマンチシズムは、これと異つて超自然的色彩は少いのである。しかし更にこれとも趣を異にするものは、チュートン民族の文化、即ち中歐文化が齎したロマンチシズムであつて、これは固定して動きのつかない、生命のない、クラチシズムに反抗してあらはれたものであつて、新しい生命、新しいたましひに對する已む能はざる一種の憧憬であ

り、又舊い生活の殻を破つて、新らしい活々した生命のまに〳〵動かんとした一種の衝動である。

三　科學的精神への反抗

然るに他の一方、これと共に起つた科學的精神はロマンチシズムに打ち勝ち、全然これを統一するまでには至らなかつたとしても、これを支配した觀がある。此の精神はルネッサンスの一方面の現はれである所の人間生活を、何處までも冷靜に如實に觀察せんとする態度が主智的な研究的態度と結び付き、極度まで智能を働かし、人生の眞相本性を適確に觀究めんとする精神であつた。此の科學的精神は、遂には文藝上にも影響を及ぼし、自然主義、寫實主義の澎湃たる波濤の如き傾向が文藝界にも現はれて、軈て全歐洲を風靡せんとしたのであつた。併し乍ら此の精神に對しても、玆に一つの反抗者が現はれた。そは云ふまでもなく北歐であつた。其の反抗は次ぎの如き形となつて表はれたのである。

凡そ科學的精神は二元觀を出づること能はない。卽ち自己と外界とを分離した對照的の者として、此の兩者を對立せしめねば止まないのであつて、極度迄理智を用ゐ、人生を冷やかに觀察し、純客觀的の實在を立てるのである。けれども自己と外界との間に、往々矛盾撞着を來し易きのみならず、かゝる二元觀を以て確然と對立關係を認むる事は、或は事物の眞相を究むるに有效な態度であらうけれども、其の事物の中から新生命が生れ出づる爲めには、かゝる態度はあまり役立たないと云ふことが出來る。何となれば、智能の能くする所は、事物をコンプリヘンドする事であるけれども、或る事物を强く感じて、或る生命を働かすことはない。却つて全人格的ライフを以てはたらく時は、對立關係は消滅し、かくて科學的生產物は、無視され破壞されるからである。科學的態度を嚴正に維持する時は、冷靜な觀察は出來るであらう。しかし、それによつて、眞に活々した生命に强く觸れること

は望み難い。深刻なる純客觀描寫と、虚無思想を有つてゐたフローベルや、自然主義乃至寫實主義に於て徹底してゐた、モーパッサン等の作品を讀んで見ると、人間の生活其のものゝ描寫は實に眞に迫つてゐる。此の點に於て私共は非常に引き付けられる。けれども、其の中から如何なる生命が湧き出て來るか、又躍動してゐるかを疑はざるを得ない。人間の生活の現象は、深刻に觀察され、如實に描寫されてゐる。併しながら其の現象は如何にあるべきかの問題は、觸れられずに殘つてゐる。それに對して北歐人は何等かの要求を挿まざるを得なかつた。人生を觀察するかゝる冷やかな態度に對して、強い物足りなさを感じた北歐人は、これに對して一つの反抗を試みざるを得なかつたのである。

四　懷疑の眼と改造の努力

前にも述べたやうに、中歐のロマンチシズムは、チュートンの若き血潮の迸りとして、新しい生命を求め、新しい世界を憧憬したのであつたけれども、ナチュラリズムによつて壓倒され、かくて中歐の藝術を作る二要素は相搭し、そのロマンチシズムの衰微となり、ナチュリラズムの繁榮となつた、ロマンチシズムに對する強い欲求を阻まれた北歐の人は、益々二元的の心持を一元的にしなければ止まない衝動を感じ、歐洲文明が若返る爲め、必要な新しい血を供給したのである。彼等はチュートン人の陥つた、純客觀的な冷靜な生活態度を以て滿足せず、新しき生命を求めて、ナチュラリズムに對して疑を挿んだのであるが、その強い欲求は二つの形式を取つて現はれたのである。卽ち其の一は、南歐文明に對して懷疑の眼を向け、これに對して抵抗を試みたことであつて、其の二は改造の努力であり、固有文化の建設である。

ゴーゴリ、ツルゲネーフ、ゴンチャロフ、ゴルキーの如きは第一の態度を代表する人々であるが、就中ツルゲ

ネーフの作物は、一八四〇年乃至七〇年代、中歐に漲つてゐた科學的精神に養はれた中歐人にして、露西亞へ入つて來た人々、又はロシア人にして、其の風潮の影響を受けた、所謂インテリゲンチヤに屬する人々の生活を觀察して、其の生活の如何に無力なものであるかを描き出したものが多い。「ルーヂン」や「父と子」のバザロフに於て其の適例を見る。バザロフは飽くまで眞實を求むる勇者の如く現はれるけれども、その科學者の心中には、二元的の作用が不斷に働いて居る爲めに、彼の如き強き性格も終局は生に敗れざるを得なかつた。

これらの疑問の結果として、新文明の建設が主として北歐の地に行はれかゝつてゐる。

五　生れ出づる力

私自身の感じとして、今後の本當のよい文明は、ロシア、スカンヂナヴィア、デンマークのあたりから生れるのではあるまいかと思はれる。

ロシアの現狀にグリムプスを與へて見るに、混沌たる亂雜の中に、レーニン政府が漸次統制的支配力を獲つゝある樣である。あそこには新しき精神が強く動き、我々の想像だも及ばぬ樣な健實な步みをかの國の人々が步んで居るのかも知れぬ。荒廢したかの國の地には、やがて美しい花となつて開くべき强い草の根がかくされてあることは疑はれぬ。トルストイの生活や思想の中には、一方に闇黑な否定もあるけれども、他方に肯定の光明も輝いてゐる。彼は中歐文明と異なつた、ロシヤに固有なる或るものゝ上に新しき生活を築き上げようとしたのである。ドストエフスキーも、多くの闇い苦しい經驗をした人であるが、それらの經驗の底に、スラヴ人の活々した生命が動き、純なたましひが輝いてゐる。ストリンドベルヒの作品を見ると、彼の疑ひ深い、凡ての物事を一ひねりひねつて見なければ、承知しないやうな性格がよく表はれて居るが、北に迫りつゝあつた中歐人の生活に接

しても、彼は一々その裏をひつくり返して見なければ、滿足し得なかつた。かゝる懷疑そのものとも云ふべき性格を具へてゐたストリンドベルヒにも、單なる觀照、單なる否定以上に、其の中から新しい或るものを攫んで引き出さうとする肯定的の力が動いて居つたのである。此の力、此の欲求が如何なる形を採つて我々の實生活に現はれるかは、何人も頭を以て知る事は出來ない。たゞ敏感な藝術家のみ、其の心を以て感ずる事が出來る。

第二部　イプセンの思想

一　思想の概觀

以上を以て序論とし、いよ〳〵イプセンに就いてお話したいと思ふが、我がイプセンは不幸にして、トルストイやドストエフスキーやストリンドベルヒのやうな人ではなく、寧ろゴーゴリやツルゲネーフの如く、中歐文明に對して懷疑の眼を向けて、これを否定し、其の上に問題を提出しただけの人であつた。それ故イプセンから問題の解決を求めても得ることは出來ぬ。如何なる問題が彼によつて提出されたかといふことが問題となるに過ぎない。から云つて來ると、如何にも藝術を社會問題と同樣に見て居る樣に思はれるかも知れぬが、これに關しては私は私見を有つてゐる。

二　「問題」を扱ふことの可否

文藝に問題の入つて來ることの可能か否か、又適當か否かといふことは一の問題である。我々人間は藝術家たると何たるとを問はず、どうしても大いなる環境（ミリュウ）からの影響を免れることは出來ぬ。唯藝術家にして優れた人であればある程、ミリュウの影響に對して、或る程度まで獨自の境地を開くことが出來るが、後世から考

へれば、やはりその人も時代の人であつたと思はれるのである。今電光の流れるさまを見るに、天の一角より一角へと、數多の屈曲をなして流れ下るのである。もし電光の流るゝ强き力に、抵抗する何ものもないならば、電光は一直線に流れ下るであらうが、空氣の抵抗の爲めに、それは一の曲線をなして流れるのである。人間の文化の流れもこれに似てゐる。文化の進展を阻む內部的外部的の何ものもないならば、ダーウィンの進化の法則のまに〳〵、人間の文化は一直線に進んで行くであらう。けれども、この進化の力を阻む外部的內部的の條件が、多數人類進化の道程進路に橫つてゐるのである。かくて人間の社會には、往々混亂を來し、極つて革命を起すに至る。これらは卽ち、文化の流れの曲り角に當るのである。かゝる文化の曲り角に於て、多くの問題が起る。如何なる優れた藝術も、このミリュウの影響から超越することが出來ぬ。

私の見る所によれば、ダンテの「神曲」には、無數の問題が含まれてゐる。中世紀の問題の總和が、其の中に含まれてゐる。思ふにそれは歷史のターニング・ポイントに於て、暗黑時代がルネッサンスにつながる時、人々が皆暗中摸索して居つた時、彼の「神曲」は天來の曙光の如くに現はれたのである。彼も其の時代の流れに反抗することが出來ず、知らず識らず、多くの問題に觸れたのである。

シェクスピアは文化の裏を見返さないで、其のまゝ肯定した人である。當時はエリザベス女王統治の下、英國文化の黃金時代であつて、民心よく統一して泰平を謳歌し、其の狀宛も河川が一直線をなして流るゝ樣な時代であつたから、人心を動かした切實な問題は、おのづから統一の下に置かれ、從つてシェクスピヤと雖も、其の藝術の中に問題を取り入れることをしない結果になつたのである。

斯樣なわけであるから、文藝に問題を入れるがよいか惡いか、適當か不適當かと云ふことは、抽象的又は概念的に論ずべきものではない。其の時勢が統一された時代なれば、其の時の藝術家の作品には問題はない。ターニ

ング・ポイントにあつて、尙ほ問題を入れないのは、時代錯誤か、或は其の時代其のものを何等の懷疑なしに肯定せんとする人の作品である。これは寧ろ例外と見るべきもので、原則としてはターニング・ポイントに現はれた作品には、問題が入らざるを得ないのである。されど、「問題」は或る時期を經れば消滅する。そして、その藝術の中眞に美しい部分のみが、永く其の價値を殘す。ダンテが彼の「神曲」を通じて、後世に永く殘した、あれだけの藝術、あれだけの思想を得る爲めには、彼の時代の問題を、十分に消化しなければならなかつたのである。「神曲」の中に取り扱はれてある多くの問題が、如何に當時の人をエキサイトしたかは、我々現代人の想像の及ばぬ所であるが、それらの問題は、少くとも、現代人を切實に動かすに足らぬのである。

三　時代と「問題」

要するに、藝術の中に問題があると否とは、其の背景たる時代の如何に依るものである、といふのが私の意見である。されば、イブセンの藝術や思想を知るが爲めには、彼の住める時代が、ターニング・ポイント、卽ち中歐の文化が、北歐のそれに代られんとした、文化の進展の曲角に當つて居つた、といふことに注意し、從つて、其の時代の問題を考慮の中に置かねばならないのである。

私はかゝる見地から、彼の劇中にある問題的のことを、主として考へて見たいと思ふのであるが、元來藝術家が問題を取り扱ふといふことは、思想的背景を有つといふことであつて、此の頃よく、藝術家は一面、一般文化乃至時代の思想上の諸問題に關して、博く且つ深き知識と理解を有つてゐる學者でなければならぬ、と云ふ風に考へられる傾きがあるが、それは一般には要求されぬ。藝術家は一面學者である事を妨げないが、彼の眞の職分は、知ることに在らずして、觀て而して感ずることに在らねばならぬ。イブセンは學者ではなかつた、然し彼は、な

べての學者がなし能はぬ程に、當時の問題を鋭敏に感知してゐた。

四　イブセンの扱つた「問題」

扨て前にも述べた、中歐文明が、北歐に這入つて行つた際に受けたエクザミネーションを具體的に述べれば、ブランデスの書いて居るやうに、四點を擧げることが出來る。卽ち、

第一は、宗教若しくは信仰に關する問題であつて、神なる力を自然的の力と見るか、或は超自然的の力と見るべきか。これ北歐の解決すべき第一の問題であつた。

第十六世紀初葉の、ルーテルの宗教改革によつて、神はローマ法王といふ人間から離れて、萬民の神となつた。けれども、なほ神には多くの屬性が附せられ、超自然的なものと考へられてゐた。一八六三年に、ルナンは耶蘇傳を著して、イエス・クリストを人間的なものとして了つた。其の時の論爭は激しいものであつたが、イブセンは丁度其の年三十五歲であつて、其の翌年「ブランド」なる劇詩を作つて、多少此の問題に觸れてゐる。

第二は、過去と未來との關係に關する問題である。世が一直線を取つて進步する時は、過去と未來とは接近して居るのであるが、歷史の回轉期に當つては、過去と未來との距離が、遠く隔つて相見失ふに至る。親と子との間柄、オルダー・ゼネレーションとヤンガー・ゼネレーションとの關係が、從來の樣に圓滿に續いて行かぬ樣になる。このやうな問題にも彼は多少觸れてゐる。

第三は、社會の種々なる階級に關する問題である。貧富の問題、社會的に勢力あるものと、勢力なきものとの問題等これである。フランス革命以來、支配者に對する考へが變つて、人民は王權神授の思想から解放された。彼等けれども、私有財産を多く有つてゐる商業者や工業者の階級は、これに代つて或る意味の支配階級となつた。彼等

は私有財產を絕對に神聖視し、云はゞ、私有財產といふ神を有つてゐたのである。イブセンは、この私有財產は神聖なりや否やの問題にも觸れてゐる。彼は法律學者でもなく、經濟學者でもなかつたが、思想的背景を有する藝術家の、銳いインサイトを以て、この問題を觀たのである。一八四八年には、かの有名な「共產黨宣言」(Das Kommunistische Manifest)が、マルクス及びエンゲルスによつて發表された。この當時十八歲であつた、若きイプセンの心に、この宣言によつて何が釀されたかは想像に難くない。

第四は、男女間の問題、それに關聯して兒童の問聯である。私の考へでは、今日の賃銀奴隷の出來る前に、旣に女は男の奴隷であつた。と言つても、男が女よりもえらいといふことを意味しない。男が惡くて、勝手氣儘に己れの都合のよい樣に、政治、法律、道德、乃至慣習を作つて了つて、女を奴隷としたのである。男と女とは未だ眞に正しい關係に入つてゐない。此の間違つた男女關係の亂れからして、生活の腐敗が生ずる。人間は性的關係に於ては、獸類よりも寧ろ劣つてをる位である。獸慾などと云つて馬鹿にするのは、多少僭越の嫌ひがないでもない。かゝる亂れは、實に何千年と云ふ長い間に出來たものである。短少年月に、正に歸すといふことは容易ならぬことであるが、それを放置しておく譯には行かない。かゝる性的關係の問題にも、イブセンは觸れてゐるのである。

第三部　作品及びその批評

一　ブランド

A　反抗的リアリズム

扨て、前述の如く、北歐には、一元的に自己を觀て批評せんとする傾向が起り、又ロマンチシズムに對するリ

アリズムの反抗が起つた。これは北歐の特徵である。而して、イブセンの劇の中にも、此の特徵のあらはれたものがある。今その例として、「ブランド」と「ピーア・ギント」とについて述べようと思ふ。ブランドは、イブセンが三十六歲の時、卽ち一八六四年に、ローマ滯在中散步の折柄、セント・ピーター寺を見て、インスピレーションを得て書いた劇詩である。七月の半ばより九月の半ばまでに書き終つた。これが世に現はれて、イブセンの名が忽ち全歐洲に知れ渡つたのである。非常に表現の强い詩であつて、ブランデスは King Lear まで溯らなければ、かゝる vehement な表現は求められぬと批評してゐる。

「ピーア・ギント」は、一八六六年、彼が三十八歲の十一月に書き終つた苦心の作である。「ピーア・ギントの中には問題はない。空想の動くがまゝに書いたのだ」と、イブセンが言つたが、やはりその中にも問題はある。文明のターニング・ポイントに在る藝術家として、問題に觸れることは免れ難い所である。「ブランド」は、北漸せる南方文明に對して、北方の本當の强味を有つた人間が、彈劾の聲を擧げたものである。「ピーア・ギント」には sensuatist が描かれてある。南方文明を其のまゝ受け容れる、個性の無いやうな男がやつた、色々な悲喜劇的なことを描いた詩である。

B「ブランド」の梗概

先づ「ブランド」のアウトラインから述べよう。ブランドはノルウェーに生れた男で、其の父はやかましや、母は實利的な女で、その母は若い時貧しい百姓を戀人にもつてゐた。母の父は金持へ嫁にやりたいと思ひ、金はあるけれども、やかましやで年取つた、ブランドの父と結婚させることにした。母は初めは悲しんだが、後には金の爲めに戀を思ひ切つてこれと結婚し、ブランドを生んだ。その幼い時父は死んだが、ブランドは幼くてその悲

みを知らず、或る夜父の死骸を見た時に、その枕許から金袋を探り取る者があつた。それが自分の母であつたが、其の時受けた印象は消えず、彼は物を思ふ疑ひ深い子となり、長ずるに及んで、神の宣傳者とならうと決心し、ヨーロッパへ乘り出して宣傳せんとした。その道は即ち"All or Nothing."といふことであつた。南方文明が二元の間に彷徨せる不徹底さに飽き足らず、何れか一に徹底せよ、といふのが其の高唱する watch-word であつた。彼は南方の神が老いて無力となつたと考へ、Hercules の如き力強き神を立て上げようといふ心願を起し、ヨーロッパへ行かうとした。さうした際に、藝術家なるアイネルといふ舊友に遇ふ。アイネルは Joy of Life を人生の目的として居る樣な男であつて、美しくて溫順しいアグネスといふ妻を伴つてゐる。彼等が或る嵐の日、入江のほとりに居つた時、一人の百姓女がやつて來て、臨終にある彼女の夫が、其の子を殺した罪の懺悔をしようとしてゐるから、それを聞いてやつて下さい、といふ。ブランドは舟に乘つて、入江の向岸のその家へ行かうとするが、嵐の爲め波は高く危險なので、誰も助手となつて一緒に行かうと云ふ者はない。アイネルに賴んだけれども、そんな冒險はいやだと言ふ。其の時アグネスは卑怯な夫に愛想をつかし、ブランドの獻身的な勇氣に感激して、これと共に行き、男の懺悔を聞く。これが緣となつてブランドとアグネスとが結婚する。二人はヨーロッパへ行かずとも、其の地に於ても仕事があることを覺(さと)つて、入江のほとりに堂を造つて住む。その中アルフといふ子が生れ、彼等は傳道を續け、村人の尊敬を受けてゐる。ブランドの老いた母は、彼の所に來て、自分の懺悔を聞いて吳れといふ。ブランドは嚴肅に、彼女には重大な罪惡がある、それを悔い改めなければ、天國へ行くことが出來ぬ、父から取つた金を全部慈善の爲めに施せといふ。母は、其の金は戀に代へて獲たものであるから、全部を手離すに忍びぬ、半分だけにしてくれ、といふ。ブランドはこれを聽かず、母は彼の慰めを與へられずに死ぬ。其の中に、其の土地の惡いせゐで、アグネスも健康を害し、息子のアルフも病氣になる。醫者は息子の病氣を診察して、轉地すれば

癒るといふ。ブランドは喜んで轉地しようとした。其の時醫者が「如何に一轍なブランドでも、息子の病氣を癒すためには、轉地もしようといふ心になつた。其の心こそ本當の心である」と言ふ。ブランドはこの言葉を聞いてはつと心付き、轉地を思ひ止つて了ふ。その爲めアルフは死に、アグネスも共の悲しみの爲めに死んで了ふ。彼は全く孤獨となる。其の時ゲルドといふジプシーの娘があつて、熊の子のやうに山を歩いて居つた。これがブランドに逢つて、山の上には氷の殿堂があつて、少しも穢れのない、全く神聖なものであると告げる。ブランドはこの話に強く引き付けられたが、母の遺產があるので、それを以て大殿堂を建立した。その開堂式に村の人達が集つて來て、彼に讃辭を呈し、それを公共事業の爲めにも使はして呉れと賴む。ブランドはこれを專ら、神の爲めの奉仕にのみ用ゐたいといふ考へであつたので、かゝる汚れた村に建てたことを悔いて、殿堂に鍵をかけて了つて、本當に清淨な殿堂を求むる心から、ゲルドの告げた氷の寺を見ようとして、山の上へと雪と寒さを凌いで登つて行く。彼について來た村人や案內者は、何處まで行つても氷の寺の見えないのと、困難とに堪へかねて不平を言ふ。「私の行く所は幸福のある所ではない。あるものは茨の冠のみ」とブランドは答へる。村長や牧師達は、「妥協の精神が神の名によつて殘されてあるといふことは、難有いことだ」と言つて、山を下つて了ふ。ブランドは一人更に登つて行くと、ゲルドに遭ふ。ゲルドは彼を本當の生神樣である、といつてほめると、幻にアグネスがあらはれて、彼が飽く迄も妥協を斥けた爲めに、アルフも死に、自分も死んで了つたと言つて恨む。其の時ゲルドが鷹に鐵砲を打つ。その谺の爲めに雪が崩れてなだれとなり、ブランドはその下に壓し潰されて死ぬ。其のあとへ天から聲があつて「神は愛なり」といふ言葉が殘された。

劇詩「ブランド」の梗概は、大體以上の如くであるが、此の劇の中ブランドは三つの敵を有つてゐる。

Ｃ　ブランドの三つの敵

其の一は faint heart である。困難を回避し、理想や信念に徹底する能はず、すぐに辟易して了ふ弱い心である。ブランドが氷の寺を求めて、雪の山を登つて行つた時、彼に伴つた村人や案内人が、何處まで行つても氷の寺を見ることが出來ず、又艱難に得堪へずして、彼一人を殘して山を下つたのがそれである。百姓が案内を止めて去る時、ブランドが呼びかけて言ふ。彼等は家路をさしてとぼ〳〵と歸つて行く。「お前等の弱い肉のみが凡てでなく、肉以上の者の爲めに生きんとする、少しの欲求でもお前等にあるならば、自分はお前等を助けることが出來るであらう。けれども肉體の爲し得ること以外を意志しないやうな者を助けることは出來ぬ」彼はかう言つて faint heart を輕蔑し、憐れんでゐる。

彼の第二の敵は ligt heart である。アイネルやアグネスは妥協をいとはぬ輕い心を以て、一生を送つて行かうとする。その心に、彼は一切を神に獻ぐる嚴肅な心を以て最後まで反抗した。ブランドは light heart に對して叫んで言ふ。「苟くも情熱に耽り、快樂を求めるならば、徹底的にやるがよい。けれど、今日或るもので、明日他のものであることは許されぬ。凡て一部分だけ其のものであつてはならぬ。教會に行つては少しばかり嚴肅になり、一寸酒を飲んでは氣が輕くなり、盃と盃を打ち合せて萬歳を呼ぶやうな態度に、人間の悲しみがある。凡て物を輕くかすつて通り過ぎようといふ不徹底に、人間の淋しさがある」かう言つて、彼は light heart を排斥してゐる。

ブランドの第三の敵は wild heart であつた。ゲルドは wild heart で以て描いた幻である所の、氷の殿堂を彼に示した。「村には穢れがあり、山の上の氷の殿堂には全き清淨のみがある」と言ふ。ブランドは自分の熱心のあまり、人間を離れて氷の殿堂へ行く。その結果は死であつた。そのあとへ殘されたのは「神は愛なり」いふ天

からの言葉であつた。この言葉は彼の死と關聯して、何かしら深く考へしむるのである。

かくの如くブランドは巨人の如き意志を堅め、回避の心を斥け、妥協的精神を排して、飽く迄も"All or Nothing."といふ一元的の精神を以て、反抗に於ては徹底したけれども、南より來つた二元的文化の妥協的精神の爲めに敗れて、遂に死するに至つたのである。けれども、彼の強い〳〵欲求は、偉大な或るものを暗示して止まないのである。

二「ピーア・ギント」

A 梗概

イブセンは二年後れて、「ピーア・ギント」を書いた。これはブラントとは全然異なつた頭で書いたのであるが、この劇には、ノルウェーのグルーミ・サイドがよく表はれてゐる。

ピーア・ギントには一人の母がゐた。この母にはピーア・ギントが可愛くて、又偉く見えて耐らなかつた。このピーア・ギントは幼時から、浪漫的精神の權化と思はるゝ如き男であつた。しかも、そこに一種の野性が働いてゐたので、其の望みは馬鹿に大きかつた。何でも自分はカイゼルになるのださうであつた。時々山などに遊びに行つて、いぢめられて歸つてくるが、歸ると母に向つて途方もない法螺を吹く、可愛い男であつた。母も「おや、まただまされた？　ほんとにお前は仕樣のない子だね」と言つた調子で、誠に他愛のない女であつた。

ピーア・ギントには戀してゐた女があつたが、浮調子なピーア・ギントは一向かまひつけなかつたので、女の父は、娘に壻を取る事にした。それを聞いたピーア・ギントは、女を人に取られる事が急に惜しくなつて、その女を奪ひ去る。しかし、元來そんなにその女に執着があるわけでなし、うるさくなつたものだから、辱かしめた上に山に

捨てゝきた。次に、ピーア・ギントは又、ソルヴェイと云ふ女を戀したが、これも倦いて捨てゝしまふ。そんな事をしてゐる中に、人から排斥されて村には居られなくなつたものだから、遠國に出奔する。今度歸鄕して見たら、あたかも、ギントの母が死にかけてゐる時であつた。母は大變に喜んで、「もう私は死にさうだ」と云ふ。ギントは「よろしい、僕が一つ天國に行く話をして上げよう」と云つて、滔々と面白い話に夢中になつたが、その話の最中に、母はほんたうに天國に行つてしまふ。ギントは、其の後アメリカに行つて商賣を始めた。彼は支那には偶像を、南亞米利加には奴隷を輸出した。しかし、良心の呵責を免れんがために、其の後から、支那には宣敎師を、南亞にはラム酒を送つた。彼曰く、「かうすれば、奴隷はラム酒を飮んで滿足するし、又支那が偶像で亂れようとするのも、宣敎師によつて救はれる。良心もこれで滿足するし、金も出來る。一擧兩得とは此の事だ」と。ピーア・ギントは、後に、年を取つて何もなくなつて歸國する事となり、船路に上つたが、途中難船に遭ひ、一人の料理人と彼と二人だけが、一本の棒切れにすがつて、辛くも命を繫いで海上に漂うた。料理人が云ふのに、「これを二人で用ゐれば、二人とも沈んでしまふ。お前さんは、聞けば、獨身ぢやさうだが、私は妻も子もある。だから、お前さんは氣の毒だが、代りに死んでくれ」と。彼曰く、「いや、お前さんは妻の味も子の味も知つてゐる。私は未だ獨身で知らない。これから歸國して、やつとそれを味ふ、と思つてるんだ。だから、私に讓りなさい」と。さうして、料理人を溺れさして、彼は一人助かつた。國へ歸つてから寂しく放浪してる時に、何處からか歌の聲がきこえてきた。よく見ると、それは彼の若い時に捨てたソルヴェイと云ふ女であつた。彼女はもうおばあさんになつて居るが、やつぱりピーア・ギントを待つてゐたのであつた。ピーア・ギントは、かくて、彼女の胸に抱かれて、その子守歌をきゝながら永久の眠りについたのである。

さて、ピーア・ギントに就いて注意すべき事柄が三つある。これはブランドと對照して見ると好いと思ふ。

B　注意すべき三點

第一、不徹底と云ふ事である。彼は何か自分に突き當るものがあると、つとそれを避けて廻らねばならなかつた。我をぶち貫くと云ふ事は到底できない所であつた。

第二、野性と云ふ事である。而して空想（ファンタスティック）的である。而して女などをもてあそぶ事は平氣である。かゝる事に就いて何等の確乎とした信念がないのである。

第三に輕薄（ライトハート）な心も、彼の生涯の到る處に現はれてゐる。化物の女に戀されてその婿になつて、その命に從つて、尼尾（しつぽ）を附けたりするなどは、よくライト・ハートを表はしてゐる。彼は何等の意味に於ても、實行的の所はない。自分と云ふものをば立て通す事はないのである。ピーア・ギントが故鄕で森の中を歩いて居る時に面白い事がある。彼は絲をふんだ。絲は彼に謂く、「私は思想である。しかし、實行されたことのない思想である」と。又枯木があつた。「私はお前の主義である。しかし、嘗てお前によつて實行されなかつたから、こんなに蟲がついて枯れてしまつた」と。又空中から溜息があつて彼に謂く、「私は歌であるが、一度も思ひ切つて歌はれたことのない歌である」と。又しづくがあつた。そして彼に謂く、「私は涙である。けれど永久に流されたことのない涙である」と。又藁があつた。「私は實行である。お前は私を成就さしてくれるはずだつたのに、疑ひがそれを塞いでしまつたのである。今に神の審判の日が來る。私は神の前に立つた時、お前の事を云ひつけるから、さう思ひなさい。あゝ、お前はその日に災であることよ」と。

ピーア・ギントには實に歌もあり、涙もあり、思想もあつた。それから實行すべき立派な體格を持つてゐた。けれども、彼にはそれをやるだけの深さが無かつた。彼は決して内部に突き入る事をしなかつた。いつも、物の外

部を少しかすつて通る位に止まつてゐたのである。彼は或る時斯う云つてゐる。「俺はカイゼルだ、いや、待てよ、俺は玉葱ぢやないか知ら。さうだ、俺は玉葱だ。一つ此奴をむいてくれよう」と。そして玉葱の皮を一枚々々むいたが、何枚むいても終りまで同じ物であつた。そして中は空だつた。彼は苦笑して、「自然は人が惡い（Nature is witty.）」と云つたが、其の時彼は淋しかつたに違ひない。彼は老年になつて、ソルウェイに言つて居る。「あゝ、一體俺の自己（セルフ）は何處にあるのか？」と。ソルウェイは「それは妾の信仰と、愛と、望みとの中にあるのです。あなたは此の三つの中にお生きなさいましたのです」と云つて慰めた。ピーア・ギントは非常に喜んで、「俺は同時に、戀人と母とを見出した」と叫んだ。實際彼は玉葱の樣な男であつて、中身まで何もない人間であつたのである。自分自身（ワンス・セルフ）を生活（リヴ）した、と思つてゐたゞらうが、實は彼は常に外界に支配されてゐたゞけであつた。先のブランドの方の、飽くまで外界と接して戰つて行かうとしたのとは、全く反對である。しかし、最後にピーア・ギントについて一言したいのは、それにもかゝはらず、ピーア・ギントはブランドが悲慘な戰ひを鬪つて、雪崩の下に最後を遂げたのと異つて、何處かに人間的の弱い、然し可愛い所がある、と云ふことである。彼はノルウェイ人共通の、外界に迷はされ易い心がある。しかし、その底には、ノルウェイ人共通の誠に美はしいところが見えるのである。

三　四個の人生問題

偖て以上を序言とし、これから、先に述べた四つの問題卽ち、

第一　宗教若しくは信仰問題（卽ち超自然的觀念に對する見方）

第二　過去と未來の問題（卽ち父と子の關係）

第三　貧富の問題（卽ち社會の位置）
第四　性の問題（男女の關係）

に就いて考へて見たい。それで先づその各々のティピカルな劇を一二選んで、その劇を中心として考へてみよう。

前に申したやうに、宗教改革の結果、神に對する考へが餘程變つたのである。新教では、カルヴィンが出て、神に對する奉仕(サーヴィス)なる考へを造つた。神は大なる專政君主(デスポット)なりとした。人は不自由(デターミネーテッド)なものである。神は全能(オールマイテイ)なりとした。大變宿命的な考へである。彼の豫定說はこゝから出てゐる。次ぎに科學が起り、神を神の玉座より斥けて、更に人類よりも放逐し去つた。けれどもその結果は、却つて、人間と云ふものは自然の前に如何に無力であるかを知るのみであつた。とにかく、近代の作り上げた宇宙觀は、宿命的(フエーターリスティック)な考へを免れる事は出來なかつた。この態度があらゆる方面にあらはれたのであるが、終には社會の制度や習慣など、人間が勝手にこしらへたものまでを、これが萬能のもの、絕對の權威あるものとして祭り上げ、これには頭から服すべきものと云ふ風な考へが、世間一般に弘まつて、人々の頭に浸み込んだのである。

そこで、それではいけない、何うしても自己の力を徹底的に發揮させようと云ふ、强い欲求を持つて立つたのが、近代文藝の先驅者の人々である。そして、例へばマックス・スチルナーだとか、ニーチエだとか云ふやうな人人は、皆この欲求をあらはしてゐる。しかし、この欲求を最も强くもつたのは北歐人であつた。イブセンもその中にあつて、此の欲求を强く作物の上にあらはしてゐる。先に概略言つた「ブランド」も其の一つである。しかし「ブランド」はいまだ觀念が觀念として留まつてゐて、實生活と云ふ者とぴつたり合つてゐない。それで、もつと觀念と實際とを結びつけ、思想が思想に止まらずして、印象そのものとなり、直ちに感激となり、力となるものにしようと云ふのが、イブセンの希望である。「幽靈(ゴースト)」などは、比較的この調和がとれてるやうである。「幽

靈」は、超自然力に對する、人間の個性の反抗である。五十一歳の時の作であるが、彼はこれを出した時、アナーキストとされ、ニヒリストと看做されて大いに攻擊をうけた。

四　宗教若しくは信仰問題

A「幽　靈」

さて「幽靈」にはアルヴィングと云ふ金持と、その妻と、牧師のマンデルスが居る。始めアルヴィング夫人は牧師を戀してゐたのであるが、アルヴィングがしきりに彼女を欲しがつた爲め、牧師はこれを許し、自分は犧牲になつたつもりで、二人の結婚を成就せしめる。あたかもアルヴィングは不品行の人であつたから、その女によつて改まるだらうとも思つたのである。しかし、アルヴィングの品行はちつとも改まらず、妻との間に出來たオスワルドと云ふ子が四歲の時、アルヴィングは家婢を汚した。妻はこらへ切れなくなつて牧師の許に走る。牧師は道德堅固な人だから、アルヴィング夫人が逃げて來たのを非常に怒り、これを大いに訓戒して歸らせる。ミセスは殘念には思つたが、子供のオスワルドのためと思ひ、再び家に歸る。牧師はその後一度もアルヴィングの家に行かなくなつた。そのうち下婢はレギーナと云ふ女兒を生み落したので、アルヴィング家では仕方なく、その下婢に三百弗の金をつけて、町の或る大工に、祕密に嫁にやる。オスワルドは八歲の時、他家に預けたが、それでもまだ、アルヴィング夫人は、この子だけは父の不品行を知らせまい、そして善良な子に育てようと思つてるので、此の町に居ては父の行ひが知れるといけないからと思つて、巴里に遊學に出す。そして、十九年目に幕が開く事になる。オスワルドは頭が痛むので醫者に見てもらふが、父から何か惡い遺傳を受けたに違ひない、と云ふ事をきかされ、悲しんで、もう死なうと思つて、歸國する。そして、先の下婢の私生兒なるレギーナを見て、こ

れと親しんで、こいつに毒を飮まさして貰はうと決心し、その女と親しくなるため、或る日レギーナに挑みかゝつた。時に、マンデルス牧師がアルヴィング家に來てゐたのであるが、アルヴィング夫人は隣り部屋での息子の有樣を見て、まさかかゝる下心で、レギーナに惡戲してをるとは知らぬから、氣絶せんばかりに驚く。これより先きに、アルヴィングは金を寄附して敎會堂を建てようとした。オスワルドは保險料をかけておきなさいと勸めたが、牧師は曰く、「否、これは神聖な神の會堂である。神はこの會堂を祝福したまふ。だから決して火事がある筈はない。保險料をかけるなどと云ふのは、それは信仰がないからである」と云つて、何うしても保險料をかけさせなかつた。この會堂は、然し、其の後愈〻獻堂式のあると云ふ時に、牧師の不注意のため失火して全燒したのである。又牧師はアルヴィング夫人の讀んでる本を見て、「實に怪しからぬ本を見てますね、神樣を忘れたのですか」と詰問する。夫人は曰く、「私はもはや超自然な力を無條件で信じることはできなくなりました。一體超自然力つて何ですか。それは唯社會が好い加減にこしらへたものですよ」と。又オスワルドも、牧師に對して、皮肉を云つてる場面がある。

第四幕には牧師がアルヴィング夫人を責める所がある。「一體、人間は幸福に對して、何んの權利もないものだ、義務のみがあるのだ。それは卽ち、あなたが一度選んだ夫に從ふと云ふ事である」と。大抵今でも普通の牧師の云ひさうな言葉である。又、夫人よりレギーナの母なる下婢と、大工との結婚の事をきいて、大いに夫人を叱責する。その時夫人は云つた、「牧師さん、一體、あなたは、法律だとか秩序だとかと、いつも口ぐせのやうに仰せになりますが、そんなものこそ世に大きな災を釀すのであります」と。又曰く、「あゝ私はとらはれてゐた。事實は事實なのだ。何故、夫の不品行をオスワルドに告げておかなかつたか知ら？」

牧師「いゝえ〳〵、人間には理想が大切です。父と云ふものは常に尊敬するやうに敎へねばならぬ。」

夫人「結構ですわ。そんな一般的な事で、凡ての事を律していたゞきますまい。」
牧師「おゝ、あなたは母らしい聲をきゝませんか、理想をどうしましたか。」
夫人「事實をどうなさいます？」
夫人「あ！　私は、オスワルドとレギーナとの有様を見た時に、幽靈を見ました――」（生命のなくなつた古い信仰を指す）

かくの如くアルヴィング夫人は、自らの生活の虚僞を十分思ひ知つてゐる、もう一歩で徹底せんとする女である。

牧師「あなたは本を讀んだからです。本と云ふものは災なるかな。」
夫人「それはちがひます。私が斯うなつたのは、皆あなたのお蔭ですわ。あなたが男らしく私を妻となさいましたら、そんな運命はおこらなかつたでせう。下らない犧牲や、古い信仰や、或は責務なんかと云ふものに、私を強ひなさいました時に、始めてこんな今のやうな事を考へたのですわ。」

しかし、アルヴィング夫人はやつぱり過渡期のあはれな女であつた。もう一歩と云ふ處まで行つて、そこに止まつてしまつた。そして終に牧師に服して、その時はオスワルドに父の不品行を洩らさなかつた。

オスワルドはその後も精神病に苦しんで、母に毒を飮ませてくれよと賴む。こゝで幕が閉づるのである。

イブセンは、この劇で、科學の遺傳と云ふ問題にもぶツつかつてゐる。人間は社會の制度や、法律やはた又古い信仰や、又はその偉大なる遺傳の力に、如何にして對抗してゆけるのであらうか。皆この力には服してしまはねばならぬものであらうか。この劇の背後に暗示されてゐるのは個性である。卽ち個性のみが、これを倒すことができる、と示してゐるのである。

イブセンは一面アナーキストであるが、又一面、非常にアリストクラチックな所がある。勿論、それは所謂金や權力のそれではなくして、個性のアリストクラシイを云ふのである。個性のアリストクラシイのみが、「全てに打ち克ち得る」と云ふのである。

五　過去と未來との問題

過去と未來との間の隔り（ギャップ）に就いて考へてみたい。

前に言つた如く、過渡期に於ては、古い時代（オールダ・ジェネレーション）と新しい時代（ヤンガー・ジェネエレーション）との間に距離があつて、その距離は卽ち或は不理解となり、衝突となつて起るのである。

オールダ・ジェネレーションが大切に守るものは傳統（トラディイシオン）であり、更にこれより出でくる公定の道德（モラール）である。而して、この二つが呼び起すものは、生活の安定、平和を擁護し保證せんとすることである。これに反して、若い、新しい時代は、上の傳統や道德を破壞せんとする傾向がある。智識と云ふ鋭い武器を持つて、古きものをば打破り、新しい何者かを建設しようとするのである。歐洲十九世紀にはこの二つの時代の對立が、かなり著しく發達したやうである。

イブセンは勿論、古い時代に對しては、何らの信頼もおかなかつたけれど、又新しい時代に對しても、非常な疑ひの眼を以て視たのである。これはイブセンが、他の多くの多血質の作者と趣を異にしてる點である。卽ち、彼は直ちに新しい時代の人間と步調をそろへ、これを謳歌することは決して出來なかつた。ヤンガ・ジェネレーションは、革新とか何んとか叫ぶが、それは着物が少しばかり新しくなつたのみで、中味は空つぽである。否、古いものと少しも變らないことを、彼は見出してゐる。

A「青年同盟」

かくして、最も痛烈に、新しい時代の者を批評の眼で眺めたのが、彼の有名な「青年同盟」である。この劇には、或る町の樞密顧問のブラッツベクと云ふ權勢家と、その家に使はれてゐたものゝ息子で、今は成金になつてゐるモンゼンと云ふ若者と、別に某と云ふ誠に世なれた、老猾なる、才で世を巧く渡つてゐる老人と、及びステンガールと云ふ若者が出てくる。ステンガールは或る宴會の席で、忽ち人氣を集めて、その町のヤンガー・ジェネレーションを味方を引き入れて「青年同盟」と云ふ機關紙をつくる。そして、オールダー・ジェネレーションに對抗するつもりであつた。所が、どうしたものか、ブラッツベクその他の老人は、成金になつて威張つてゐるモンゼンが、彼等青年同盟の攻撃の的になつてるものと思ひあやまつて、ステンガールを大變優待した。ステンガールは實はブラッツベクと云ふやうな、權威を掌握せるオールダー・ジェネレーションを攻撃するつもりでやつてゐたのだが、玆に於て、全く意見が變つてしまつた。ステンガールは、決して、確とした主義があつて、古い時代に對抗してゐるのではなかつたので、實は、段々と出世して大臣となり、富豪の娘と結婚したいと、内々思つてゐたやうな男であつた。それでブラッツベクが自分を優待してくれると、忽ち彼の娘に心を向けたりなどした。其の後事件は複雜するが、要するにステンガールの本心も暴露し、又モンゼンとブラッツベクとの和解もできて、これに世なれた老人の某も入つて、老人同盟をつくる。ステンガールは居たゝまれずして逃げ出す、と云ふ始末になる。又、彼はこのドラマの中に、某と云ふ老人が始め若いものに味方して一緒に騷いでゐるのを罵つてゐる。

この劇でイブセンは、ヤンガー・ジェネレーションの内幕を見破つて、痛撃を與へてゐる。

この劇を書いてイブセンは大變罵られた。ヤンガー・ジェネレーションには、ちつとも同情のない保守主義者なりと見られた。しかし、イブセンは何んとも思はず、次の作「社會の柱石」を公けにしてゐる。

B「社會の柱石」

始めに、ベルニックと云ふ男がある。彼は大變才能に富み、野心が强かつた。歐洲より歸國すると、自分の町が荒れてゐるので、一働きしようと思ひ立ち、彼の戀してゐるローナと云ふ可憐なる女を捨てゝ、その妹の金持と結婚した。そして、その町の大立物となつて、他の二三の商人と相竝んで「社會の柱石（ピラー・オブ・ソサイティー）」となつた。その後彼は或る有夫の名女優と關係した。もしそれが暴露すれば、今までの彼の信用は全くなくなるのである。そこで、その弟のトーネセンが義俠心を出して、自分が其の汚名を着て米國に逃げて行つた。この時、ローナも弟の義俠に感心して一緒に渡米した。暫くして弟とローナとが、米國から歸つてきたので、ベルニックは惡事露顯をおそれて煩悶した。そして弟の恩義も忘れて、弟は實に惡い奴だと人々に云ひふらした。又ローナも感心な女で、ベルニックが社會の人から神の如くに尊敬されるやうになるにつれ、その位置が極めて危い事を悟り、これを忠告するのであるが、ベルニックはローナをも邪魔物に思ふ。トーネセンは遂に憤慨して、「此の度は許すが、今度米國から歸つたら、貴樣の惡事は默つておかぬから覺悟しろ」と云つて、再び米國に立たうとする。ベルニックは、アグネと云ふ大工に、船の修繕を無茶に急がせた。大工は大工で、ベルニックが喧しく急がすのに憤慨して、碌碌修繕もせずに、表面だけ好い加減に繕つておく（第三の貧富の問題、勞働問題の條項の時に、これは好例となるから、御記憶を乞ふ）。ベルニックはまたベルニックで自分の社會上の地位名譽を失はないが爲めには、終に最も親しかるべき弟、最も恩義を受けし弟を迄船で死ぬやうにと、密かに願つたのである。しかし、誠に運の惡い事には、その船には、ある事情のため、弟は來なかつた。しかも、も一つ大變な事には、ベルニックの子供が置手紙して、米國に行くと云つて其の船に乘つた、と云ふ事をきいた。ベルニックは大變おどろいた。その妻も心配になつて、大工の所に行つて、子供を救つてくれるやうに泣きついた。そもそも、この大工は、先きにベルニック

に、「早く修繕しないと、貴様の職を剝ぐぞ」とおどされて、非常に怨恨を抱いてゐたのであつた。この一人の勞働者、一人の貧民は、何も守るべきものはなかつた。それにはたゞ妻と子とを養つて行く、と云ふことのみが目的であり、凡てゞあつたのであるが、その資力――唯一の財源たるべき職を奪ふぞと云はれたのに對しては、彼は心から生命がけで怨んだに違ひない。しかし、今や敵なるベルニックの妻が、その子を救つてくれ、と歎願にきたのを見ては、そのあはれな一勞働者の胸に、その子を思ふ母親の愛が、ぴつたり共鳴したのである。彼は直ちに身命を賭して船に行き、石炭小屋よりベルニックの子を救ひ出して來た。一方ベルニックは恐ろしい運命の前に戰慄いてゐる時に、町では向うから行列がやつてきた。見れば、「ベルニック――社會の柱石」と云ふ電燈が點ぜられてる。そして、校長さんがベルニックの功績を稱して演説をする。これにより、却つて、ベルニックは耐らなくなつて、凡ての罪を公衆の前に白狀する。ざつとこんな風な內容であるが、これでもつてオールダー・ジェネレーションが悔い改めて、ヤンガー・ジェネレーションと一緒になつたことを示してゐる。

しかしイブセンは次の作「人民の敵」に於て、再び悲觀的になつてゐる。主人公になるストックマンは、町の凡てのもの、古い時代竝びに新しい時代に於ての大部分についてさへも、全く絶望して叫んでゐる。「あゝ、この町の生活は全く僞りでできて、虛僞のかたまりである。そこに一つの、いと小さい正しい事も到底行はれない」かくて、彼は村の凡ての人に叛かれたのである。妻も子も彼を理解できなかつた。そしてあの有名な「强者は唯一人ある時最も强し」と云ふ、最後の言葉を發する事になるのである。

イブセンは、この劇で、オールダー・ジェネレーションを代表してゐると稱する人も、ヤンガー・ジェネレーションを代表せりと自稱する人も、皆眞に社會を改造し革新し得るものに非ず、皆不純な動機に、又は輕薄なる雷同に過ぎざるものとしてゐる。そして、極く少數の人のみが、それをなし得ると言つてゐる。この極く少數の先頭

に立つ人は、如何なる人であるか。それは出來ない事を意志（ウイル）する人である。これが、イブセンの本心である。イブセンは、いつも大多數を持つてゐる、そして選ばれた少數者のみを信じてゐた。イブセンは、悲觀的の人であるけれども、その悲觀は所謂哲學者（フイロソフアー）のそれではない。何んとなればイブセンは生涯、永久に人間は不幸なものとは思はない。彼は常に物のまちがつた所を視る。しかしそれは改められんがために視るのである。彼は云ひ得べくんば、道德的悲觀者（モーラル・ペシミスト）である。

C「小さきアイヨルフ」

次に、このオールダー・ジェネレーションと、ヤンガー・ジェネレーションとの關係に就いて、父と子との關係の問題が、必然に起つてくるのである。近時、解放（エマンシペエシオン）と云ふ事が盛んであるが、私は人々の唱へてゐる勞働者の解放とか、婦人の解放とか云ふ事に加へて、子供の解放と云ふ事を唱へたいと思ふ。これについて、イブセンは「小さきアイヨルフ」と云ふ劇をかいてる。

アルマアスと云ふ男がある。彼は瞑想的な學者肌の人であつたが、意志薄弱な方であつた。勉强したいと云ふ目的で、リタと云ふ一人の若い女を妻とした。そして望み通り勉强もよく出來た。さうしてゐる中に、アイヨルフと云ふ可愛い子が生れた。アルマアスは、小さいその子が何を欲するかも知らずに、自分の好きな勉强を無茶に敎へこんだ。その子はだん／＼痩せてきた。妻は夫と異なり、全く現世的、物質的の要求の强い人で、極く面白い、快樂に充ちた、平和な家庭を作ることが目的であつた。或る日、小さいアイヨルフは、搖籃より落ちて跛になつた。アルマアスは、それを自分の責任と思ひ、非常に氣にかけて、何とかせねばならぬと思ひ、益〻一心にその小さい子に學問を敎へこんだ。妻は物質欲の强い、華やかな事の好きな女だから、醜い子供がうるさくて

見ないやうにする。アルマアスは「人類の責任」と云ふ本をかいて、妻子を置いたまゝ山の中にかくれてしまふ。そして考へた擧句、父としての使命を感じ悟つたのである。卽ち　小さきアイヨルフには、生の喜びを十分味はさねばならぬ、と云ふ事であつた。かくして、歸宅したけれど、小さいアイヨルフは、或る惡い女にだまされて、水に溺れてしまふ。そして、そこには一本の撞木杖が淋しく浮いてゐた。

イブセンはこのドラマに於て、ヤンガー・ジェネレーション卽ち子供の欲求する所が奈邊にあるか、少しも判らない所の、オールダー・ジェネレーションを描いてゐるのである。そして、それはいつでもこんな悲劇を釀すものだ、と云ふことを示してくれてゐる。

D「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」

今一つ深刻なのは「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」である。ボルクマンは、ベルニックとよく似た人間である。やはり實生活で、オールダー・ジェネレーションを利用して、出世しよう、と思つてる人である。其のため、戀してゐた女を捨てゝ、別の女を選ぶのである。それから、大いに事業に沒頭する。所が、捨てられた女を戀してゐた商賣仇がゐて、或る事情のためボルクマンに怨みを含む。そして何か惡事を洩らす。ボルクマンは懲役に處せられ、期間を終つて歸宅してからも、氣色すぐれず、二階に引込んでぢつと考へ込むやうになつた。妻は非常に自意識の强い、又野心のある女であつて、自分の一生涯はボルクマンのために、全く塞がれてしまつたと感じ、夫に對して非常な怨みを抱く。そして、子供だけは自分の好きなやうに、ほんとに偉い人間にしてやらう、自分の滿足のゆくやうな人にしてやらねばならぬ、と思ひ、一心になつてゐた。然し乍ら、ヤンガー・ジェネレーションは、オールダー・ジェネレーションの欲する事を、いつでも欲するものではない。何時の間にか、それは自分自身

の要求を持つてゐるのである。彼等の子供のエーヤハルトも、その母と、その母の妹の叔母さんから、寵愛され、教育されたけれど、決してその自由になるものではなかつた。そこにウィルトンと云ふ女があらはれる。人生の快樂に一杯になつて居る、ほんとに活き〳〵した女である。おのが落ちつくべき先を知らないで迷つてゐた、若きエーヤハルトは、忽ちこの女に熱中してしまふ。ボルクマン夫人及びその妹がほんとに大切にし、どうにかして自分達の許にひきつけようとするけれども、終にエーヤハルトは、ウィルトンなる女と、何處とも知れず去つてしまふのである。

このドラマに於て、イブセンは次の事を語つてゐる。親が子供を可愛がる、しかし單に、親が、子供を可愛がるだけで、果して好いものであらうかと云ふことである。イブセンはいつも自ら云つてるやうに "I am to question, not to answer." で、嘗て、イブセンは解答を與へてはくれなかつたが、しかし、かくの如く、我々の心に直ちにタッチする大問題を提供してくれたのである。

六　貧富の問題

今の世の中では、これは既決の問題であるから、こゝには極めて簡單に論じたい。

この問題のチピカルなものは、第二の時に云つた「社會の柱石」の中に表はれてゐると思ふ。ベルニックは、自分の社會の立場、オールダー・ジェネレーションの擁護のためには、富と名譽の保持のためには、如何なる惡事も、敢へて嫌はなかつた。富とか名譽とか云ふものは、何でもないやうであるが、眞にそれによりて生きてるものは、それの存否はその者自身の存亡に關するものである。

次ぎにアグネと云ふ勞働者も、その階級のものゝ、面白い典型を示してゐる。これから眞に社會を改善せんと

するものは、婦人と勞働者とのみであるとも云ひ得るであらう。

七　性の問題

A「ヘッダ・ガブラー」――「人形の家」

これはイブセンのテーマとしては非常に廣く取扱はれてゐる。元來彼は女嫌ひと評判を取る位、實際の世のありふれた男女關係になると冷淡であるが、しかも彼は自らの本能の力により、知らず識らず婦人の心に分け入り、そしてそれに同情してゐる。その態度は始めの「ブランド」の中のアグネスや、「ピーア・ギント」のソルヴェイの如くに、極めて理想に近い、良く見られた婦人から、だんだん皮肉に深刻になつて來てゐる。社會劇、問題劇を書くに及んで特に甚だしい。

彼は戀愛が生活手段として用ゐられるか、一時の出來心か、又は野心を充たす手段となつた場合には、きまつて思ひもよらぬ悲劇を惹きおこす事を書いてゐる。「幽靈」でも、もし牧師マンデルスが舊信仰に囚はれず、女ももう一歩徹底して自覺してゐたら、こんな結婚はしなかつたであらう。しからば、あの如く、悲劇はおこらないで濟んだであらう。又「ヘッダ・ガブラー」に於ても見る事が出來るのである。ガブラーは嵐の如きリズムを有つてゐた。彼女はレムボルクと云ふ男を愛してゐたが、あまりにレムボルクは偉い男なので、これと結婚しては彼女自身と云ふものが潰れてしまふだらうと恐れて、テスマンと云ふ、立派な好男子と結婚する。イブセンはこの事實、即ちガブラーが眞に自己の要求してゐる男に嫁がざりし事を、凡ての悲劇の原因なりとしてゐる。結婚と云ふ傳統に囚はれて、人間と云ふ立場を忘れてゐるのである。

「人形の家」の如きも、ヘルマンと云ふ男が唯何の事なしに、家庭を持たねばならぬと思つて、ノラを娶るので

ある。そして、ノラを眼の中に入れる位に可愛がるが、それは單に人形として可愛がつてゐたので、女の意志を尊重するなど云ふ事は、毫も考へなかつたのである。彼は妻に云つてゐる。「何を云つたつて、乃公が知つたことでない。お前は知つてるか、男と云ふものはその名譽のためには、妻でも何んでも、如何なるものでも犧牲にすべきものであるのだ」と。

凡てこれらは人間と云ふ立場を考へないで、始めに家を考へて、次に結婚を考へた結果である。

結　論

以上大體の話は濟んだのであるが、最後に申したい事は、イブセンは前申したやうに、アンサアを與へに來たのでなく、クェスチョンしに來たのであるから、決して解答は與へてゐないが、然しも一歩進んで踏み込んで見ると、イブセンのドラマの底に、一つのものがある事を發見するのである。個性、即ちそれである。それはニーチエだとか、或は近くはベルグソンだとかの云ふ、個性の存在と似た所がある。

イブセンは本能的に個性を感じたのである。しかし生涯その個性の扉をひらいて神祕を發見する事は出來なかつた。

A「我等死者の復活する時」

「我等死者の復活する時」と云ふ作は、この點より考へて非常にパセチックな劇である。リューベックと云ふ大野心を持つてる彫刻家がゐる。そしてイリーネと云ふ女をモデルとして、「復活の日」と云ふ立派な作品を仕上げた。そのモデル女は、全く心よりリューベックを愛敬して、全裸體になつて、その製作のモデルの役をつとめて、

凡てをリューベックに獻げてゐた。しかし、リューベックには全然ちがつた目的があつた。これを仕上げて大いなる名譽を得て、立派な家を立てゝ、美しい金持の娘を貰つて暮す考へであつた。それで、いよ／＼作品が完成しようとするときに喜んで曰く、「あゝ、これで俺も一安心した、漸くものになる。女よ、難有う。まあこれで濟んだ。これは、定めし俺の生涯の一つのエピソードとなる事だらう」と。

イリーネは、そこで失望して、姿をかくしてしまつた。リューベックは卽ち一人のアーチストであつた、人間ではなかつた。しかも、彼も亦決してアーチストとして滿足は出來なかつた。何故なれば、彼はこの像を完成したけれども、何だかまだ足らないやうな氣がした。名譽も望み通り得られた。しかもまだ滿足はいかなかつた。彼は其の妻のマイヤーに言つてゐる。「私の此の空虛の中には、生命を入れなければならぬ」と。さうだ、リューベックはアーチストたらんとしたけれども、アーチストとなつた時、それで滿足は出來なかつたのである。彼は人間にならなかつたからである。後、妻と別れてしまつた。そしてリューベックに失戀して、もぬけのからのやうに、影の樣になつてる、あはれなモデル女のイリーネと一緒になり、匿しがたい胸傷を嘆き、もうかへつて來ない昔の夢をはかなく趁うたのである。

B「海の夫人」

「海の夫人」の中でも、ワングルがその妻に、「女と云ふものは、夫の藝術のために生活せねばならぬ」と云つた時、エリーダは答へてゐる。「男と云ふものは、何と自分勝手なものだらう」と。

自然主義者が從來取つて來た態度は、これである。卽ちアーチストとしての生活である。

イブセンも亦、自らの生活に於て、この態度を徹底しようとしてゐる。しかしそれは人間としての生活ではな

かつた。結局、アイデアを得たけれども、ヒムセルフに生きる事は出來なかつたのである。唯わづかに自己を認めただけである。

「貴方は藝術家でした。唯藝術家で……しかし人間ぢやなかつたのだわ！」とイリーネのこの彈劾は、やがて、「私は唯建築師であつた。たゞそれだけで……」と云ふゾルネスの告白と共に、イブセンが晩年の痛切な懺悔でなければならない。

今後のあるべきアーチストは、それだから、リューベックの生活より一歩進んで　イリーネの生活を生きなければならない。そしてそれは、私達に殘されてゐる仕事でなくてはならぬと思ふ。（講演筆記）

（一九一九年十二月、東京帝國大學學生基督教青年會主催ユニヴァシティ・イブニングの席上にて講演。一九二〇年二月及び三月、「大學評論」掲載。同年五月、大學評論社出版ミネルバ・シリーズ第一册として發刊）

ホヰットマンに就いて

——新人會第二回學術講演會に於て——

私は茲に御依頼に應じて演壇に立つことになりましたけれども、新人會向きのお話などは出來さうにもなく、極く微温なことを申すに止まるだらうと思つてゐます。お氣の毒ではありますが目下の處私にはその外のことが出來ないのですから、我慢して聞いて戴く外はありません。題は「ホヰットマンに就いて」といふことになつてゐますけれども、この問題とても、私は何も專門的に、或は學究的に研究したのではなく、唯自分が好きに任せて讀み噛つたのを、そのまゝ秩序もなくお話するに過ぎません。この席には富田碎花君も來合せて居られるから、甚だ氣が引ける譯で、出來るなら同君に代つて戴くと好都合なのですけれども、さうも行きますまい。明晩はホヰットマンの詩や思想の事についてお話致しますが、今日はこの詩人の生涯のあらましを御紹介申さうと思ひます。

私の考へでは、人間には先天的といつてもいゝ位に二つのタイプがあるやうです。一方のタイプの人は、主義とか主張とかを持つた人で、隨つて理想家といふ型に屬します。或る目的でありますとか、主張でありますとか、さういふものを尋ねあてゝ、さうしてその主張なり目的なりに、自分といふものを適合して一生を賭してかかる人であります。かゝる人は自分の遵奉する主義の爲めには、甘んじて一身を犠牲にして顧みないのであります。それから他の一面には他のタイプに屬する人があります。これは米國人が俗語として使つてゐるローファー(loafer)といふ字で當て嵌めることの出來る種類の人で、主義の人又は理想家のやうに、外面的にははつきりした輪廓を持つて居りませぬので、謂はゞうろついて歩いてゐる人なのです。それが惡く行けば一定の職業もなく、

進取的な要求も持たない立ん坊風なものになりますし、善く行けばホヰットマンのやうな人になるのでせう。つまりそこら中を歩きまはつて、偶然ぶつかつたものに興味を持つ段になると、それにきつちりと關係を結んでしまひ、その中に在る處のいゝものを取つて自分の養分にしようと云ふ可なり蟲のいゝ立場に立つ人間です。だからローファー型の人はどつちかといふと、何時でも自分といふものが中心となつてゐます。これに反して第一のタイプの人にあつては、犧牲的の精神が强烈でありまして、人類全體の幸福であるとか、或は社會の狀況であるとかが、常にその人の生活を導いて行く動因となり基調となつてゐます。私は假りにかゝるタイプの人を主義の人と呼びませう。かういふ人は前にも云つた通り、自分の理想を貫徹する爲めには、多少の無理をしても、小逕に依つても、飛躍的に前途を急ぎ、その理想を人間生活の上に實現する爲めに、吾々の社會に一つの制度的約束卽ちインスティチューションを創立して、それを働かして生活の動力となし基調としようとする傾向を生じます。卽ち自分の理想に則つて、人類生活の中に或る外面的な規範を設け、其の範疇の中に凡ての人の生活を投じて、生活の趨向を純一にし統合しようとする傾向を生じます。而してこの目的を達成するためには、それに刃向ふところの凡ての既存のインスティチューションを容赦なく破壞し征服する決意を持つてゐます。それですからかゝる人はその事業の出發點近き期間にあつては、必ず既存制度からの迫害を受けずにはやみません。既に嚴存してゐる制度と、その人が新しく造り出さうとする制度との間に激烈な爭奪戰が行はれ、大抵の場合前者は古いものであり、而して大多數者の承認を受けてゐるものであるが故に、過去に扶植してあつた勢力を振つて後者を壓服迫害する經路を取ります。だから主義の人はその出發點に於ては大抵被迫害者となつて立たねばなりません。

然しながら一度その主義の人が迫害をはねかへし、自分の主張を徹底させて、その主張から生み出したインスティチューションによつて、人間の生活を統一することが出來るやうになると、今までの形勢は一變して、今度は

今まで迫害され續けてゐた主義の人は、自分が建て上げた理想の開山といふ格になり、或る人間生活の支配者になります。單に主義の人がさうなるばかりではなく、制度そのものが支配者になります。一度建て上げられた制度はそれ自身が自分に對する執着を持ち、有らゆる外界の壓迫に抵抗して、或はそれを征服してその存續と繁榮とを計らうとします。從つて一度は被迫害者の位置にすゑられた主義の人は、自分の目的が成就すると同時に自然に支配者の立場に立ち、自ら迫害者たるの面目を顯はさなければならなくなります。さうすることが自分の奉仕する理想に對して最上の態度であると考へなければならなくなります。

このことは私達が少し歴史を覗いて見ればすぐ發見される事實で、一つのインスティチューション(それは如何なるものであれ、結局主義の人が寄り集つて作り上げたものに相違ないのですが)が出來れば、その結果としていやでも應でも、何等かの形の壓制迫害が起らずにはゐません。そのインスティチューションが如何に人道的な理想と主義との下に建て上げられたものであつても、苟もそれが存續する限りは、その存續が鞏固で且つ有力であるに從つて、他のものを壓制する結果にならずにはゐません。

例へば基督の說いた教へはどの點から考へて見ても愛人愛世の溫かい感情に充ち滿ちたものであつて、それが他人に對して迫害を加へる結果にならうなぞとは考へることの出來ないものでありますが、それでもその弟子達が基督の教へを理想とし、こゝに一定の主義を造り上げ、而して一つの基督教會といふインスティチューションを創めるに至つては、私が前に述べた一般的な結果を裏書きすべき經過が漸次その教會內に發生したのは拒むべからざることであります。尤も基督の弟子達が始めその主義を提げて立つた時には、外界の壓迫を被つたことは恐らく前代未聞といつても差支へない位でした。今でも伊太利あたりに行つて見ますと、初代の基督教徒が如何程殘虐な迫害を被つたかをまざ〳〵と眼の前に思ひ浮ばせるやうな遺蹟はそこいら中で出遇ふことが出來ます、羅

馬のコロシュムに行つて見ると、五萬からの觀衆を收容することの出來るその大演武場の廢墟が、物寂しく壞れかゝつてゐますが、大きな卵形をなした石疊の眞中に、小さな一本の十字架が痛ましい姿に立つてゐるのを見るでせう。又羅馬郊外のカタコムベに行つて見ると、初代の基督教徒が羅馬市民の迫害から遁れるために、地下深く蟻の巢のやうに孔を掘つて、そこで禮拜をしたり、死んだ信者を葬つたりしたのですが、かゝる遺蹟はその郊外には到る處に大小色々なのを見出すことが出來ます。これらの地點を一度訪れた旅客は、當時の基督教徒が、どれ程恐ろしい迫害を被つたか、又どれ程堅固な道心を以てその恐ろしい迫害の下に自分達の信仰主義を貫徹しようとしたかをまざ〳〵と見せられて、思はず心から敬虔の心持を誘はれずにはゐられません。それらのことはギボンの「羅馬盛衰史」を讀んで見ても、シエンキェヴヰッチの「クオ・ヴァディス」を讀んで見ても、同樣に感ぜずにはゐられない所のものです。實に彼等は一基督の生涯に發憤して、世にも犧牲獻身の稀れなる生活を後世に永く殘したのでありました。然しながら私はこゝで單に殉情的になつてゐてはなりません。私にはもつと考へなければならない問題が殘されてゐます。何故ならば羅馬の町には以上申し述べた事蹟を裏切る如き他の遺蹟があることを默過する譯に行かないからです。例へばカムポデイ・フィオーレといふ廣場があります。花の野といはれてゐるやうに、今その廣場は靑物と花卉の市場になつてゐて、每朝そこには田舍から澤山の野菜賣りや花賣りが集まつて、平和な、美しい取引の場所でありますが、そこは嘗て基督教會の元首として知られた法王の命令によつて、異端者若しくは反教者と稱された自由思想の傾向を持つた人達が幾百となく燒き殺された所であるのです。その廣場の眞中にはジョルダノ・ブルーノーが頭巾を深々と被つて、物思はしげに俯向いて屹立してゐる銅像が建てられてありますが、「眞理は學者の有にあらず、僧侶の有にあらず、實にこれを愛するものゝ有なり」といつて、思想といふものを特權階級から解放してくれた近代文明の大恩人なる彼ブルーノーも亦、一人の異端者としてこの廣場で

焚かれたのであります。この一人の勇敢なる人類の友を焚き殺したことその一つでさへが基督教會史にあつて、どれ程の汚點を殘したものでありませう。又カステロ・デル・アンジェロといふ古城があつて今は聯隊の屯營になつてゐますが、その或る一部は世にも恐ろしい牢獄になつてゐて日光は全く這入つて來ず、食物は長い管を通つてどことも知れない所から投げこまれる仕掛けになつてゐます。そこにも法王廳の盛時には數多の異教者と稱せられた人が抛りこまれて、盲者のやうに食物を攫るのすら手探りで攫らなければならぬやうな憂目を見せられたのです。

かくの如き迫害の歴史は舊教が勢力を失つて新教によつて代られると同時に跡を絶つたかといふと決してさうではありません。今の新教徒は動もすると、基督教會の罪惡史は舊教全盛時代を以て終りを告げてゐるやうに考へる傾きがありますが、私は決してさうだとは思ひません。基督教會も一つのインスティチューションであつて見れば、制度といふものが持つ自らな弊害は免れることが出來ないのです。例へばジョン・カルヴィンが瑞西にゐて、瑞西や佛蘭西の僻村に住んでゐる人々に對して行つた猛烈な迫害や、英國教會が淸教徒に對して行つた迫害やは敢へて前代のものに讓らないといつてもいゝ位のものでありませう。淸教徒は遂に本國の迫害に堪へないで、信仰の自由を得んために故國を捨てゝ遙々亞米利加大陸に遁れて行くことを餘儀なくされました。彼等はそこに政治上にも信仰の上にも絶對に自由な樂園を創り出さうと目論見ました。しかもその氣高い企圖が完全に成就されたでせうか。否、彼等がインスティチューションの力を借りてそれを成し遂げようとした以上は矢張り駄目でした。私はこゝに單に一つの例を擧げて見ませう。それはトマス・ペーンの迫害事件であります。ペーンは御承知の通りワシントンや、フランクリンや、ジェファーソン等と共に米國建國の大立物でありました。彼は歐羅巴殊に佛國に渡つて、米國の爲めにその獨立と自由との爲めに輿論を喚起し、米國に多くの同情ある味方を招致した偉大なる外交家であり、政治家であり、且つ文士でありました。米國の世界に、發表した獨立の宣言書なども、ペーンの

筆に成つたものだとさへ考へられてゐます。ペーンは當時の佛國の自由思想を承けて神といふ觀念に對しては懷疑論者でありました。而して偏見なしに理性に從つて考へることが人として必須なことだといふ考へを抱いてをりました。而して「理性への訴へ」といふ小冊子を書いて、人類の自由はその思想にまで及ばなければならない。或る外界の權威によつてそれが左右せらるべきものではない。各人本然の道理に從つて神の問題も亦解決されねばならぬといふことを主張したのでした。所がその小冊子が公けにされた結果は如何でしたらう。彼は忽ち米國人全體から人望を失ひました。而してペーンは賭博者で蓄妾者で賣國奴であるといふやうなことが評判され、彼は忽にして國士から國賊にまで追ひ下げられ、紐育の陋巷に看護する人もないやうな有樣で窮死するに至りました。ペーンも固より人間でありましたから何かと人の非難を買ふべき行爲があつたかも知れませんが、世の非難の大部分は全く無實のことであつたのです。畢竟ペーンは神を信じない奴だから道德的である譯がない。道德的でない奴なら賭博や、蓄妾や、賣國位は當り前なことだらう。かう基督教を信ずる大多數の米國人は、天から決めてしまつたのです。而してこの異教者に對して相當であるべき待遇を加へたのです。近年に至るまでトマス・ペーンはこの汚名をそゝがれずに殘つてゐました。米國人は一般に神を信じなくなつたものが如何なる墮落をなすかのよい戒めにしてゐました。ところがホヰットマンの友達の一人にあたるロバート・インガソールといふ人が(この人も極端に當時の基督教の形式主義を憎んで、その名刀のやうな雄辯の力で到る處に基督教を攻擊し、大膽勇敢に振舞つた人でありますが)つむじ曲りの人で、トマス・ペーンの著書に牽きつけられて、段々その爲人を研究して見ると、米國の輿論が考へてゐるやうな人格では決してないのみか、單に發表したその思想が果をなして淺ましい汚名を蒙つてゐることを發見し、自分の身の上にもつまされて、火の如き同情をペーンの上に、甚だしき侮蔑を、當時の米國民に感ずるに至りました。そこで彼は自分が調査研究したトマス・ペーンの詳傳を發表し

て、ペーンといふ人は賭博者でもなければ、蓄妾者でもなく、又は賣國の徒でもなく、誰の前に出しても恥かしくない人格の所有者であることを宣言し、米國人の信仰的僻見を小氣味よく攻擊しました。而してインガソールの發表した所に若し誤謬があつたり捏造した所があつたりしたら、それを指摘した人に陳謝して莫大の金額を贈ることを言明しました。インガソールは當時の一般信者からは蛇蝎の如く忌まれてゐた人です。若し乘ずべき隙があつたら彼は無二無三にやりこめられてゐたに相違ありません。しかも何うでせう。米國廣しと雖も一人だに彼の矢面に立つて、彼の發表した處が事實に相違してゐると指摘し得た人はなかつたのです。氣の毒ながら當時の信者は自分達の信ぜんとする處を裏書きすべき事實を持ち合してはゐなかつたのです。この事件から考へて見るとトマス・ペーンといふ米國獨立の大恩人は、米國といふ自由を標榜して立つた國に住みながら、基督教會といふインスティチューションの主義に自分を適合させなかつたばかりで、半百年の間無頼兇惡なるごろつきとして取扱はれてゐたといふことが知れます。この一つの事實は凡てを語るに十分ではありませんか。一つのインスティチューションが勢力を得るに至れば、その目的主張は如何に崇高なものであらうとも、かゝる結果を生むものであるといふことを私は深く感銘させられるのであります。當時その國に住まつてゐた最も識見に富んだ人が、最も憐れな待遇によつて國民から酬いられたのです。

これらは單に簡單な例を申して見たに過ぎません。若し基督教會が少くとも十九世紀の中葉まで思想上の革新運動に對して加へた壓迫を一瞥するなら、一つのインスティチューションがどれ程の程度に迫害者たるの結果に陷るかを知る上に十分な材料が提供せられると思ひます。今では基督教は一つのインスティチューションとして、社會的に勢力を持つてゐませんから、眼に立つやうな迫害壓制の事實を見ることは稀れになりましたが、昔からの歴史を通觀して考へて見ると、今でも一旦勢力を恢復したならば直ちに一種の迫害者と變ずる可能性を持つと考

へることは、決して無稽な臆測とのみいふことは出來ません。

以上は單に一例として基督敎會なるものを引用したに過ぎないので、基督敎會に取つては多少御迷惑な事であつたかも知れませんが、私はこの考へを如何なる種類の制度であれ、苟も制度と名の付くものには押し弘めて考へることが出來ると信ずるものです。それが國家主義的制度であらうが、社會主義的制度であらうが、決して除外例となることは出來ません。

といつて、私は人類生活に於けるインスティチューション存在の必要、從つて主義に執着する傾向を有つた人の存在の必要を否定しようといふものではありません。主義とか理想とかいふもの、又それが結晶して出來上つたインスティチューションといふものが、人類一般の進步發達の爲めにどれほどの貢獻をなし來たつたかは十分高く値ぶみしてもまだ足りないものがあるといふことが出來ます。大體に於て人間社會はこれらの人々、從つてこれらの人々によつて改革され組織された制度によつて、今日までの程度に進步發達して來たといつて差し支へありません。私はその功績を決して忘れてゐるものではありません。

然しながらかゝる人々及びかゝる制度のみによつて人類が今日あることを得たか。これのみが人類を推進する唯一無二の力であつたかといふなら、私は明かに否と答へたいのであります。こゝに loafer と私の稱する人があります。彼はいつまでもたつた一人で步かうとしてゐる人です。自分が絕對の自由の中に住みたいが故に、他人にも絕對の自由を許さないではゐられない人です。又彼は彼自身が目指してゐる所に到着すると、直ちにそこから無終の道にさまよひ出ます。彼がいつでも一番大切に思ふところのものは彼自身です。彼の已みがたい希望欲求、それは一見所謂理想とか主義とかと同じものゝやうには見えますが、その實現と形式化とを拒んでゐる所に所謂理想とか主義とかといふものと異つたものがあります、いつでも彼の希望が實現されると、彼はもうそこには足

を停めてゐません。彼の欲求が達成されると彼はもうそこから一歩を轉じてゐます。彼は已む時なく生活の途上に立つところのもので、宿屋に鞋をぬぐものではありません。彼はいつでもインスティテューションを通しての人間と人間との交渉を避けて、端的な人間と人間との交渉を求めます。かくの如き人は常に何等かの意味において被迫害者です。インスティテューションに味方する人が或る時期には被迫害者として立つが、そのインスティテューションが成立すると迫害者に變ずるのとちがつて、徹頭徹尾迫害されるものとして生きて行かなければなりません。それは實際の人間生活において何といつてもインスティテューションの勢力が强い間は已むを得ないことです。loafer は何が故に被迫害者として世を終ることに滿足するかといはれるなら、それはその人の性分だから仕方がないといふ外はないのです。基督教會の例を前に引きましたから、それについてもう一つ例を考へて見るなら、私の眼から見ると、基督教會の創始者と稱へられてゐる基督その人は絕大な loafer の一人であつたかと思ふのです。今の基督教會は基督の名に於て成り立つてゐるものですが、今假りに基督がこの世に生まれ出て來たとし、現存の基督教會の人達が彼の許に來て、この世界中に多數の信徒を有するわが基督教會は、實にあなたの言行に基いて建てられたものであります故、その教會の元首となつて下さいと頼んだと想像して見たら如何でせう。若し私に自由な想像が許されるなら、基督は必ずその教會に屬することなく、或は教會に對して非難の聲を擧げるやうなことが起るのではないかと思ふのです。それは基督がこの世にあつた時の生活から推して考へられないことではないと思ひます。彼は第一その生まれ故鄕から迫害されました。その母その兄弟から離れました。ユダヤ國から超越しました。而して捕縛された時には弟子の一人をだに頼まず、孑然として唯一人刑場の露と消えました。彼の死を以て守らうとしたものは、故鄕でもなく、肉親でもなく、故國でもなく、同行者でもなく、彼の正しい存在そのものであつたのではありませんか。彼の正しい存在が不可能であらうとする所にのみ彼は戰ひまし

た。然しながら地上に於ては彼の戰ひはいつまでも大多數の爲めに手もなく押しひしがれたやうに見えました。それでも彼は少しもそれを悔ゆべき事とは思はず、自分といふものをその迫害の間に何物にも代へがたく大事に守り通しました。而して彼は死ぬまで迫害を受けて孤獨に死にました。それが基督の生れつきだつたのです。已むを得ざる要求だつたのです。この狀態は基督の名によつて建てられたと稱する基督教會の歷史とは大分懸け離れたものがあるではありませんか。だから私の想像からいふならば、基督が現代に生まれ出たならば、基督教會に屬しようとしないのは勿論、恐らくは基督教會を非難するのではないかと思ふ所以であります。

近頃、大山郁夫氏の譯されたラッセル氏の「露西亞訪問記」を讀むの機會を得ましたが、私はそこにも一つ心を打たれたるものを發見しました。私はラッセルのものを始めて讀んだのですから、ラッセルといふ人が果してどれ程の見識を持つてゐる人だか、それは知りませんが、私のこゝに云はうとするのはその議論ではなくしてその中に出て來る一つの事實です。ラッセルがレーニンやトロッキーを訪問すると、二人とも今露西亞が經過しつゝある更新運動に對して絕對のジャスティフィケーションをなし、世界を救ふの道はこの革命の外にはあり得ぬと確信してゐるのを知ることが出來ます。所が其の後マキシム・ゴルキーを訪問した時の記事によると、勿論ゴルキーは瀕死の狀態にあつて、多く語ることの出來なかつたのも一つの原因ではあつたでせうが、お前が英國に歸つて露國の實情を世界に披露する時、露國の人民がこの革命の爲めにどれ程痛烈な苦難を嘗めてゐるかといふ一事を、强言するのを忘れてはいけないといつた言葉が、ラッセルを殊に動かしたやうに見えます。私はラッセルの書いたものは一冊も讀んだことがないが、レーニンの書いたものは一二冊讀んで感心させられた一人です。あゝいふ偉い人（といつた所が今まで人々が用ゐた偉人といふ意味とはこの場合少し違つた意味で考へていたゞかねばなりません）が出てこそ露西亞崩壞の結果にも光明を認めることが出來るのだと沁々思はされたことでしたが、其の人

人から重んじられてゐると稱せられるゴルキーの言葉は、またちがつた意味で露西亞の偉大さを私に思はせました。ゴルキーは確かにボルシェヴィズムの贊成者であるに違ひありません。彼はその爲めに勞農政府からも十分な敬意を以て待遇されてゐるのです。然し彼の心の中には過激派の主義が實現されるまで、又は實現された後に横たはつてゐる物足らぬ或るものを感じてゐるのだ。レーニンの主張の最後には無制度といふことが豫想されてゐるとしても、制度を肯定して無制度を豫想するといふことは、理論的に考へられないではないとするも、實際には非常に多分の危險を含んでゐることだ。それをゴルキーは逸早く感付いてゐるやうに見えます。ゴルキーの藝術から考へて見てもそこに氣付くのが當然のやうに見える。私は結局そこに少し動かされました。

人はいふでせう。お前は丸で夢想家のやうなことをいふ。現代のやうな過渡期に當つて制度を除外して何處に人間の生活が成り立ち得るか。若しくは在來嚴存してゐた制度といふ敵の武器を奪つて、敵を斃すことなしに、いかなる改革の方法があり得るかと。これは否定せんには餘りに鞏固な抗議です。今の世の中で制度といふものを無視しては、成程人間の生活といふことは考へられないので、制度無視などは誠に夢想の甚だしいものだといはねばならないかも知れません。少くも實際味を持つた言説とはいへますまい。

然しながら一歩を進めて、若し實際的といふことを眼目にして考へなければならぬとならば、少くとも日本などでは社會主義者の主張などは實際的といふ點からは可なり懸け隔つた所にある主張だといはねばならぬことになります。現在の國家主義と餘り撞着のない社會政策主義とか溫情主義とかで一時の緩和を計畫するのが最も實際的な手段でありませう。かゝる手段に全力を盡して將來の地盤を漸次に固めて行くのが最も實際的なことでありませう。然るに社會主義の人々はかゝる極めて實際的な方面を飛躍して、稍實際的といふ點からは距離のある新制度の建設を目論んでゐるのです。かうなると社會主義も或る程度に於ての夢想であります。社會主義的制度

を現在に夢想するのと、社會主義實現後に將來せらるべき無制度を夢想するのとは、その夢想であるといふ點に於ては共に等しいといはねばならぬのです。かうなると社會主義制度を實現しようと勉めるのと、凡ての制度的生活から解放されようと望むのとは、性格の根本的相違であるといふことに歸する外にはありません。前者は即ち主義理想の人の主張であり、後者は loafer の願望であります。

そこにはいづれにも功過があり、いづれにも實現に難易がありませう。loafer とは常習的叛逆者と稱することが出來るかも知れません。制度なしには生活することの出來なかつた現代までの歴史の上にあつては、この種の人間は確かに厄介極る代物であつて、そんな人間の多産するのは治安の妨げになりましたから、社會が知らず識らずの中にこれを迫害し、その社會に及ぼす或る保健的な影響を無視輕蔑しようとした傾きがあります。水の中の油のやうに取扱はれた傾きがあります。然し私はこの種類の人をかく待遇することに不服を感じます。この種類の人は今までのやうに取扱はるべきではないと思ひます。私は彼等が迫害の中に、大事に一つの代から一つの代へと抱きかゝへて來て、更に後代に傳へて行かうとする彼等獨得の所有物に深い愛着を感じ、その爲めに彼等の業績に對して祝杯を擧げ、最上の敬意を捧げたいと思ひます。私がこゝにホヰットマンに就いて述べようとするのも、畢竟私のこの心持の延長に過ぎないのであります。

偖て大變に前置きが長くなりましたが、前申した通り私一個の考へではホヰットマンといふ人は近代に現はれた可なり顯著な lo.fer の一人だと思ひます。アディグトン・サイモンズも「彼はa bit of loafer だ」といつて居ります。かういふ立場から彼を觀察して見るのも、私に取つては可なり意味のあることであります。

然し同時に、loafer であるが故に彼の面目を一つの形式に表はして述べるといふことは全く難事です。さういふ企てをするが否や、彼の匂ひは何處かに消えてしまひます。從つてこの講演は私のやうな頭の蕪雜なものには

都合よいことですが、聽衆諸君には極めて不都合であるやうに取りとめのつかないお話になるに相違ありません。

第一ホヰットマンは自分が誰にでも正解さるべき人間ではないといふことを繰り返して述べてゐます。例へば、

「私の手を握る君が誰であらうと、
この一大事を忽せにしては何の甲斐もない。
君が更に私を試みる前によくいつて聽かすが、
私は君が想像するやうなそんなものではない、遙かに違つたものだ。

私の追隨者であらうとするその人は何者だ。
自ら進んで私の愛慾の的とならうとするその人は何者だ。

そこに行く道は疑はしい――結果は怪しい、ひよつとすると破滅だ。
君は他の凡てを捨て去らなければなるまい――私だけが君の唯一無二の神たらんと求めるだらうから、
しかも君の修道は久しきに亙り且つ苦しいだらう。
君が今までに築いた人生觀の凡て、君の周圍の人々との凡ての調和を、共にかなぐり捨てなければならないだらうから。

だから今の中に、これ以上の苦しい思ひをする前に、私を離れ給へ――君の手を私の肩から放し給へ、
私を卸してくれ給へ、而して君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。

でなければ、そつと、試みに、大空(おほぞら)の下の或る森蔭か、岩の蔭か、

何んとなれば屋根のかゝつた家屋の中には私は姿を現はさないから――若しくは人の集る所にも、而して圖書室の中では私は啞か、內氣者か、まだ生まれ出ぬものか、死んだものゝやうに無爲だから。

然し多分は屹度、高い丘の上で君と共に――誰か他の人が數里の彼方から思ひもかけず近づいて來ないやうにそれを見極めておいて、

或は多分屹度、航路の間に、若しくは海の汀で、若しくは何處かの靜かな島の中で、

そこで私の唇に君の唇を接することを許すだらう、

仲間同士の長い接吻を、或は花婿の接吻を。

何となれば私は花婿だから、而して仲間だから。

若しくは君の望みとなら、私を君の衣物の下にたくし入れて

君の心臟の鼓動を感じ、君を抱擁の中におくことが出來るやうにして、

君が大地大海に旅立つ時に私を伴ひたまへ。

かくて單に君に觸れるだけで私は滿足し、十分に思ふ。

而してかく君に觸れながら、私は靜かに眠つて永久に運ばれて行きたい。

然しこれらの諸頁を君は危險を冒すことなしに學ぶことは出來ぬ、

何んとなれば、これらの諸頁と私とを君は理解し得ないだらうから。

彼等は先づ君から避け逃げるだらう、而してその後にも亦――私はたしかに君から逃げ遂せるだらう。

君が確かに私を引き捕へたと思ふに相違ない時、見よ！

君は旣に君から逃げてしまつた私を見出すだらう。

何んとなればこの本に含めてあることを書くためにこの詩集を書いたのではないから、
或はこれを讀んで君がその意を知悉する譯には行かないから、
又私を尊敬して、誇らしげに私を讃美する人が、最もよく私を知つてゐる人ではないのだから、
又私の愛に潤はうとする人が(極く少數の外は)成功する譯ではないのだから。
私の詩はいゝ事ばかりをしはしない――同樣な惡い事、ひよつとするとそれ以上の惡い事をするのだから。
何んとなれば君が幾度も探り當てたと思つては、探り當てそこなつたそのもの――私が暗示したそのものなしには、凡てが何んの役にもたゝないから。
だから私を離れ給へ、而して君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。」

("Whoever You are, Holding Me now in Hand.")

かういふ徹つ放し切つた心持で彼は藝術を創つてゐたのです。又かうも歌つてゐます。

「私が讀む時、有名な傳記を、
而してこれが(と自問自答する)著者が一人の人間の傳記と呼ぶところのものなのかと。
而してそのやうに誰かゞ、私が死んで世を去つた後、私の傳記を書くことだらう。
(恰かも誰かゞ私の生活のちよつぴりでも本當に知つてゐたかのやうに、
所が、私自身すら、屡々考へることだが、自分の本當の生涯を全く知つてはゐないといつていゝのだ。唯僅かばかりの暗示――僅かばかりの、散漫な、かすかな示唆、
それを私は、私の用途の爲めに、こゝに書き記さうとするだけだのに)」

("When I read the Book.")

私はかゝる警戒に對しては非常に愼まねばなりません。私には彼のことを語る資格さへないやうに感ぜられます。それ故諸君も私の言葉に一々信用を置かずに聞いていたゞきたい。

ホヰットマン家で知られてゐる一番の先祖は六百六十年代に英國から米國に移住して來てハンティングトンといふ所に定住を構へたのです。而して詩人ホヰットマンはその人から七代目の子孫になります。その父はウォルターといつて先祖以來住み續いたロング・アイランドのウェスト・ヒルといふ小さな町に住んでゐた大工であります。ロング・アイランドは亞米利加印度人によつてポウマノックと稱せられた細長い島で、ポウマノックとは魚といふ意味ださうで、島の形がよく魚に似てゐます。地圖もない時に印度人はよくもさうした名をつけたものです。今はこのロング・アイランドの或る一部は非常に繁華な遊興地になつて、紐育市民をひきつけてゐますが、その當時は寧ろ荒涼とした、人口の稀薄な土地であつて、印度人も住んでゐれば、襤褸に身をまとうた農夫が、草生地に牛馬を放牧して、夕方になるとその群れが陽の光を後に背負うて家路に歸つて行く光景なども淋しく眺められた所であつたらしく見えます。外洋に西面した海岸には salt grass といふ草が亂雜に生え茂つてゐて、そこには海鳥が巢を作つたり、そこから見やられる海上では、小さな帆前船が難破したりしたやうです。ワルトは小さい時にはこの海岸を逍遙して、鳥の卵を見付けて步いたり、鰻を釣ることに半日を暮したりして、生涯消すことの出來ない深い自然からの印象を受けたやうに見えます。

父のウォルターといふ人は、ぶつきらぼうな默りこくつた勤勉な職人で、理窟も何にもない敬虔な信者であつたやうに見えます。殊にエリヤス・ヒックといふプレスビテリヤンの牧師には無條件的に敬意を抱いてゐて、その人の說敎といふと屹度聽きに出かけて行つて、默つて行つて默つて歸つてくるといふやうな人でした。それに反

してその母のルイザ・ヴァン・ヴェルソアは和蘭人の血統を引いた快活な婦人で、頑丈な落着きのある、家事にも世事にも抜目なくまめ〳〵と働くといつたやうな人らしく見えます。ワルトはこの夫婦から生まれた九人の子の中の二番目で、一番上の兄は氣狂ひになつて死に、最後の弟なるエドワードは白痴でありました。是等の憐れな性格の破産者の中からワルトは最上の血を自分一人に貪つて生まれ出たのかと思はれます。實際その九人の兄弟の中、世に残るやうな仕事をしたのはワルト一人で、ホヰットマン家はその外に何等の業績も擧げ得ずに散り〳〵ばら〳〵になつてしまつてゐます。つまりホヰットマン家は一人のワルトを生み出す爲めに幾代といふ血統を持ち續けて來た觀がないではありません。自然といふものは贅澤な浪費を平氣でするものです。

ワルトは一八一九年五月三十一日にそのウェスト・ヒルといふ所に生まれました。文政二年に當ります。其の前年にはカール・マルクスが生まれてゐます。又ワルトと同年には、かの大評論家であり、美文家であり、社會革命家であるジョン・ラスキンと、米國の生んだ詩人の一人なるローウェルとが世の光を見てゐます。一八二三年(四歳)に家族と共に紐育の對岸なるブルクリンに引き移つて、父はそこで建築請負と大工とをやつてゐました。ワルトは十三歳まで學校の教育を受けましたが、暮し向きの不如意の爲めにその後は全く獨學で自身を鍛へ上げねばなりませんでした。第一にはクラークといふ辯護士の事務所に傭はれ又醫者の玄關番ともなり、遂にロング・アイランド・パトリオットといふ新聞社の植字工に住みこみました。そこにゐた職工長は僥倖にも讀書の好きな人で、小さなワルトにも頻りに讀書の利益を説いて、色々な書物を貸してくれたので、ワルトはその生涯の趣味なる讀書癖をこゝで作るに至りました。その頃ワルトが好んで讀んだ書物は聖書、アラビヤン・ナイト、スコットの小説類及びシエクスピヤなどで、殊にスコットの著書には耽溺したといつていゝ位でした。一八三七年(十八歳)にロング・アイランドに歸つて學校教師となりましたが、その頃の事を追憶した或る人の記載によると、「苛酷ではな

いが威光があつて、態度は極めて眞面目で、婦人に對しては几帳面で、宗教的な所は何處にもなかつた」としてあります。又後年英國のジョン・ジョンストンがワルトの生まれ故郷を訪問した時、偶然邂逅したワルトの古い弟子の追懷談によると「ワルト・ホヰットマン――といふより私達はワルトと呼び慣はしてゐたが――は私の最初の先生でした。あの人はこゝで一年程學校をやつてゐましたらうか。ワルトは教師として失敗だつたとは云へないが成功した方でもなかつた。どうも柄にはまつてゐませんでした。自分のすべき仕事に精出すよりも始終考へたり書きものをしてゐました。……學校で教へるのがあの人の天職ではなくつて、その天職は詩であつたのです」といつてゐます。而してジョンストンがホヰットマンが死んだら、この土地に墓を營むといふのだがといふと、その爺さんは「戲談ぢやないあの人は死ぬやうな人ではない」と叫んでゐます。これでワルトが青年時代の樣子が髣髴され、どれほど人として隣人に愛慕せられてゐたかゞ想像されます。この頃からワルトは詩人としてのおぼろげな自覺を感じたらしく見えます。その日記によりますと、

「私が何か後世まで殘るやうなものを書きたいとの希望を起した最初は、一ぱいに帆を擧げて走る船を見た時だつた。私は見たまゝをその通りに表現して見たい欲求を感じた」

といつてゐます。恐らく學校の教師をしてゐる時分に、散歩の序でにでも海岸でその船を見たのでせう。大きな海原を一ぱいに帆を擧げて走つて行く一隻の船、それはそのまゝ一つの神祕であります。象徵であります。一人の loafer なるワルトに取つては、その船の陸地から遠ざかつて行く姿は、或る屈竟な暗示を彼の魂に刻んだに相違ありません。ワルトの詩の中殊に晩年の詩の中には海に乘り出して行く船を歌つたものが數篇ありますが、それらは何れも潮風の匂ひを嗅ぎ得るやうな、生々とした力強い暗示を含んだ立派な詩であつて、眞に後世まで殘るべき價値あるものであります。一八三九年(二十歲)にハンティングトンに於て「ロング・アイランダー」といふ新

聞の發行を企てました。彼は自分でそれを書き、自分で印刷し、而して自分で配達しました。だから到底長續きのする筈はありませんでした。で一八四一年、二十二歳の頃には紐育に出て、デーリー・オーロフといふ可成り大きな新聞社の記者になりました。當時のホヰットマンの風采は晩年の彼のそれとは大分違つたもので、頭にはシルク・ハット、體(からだ)にはフロック・コート、それに釦の穴にはいつも花を挿して、しなやかなステッキを持つて歩いてゐたといふ事です。その頃の文體も亦、あり來りな華やかなものであつて、何處にもホヰットマンの純粹な姿は現はれてゐず、殊にアラン・ポウが當時は非常に愛讀されてゐたので、その文體にならつて殆んど識別の出來ない程の小品などを書いてゐた樣です。然しその頃から、詩を書かうといふ氣持は、目ざめてゐました。「幸福であれ」といふ題で作詩を試みようとした形跡はありますが、然し本當のものは、未だ現はれてゐません。

ホヰットマンがその頃愛讀してゐたものは、シエクスピア、新舊約聖書、コーラン、オシアン、ホーマー、エスキュラス、ソホクレス、ダンテ、スコット、ニーベルンゲン物語、古代印度の詩歌等であつたといふ事です。

此の頃から、アメリカの致命的な大問題となつた奴隷廢止の運動が南北に起り始まつたので、北方人なるホヰットマンは奴隷廢止に加擔して時々、自分の意見を發表したり、またはそれに就いて、一つの詩を書いた事もあります。その詩は、後年の彼の詩と比較する上に多少の興味がありませう。

"BLOOD MONEY"

I

Of olden time, when it came to pass
That the beautiful God, Jesus, should finish his work on earth,

Then went Judas, and sold the devine youth,
And took pay for his body.

Curs'd was the deed, even before the sweat of the clutching hand grew dry;
And darkness frown'd upon the seller of the like of God,
Where, as though earth lifted her breast to throw him from her, and heaven refused him,
He hung in the air, self-slaughter'd.
The cycles, with their long shadows, have stalk'd silently forward,
Since these ancient days—many a pouch enwrapping meanwhile
Its fee, like that paid for the son of Mary.

And still goes one, saying,
"What will ye give me, and I will deliver this man unto you?"
And they make the covenant, and pay the pieces of silver.

II

Look forth, deliverer,
Look forth, first-born of the dead,
Over the tree tops of paradise;

See thyself in yet continued bonds,
Toilsome and poor, thou bear'st man's form again,
Thou art reviled, scourged, put into prison,
Hunted from the arrogant equality of the rest;
With staves and swords throng the willing servants of authority,
Again they surround thee, mad with devilish spite;
Toward thee stretch the hands of a multitude, like vultures' talons,
The meanest spit in thy face, they smile thee with their palms,
Bruised, bloody, and pinion'd is thy body,
More sorrowful than death is thy soul.

Witness of anguish, brother of slaves,
Not with thy price closed the price of thine image,
And still Iscariot piles his trade.

二十七歳にはブルクリン・イーグルといふ新聞の記者になり、一八四八年（二十九歳）の時にはニュー・オルレリアンスで發行されてゐる、クレッセントの記者として招聘されて始めて南方に旅行をしてその眼界を弘めました。恐らく此の間に南方に於ける黒人の生活及びそれを使役してゐる資本家達の行跡をも、彼獨得の詩人らしい目を以て觀察して來た事と思はれます。後一度紐育に歸り、弟のジェファソンと共に、再び旅に上つてミシシッピイ流域

を溯り、大湖地方を經て歸つて來ました。此等の間に於ける彼はどんな生活をしてゐたかといふのに、世の常の勤勉な若者とはいふ事が出來なかつた樣です。記錄によると、彼はどつちかといふと、少し物うさで怠者らしい處があつて、人々と一緒に畑などで働く時でも、どうかすると、仲間を離れて五分乃至一時間位草原に行つて、仰向けに寢て、日向ぼつこをしてゐるかと思ふと、何か物を書いたりするので、人々は彼奴怠けてゐると、云つたものださうです。然し彼は斯くの如き生活の間にも、絶えず心中では、觀察し、攻究し、勉强してゐた事が知れる。殊に紐育といふ大都會の生活は彼を極度に蒸し付けた。

一體、私達は動もすると習慣に泥んで、新しい物の姿と、意味とを、見極める事が出來ない。人類の近代的生活の中に現はれて來た都會生活といふものも、新しいものゝ一つと云はなければなりません。田園を讃美し、自然に憧憬するのが詩人の本質の樣に心得てゐる人々には、此の新しい人間生活の斷面は、奇異な、蕪雜な、誤られた現象としてのみ映るかも知れませんが、そこには發見せられざる、美醜と、喜びと悲しみとが、自然の中に在る樣に又田園の中に在る樣に、交錯して存在してゐるものと思はれます。ホヰットマンは恐らく此の姿を的確に掴み得た詩人の先覺者であつたと云はれるでせう。彼は紐育市の大道や渡船場を日ねもす往來して、都會が生み、都會が育てた特種の人間、卽ち、乘合馬車の馭者、渡船の船員、町の女、さう云ふものに、飽く事なき愛着を持つた樣に見えます。乘合馬車の馭者臺に乘せて貰つて、喧騷を極めた雜閙の中で聲を張り上げて、シエクスピアの中から、有名な句を高唱して、馭者に聞かせてやつたり、渡船に乘つたまゝで、ブルクリンの兩岸を幾度も往復して日の暮れるのを忘れたりしたのは有名な話柄です。後年ホヰットマンが一人の老人になつてしまつてからでも、稀に紐育に出たりすると、思ひもかけない勞働者から親しく名を呼びかけられて、往來の眞中で古い思ひ出話を取り交はしたといふ樣な事が傳へられてゐます。

婦人との關係、これはホヰットマンを研究する人が、いつでも知りたいと思ふ處のものです。彼は終生正式の結婚をしてゐませんでしたから。アディングトン・サイモンズはホヰットマンの有力な批評家の一人でありますが此の人は、同性戀愛研究家であつただけにホヰットマンの性的生活に對しては殊に知りたいと思つたと見えて、それを隱しだてなく告げて欲しいと頼みました時に、ホヰットマンはから答へて居ります。「私の青年及び中年時代、南方その他にあつての生活は、享樂的で肉的で必ず非難を受くべきものであつた。結婚はしなかつたが、私には六人の子供がある、二人は死んだ。一人の生き殘つてゐる南方の子供は立派な兒だが、時々私に手紙をかく。境遇は、それ等の子供と私の關係とを引き離してしまつた」と答へてゐる。又、ホヰットマンは生活の有らゆると「一八三七年から一八四八年の間といふもの丶精しい事を云ふ必要はないが、ジョン・ボロウスの手記による經驗のどん底をさぐり盡したと云つていゝだらう。凡ての情熱、凡ての快樂、さうして凡てのアパンドンメント(耽溺)。彼は若くて健康も申分なく紐育といふ十分の機會を彼に與ふべき、場所柄を控へてゐたので、此の期間の行狀を私は「アグムの子等」及び彼の著書の他のもの丶中に發見する事が出來る。例へば、

「或る時私は賑やかな市の中を通つて行つた、將來に役立てる爲めにその市の光景、建築、習慣、傳說を心に印しながら、

けれどもその市の凡てのもの丶中で、愛するが故に私を引きとめた一人の女性に偶然出遇つた、それのみを覺えてゐる。

晝は晝で、夜は夜で、私達は一緒にゐた――餘の事は一つ殘らず夙うに忘れられた。

本當に私は熱情もて私にすがりついたその女性ばかり覺えてゐる。

再び私達は彷ひ、私達は愛し、私達は再び離れる。

再び彼女は私の手を取り、行つてはならぬといふ、
私はすぐ私のそばに悲しげに唇を震はして默つてゐる彼女を見る。」

といふ詩の如き確かに彼が紐育市放浪中に起つた出來事の一つをそのまゝ表現したものと云へる。その言葉の調子の中には「實感のみが發し得る響きがあるから」と云つてゐます。

然し四十三歲卽ち彼が弟ジョージの負傷を聞いてワシントンに出かけて行つたその年頃からは、彼の性的生活には一點の汚點もなかつた樣である。「私はこの日この時から私の生活の上に清淨な、完全な、樂しい、純血な健康を來らせる決心をした。水と純粹の牛乳の外は、凡ての飮料を却け、油氣の多い肉や、晚い夕食を却け、大なる肉體――淨化され、淸潔にされ、精神化され、精力づけられた、肉體」と、その頃の日記に彼は書いてゐるし、又、ピーター・ドイルといつてその頃からホヰットマンと極く親しく暮してゐた男もホヰットマンの生活は此の日記の言葉を少しも裏切らないものであつたと證言してゐます。

其の後、ホヰットマンはずつと、紐育で過してゐましたが、一八五三年三十四歲の頃あたりから、その生涯の目的は始めて形が纏まつて來たやうです。「三十一から三十三の間、私はいろ〳〵な目的や、その追求に年を經た後、一つの特別な欲求と確信とを持たされるに至つた。もつと精確に云ふと、それは私の全生涯にも隱見してゐた欲求で、或る時には不圖現はれ、多くは朦朧としてゐたのであつたが、やがてそれが屢々表面に現はれて他の凡てを壓倒して、明かな形をとるに至つた。それは詩的な形式に於て、拘泥する事なく、私自身の肉體的な情感的な道義的な智的な美的な、個性を忠實に申し出し、表現しようといふ感情、或は大望であつた。此の現在の驚異すべき精神と事實の眞中にあつて、これに共鳴し、場所と時とにしつくり當て嵌つた個性を今迄のいかなる詩、若

しくは書物よりも一層、明確な普遍的な感じを以て、探り出さうとする大望を持つに至つた」。又かうも云つてゐます。「新しきもの丶記錄をかけ、他の著者からは何等の拔き書きも引照もするな……」。シエクスピア、ウォルター・スコットも、ホーマーがあつたやうに、實に立派な詩作者であり、記錄者であつて、恐らくは、記錄者の最大なるものであつた。それ等の凡ての人は、性格と事件とを描寫すべき大手腕であつた。私も亦、私なりに巨匠であらうとする、來去に任せて感情に滿ちた詩を作り、自由の詩を歌ひ、個性を表現しよう……」

多分此の頃の事でありませう。彼はエマアソンの作品を愛讀してゐましたが、或る時その自然論を衣囊（ポケット）に入れて仕事に出かけ辨當を喰ひながら、それを讀んでゐた或る瞬間に天啓の如く、彼の仕事の方向は、定まりました。「私は、エマアソンによつて、詩人となつたのではない。私が其の時に詩人となつたのだ。私の衷に、煮えてゐたものが、エマアソンにとつて沸騰するに至つたのだ」と、彼自身其の當時の心持を書いてゐます。それから、彼は暇ある毎に詩を書き續けました。

一八五五年、彼が三十六歲の時に、自分で活字を拾ひ、自分で印刷して、十二の詩を含有する百部の小冊子を印刷しました。さうして、それをその當時の知名な文學者などに送りました。其の結果は、實に大抵の人を、絕望させるに十分なものでした。ホヰッチアーは、碌々讀みもせずに、ストーヴの中に投じ、或る他の作者は、寄贈書を返却して寄こし、ローウェルは如何に讀んでも更にその意味が通じないと告白し、倫敦クリティックの如きは、「ワルト・ホヰットマンの詩に通ぜざる事は、老豚が數學に通ぜざると相等し」と酷評を投げつけました。ホヰットマンは後年その時の事を回顧して、云つてゐますが、「その書が、激怒と、彈劾との嵐を到る處に惹起するや、私はロング・アイランドの東端に退き、再び確固たる決心を以て紐育に歸つて來た。爾後私の決心は、いさゝかもゆるがない。私は私の詩の事業を、私の方法に從つて、結末まで、力の及ぶ限り續けて行かう」と。

然し詩集の寄贈をうけた人々の中には、いみじくも彼の詩を十分に理解した人も少しはあつたのです。エマアソンの如きも直ちに書を寄せて、「私は貴君の偉大なる生涯の劈頭に挨拶を贈ります。斯くの如き出發をされた以上はどちらの方向にせよまだ〳〵長い前途が切り開かれなければなりますまい。私は此の書の中にある太陽の光が、若しや幻影ではないかと思つて少し許り目をこすりましたが其の堅實な見識は疑ふ事の出來ない實際であるといふ事を發見しました。此の書は確實で奬勵的である點に於て最上の價値を有つてゐます」と云ひ送つてゐます。それのみならず、エマアソンは一本を遙かにカーライルに送つて此の稀有な作品を英國に紹介しようとさへしました。所がホヰットマンの家庭内では、此の詩集は全く無視せられてゐたのでした。其の弟ジョージの言ふことによれば、「私は詩集を見たが全く讀まなかつた。讀む程の値打があるとは考へないで、少し許り字をひろつただけだつた。母も私同樣の考へで、何んだかさつぱり譯がわからなかつた。母はワルトの本をヒヤワサ（ロングフェローの敍事詩）に比べて二つ共に同じ程度の駄作だ。で若しヒヤワサが詩ならワルトのもさうかも知れないといつたのを記憶してゐる」といつてゐる。

一八五六年三十七歲の時に第二の詩集が出版されまして二十種の新しい詩が加へられました。此の頃からホヰットマンの才能にひきつけられて訪問する人が多少出來ました。其の中にはブロンソン・アルコット、ウィリアム・ブライアント、ヘンリー・ソロー等がありまして詩集は第二版に達しました。一八六〇年四十一歲の時に第三の詩集が出て、それには「アダムの子等」や「カラマス」共の他二十二の新しい詩が附け加へられました。多分此の版が出た時と思ひますが、ホヰットマンは出版の事に就いてボストン迄行つて、エマアソンに面會する機會をもつたのですが、エマアソンは詩集の中から是非とも「アダムの子等」を除いたがいゝだらうといふ事を勸告して、ボストンの町の中を二時間程步き廻りました。當時エマアソンと云へば米國に於ける思想界の大なる權威であつて

年齢からいつても十分人に其の忠告を容れさせるだけの重味を有つてゐたのですが、ホヰットマンは忠實に謙遜に其の勸告に耳を傾けた後、二時間も喋舌らせて置いた此の大哲學者に向つて、「あなたの御忠告はよく解りましたが、私は『アダムの子等』を除く位なら詩集の全部を破却します」ときつぱりと答へて了つたさうです。さうして二人は別に其の爲めに喧嘩もせず快く夕食を共にして別れました。

「今のこの時から、自由!
今のこの時から私は制約や空想的な境界線から自らを解放することを命ずる。
どこに行かうと、私は全然的に絶對に私身自の主、
他人にも耳傾け、そのいふ所をよく思ひめぐらし、
立ち停り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、
しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私を捕へんとする桎梏から私自身を奪ひ返すのだ。」

と彼が「大道の歌」の中に歌つてゐる氣持は其の當時の氣持であつたらうと思ひます。其の後一八六一年、南北戰爭が勃發するに至る迄はホヰットマンは殆んど詩作を忘れ果てゞもしたやうに、紐育で、負傷をした海員の收容所にあつて其の看護及び保護の事に熱中して居りました。所が、其の年の四月十二日に愈〻南北戰爭が勃發しました。北方の若者達は一擧にして南方の諸州を平げ、奴隸を廢止し、奴隸使役者の首に繩でもかけて安々と凱旋し得る樣な暢氣な氣持で鼻歌まじりに出征して行きましたが弟のジョージも其の中に加はつてゐたのでした。所が翌年十二月に弟は負傷しました。戰爭も思ひの外長引いて、ブルランの一戰に北軍は脆くも散々に打ち惱まされ、大本營なるワシントンを指して續々と退却する樣な悲境に陷りました。ホヰットマンは弟の負傷を聞くと萬

事を忘れて南に向ひました。さうしてフィラデルフィアでなけなしの財布を掏摸にしてやられて、辛うじてワシントンに着く事が出來ました。オコンナー、ボロースなどホヰットマンの愛讀者達は彼を迎へ、「其の掏摸といふのは餘程慾の薄い奴だつたのが仕合せだ、金嚢を盗んでおき乍ら詩人の心臟を盗み損つたのだから」といひ合つて大笑ひをして兎に角彼の爲めにあらゆる世話をしてやつたさうです。幸にジョージの傷はさしたる事はありませんでしたが、ホヰットマンは大勢の憐れな負傷兵を見ると默つてはゐられなくなつて、直ぐ看護人たる事を志願しました。そしてそれから前後二十箇月の間病院に通ふ事が二千六百度、彼が看護した人の數は十萬人に及んだといふ事です。ホヰットマンは日々日用品だとか菓子果物だとかをポケットに入れて病院に出掛けて行き、負傷兵の間に坐り込んで、或は手紙の代筆をし、或は面白い物語を聞かせ、或は負傷兵から戰場の悲慘な挿話を聞きとつたりして、彼が在る所には何時でも太陽の光が有るやうな暖さをふりまきました。然し友人達から送つて寄越す義捐金だけでは生活費に事缺くので友人等の周旋で内務省の書記に採用されましたが、「草の葉」の著者であるといふ事が知れると忽ちに退職させられました。其の時オコンナーが非常に憤激して詩人を辯護するために書いた所の "The Good Grey Poet" といふ書物は實にホヰットマンに對する純粹なる讃美の大なる第一聲でありました。其の中にはアブラハム・リンコルンが曾てホヰットマンを遠くで見かけて、"Well he is like a man" と云つた言葉を引用して居ります。

ホヰットマンの健康は、然し此の超人的な愛の勢力の爲めに損はれ始めました。一八六七年四十八歳の時に詩集の第四版が出來ました。此の頃は彼は檢事局の一官吏として年收千六百弗を得ましたが、これは彼が一番豐かな常收入を得た時期でありまして、生まれて始めて得た實生活の安定の爲めにホヰットマンはかなり快活な氣持になつてゐた樣です。彼獨得な子供の樣な言葉を用ゐて母に送つた手紙の中に、「私は此の頃夜になると役所に出掛

けて行つて官費の燈火とストーヴのわきで愉快に讀書をしたり書き物をしたりしてゐる」と嬉し相に報告をしてゐます。それのみならず英國に於ける新興の文藝家等が遙かに彼に對して好意を持ち始め、アディングトン・サイモンズやエドワード・ダウデンやスウィンバーンやウイリアム・ロセッティやは各〻彼に敬意を表した手紙を送り、ホヰットマンの選集を英國で出版しました。又此の頃からアーン・ギルクライストといふ婦人と識る樣になりました。彼女は有名なウィリアム・ブレークの評傳を書いたギルクライスト未亡人で當時四十二歳でありましたが、ホヰットマンの詩集を讀むと自分の心の中にひそんでゐたものが、まざ〳〵と導き出されるのを發見し、殆んど聖書以上の感激をそれから得て、「ワルト・ホヰットマンに對する一英國婦人の推讃」といふ洞察の深い論文を發表しました。此の婦人の詩人に對する尊敬は遂に戀愛に迄昂められましたが、ホヰットマンは十分其の好意を感じ乍ら、美しい友誼を以て終始しました。夫人は後年其の子供と共にフィラデルフィアに移り住んで、當時キャムデンに隱退してゐた老詩人の爲めに、あらゆる親切と溫情とを傾けて、詩人の生涯に美しい一つの挿話を殘しました。

話は前に戻りますが、ホヰットマンはかゝる生涯の安定の中にも、又國の內外の知己からの溫情の間にもやはり一個の孤獨な人でした。彼の內部生活の中には誰もが這入り込めない樣な寂しいものがあつた樣です。さうして彼は其の爲めに人知れぬ深い苦しみと、一種の飢ゑとを感じてゐた事は其の當時の手記の中に探り出す事が出來ます。其の間にも、彼は、漸々心ある人々の共鳴をうけ、テニソンは彼に推讃の書を送り、スウィンバーンは「黎明の歌」といふ歌の集中に「アメリカなるワルト・ホヰットマンよ」といふ極めて熱情的な詩を發表し、ビョルソンも「ワルト・ホヰットマンは多年の間如何なる新人の中にも見出し得なかつた樣な喜びを私に與へて吳れる。或る點からは私が今迄知り得た最大の人は彼である」とさへいひました。此の間に彼の文集なる"The Wound Dresser" 及び "Democratic Vistas" が出版されました。

茲に一つ彼の不思議な一面を語る一挿話を御紹介しませう。一八七二年、五十三歳の時彼はハノーバーなるダートマス・カレージの卒業式の式場で卒業の演説を頼まれました。學校のやんちやな生徒達は、教授達が餘りに頑固保守的なのを憤つて、徹底的に當時の習俗を無視したと稱せらるゝホヰットマンを拉し來つて學校の空氣に大きな動搖を起さうと目論んだのでありました。ホヰットマンは直ちに承諾して壇上に立ちましたが、非常に男性的な、勇ましい詩人と思はれてゐた彼は、ジュピターの樣な容態と、巨人の樣な體格の持主であるにも似ず、如何にもはにかんだ容子で、其の聲は遠くにゐるものには聽き取れない程でありました。おまけに其の夕方は生徒達が最も强い非難の的にしてゐた神學の教授に招かれて晩餐を御馳走になりました。これがどれほど、生徒達の期待をむざ〳〵と裏切つたかは想像に餘りあります。のみならず、ホヰットマンはワシントンを發つ時に、自分の親しい話相手なるピーター・ドイルといふ男に、一つの原稿を託して新聞社に持つて行かせたのです。それにはまだ濟みもしないうちから、ダートマスに於けるホヰットマンの演説の梗概が記るされてあり、如何に學校が擧つて此の新しい詩人を歡迎したか、如何に其の詩人が講壇から、醉ひしれたやうな滿堂の聽衆に對して、大雄辯を振つたか、さうして如何に聽衆がそれに反應して感激したかゞ、詩人自身の筆で事細やかに書かれてゐたのです。ホヰットマンはダートマスからドイルに手紙を送つて、其の原稿を確かに新聞社に屆けたかと念を押したのですが、ドイルは間違ひなく屆けたのですけれども、多分ホヰットマンに大なる失望を齎した事でしたらうが、どういふ間違ひか、その原稿は沒書にされて新聞には載らなかつたのです。ホヰットマンにはこんな風な、妙な癖があつた樣です。晩年にも貧乏だ貧乏だといふので、國の內外の友達等から大分寄附金があつたのですが、ホヰットマンが死んで見ると立派な墓は出來上つてゐるし、金もかなり多分に殘つてゐたといふ樣な事もあります。何んといふ老獪さだらうとも思へます。何といふ下手つくそな狡猾さだらうとも思へます。何といふ本然的な子供

らしさだらうとも思へます。前にお話した女性との關係の事などと共にこれは諸君の勝手な御判斷に任せます。諸君が其の眞似をなさるか否かは、諸君御自身がそれに對して責任を持たれる以上、私としては決して咎め立てなどはいたしません。

一八七三年、五十三歳の時、一月の末に、遂に中風を發しました。そこで、職を失つて海岸に行つて靜養するつもりでフィラデルフィア迄行きましたが、病が大分重つたので其の頃弟のジョージが住んで居つたキャムデンに行つて母や弟の世話になりました。キャムデンといふ町は、デラウツー河を隔てゝ、フィラデルフィアに接する實に平凡極まる町で曾て、「紐育サン紙」が三つのD (Doubt, Debt, Despair) に在る人々の隱れ家と冷評した樣な町であります。それに彼は、實際、貧しく且つ病んで隱退しました。さうして、一時は病氣が重つて半身不隨になり、起臥に苦しむ程の有樣でしたが、一八七六年五十七歳の時、彼が詩集の第六版を公けにするに至つた頃からやゝ恢復して歩行も自由になる樣になつたので、町の近くにあるティンバークリークといふ谿谷に行つて其處の自然を樂しむ事に日を過しました。「そこに行くのは誰だ、粗剛で、奇怪な裸體の姿で彷徨ひ、春に森の中に來る大きな馴鹿の如くに彷徨ひ、一所不住の自然の如くに粗剛で、ボェーメやスウェーデンボルグのやうに奇怪で、樂園に於けるアダムの如く裸體で彷徨ひ歩くものは誰だ、おゝ、自然に於ける樂しくも健全な靜かな裸體よ!」と、彼自身が云つてゐる其の心持は、實に其の頃の彼の心持でありました。彼の詩作は健康と反比例に益々盛に行はれました。さうして彼の人間は大きく自然に豐かに纒まつて行つて殆ど聖者に近い樣な域に近づきつゝありました。

一八七九年六十歳の時にはやゝ健康を恢復し、紐育でリンコルンの爲めに記念講演をしたり、ロッキー・マウンテンの方迄長い旅行をしたり、翌年はカナダの方に行つたり、其の又翌年はボストンからウェスト・ヒルに行つて絕えて久しい故鄉の山河を訪れ、自分を最初に認めて呉れた、老衰期に入つたエマアソンにも會見を遂げました

(「正義の人、自己の上に築き、すべてを愛し、すべてを抱き、太陽の如く健全にして、透徹」と、彼は其の時のエマアソンを讃美してゐます)。一八八二年、六十三の秋に、"Specimen Days and Collect" が出版されました。

かくて流石のローファーも自分の小さな巣が欲しくなつて、ミックル街の三百二十八番地に小さな家を借受けました。さうして、マリー・ダヴィスといふ婦人と、ワーレー・フリッティンガーと、ポーリーといふ駒鳥と、ワッチといふ犬と、一匹の鸚鵡と、黒猫と、カナリヤとを家族にして靜かな家庭が作られました。此のさゝやかなる幽棲は、色々な意味に於ての好きサマリア人の訪問を受けて靜かな賑はしさを加へました。

一八九一年、十二月の半ばに、風邪に罹つて右肺に焮衝を起して、甚だしく苦しみました。バックといふカナダの醫師で同時に鋭敏な心理學者や、バーロースや、ハーネットや、トラウベル等が駈けつけて日夜看護しましたが、殆んど瀕死の狀態で其の年は暮れました。翌年の一月には少し恢復の徵候が見え、二月の六日から七日にかけては諸友に最後の訣れを告げました。すべての病苦困苦の中にあつても詩人の鍛へられ高められた魂は、更に搖らぐ事なく、三月二十六日土曜日の夕方、春雨の靜かに降り濺いでゐる中で、右の手を自分の愛するトラウベルの右の手に託しつゝ靜かに此の世を去りました。髮も鬚も雪の如くに白く、生前からジュピターの樣だと云はれた刻みの大きい其の顏は、永遠の平和の姿に安々とすべてを託した落着きを見せて、靜かな輝きをもつてゐたといふ事です。越えて三十日にハーレーの墓地に葬られました。遺骸は親友等と三千の民衆とに送られました。フランシス・ウィリアムスが式を司り、孔子、ゴータマ、キリスト、コーラン、イザヤ、セント・ジョン、ゼンド・アヴェスタ、及びプラトーの中から句を抜いて朗讀し、バーネット、ブリントン、バック、インガソール等が追弔の演說をしました。其の日は、天氣が晴れ渡つてゐて、春になつてから渡つて來た Blue bird があちこちでさゝ鳴きをしてゐました。生前、詩人の無二の友であつたピーター・ドイル(南軍に屬した兵士で、後電車の車掌となり、

激しい雨の一夜、車内でホヰットマンと語り合つたのが緣の始まりで、その後も殆んど父子のやうな間柄にあつた人）は物々しい會葬や儀式を知らぬげに人々から離れて一人靑草の上に孑然として孤坐して居たといふ事です。

ホヰットマンが殘しておいた詩の一つに、

「喜べ！　船子よ――喜べよ！
（魂にまで嬉しんで、死に臨んで、わしは叫ぶ）
わし等の生は閉ぢた――わし等の生は始まつた、
長い、長い繫船をわし等は見捨てるのだ、
船は遂に自由だ――彼女は飛ぶ！
彼女は岸から遠ざかる、
喜べ！　船子よ、喜べよ！」

といふのがあります。彼は現世の桎梏から放たれて、遠く永遠の旅程にのぼると共に私共の懷に近々と歸つて來たのです。

斯くてホヰットマンは一度死んで仕舞つたのですが、私は今晩もう一度、彼を此の世によみがへらせて私相當の引き合せを諸君に致したいと思ひます。昨夜の講演で彼はローファーのタイプを持つた人だと云ひましたが、尙ほ共の考へを徹底する爲めに一言附け加へて置きます。ローファーの型にも良い所と惡い所と兩面があります。ローファーに對立する主義の人に於て、それが良くなる場合には正義の使徒であり、惡くなる場合にはファナティックス即ち妄信者が出來る樣に、ローファーも善くなる場合には、優れた人生の達人となりますが、惡くなると

デカダンともなり、フィリスティンともなります。前の例に倣つて基督時代のタイプで云ふなら、主義の人の墮落したのはパリサイ人であり、ローファーの墮落したのはサドカイ人であります。かゝる墮落したローファーは生活が外的にのみ止まる事から、又性格の卑怯から生活に對して忌むべき沒交渉の態度をとり、自分一個の安價な趣味を以て終始します。かゝる人は一見極めて寛大で、いかなる事に對しても公平無私であるかのやうに見えますけれども、それは畢竟生命に對する熱情の不足と、眞劍さの足らない所から來てゐるのであつて、その人の生活には外面との接觸點にも何等の熱を起さず、内部の生命にも更に火が燃えてゐません。ホヰットマンはローファーではありましたけれども、決してかゝるタイプに墮落したものではなく、さう云ふ點からは立派に救はれてゐる人でありました。

但しホヰットマンはローファーである以上、第一に、自己の生命のユニークであることを主張し、又凡ての人に同じ事を許さうとしました。從つて彼にとつては人間の生活を外部から規律しようとする制度は無益であるか、少くとも價値少きものとして映じました。彼は人生の無政府主義者です。無政府主義と云ふ言葉は現今に於ては、社會制度に就いての主張として考へられてゐるやうですが、それはもつと根柢的な意味にも用ゐられ得る言葉であつて、生命そのものゝ方向を指す場合にも適用されるものだと私は思ひます。例へば普通用ゐられてゐる社會主義、無政府主義と云ふ二つの主義の區別は結局、社會生活の改造、實現の方法の相違から來たものであつて、社會主義にあつては有產階級が自己防衞の爲めに造り上げた政府と云ふものを利用し、これを無產階級の手にをさめて有產階級撲滅の具に供しようとし、有產階級撲滅の曉にはその階級の所產であつた政府と云ふ機關は自然に消滅してそこに無政府共產の實現が成就せられるのだと主張し、無政府主義者はかゝる過程を無視して直ちに政府と云ふ機關を撲滅することによつて有產階級の倒壞を將來することが出來ると考へてゐる。そこにこの二つ

の主義の相違があると通常考へられてゐるやうでありますが、私の考へる所に誤りがなかつたならば、かゝる二つの考へ方を馴致するに到つたその根柢には、更に性格的な相違があると思ふのです。かゝる二つの異つた說を組み上げるに至つた人々の性格に、卽ち生命の方向におのづから異つた方向があつたのだと思ひます。換言すれば、私の造語に從へば、社會主義者は主義の人と云ふ型に屬し、無政府主義者はローファーであるのです。それだから社會主義者の目指す所と無政府主義者の目指す所とは一見プロセスの相違であつて、終極の狀態は同一のものである如くに見えるかも知れませんけれど、そこをもう一つくゞりぬけたその奥には、氣持の上に或るかけ隔りが存在して居ると思ひます。

かゝる意味に於て、ホヰットマンは一人のローファーでありました。彼の子供じみて見える迄に崇高な健全な人間的の心は、現在の生活の內に直ちに自由な生活の要求をしつかりと結び附けました。そこに考へられ得る凡ての障礙、凡ての實行難、さう云ふものを彼は目にもかけずに人間の心の內に誰にでも潜んで宿つてゐる紛らはし難い要求を明らさまに申出したのです。彼は手加減を加ふべき必要にせまられる程に惡擦れしてゐませんでした。子供が欲する所を云ひ表はすあの態度、それは經驗の爲めに心に桎の掛つた大人から見ると、如何にも我儘な、場合を知らぬ放言の樣に聞こえるけれども、結局さうするより仕方がないと思はせるやうなその子供の態度が、又實にホヰットマンの態度でありました。若し天地創造の役に疲れて、年老いた神があつたとしたら、此の詩人の大きなわめき聲を聞いて一度は眉をひそめ、次に破顏し、次に他の詩人達の世馴れた滑らかな言葉を斥けて此の詩人の荒々しい言葉を取り上げはしなかつたらうかと私は思ひます。

ホヰットマンはかくて一人で步きます。ホヰットマンの追隨者たらんとする人があつたならば、その時にはホヰットマンはもう理解され得ない人となつてゐる譯です。なぜなら彼は誰にも追隨し誰からも追隨され得べき人では

ないのですから。これはホヰットマンを理解する上に第一に注意してかゝらなければならないことです。かうなると今夜私のする一番いゝことはこゝで演壇を下つてしまふことになります。然し、そんなことをすると幹事の方から苦情が出ないとも限りませんから、仕方なくこれから彼の此處彼處をぬき讀みでもして、詩人自身からの暗示を提供することにしようと思ひます。

これは彼の詩を味はふ上の最上の指針になる言葉だと思ひます。同時に彼は、

"This is no book, He who touches This, touches a man."
「これは書物ではない。これに觸れるものは人に觸れるのだ。」

とも云つてゐます。卽ちこの詩集はホヰットマン以上にホヰットマンであります。彼は實際彼の生涯に於てこの詩集以外には少しばかりの散文の外に絕對的に何物をも殘さなかつたと云つていゝのです。彼には一人の文字も讀めないやうな老母があつた外、愛すべき妻もなく、子供らしい子供もなく、家らしい家も殘しませんでした。又一つのインスティチューションも殘しては行きませんでした。その事を考へると誰にでも悲壯な感じを與へるでせう。(講演者はホヰットマンの詩集を聽衆に指しつゝ)この人のお話をするにつけて思ひ出すのは私が初めてこの本を手に入れた時のことです。私は今から十四五年前ボストンの近傍にある風變りな米國人の辯護士と共同生活をしてゐましたが、私が臺所の仕事をするその代償として、彼は每晚私の爲めにホヰットマンの詩を一つ二つ讀んで聞かせて吳れました。日本にゐる時分から內村鑑三、高山林次郞諸氏の書いたものでこの詩人に就いてはおぼろげな知識は持つてゐましたけれども、他の詩人とどれ程變つた特色を持つ人であるかと云ふことは解らずにゐ

たので、その辯護士から朗讀を聞くと驚かされてしまひました。第一言葉の調子が、全く今まで聞き馴れないものでした。その内容は理窟つぽい常識的なもの丶様に見えて、しかもそれが蕪雜に表現されてゐるかの如く思へたんです。けれども然し何處にか强く人を引きつける力を持つてゐました。さうしてその詩を聞き馴れてゐる間に何がその中の源であるかをおぼろげ乍ら理解し得たやうに感じたのです。それは彼の思想も言葉も極めてユニークであると云ふことです。卽ち彼の感覺、彼の知識、彼の欲求が純粹に彼自身のものであつて決して他人のものでないといふことです　だから一つの平凡な言葉も一つのあり來りの思想も新たに力が燃え出したやうな新鮮味と力とを持つてゐます。人の生命の奥底に直接に觸れて來て、それを搖ぎ動かします。そこにこの詩の不思議な魅力があるのだと私は知りました。で私もその一冊を得たいと思つてボストンの大きな書店を二三軒捜し廻りましたが、番頭は輕蔑したやうな顏付で、そんなものはこの店にはないとはねつけたものです。或る町はづれの小さな書店で私は漸くそれを見附け出しました。そこの内には怪しげな本ばかりある所で、亭主である爺さんは私を店の端につれて行つて、その當時發賣を禁止されてゐたトルストイのクロイツェル・ソナタの全譯本をそつと示して、それも一所に買はないかと云つたりなどしたのを覺えてゐます。その當時ですらホヰットマンは米國の一般社會にはかくの如き虐待を受けてゐたのです。今でも彼は恐らくは自國人によつてよりも歐大陸に於てより多くの知己を持つてゐるやうに見えます。

ホヰットマンはローファーであつたが故に彼には堂々たる題目を揭げて詩を作ると云ふやうなことはありませんでした。大抵の詩にはその第一行の文句が單に符牒として冒頭に揭げられてゐます。彼の作詩の態度はよく次の詩に認められると思ひます。

Beginning my studies, the first step pleas'd me so much,
The mere fact, consciousness—these forms—the power of motion,
The least insect or animal—the senses—eyesight—love,
The first step, I say, aw'd me and pleas'd me so much,
I have hardly gone, and hardly wish'd to go, any farther,
But stop and loiter all the time, to sing it in extatic songs.

「私が觀察を始めるとき第一歩は私をことの外喜ばした。
單なる事實、意識――これらの形態――運動の力
いさゝかな蟲又は動物――觸覺――視力――愛、
最初の一歩は實にことの外私を驚かし喜ばしたので、
私は歩み出すや否や更に遠く行く心もなく、そこに長く止まりさまよつて、有頂天に歌を歌ふのだ。」

こゝに彼のローファーである氣持が遺憾なく現はれてゐます。彼は行きあたりばつたりに彼を迎へる者に對して興味をそゝられると何事をも棄て去つてそこに坐り込むやうな人でした。彼はそこで前人の誰もが感じなかつた樣にそれを感じました。さうしてそれを誰もが云ひ表はさなかつたやうに云ひ表はしました。或る人は「草の葉」が持つ格調は在來の詩のリズムとは違つて、風や波や空の雲が持つリズムと甚だしく似通つたものがあると云つてゐます。あの一見勝手氣儘に見える、彼の詩體を造り上げる爲めにどれ程の自然に對する深き省察をとげ

たかは彼以外の人々の恐らくは想像し得ない所ではないかと思ひます。カーペンターの云つてゐる通りホヰットマンは佛典に精通してゐる譯でなく、歐洲の古典を諳んじてゐる譯でもなく、又外國語に馴れてもゐなかつたから廣く現代の文學を漁つた譯でもありませんが、併し詩人らしい直覺を以てそれらのもの〻眞髓を十分に捕へてゐたことはおぼろげに窺はれます。いかにも彼の詩體はいさゝかも其等のものによつて煩はされけがされてはゐません。かく現象を或は生命を第一義的に攝取する點からカーペンターは二つの特色が表はれてをるといふことを指摘してゐます。その第一は凡ての存在の根柢になつてゐる所の個性に對する非常に確かな意識であります。これはホヰットマン以前でも、主張した人は澤山ありますが、ホヰットマンはホヰットマンらしい見方でその尊嚴を見極めてゐるのです。個性に對して立てられた普遍性を考へると個性は何と云つても結局普遍性の內に吸ひ込まる可きものであると考へられる傾きがあります。卽ち普遍性があつての個性と考へられる傾きがあります。近頃の言葉で云へば個人と環境との關係の如きがそれです。科學の立場から云へば此の環境には極大なものがあつて、個人はその力の前には無價値なものとも見られないではありませんが、ホヰットマンは理解ある科學の讃美者であつたにも拘らず、個性が實在の基礎であつて、そこから出發して個性の要求としての愛、それが環境に働きかけて或は戀愛となり或は友情となりそこに內在的な共同生活の相が成り立つので環境の固定化した所產であるインスティチューションが個性の實質を造るのでは斷じてないと云ふことを自分の個性そのものを通じて實證してゐます。第二の點は具象と云ふことであります。ホヰットマンは如何なる場合にも觀念に立脚して物を見たり考へたりすることはなかつた。神を考へる場合にも神はホヰットマン自身の延長としてのみ存在の可能が許された。だから或る一つの觀念が美しい詩の衣を被せられて表出される（英國の詩人などによく見られる如く）ことなく、詩人の生活そのもの〻端的な具象化が一つの觀念となつて表はれてゐる結果になつてゐます。言ひ換へれば彼の

言葉は在來の概念を盛るには適せずして彼自身の實感の表象としてのみ意味を持つてゐます、故にその言葉は一見如何に蕪雜であつても他の滑らかな言葉によつて置き換へられる時にはもう生命を失つて仕舞ひます。例へば"Whitman a cosmos"とか"liquid tree"とか"Device average"とか"body electric"とか Huye and "Thoughtful night"とか"Athletic Democracy"とか云ふ言葉などは不思議な用法であるにも拘らず、他の言葉では決して言ひ表はすことが出來ず、ホヰットマンでなければ用ゐることの出來ない言葉であります。

私はカーペンターの注意した二つの點に加へて更に、第三の點として健全性(robustness)といふ一事を附け加へたいと思ひます。健全性といふ事は現代の私どもにとつては殆んど異邦の言葉になりました。社會生活の基調の亂れの爲めに、如何なる階級にも不健全な要素が浸み込んで來て頽廢的な病的な傾向は生活の心髓まで浸み通つてゐるやうに見えます。健全であるといふことは呪ひの言葉であるやうにさへ考へられます。健全な人は社會全體が異邦人として敵視するやうな有樣に進んでゐます。さうして恐らくはこの感じが一つのハルシネーションとなつて、腐りかけてゐる私共の心を強く蝕んでゐます。私達は實際以上に不健全であると意識し、そこに苦しみ、そこに嘆き、しかもそこに誇りを持ち、それを誇張して生命を築き上げるのを、本質的な事でないとするならば、少くとも必至的なことであると思ふやうになつてゐます。しかしこれはホヰットマンのやうに世紀病的なイリュージョンから解放されてゐる人にとつては戒むべき事象であらねばなりません。彼は外面の習俗によらず、內部からの要求によつてこの忌むべき傾向に對して徹底的に反抗の聲を擧げてゐます。彼のデモクラシーの主張は實にこの健全性への要求から湧き出したものであつて、或る革命家のやうに世紀末の病的な傾向がもたらした不平不滿の衝動から來たものではありません。ホヰットマン自身が生來非常に健全な體質と心との持主であつたと云ふことにも原因はあるでせうが、彼は地から生まれ地に育て上げられ、地の睿智によつて練達したやうな人

間に對して殊に引きつけられました。彼の詩の中に、

「一千の完全な男と女とが現はれる、
その各々のまはりには、友達の群れが集まる、
而して快活な小兒と青春とが、さゝげものを持つて」

と云つてゐるものなどは、簡明に彼の健全性に對する氣持を表はしてゐると思ひます。

彼はすべての不健全な生活の中に、その不健全さを、已むを得ざる事とし、或は寧ろ誇りとし、たま〳〵健全を說くものがゐれば、それを敵視しようとさへする此の奇怪な現代に生きながら、彼は憚る事なく大膽に健全性の德を高調し、此處にのみ人類の救濟はつながり、誠の意味のデモクラシイは成り立ち、人類の眞の欲求は芽生えると歌ひ、その爲めには、あらゆる誤解と非難の中に、所謂物質、所謂肉、所謂罪惡、所謂惡德に對して、銳い辯護の聲をあげました。此の點はホヰットマンを理解する上に見のがしてはならぬ所だと思ひます。

それから、も一つ第四の特徵として此處に擧げるべきは、ホヰットマンの持つてゐた心といふ事です。即ち彼の情的方面であります。彼は決してセンティメンタルではなかつた。物を或る先入主觀を以て、愛憎し、或は價値づけて、其處に自分一個の甘々しい滿足を求めると云ふ樣な、女々しい態度は彼にはなかつた。彼はいつでも僻見なしに、物にぶつかつて行きました。そして其處に、愛すべきものがあれば、心を極めてこれを愛し、憎むべきものがあれば、恐るゝ事なくこれを憎みました。然しながらホヰットマンは何といふ大きな心の持主であつたでせう。小兒が凡ての物に對して、先づ神の樣な驚きを現はし、次に藝術家の樣な興味を感じ、さうして少女の

樣な愛撫を與へる、その樣な自然な、大きな、こだはりのない態度が彼にはありました。それ故に、私等にとつては忌むべく憎むべく嫌ふべく映ずるものが、彼の前には全く姿を變へて現はれた樣に見えます。

「私を通じて禁ぜられた聲々が、
性と淫慾の聲々が――面紗された聲々、
而して私はその面紗を取りのぞく、
不淨なものゝ聲々、それは私によつて淨化され、變容される」

といふ樣な調子の表現は彼の詩の到る處に拾ひ取る事が出來ます。

もつと具體的な事を云ふと、彼の戀愛觀について云はねばなりませんが、奇妙な言ひ方かも知れませんが、彼は女性と男性とに對して、等し並みに私達が戀愛といふ言葉で言ひ現はし得る樣な感じを持つてゐた樣に見えます。ホヰットマンの詩を讀むと單に二三の場合を除く外は女性に對する讃美は、具體的な言葉では云ひ現はされてはゐません。彼が戀愛の詩を作る時には、特に或る一人の女性を對象とはしてゐずに、女性そのものに對して云ひかけてゐる樣な形があります。彼は優しい華やかな女性、私達が概念的に考へてゐる德性を持つた女性を謳歌するよりも、寧ろ、生產の大きな源である力としての女性を見、且つ感じてゐました。彼には女性が一つの神祕として映じました。彼の女性は强健な肉の持主であつて、馬に乘り、舟を漕ぎ、水を泳ぎ、男性の完全な伴侶であつて、男性のなす所のものは何事でも爲しうる樣な力を有し、さうした偉大なる人類の子孫を生み、それを保護し完成する母でありました。彼は從つてかゝる女性に對して愛によつて固く結び付けられた肉の要求を投げかけ、その

愛と肉との完全な抱擁を世の何物にも增して力强く、美しく、すばらしいものとして歌ひました。

男性に對する彼の戀愛は、アディングトン・サイモンズをして、詩人が性的顚倒者ではないかと疑はしめた程に性的な感じを起させるものであります。彼はほと〳〵、女性以上に男性に惹きつけられてゐた樣に見えます。カラマスといふ題の下に集められた多くの詩は凡て彼が男性に對する憧憬執着の情を歌つてないものはありません。然しながら女性に對する戀愛から男性のそれに移つてくると、彼は肉の世界から段々と離れて、淸いほがらかな、精神的の感情に移つて行きます。彼は其處で現世的な桎梏から徐ろに解放され、淨化された力强い自然の牽引力によつて、彼の伴侶と結び付きます。彼の不思議な造語の一なる camerado（伴侶）といふ言葉は彼獨得な此の氣持を現はさうとしたものであるに違ひありません。彼は此處に人と人との一番正しい契合點を見出しました。さうして此處から、そのデモクラシイの主張は發足してゐます。此の結合によつて人と人との間を滑らかにし、さうして其處から生活の一番正しい交響樂を作り出さうとしてゐるのであつて、互に自由を許し合ふ人々の自由なる社會生活が其處に美しく夢見られてゐます。

最後に第五の特徵としてホヰットマンの神祕的な方面と詩格とを簡單に申し述べたいと思ひます。私達の持つてゐる習俗的な觀念に從つて、ホヰットマンの詩を通讀したものは、その餘りに散文的な表現にあきれるかも知れません。其處には神祕的とか象徵的とか稱せらるべき何物もないかの樣に見えます。然しながら私の考へる所に從へば、世人が平凡なものと見慣はしてゐる事物も思想も、その儘に神祕的なものであつて單にそれがさう感ぜられないだけの事です。此處に此のテーブルの上に一つのコップが載つてゐます。それは何處にでもありうる現象です。それが故に人はこれを平凡な事で何等の不思議もないと思ひ込んで仕舞ひます。然しながら心の立場を一寸動かして御覽なさい、此のテーブルの上に此のコップが斯く存在してゐるといふ事は考へても考へても、とて

も考へ及ばない一つの不可思議ではありませんか。私達は神祕を提出する爲めに何も世に稀な出來事を持つてくる必要は少しもない。あるが儘で凡ては驚くばかり神祕的です。唯私達詩人ならざるものゝ心は同じ認識の繰り返しによつて鈍り切つてゐるのです。詩人はそれを新しい目でいつでも見るのです。陸の盡きる所には何處にでも果てのない海が連つてゐる樣に、事物の奧底には必ず神祕が隱されてゐるのです。ホヰットマンは彼の詩人的本能によつて、大きく斯かる契機をつかんでゐます。彼の詩の處々には、彼が强ひてそれをたゝまない部分に、私達は今迄見慣れない樣な神祕的な表現を見出す事が出來ます。これは彼の詩を讀む人によつて往々閑却されてゐる事ですから一寸申し添へました。

ホヰットマンが敍事詩人として秀でてゐるといふと、人は亦これを疑ふかも知れません。然し簡潔な手法によつて描き出される事象は、宛ら彫刻の樣な立體的な感じと確實な面とを持つて、はつきり描き出されてゐます。それは彼の有する言葉がどれ程、内的な生命によつて力づけられてゐるかといふ事を語る良い例證の一つです。さう云ふ敍事的な所に來ると眞に一字も增減する事の出來ない樣な言葉の見事な排列があります。それらの例は日本語に譯する事は出來ませんが、此處に二三の例を朗讀する事にしませう。

斯く申し述べて來るとホヰットマンと云ふ詩人は何處から何處まで完全無缺な詩人であつた樣に思はれる方があるかも知れませんが生意氣な樣ですが私は必ずしもさうだとばかりは思つてゐません。彼は一人の先驅者です。彼は詩を徹底的に改造しました。今迄の概念から詩を全然解放しました。彼は一字と雖も先人の用ゐた樣に用ゐまいといふ覺悟で出發しました。これは絶大な事業であります。その事業が如何に偉大であらうともホヰットマン一人によつて完成さるべき筈はありません。一つの方向を與へようとした詩人として彼を見る時には驚くべく偉大でありますが、その方向を突きつめてゐたかといふ點に於ては、彼は明かに未成品です。さうして彼は十分

にそれを知つてゐました。後から現はれて來る人々に彼はその大きな任務を託してゐます。のみならず彼は如何なる時にも完成の味方ではありません。人には完成はなく、少くとも完成はあつてはならぬ。飛躍から飛躍への道程が私共の生活であつて、その頂點は私共の生活ではない。これがいつでもホヰットマンの抱いて居つた大なる主張です。ローファーなる彼は完成の曙光を見るや否や直ちに其處から逃れ出て行きました。若しホヰットマンを正しく理解しようとするならば此の點が正しく理解されねばなりませぬ。彼の詩も亦此の立場の上から評價されねばならないのです。第一の個性の主張、即ち存在に對する同胞感の訴へ、凡ての存在に根ざしする個性の權威はいかなる言葉で彼によつて表現されたかといふに、

「各々の男は彼自身に、而して各々の女は彼女自身に、これが過去と現在との言葉であり、不朽の言葉である。
何人も他人の爲めに獲得することは出來ない、——何人も!
何人も他人の爲めに生長することは出來ない、——何人も!

歌は歌手に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、
教訓は教師に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、
殺人は殺人者に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、
竊盜は盜賊に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、
愛は愛人に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、
贈物は贈る人に對してゞある、而して主に彼に歸つて來る、——間違ひなく、
辯舌は辯者に對してゞある、演伎は男優と女優とに對してゞある、觀客に對してゞはない。

何人も彼自身の偉大さと善良さの外は理解出來はしない、或は彼自身の特長の外は。

"Each man to himself, and each woman to herself, such is the word of the past and present, and the word of immortality;
No one can acquire for another—not one!
No one can grow for another—not one!

The ong is to the singer, and comes back most to him;
The teaching is to the teacher, and comes back most to him;
The murder is to the murderer, and comes back most to him;
The theft is to the thief, and comes back most to him;
The love is to the lover, and comes back msot to him;
The gift is to the giver, and comes back most to him—it cannot fail;
The oration is to the orator, the acting is to the actor and actress, not to the audience;
And no man understands any greatness or goodness but his own, or the indication of his own."

(From "Carol of Words.")

といふやうなのがあります。ホヰットマンはこの詩の中に、個性がそれ自身に於て一つの有機的な存在であつて、社會の一分子としてのみその存在を確保さるべきものではないと感じてゐるやうに見えます。彼は生命とは、自

分自身に對する價値評定であると觀じました。凡ての行爲が畢竟はそれであると知りました。凡ての人がそれを知つて、各々が幻影に捕へられずにかゝる見方を徹底する處に眞の生活は始まるのだ。「已れより出でたるものは已れに歸る」とは私達が祖先から聞かされてゐる處だ。それは眞理であるにも拘らず、人はそれに衣を着せようとする。惡事に對してはすぐそれをそのまゝ當てはめるが、善事に對してはそれに衣を着せる。而して善事はそれが他人に歸する爲めにのみ行はれるのだといふやうに云ふ。ホヰットマンはそこに虚僞の假面を見出すのです。善事も畢竟は善事をなした人に歸つて來るのだ。それは功利的な意味でさうあるのではない。事の本然の經過としてさうなるのだ。他人に善をなし、その善の他人に歸せられるのだといふやうな、他人に恩を被せるやうな蟲のいゝ考へ方から自分を解放しろ。而して凡ての事は主に自分に歸るといふ神祕な、然し否むべからざる事實にしつかりと眼ざめよ。人々が凡てこの事實を自覺した時に、他人に恩を被せ合ふやうな卑怯な態度は消え去つて、各々が眞實の意味での謙遜な心で隣人と交渉することが出來るやうになるだらう。同時に凡ての個性は獨立したまゝで他の個性と共存することが出來るだらう。さう彼は主張してゐるやうに私には思へます。

彼はこの氣持から出發して一人の人間が如何にして創られ、如何なるものであるかと聲高く歌ひました。

「私はワルト・ホヰットマン、一つの宇宙、偉大なるマンハッタンの息子、
放慢（turbulent）で、多肉で、性慾的で、食ひ、飮み、且つ生み、
殉情の徒ではなく――女性に超越しもせず、又女性を卻けもせず、
羞恥なきが如く無恥でもない。

戸の錠前をはづせ！

蝶番ひから戶そのものをはづせ!
誰であれ人を卑しめるものは私を卑しめてゐるのだ。
何事であれ、なされたこと、云はれたことは私にさしひゞく。

私を通じて流射は流れ出で流れ出で——私を通じて潮流と示唆とは流れ出で流れ出る。

私は原始的な合言葉を語る——私はデモクラシーのしるしを與へる。
誓言する、私は相對(あひたい)の立場でその相對物を持ち得ざる何物をも受け容れない。

私を通じて啞默した多くの聲々が、
長い代々の獄囚と奴隷等の聲々が、
病めるものと絕望せるものとの聲々が、而して竊盜と侏儒達との聲々が、
無限時の準備と蓄積との聲々が、
諸〻の星を繫ぐ鎖——女の胎と男の根との聲々が、
他のものによつて踏み躙られた人々の權利の要求の聲々が、
しみつたれた、平凡な、魯鈍な、侮蔑に値する人の聲々が、
空中の靈、糞便の球を丸める羽蟲の聲々が、
私を通じて禁ぜられた聲々が、

性と淫慾との聲々が――面紗された聲々、而して私はその面紗を取りのぞく、
下淨なものゝ聲々、それは私によつて淨化され、變容される。

私は指を口にあてゝ噤むことをしない、
私は頭腦と心臟とに對してなすやうに、腹部をもやさしく保つ、
性交は私にとつて、死が不潔でないのに等しい。

私は肉慾と口腹と慾とを尊重する、
見ること、聞くこと、觸れることは奇蹟だ、而して私のどの部分もどの附纏物も奇蹟だ。
私の內部も外部も共に神聖だ、而して私が觸れ、觸れしめるものを共に神聖にする。
腋の下の匂ひ、それは祈禱にまさつて芳しい香だ。
この頭は寺院、聖典及び凡ての信條より多くのものだ。

若し私が特別に或るものを崇拜するとするなら、それは私の肉體及びその部分の擴がりであるだらう。

"Walt Whitman am I, a Kosmos, of mighty Manhattan the son,
Turbulent, fleshy and sensual, eating, drinking and breeding;
No sentimentalist—no stander above men and women, or apart from them;
No more modest than immodest.

Unscrew the locks from the doors!
Unscrew the doors themselves from their jambs!

Whoever degrades another degrades me;
And whatever is done or said returns at last to me.
Through me the afflatus surging and surging—through me the current and index.

I speak the pass-word primeval—I give the sign of democracy;
By God! I will accept nothing which all cannot have their counterpart of on the same terms.

Through me many long dumb voices;
Voices of the interminable generations of slaves;
Voices of prostitutes, and of deform'd persons;
Voices of the diseas'd and despairing, and of thieves and dwarfs;
Voices of cycles of preparation and accretion,
And of the threads that connect the stars—and of wombs, and of the father-stuff,
And of the rights of them the others are down upon;
Of the trivial, flat, foolish, despised,
Fog in the air, beetles rolling balls of dung.

Through me forbidden voices;
Voices of sexes and lusts—voices veil'd, and I remove the veil;
Voices indecent, by me clarified and transfigur'd.

I do not press my fingers across my mouth;
I keep as delicate around the bowels as around the head and heart;
Copulation is no more rank to me than death is.

I believe in the flesh and the appetites;
Seeing, hearing, feeling, are miracles, and each part and tag of me is a miracle.

Divine am I inside and out, and I make holy whatever I touch or am touch'd from;
The scent of these arm-pits, aroma finer than prayer.
This head more than churches, bibles, and all the creeds.

If I worship one thing more than another, it shall be the spread of my own body, or any part of it."

(from "Walt Whitman.")

「私自身を說明すべき時が來た――お互に起ち上らう。

既知の事を抛り棄てる、
而して私と一緒に凡ての男女を不知の境へ送り出す。

時計は瞬時を指示す――然しながら永遠は何を指示すると思ふか。

私達は既に業に無限の冬と夏とを使ひつくした、
しかもこの先き無限の夏冬があり、その先きにもなほそれの無限がある。

誕生と共に私達は豐滿と多趣とを稟けた、
他の誕生は更に豐滿と多趣とを齎すだらう。

私は一つのものをより偉大で、一つものをより劣小だと呼ぶことをしまい、
その時と處とを得たものは、如何なるものとも同等である。

人類はあなたに對して殺伐で嫉妬深かつたか、わが兄弟姉妹よ、
私はそれをお氣の毒に思ふ――人類は私に對して殺伐でも嫉妬深くもなかつた、
凡てが私には柔和だつた――私はくよくよしながら勘定はしてる、
(私と嗟歎とは何のかゝはりがあらうぞ)

私は成就されたものゝいやはてゞあり、而して現はれ來るべきものゝいやさきである。

私の脚は階梯の頂點の又頂點を踏む、
一階毎に一群の時代が、幾階かの間に多群の時代が、
その凡て下にあるものを私は確かに旅して來、しかもなほ登りに登る。

階を登るごとに背後に殘した幻影は首を俯せる、
遙か下方に當つて、私は絕大な最初の無を見る——あすこにさへも私がゐたのを知つてゐる。
私は人に現はれずに常に待つてゐた、而して昏睡の霧の裡に眠つてゐた、
而して私は時の熟するのを待つた、而して毒氣を吐く炭素からは害を被らずにゐた。
長い間私は强く抱きすくめられてゐた——長い〳〵間。

私の爲めの準備は宏大もないものだつた、
私を介抱した腕は忠實で丁寧だつた。

快活な舟子のやうに、ひた漕ぎに漕いで、長久の年所は私の搖籃を舟渡しした。
私に餘地をつくる爲めには星々もその軌道を曲げて通つた、
而して私を抱けるものを看視するために彼等はその光を送つてよこした。

私が母から生まれ出る前、永い時代が私を導いた、

私の胚種は決して生氣を失はなかつた——何者もそれを壓倒することが出來なかつた。

私の胚種の爲めに、星雲は一つの球體に凝集し、
地層は徐ろに時をかけて他の地層の上に積み重なり、
廣大な植物はそれに滋養分を供し、
巨大な原始動物はそれを口もて運んで、用心深く地上に置いた。

凡ての力が私を完成し、喜ばす爲めに、止む時なく用ゐられたのだ、
而してこの地點に私の健全な魂と共に立つ」

"It is time to exp'ain myself—Let us stand up.

What is known I strip away;
I launch all men and women forward with me into THE UNKNOWN.

The clock indicates the moment—but what does eternity indicate?

We have thus far exhausted trillions of winters and summers;
There are trillions ahead, and trillions ahead of them.

Births have brought us richness and variety,
And other births will bring us richness and variety.

I do not call one greater and one smaller;
That which fills its period and place is equal to any.

Were mankind murderous or jealous upon you, my brother, sister?
I am sorry for you—they are not murderous or jealous upon me;
All has been gentle with me—keep no account with lamentation;
(What have I to do with lamentation?)

I am an acme of things accomplish'd, and I am encloser of things to be.

My feet strike an apex of the apices of the stairs,
On every step bunches of ages, and larger bunches between the steps;
All below duly travel'd, and still I mount and mount.

Rise after rise bow the phantoms behind me
Afer down I see the huge first NOTHING—I know I was even there;
I waited unseen and always, and slept through the lethargic mist,
And took my time, and took no hurt from the fetid carbon.
Long I was hugg'd close—long and long.

Immense have been the preparations for me,
Faithful and friendly the arms that have help'd me.

Cycles ferried my cradle, rowing and rowing like cheerful boatsmen;
For room to me stars kept aside in their own rings;
They sent influences to look after what was to hold me.

Before I was born out of my mother, generations guided me;
My embryo has never been torpid—nothing could overlay it.

For it the nebula cohered to an orb,
The long slow strata piled to rest it on,

Vast vegetables gave it sustenance,
Monstrous sauroids transported it in their mouths and deposited it with care.
All forces have been steadily employ'd to complete and delight me;
Now on this spot I stand with my robust Soul."

(From "Walt Whitman.")

實に一つの個性はかくの如くして、その獨立の存在にまで、永遠の時間と勢力とを以て創り上げられたのだ。而してその未來には永遠の時間と勢力とが發展せらるべく伏在してゐるのだ。而して一つの個性はそれが如何なるものであれ、疑ひもなく永遠と永遠との確實な橋梁である。凡てのものがさうであるやうに一つの個性もさうである。ホヰットマンはこの拒むことの出來ない明かな事實、而して同時に想像しても徹底し得ないやうな神祕的な事實に個性の基礎をおいたのでした。而してこの個性から出發し、個性に依賴して恐れざる旅に出で、胸を張り擴げて自分自身の歌はんことを主張するのです。

「この日黎明前私は丘の上に登り、諸天を仰ぎ見て、
私の靈に云つた『私達がこれらの諸天、及びその中にある凡てのものゝ喜びと智慧とを抱有することが出來たら、その時私達は飽き、滿足するだらうか』
私の靈は云つた『否、私達がその高所を夷(たひ)らかにするや否や、それを過ぎ越えて更に進み行くのだ』と。

あなたも亦私に問ひを尋ねる、而して私はそれを聞く、
私は答へよう、私はそれに答へることが出來ないと――あなたは自身で答へなければならないのだ。

暫くそこにお坐り、愛する息子よ、
こゝにビスケットがあるからお喰べ、而してこゝに飲むための牛乳もある。
然し、あなたが眠り、而して快い衣服で活氣づくや否や、私はあなたに『さよなら』の接吻を與へる、而して
こゝから出發する爲めにあなたのために門を開くのだ。

長すぎる位、あなたはさげすむべき夢を見つゞけてゐた、
今私はあなたの眼から眼脂を洗ひ落す、
あなたは光の眩惑とあなたの各瞬間の生活とに慣れなければならぬ。

長い間、あなたは岸邊の木材につかまつて、恐る〳〵水を渉つてゐた、
今私はあなたが勇敢な游泳者であることを要求する。
海のたゞなかに飛び込んで、再び浮び上つて、私に頭で合圖をし、叫び聲を揚げ高笑ひしながら髪ふり亂して
突進するのを要求する」

"This day before dawn I ascended a hill, and look'd at the crowded heaven,
And I said to my spirit, *When we become the enfolders of those orbs, and the pleasure and knowledge of everything in them, shall we be fill'd and satisfied then?*
And my spirit said, *No, we but level that, lift, to pass and continue beyond.*

You are also asking me questions, and I hear you;
I answer that I cannot answer,—you must find out for yourself.

Sit a while, dear son;
Here are biscuits to eat, and here is milk to drink,
But as soon as you sleep, and renew yourself in sweet clothes, I kiss you with a good-bye kiss, and open the gate for your egress hence.

Long enough have you dream'd contemptible dreams;

Now I wash the gum from your eyes;
You must habit yourself to the dazzle of the light, and of every moment of your life.

Long have you timidly waded, holding a plank by the shore;
Now I will you to be a bold swimmer,

To jump off in the midst of the sea, rise again, nod to me, shout, and laughingly dash with your hair."

(From "Walt Whitman.")

「今のこの時から、自由！
今のこの時から私は制約や空想的な境界線から自らを解放することを命ずる。
どこに行かうと、私は全然的に絶對に私自身の主、
他人にも耳かたむけ、そのいふ所をよく思ひめぐらし、
立ち停り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、
しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪ひ返すのだ。

私は空間から大空を吸ひ入れる、
東も西も私のもの、而して北も南も私のものだ。

私は自分で思つてゐた以上に大きく且つ善い、
凡てのものが美しく見える、
私は男の人にも女の人にも繰り返して云ひたい、あなたがたは大層ないゝことをしてくれたから、私も同じだけのことをあなたがたにして上げたいと。

私は進みゆくにつれて私自身の爲めに、又あなたの爲めに獲得してゆく、
私は進みゆくにつれて私自身を男等との中にふり撒いてゆく、

私は新しい喜びとあら〳〵しさとを彼等の中に押しむける、
誰が私を退けようと、私はそれを苦にはしない、
誰かゞ私を迎へ入れるなら、その男の人なり女の人なりは祝福されるだらう、而して私を祝福するだらう。

"From this hour, freedom!
From this hour I ordain myself loos'd of limits and imaginary lines,
Going where I list, my own master, total and absolute,
Listening to others, and considering well what they say,
Pausing, searching, receiving, contemplating,
Gently, but with undeniable will, divesting myself of the holds that would hold me.

I inhale great draughts of space
The east and the west are mine, and the north and the south are mine.

I am larger, better than I thought;
I did not know I held so much goodness,
All seems beautiful to me;
I can repeat over to men and women, You have done such good to me, I would do the same to you.
I will recruit for myself and you as I go;

I will scatter myself among men and women as I go;
I will toss the new gladness and roughness among them;
Whoever denies me, it shall not trouble me;
Whoever accepts me, he or she shall be blessed, and shall bless me."

(From "Song of the Open Road.")

個性に本當に飽滿し得たものが、眞に歡びの生活の何者であるかを知ることが出來るでせう。この一事なしには如何なる大事業も如何なる大善事もその本然の匂ひを失つてしまひます。自分一個に貯へ切るには餘りに大きな力が衷に湧いて、それが外部に已むを得ず溢れ出た所にのみ、事業といふべき事業、善事といふべき善事は甫めて行はれます。ホヰットマンはこの立場を根柢的な自身の要求として感じてゐたと思ひます。この事に關しては彼の詩集の中からいくらでも美しい句を引照することが出來ますけれども、餘り長くなり過ぎますから先に移つて行くことにします。

第二の特徵としてカーペンターが擧げてゐる具象的といふこと、これは前にも申しましたやうにホヰットマンがどれ程自分の實感を詮じつめてゐたかといふよい證據であります。單に言葉の一つ〳〵が特殊な重みを以て用ゐられてゐるばかりでなく、言葉と言葉とが關係的な必然的な聯絡を以て堅く結び合はされてゐるといふばかりでなく、表現された事象全體が非常に明瞭な印象を讀者に與へるのは不思議な程です。唯詩人のみが有する不思議な魔術と考へる外はありません。人の遺書などを讀む場合に特に感じさせられる、あの薄氣味惡い程な實感及びそれに關聯して活々と想像させられるその場合の境地、さういふ風ななま〳〵しい印象がホヰットマンの詩に

はよく現はれてゐます。それが單に思想的な方面に於てさうであるばかりでなく、叙景叙事の場合にも等しい力を以て働いてゐるのです。ホヰットマンのあの一見彈力性の足りない、粗剛らしく考へられる筆致が、どうしてこんな纎細迫眞な印象を小さい筆數で表現することが出來るのだらうと思はせられます。かうした言葉の强みは一度飜譯すれば全然失はれてしまひますので、原詩を朗讀する外に御紹介のしやうがありませんが、便宜の爲め一度私の言葉に譯して、原詩を朗讀することにします。

叙事詩としての古來の如何なる叙事詩にもゆづらないと思ふものには、

「あなたは古風な海戰の話を聞きたいと思ふか！
月と星との光の下で誰が勝利者であるかを知りたいと思ふか！
舟乘りであつた私の祖母の父が私に話してくれた物語を語らうか。

全く俺達の敵は船にかけてはしれ者だつた（と彼は談り出した）
彼奴は佛頂面な英吉利育ちの猛者で――類ひのない頑固さ生まじめさ、あとにもさきにもあんなのはあるまい。
暗らみゆく夕暮れ方を、すさまじい勢で俺達を縱射しながら近づいて來た。
俺達は彼奴に逼り寄つた――檣桁は互にからまり合ひ――大砲は觸れ合つた。
こちらの船長は手を振り動かして指揮をした。
俺達は十八封度もあらうといふ大丸を喫水の下に受けた、

こちらの下甲板では二門の大きな砲が第一發で粉々に破裂して、まはりにゐた者共を殺しておいて、天井をぶちぬいて吹き上げた。

日沒時の戰鬪、夜陰の戰鬪、
夜が廻つて十時、滿月が昇り切つた頃、浸水は度を增す五尺といふ報告だ、
指揮官は舷尾に閉ぢこめておいた捕虜を放つて、自分の始末を自分でさせた。
火藥庫への往復を步哨がついて引き歸つた。
見慣れない顏がしこたま出て來たので、全く氣が許せなくなつてしまつたのだ。

俺達の乘つてゐる巡邏船は火を失した、
助命を求めたらといふ奴も出來た、
艦がやられはしないか、而して敗け戰になつたのでないかと。
所が俺は暢氣に笑つてゐた、俺の小つぽけな船長の聲が聞こえたからだ、
彼は落着き拂つて叫ぶ「俺達は打擊を與へてはゐない、こつちの戰爭仕事は始まつたばかりだぞ」と。

大砲は三門が役に立つだけだつた、
一門は船長自身が敵の主檣目がけて指揮してゐた。
榴彈と霰彈とをしこたま備へた二門は彼の小銃を沈默させてその甲板を一掃した。

檣樓、殊に主檣の檣樓だけがこの小砲臺の砲火を援助した。
而して戰鬪の間といふもの雄々しくも持ちこたへた。

息をつく暇もない、
浸水は喞筒位では間に合はなく――火災は火藥庫の方へと喰ひ入つて行く。

喞筒の一つが射ぬかれた――段々と船は沈むなと誰も彼も思ひ出した。

落着き拂つて小柄な船長は立つ、
少しも騷がず――その聲は高くもなく低くもなく、その眼は宣戰の燈火よりも一層强い光を俺達に與へた。

眞夜中近く、あの月の光の下で、彼奴等はとう／＼俺達に降參した。

遠く、靜かに、深夜は擴がつてゐる、
二つの大きな空ろ船が動きもせずに闇の胸の上に、
打ち貫かれた俺達の船はそろ／＼と沈みながら――俺達が征服した船へ乘りかへる準備の中に、
後甲板に立つ船長は白布のやうに蒼ざめた顏で冷然と命令を下してゐる。
その傍には、船長室の給仕だつた少年の死骸、
長い白髮と大事に卷きちゞませた鬚を持つた一人の老船員の死骸、
火焰は、ある限りの手を盡した甲斐もなく、高みにも低みにも明滅し、
まだ仕事に堪へる二三の士官の皺枯れた聲、

積み重つた滅茶苦茶な死骸、――あちこちに散らばつた死骸、――帆柱や上甲板にたゝきつけられた人肉の切れつぱし、
綱の斷片、繩のかたまり、波になだめられてのかすかな船のゆらぎ、
眞黑な無情な大砲、火藥包のつかひかす、强い香り、海風のやさしい微動、海沿ひにある蘆類や野の匂ひ、生き殘つてる人に言ひ殘される遺言の言葉、
外科醫のナイフの銳い響、その鋸の刃の齒ぎしり、フィーズ、クラック、流れ出る血潮の瀧津瀨、短い無殘な叫び、而して長く、鈍く、細り行くうめき、こんな鹽梅だつた――取り返しのつかないことだつた。

"Would you hear of an old-fashion'd sea-fight?
Would you learn who won by the light of the moon and stars?
List to the story as my grandmother's father the sailor, told it to me.

Our foe was no skulk in his ship, I tell you, (said he;)
His was the surly English pluck—and there is no tougher or truer, and never was, and never will be;
Along the lower'd even he came, horribly raking us.

We closed with him—the yards entangled—the cannon touch'd;
My captain lash'd fast with his own hands.

We had receiv'd some eighteen pound shots under the water;
On our lower-gun-deck two large pieces had burst at the first fire, killing all around, and blowing up overhead.

Fighting at sun-down, fighting at dark;
Ten o'clock at night, the full moon well up, our leaks on the gain, and five feet of water reported;
The master-at-arms loosing the prisoners confined in the afterhold, to give them a chance for themselves.

The transit to and from the magazine is now stopt by the sentinels.
They see so many strange faces, they do not know whom to trust.

Our frigate takes fire;
The other asks if we demand quarter?
If our colours are struck, and the fighting is done?

Now I laugh content, for I hear the voice of my little captain,
We have not struck, he composedly cry, *we have just begun our part of the fighting.*

Only three guns are in use;
One is directed by the captain himself against the enemy's mainmast;
Two, well served with grape and canister, silence his musketry and clear his decks.

The tops alone second the fire of this little battery, especially the main-top;
They hold out bravely during the whole of the action.

Not a moment's cease;
The leaks gain fast on the pumps—the fire eats toward the powder—magazine.

One of the pumps has been shot away—it is generally thought we are sinking.

Serene stands the little captain;
He is not hurried—his voice is neither high nor low;
His eyes give more light to us than our battle-lanterns.
Toward twelve at night, there in the beams of the moon, they surrender to us.

Stretch'd and still lies the midnight
Two great hulls motionless on the breast of the darkness;
Our vessel riddled and slowly sinking—preparations to pass to the one we had conquer'd;
The captain on the quarter-deck coldly giving his orders through a countenance white as a sheet;
Near by, the corpse of the child that serv'd the cabin;
The dead face of an old salt with long white hair and carefully curl'd whiskers;

The flames, spite of all that can be done, flickering aloft and below;
The husky voices of the two or three officers yet fit for duty;
Formless stacks of bodies, and bodies by themselves—dabs of flesh upon the masts and spars,
Cut of cordage, dangle of rigging, slight shock of the soothe of waves,
Black and impassive guns, litter ot powder-parcels, storng scent,
Delicate sniffs ot sea-breeze, smells of sedgy grass and fields by the shore, death messages given in charge to survivors,
The hiss of the surgeon's knife, the gnawing teeth of his saw,
Wheeze, cluck, swash of falling blood, short wild scream, and long, dull, tapering groan;
These so—these irretrievable."

(From "Walt Whitman.")

若しくは次に掲ぐる詩を御覧なさい。それは高翔した空想と、中年の女性の孤獨に於ての實感との無縫の錦繡であつて、嘗ていかなる詩人も、かくの如き詩題をかくの如く力強く、肉感的に、美しく、幻影的に描いたものはないと思ひます。

「二十八人の若者が海岸で水に戯れてゐる、
二十八人の若者、而して凡てが睦じく、

二十八年間の女らしい生涯、而して凡てが物さびしく。

女は岸の高みに美しい家を持つてゐる。
美しい女は、豐かに身を裝つて、窓の鎧扉(よろひど)の後に隱れてゐる。

どの若者を女は一番好くのだらう、
あゝ、中でも一番氣取らないのが女には美しいのだ。

どこにおいでゞすか、貴女よ、私はあなたを見てゐますよ、
あなたはあすこの水の中をはねまはりながら、しかもあなたの部屋の中にひそみこんでいらつしやる。

跳りながら、笑ひながら、二十九人目の游泳者が海沿ひをやつて來る、
他の人達は彼女を見なかつたが、彼女は若者等を見てそれを愛した。

若者の髯は濡れて輝き、水滴は又その長い髮にも流れ下つた。
小さな小河がその肉體中を走り過ぎた。

一つの眼に見えない手も亦彼等の肉體中を走り過ぎた、
その手は震へながら彼等の前頭から、肋骨から走り過ぎた。

若者達は仰向けに波に浮く——彼等の白き腹部は太陽の方に脹れ上る——彼等は誰がそれをしつかりと抱いて
ゐるかを怪しまない、
彼等は誰が垂り下り彎曲した曲線を描いて口をあて倚りかゝつてゐるかを知らない。
彼等は飛沫を以て誰をひた濡れにしてゐるかを思はない。

"Twenty-eight young men bathe by the shore;
Twenty eight young men, and all so friendly;
Twenty-eight years of womanly life, and all so lonesome.

She owns the fine house by the rise of the bank;
She hides, handsome and richly drest, aft the blinds of the window.

Which of the young men does she like the best?
Ah, the homeliest of them is beautiful to her.

Where are you off to, lady? for I see you;
You splash in the water there, yet stay stock still in your room.

Dancing and laughing along the beach came the twenty-ninth bather;
The rest did not see her, but she saw them and loved them.

The beards of the young men glisten'd with wet, it ran from their long hair:
Little streams pass'd all over their bodies;

An unseen hand also pass'd over their bodies;
It descended tremblingly from their temples and ribs.

The young men float on their backs—their white bellies bulge to the sun—they do not ask who seizes fast to them;
They do not know who puffs and declines with pendant and bending arch;
They do not think whom they souse with spray."

(From "Walt Whitman.")

思想といふものが如何に詩の形に於て具象的に表現されてゐるかの例を更に一つ加へて見ますなら、次の詩の如きはそれでありませうか。輓近ベルグソンによつて唱道せられた創造的進化の思想は逸早くホヰットマンによつて極めて實感的な詩形を以て歌ひ出されてゐます。

「先行者と共に、
私の父達や母達と共に、併し過去の時代の蓄積と共に、
若しそれがなかつたら今私があるやうにあり得なかつたらう、それらの凡てのものと共に
埃及、印度、フィニシア、希臘及び羅馬と共に、
ケルト人、スカンディナヴィヤ人、アラビヤ人、サキソン人と共に、
往古の海上の冒險者等と共に、法令、手工藝術、戰爭、遊歷と共に、
詩人、豫言者、神話、古傳及び神託と共に、
奴隷の賣買と共に——熱誠家と共に——唱歌詩人、十字軍士及び修行僧と共に、
衰へ行く王國及びそこを支配する王等と共に、
衰へ行く宗教及び僧侶と共に、
私達の大きな現在の海岸から見かへる小さな海岸と共に、
前へ〳〵と進んで來て、遂に今日達した無數の年所と共に、
あなたも私も到着した——亞米利加も到着した——而して今年も造り上げた。
この年！　それは無限の年を未來に送り出す所の。
おゝ然しそれは年所ではない——それは私だ——而してあなただ、
私達は凡ての法令に觸れ、而して凡ての先行者と共鳴する、
私達は豫言であり、神託である、修行僧であり、而して騎士であり、——私達は易々とその凡てと更に多くを

包含する、
私達は無始無終な時の眞中に立つ——私達は惡と善との眞中に立つ。
凡てのものは私達のまはりに蕩搖する——そこには光明と等しく暗黒がある、
私達のまはりに、太陽そのものが自轉し、その遊星の一群も亦めぐる、
それは太陽、その太陽の太陽、凡てが私達のまはりを轉回する。

私にあつては（これらのきびしい境界の下に滅裂に混亂してはゐるけれども）
私は凡てを理解し、凡てゞあり、凡てを信ずる、
私は唯物主義が眞であると信じ、精神主義が眞であると信じ、——部分を退けることをしない。

私はいかなる部分でも忘れたか？
私に來い、何人でも何物でも、私があなたを見きはめるまで、
私はアッシリヤ、支那、チュトニア及びヘブライ人を尊敬する、
私は凡ての學說、古傳、神及び半神を受け入れる、
私は古い物語、聖典、系統が除外例なく正しいと知る、私は過去の日があるべかりしやうにあつたと主張する、
而してそは在りし以上によいものではあり得なかつたと主張する。
而して今日も又あるべき姿であり——而して米國も亦然りと主張する。
而して今日と米國とは今ある以上によいものであり得ないと主張する。

諸州の名に於て、而してあなたと私との名に於て、過去、
諸州の名に於て、而してあなたと私との名に於て、現在。

私は過去が偉大であり、又未來が偉大であるだらうと知る、
而して過去と未來とは不思議に現在に於て握手するのを知る、
（私が代表する彼の爲めに――平民的な一般人の爲めに――あなたがその一般人ならあなたの爲めに）
私のある所、或はあなたのある所、この現在の日、こゝに凡ての日と凡ての人種との中心はある、
而して私達に取つて、凡ての人種凡ての時から來、或は來るであらうところの意味があるのだ）。

WITH antecedents;
With my fathers and mothers, and the accumulations of past ages;
With all which, had it not been, I would not now be here, as I am:
With Egypt, India, Phenicia, Greece and Rome;
With the Kelt, the Scandinavian, the Arab, and the Saxon;
With antique maritime ventures,—with laws, artizanship, wars and journeys;
With the poet, the skald, the saga, the myth, and the oracle;
With the sale of slaves—with enthusiasts—with the troubadour, the crusader, and the monk;
With those old continents whence we have come to this new continent;

With the fading Kingdoms and Kings over there;
With the fading religions and priests;
With the small shores we look back to from our own large and present shores;
With countless years drawing themselves onward, and arrived at these years;
You and Me arrived—America arrived, and making this year;
This year! sending itself ahead countless years to come.
O, but it is not the years—it is I —it is You;
We touch all laws, and tally all antecedents;
We are the skald, the oracle, the monk, and the Knight—we easily include them, and more;
We stand amid time, beginningless and endless—we stand amid evil and good.
All swings around us—there is as much darkness as light;
The very sun swings itself and its system of planets around us;
Its sun, and its again, all swing around us.

As for me, (torn, stormy, even as I, amid these vehement days,)
I have the idea of all, and am all, and believe in all;
I believe materialism is true, and spiritualism is true—I reject no part.

Have I forgotten any part?

Come to me, whoever and whatever, till I give you recognition.

I respect Assyria, China, Teutonia, and the Hebrews;
I adopt each theory, myth, god, and demi-god;
I see that the old accounts, bibles, genealogies, are true, without exception;
I assert that all past days were what they should have been;
And that they could no-how have been better than they were,
And that to-day is what it should be, and that America is,
And that to-day and America could no-how be better than they are.
In the name of These States, and in your and my name, the Past,
And in the name of These States, and in your and my name, the Present time.

I know that the past was great, and the future will be great,
And I know that both curiously conjoint in the present time,
(For the sake ot him I typify—for the common average man's sake—your sake, if your are he;
And that where I am, or you are, this present day, there is the centre of all days, all races,
And there is the meaning, to us, of all that has ever come of races and days, or ever will come.
("With Antecedents.")

第三に彼は健全性を高唱してゐますが、健全性を高唱するといふのは、結局人生の可能性を高唱してゐるのです。即ち人類は常によりよき現在を持ち續けて行きつゝあるといふ主張です。前の詩にもその氣持はまさしく現はれてゐますが、次の詩の如きもそれでせう。

「魂は旅して行く、
肉體は魂ほどに多く旅しはしない、
肉體も丁度魂ほどに大きな仕事をし、遂に魂に旅させる爲めに離れ去つて行く。

魂の旅の爲めに凡てのものが離れ去る、
凡ての宗教、凡ての堅固な物象、藝術、政府、――この地球といはず、凡ての星體の上にありしもの、今あるものは、宇宙の莊嚴な大道を行く魂の行列の前には、悉く物影、片隅に隱れ去つてしまふ。

宇宙の莊嚴な大道を行く男と女との魂の行進からいふと、他の一切の行進は附屬的に必要な象徵で養分であるに過ぎない。

どこまでも生き〳〵と、どこまでも前方に、
莊嚴に、嚴肅に、悲痛に、隱れて、退けられて、狂ほしく、混亂して、虛弱に、不滿足に、捨鉢に、誇りがに、愛でたげに、惱しく、或は人に受け入れられ、或は人に退けられ、人は行き、人は行く！　私は人々が行くのを知つてゐる、然しどこに彼等が行くのかを知らない、
けれども彼等が最上へ――何か偉大なものゝ方へ行くのだとは知つてゐる」

"The soul travels;
The body does not travel as much as the soul;
The body has just as great a work as the soul, and parts away at last for the journeys of the soul.

All parts away for the progress of souls;
All religion, all solid things, arts, governments,—all that was or is apparent upon this globe, or any globe, falls into niches and corners before the procession of Souls along the grand roads of the universe.
Of the progress of the souls of men and women along the grand roads of the universe, all other progress is the needed emblem and sustenance.

Forever alive, forever forward,
Stately, solemn, sad, withdrawn, baffled, mad, turbulent, feeble, dissatisfied.
Desperate, proud, fond, sick, accepted by men, rejected by men,
They go! they go! I know that they go, but I know not where they go;
But I know that they go toward the best—toward something great."

(From "Song of the Open Road.")

「おゝ生きる限り、生の支配者であつて——奴隷とならぬこと、

威勢あり戰勝者として生に面すること、
腹をふくらかさず――屈託せず――つぶやかず、皮肉な批評をせず。
　（中略）
おゝ悅服させる力以上の力で牽きつけること！
それはどういふ力か私は知らぬ――しかも見よ！　何物にも服從しない或る力、」
いつでも主動的で、受動的でない――しかも如何に力強くそれは牽くよ

おゝ受難の喜び！
偉大なる矛盾との戰ひ！　恐れ氣なく敵に向ふこと、
全く一人敵中にあること！　どれ程人間一匹が抵抗し得るかを實證すること！
爭鬪、呵責、牢獄、一般の非難、死を顏前に見守ること、
斷頭臺に登ること！　完全な無頓着さで銃の筒先に進み出ること！
實に實に神であること！

おゝ船して海に帆走ること！
この頑强な永續せぬ陸地を見棄てること！
物うい町や、人道、家屋の變りなさを見棄てること！
おゝ汝固定した不動の陸よ、汝を見棄てゝ船に入り、
帆走り、帆走り、帆走ること！」

"O, while I live, to be the ruler of life—not a slave,
To meet life as a powerful conqueror,
No fumes—no ennui—no more complaints, or scornful criticisms.

....

O, to attract by more than attraction!
How it is I know not—yet behold! the something which obeys none of the rest,
It is offensive, never defensive—yet how magnetic it draws.

O, joy of suffering!
To struggle against great odds! to meet enemies undaunted!
To be entirely alone with them! to find how much one can stand!
To look strife, torture, prison, popular odium, death face to face!
To mount the scafford! to advance to the muzzles of guns with perfect nonchalance!
To be indeed a God!

O to sail to sea in a ship!
To leave this steady, unendurable land!
To leave the tiresome sameness of the streets, the sidewalks and the houses;
To leave you, O, you solid motionless land, and entering a ship,

To sail, and sail, and sail!"

(From "Poem of Joy.")

「私は誓言する、私は嘗て征服せられないものゝ味方だ、—
その根性を一度も曲げたことのない男女の味方だ、
法律や、學説や、傳習に打ち勝たれない人々の味方だ、
私は誓言する、私は全地球と肩をならべて押し歩くものゝ味方だ、—
凡てを開始する爲めに一事より開始するものゝ味方だ。」

"I swear I am for those that have never been master'd!
For men and women whose tempers have never been master'd,
For those whom laws, theories, convention, can never master.
I swear I am for those who walk abreast with the whole earth!
Who inaugurate one, to inaugurate all."

(From "Marches now the War is over.")

ホヰットマンのこの健全な物怯ぢをしない氣稟は、彼をしてエマアソンの眉をひそめしめた性慾の歌「アダムの子等」を書かせました。又ボストンの檢事局をして發賣を禁ぜしめた「カラマス」を書かしめました。「若しお前が

お前の最上のものを浪費してゐるのならこゝに來るな。病人は駄目だ——酒喰らひや梅毒病みはこゝには許されぬのだ」と彼の道に來ようとする人々に警戒を與へながら、

「私は墮落してゆく人を捕へる、而して無敵の意志を以て彼を引き上げる、
おゝ失望する者よ、茲に俺の頸があるぞ、
神かけていふ、降つて行つてはいけない、構はないから安心して、俺の頸につるさがれ」

"I seize the descending man, and raise him with resistless will.
O, despairer, here is my neck;
By God! you shall not go down, hang your whole weight upon me." (From "Walt Whitman.")

といつてゐる。その上彼は自分自身が世のいふ罪人であることも知つてゐる。彼は自ら歎いてから歌つてゐる。

「淫慾と邪惡とを私は退けない、
私は犯罪者と共にあつて燃えるやうな愛を覺える、
私もその仲間だと私は感ずる——私自身が罪囚であり漁淫であるからだ。
而して私はこれから彼等を退けることをしまい——私は何うして自分自身を退け得ようぞ。」

"Lusts and wickendness are acceptable to me;
I walk with delinquents with passionate love,

I feel I am of them—I belong to those convicts and prostitutes myself,
And hence forth I will not deny them—for how can I deny myself".

(From "You Felons on Trial in Courts.")

さうです。彼も亦嗟嘆と後悔との前に打ちくだかれねばならぬ瞬間を幾度か有し、生活の狂ひに對しては「默して沈思」せねばならぬ場合を屢〻持つたには相違ありません。然しながら彼の向日性は、それらの暗雲に襲はれれば襲はれる程、雄々しくその特質を發揮しました。恐らく彼位一般の人が遭遇せねばならぬ不幸や、罪惡や、譎詐や、ひがみ根性を身近かに見且つ觸れたものは多くありますまい。しかも又彼位ゐ人としての尊嚴を信じ拔いた人も多くはありますまい。彼の前につれて來ると、この極めて平凡なしかも偉大なドン・キホーテの前につれで來ると大抵の皮肉屋は世にも卑しい慘めなものになつてしまひます。彼一人のあるのは人生の可能性を力強く證據立てることです。こゝから彼の第四の特色なる愛が生まれ出ます。こゝから彼の神が生まれ出ます。

「無限――萬有についての思索、
爾はわが神。
私を待ち望むに飽くことなく、未だ現はれざれども必ず來るべき、
神々しい戀人、完全なる友人、
爾はわが神。
公明で、能力あり、美しく、飽滿し、且つ愛に滿ち、肉體に充實し、靈に微妙なる汝――完成されたる人！

爾はわが神。

おゝ死――(生はその役目を果たしたから)
天上の宮殿を開き、そこに人を導くもの、
爾はわが神。

私が見、感じ、知る限りの最大最上のもの凡て、
(それは沈滯した約束を破つて――おゝ汝魂、汝の自由にする)
爾はわが神。

若しくは汝、常に進み行く不壞の道、凡ての偉大な觀念、人類の夢想、私の魂よ、汝を高め解放する凡てのもの、
凡ての雄々しき、思ひ入つた情熱の行爲、
爾はわが神。

若しくは時間、若しくは空間、
地球の姿の神々しさ不思議さ、若しくは私が見且つ崇拜する私自身の姿、若しくは他の人の見事な姿、若しくは耀灼たる太陽、若しくは夜天の星、
爾はわが神」

"THOUGHT. of the Infinite—the All!

Be thou my God.

Lover devine, and perfect Comrade!
Waiting, content, invisible yet, but certain,
Be thou my God.

Thou—thou, the Ideal Man!
Fair, able, beautiful, content, and loving,
Complete in Body, and dilate in Spirit,
Be thou my God.

O Death—(for Life has served its turn;)
Opener and usher to the heavenly mansion!
Be thou my God.

Aught, aught, of mightiest, best, I see, conceive, or know,
(To break the stagnant tie—thee, thee to free, O Soul,)
Be thou my God.

Or thee, Old Cause, when'er advancing;

All great Ideas, the races' aspirations;
All that exalts, releases thee, my Soul!
All heroisms, deeds of rapt enthusiasts,
Be ye my Gods!

Or Time and Space!
Or shape of Earth, devine and wonderous!
Or shape in I myself—or some fair shape, I, viewing, worship,
Or lustrous orb of Sun, or Star by night:
Be ye my Gods."

("Gods.")

若し第四の特徴なる彼の愛に關する詩を、この「草の葉」から拾ひ上げようとなら、餘りに多きに過ぎて今夜中お話をし續けてゐてもなほ足らないと思ひますし、諸君は今までの所でも既にいゝ加減厭(あ)きられたと思ひますから、代表的だと思はれる例の二三を擧げることにとゞめておきませう。私がこの詩集の中の金剛石だと思ふ詩は、

「見も知らぬ人よ、あなたが行きずりに、私に遇つて、話しかけようと望むなら、話しかけて惡い譯が何處にありませう?
又私があなたに話しかけて惡い譯が何處にありませう?」

"STRANGER! if you, passing, meet me, and desire to speak to me, why should you not speak to me?

And why should I not speak to you?　　("To You.")

といふ二行の短詩です。詩は短いけれども心は長いと思ひます。ふと遇つたばかりで友達であり戀人であり得ると感じ合つた人でも、單に見知らぬ人といふばかりに、言葉もかけ合はずに永久に離れて行つてしまふといふのは、はかない、さびしい、腹立たしいことではありませんか。人々が愛の觸角をもつと公然と思ふまゝに働かすことが出來たら、私達の生活の相はもつと異るにちがひないのです。凡てこの祕められたる大事な欲求を、押し隔て、被ひかくし、破壞せんとする生活の樣式なり制度なりは、撤廢されなければなりません。而してやがてはされるでせう。

「凡てのもの丶底に、生まれたまゝの姿、
私は誓ふ、私は自分の生まれたまゝの姿を守らう、――敬虔なことだらうが瀆聖のことだらうが構ひなく、
私は誓ふ、生まれたまゝの姿程に私を喜ばすものはない、
男、女、都會、國民は共に生まれたまゝの姿によつてのみ美しい。
凡てのもの丶底に男と女との愛の表現の必要がある、
私は誓ふ、私は見過ぎる位男に對し女に對して愛の表現の卑しい力なき方法を見せられた。
この日から私は男に對し愛の表現の私らしい方法を採用するぞ。」

"Underneath all, nativity,
I swear I will stand by my own nativity—pious or impious, so be it;

I swear I am charm'd with nothing except nativity,
Men, women, cities, nations, are only beautiful from nativity.
Underneath all is the expression of love for men and women,
I swear I have seen enough of mean and impotent modes of expressing love for men and women,
After this day I take my own modes of expressing love for men and women.

(From "Marches now the War is over.")

それならホヰットマンらしい愛の方法とは、如何なるものであつたか。彼はかう歌つてゐます。

「私は制度を破壞せんともとめてゐると攻擊されてゐるのを聞かされる、
然し私は制度に贊成するものでも反對するものでもない、
（私と制度とは何のかゝはりがあらうぞ、――又その破壞と何のかゝはりがあらうぞ）
たゞ私はマンハッタンに、及び內地と海沿ひとを問はず諸州の凡ての町に、
畑と森に、水を切つて往來する大小の船の上に、
建物も、規約も、委員も、理窟もなく、
仲間同士の親密な愛の制度を建てようとするばかりだ。」

"I HEAR it was charged against me that I sought to destroy institutions,

But really I am neither for nor against institutions;
(What indeed have I in common with them?—Or what with the destruction of them?)
Only I will establish in the Manhattan, and in every city of these Sates, inland and seaboard.
And in the fields and woods, and above every keel, little or large, that dents the water,
Without edifices, or rules, or trustees, or any argument,
The institution of the dear love of comrades."
("I hear it was charged against me.")

かくて彼の愛は生活のあらゆる方面に擴がつて行つた。彼は一人の娼妓に向つてから歌ひかける。

「落着いて——私に對してはくつろいでお出で——私はワルト・ホヰットマン、自然があるやうに自由で快活だ、
太陽があなたを見放さない中は、私もあなたを見放しはしない、
水があなたのために輝くのを拒み、而して木の葉があなたのためにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたのために輝きひらめくことを拒みはしない。
わが娘よ、私はあなたと一つの約束をしよう——而して私はあなたが私に會ふことの出來るだけの準備をするやうに命じよう、
而して私が來るまでにあなたが忍耐強く而して完全になつてゐるやうに命じよう。
それまで、あなたが忘れぬやうに、意味ある眼付であなたに挨拶を送る」

"Be composed—be at ease with me—I am Walt Whitman, liberal and lusty as Nature:

Not till the sun excludes you, I exclude you;
Not till the waters refuse to glisten for you, and the leaves to rustle for you, do my words refuse to glisten and rustle for you.
My girl, I appoint with you an appointment—and I charge you that you make preparation to be worthy to meet me,
And I charge you that you be patient and perfect till I come.
'Till then, I salute you with a significant look, that you do not forget me."

("To a Common Prostitute.")

或は彼はその弟の負傷を復讐すべく戰場に臨んだ。而して人と人とが殺し合ふ慘狀を一度目撃すると、二度と顏を向けることが出來なかつた。

「蹶起し激怒し、
私は警鐘を鳴らして、情け容赦のない戰爭を促さうと思つた、
けれどもぢきに指がいふことを聞かなくなり、私の顏は俯向き、而して私は斷念して、
負傷者の傍に坐り、而してそれを慰め、或は沈默して死者を見守つた。」

"Aroused and angry,
I thought to beat the alarum, and urge relentless war;

But soon my fingers fail'd me, my face droop'd, and I resign'd myself,
To sit by the wounded and soothe them, or silently watch the dead."

或は又、彼が切愛した名大統領リンカーンの死に際しての挽歌の如きは、長いのでこゝに紹介することの出來ないのを遺憾としますけれども、よい一人の人間に對する哀情が身を切るやうに痛感されます。又雌鳥を失つた一羽の海鳥を詠じた詩なども、こゝで紹介するには長きに過ぎますけれども、詩人の同情は格調の上にも自然に現はれて、その內容が幽艶であるのみならず、誦讀したゞけで、意味は分らないでも、惻々と人を動かすやうな力を持つてゐます。

「私が好むところの人々と共にゐるだけで十分だと私は知る、
一夕をその人々と共に通すだけで十分だ、
美しい、物好きな友、呼吸し、放哭する肉によつて圍まれる、それで十分だ、
その人々の間を通り、或は一人に觸れ、或は私の腕を極々一瞬間彼なり彼女なりの頸のまはりに觸れること、
と――これは何だらう？
私はこれ以上の喜びを求めない――私は海でのやうにその中に泳ぐ。」

"I have perceiv'd that to be with those I like is enough,
To stop in company with the rest at evening is enough,
To be surrounded by beautiful, curious, breathing, laughing flesh is enough,

To pass among them, or touch any one, or rest my arm ever so lightly round his or her neck for a moment—
what is this, then?
I do not ask any more delight—I swim in it, as in a sea."　(From "I sing the Body Electric.")

からなると、彼にとつてはもう靈肉の區別はありません。彼は自由に肉から超越して肉に執着します。彼のこの愛は隣人から隣人に及んで遂にデモクラシーを唱道させました。彼は神聖なる平民(Deviser Average)を讃美しました。彼はこの平民の出現の爲めに、その平民の間に完全な理解が成り立つためには、いかなる革命をも餘り高價過ぎるとは思ひませんでした。佛國が革命によつて氣息喘々たる時、ホヰットマンは米國の一隅から熱心な援助の聲を寄せて、平民の勝利、平安幸福の爲めには、國境も撤し、王も廢せよと叫びました。この方面に於ける彼の思想を更に探らうと思ふなら、「自選日記」と譯されてゐる"Specimen Days in Amrica"を讀み試みられるがいゝと思ひます。眞實の意味に於て米國のデモクラシーの爲めに彼の寄せた火のやうな愛着と深い懸念とは、簡素雄勁な文章の中に深く汲み取られるでせう。

最後にホヰットマンの第五の特色としての神祕的表現についての二三の例を擧げて見ませう。

「魂の流射、
魂の流射は、問題の種を播きながら、木の葉に被はれた門を潜つて、内部から洩れて出て來る。
このあこがれ心、それは何故だらう！　又それと定めがたいこのそゞろ心、それは何故だらう？
何故男の人達、女の人達が私の側近く來ると、太陽の光が私の血に漲るのだらう？

何故彼等が私を離れると、私の喜びの長旅は細く垂れ下るのだらう？
何故私がその下を歩く毎に、あすこの樹から偉大な音律的な思想が私の上に降るのだらう？
（思ふに人はあの樹に夏冬をつるしておいて、私がその下を通るとその木の果を落してよこすのだ）」

"Here is the efflux of the Soul;
The efflux of the Soul comes from within, through embower'd gates, ever provoking questions:
These yearnings, why are they? These thougts in the darkness, why are they?
Why are there men and women that while they are nigh me, the sun-light expands my blood?
Why, when they leave me do my pennants of joy sink flat and lank?
Why are there trees I never walk under, but large and melodious thoughts descend upon me?
(I think they hang there winter and summer on those trees, and always drop fruits as I pass;)"

(From "Song of the Open Road.")

「涙！　涙！　涙！
夜寂寥の中……涙よ。
白い汀に流れては、砂に吸ひ込まれ行く涙！――一つの星も出てゐない――眞暗な物寂しさ。
頭を包んだ彼の眼から洩れる濕つた涙――おゝその亡靈は何者だ――暗闇の中で涙を洩すその異形は何者だ。
瀧なす涙――おゝ泣く涙――息も絶え〴〵に泣き叫ぶその痛苦。

おゝ嵐　形相すさまじく、海沿ひを吹きまくる、おゝ物すごい夜の嵐——風！　おゝそのはげしさ、ゆゝしさ！
おゝ影よ——晝の間は、沈着な顔付をして、規則正しい歩みで、威儀の正しい影よ。
夜が來て、人を離れて孤獨になると、おゝその時の涙の海、
涙の！　涙の！　涙の！」

"Tears! tears! tears!
In the night, in solitude, tears;
On the white shore dripping, dripping, suck'd in by the sand;
Tears,— not a star shining—all dark and desolate;
Moist tears from the eyes of a Muffled head;
—O who is that ghost?—that from in the dusk, with tears?
What shapeless lump is that, bent crouch'd there on the sand?
Streaming tears—sobbing tears—throes, choked with wild cries;
O storm, embodied, rising, careering, with swift steps along the beach:
O wild and dismal night storm, with wind! O belching and desperate!
O shade, so sedate and decorous by day with calm countenance and regulate pace;
But away, at night, as you fly, none looking—O then the unloosen'd ocean,
Of tears! tears! tears!"

「聖なる死の囁き、それが囁かれるのを私は聞く、
夜の唇のざれ言葉——絹ずれを思はす饒舌、
靜かに登つて來る跫音——神祕なそよ風、ひそかに低く吹いて來る、
見えざる河の漣——流れ、永遠に流れる潮の流れ、
（それともあれは涙の漣か？　人の涙の果てなき海原の）

私は見る、僅かに見る、空の方に、大きな叢雲（ずらくも）を、
憂はしげに、靜かに卷きちゞみ、音もなく擴がり交り合ふ、
時折り、朧ろに悲しげな遠星が、
現はれ、又隱れながら。

（寧ろ或る分娩——或る嚴かな不死の誕生か、
それと眼にはさだかならぬ國境を、
魂は今……越えて行く）

"WHISPERS of heavenly death, murmur'd I hear;
Labial gossip of night—sibilant chorals;

Footsteps gently ascending—mystical breezes, wafted soft and low.
Ripples of unseen rivers—tides of a current flowing, forever flowing;
(Or is it the plashing of tears? the measureless waters of human tears?)

I see, just see, skyward, great cloud-masses;
Mournfully, slowly, they roll, silently swelling and mixing;
With, at times, a half-dimm'd, sudden'd far-off star,
Appearing and disappearing.

(Some parturition, rather—some solemn, immortal birth:
On the frontiers, to eyes, impenetrable,
Some Soul is passing over:)"

("Whispers of Heavenly Death.")

これらに類した詩はなほ數多くこゝに引用することが出來ますが、象徵派の詩人に見るやうな格調がこれらの作品に窺はれるといふことは誰でも氣付くでせう。深い神祕に對するパルスが自ら感ぜられるやうな作品です。瞑想的なホヰットマンの肖像は是等の詩の中に求めることが出來るでせう。

極めて粗笨な不忠實の紹介になりました。結局私はこの通りこのユニークな詩人に對しても何も本質的なことは語り得なかつたやうです。然しながら、こゝに引用した若干の詩によつて、諸君の中にこの「よき老いたる灰

色の詩人」に對して興味をお感じになつた方がありますなら、進んで自ら彼を研究していたゞきたいと思ひます。詩人は萬花鏡です。彼の姿は見る人によつて異るでありませう。而してその何れもがある點までの莫相であり、ある點まで幻影でありませう。しかも彼は私達にかう約束してゐます。

「私は私の身を塵に委する、而して私の愛する草に現はれよう。
君が私を求めたいなら、君の靴下に私を尋ねなさい。
君には私が何であり何をいふのか解るまい、
解らなくてもいゝ、私は君の爲めに健康を齎らさう、而して君の血を淨め力づけよう。

一度私を捕へそこなつても失望してはいけない、
茲で尋ねあてなかつたならほかを尋ねて御覽、
私は君を待つて必ず何處かにゐるのだから。」

（一九二〇年十月、新人會第二回學術講演會に於て）

一つの提案

「イブセンの仕事場から」といふ本がある。イブセンがその作品を世に發表する前、色々に工夫を凝らして草稿を作つた、それが集めてあるのだ。その中に「人形の家」の草稿がある。一八七八年に書かれたものだから、今から四十年以前の文獻である。今丁度その本を友人に貸してあるので、正確にイブセンが書いた通りをこゝに紹介することが出來ないのを殘念に思ふが、私の舊稿からこゝにその主意を書き連ねて見ると、

「世には二種類の精神的法則即ち二種類の良心がある。その一つは男性の、而して他の一つは、男性のそれとは全然異質な女性の良心である。この二つの良心は相互の間に理解がない。而して實際生活に於ては女性はいつまでも男性の法則によつて判斷せられてゐる。それは丸で彼女は女性ではなくして男性であるかの如く。

女性は現在の社會にあつては、全然男性化した現在の社會にあつては、彼女自身であることが出來ない。今の社會の法則は男性によつて組立てられ、而してその法則制度の下にあつては、女性の行動は男性的見地のみから判斷される。

彼女は僞替僞造を敢てし、しかもそこに誇りを感じた。何故ならば彼女はその良人の生命を救はんが爲めに、愛情によつてそれをなしたからである。しかも良人なる男性は凡下（ぼんげ）な名譽心なるものにかゝづらつて、法律の味方になり、問題を男性の視角からのみ考へた。

そこに精神的衝亂が起る。主權に對する信念に混亂を來し壓抑を感じて、彼女は道德的權威の承認及び育兒の能力についての自信を失ふに至つた」云々。

大體かういふことが書いてあつたと記憶する。近頃これを讀んで私は、自分でしたり顏に今まで主張してゐたことが四十年の昔にイブセンによつて遺憾なく云ひ現はされてゐるのを知つて恥ぢずにはゐられなかつた。

私の主張といふのは今の社會生活はその根柢に於て男性の創立したものであつて、女性は與かつてゐないといふことだ。丁度今の産業制度は、資本家と勞働者の協同作業によつて成り立つてゐるけれども、その實際に於ては資本家の創立したものであつて、勞働者は無智なまゝで、甚だ不利益な條件で、自分達を益々窮地に陷れる制度を助長させてゐるやうに、今の社會生活は男性が自分の傾向に都合のいゝやうに、女性には頓着なく組立てたものだ。若し女性を考へに入れるやうなことがあるとすれば、それは女性が男性の生活の內容を便利にし、安固にし、豐富にし、享樂的のものになし得る場合に於てのみだ。これは私達が少し公平な心の立場から私達の生活を考へて見れば、直ぐ氣附かずにはゐられないことである。

かういつたとて、私は何も現在女性と男性とが到るところでいがみ合つてゐると申し出るのではない。同じ産業制度の下にあつても、個人として見れば實に立派な心がけのいゝ資本家もゐる。制度の許す限りに於て、勞働者に對して同情と理解とを持つた人がある。そのやうに社會生活に於ても女性に對して理解を有し、親切を有する男性がゐないではない。又同じ産業制度の下にあつても、自分等の運命をさうあるべきものだと頭から決め込んでしまつて、丁度昔の君臣又は親子の關係のやうに、資本家に信賴し服從して、何等の苦痛矛盾を感じない勞働者がある。そのやうに、社會生活に於ても、現在の社會生活が永久不變のあるべき生活であつて、女性はかゝる運命にあるべきものと觀念し、男性の慈悲心を拾ひ物でもしたやうによろこんで、その庇護の下に身を置くことに滿足し切つてゐる女性もある。だからかゝる不自然な社會生活も破滅を見ることなく今日まで續いて來てゐるのだ。然し今日まで續いてゐるといふことが決して現在の社會生活の內容が完全であるといふ理由にはならな

い。若し一人の男性がゐて、現在の社會生活の道德や習慣を利用して、女性を壓迫しようと企てるならば、一寸想像することが出來ない程な亂暴狼藉を振舞ふことが可能であらう。現在わが日本國に賣春婦の數は、中等程度以上の教育を受けてゐる女學生の數より多いといふではないか。自ら進んでかゝる境遇に身を落したものが尠くはないのだと辯解する人に私は答へたい。自らそこに身を落すのを平氣ならしめた原因は何處にあるのかと。假りにさういふ自墮落な女性を論外において見たとしても、この現象は人を考へさせずにはおかないと私は思ふ。現在の社會生活に於て、貞操といふことは男性に對してよりも女性に對して特に嚴しくあてはめられてゐる。結婚によらずして一度童貞を破つた女性は、結婚の權利をすら亡失したものゝやうに考へられてゐる。それほど女性に對して社會は貞操の重んずべきを教へながら、多數の女性をして貞操を賣物にさせて恬然として知らぬ顏をしてゐるのだ。貞操を强ひるのも、それを賣物にさせるのも、男性に取つて都合がいゝからだと解釋するより解釋のしやうがないではないか。若し社會生活形成の根柢に女性の力が働いてゐたら、かゝる矛盾は生じて來べき筈がないのだ。かゝることは唯その一例に過ぎない。女性に課せられてゐる道德習慣を少し綿密に考察して見たならば、誰でも今の生活の基調が男性のみによつて築き上げられてゐるのを發見するに苦しまないだらう。

地球の上に殆んど同數の男性と女性とが存在してゐる以上、かゝる生活樣式が人類といふものによい結果を持ち來すべき筈がない。兩性ともかゝる不自然な生活に呪はれて墮落して行かねばならぬ。男性は知らず識らず女性に對して侮辱者となる。私自身が屢々それであることを意識する。女性を男性の奴隸であるとして取り扱はうとする誘惑は、旣に血液の中に傳へられて私の心にも存在してゐる。私は自分自身それを恐れるのだ。私は何も聖人だからかゝる說を主張するのではない。私自身が先づこの矛盾から救はれたいから主張するのだ。兩性生活の缺陷から來る冥罰を私も十分被つてゐるのを苦痛に感ずるから、今の處痩我慢して漸やく誘惑に打ち克つてゐる

けれども、いつそれに負けないとも限らないから、大急ぎでこの事を主張するのだ。女性は知らず識らず男性を呪咀するか、その被征服者となつて甘んずる。これらのことが隱約の中にどれ程私達の心を腐らしつゝあるかは意想外のものである。

然らばこの矛盾を如何にしたらいゝか。それはその矯正を女性に待つより仕方がない。産業制度に於て、その革新の新しい希望が全部懸つて勞働者の手にあるやうに、社會生活に於ても、その根柢的な革新は、今までの生活を創造した男性によるにはあらずして、實に奴隷の境遇におかれてゐた女性によらねばならぬのだ。新しい見方は最早男性の間からは生れ出やうがない。男性は既に創造をなし終へた。而して女性の創造すべき順序が來なければならぬのだ。

度々いふ事だが、女性がこれまで通りの社會生活の諸部門の活動にどれ程行き渡つて參加し得る日が來た處が、それはそれだけの事では結局男性が創造した社會生活の樣式を鞏固にするといふ結果を持ち來すに過ぎないことを知らねばならぬ。勞働者が縱令奮發して資本家の位置に登り得たとした處が、今までの產業制度では矢張り資本家と利害を別にする勞働者が必要とされるだらう。だからある一定數の勞働者が資本家となつて樂をした所が、そこには更に多數な勞働者が生まれ出て來なければならぬ。勞働者は永久に失くなりはしない。それと同じことが兩性問題の解決についても云ひ得られるのだ。勞働者が階級鬪爭を主張するのは、勞働者が資本家の立場を取つて代らう爲めではない。資本家と勞働者とをなくなす爲めだ。凡ての人が同じ立場にあつて生活をしたいが爲めだ。女性の運動も亦かくあらねばならぬ。女性は男性化して男性の創り上げた生活樣式を乘つ取る代りに、その樣式を無くなさなければならぬ。男性が惡いのではない。男性の創り上げた社會生活の樣式が惡いのだ。その樣式は上は政治宗教道德から下は家庭生活、家の建方、料理の器具に至るまで惡い。それは凡て片務的に出來上

つてゐる。女性は先づそれを打破せねばならぬ。而してその跡に女性の天才、本能から創り出した樣式を打ち建てねばならぬ。而してそれが今まで男性の創り出して來た樣式と互に融合一致する時、甫めて完全な社會生活は生まれ出て來るであらう。若しこの企圖に於て女性の天才、本能が目的を遂行するに足るだけ力強くなかつたならば、女性は永久に男性の隸屬者であり、その慈悲の下に命をつながねばならぬ。それは殘酷であらうとなからうと、どうしやうもない女性の運命だ。

私は男性であるくせに何うして男性を裏切るやうなことを女性に告げ口するか。それは資本家が自分の創つた制度に中毒して、自滅して行かうとする苦痛に堪へられるやうに、私も亦私が屬する男性の創つた樣式に中毒して、たまらない不安を日夜感じ出してゐるからだ。子供の將來だけを思つても、私のやうな不安を嘗め續けさせたくないからだ。

四十年も前にイブセンが道破したことを繰り返さねばならぬ私は少し馬鹿だ。私はもつと進んだ提案をせねばならぬ筈だ。けれどもこれ以上のことがまだ云へない。云へる時が來たらまた云ふ。（談話筆記）

（一九二〇年十月「女性日本人」所載）

クロポトキンの印象と彼の主義及び思想に就いて

クロポトキンは森戸辰男氏に殘酷な運命を與へたやうですが、私には反對に面白い運命を與へて呉れました。四年程前に「新潮」が海外で會つた文藝家といふ題で歐米の思想家の印象を載せたことがありました。一番に與謝野晶子さんがロダンの印象を書かれましたが、何處で私のことを知つたか二番目には私に來ました。その時私の書いたのがクロポトキンの印象で、それが私の文壇へのデビュウになつたのです。

所が可笑しいのは、何處でクロポトキンに會つたのか、翁が何んと云ふ處に住んで居られたのかすつかり忘れて了つて、どうしても思ひ出せないのです。ロンドンの郊外といふことは解つてゐますが、どつちの郊外だつたかさつぱり解らないのです。然しクロポトキンに會つたことは事實で、まあ世界の何處かで會つたのですね。何んでも一月の末ごろでした、千九百四年です。豫め手紙で訪問をしたいと言つて遣ると、月曜に待つてゐるといふ返事でしたが、丁度月曜には他にエンゲージメントがありましたので、其の前日の日曜に出かけました。汽車で行つたことを覺えて居ります。降りた所は工場地が市街地に變つたやうな、がさ〳〵した町でしたが、そこの廣いペーヴメントを行くと右側に三軒のアパートメントがあつて、その中央の家にクロポトキンが住んでゐました。ベルを押すと白髮になつた奧樣が出て玄關右手の客室に通されました。その奧隣りが食堂になつてゐました。そこに令孃が出て來て接待してくれました。翁はライブラリーで仕事をしてゐるし夫人は食事の支度をしてゐるから一寸待つてくれと言つて、その娘さんが話相手をして呉れましたが、それは極く快活な明るい愉快な娘さんで

した。三十分ばかりしてクロポトキンが來て、よく來たと言つて暖かい握手をされました。あなたの本を一通り讀んだが、自分の解り兼ねる點をいろ〳〵伺ひたいと思つて來たといふと、さうかそれでは書齋に來て吳れと言つて二階の書齋に連れてゆかれましたが、三間に四間程の部室で、壁際には天井までぎつしり本が詰まつて居ました。裝飾はかまはない方らしく室のファニチュアなど隨分アナクロニズムなものでした。其のとき翁の著書"Feilds-Labor and Workship"にサインしたのを贈られ、著者からどれでも自由に飜譯して可いといふ許可を得ましたが、つひまだ手をつけずに居ります。堺、幸徳は何うしてゐるかなどとクロポトキンはよく名前を覺えてゐて消息を訊いてゐました。丁度その頃はドハボールが加奈陀で新しい共產村を造つてゐた時分で翁はそれが成功することを頻りに望んでゐました。ドハボールといふのはロシアの或る村の名ではないかと思ひます。日露戰爭の時にそれが極端な非戰論を唱へて兵器を燒き捨てゝ出征を拒んだのですが、當時非常な問題になつた事件です。すると英米のフレンド派基督敎の一派で非戰主義の或る派の人達が盡力して加奈陀へ移住させたのです。トルストイの「復活」は印稅を其の人達に寄附する爲めに書かれたものだといふことです。ドハボールは加奈陀で共產村を造り、鐵道工事に働いて勞銀を村全體に公平に分配してやつたのですが、周圍の社會が全然異なる組織にあるので、その共產生活は他との交涉から失敗に終つたといふことでした。

そんな話をしてゐると、やがて食事の用意が出來たといふので、私は始めて訪問した家なので辭退しましたが、構はないから是非食べて行けといふので食堂へ行きました。食卓へ着いたのは翁夫妻と先程の娘さんと若い紳士でしたが、其の靑年紳士は娘さんとエンゲージの間柄らしく見えました。そして平生は露語か佛語でせうが、私がゐた爲めか皆英語の會話で、非常に愉快な氣持ちの好い食事でした。

クロポトキンの著書は一通り讀みました。可なり澤山あつて特に宣傳用のパムフレットはなか〳〵善く書いて

あります。翁の無政府主義といふのは、簡單に言へばコムミュニティーを小さなものにして其の各〻が共產の形をとるのです。翁の計算に從へば、そのコムミュニティーでは各人の生產勞働に從事する時間は一日三時間でいいのです。さういふ强制勞働の理想になると、何時も問題になるのは汚い仕事や面倒な仕事、例へば糞尿の處置とか活字を植ゑる勞働とかは誰もするものが無からうといふ事ですが、クロポトキンはそれを科學の進步に依賴して居るやうです。ベルを押すとかハンドルを廻すとかすれば、とにかく人の嫌ふ仕事は處理されることになるのだと言ふのです。それからそのコムミュニティーの生活に適しない人、社會組織を破るやうなつまり犯罪人といふやうなものは其のコムミュニティーから退去させられるのです。どこでも他のコムミュニティーへいつてみて、自分を置いてくれる處があるかどうか見て來るが好いといふのでせう。然し結局さういふ人間を容れる處は無いわけですから、自然に誰もコムミュニティーの生活に從ふことになるのです。

然しクロポトキンのさういふ小さなコムミュニティーを作るといふ無政府主義の理想は、それは全世界がさうならなければ出來ないことで、假令(たとひ)ロシア一國がさうなつても、他の國が今のまゝでは行はれないでせう。そして全世界がさうなるといふ事は畢竟空想に近いと思はれるかも知れません。翁の無政府主義的共產社會の理想に對して、有力な破綻とされるのは、大規模な、國際的な仕事の問題です。さういふ小さなコムミュニティーの世になつて、誰が鐵道を敷き列車を運轉するのか、誰が交易に從ふのかなどゝいふ事になると、翁の考へも確かに斯うとはきまつてゐないやうです。同じ無政府共產主義でも、クロポトキンのは、勞働組合が產業を管理するといふサンヂカリストの主張とは大分違つた所があります。

そして、クロポトキンはさういふ共產社會を來す手段として階級鬪爭を是認し主張して居ります。翁の名著「佛蘭西革命史」を私はまだ讀んで居りませんが、あれはもう一度あゝいふ暴力に依る革命が起つて、社會を顚覆

するのが、自分の理想する無政府共産の社會を來す捷徑であるといふ意見から見て書いたものだといふ事です。從來書かれた多くの佛國革命史はブルジョアの見地から書かれたものであるが、自分のは第四階級の立場から書いたものである。あの革命は第一階級と第二階級との横暴壓迫に憤つた第三階級が第四階級を誘つて起したものであるが、出來て見ると第四階級は全然第三階級の傀儡にされた結果になり、立派な資本主義の社會が現はれた。これはもう一度、欺かれた第四階級の手によつて社會が顚覆されなければ本當の社會が來ないといふ意味が、その序文にあります。佛蘭西革命は餘程クロポトキンを強く動かしたやうです。そして、その階級鬪爭の手段、革命を起す方法、戰術を書いたのが、あの有名な「パンの略取」で、あの本は翁の著述の中で最も過激なものでせう。

婦人問題、教育問題その他について詳しい記憶はありませんが、翁の思想から論理的に考へて見れば、婦人は全然解放されて居るべきで、自由結婚の社會であると見るのが順序でせう。家庭といふものは何う見ても、婦人を被所有者として居るので、それはその社會にあつて極めて不合理なことゝされるのは理解されます。從つて子供は國有であり、教育は國家の負擔になるでせう。

たゞ、クロポトキンが階級鬪爭を是認するのは、翁の理想社會が極めて合理的な所から見て、大きな矛盾のやうですが、それに對する翁の見解がどういふものであるか、私は知りません。(談話筆記)

(一九二〇年、「讀賣新聞」所載)

一九二〇年―一九二一年

生活と文學

緒　言

私がこゝで云ふ生活とは、主に個人の生活、延いては個人の生活に、現在では、曲りなりにも充足と可能とを與へる所の家族生活を指すので、もつと廣い意味で用ゐられてゐる生活卽ち社會生活とか國家生活と云ふやうなものには觸れないのです。

現在私達が持つてゐる生活に於いては、純粹な個人の生活といふものは、不愉快な割引きを受ける事なしには容易に成り立ちません。人と人との間の交渉はまたそれを成り立たせる程の自由を與へ得べき發展を遂げては居ません。若し人が純粹に個人的な生活をしようと思へば、勢ひ隱者のやうな形式によつて、この世の中で稟け得べき人間としての特權を大部分投げ出さなければ、それが出來ない事になつてゐます。丁度現在の資本制度の下にあつては、否でも應でも各人が或る階級に加入し、或る程度の能力を費やして、他の階級の人と競爭し、何等かの意味に於て周圍の人を打ち負かし、從つてその人達に何等かの意味に於いて苦痛を與へなければ、自分の生活が保障されないやうに、現在では眞に個人的な生活に徹底し、全力を自己の生活にのみ費さうとした所が望まれない事ですから、勢ひ家族といふ二人以上の團體に加入して、互ひに多少の不便を忍び合ひながらも、純粹な個人

的生活では得られない人間としての特權を享樂してゐるのです。それが爲めには家族の各員は他の方面に於いて或る程度の犧牲を忍ばなければなりません。而してその犧牲を忍ぶといふ苦しさが、永い習慣の結果、一種の道德として考へられるやうにまでなつて來てゐます。從來の日本の家族生活に於いて家婦が主人(主人と云ふ言葉が遺憾なく表はしてゐるやうに)に對して捧げて來た犧牲、子が親に對して捧げて來た犧牲と云ふやうなものを考へて見ると、それはよく解る事です。それは美しいと强ひていひ得ようとも、少なくとも合理的なものではありません、普遍的な妥當性を持つたものではありません。近來になつてその不合理性は段々矯正されつゝあります。昔、女なり子なりの道德と考へられてゐたものが、不道德でなければ非道德であると考へられるやうになつて來ました。今の世の中で主人の放蕩三昧を默つて忍從してゐる妻はよい妻とは云はれず、親の爲めに貞操を賣つたり、親の遺產や遺名を後生大事に守るだけで何んにもせずに暮らす子供がよい子供とは考へられなくなつたのは明かです。即ち家族生活に於ける道德の價値は非常に變つて來てゐます。この價値の變遷をよく考へて見ると畢竟個人の生活に對する自由獨立の要求がさせてゐる業(わざ)であるのを誰でも看取する事が出來るでせう。即ち家族內に於ける各員が個性の尊嚴を漸次自覺して來た結果から、この價値の變化は生まれ出たのです。この傾向――而してこれまでの變化ではこの傾向は正しいよいものだと心ある人には誰にでも信ぜられてゐるのですが――を僻見なしに或る勇氣を以て押し進めて考へて見る人があつたら、現在認められてゐるやうな家族生活は、やがて破壞さるべき運命に在る事を豫知しない譯には行きません。

在來の家族生活の形式を重視する人々(それを重視する爲めには色々な利己的な理由が後援をしてゐるのですが、それは餘事に亙るから委しく述べません。財產私有制度、男性優越の先入思想、生物に內存する保守的傾向、女性の失格等を讀者の考察の對象として數へるに止めておきます)が個性の自由を敵視するのは深い理由のある

事です。實際現在のまゝの形式に於ける家族生活では、過去に比して可なり進んだ調節が行はれてゐるにもかゝはらず、個性の生活の自由若しくはその內容の擴大といふ事は容易ならざる脅威であります。弱い稟質（テムペラメント）の人が時勢の進運と妥協する必要から家族生活の改善などゝ云ふ名目の下に、一歩々々竊（ひそ）かに自分の據り所としてゐる家庭の根柢を崩してゐるのとは違つて、强い稟質を有してしかも家族內で自分の優越を意識し、自己本位である人々が個人の自由を以てやがては家族の破壞を導き出すものだと見るのは遙かに徹底した直覺です。丁度勞資の關係に於いて徹底的には調和點がないやうに、現存の家族生活と、要求せられつゝある個人生活との間には押しつめて見ると渡るべき橋梁がありません。

そこで私の制限した生活なるものは、徹底的な意味に於いて互に相容れない二つの生活樣式を含む事になります。個人の生活はその自由な發展の極致にあつては、家族生活を不必要とするのみならず障礙とします。家族生活はまた各員の生活に對する犧牲（自主的であれ强制的であれ）を必要條件としてのみ成立します。それなら私はこの相反した生活樣式のどちらに重點を置いて、文學の交涉を考へる積りであるかを問はれるなら、躊躇する事なく個人の生活を選びます。何故なら、文化と云ふものゝ基調は個人に還つて來ねばならぬと私は信ずるものだからです。個人がその自覺する最上の本能によつて自由に生活し得る世界が卽ち文化生活でなければなりません。若しその他の目論見から文化生活に人類を導かうとする人があつたとすれば、それはその成就の曉に自己を失望させる爲めにのみ企てゝゐる大きな誤謬です。

私が前に「個人の生活、延いては個人の生活に、現在では、曲りなりにも充足と可能とを與へる家族生活」と云つた意味が解るかと思ひます。現在では何んと云つても私達は家族生活によつて（極端に個人生活に對する要求の强い人、若しくは人としての特權を容易に放棄し得る人を除いては）未來に要望してゐる生活の面影を造り

出す外はありません。然しながら若し私達が家族生活の文化生活に對して有する意義を辨へてゐなかつたなら、その他の點に於いて家族生活の內容がいかに都合よく整理されてゐるとしても、それは經濟界に於いて、一つの工場が勞働者といふ問題を全く顧慮せずに整理されてゐるのと全く同じ體裁をなすものです。それは要望されつつある文化生活とは對角線的に反馳した整頓のされ方です。だから家族生活と文學との關係を考へる時にも、私はその後ろに個人の生活が嚴存する事を忘れまいと思ふものです。

文學といふ事については、私は玆に自分自身を申し譯しておかねばなりません。私は文學者といふ名前で呼ばるべき人の一人かも知れませんが、明かに文學研究家と云はるべき者でないのです。私は嘗て文學といふものを研究の主題としたことがありません。從つて私の文學の本質若しくは文學史に對して有する知識は極めて不秩序で同時に獨斷的です。而して恐らくはそれ以上に淺薄です。だから私はこの仕事に從事するに當つて心からの躊躇を感じました。然し運命のやうな或る壓迫的な事情が私を動かしてしまひました。從つて讀者の迷惑を一番恐れてゐるものは明かに私自身です。

兎に角藝術と云ふ廣い世界は私達の前に展けてゐます。それは動かす事の出來ない眞實です。私達の生活活動が長い時代の後にそれを私達の眼の前に建立しました。藝術を無用な夢とのみ見る人は恥づべきであります。——而してそんな人が如何にわが教養ある紳士淑女達の間に多いかを知つて私はこれを云ふのです。徒らな空罵ではありません——。藝術を鍋や釜と同樣な實用品に引き上げなければ承知の出來ない人は、濶眼にして盲ひたるものです。——而してそんな人が如何にわが道德家主義者の間に多いかを知つてこれを云はなければなりません——。アポロは光ではあるが同時に神であつた如く、藝術は人間の夢ではあるが同時に眞實です。アポロはミネルヴァにもマアキリューにも屬せず直ちにディウスに屬してゐたやうに、藝術も理智に屬せず功利に屬せず、直ちに

人間に屬してゐる。それを見謬つて藝術を虜にし得たと思ふやうな人があつたら、その人は結局人間生活の實質の一つを見事に取り逃がした人と云はなければなりません。又藝術を玩具視する人はそれに相當した報酬を受けるでせう。人生そのものを玩具と見る皮肉な人が藝術にも除外例を與へないのはそれは徹底した事です。私はそれに對して何等の抗議をも申し出るものではありません。然しながら實生活の或る部門に對しては守錢奴のやうな執着を持ちながら、藝術のみを玩具のやうに思つてゐる人の心は、いつか後悔によつてのみその誤謬から救ひ出される日を見出すでせう。何故ならば（やがて委しく述べるやうに）凡ての人は生まれながらにして藝術家なのですから。それを自覺した人は、自覺しない人よりどれだけ幸福だか知れません。それは、同樣に眼を持ちながら、それを用ゐない人と正しく用ゐる人との幸不幸を考へて見ればすぐ分る事です。多かれ少なかれ自分が藝術家であるのを自覺した人にとつて、完成され醇化された藝術が提供された場合、それをたゞ翫弄して滿足する事は出來ない筈であります。その藝術は直ちにその人の内部生活の順當な延長としてその人に役立つからです。

或る人は又藝術鑑賞を一つの趣味だと考へるかも知れません。然し徹底的に考へて見ると、最小限の實生活――それさへが外部から强ひられないで濟む可能性を私達は既に考へて、その實現に向つて多少の步みを進めてゐるのだが――を除いて、趣味で動いてゐない生活の如何なる部分があるでせうか。その意味に於いて藝術鑑賞を一つの趣味と云ふのなら正しく當つてゐます。而して藝術鑑賞が際立つて趣味らしく見えるのは、たま〳〵趣味として見た人間の活動の最も純粹なものであるのを裏書きするものです。この事については更に後章に述べて見ますから、それと見くらべていたゞきます。兎に角私が緒言に於いて藝術なるものに就いて言つたのはこの講義錄に「生活と文章」と云ふ標題が見出された時、面倒な學術の講義の中に娛樂的な頭休めをさせる爲めに、編輯者が機轉を利かした一つの方策だと讀者が考へる事のないのを希つての事です。人の生活にパンが必要であるや

うに、知識が必要であるやうに、人間間の親和が必要であるやうに、藝術も亦必要であると云ふ事を主張するのは獨斷でないといふ事を私は主張したいのです。若しこの主張を肯定しない人があるなら、その人にはこれから私が述べようとする所のものは、全く無意味な漫言に過ぎないでせう。

私は次に述べるやうな順序を追つて、生活と文學との交渉を考へて見たいと思ひます。

一　生活の相

生の動向――生の內容――生の具象化卽ち生活――生活の藝術的要求

二　藝術の相

藝術的衝動――藝術的衝動の向上性と向下性――藝術の醇化

三　藝術に於ける文學の位置

具象藝術と印象藝術――印象藝術の特長――文學

四　文學の諸傾向（其の一）

內在的傾向――三個の對象――過去――センティメンタリズム――未來――ローマンティシズム――現在――リアリズム

五　文學の諸傾向（其の二）

表現的傾向――クラシシズム――ロマンティシズム――ナチュラリズム――アイデアリズム

六　文學の諸傾向（其の三）

具體的傾向――詩――小說――戲曲――其の他

七　文學の鑑賞

一、生活の相

生の動向――生の內容――生の具象化即ち生活――生活に於ける藝術的要求

私は「生活と文學」といふ標題の下に、生活と文學とは何ういふ關係にあり、生活は何故に文學を要求し、文學は如何に生活に影響を及ぼすかを考へようとしつゝあります。それが爲めには、先づ生活とは如何なるものであるかを檢べて見る必要が起つて來ます。生活が如何なるものであるかを知らうとするなら、いきほひ生活の內容を形造つてゐる生そのものゝ何んであるかゞ考へられなければならぬことになります。そこまで行かないと問題の解決が徹底しがたいのみならず、本當をいふと、その試みなしには、文學が人生と相關はる楔子を摑むことが出來ない結果になります。これが爲めには、一見迂遠と見える考察をも、決して輕視してはならないと信じます。

私達は生きてゐます。私達の持つ凡ての要求はこの生きるといふ一事に根ざしを持つてゐます。それなら生きるといふことは何んであるか。それは生といふ一つの不思議な力が凡ての存在を可能にし、私達が意識し得る凡ての現象を造り出す、それにあるといふことが出來ませう。

生といふものゝ本質が何んであるかを的確にいひ現はすのは、人間としては不可能なことだといはなければなりません。何故なら私達は一人としてこの生なるものから別存するといふことが出來ないからであります。私達の存在は存分にこの生といふ力の中に浸り切つてゐて、そこからいさゝかでも離れ出ることが出來ない故に、生といふ力を客觀的に考察することは到底出來ないことになります。眞空の中におかれなければ、人は空氣がどん

なものであるかといふことを判然と知ることが出來ません。然し眞空におかれる前に人は死んでしまひます。それ故人は自分と空氣との關係に於いて空氣がどんなものであるかといふ事實を本質的に知り切ることが出來ません。それと同じやうに、私達はまた生の本質とはどんなものであるかを知ることが出來ません。空氣と人との關係の場合に於いては、まだ〳〵人はいくらか、色々な經驗から空氣といふものゝ人に對する本質的關係を考へて見る餘地がありますが、生は空氣以上に人にからみ附いて居り、といふよりも人は全然生そのものからのみ成り立つてゐるが故に、その本質を知悉するのは、空氣などを知らうとする場合より更に〳〵不可能のことであらねばならぬのは、容易に考へられることであります。

たゞ私達は生と共に動いてゐるが故に、生きて行く經驗から、生が如何なる作用を人間に及ぼしてゐるかは朧げながら考へて見ることが出來ます。生の本質が何んであるかは不可解であるとしても、その力が人間に對してどう働くかといふことだけは體驗することが出來るでせう。私が生の動向といふ言葉で云ひ現はさうとするのはそれを指すのです。

私達が各〻この不思議な世界に存在を持ち、その存在を持續しようとする(何等かの意味に於いて)衝動、これはおしなべての人には、誰にでも內在するところの要求であります。これを否定することは出來ません。次に私達には、單に自己の存在を持續するのみならず、これを擴充し鞏固にしようとする要求があります。これは存在持續の要求の延長であつて、また否定すべからざる事實であります。私達がこの世に生きてゐるのは、實にこの自己內在の要求が反射的に自己に働いてゐる結果であるといふことが出來ます。この要求は人が死を擇む時にだけ失はれてしまひます。生きる所にはどこにでもこの要求は强い力となつて絕えず人間の上に働いてゐます。この要求こそは私のいふ生のさせてゐる業(わざ)です。

生物學者はこの力を本能といふ言葉で言ひ現はしてゐますが、近頃ではそれが哲學の用語として用ゐられるやうになりました。これまで本能といふと單に人間の中に潜む、下等動物が持つと同じ衝動の如く解せられてゐましたが、本能といふ生の力の檢察の結果、それはもつと廣い、深い、强い、生物全體を動かす力として考へられるやうになつて來ました。生（又は本能）とは進化の原理であるとして考へられるやうになつて來ました。即ち無機物を有機物に、有機物を單純な生物に、單純な生物を複雜な生物に、而して複雜な生物を遂に人間にまで押し進めて來た大きな力として見られるやうになりました。心理的の進化の方から考へても、無意識な活動を有意識なものに、有意識的な活動を更に反省的な活動に、反省的な活動を遂に道德的な活動にまで導く力として考へられてゐます。これが生の有する動向であります。

卽ち生の動向は單純より複雜に、外面的より內面的に、粗雜より精緻に、無自覺より自覺に、無表現より表現に、消極より積極に凡ての存在を導いてゐるといふ事實が縱しかすかにではあれ、看取されます。而してこれが私達に浸みとほつてゐる生の內容だといふことが出來ます。生はいつでも凡ての存在を不完全より完全への一路の上に立たせようとしてゐるやうに見えます。勿論それには幾多の例外があるでせう。生物界に見られる退化の現象の如きはその著しい例で、ある存在の內容が段々不完全になり退縮し、遂にはその存在を亡失してしまふに至る現象は學者が夙に認めてゐる所であります。然しこの場合も、又生の力の過剩の爲めに存在が却つて危くされる場合も例外であつて、全體として凡ての存在を見渡して見ると、整然とした進步完成への道行きが素晴らしい勢ひで刻々行はれてゐるのを見のがすことがどうしても出來ません。生はかくの如くして存在を可能ならしめ、持續せしめ、完成させようとしてゐます。私達人間も亦この大きな生の流れの中にあつて流れて行く流體の一部、殊に重要な一部です。

生はかくの如くして凡ての存在の中に自分自身を表現してゐます。私達人間はかくの如くしてこの世に動かすべからざる存在を有してゐます。而してこゝに人類社會といふ一つの集團を造り上げます。この集團の各々の分子即ち私達自己が自分に頒けられた生の力によつて存在を保障されてゐること、即ち私達が私達であること、これが生の具象化であります。生といふ不思議な力がその強い働きに基く分化作用によつて、私達銘々の中に自分を具象的に表現してゐます。かく具象化された生の働きを私は生活と呼ぶのです。

私達は表面的にいふと各々勝手に自分自身を生活してゐるやうに見えます。然し本當をいふと、私達といふものは謂はゞ一種の假象であつて、その後ろに力強く働いてゐるのは生そのものです。

生は前にもいつたやうに、具象的に自分自身を表現します。表現は創造です。表現は創造です。神がアダム、イヴを創造したのは、神自身の一つの表現であるといふ意味に於いて、表現は創造です。而して藝術とは表現即ち創造の外何ものでもありません。この點を注意して下さい。私は今生活が何故藝術の要求を持つかといふことを說明する爲めに、今少しこの點を演繹して見なければなりませんから。

私達の導いてゐる生活とは生それ自身の表現であると私は結論しましたが、その結論が背かれるものとしたら、私は假りに私達の生活の常體なる生の觀念から離れて、生活を私達自身の本能の欲求であるとして考へて見ませう。さうするなら私達に取つてはこの生活は私達の全個性の表現であるといへませう。私達は自己を表現すべき欲求を持つてゐます。行住坐臥の間に私達は結局常に自己を表現しようとしてゐるのです。極く外面的な生存の條件とされてゐる衣食住の末に至るまで、よく考へて見ると一々それは自己の表現に過ぎません。況んや物を考へることとか、事業とか、他人との交涉とかいふことになると、いふまでもなく何等かの意味に於ける自己表現です。刻々の自己表現です。食ふことにより、衣することにより、考へることにより、仕事することによつて、

私達は一瞬々々に異なつた自己を創造し表現しつゝあるのであります。だから私達の生活の各過程は前に私が注意した意味に於いてそれ〴〵藝術的であるといへませう。卽ち更に言葉をかへていへば、私達は藝術的要求を滿足させる爲めに生活してゐるのであつて、私達の生活はそのまゝ一つの藝術的活動であります。廣い意味での藝術そのものであります。

これまで言ひ進めると、生活と藝術との關係はおのづから明瞭になつて來、從つて生活と文學との交換も抽象することが出來る譯です。

然し最後の結論に達する前に私は更に或る說明を加へて置く必要があると感じます。それは私が今申し出た藝術といふ意味と世間で通常用ゐられてゐる藝術といふ意味との間に存する關係についてです。單に生活が藝術だといつてしまへば、普通いはれる藝術なるものゝ存在の理由とその必要とは何處にあるのか、さういふ疑ひが惹起されなければならないと思はれます。この點を一應いつておかなければ生活と文學との關係が明瞭であり得ない恐れがあるでせう。

藝術とは畢竟表現であると私は云ひましたが、而して凡ての人の生活は表現的過程だといひましたが、單に表現といつてもそれには色々の程度階級があらねばなりません。私達が自己を表現する爲めには、それを表現するに當つて用ゐるべき媒介物を必要とします。その媒介物若しくは材料を私達は自分の必要に應じて取捨按排することによつてのみ自己を表現することが出來るのです。この材料若しくは媒介物の中に私達は銘々の面影を宿さうとするのです。私達の自己の假りの宿りをそこに求めるのです。卽ち象徵（symbol）を借りて自己が表現せられねばならなくなるのです。象徵とは故らに個性が自己を表現せんが爲めの煩悶です。最も單なる場合にはたゞ一聲の叫び聲として自己が表現せられるでせう。最も物質的な場合には一杯の食として自己が表現せられるでせ

う。最も廣い場合には、一大事業といふやうな形に於いて自己が表現されるでせう。最も純な場合には一つの音樂として、最も深い場合には一つの詩として、自己が表現されるでせう。兎に角、それらの詩なり、事業なり、食事なり、叫び聲なりは、自己表現の材料であつて、言ひ換へれば象徴です。

各人は各人の好き〲に從つて、各〻別々な象徴を選びます。或る人は縱令行きがなくとも成るべく廣い自己表現の欲求を持つてゐますし、或る人は狹くとも出來るだけ深い自己表現の欲求を持つでせうし、その他種々の欲求によつてその象徴を選ぶでせう。然し大體に於いて、粗雜な象徴によつて自己の表現をなすのを意としない種類の人と、洗練された象徴でなければ滿足の出來ない人との二種に區別することが出來ます（固よりこれは絕對的に區別の出來ることではありませんが）、洗練された象徴を求めるといふのは何ういふ譯であるか、象徴は何んでもいゝ筈ではないかといふ疑ひが起るかも知れません。それは全く人の好き〲でさうなるのだといふ外はありませんが、その後ろには然しもつと深い意味が潜んでゐるのです。それは象徴が洗練されゝばされるほど、自己が純粹に表現されるといふ一事です、象徴は表現の材料であるのに、その材料が粗雜であつたら、如何にそれを巧みに組み立てゝも、思ふやうな表現が出來ないのは知れ切つたことです。唱歌手はその聲を何よりも大事に保護してそれを出來得るだけ洗練するに勉めるでせう。若しその聲が粗雜なものであつたら、如何にその唱歌手は、その人が自分の藝術に良心的であればあるほど、自分の聲の清純ならんことを望み且つ勉めるのです。唱手に表現しようと思ふものが潤澤にあつても、遂に完全な表現を成就することが出來なくなります。それ故に唱からいふ要求が生活そのものゝ上にも働いてゐるのを私達は發見するでせう。私達が知らず識らず勉めてゐる生活の純化は、つまり自己表現の完成を期するがためになされてゐるのであります。

私達が藝術家と呼ぶ人達は結局自己表現を出來るだけ純粹にし（卽ち自己を出來るだけ端的に表現しようと

し）從つて象徴の選擇に對して極めて神經質な人々をいふのです。若しこの欲求を强く持つてゐなかつたなら、縱令その人は自分を藝術家と呼ばうとも、本當の意味に於いて藝術家と稱することは出來ません。象徴の嚴選といふことは、その人の用ゐる象徴を色々な不純な屬性を帶びるに至つた實生活の用途から篩ひ分けることです。篩ひ分けてその象徴が本來有する完全な內容に到達せしめることです。例へば作詩には言葉が象徴として用ゐられます。然し詩人は凡ての言葉を雜然と無反省に使役して作詩の用に充てることはしません。多くの言葉の中から、自分を十分に表現せしめ得べきいくつかの言葉を選み取り、其の言葉の中からでも、その言葉に附帶した雜多な意味を除き去らうと試みたり、意味の轉換を企てたりします。晦澁といはれる危險を侵してまでもそれを成就しようとします。かくしてその詩人の用ゐる言葉はあり來りの言葉から離れて、その詩人その人のみの言葉となるのです。かくてこそ詩人はその自己を思ふまゝに現はすことが出來るのです、その生活を轉化し向上させることが出來るのです。

一般の人の生活もその本來の面目に於いては、藝術的であるといふことは前にもいひました。誰でも自己を表現しようといふ要求は持つてゐるのです。けれども徹底的な表現は容易に得られません（それには自己表現について極めて鈍感な人もあらうし、十分にその要求を抱きながら敎練の不足なためにそれが出來ないで悶えてゐる人もあらうし、現在のやうな實生活の有樣では、衣食の爲めに妨げられて、折角持つて生まれた表現の能力を押へつけてしまはなければならない人もあるでせう。凡そ世にかくの如き悲しいことはありません。適所に自己を表現する機會が拒がれるやうな社會生活は常にその社會を向下せしめ、その下に住む個人を不幸にし苦悶させます。私達はこの意味から生活の改造を見なければなりません）。そこでその人達は自分の代辯者を求め、その人の生活（純粹表現の）中に自分達の姿を反影して、創造的衝動の滿足を求めるのです。こゝに於いて私達が普通名づ

けるところの藝術が生まれ出て來るのです。
一方には藝術家自身の欲求たる純粋表現の生活、他方には一般人の要求する藝術的共鳴、この二つのものが原因となり結果となり、結果となり原因となつて、こゝに實生活と狹義の藝術との連繫が成り立つのです。
若し以上の欲求以外の欲求から私達が藝術を要求したならば、それは藝術を玩弄物の世界にまで墮落させることであり、以上の欲求以外の欲求から藝術家が作品を生み出すならば、それは藝術家が自分自身を道化役者たらしめることです。共に陷つてはならぬ魔道です。
以上申したことによつて知悉され得るやうに、實生活と藝術、民衆と藝術家といふものゝ間には渡ることの出來ない溝があるのではありません。どれ程實生活に卽した生活にも、それが生活である以上は藝術的であります。凡ての人は何等かの程度に於いて自己を表現してゐるのであります。卽ち何等かの程度に於いて凡ての人は藝術家です。それ故にこそ凡ての人は狹義の藝術なるものを鑑賞し得る資格も能力も備へてゐるべき筈なのであります。然るに世には往々にして藝術を單なる閑人の戲れと見做し、又は理解共鳴が出來ないのを却つて一つの誇りでゞもあるやうにいひふらす人のあるのは聞こえないことだと私は思ひます。かゝる心持を馴致したについては色々な原因がありませう。藝術家自身の墮落がさういふ僻見を世に播いたこともあるでせう。又餘りに理不盡な淺義道な實生活が人の心の中の大切な芽生えなる藝術的要求を枯死せしめたこともあるでせう。然しこれらの悲しむべき墮落はどうしても矯正されない墮落です。
趣味の墮落なるものがどれ程人の生活を曲つたものにするか、それは想像に餘ります。よく考へて見ると、人の活動の根柢には好惡といふものが最も大きな働きをしてゐます。善惡の觀念、正義の念すらが、詮じつめて見ると人の稟質(temperament)の選擇から來てゐることが肯かれます。稟質の選擇とは畢竟その人の好惡が標準と

なつて起るところのものです。好惡とは換言すればその人の趣味です。而して趣味とは、その人の廣い意味での藝術的要求の如何によつて定まるところのものです。その藝術的要求卽ち自己の正しい表現に對する欲求が鈍り若しくは崩れて來れば來るほど、その人の趣味は當然墮落するのです。だから趣味の如何は人間の文化的生活の程底を測定するに重要な標準とすることが出來るのです。藝術の意味をその正しさに於いて檢察すれば、趣味といふ言葉の意味も亦こゝまで高められなければなりません。

二、藝術の相

藝術的衝動――藝術的衝動の向上性と向下性――藝術の醇化――附言

前にも申し出たやうに、苟も人間とあれば、その如何なる天性の人であれ、如何なる職業の人であれ、如何なる社會的境遇の人であれ、程度に差こそあらうが、凡て多少の藝術家であります。卽ち何等かのものを自分の中から創造して行かうとする動向を持つてゐます。この動向こそは人間が所有する凡ての所有物の中で最も尊いものであつて、人類がその原始生活から今日の文化生活を發展させて來たのは全くこの創造的動向の力によつて成就されたといはなければなりません。この力が原動力となつて私達の內部にきびしく働いてゐればこそ、私達の生活に或る樣式が出來上り、その內容が調整され、而してそれが可能となり、又機會が到來すると、その樣式が破壞されて新たな樣式に轉化され、從つて內容が革新し、全く新たな生活の舞臺が調へられるやうになつて行くのです。

然しながらこの藝術的衝動といふものは、人間の心の働きの中でも極めて深い內部に現はれるもので、それに

動かされて私達の所謂道德も習慣も生まれ出て來るのですから、私達は往々にして外圍的に現出する現象に餘計氣を取られて、それらの現象の源頭となつてゐる藝術的衝動そのものを輕視する傾きがあり勝ちです。例へば宗教的活動といふ人間生活の一部門を假りに考へて見ますと、人間の宗教生活の中で一番大事なものは渴仰といふことであらねばなりません。飢ゑ渴くが如く眞理を慕ふ心持が根柢的な宗教生活の要素であります。この一事さへ決定してゐれば、他の凡てのことは全く無くても、その人は宗教的であるといふことが出來ます。所がこの渴仰的といふ內部の動向から自然に樣式が生まれ出て來ます。卽ち第一にその渴仰の目的物――換言すれば信仰の當體が如何なるものであるかを具體的に抽象しようとする要求も起れば、その當體と宇宙との關係、當體と自分との關係、當體と結び付いた自分と隣人との關係、その他の關係をはつきりしておくべき要求も起れば、當體を禮拜するについての正しき方法、自分が信ずるものを他に傳へて同じ法悅にあづからしめたいとの熱意から生ずる傳道の手段、さういふものまで考へる要求も起ります。宗教的な天分の饒かな人が、さういふ要求に從つて色々な樣式を編み出し、その人の信仰の內容が調整され、可能になつて來ると、或る種類の人はその堂々たる外見に感心してしまつて、先づその立派な樣式に信賴を置きはじめます。而してその樣式に自分の生活を適合することによつて、宗教的渴仰の念を滿足させようとします。從つて自分自身の內部に持つてゐる動向をば輕視したり、無視したりし、延いてはその人を宗教上の樣式に導いてくれた先覺者その人の內面的動向をも捨てゝ顧みないことになります。さういふ人に取つては信條とか、教師とか、同信者とか、儀式とかいふものが大きな價値となつて感ぜられます。その極、宗教的生活の精髓であるべき渴仰は遂に呼び起されずに仕舞ふやうな結果にもなるでせう。而してかゝる結果によつて現はれ來たる所謂宗教的生活が如何なるものであるかは、誰でもほゞ想像することが出來ねばなりません。それは當然眞正なる宗教そのものゝ破滅です。その人の外面的な樣式が整へば整ふ

ほど、その人はその樣式の重壓に打ち負けて、乾燥し切つた、無內容な生活に墮落することになるのです。これに反して何よりも第一に渴仰といふ大事な點に十分の執着を持つてゐる人は、その渴仰の樣式化に於いてどれ程不完全であらうとも、內部から輝き出る光の爲めに、自ら生命と潤ひとを持つた、充實した生活を導くことになるでせう。しかもかく申し出るのは容易なことであり、それを納得するのもさしてむづかしいことではないのに、この渴仰といふ宗敎生活の第一義に對して眞に價値のおかれてゐる場合がいかに少ないことでせう。而してその結果として、宗敎生活の內容が空虛になり、而して眞に渴仰的な人が異端視される場合がいかに多いことでせう。さうした現象を歷史の上で度々見せつけられ、批評的にはその非を鳴らしながら、現在自分達自身の生活に來ると、忘れたやうにその正しい見方を捨てゝ顧みないといふのは、全く渴仰といふやうな動向が生活の內部に潜んでゐて、輕々しく外部に浮び出て來ない所に起因するといつていゝのです。これは前にも注意したやうに一つの例に過ぎませんが、凡ての生活活動に於いて斯かる現象は隨所に看取される所なのです。

かくの如く藝術的衝動は人間生活の深みに潜んでゐてそれに依つて末梢の生活すらが支配されてゐるといふことを人は動もすれば忘れたがります。狹義の藝術家は然しそれを忘れることの出來ない一群の人々であるといふことが出來ます。尠くともさうであらねばなりません。他の生活部門に屬する人々の中にも斯かる態度に在る人は澤山ゐますが、藝術界に働く人は凡てがさういふ人であらねばならぬのです。何故ならば藝術は如何なる場合でもこの藝術的衝動の端的な表現であらねばならぬからです。それが藝術の司る分野であるからであります。

くどいやうですがもう一度繰り返していふと、藝術とは人間の最も內部に働いてゐる藝術的衝動卽ち創造慾の所産であります。而して可及的端的な所産であります。それが端的に確實に表現せられる程その藝術的價値は高まつて行く譯なのです。

然しながら藝術的活動の分野にも斯かる理想的要求が常に滿足に行はれてゐるとはいへません。云へないどころではなく、その條件が極めて內面的で且つ纖細な反應を必要とするものであるが故に、實際に於いては往々醜い蹉跌に陷らねばなりません。それは他の分野に於ける生活活動と同樣に、實際に於いては、藝術の世界にも內部を無視して樣式のみに赴く傾向が生ずるが故であります。

是に於いてか藝術の世界にも向上性と向下性とが存することに注意せねばなりません。それは藝術的衝動に對して藝術家が採る態度によつておのづから決定されるのです。

墮落した藝術とは何か、若しくは立派な藝術とは何か。この問題は恐らく藝術が古い如く古い問題だと思ひます。その爲めには博學有能な學者たちが美學といふ學問の名の下に、色々な批判を與へようとしたもので、それを綿密に紹介することは、到底私のやうな無學な者の力の及ぶ所ではありません。學者としてこの問題にたづさはるべき資格は私には皆無です。私は單に藝術家の末席を汚すものとして、自分だけを律するその法則を御參考に申し出て見ようとするに過ぎないのです。然しながらバウムガルテン以來、美學といふ學問の形を取つて現はれ出た藝術の內容の價値に關する學說の大體を學ばうとするなら、トルストイの「藝術論」に據るのが便利だと思ひます。凝り性のトルストイは、自分の藝術論を申し出るに當つて十年以上の歲月を費やして古來の美學を徹底的に涉獵し、それを簡明な配列法によつて紹介してくれてゐます。トルストイの藝術論の結論には不服がある人でも、その前提とも見られる學說の紹介には十分の注意を拂つても損がないと思ひます。然し私はこゝでは他人の意見を逐次に述べることを避けて、たゞ私だけの考へを申し出て見ます。私には實際それ以上が出來ないのですから。

政治だとか生產だとかの世界には、色々な道具立てが必要であつて、その凡てが一々藝術的衝動から直接に生み

出された力でのみ動かされてゐる譯に行かないのに反して、狹義の藝術の世界では、徹頭徹尾藝術的衝動のみが働かねばならぬのに、情けないことには實際に於いては決してさうばかりは行つてゐません。そこに藝術的衝動の向上性と向下性が生じて來ます。

藝術的衝動とは前にも度々申し出た如く創造的動向であります。自分の生活の中から新しい存在を創り出さうとする欲求であります。而して創り出されたのは當然何等かの形に於いて表現されねばなりません。かう考へて見ると創造的動向とは畢竟別事ではなくして、同時同處に發生する現象といふことが出來るのです。私達の生活そのものは一箇の藝術であつて同時に表現です。けれども實際生活にあつては、その周圍を取り圍んでゐる不純な雰圍氣が餘りに濃厚である爲めに、藝術的衝動を滿足させるやうな表現が完全に充たされ難い憾みが多いのです。實生活の中に現はれる藝術的衝動の結果は、大抵の場合、情けない程種々な附纒物の爲めに煩はされてゐます。斯かる不完全な藝術的表現から眞に近い藝術的表現に至らんが爲めには、勢ひ諸種な不純分子を排除して、出來るだけ表現の樣式を純粹にする必要が生じて來ます。その爲めには生活そのものを更に選擇された表現手段（文字、音響、線積等）を用ゐて再現する要求が生じて來るのであります。この方法が正しく使はれゝば、今まで雜然と不純に表現せられてゐたに過ぎなかつた生活が、在るべき調和と均衡とを以て、私達に感受せられるやうになるでせう。

だから藝術品は或る事象の當體そのものではなくして、藝術家の氣稟を通しての再現といふことが出來ます。一房の葡萄の畫は喰べることに役立ちません。如何なる美術家も喰べ得るやうな葡萄を創り出すことは出來ません。然しながらその葡萄の姿を畫布の上に再現することが出來ます。而してその再現によつて、その葡萄は實物の葡萄より以上に純粹に本質的にその姿を表現することが出來るのです。これが藝術の有する唯一の特長と見る

ことが出來ます。所がこの再現といふことが屢〻大きな危險を伴つて藝術家の誘惑となるのです。一房の葡萄はどこまでも一房の葡萄で、そこに人爲的の變化を加へることは出來ませんが、それを畫布の上に表現しようとする段になると、それを種々に變化させる十分の自由が藝術家に許されることになるのです。藝術家は自分の藝術的衝動と表現との間に或る餘裕若しくは間隔を見出さうと思へば見出すことが出來るのです。

若し藝術家の藝術的衝動が純粹で且つ緊迫したものであるならば、一つの事象に對する表現の道は限られて行つて、その極たゞ一つしかないことになります。必至的にたゞ一つの道によつて或る事象を表現せねばならぬ事になります。實生活の場合に於ける生活卽表現といふやうな三昧の境地が、再現の場合にも自然に成り立たねばならなくなります。かゝる緊張した態度のもとに創造された藝術はいつでも十分の必然性を持つてゐるが故に、これに接したものには自然そのものに接した感銘を與へずにはおきません。私達が優れた藝術品に接する場合、必ず第一に受ける印象は、それが私達自身の生活にいかにも直接で且つ眞であるといふことです。ドストイエフスキーのものやストリンドベルグのものなどを讀んで見ると、その結構（プロツト）などは可なり勝手に便利のやうに造り上げてあるのを感じますが、その結構の中を流れてゐる人や自然やの姿はいかにも生々しく、しかも私達の生活そのものと直接に繫（つな）がれて、讀んで行く中に結構の不自然さなどは忘れてしまつて、作中の人物に同化し、その人物と共に或は苦しみ、或は喜んで、知らず〳〵その作者の見方で物を見るやうにさせられて行きます。卽ちこれらの藝術家はいつまでもその藝術的衝動をいつでも最上に愛護し、その衝動に最も近く表現を位置せしめてゐるといふことを想像し得ます。又は池大雅の描いた畫を見て御覽なさい。そこに表現せられてゐる形態は一見自然に見出されるそのものとは霄壤の相違がある如く考へられるでせう。彼の人物はどれもこれも片輪で、その自然は悉く遠近法の無視を以て現はされてゐるやうに見えます。然し少しばかりの眞率な愛を以て、彼の作品を眺め

る人には、その作品は驚くべき奇蹟を演じて見せます。その作品にはこの卓越した藝術家の氣稟によつて過たず切り取られた自然なり生活なりが、正しい生氣と、正確さと、純粹さとを以て表現されてゐます。それは人の生命の中心に容赦なく分けて來て、大きな生の力を感じさせずにはおきません。こゝに或る一つの本當の世界があるといふ感じを植ゑつけずにはおきません。このやうに實感と表現とがぴつたり噛み合つて、二つのものでありながら二つのものでなくなるやうになると、藝術は始めてその眞諦に近寄つて來てゐるのです。かうして藝術家の生活と表現とが不二の境界に達した時、正しい創造的動向は滿足され、而して眞の創造は成就されるのです。藝術的衝動の向上性とは實にこれをいふのです。

所が藝術的衝動と表現とが分離しようとすれば分離され得ないでもない所から、藝術家は屢〻奇怪な誘惑に試みられます。それは藝術的衝動以上の若しくは以外の程度までその表現を持つて行かうとすることです。所謂技巧偏重といふ恐るべき傾向はそこから來るのです。

表現は一つの技巧だといふことが出來ます。如何に藝術的氣稟の豐かな人であつてもそれを表現する手段に暗ければ、よい藝術品を生むことは出來ません。女であつても子を生むことの出來ない女があるやうに、藝術家であつても藝術品を生むことの出來ない結果になります。苟も藝術品を生まんとする以上は、表現に役立つべき道具、即ち技巧に磨きをかける必要があります。唱歌手が聲帶に大切な注意を拂ひ、絶えず音樂の基礎的練習をしなければならないといふが如きはその例の一つであります。然しながらかくの如く練磨された技巧はたゞ十分なる藝術的衝動の在る所にのみ役立つて、その無い所には何の價値をも持ち來すものではないといふ事實は、分り切つたことでありながら、屢〻忘却され易いといふのは悲しいことであります。これは全く技巧の練磨といふことが、藝術的衝動と直接の聯關なくしてなし得られる所から起る謬見に相違ありません。かくて藝術家は往々に

して最上の一大事を放擲して、表現といふものを一つの獨立した仕事として見るに至ります。實質とその外衣との間に有機的な關係をおくことを蔑ろにします。この藝術的創造の過程に於ける內外の分離が思ひもよらぬ破綻を結果する例は私達が常住出會はねばならぬ所のものです。如何に美しい人であつても、その人の美しさ以上の人が着て似合ふ衣物を着たならば興ざめた姿に變るでせう。又不似合ひな色の衣裳はその人の美をむざ／＼と殺すでせう。その人にはその人にしつくり嵌まつたつくりがあらねばなりません。そのつくりをした時に、その人は始めて幸福であり、それを見る人も亦喜ばせられます。然るに美しい人がこの點に於いて可なり屢ゝ見謬りをするやうに、藝術家も亦この誘惑に跌きがちです。殊に藝術的衝動に對してひたむきになる勞を厭ふ人、又は藝術的衝動の衰へを感じ出した人達はその缺陷を補ふ爲めに、知らず／＼表現といふことだけに機械的な努力をするやうになります。卽ち藝術家の生活の中には、その生活と切り放すことの出來ない藝術的衝動以外に、全くそれとは有機的の關係なく働く力が現はれ出て、この二つの力が調和するといふよりも互に相殺し合ふ結果になるのです。頽廢期の藝術にはいつでもこの傾向が見られます。これを私は藝術的衝動の向下性と呼ばうとするのです。こゝまで藝術が墮落してくると、もうそれは明かに藝術ではなくして一つの漫然たる遊戯に過ぎません。而してその時藝術は生活の圈內から放擲されねばなりません。

元來をいふと再現といふことは藝術的衝動と表現とを二つのものに離すやうに見えますけれども、實際には不可離の關係にあらしむべきものなのです。藝術的衝動卽表現でなければなりません。私は先に肉體と衣裳といふやうな例で二者の關係を說明して見ましたが、本當をいふとそれは肉體と皮膚といふ關係におかれねばならぬ筈のものです。肉體のある所には皮膚があるやうに、藝術的衝動のある所には表現があらねばならぬのです。技巧を練磨するとは、肉體美を明かにする爲めに皮膚に膏するやうなものです。この關係を嚴密に納得しておくこと

は、藝術家に取つても藝術鑑賞者に取つても大切なことです。私はこの點に關して岩野泡鳴氏の云つた言葉を今でも忘れません。それは或る集會の席上でのことでしてが、或る人が或る有名な論文家の書いてゐた長論文の噂をして「あの男は思想は中學生程度だが、文章はさすがにうまいものだ」と言つた時、岩野氏は卒然として「思想が駄目なのなら、その文章はどんなにうまく見えたつて惡文に過ぎないのだ」といつたのでした。私はそれを聽いて感心しました。文章といふものが獨立したものゝやうに考へられるといふことは忌むべき現象です。これは恐らく支那あたりで、進士の試驗でもする時に用ゐられた習慣が、知らず〳〵日本の漢學者などによつて輸入されたものではないでせうか。

この一事から考へても、藝術上の流派といふやうなことが過去に屬せしむべき習慣であるのを知らねばなりません。私は四五年前に一人一流派といふことを強く主張しました。實際藝術の世界に道伴れはありません。又いりません。表現の統一といふやうなことは害にこそなれ益にはなりません。

かくの如く藝術的衝動と表現とが一元的な約束の下に結び付けられる時、藝術の醇化なるものは始めて成就されるのであります。而してかくの如き藝術のみが私達の生活と一番緊密な關係を保つて存續することが出來るのです。

更に一言を附け加へておきたいことは、人がよく藝術を生活の或る部門の促進に役立つべき手段として見ようとする謬見です。例へば藝術を用ゐて宗教心を向上せしめようとか、道德心を涵養せしめようとか、そんな所に持つて行かうとすることです。私は敢へて云ひます。よき藝術は必ず渇仰的でもあり、道德的でもあるでせう。然しながら或る手段として利用されようとするなら、その瞬間に藝術は利用しようとする人の手を嚙むに違ひありません。何故ならば藝術はもつと本體的な目的を固有してゐるからであります。藝術は人間生活全體の表現で

す。人間の本能的動向の暗示となるものです。この動向には始めもなく終りもありません。何處がその出發點でもなく、何處がその歸着點でもありません。この動向は歩いてゐるのです。唯どこまでも〳〵歩いてゐるのです。ロダンの作なる「歩む人」といふ彫像を見た人は誰でも或る悲壯な感銘を受けずにはゐられますまい。彼はその強健な兩の脚を踏み張つて歩いてゐます。たゆまず力強く歩いてゐます。彼は何處に行くのかは知らないけれども、彼の行くのは必ず行かねばならぬ故に、强い決心を以て勇ましく歩いて行きます。藝術とは實にあの無限の歩みの或る點から或る點までを假りに切り取つたに過ぎないと云へます。そこには渴仰的なものはありますけれども、完成した宗教はありません。そこには道德的なものはありますけれども固定した倫理はありません。その後ろには無限な道があり、その前には更に無限な道があります。私の弟の生馬が或る時私に畫を見る道を敎へて「額緣で區切られて見事に纒まつた作品を見出したらその作品を疑へ。額緣の先までも擴がつてゐるなと思はせるやうな作品に出會つたら、假令一見價値低く見えようとも、十分の注意に値する」といつたのは、凡ての藝術に共通して云はれる言葉だと思ひます。然るに私達の持つてゐる社會生活の樣式は或る規範をちやんと定めて、その所まで私達の生活を持つて行かうとしてゐるのです。而して一箇の藝術をもそれに適合するやうに導かうとするのは理不盡なことではありませんか。藝術の中に酌み取られねばならぬものは、凡ての矛盾と、愛憎と、混亂をも退けない一つの世界にあつて、徐ろに、然し力強く進みつゝある一つの力の端的な感じです。この力を感ずる以外に更に何物をか藝術に求めようとするのは、求める所を知らないものといはねばなりません。だから如何によい藝術も、藝術的衝動卽ち創造的動向を感じたことのない鑑賞者に遇つては、豚の前におかれた眞珠同樣です。

三、藝術に於ける文學の位置

具象藝術と印象藝術――印象藝術の特長――文學

偖て私は以上の大體論に於て、人の生活の中に藝術がどれだけの廣さを占め、どれだけの重さを持ち、どれ程のかゝはりを保つてゐるかについて、概要のお話をし、廣義の藝術と狹義の藝術の區別についても一言しました。卽ち狹義の藝術(卽ち私達が普通稱するところの藝術)が廣義の藝術（卽ち常に創造しつゝある生活そのもの)から如何にして導き出されるかを述べたつもりです。これからの私の言說は主としてこの狹義の藝術といふ問題に這入りこみます。隨つて今後單に藝術といふ言葉を使つたら、それは狹義の藝術であると承知していたゞきます。

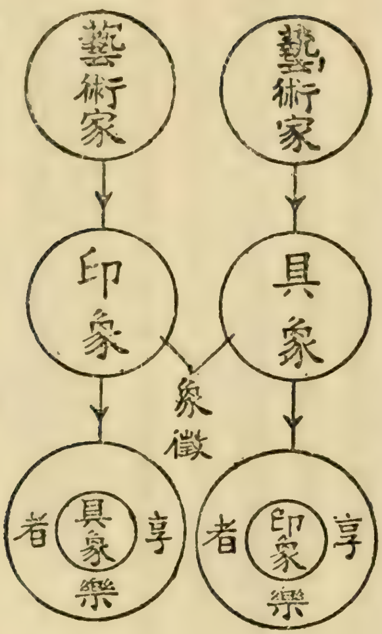
私の主に說かうとするところは文學でありますが、文學は藝術界にあつて如何なる分野を占めてゐるかといふことを考へて見ねばなりません。それには藝術の內容を區分することが必要になります。この爲めに從來幾多の方法が申し出されてゐます。私が述べようとするところのものは、或は先人が言ひ盡したものであるかも知れませんが、學者でない私は一々文獻を調べてその有無を確かめる暇がありません故、敢へて重複するかも知れない危險をそのまゝにして思ひのまゝを述べて見ます。

藝術家が自分の內部を人に訴へるに際して象徵を借らねばならぬといふことは前に述べましたが、その象徵にはおのづから二つの形式が區別されるやうです。藝術家がその內部の生活を具體化して象徵に託する場合と、藝術家の內部生活を象徵を通ほして享樂者の生活中に具體化する場合との二つです。尤もこの區別は截然と互の交涉を絕してなされるものでなく、第一の場合（私はそれを呼んで具象藝術といひます）と第二の場合(私はそれを

呼んで印象藝術といひます」とは互に共通してゐるのはいふまでもありません。たゞこれは私の考へを述べる便宜上のことであつて、本質的の區別でないことは豫め注意していたゞきます。

繪畫の如き、彫刻の如き、建築の如き、演劇又は舞踊の如きは概して具象藝術に屬するといふことが出來ます。何んとなれば、藝術家の創作的衝動が象徴の中に具象化されて、卽ち或る具體的な形を取つて現はれ出るからであります。藝術家の內部生命は先づ一度具體的な形式に飜譯されるからであります。かゝる藝術の享樂者は、藝術家の內部生命と端的に接觸することが出來ません。先づ具象的象徴にぶつからなければなりません。それにぶつかつて、それを通過して甫めてその中に潛む藝術家の內部生活に觸れることが出來るのです。

これに反して音樂だとか、詩歌だとか、戲曲だとか、小說だとかいふものになると、象徴そのものには強い具象化が施されてゐないが故に、藝術家の內部生命は割合ひに端的に鑑賞者の內部生命に通じ合ひます。鑑賞者は前の場合よりももつと直接にその藝術からの印象を受けることが出來ます。而して鑑賞者が或る印象から自分の心の中に或る具體的な形を創り出すやうになります。これは假りに圖にして示して見れば、



といふ風であつて、具象的象徴が用ゐてあるか、印象的象徴が用ゐてあるかによつて、おのづから區別が生じ來り、從つて藝術の部門も生ずるといふ譯であります。今この兩者の比較的研究を試みるのも必要なことであり、興味のあることでありませうが、あまり長々しくなる恐れがあるので、姑らくそれを措き、文學が附屬する所の印象藝術についてのみ、述べることにします。好奇心のある讀者はそれによつて具象藝術の如何なるものであるかを臆測することが出來ると思ひます。何となれば具象藝術は大體に於て、印象藝術の特色と反對の內容を持つものだと考へることによつてほゞ正鵠を得ることが出來ますから。

印象藝術の特色の一つは感覺に訴へないで感情に訴へて來ることです。physical man に訴へないで mnetal man に訴へて來ることとです。かゝる藝術が感覺的に人を動かさうとしてゐる場合でも、先づ鑑賞者の感情に訴へて、鑑賞者がそれを感覺にまで飜譯するのを待たねばなりません。音樂の如きは耳といふ感覺機關に先づ訴へて來るやうに思へぬでもありませんが、各個の音は丁度「いろは」の各〻の一字のやうなもので、各個々々には感覺を或る生きた作用に導く力が極めて微弱であります。その音の綜合を成就しよう爲めには勢ひ感覺以上の力ある感情に據る外はないのです。かくて感情によつて綜合された一連の音階が感覺に逆戻りして、そこに始めて肉體にまで及ぶ影響を與へるに至ります。最も感覺的なるべき音樂ですらさうですから、劇曲や小說の如きものが感覺に還元される爲めにどれ程複雜な心理的過程を經ねばならぬかは想像することが出來るでせう。而して藝術の一特色としてその影響が感覺にまで逼つて來るといふことは見のがしてならないことです。哲學だとか科學だとかは普通かゝる影響を持つてゐません。宗教に至つては時に藝術と同じい働きをすることがあるやうです。藝術は火です。それは人の心にさへも或る智慧を與へずに感覺的な熱を與へるものです。この點から考へると、印象藝術は直接に感覺に訴へない點に於いて、熱ではあるけれども潜熱といふべきものだと見ることが出來ます。それ

が熱に變つて藝術本來の働きを成しとげるには或る心的の過程を必要とするのです。これは確かに印象藝術の不利な點です。主に視力に訴へる具象藝術にあつては、一つの藝術品が端的にそのまゝの形で、鑑賞者を感覺的に動かし得る場合が數多くありますが、印象藝術にあつては、どうもさうした直接な働きが出來かねるのです。これは一面確かに不利なことではありますが同時に或る利點を持たないでもありません。具象藝術は空間に固定化される傾向を持つてゐるに反して、印象藝術に於いては時間的の連續性を必要とし、それがなければ到底かゝる種類の藝術は成り立たないといふ一事です。具象藝術にあつても、舞踊若しくは演劇の如きは時間的の經過を必要とするに違ひありませんが、それは寧ろ空間に固定された具象の連續と見た方が正しい場合が多いのです。然るに印象藝術中の小說なら小說を取つて考へて見ると、その小說なる藝術品が鑑賞者に對する使命は、讀者が最初の字から最後の字までを時間的連續の中に吸收し終つた後に始めて完うせられるのです。その或る時間の間、その藝術の鑑賞者はたゞ不完全な印象から印象へと自分を運んで行かねばなりません。而してその間に受け入れたものに對して自分の感情を整理して行かねばなりません。而してその後やうやく――若しその藝術品が本當の價値を持つたものならば――讀者は或る感覺に導かれるやうになるのです。この寧ろ廻りくどい過程は、前にも申し出た通り、藝術の最後の使命に達する爲めには不利であるに相違ありませんけれども、同時に鑑賞者に十分の內部的準備の暇を與へる點に於いて勝れた特色を持つことが出來ます。感覺に訴へられ直ちに感覺によつて反應することなしに、理智と感情とを濾過した上にその效果が感覺に及んで來るが故に、鑑賞者は凡ての心的過程に於いてその藝術を受け入れ、十分の安心を以てそれを具象化し、感覺にまで飜譯することが出來るのです。

從つて印象藝術は鑑賞者の內部により多くの自由を與へます。これは藝術家の方からいへば可なり氣になることには相違ありませんが、鑑賞者に取つては難有いことの一つであらねばなりません。自分の受けた印象を或る

形に具象することは鑑賞者の思ひのまゝです。そこに鑑賞者は殆んど自分自身が藝術家であるやうな喜びを感じ得ます。實際印象藝術は鑑賞者の中に眠つてゐる藝術家を喚び覺ます藝術といふことも出來るのです。

以上の如く申し出したといつて、私は以上述べた二つの藝術境の間を截然と分たうとするものでもなく、同じ印象藝術なら印象藝術の中にも具象藝術の特色に通ずる階段が色階や音階のやうに存在するのを否定もしません。例へば詩歌の中にも具象的の詩歌と印象的な詩歌とが併存するのは勿論のことです。畫とか彫刻とかいふものから受けると同じ感銘を受ける詩歌もあれば、音樂とか劇曲とかいふものから受けると同じ感銘を受ける詩歌もあります。その間には數限りもない階段があります。この事は具象藝術についても同樣にいふことが出來ます。だから私の議論は極めて大體に亙つた議論としていたゞかねばならぬのです。

こゝまで順序だてゝ申して來ると私は始めて私の主題なる文學について云ふべき立場を得たのであります。

文學は印象藝術の一部門であつて、音樂なぞよりは更に印象的な要素を多量に有する藝術であります。人間の心の働きの傾向として具象的の傾向は印象的の傾向より早く發達すべきものでありますが故に、人文史上文學が起つたのは他の具象藝術に比すれば遙かに後代であつたに相違ありません。野蠻人は自分の藝術的衝動を表現する爲めに先づ具象的な形式を借りました。音樂(それは印象的藝術なる)の要素たる音を用ゐる場合でも、音樂の約束たるハーモニーを無視した單音のみを用ゐ、音を色彩と同樣の用途に使はうとしたことが窺はれます。それは極めて感覺的なものゝ外何者でもありませんでした。

或る人は文字の發明が文化の發祥であつたといつたやうに、文字若しくは私達の稱する言語の發生したのは人間の生活が餘程複雜になつてから後のことです。即ち人類の人間的自覺が言語、延いては文字となつて現はれ來つたのです。而して文學といふ人間内部の表現樣式はその後に至つて初めて起り來つたのです。だから文學は藝

術發達の順序からいふと比較的後期のものに屬し、隨つてその組立ても複雜であるが、鑑賞の過程も前述したやうに曲折を有してゐる譯なのです。

一概に文學といふと中々澤山の分野を含むものであつて、一行の歌も文學であれば、こちたい哲學書、科學的研究の或るものも、或る意味からいへば十分に文學としての價値を持ち得る場合があります。然しながら大體に區別して見るなら、詩歌(Poem)、戲曲(Drama)、物語(Romance)、小說(Novel)、論文(Essay)、雜文(Miscellany)等とすることが出來ませうか。是等のものゝ特色並びに價値等について考へて見るのも全く必要のないことではありませんが、それは暫く讀者の常識的判斷に任せておいていゝと思ひます。たゞ私がこゝで申し出ておきたいと思ふのは、藝術といふものはその本來の要求として及ぶだけ内部經驗の純粹な表現を求めるものである以上、即ち表現を可能ならしむる象徵を純粹且つ獨自なものとする傾向を有する以上、形式として詩歌の如きは文學にあつて價値的に最高位を占むべきものであるといふことです。詩歌は人間の文學的表現の中最も原始的なものでありながら、最も高い價値を持ち、而して私の臆測が間違つてゐないなら、將來に於いて恐らく一番有力な表現法となりはしないかと思ひます。人事が複雜になつて行くといふことは勢ひ藝術の内容の複雜さを伴ひ、單に感情にのみ訴へる詩歌でも物足らなくなつて、勢ひ小說や戲曲の如き理智的分子の餘計加はつた表現樣式がより多く採用されさうなものなどと考へては常識的に云つて妥當らしく見えますが、我々の生活が複雜になればなる程その複雜さの核心を端的に捕捉する要求は強くなり、從つて勝れた直感若しくは直觀によりすがらうとする動向が強められるのは當然なことで、詩人はそこに最も古くして最も新らしい、詩歌の領土に大きな働きをなすに至るだらうと私は思ひます。私自身若し及ぶことなら詩人となりたい欲求を感じてゐます。私の内部生活がもつと緊張して來たならば、詩によつて自己を云ひ現はすより、よりよき手段はないやうに思はれます。しかも現代は

その本當の要求を忘れて詩歌をおろそかにしてゐるやうです。それには詩人の方にも一面尤があるといひ得るのかも知れません。然しもつと時代が眞劍に詩歌の要求をするまでに自覺してゐないのが一番惡いことであらねばなりません。要求のあるところには必ずそれに應ずるものが輩出するのは自然の理であるからであります。ホヰットマンのやうな人が米國に現はれたのは確かに一つの先驅的現象と見ることが出來ます。彼の詩は或はまだ完成されないものといふことが出來ませう。

それはホヰットマン自身がその詩の中に明かに云ひ及んでゐます。然しながら彼の如く獨自的な詩に對する自覺が、やがて新しい要求に應ずる詩の要素たるべきはほゞ想像することが出來ます。私は一つの豫言としてこゝにこれだけのことを申し出ておきます。

偖て私はこれから文學を全體的に見て、これまで現はれ來つた色々な特色を考へて見ねばならぬ場合に至りましたが、その前に一言文學に於いて表現さるべき要素について申し出ておきたいと思ひます。

文學の中には色々な要素が見出されます。それは人間の生活中に色々な要素が見出されるのと同じことです。或は笑ひがあります、或は涙があります、或は譏嘲があります、或は哀情(pathos)があります、或は崇美があります、或は凄慘があります。或は默想があります、或は躍進があります。凡そ生活の凡ての相は、文學の中にも見出されなければならないのです。然し大體に分けて見ると、實人生でもさうであるやうに、悲劇的なものと喜劇的なものとの二つにすることが出來ます。而して古來、この二つのものゝ何れが藝術としてより高い水準にあるかといふことが、可なりやかましく論議せられました。私はこゝで私自身の考へを云ふならば、惡しき喜劇的作品はよき悲劇的作品より惡く、よき悲劇的作品はよき喜劇的作品より惡いと申し出たいのです。世に惡しき喜劇ほど馬鹿々々しいものはありません。成程人世の表面は笑つてすまさねばならぬことに充ち滿ちてゐるでせ

う。笑ひ捨てゝおけばそれで事のすむやうなことが多いでせう。然しながらそれは何といつても表面だけのことです。もう一つ沈潜して見ると、そこには悲劇的であらねばならぬ凡てのものが備はつてゐます。私達は先づ時間と方處といふもので掣肘(せいちう)され、不思議に喰ひちがつた運命に弄ばれ、又人間同士が築き合つた色々な妨害物の爲めに生命の進轉がはゞまれ、誰一人として欲求するまゝの生活を完全になし遂げることは出來ません。生きるものが自分の欲するやうに生き得られないのは既に否(いな)むべからざる悲劇です。しかも人間は有らゆる力を盡してこの不可抗的な外界を克服しようとします。生まれ出て來るものが一人殘らず飽きもせず思ひ切りもせずにこのことを繰り返してゐます。文學者と雖もまたこの桎梏(しつこく)から逃れ出ることは出來ません。のみならず、文學者はその鋭敏多感な感受性を以て普通の人以上に恐らくこの矛盾に苦しまねばなりません。この苦々しい生活經驗から結果されるものは、當然悲劇的な味を持つた作品であらねばならぬのです。古來傑作とか名著とか稱せられた天才の作品中に如何に多くの悲劇的作品を見出すことでせう。それらの作品によつて、私達は自分の運命のいかに悲しいものであるかを、天才によつて裏書きされ、安んじて或る人は人生に對して譏嘲的態度を採り、或る人は隱遁的態度を取り、或る人は戰鬪的態度を採り、或る人は悲觀的態度を採り、或る人は自分を憐れむが如き態度を採るに至ります。

然しながら又更に一層生活に沈潜し得る達人になると、一見人生の根柢に横はつてゐるらしい悲劇的要素の又その底に、或る統一と目的とを見出さずにはゐません。人間の生存といはず、凡てのものゝ存在を可能ならしむべき肯定的な力を感受せずにはゐられません。それ故にその人達の作品には、如何に悲劇的な題材があつかつてあつても何處かに人間の生活力の養分となり、人間を死の方に導くよりもより豐かな生の方に押し進めて行く力を持つてゐます。一種肯定的な所があり、喜劇的な所があり、いふべからざる美しいユーモアが漂(たゞよ)つてゐます。

ユーモア、これこそは人生の達人のみが生に對して有する本當の餘裕であるといふことが出來ます。泉が盛んに湧き出ればおのづから音樂のやうな水音と踊子のやうな飛沫とが生ずる如く、藝術家の生命力が豐富の極に達するとおのづからそこにこのユーモアなるものを生じ來るのでせう。ユーモアと哀情とはいつまでも伴つて起り來ります。孔子の謂ゆる「悲しんで傷まず」といふ境地と似通ふものがあるやうです。人生の相の安定はかゝる所まで行つた時はじめて得られるやうです。かゝる作品に接すると鑑賞者は、自分の生活の外に、若しくは奥に、更に〳〵廣く遠い美しい vista（遠見）のあることを氣付かされます。即ち今の生活から安心して躍出し、更によりよい生活に移り得る希望に滿たされます。人生が狹苦しい袋、小路でないことを合點させられます。藝術家としては自己の鍛錬が進み進んでこの境界にまで行かねばならぬし、鑑賞者としては實にかゝに藝術によつてその生活を生き甲斐あるものにして行かねばならぬと思ひます。生活と文學との交渉がこゝまで緊迫し合つて行つた時、文學は始めてその正しい効用を成しとげることが出來るでせう。

四、文學の諸傾向

其の一　内在的傾向

三個の對象——過去——センティメンタリズム——未來——ロマンティシズム
——現在——リアリズム

これから私は文學そのものゝ内容に亙つて順次に考へを述べて行きたいと思ふのですが、文學にはおのづから色々な傾向があることが考へられます。例へば文學的表現の方からいへば、そこに或る種類の傾向のあることが

看取されますし、文學的形式からいつても前章に述べたやうないくつかの傾向が抽象されます。これらの事については更に章を改めて考へて見ることにして、こゝでは先づその內在的又は實質的傾向について暫く考察して見たいと思ふのです。

文學の內在的傾向とはどういふことかといふと、それは主に作品が生み出される時代の傾向によつて決定されるもので、作品の實質を形造つてゐる色合ひとでも稱すべきものであります。餘談に亙るけれども、私が或る吳服屋から聞いたところによると、日本の反物の地色の基調となつてゐるのは二種類だささうです。一つは紺で、一つは黃ださうです。而してどんな複雜な色合ひでも結局この二色のどちらかゞ基調となつて世に見るやうな種々た色合ひが染め出されるのだといふことです。で、染物屋としては、今年は紺と黃との中どちらの地色が基調となるかを十分に見拔く眼識がなければならぬ。それを見拔く方法にもおもしろいやり方があります。又こちらから進んで自分が選んだ地色を流行にする方法にもおもしろいやり方がありますが、それは餘り餘談過ぎますからこゝでは云はずにおいて、兎に角地色を見極めたら、どんな色合ひのものを染め出すにつけても、基調になる地色に背かないやうにしなければならない。例へば紺が基調だと見たら、同じ赤を染めるにしても紫がゝつた赤を選び、紺を染めるにしたら、思ひ切つて深く紺をかけるといふ具合にするのださうです。かくして流行の色合ひといふものが自然に大體に於いて統一されて來るといふ譯です。而して更に奇妙なことには、紺が基調として流行する年は一體が不景氣であり、黃が流行する年は景氣がいゝのださうです。これが果してその人のいつた通りに行くものか何うか、私は觀察して見たことがないから、その人の言葉に裏書きは出來ません。

偖てこれと同じやうなことが文學上の傾向にも現はれて來ます。大體から言つて、或る時代若しくは或る地方に、或る一定した色合ひが出來て來ます。ティヌといふ佛蘭西の文藝評論家の如きは、主にこの事實に重きをお

き、卽ち文學的作品が生み出される環境に注目を拂つて、文學上の傾向を觀察しようと企てました。此の如き企てには確かに十分の意義があります。私は自分一個の立場から、かゝる環境によつて創り出される色合ひなるものはどんなものであり、それがどういふ原因から生じて來るかを、こゝに少し考察して見たいと思ふのです。

一つの社會でもよし、又時代でもよし、そのいづれにせよ、その中に生きてゐる人間の生活が、過去を主にしてゐる時と、未來を主にしてゐる時と、現在を主にしてゐる時との三樣があるやうです。勿論生活といふものは人間が現在々々を處理して行く方法でありますから、現在を全く無視して過去ばかりに執着してゐる生活もなく、また未來の憧憬ばかりから成り立つてゐる生活もないには相違ありませんが、同じ現在々々を處理しながらも、或る時代或る社會に於いては兎角過去にあつた生活が忘れられず、何かといふと現在の生活を過去のそれに則つとして生活しようとする場合には、私はそれを過去を主とした生活といひ、それが未來といふものに對して同樣の動き方をする時には、私はそれを未來を主とした生活といふのです。而して現在を主とした生活といふと、勿論この場合にも過去を振り返つたり、未來に憧れたりすることが皆無ではありますまいが、兎も角も現在が一番强い力となつて、その生活を導いてゐるのをいふのです。

過去を主とする生活環境は何ういふ場合に行はれるかといふと、人の一生にあてはめて考へて見ると一番判りいゝと思はれるが、かゝる現象は人間の生活が絕望的に行きつまつた時(卽ち大病に犯された時とか、勇氣を挫折し終るやうな失敗が起つた時とか)、又は老衰期に得て起り勝ちなものです。卽ち人の現在が何んとなく弱々しくなつて、前途にその弱々しさを癒すべき希望が薄らいだ時起つて來る心の狀態です。その時人は過去にあつた榮華を現在の生活の中に織り込んで僅かに堪へがたい空虛から遁れようと藻掻き初めるのです。所謂老の繰言といふ心持はこれです。これと同じ心理的狀態が、或る時代若しくは或る社會に起つて來ます。卽ち或る時代若

しくは社會の生活が一つの役目を果たし終つて、自壞作用を惹起して來ると、もうそこには前途の光明が無くなつて來ます。しかもなほ殘されたる多少の活力は何等かの自己表現を求めねばやみません。かゝる時その表現の對象となるものはいつでも過去です。何故ならそんなはめに陷つた時代なり社會なりに取つては、過去が一番優れた所有でありますから。

かゝる時代なり社會なりの生活にあつては、新しいものを獲得しようといふ意志の力は消耗され切つてゐますから、意志を用ゐずして得られるやうな或るものを求めねばならなくなります。それは過去です。過去に起つたことはどれ程立派なものであつても、又どれ程鞏固な意志が働いても、過去にあつたそのまゝのものを再び現在に築き上げることは絶對に出來ない筈のものです。覆水盆に還らずです。だから過去を回復することは意志の力では出來ないもので、唯一の可能なのは感情的にその狀態を空想する外に途がありません。だからかゝる時代若しくは社會の生活に取つては、まとまつた生活力の中から感情といふ特殊な機能が分離され、際立つて發達します。卽ち主情的傾向が助長されます。センティメンタリズムとはこれをいふのです。かゝる生活環境が要求する文學的表現は、このセンティメンタリズムです。

から申し出ると文學的傾向としてのセンティメンタリズムの內容もおのづから自知せられ得ると思ひます。殉情的とも譯すべきこの傾向は、實行性若しくは實行力を缺いた、過去に對する感情惑溺を意味するのです。殉情的といはれる文學を繙いて御覽なさい。讀者はいつでもその中に謬たず過去の現はれに對する主情的な執着のあるのを發見するでせうから。而してそこには新生に對する躍進的氣分がなく、絶望的な悒鬱が重く漂つてゐます。その中にいかに華やかな夢が描かれてあつても、畢竟それは美しく現はれて空しく消える虹のやうな實現性なき夢です。然し同時にそこには意欲に驅られて盲目になつたやうな忿躁といふものはなく、靜かに物の美しさを賞

味し、平らかな心で善惡眞僞を見究めるといふやうな所もあります。それが嵩じると一種の諷刺にもなり勝ちではありますが。

これを要するに文學的表現としてのセンティメンタリズムは宿命的であり、回顧的であり、咏嘆的であり、高踏的であり、悲觀的であります。これらの特色の內容をもこゝで說明するのが本當かも知れませんが、讀者は私のこれまで申し出た所からほゞそれを推察して下さることが出來ると思ひますから改めて述べません。

それでは未來を主とする生活環境は何ういふ場合に行はれるかといふと、一つの役目を果たし終つた時代又は社會が、まだ十分に生命力を持ち續けてゐて、更に生活の內容を更新しようとする時に起るものです。これを人間の一生に喩へて見ると靑年期といふことが出來ます。靑年は幼年少年の二時期を經過して到達した時期ではありますが、その生命力は衰へるどころか益々增大しつゝあります。理智的若しくは意志的な制御を無視してまで增大しつゝあります。さういふ靑年期に取つては過去は勿論のこと現在ですらが齒痒いほど面白からぬ狀態にあります。そんなものを一つ殘らず打ち壞してしまつて何かまだこの世に現はれ出ぬものでそれを補はうとせずにはゐられません。從つて未來に現はれ來るであらうものが唯一の期待となり力の源となります。過去と現在とを凡てまだ見も知らぬ未來に繫がうといふことになります。實行不能と見える夢でさへが靑年に取つてはまざ〳〵と摑むことの出來る實在です。從つてかゝる傾向の內容は情熱的で、空想的で、傳奇的で、破壞的であります。センティメンタリズムが感情をその基調としてゐるのは勿論ですが、甚だしく理智的な所があります。甚だしく固定した理智を以て、溺れるやうな感情を堅くからめつけてゐる所があります。所がロマンティシズムに於いては、その感情はひたすら奔放自在で、何物にも拘束されようとはしません。意志でも理智でも感情の奴隸となつて使役に甘んずる限りにはこれを用ゐますけれども、苟もそれが上手に出ようとするならば、すぐ容赦なく蹴り

つけてしまひます。かゝる傾向は、その本質に於いて勝れたものを持つてゐます。それはまかり間違へば回復の出來ない顚倒に、卽ち空疎粗笨な虛無的思想に文學を導く恐れがありますけれども、その中には見のがすことの出來ない潑剌たる生氣があり、やがて現はれ來たるべき人間の生活の誕生を雄々しく促がし迎へる力を持つてゐます。新興文藝にはいつでもかくの如き傾向が伴つて生ずるのです。

最後に現在を主とする生活環境はどういふ場合に起るかといふと、それを例によつて一人の人の一生に比べて見ると、壯年期に當るといふことが出來ます。壯年は熟達の時期です。青年期に至つて頂上に達せんとした生活力はまだ萎縮することなく緊張したまゝに續いて居り、同時に理智と意志とが平均して發育して來て、所謂智情意が三つの働きとして別々な作用をすることなく、人格といふ一つの力の中に溶解され統合されるやうになつて來ます。かういふ風に一元的に統一された生命力に取つては、過去にいかに美しく秀でたものがあらうとも、その再現の絕對に不可能なることを知つて、それに最大の執着をおくことをせず、又未來にどれ程かゞやかしいものが想像されようとも、まだ手に取る事も出來ないそのものに懸命の期待をつなぐ事もしなくなり、現在眼の前に在る事象のみが眞の活動の對象であることを存分に知り拔くやうになります。勿論凡てが進化の階段にあるのだから、現在には數限りもない不完全が隨所に見出されるでせうが、その點こそは、存在が完成の餘裕を有つ所以であることを納得して、單に不完全であるが故に容易に捨て去るやうなことはしません。その不完全を包有する世界の中にやむにやまれぬ完成の努力を致さうとするのです。卽ち空虛なものでなく、過去でもなく未來でもなく、現實なもの、眼に見、耳に聞き、手に觸れることの出來る現在に最大の價値をおき、そこのみに正しい生活を織り出さうと勉めるのです。これは實に壯年期の人で押しなべて持つところの特色です。或る時代でも又或る社會でも、その成熟期に近づくに從つてこのリアリズムの傾向を夥しく帶びて來ます。而してかゝる環境の下

に生み出された文學には又おのづからそのやうな傾向が現はれて來ます。

リアリズムにもそれ自身が持つ所の恐ろしい弱點がないではありません。それは概念（conception）の固定化形式化といふことです。生命力の內容があまりに完全に統合されると、その働き方におのづからなる一定の方向が生じて來ます。その方向を絕えず强め、押し進めるといふことの代りに、動ともすると、そこに固着して、外界の事情に順應して殼を破つて新しい存在に突進するといふ力を失ふやうになることがあります、或は現實といふことにあまり信賴をおきすぎる結果、現在の有する長所も缺點もそのまゝ受け入れて、そこに變易せらるべき何物もないといふやうな似而非なる自己飽滿の態度を釀し出さないとも限りません。これが誠にリアリズムに取つての大敵です。或る社會なり時代なりがその發達の頂天に達して謂はゆる自壞作用が萌しかけると、かゝる恐るべき傾向は更に顯著になつて來ます。文學の上ではかゝる傾向を形式化といつて、袋小路のやうな、先に突きぬける見込みのない惡い傾向とされてゐます（例へば佛國王朝末期のクラシシズム、或はわが國の藤氏末葉の文學的傾向の如きはその一例だと見ることが出來ませう）。更に又リアリズムが陷り易い陷穽として平凡化（Trivialism）といふのがあります。それはあまり現在に卽し過ぎる結果、飛躍力がなくなつてしまつて、有り合せのもので滿足するのみならず、それを一番確かな一番眞實なものとしてしまひ、少しでも調子のちがつたものを取扱へばもう下らない空想に耽けるかの如く感ずる傾向です。この傾向は全く人生をあぢきないものにしてしまひます。而して人の生活を安價に腐らせます。

然しながらリアリズムがその本然の力に立つ以上は、そこに最も堅實な、底力のこもつた、而して人間の生活を根柢から搖り動かして向上せしむる文學を生むことが出來る筈です。かゝる傾向の特色と見るべきものは、統合性であり、力の感じであり、健全性（wholesomeness）への示唆であり、概念の充實味です。

私はかくの如く一つの時代又は社會に現はれる三つの文學的傾向について概略を述べましたが、實例について一々それを證明すると一番解りいゝと思ひますけれども、不幸にして私は澤山の文獻を涉獵してゐませんから、適例を擧げることの出來ないのを讀者に對してお氣の毒に思ふのです。然しながらペトラルカからタッソー位まで、即ち一三〇四年から一五〇〇年の中葉に至るあたり迄の伊太利の文壇は、中世紀の文化が崩壞して行く時代にあつたので、一帶の調子にセンティメンタルなものを多分に存してゐたといふことが出來ませう。ダンテの如きもこの時代に生きてゐた人でありますが、この人は中世紀の幕を閉ぢて、近世の舞臺を調へた人であるといはれるだけに、ロマンティックなものを潤澤に持つてはゐます。と同時に、多量のセンティメンタリズムをも包藏してゐるのを見逃すことが出來ません。かゝる大家であつても、時代の反影といふものは免れることが出來なかつたと見えます。又ロマンティックな時代は例へば獨逸國民勃興時代の文學中に多量に發見せられます。その當時行はれた神話を題材にした物語から、騎士道の物語に至るまで、凡て奔放な感情の結晶でないものはありません。近代に至つて獨逸が新興せんとするに至つて、この氣勢はまた高められてゐます。その頃にはロマンティックの運動は殆んど歐洲全土を席卷したといつてもよい位です。英國にはバイロン、佛國にはユーゴー、獨逸にはゲーテ、シラーといふやうな人が現はれて皆この氣運に乘じて作品を世に提供してゐます。リアリズムの時代は十九世紀から二十世紀にかけて著しく發達したといへます。即ち歐洲の文化がその發育の頂點に達して、それ自身に於いて強い飽滿を感じた時この傾向は現はれ出したのです。しかもその中に於いて幾多の小波瀾のあつたことは爭はれません。自然主義の運動がリアリズムのそれと結び付いて現はれ出ましたが、その宿命的機械的な人生觀はやうやく形式化を來して、十九世紀の末から二十世紀の初期がさうであつたやうに、自分で作つた桎梏の中で藻掻きはじめ、自壞作用を生ぜんとした時、鄕土文學とか傳統主義といふやうなものが、特に佛國、伊太利等の國々

に唱道せられました。これは一種の回顧的風潮であつて、時代がおのづから促進したところのセンティメンタリズムの出現であつたのです。その中に歐洲は自壞作用のみに自分を任せずに、すぐそれに續いて更新作用を起しました。植物などで見る「若がへり」(Rejuvenescence) の現象と同じ現象が起りました。文化改造と稱せられる運動がそれであります。この傾向はすぐ文學にも反影して、後期ロマンティシズム (Neo-Romanticism) の運動が現はれ出たのです。凡そこれらの諸傾向は、近代歐洲文明の基調をなしてゐるリアリズムの傘下に統合されてはゐますが、それでも時勢の小變遷は、鋭敏に文學上の傾向に働きかけてゐるのです。

所でこのセンティメンタリズム、ロマンティシズム、リアリズムの三傾向の中、どの傾向が最上の文學的作品を生み出すのに適してゐるかといふ問題になると、諸家の說がおのづから區々になる譯であります。文學を單に時世の反影としてのみ見、それが忠實に反影されてゐる以上、文學はその責任を相當に果してゐるものと見るならば、この三傾向が文學に持つ價値は同一だといふことが出來ます。然しながら文學が人の生活に或る推進力を與へ、生活內容の統合を成就し、その創造を達成するのに役立つべきものであるならば(私がこの講義の最初に論じ來つたが如く)、三つの傾向が必ず同價値の文學を生み得ると推定することが出來なくなります。

それならどの傾向が最上の文學的作品を生み出すのに適してゐるかと私に問はれるなら、私はその答へをする前に更に私の申し出に補足をしておく必要を感ずるものです。

いかなる時代若しくは社會にあつても、上述した三傾向が純粹の形で現はれるといふことは實際に於いて在り得ないことです。私が截然と三つの傾向を區別して述べたのは理論上の便宜からしたことであつて、實際に現はれる現象に至つてはその三者が色々の程度に混合して現はれるのです。例へば私は、一つの時代若しくは社會が自壞作用をなすべき運命に陷つた時には、それを支配する心的傾向としてセンティメンタリズムが發生するといひ

ましたが、苟もセンティメンタリズムといふ傾向が有る間は自壞作用は完成されてはゐないのです。老年期はセンティメンタルになります。然しその老年期が徹底的に進むと、單に肉體的に生存を持續するといふことだけが殘つて、心的活動は屏息するに至ります。それは非常に高齡な老人の狀態を考へて見れば知れることです。だからセンティメンタルであるといふことは既に自壞作用が過程にあるので完成の狀態にあるのではないといふ證據です。例へば現在の朝鮮のやうにその自壞作用が殆んど極度に達した場合には、センティメンタルな文學さへ產出されなくなつてしまひます。自壞作用がまだその過程にある間は、自壞作用と共に幾分の補足作用も行はれてゐるのです。卽ち多分のセンティメンタリズムに幾分のリアリズムも、更にまたそれより少ない幾分のロマンティシズムも共存する譯なのです。これと同じことをロマンティシズムの傾向についても、リアリズムの傾向についてもいふことが出來る譯です。この事が腑に落ちて下さるなら、私は最上の文學的作品を生み出すに適した傾向が何んであるかを述べることが出來ます。その傾向はリアリズムを基調とする傾向です。卽ち、時代若しくは社會の狀態についていふならば、或る文化の方向が明かに一定して漸次昂進し、その最盛期に達せんとする頃に起り來たる文學は、概してよき內容を備へてゐるといふことが出來るのです。かくの如き時期の心的傾向は前述した通りにリアリズムではありますが、一味ロマンティックな內容更新の氣勢を持つてゐて、リアリズムの病弊となり易い形式化や平凡化に捕はれてゐません。實行が卽ち理想であり、理想が直ちに實行化されて行くといふやうな境地が出來てゐます。エリザベス王朝時代の文學、自然主義勃興時代の文學といふやうなものには明かにこの傾向を看取することが出來ます。我が國でも、源氏物語が書かれた時、近松門左衞門や、井原西鶴が現はれた時などは、その時期といふことが出來るでせう。

こゝを以て考へて見ると、時代だとか社會だとかの狀態が人間の內部生活にまでもどれ程の强い力を働きかけ

るかといふことが明かに解ります。よく世の中の人が、今の文學には碌な文學がない、一體文學者は眠つてゐるのか死んでゐるのかなどと、漫然と罵るやうなことを聞きます。然しながら私が述べたやうな時世といふものゝ影響を頭において見るならば、かゝる漫然たる非難は往々にして罵る人が自分自身を罵つてゐるやうな結果になるのです。文學から何物をか得ようとしてゐる人々の生活が行き詰つたり、たるんだりして、何うしてそこに力強い作品の現はれ出よう譯がありますか。文學の無力を罵る前には、先づ自分達の生活がどの位緊張して生活されてゐるかを、どの位ゐ合理的に生活されてゐるかを、少なくともどの位ゐ立派な衝動によつて生活されようとしてゐるかを反省すべき必要が十二分にあることを知らねばならぬと思ひます。

然しながら同時に次の一大事を私達は忘れてはなりません。若し或る時代なり社會なりが、その中に含有されてゐる活力だけで、その活力の種々なる結合や離散だけで或は發展し或は變遷して行くものだとすると、自然自然に衰弱していかねばならぬのは分り切つたことです。獨樂をまはしたまゝにしておけば、一秒々々と回轉力を減じて遂に停止してしまふ外に道はありません。「若返り」といふやうな現象は到底出現しないことになります。勿論社會や時代は獨樂とは違ひます。獨樂はその隣りから力を受けることが出來ません。社會や時代には外界から新らしい力が働きかけます。然しながら單に外界から異邦的な力が加はつたばかりで本當の「若返り」が成就されよう筈がありません。是非內部からその時代なり社會なりを攪拌し、鞭撻し、推進する力が生じて來ねばならぬのです。それをするものは個人です。人格とか個性とかいふ一つの力です。これは實に生活體に於ける一つの不思議です。個人といふものも又時代なり社會なりが生み出したものには相違ありませんけれども、それがどうかすると內發的に自分を生んだ社會なり時代なりの原動力となり、それを內部から改新する力を持つといふのは一つの不思議です。然しそれは否むべからざる事實です。そこで文學といふものも單に時勢の感化影響ばかりか

らは生まれて來ず、却つて或る時代又は社會を生み出す力を持ち得ることが察せられます。こゝが實に個性が無視すべからざる尊嚴を有する所以です。だから或る人々が文學者の無力を罵るといふことにも、かゝる半面の理由が存在することを特に文學者は忘れてはならないのです。

で、私はこれから上述の三傾向が個人に現はれた場合、特に藝術家に現はれた場合、その創作品なる文學といかなる交渉をなすかについて述べなければならない順序になります。

個人が環境から脫し切ることの出來ないのは知れ切つた事實です。科學から抽出された哲學は凡て此の事實に重心點をおいて人間の生活を考へてゐます。極言すれば科學と哲學との交錯點の最大なる特色はこの點に存するといふことが出來ます。私は如上の考察に於いて、主にこの立脚地から文學を考へて見ました。

然し私一箇の立場からいふと、環境のみが人間の生活全體を造つてゐるものとは思へません。私が最初に述べた通り、存在の根柢をなすものは本能の統流であるといふ假定が許されるならば、而してその本能といふものは常に能動的に働いてゐるものであるならば、個性の中に存在する本能即ち創造力は環境の支配の下にのみあることなく、積極的に環境を變革し、突破し、創造する動向を有つたものだと考へねばなりませんし、又實際に於いてさうした作用が働かれてゐることを私達は常に經驗することが出來ます。それでなかつたならば「藝術は創造なり」といふやうな觀念は全然意味をなさぬものとなる外はありません。何故といへば、創造とは勿論これまで無かつたものを有らしめることです。私達の環境の中に見出されなかつたものを新たに創り出すことであるからであります。オスカア・ワイルドの論文の中に、生活が藝術を創るのではなく、藝術が生活を創るのだといふことを極力主張したものがありますが、その中の一つの例として、ラファエル前派の人達、殊にダンテ・ガブリエル・ロゼッチが一つの女の典型を創造した（それは人々がよくその畫に見るが如く、あまり縮れてゐない、赤味を帶び

た髪の毛を有つて、ロマンティックな、どつちかといふと瞑想的な容貌を有し、一體の表情が極めて靈的であるにもかゝはらず、厚ぼつたい唇の邊りに一味の肉感性を帶び、天才色ともいふべき蒼白い皮膚と、稍ゝ太い而して長い頸とを備へた女の姿體です）ところがこの流派が勢力を持ち始めると、いつともなく英吉利の婦人の中にさうしたタイプの人が現はれるに至つた、といふのです。それは實際さうありさうなことです。かゝる例は日本の藝術の歴史を調べて見ても發見するに難くありますまい。恐らく近松門左衛門が心中物の淨瑠璃を書いて、それが大阪人士によつて持てはやされた時には、その作品の中に出て來るやうな精神生活に終始する男女が所在に現はれ出たに違ひありません。これは敢へて藝術に限られたことでなく、一人の强烈な個性が出現する所には、生活の如何なる部門なるを問はず、かゝる現象が出現して、今までの環境に刺戟を與へ、遂に在來の環境の方向を轉換させる結果を生むに至ります。與謝野女史が、藝術は豫言的の要素を持つべきであると云はれたのは、この意味で極めて妥當な主張だと私は思ひます。

だから文學といふ分野に於いても、例へばロマンティックな時代には、ロマンティックな文學者と作品ばかりが生まれるとは限りません。そんな時代にも或る場合には恐ろしくリアリスティックな文學者が出て來て、軈て來るべきリアリスティックな時代の基礎と方向とを定めることがありますし、若しくは又、そんな時代にも恐ろしいデカダンなセンティメンタルな作家が出て來て、社會の進歩的方向を逆戻りさせようとするやうなこともあります。

かくの如き點は人間以外の動物には絕無といつていゝ所で、或る意味に於いて人間の生活が非常に複雜な相を呈する所以であります。その證據には哲學若しくは實踐倫理の問題に宿命說と意志自由說とがあつて、單に理窟の上から考へるなら、宿命說の方が論理が立て易く、且つ徹底的なものに思へますけれども、人間內部の欲求の中には、どうしてもその境地に滿足することの出來ない個性的自由の主張があります。而してこの欲求は、往々

にして單なる論理上の宿命說を超越して、實行的に生活の上に現象します。この論理的過程をそのまゝ實際の生活に移すと、そこに私が申し出た環境と個性との關係が認められることになるでせう。卽ち個性の內部的要求が時代の精神を超越して働き、時とすると時代の色彩がその個性の要求によつて導かれるといふやうなことが行はれるのです。高山樗牛氏が「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と言つたのは、單なる傲語と聞こえもしませうが、同氏の個性的欲求の中に、自分が住む時代に影響されて生きる外に、それを超越した自由の境地に憬れてゐた樣が窺はれるではありませんか。さうした點から考へて見ると、この言葉には面白い意味が發見されると思ひます。

偖て藝術に鬪らうとする人々は、多かれ少なかれこの個性的欲求を持つた人々です。もつと嚴密にいへば、環境によつて作り出される、どつちかといふと一時的な氛圍氣に注意するよりも、もつと沈潛したその底に存在する人間の恒久な傾向、狀態、運命等を如實に把握して、それを表現したいといふ欲求を持つ傾きがあります。かかる傾向に對しては或る種の論者からは迂愚の譏りを受けるかも知れません。人間の恒久的な傾向、狀態、運命などといふものが縱令潛在してゐるとするも、それが或る現はれとして感ぜられるのは、環境に接觸した時に於てゞある。つまり環境の如何によつてその現はれは常に異なつた相を呈する。その色々と異つた相を所緣にして人間性は表現される外に道がない。環境を無視して如何なる藝術も生まれ出ようがないではないか。かう抗議を申し出る人があるかも知れません。これは一應尤もな抗議であります。然しそこにはまだ徹底しない論理の混雜があるやうです。藝術は如何なる場合にも生の具體的表現であるが故に、環境といふ具體的な道具なしには表現は出來ません。然しながら同じ文學的表現でも、環境のみに重きをおいて、內部の恒久性を探らうとしないものと、內部の恒久性に重きをおいて、環境をたゞ表現の道具に使はうとするものとの二種があることを注意せねば

なりません。近頃通俗文學とは何んぞやとの議論がやかましく闘はれたやうでしたが、私の考へる所によれば、通俗文學と純文學との相違は、以上の申し出を徹底して考へて見れば正鵠を得るに近くはないかと思ふのです。即ち通俗文學とは環境、殊に現在に重きをおいて、内部的の葛藤を人間の表面的な解釋によつて解決しようとするものであり、純文學とはその焦點を人間内部の恒久性に集めて、深く更に深くその眞體を表現しようとする所に相違を來すのだと思はれます。而して云ふまでもなく純文學的表現に志す藝術家は藝術家らしい藝術家といふことが出來ます。例へば、こゝに戀愛の葛藤を描いた文學があるとしませう。或る文學者は、その戀愛の經驗を取扱ふのに、その小説が取扱はれてゐる時代の經濟生活だの家庭生活だのが、戀愛といふものに對してどういふ關係を持つてゐるかを注意して觀察し、或はその矛盾、或はその調和によつて、一篇の想を構へ、そのいきさつを綿密に描きます。勿論文學である以上、その中に出て來る人物が心の中に釀す喜びや悲しみは或る程度まで描かれてゐないではありませんが、それは筋を運ぶ必要から説明に描かれてゐるものだとします。讀者はそれを讀んで感激することが出來ます。何んとなれば、凡ての讀者は或る程度までは環境の桎梏を感じてそれと戰つて居ねばならぬからです。そこに作品との間に共通共鳴の點を見出すことが出來ます。然しながらその感激は畢竟生活の表皮に於いてなされつゝあるといふことを忘れてはなりません。その感激は可なり强いかも知れませんが、永續的であることは出來ません。何故といへば環境は時々刻々にその姿を變へるものでありますから、或る環境の重壓が除き去られる時が來ると、その作品の有する魅力は索然たるものになつてしまふからです。德川時代にあつたやうな、家柄に附帶する義理人情のしがらみに懸つて悶えるといふやうなことは、今の代の人には理解することさへむづかしい境地になりました。それだから今の代の人はその當時の人が感激したに違ひないと思はれるやうな作品を讀んでも、その描寫が義理人情といふことばかりを重く取扱つてゐるかぎり、更に感激を唆

られることがありますまい。或る戀愛事件がさういふ下らぬ障礙によつて行き惱むといふのを可笑しな、腑甲斐ないことのやうにさへ思ふかも知れません。これに反して、人間の生命の中に植ゑ付けられた深い衝動としての男女の關係、それが體驗的に深く考察され、強く意識され、而してこれが環境といふ假りの道具によつて端的に表現されてゐるならば、讀者の一時的に受ける感激の度合ひは或は前者に讓る所があるかも知れませんが、その感銘は底深く、永く消えないものになります。何故といふなら、かゝる內部生命の燃燒は如何なる時代、如何なる環境の下にも萬人の心の中に起るところの必至な現象であるからです。而してかゝる境地の表現は、小說に於けるよりも、戲曲に於けるよりも、更に詩に於いて最も都合よく表現され得ます。かくの如きこそ純文學といふことが出來るのでせう。實際過去の傑作と稱せられるやうなものを私達が讀む場合、恒久性を持つた價値として、その作品が生まれた時代と全く異つた時代に住む私達に感ぜられるものは、實にこの純文學の特色たるべき個性內部よりの欲求であることを知ることが出來ます。

以上の事實から演繹して考へて見ると、私達が眞の文學として要求すべきものは、藝術の個性的要求が、眞に徹底し、眞に飽滿し、眞に表現されたものでなければなりません。かくの如き作品をさうでない作品から選み分ける標準は、讀者の個性的要求の強弱如何によつて決定されます。かくの如き作品のみを他の蕪雜な作品から選み取り得る讀者は幸ひです。而してさういふ讀者の多く住む國は偉い國です。かくの如き作品が數多く提出され、かくの如き作品がより多く鑑賞される所に於いては、個性の力がいつでも環境を動かし、在來の環境を破つて、更に新しいよりよい環境を創り上げ、結局民衆全體の生活を本當の意味に於いて向上發展させます。藝術に對してかういふ態度を持ち得る民衆でなければ、社會組織の革命をも、道德的精神の向上をも、本當の意味に於いて成就することは出來ません。

社會組織を變革し、道德的標準を改定すれば、個性の生活もおのづから向上すると唱道するのは一理ないではありませんが、それをするのは誰がするかといへば、矢張り識見の環境よりも一歩進んだ社會革命家といふものがするのだといふことを誰も拒むことは出來ますまい。矢張り凡ての進歩の源頭は個性よりといふことになります。獨り藝術に於いて其の例外を見ることは出來ないのです。

五、文學の諸傾向

其の二 表現的傾向

クラシシズム――ロマンティシズム――ナチュラリズム――アイデアリズム

私は前に文學が生み出される心的動機即ち內在的傾向に就いて概略を述べましたが、これからはその內在的傾向が表現される場合、如何なる形を取つて表現されるかに就いて述べて見たいと思ひます。これも前に申出たことですが、藝術は表現であるといつてもいゝ位のもので、藝術的衝動の中には、その衝動を何かの形に現はさなければゐられないといふ大切な要素があります。この要素が働くとそこに藝術品といふものが生れ出て來るのです。

文學も亦藝術の一部門である以上、この約束に從つて生れ出たのは勿論のことです、そこでこれまで表現された文學の形式はどんな風であつたかといひますと、大體クラシシズム、ロマンティシズム、ナチュラリズム、アイデアリズムの四つに區別することが出來るやうです。それについて今度は少し述べて見るつもりです。

クラシシズムといふ言葉はいつでも希臘の藝術と結び付いて考へられます。クラシシズムといへば先づ念頭に湧き上つて來るのは、あの希臘の美土に培（つちか）はれて育ち上つた大藝術の面影であります。

大體クラシシズムと呼ばれる表現の特色は何んであるかといふに、一體に規模の雄大であること、形式は整正の美を保つてゐて、極端な感情の偏倚がないこと、一つ〳〵の言葉が莊重な調子を帶びて他の言葉に繋がれてゐること等を擧げることが出來ます。平衡といふことがいつでも考へられてゐて、謂はゞ重々しい礎の上に、適度な重さを以て立つ堂々たる建築物を思はせます。そこにはアイデアリズムや、ロマンティシズムで見出されるやうな流動の感じはありませんけれども、大抵のことでは小搖ぎもしないやうな安定さがあります。それなら何うしてかくの如き表現が希臘に榮えたかといふと、相當の謂はれがないではありません。

それは矢張り當時の希臘の生活がさせた業です。希臘の文化を形成した希臘人なるものは世に聰明な國民でした。彼等は透徹した頭腦の所有者でした。それであるから人間の生活なる事象に對しても、單に素朴な態度でそれを享受するのみならず、その內容を嚙み分けて根柢にまで徹底しなければ止まないやうな所がありました。かかる態度はいつでも生命に對する悲痛感となつて現はれます。生の現狀は勿論のこと、その過去と未來とを檢察することが深ければ深いほど、そこに矛盾や、不可知や、撞着やが生じて來て、人智では量り知ることの出來ない神祕に突き當ります。而してその神祕の姿はいつでも悲劇的です。人間の力は自然の力よりも小さく弱い。然しながら人間は已む時なく自然に對して反逆し、自然と戰鬪し、自然を征服しようとする衝動を捨て去ることが出來ません。この人間內部の宏大な企圖と、それを成就するには小さ過ぎて見える力量との矛盾は、それに感付いた人間が聰明であればあるほど、絕望的な、悲劇的な事體として感得されねばなりません。それは悲壯な宿命觀を結果します。若しこの傾向が他の條件によつて救ひ出されずに何處までも徹底されることになつたら、悲劇的といふ境界を通り越して悲觀的厭世的といふべき領域に這入り込むべき可能性を持つてゐます。印度に於けるあの思想上の傾向は明かにこの領域に陷沒したものであつて、それから人間自身を救ひ出す道は、單に人間の所

有する力を捨てゝ、潔く大自然の前に降伏して、無我となつて自然の中に沒入する外には亡くなるのです。然しながら希臘人はそこまで進みませんでした。そこまで進むべかりし希臘人を、もう一歩といふ處で悲觀主義者であることから救ひ上げてくれたのは、實に希臘の自然そのものでした。希臘の自然は泣くものをも笑はせずにはおかないやうな自然でした。單に氣候が適順であるばかりでなく、地力が豐饒であるばかりでなく、世にも稀れなる魅力ある風光によつて惠まれた郷土でした。若し古代希臘人のやうな聰明にして勇氣ある人種によつて住まはれなかつたならば、生活に何等の不合理も感ぜず、精進の氣も摧けた、醉生夢死の徒を多産したかも知れないと思はれるほど自然は惠まれてゐたのでした。如何に自分の生活に反省の力の强い希臘人でも、このことだけは明かに感受せずにはゐられなかつたでせう。徹底的には人間の敵である大自然が、彼等に膺ざはりのいゝ環境を用意してゐるといふ一事は見のがしませんでした。それが希臘人を厭世觀から遁れしめ、彼等をして世に在る間は大自然に對して苦しい戰鬪を續ける勇氣を振ひ起させました。從つて彼等の生活は、いつでも悲劇的でありませんでした。最後に來たるべき人間生活の宿命は豫想されながらも、彼等は勇敢に生に執着しました。この態度は明かに英雄的であります。さし迫つた危險を前にひかへながら、しかも悠揚迫らず自分の立場を守つてゐるやうな姿には、いつでも雄大な感じが伴ひます。藝術表現の特色の一つは、たしかにかうした態度から生まれたのでせう。

又希臘人は謂はゞ二つの極の中間に立つてゐたといへます。一つは聰明な睿智から來る淋しい人生觀、一つは環境が惠み與へる樂觀的な外部生活。この撞着した二つの要素は常に希臘人の心に働いて、動ともすると、その何れかゞ他に打ち勝たうとする傾向を示しました。然し第一のものが第二のものに打ち勝つ時には、希臘人は環境の恩惠に對して忘恩になります。第二のものが第一のものに打ち勝つ時には、希臘人は人間としての誇りなる

立ち優れた容智を踏み躪らねばなりません。その何れの場合も希臘人に取つては忍び難き損失です。そこで彼等の間には、極端な感情の偏倚を避けて、兩者の平衡の上に、自分の生命を建立する必要が生じます。これが又クラシシズムの他の特色なる整正の美を發揮せしむるに至つたのです。

こゝで私達が特に注意しなければならぬのは、希臘人によつて求め出された表現は、單なる外形の美裝ではなかつたといふことであります。その表現が全部内部的な必要から生まれ出てゐるといふことであります。それ故に希臘の藝術を見ると、クラシシズムの表現が大體に於いて無視されようとしてゐる現在にあつても、拒むことの出來ない生命力を私達に感じさせます。外觀の整美、均衡の中にも、灼々として動きやまない生命が感ぜられ、而してそれが私達の生命に或る熱を注ぎ入れます。

然しながら希臘のクラシシズムもその末期のものになると表現が内生命から分離して、その形はいかほど整つて來ても、益々無力になつてしまつたのは悲しいことです。

希臘人が築き上げた素晴らしい表現なるクラシシズムに對する憧憬から、其の復活を企てた運動はその後も歴代行はれてゐる。或は或る時代によつて、或は或る一箇の藝術家によつて。然しながら全盛期の希臘人が高まつたと同じ高さに、此の表現法によつて高まつた時代なり藝術家なりを發見しようとするのは相當に困難な事だらうと思はれます。

中世紀が希臘文化の輸入によつてにはかに中世紀としての發達を停止し、その跡に希臘文化の繼承者といふべき文藝復興期が起り、それが中部歐羅巴に傳はつて行つて、佛國王朝の繁榮期を生み出した時、佛蘭西では頻りにこのクラシシズムへの還元が藝術の上にも計畫された。然しながらこれが大部分無益な結果を來したことは已むを得ないことでした。何故となら、當時の佛國には希臘に見られたやうな内部的の條件が更に備はつてゐなか

つたからです。希臘殊にアゼンスの生活は、奴隷や農民に市民權を與へなかつた點に於いては、極端に貴族的ではあつたが、市民の間には割合に廣い自由と、從つて普遍的な文化の普及があつて、藝術家が感じ得た「聰明と環境の相剋」といふものは、そのまゝ當時の人達の內生活に力強く働かれてゐたものであつたのです。

然るに佛國王朝の盛時にあつては、當時の佛國文化ともいふべきものは、王廷と、朝臣と僧侶との階級に限られ、その人達は自分等が僥倖し得た外部的な權勢の座から失墜せざらんことに汲々としてゐて、もつと生活を自己の個性に引き寄せて考へて見るといふやうな餘裕は持ち得なかつた。動ともすれば、權勢の座から奴隷と擇ぶ所のないやうな生活に甘んじなければならない平民の階級に逐ひ下される恐れがある時に、どうして人々が誠の自己の省察を遂げることが出來ませうぞ。しかも希臘文化や羅馬文明の跡を模倣せんとする佛國王朝は、希臘に榮えたやうな藝術を今の世に造り出せと要求しました。こゝに於いてか當時の文學者は內部的の要求を持つてとなしに、希臘藝術表現の形式卽ちクラシシズムを取り入れようとしました。

單なる智的の技巧にも容易に侮り難いものはあります。人々は往々にして此の巧みなる表面的な造作に欺かれて、一種の陶醉狀態に這入り得るのを、すぐに藝術的反應と考へるやうな事があります。然しながらそれは到底人の心を眞底から動かして、新しい生氣に甦らせる事は出來ません、消極的な效用をしか持つことが出來ません。何故ならかゝる智的の技巧なるものがどれ程爛熟の極に達したからとて、それは決してそれを生み出した人の生活の全體とは結びついてゐないのですから。隨つてそれがその作品を鑑賞する人に働きかける場合にも全人格的に働くといふことが出來ないからであります。この點の相違が實に希臘のクラシシズムと近代の初頭に起つたクラシシズムとを區別する楔子となるのです。希臘のクラシシズムをいふ序でにいきなり近代歐羅巴まで下つてしまひましたが、勿論この二期の間には大切なる他の表現の一時期があつたことを知らねばなりません。それ

はロマンティシズムです。

ロマンティシズムは希臘の文化が伊太利に移つて或る年所が經つてから起つた表現法であつて、その表現法が起るにも相當の理由があると私は考へるものであります。

一體ロマンティシズムといへば概念的にも斯ういふものだと考へることが出來るやうですが、その內容をつきつめて見ると中々複雜なものを持つてゐます。それはこの言葉が適當な邦譯を見出すことが出來ないといふ一事から推しても考へることが出來るのです。例へば、クラシシズムは古典主義といひ、ナチュラリズムは自然主義といひ、アイデアリズムは理想主義といへば、大體に於いてその內容を盡すことが出來ますけれども、浪漫主義といつても、傳奇主義といつても、ロマンティシズムの內容を說明し盡すことにはなりません。その癖日本には全然ロマンティックな作品が昔からなかつたかといふと決してさうではないのです。それにもかゝはらず、この種の表現法に對する適譯がないといふのは、その內容が十分複雜であるといふ證據になります。

私自身果してロマンティシズムの內容を把握してゐるかどうかは疑問ですが、私は私なりにこの主義に對する一つの解釋を持つてゐます。文學の內在的傾向を論じた章で私はこの主義に對して數言を費やしておきましたが、更にこゝで補足していふならば、表現法としてのロマンティシズムとは異常を求める心持であるといふことが出來ると思ひます。クラシシズムが物の均衡といふことを心懸けて表現を完うしようとするに對して、ロマンティシズムに於いては、均衡といふ事には頓着せず、卽ち環境を輕視して自己內部の要求に重きを置く傾向だと見ることが出來ます。それは歐羅巴に於いて、中世紀の文明がやゝ形態を調へるに至つて漸々頭を擡げて來た表現法であつて、人々が從來の生活に滿足せず、何か變つた境界の中に自分を連れて行かうといふ熱意が自然に具象化されるに至つた結果であります。ダンテあたりを起點としてペトラルカ、タッソオ等によつて强調された表現法

は實にこれであつたといはねばなりません。彼等は在來の基督敎的文化に加へて、希臘から傳來した異敎的感化を蒙りはじめました。而して新しい眼を以て自分の周圍を觀察した時、そこに打破せねばならぬ堅い殼のあることを發見し、自分等の生活を導いて行くべき別種の世界のあることを朧ろげながら感じました。そこでこの世には見出されない、或る輝かしい世界に對する憧憬と飛躍とが試みられねばなりません。藝術家はそれを個性的に感じはじめたのです。而してそれを熱情を以て表現したのです。ダンテはそれを當時の文化的要素に對して試みました。タッソオはそれを藝術そのもの丶上に試みようとしました。而してそれらの試みは凡て當時の民衆によつて眞實に共鳴されたのです。ペトラルカはそれを人の心の働き、殊に男女の間の心の働きの上に試みようとしました。又上代の羅馬の文學の中にはあまり見出されなかつた、自然に對する人間の持つ藝術的情緒（人間生活の背景として見られた自然ではなく、獨立した、生ける存在としての自然）さういふものも當時の藝術家によつて甫めて探求され表現されるに至りました。この事實はロマンティシズムの持つ一つの特色を指示するもので、ロマンティストは或る意味に於いて一個の冒險的探險家たる資格を持つてゐます。彼は在來納受されてゐた生活圏外に新たなる獲得をなさんことを試みるのです。當時に於て、自然を獨立した一つの存在と見て、そこに今まで氣づかれずにゐた世界を開拓しようとしたのは、確かに新世界の發見であつたといふことが出來ます。

このロマンティシズムの傾向は文藝復興期を經てチュートン人種の勃興の時代にまでも及んでゐます。獨立民族の持つ神仙譚、延いては近世初頭の所謂騎士道が生み出した文學の凡ては何れもロマンティックな情緒を以て表現されてゐないものはありません。新しい文明を建立しようと精進してゐた獨逸民族が、環境の壓迫を打破して個性の尊嚴による要求を徹底させようとしたのは自然なことで、當時の文學に現はされた人物なり神仙なりは、等しく或る英雄的な天賦を有つた、力量の優れた若々しい男性であつて、それが何等かの征服事業に從事し、

或は中道に斃れ、或は成功の絶巓に立つそのいきさつを咏嘆しないものはありません。

其の後中部歐羅巴が其の所産の文化によつて整理せられ、一定した制度と習慣の下に一定の生活をなす事が可能である樣になり、近代國家の基礎が定まるに至つて、ロマンティシズムの運動は漸次下火になり、而して近代的國家組織の發祥地となつた佛蘭西から、私が前に申し出ておいた新しいクラシシズムの萠芽が生じたのであります。人の心の老いかゝつた所には、最早ロマンティシズムは榮える餘地を見出しません。そこには必ず他の表現が要求されます。而して此の場合にあつては、それがクラシシズムであつたのです。

然しながら當時のクラシシズムが如何に古代の外面的模倣に過ぎなかつたかといふことは前に述べておきましたから、こゝに新たに同じやうなことを繰り返すことはやめませう。ラシーヌ、コルネイユといふやうな文豪は現代に於いても決して度外視することの出來ない立派な作品を出した人達ではありますが、それら十指を屈するにも足らない少數の藝術を除いては、當時の文學は稀薄なクラシシズムの香ひを持つた作品か、熱情を伴はないで單に怪奇な表現を求めるのを能事とする出來損ひのロマンティックな作品が現はれたばかりでした。これらの點から考へて見ても、歐羅巴に勃興した近代國家主義的生活は、如何に民衆の欲求と交渉の薄いものであつたかを看取することが出來る筈です。

然しながら近代國家はその堅固な中央集權的の組立てのお蔭で、民衆全體の要求とは割合に沒交渉であつたにもかゝはらず、可なり長い間存續しました。けれどもその底潮に何等力强い民衆意志が動いてゐなかつた爲めに、その時代々々の晴雨計とも目すべき藝術の世界には、何等華々しき所産が見られないでしまつたのです。固よりこの時代の間に英國にはシエクスピヤも生まれ、スペインにはセルヴァンテスも出て、私達がいつまでも瞻望しなければならない藝術を生み出してはゐますが、これは寧ろ異常なる天才者の個人的先見を裏書きするもので、

その當時の國家的生活が要求してゐたクラシシズムとは類を異にした藝術を生み、却てその後に勃興し來つたロマンティシズムの先驅をなしてゐるといふ事實を見遁してはならないのです。

同じくラテン民族である佛蘭西人は、伊太利に榮えた文藝復興の精神を逸早く取り入れて、一つの文化を建設し、歐羅巴に君臨するほどの威勢を示しましたが、その中に獨逸民族は次第々々にその若々しい力によつて眼覺め來り、野蠻人視されてゐた境遇から拔け出して、獨得な文明を創り出す爲めに立ち上るに至りました。その文明の外形はどこまでも文藝復興期の精神を踏襲して、國家萬能の方向を取つたのではありますけれども、民衆全體の若々しい活氣は、自分を表現する爲めにクラシシズムの形式を取ることを許さなかつたのです。それは或る時機まで佛蘭西の流風に影響され、その模倣を事として得たりと心得た時代もありましたが、そんな模倣には安住してゐられないやうな强い衝動が內部には動いてゐたのです。

この新しい新興國の精神は、隣り合せの佛蘭西に反影しない譯がありません。折から佛蘭西の帝政はその秕政の結果、段々自壞作用を起して來て、それに代るべき何物かゞ暗々裡に需められるやうになつて來てゐたのですから、この二つの力によつて刺戟された國民は、對岸の英吉利に行はれた社會改造の結果に三重に刺戟されて、急轉直下の勢でクラシシズムならざる表現を求むるに至りました。これが實に近代に現はれたロマンティシズムの濫觴であります。

個人的にいふと、近代ロマンティシズムの源頭をなしたものはシエクスピヤといつても間違ひはありますまい。歐羅巴大陸に現はれたロマンティシズムの文學者は大抵シエクスピヤの刺戟感化によつて自分達の行くべき路を尋ね出してゐるからであります。佛蘭西にはバルザック、ユーゴー、英國にはバイロン、シェレー、獨逸にはゲーテ、シラー等の天才が一時に雲の如く現はれ出ました。而して歐羅巴の天地を生まれ代つたやうに若々しいもの

にしてくれました。この時代のロマスティシズムの文學者が盛んに用ゐた問題は彼等がなすべく餘儀なくされてゐる生活に對する反抗であります。彼等の書くものは何等かの意味に於いて時代彈劾の氣分に浸されないものはありませんでした。その結果として彼等はその時代に求め得ぬ所のものを求めてやみませんでした。例へば歐羅巴以外の天地卽ち亞非利加や近東極東の生活が得て題材として選まれたり、心的生活を描く場合にも異常なる心理現象が題材として用ゐられたので、騎士時代の怪奇な傳說や、運命的な悲戀や、あり得ないやうな冒險談やが屢〻彼等の間に熱情的な筆を以て描かれました。

かゝる傾向が歐羅巴の思想界、延いては實生活の上に投じた影響は決して些少なものでなかつたといふことが出來ます。或る意味からいふならば、佛國革命の如きあの絕代な事件も、かゝる思想的傾向に示唆されて勢を增したといふことは疑はれない事實だと思ひます。

然しながらかゝる勢ひもそれが極まれば又餘弊を生ずることを免れません。ロマンティシズムはその奔放な空想によつて、人間の生活を熱情的にし、現在に滿足出來ないものにし、或る何等かの新しい世界の創造に向つて躍進せしめはしましたが、その間に人々の脚は知らず識らず大地から離れて、堅實味を失ふ傾向を生ずるに至るのは已むを得ぬことです。これは近代の人々に取つては最も不安極まることです。

何故といへば、彼等は既に一方に於いて科學的精神の訓練を受けてゐたのですから。彼等には地上に現在存在する事實を最も根據ある生活の基礎として考ふべき素養が既に與へられてゐるのですから。

こゝで科學的精神といふものについて一言を費やす必要があると思ひます。中世紀に續いて近代の初頭、文藝復興の大運動が歐羅巴殊にラテン民族を風靡した時、これが生み出した文化には少なくとも二つの大きな潮流が流れこみました。一つは羅馬帝國から傳來して來た中央集權的、國家至上主義的、傳統的な保守精神であつて、

これが次に至る時代の外面的形體を調へました。一つは希臘若しくはアラビヤ等の諸外國から傳來した地方分權的、民衆的、革命的な進取精神でありまして、これが内面的の動因となり、やがてその一脈はロマンティシズムの大運動となつて近代の初頭に現はれ出ましたが、その外に極めて理智的に現象の本質を探らうとする冷靜な心的活動が始まつてゐたのです。占星術や、錬金術や、神祕哲學などはこの傾向の先驅と見ることが出來ますが、この流統にあつては、直接の人間生活のみを思索の對象とすることなく、人間の生活を生み出した自然若しくは思考力そのものを研究の對象として、その本質が何であるかを極めて合理的に尋ね出さうとしたのです。この精神的運動は、それが極めて理智的であるだけ、簡單に或る結論に達することは出來ませんでしたけれども、一歩一歩と確實な收穫を結果しつゝ、段々大きな領域を文化的生活の上に占めるに至りました。而して古來單に物質として輕視されてゐたものが、人間の生活を左右する上にどれ程な大威力を振つてゐるかを闡明し始めました。而してそれが遂に一つの動かすべからざる領域を思想生活の中に建立しました。人はそれを科學的精神と呼びます。

これは實に歐羅巴の古今を通じて特筆すべき大事件の一つであります。それが物質的生活の上に投げかけた絶大の影響は勿論のこと、思想的生活の上に及ぼした感化に至つても實に驚異に値するものがあります。科學的精神は儼乎として空想的假定を排斥しました。而して動かすべからざる事實を要求しました。動かすべからざる事實は私達が感觸することの出來る物質と稱せられるものゝ中に明かに把握することが出來ます。それ故科學の研究者は先づ凡てのものを措いて物質の本質及び物質が支配される法則を發見することに努力の全部を費やしました。そこにはそれまで人々が想像もしなかつた全く新奇な事實と法則とが、續々として發見せらるゝに至りました。かくてそれらの事實及び法則を基礎として哲學が即ち萬有と人生との關係が提唱されるに至りました。これ

を稱して唯物的人生觀と稱します。科學的研究法は（殊に自然科學に於いては）殆んど歸納法によつてなされるのでありますが故に、個體の特色といふものは出來得る限り無視され、若干の個體に共通する特色のみが、殊更に强調される結果になります。さうせねば到底結論は抽出されないのであります。この方法が人生問題に應用された結果、個性といふものは法外に無視され、個性の綜合から成る社會の生活、延いてはその社會を存立せしめる環境の狀態が極めて綿密に討究されるに至つたのは自然の勢ひです。この傾向が喜んで文學の世界にも取り入れられました。而してそれを發足點として成り立つた表現法が卽ちナチュラリズムであります。

以上の說明によつてナチュラリズムなる表現的傾向が如何なるものであるかはほゞ推察することが出來ると思ひますが、この傾向は、ロマンティシズムが希臘風のクラシシズムを打破して、個性と環境の二者の中、前者に極力重きを置かうとしたに對し、後者卽ち環境に對して殊更に重きを置かんとしたのは理の然るべき所であります。一人の人間をこの世に生れしめ、その人間が生活し來つたが如き生活をなさしめ、その運命の凡てを支配するものは環境の外にはないといふことを、この傾向は主張しました。從つてこの傾向にあつては、凡ての存在は物質的の因果關係によつて成就せられ、宿命的な力によつて拘束されてゐるのであつて、人間の生活と雖も亦この約束から脫逸することは出來ません。それ故自然主義の文學者は作品を生み出すに當つては、先づ自分自身が自然そのものゝやうに人生に對して無關心な態度にならなければなりません。何等個性的の要求好惡に支配されることなく、在るがまゝの現象を嚴密な具體的な因果によつて觀察しなければなりません。それが完全に出來れば出來るほどその作品は價値を增す譯なのです。

この自然主義的運動はロマンティシズムがやゝ極端に走つて、その脚が漸く地から離れ去らうとする頃、猛然として首をもたげ始めました。旣に存在の研究に於いてこの方法に慣れ親しんでゐた民衆は、それが文學の世界

に應用されるのを見た時、どうして歡迎しないでゐられませう。何時如何なる時でもしつかりと脚を地上に踏み固めて、少しの焦躁もなく、少しの假斷もなく、どこまでも事實の眞に徹しようとする自然主義者の態度は、悲壯といへるまでに眞劍な、忠實な、人生に對する態度だとして瞻仰されたのは無理のないことです。

かくして人生の姿は容赦なく私達の目前に展開されました。これまでは一種の誇りから、或は一種の恐れから、或は一種の感情から、强ひて露出しないやうに仕向けられてゐた世相の斷面が、何の顧慮もなく、何の容赦もなく、忠實に、あるがまゝに描き出されることになつたのです。而して徒らに自分だけの感情や智見に執着して、人生の外面を撫で廻はして、空中に樓閣を描いてゐたやうなロマンティストの態度は、怯惰極まる殉情に過ぎないとして見下されるに至りました。この運動は近代の內部生活を極から極に移轉させたといつて差支へありません。卽ち個性への溺惑から環境への降伏でありました。

これがどれ程近代人の傾向を堅固なものにしたかは計ることが出來ぬ程大きなものであります。この洗禮を受けなかつたら十九世紀二十世紀の特種な文明はどうしても生み出されることはなく、人類は徒らに過去の諸傾向の下手な繰り返しに滿足しなければならなかつたでせう。一度自然主義の潮に入り浸らない人間は二十世紀に生きてる意義を失ふといふことさへ出來ます。この大運動があつた爲めに私達は始めて私達をやゝ委しく客觀視することが出來るやうになりました。そこの世界には最早詩はないかも知れませんが、可觸的な事實は儼然として拾ひ出されます。この運動によつては人類始まつて以來の夢から、喩をこすつて眼覺めたのです。私達の生きてゐるその姿がどんなものであるかを適確に示されたのです。この運動の猛將なるフローベル、モーパッサン、ゴンチャロフ、シュニッツラー等に對して、私達は十分の感謝を捧げねばならぬ理由があります。

然らば自然主義は功德のみを持つた表現的傾向であるかといふと、それは決してさうではありません。凡ての

事物には長短の一面があるやうに、この傾向にも亦短所があります。

しかもそれは容易ならざる短所であつたのです。

それは何であつたかといふと、大體二つの點から考へて見ることが出來ます。

その第一は自然主義の主張である純客觀なる立場が人間業としては不可能であるといふことです。科學が人間以外の自然を對象として取扱つてゐる場合には、而してその對象が人類から關係の遠いものであればある程（例へば天體であるとか、數字であるとか、重力であるとか）、客觀に近い立場に立つことが出來ますから、從つてその研究によつて抽出される結論も客觀性の濃い公平なものであることが出來ます。然し、それだからといつて、この研究法を人類そのものに及ぼして來ると、觀察者と觀察の對象との關係は段々異なつて來ます。そこには如何しても地質學者が或る巖石に對して持ち得るやうな客觀的態度を許さないものが生じます。社會的現象を研究する場合にはまだ出來易い（例へば社會學、法理學、政治學の如き）といへますけれど、一度その鋒先を一人の人間の心の動き方に向ける場合になると、第一對象が非常に特殊なものになりますから、綜合とか歸納とかいふ方法のみでは到底成功し得ない難點が生じて來るのです。かうなると前に云つた自然科學の根本方針と矛盾して來ねばなりません。早い話が、フローベルとモーパッサンとは自然主義文學者の巨頭として目されてゐる人ではありますが、兩者の作品を取つて比較して見ると、誰でも銘々の持つてゐる持味といふやうなものを區別することが出來るでせう。モーパッサンの表現した所のものをフローベルに表現させたらあゝは表現してなかつたらう、同樣にフローベルの表現した所のものをモーパッサンに表現させたらあゝは 表現しなかつたらうと思はせるのに十分な相違が見出されます。さうして見ると、同じ人生の姿であつても、而してそれが理想的の自然主義者によつて描寫されてゐても、必ずしも同じ姿を私達の前に展開するものではないといふことが認められねばなりませ

ん。この相違はどこから來るかといふに、それは何といつても二人の文學者の個性の相違によるのだといふの外はありません。

右の事實が否むべからざることなら、自然主義の表現法によつて私達に與へられた一つの作品が、如何にも人生そのまゝの相を表はしてゐるやうに見えるのも、つきつめて見ると一つの假像であつて、結局はその作者の氣稟なり個性なりに濾過された世相であると考へる外はないのです。科學的方法を人生觀照に應用したまではいゝが、實際の結果に行くと十分に實現されてはゐないのです。矢張り私達は或る作家の個性を窓として、色ガラスの嵌めこまれたその窓から、白日の下で見たつもりで人生を見てゐるのです。自然主義によれば、人生が宿命的で機械的であるといふのも、人間以外の自然に對して、科學者が、研究の結果下した斷案を、そのまゝ僻見的に踏襲して疑はないでゐるといふまでのことです。人間の內部的要求の中には、生活の全部を宿命的に考へて、晏如としてゐられない或るものゝあることは否むべからざる事實であるのです。然しその內部的衝動を全く無視して、人間と環境との交渉のみから、人間生活の全體を表現し得ると思つたのは自然主義の大きな誤謬であつたのです。

又自然主義の第二の短所といふのは、前にも一寸いつたやうに、人間の生活を宿命的であると斷定してしまつたことです。人間の生活を一個の自然現象と見て（實際又ある意味に於てさうであるに違ひないのですが）、他の現象が一つ殘らずが自然律によつて在在してゐるやうに、人間も亦萬有を支配する自然律以外に出ることは出來ないと斷定してしまつたことです。然しこゝで自然主義は大切な一つの見落しをしてゐました。それは何であるかといふに、人間には他の生物と違つて、自覺といふ特殊な機能が發達してゐるといふことです。この自覺といふものは他の生物にも或はあるものかも知れませんが、少なくともその發達は實に痕跡的であつて、人間のそれ

と比べて見ると、量ばかりでたく質まで違つてゐるといつてもいゝ位にかけ隔たつてゐます、人間はこの機能を以て單に自己の存在を意識するのみならず自覺します。卽ち自分の存在が環境的の諸條件によつて成り立つてゐるといふ外に、いかなる內部的の要求によつて成り立つてゐるかといふことを知つてゐます。恐らく人類に特に顯著に現はれたこの自覺といふ機能が、人間を他の生物から殊別して、一躍地球のあらゆる存在の最高位に立たしめるに至つたのでせう。さう考へるのは科學的にいつても許さるべきことです。人間はこの自覺によつて、卽ち內發的な自己意識によつて、徐ろに進化の最高階に立ち、而して更により高い所に進まうとしつゝあります。

若し人間を考察する場合に於いて、この一事を忽諸に附したならば決して正鵠を得るといふことは出來ない譯であります。所が科學は人類に自覺の發生したことを承認しながら、それを考察する場合になると、單に外面的な條件のみを基準としてその働きに結論を與へようとしたのです。固より單に純理的な見地からいふならば、人類が今日在る所に在るといふのも、大きな自然律に從つてゐればこそなので、それから脫逸することは絕對的に出來ないのではありますが、それ故科學の申し出る所に半面の理由がないではありませんが、然し人間が苟も生活してゐる以上、何等かの內部的要求なしには、換言すれば、人間を圍繞する環境にこちらから働きかけて行く力の意識なしには生存してゐないといふ事實も亦同時に認めねばならぬ次第です。他の生物にあつてはこの點を考察に入れる必要はありませんが、人間にあつては是非とも不問に付することは出來ません。これを不問に附したら人間の正しい姿は當然歪んでしまひます。又この機能のあることを否定して人生觀が作られたなら、人間の推進力は無殘にも萎縮してしまひます。

然るに自然主義はこの一事をおろそかにしました。自然主義と雖も人間の持つてゐるこの內部的衝動を全然度外視した譯ではありませんが、殆んど僻見的にこの力が環境に對しては計算に入れる必要がない程無力なもので

あることを暗示したのです。これが自然主義の陷つた第二の大なる錯誤でした。

この表現的傾向が若し活力の漸次失はれつゝ行く人間の生活の中に起つたならば、それは當然その傾向を受け入れる人間に取つて致命傷をなしたに相違ありませんでしたが、幸にも歐羅巴に於いては、この傾向に徹底的に征服せらるべく、餘りに力强い人間生活が存在してゐました。縱令それが歐羅巴のある階級若しくはある國土の人々によつて無條件的に信奉せられたとしても、幸に歐羅巴にはこれから新らしい文化を生み出さうと藻掻いてゐる活力に充ち滿ちた地方が殘つてゐました。それは北歐と概稱せらるべき地方であつて、露西亞、デンマーク、スカンディナヴィヤ地方を包含する大地域であります。これらの地方にある人達は、若々しい大望と力量とを以て文化的生活に參加し、如何なる障礙に遇つてもそれを突破して自分達の生活を完成しようといふ熱意に燃え始めました。而してその當時ロマンティシズムの運動を覆へして、勢力を扶植してゐたナチュラリズムに對して彈劾の聲を放ちはじめました。世人が呼んで後期ロマンティシズムと稱する表現的傾向は、實にこの北歐人の意氣が生み出したところのものです。

先づ彼等は環境に對して個性の力を强調することから出發しました。卽ち環境なるものを人間生活の王座から追ひ下ろしまして、そのあとに個性といふものを坐らせようとしたのです。この點に於いてその表現傾向は確かに自然主義以前に盛んであつたロマンティシズムの運動と一味相通ずるものがあります。哲學の世界に於いて逸早くマックス・スティルネルを動かし、ニイチエを動かし、キルケゴールドを動かし、美術の世界に於いてセザンヌを動かし、ゴッホを動かし、ロダンを動かしたのは實にこの氣勢でありました。それらの凡ての叛逆者たちは、凡ての力を超えて個性の力に依賴することを說き、且つこれを實行しました。文學の世界にもこの傾向は續々現はれたのです。自然主義の劇曲家として認められてゐるイブセンの如きにも、旣にこの傾向は顯著に窺はれます。

ストリンドベルヒ、トルストイ、ロマン・ローラン、ホヰットマン、カーペンター等にに至つては、全くナチュラリズムの頽術から解放された人々として、儼然として私達の眼の前に立ち現はれるに至りました。

固より是等の人の持つロマンティックの味は、前期のそれとは大分違つたものであるに相違ありません。既に一度自然主義の洗禮を受けたこれ等の人々に取つては、現實の生活、目前の事體は決して空想的に一蹴し終るを許さない嚴粛な事實であつて、そこから一歩でも回避するといふことは、既に一歩だけ自分の立場を弱めいぢけさせるものだといふことを十分知り拔いてゐます。現實の生活以外には、天國にも地獄にも生活といふべきものはないといふことを忘れることは出來ません。この苦しい煉獄の眞中で彼等は最上の戰を戰ひ、無限な力を持つと見える環境の重圍の中にゐながら、自己の個性をして優勝權を握らせようと戰つたのです。彼等の脚は不斷にしつかりと大地に結びつけられてゐます。而してそのまゝで大地を征服しようと目論んでゐるのです。この表現的傾向が一度行はれるやうになつてから、全く行き詰つて動きのとれなくなつた人間生活は甫めて少しづゝ動搖し始めました。絶望のどん底に一縷の活力が動き始めました。これは實に現代の歐羅巴が經驗しつゝある所の生みの苦しみです。この苦しみの中からどれだけ價値のあるものが生起したか、又將來するだらうかといふことは、明かに秤定されるべき時機には達してゐないやうです。然しながら兎にも角にも環境萬能の機械的人生觀の一角が潰えて、個性中心的な有機的人生觀が首を擡げ出したことだけは事實です。

今までの所でこの表現的傾向が人生の生活に與へ得たと信ぜられる一二の事柄を申し出て見るのも無駄ではないかと思ひます。それは第一人間の內在する當爲の能力を覺醒しました。宿命觀によつて全く虐げられてゐた意力を復活させて意志の自由の方へ人を歩ませました。又傳說習俗から人間を解放して新しい世界の建立に人を誘ひました（現在行はれつゝある全世界に亙つての文化改造の機運は、或る程度までこの表現的傾向の所産だと見

るのを至當とすると私一箇は信じてゐます）。自己の尊嚴と自由とが主張され始めたが故に他の個性に對する尊敬と自由とが認められねばならなくなりました。人間の生活に對して極めて流動的な見方が成り立つやうになりました（ベルグソンの哲學などは確かにこの傾向を代表してゐるものと見ることが出來ませう）。極く簡單にいつても、これらのことが既に行はれようとしてゐるのです。而してそれが行はれた結果が、或る弊害を伴ふにもせよ――而して地上の如何なることが弊害を伴はずに行はれ得ませうや――人間の生活に活氣ある新生面を開くであらうといふことは誰にでも想像の出來ることだと私は思ひます。

クラシシズム、ロマンティシズム、ナチュラリズムに就いての概略は以上の如くでありますが、終りに臨んでアイデアリズムに就いて數言を費やしておきたいと思ひます。

アイデアリズムは理想主義と譯して大體間違ひがないやうに、その內容はその命名からほゞ推察することが出來ると思ひますが、それは或る人爲的な目的概念を構出して、それに向つて人間の生活を適合して行かうといふ所から出發してゐる表現的傾向であります。この主義にあつては、人間はいつでも向下的傾向を持つたものと斷定されて居り、若し人間本然の赴くまゝに放置してあるならば、必ず退縮から退縮を結果するに過ぎないといふことが前提されるのです。但し人間には、自分だけではその實行的能力はないが、或る他の力を借りるならば、向上進步しようとする欲求だけはあるといふことも同時に前提されなければなりません。卽ち人間は人間以外若しくは以上の或る力によつて、人間本來の絕望的な境界から救ひ出されることが出來るのです。その人間以外の力によつて到達せしめらるべき境界が卽ち理想といふものです。ナチュラリズムに於ても、人間といふものゝ外に環境といふ力を立てゝ、人間がそれによつて不可避的に支配されると見るのですから一見類似點があるやうにも思はれますけれども、ナチュラリズムに於いてはその力が人間を善くするか惡くするかは全く考へられてゐな

いで、その力が人間に働く有様は極めて無慈悲な無關心なものであるのに反し、アイデアリズムに於いてはその力が必ず絕對的に眞善美なるものがあつて、それが人間に働く有様は、必ず攝取的で意圖的であります。卽ちプラトーのアイディヤにしても、神祕主義者の神祕當體にしても、有神論者の神にしても、それらのものは凡て現在の我々人間には抱擁もし正しく理解することも出來ないやうな、超越的な或る力であつて、それが何等かの關係に於いて人間に働いてゐる。人間は四方摸索の結果、かすかながら其の力を認め、それに信頼し、策勵をうけ、一步一步と其の力の方に自分達の現在の境涯を乘り越えて進んで行かうとする。そこに理想主義的の態度が成り立つのであります。

かゝる態度は其の程度の多少はあれ、人間の誰でもが持つて居る所のものであります。人間はすべて自分の現狀には、滿足して居ません。そこから脫却して、よりよき若しくはより高き境涯に移り進まうとする要求を持つて居ます。此の點に於いては、凡ての人が理想主義者だと云ふことが出來ます。

それ故理想主義の文學は如何なる時代如何なる處にも多少の現はれを持たないことはありませんでした。しかし乍ら、私がこゝで他の文學的表現から區別して、理想主義と名づけるところのものには、かゝる概念的な見方からは、多少特色づけられるものがあるのです。理想主義の一般的特色の中にも、それは勿論あるのですが、理想主義的表現といふと、私共の現在の生活に對するかなり强い否定と、理想の實現に對する排他的な熱意とが特に色濃く示されてゐるのを、云ふのであります。或る理想境の前には、私共の生活は見下げはてらるべき程に、價値のないものとされてゐるのです。從つて現在の生活と、未來との間には有機的な連絡が斷たれて居ます。私が前に述べた中世紀に於けるロマンティックの傾向も、やゝこれに似たものと云ふことが出來ませうけれども、そこには、現在の生活を否定したところに、さうして理想を憧憬するところに、嚴しい意志の力が働いて居ないで、

夢想とか陶醉とか云はるべき、渺茫たる心の狀態が、起るのですけれども、理想主義に於いては、理想の憧憬又は實現に、もつと強い意志の力が働きます。卽ち此の種の表現に於いては理想境の成就は人間を必至的に救ひ得る唯一の道なのであります。理想主義的表現が、かういふものだとしてみると、私共はかゝる表現的傾向を、歐羅巴の文學史上の所在に見出すことが出來ませう。例へば、キャソリックの信仰を高調せんとする文學の如き、藝術の至上なることを主張する文學の如き、所謂キリスト敎文學と稱せらるゝものゝ如き、社會主義的文學と稱せらるゝものゝ如き、等しくそれでないものはありません。

かゝる傾向の表現にも、おのづから特質は生じます。其の良い方の點を云はうなら、かゝる表現には何時でも純一無雜な熱意が働いて居て、私共の生活にたるみを持つことを許さないやうな激しい意氣が働いて居ます。如何なるよいものであれ、現在にある所のよいものは、到底未來の成就の爲めにはものゝ役には立たないと云ふ程の意氣込が窺はれます。かゝる點で、此の種の表現は、これに接する人に或る種の潔い強い力を生じさせ、現在に戀々として居るのを屑しとせざる氣組みを起させます。さうして、夢であれ幻であれ、その理想を成就する爲めには現在の何物を犧牲に供しても憚らないと云ふやうな衝動を與へます。かゝる寄與が人生にどれ程のいゝ力となるかといふことは、誰でも容易く想像することが出來ませう。

併し同時に其の缺點も亦かへりみられなければなりません。理想主義は第一、現在の生活に對する否定であつて、そこにはひどく厭人的なものと、厭世的なものとがあります。初めから人間と云ふものをもつて、無價値なものであるとみてかゝる所に、此の主義の破綻があると云へばあると云はれます。殊に現今のやうに我々の個性の自覺が著しくなつた時代にあつては、かゝる前提は疑ひの眼をもつてみられねばなりません。又理想といふものはそれが如何に眞しやかに考へられ又表現されんとしても、そこには一二の空漠さが漂うて居るのを否定する

ことが出來ません。現代のやうに現在といふものを重く見て、未來をも過去をもその中に溶かし込まうとする時代にあつては、理想の成就せられる未來を輕々しく現代から切り離して考へるのを、拒まずには居られないといふ點もあります。それから理想といふ固定した概念は、往々にして人類生活の視野を狹め、縮める嫌ひがないではありません。實際過去を省みてみると、或る時代に非常な熱意をもつて享け入れられてゐた理想主義の文學が、如何にも狹い一時的な傾向の代表的表現であつたといふことを考へねばならぬ場合が多々あります。日本の例で云つてみるならば、賴山陽の日本外史であるとか、支那の例で云つてみるならば靖獻遺言であるとか云ふやうな書物は、其の時代々々の理想主義的作品として、讀む者の血を沸かすに足るものがあつたでありませうが、今になつてそれを讀むと、內容の空疎と人生の切取り方の狹さとを、十分に感ぜしむるものがあるといふやうな次第です。然るに藝術的表現は、かゝる概念的な見地からもつと深入りして、不變高級な人間性にまで達して居るのが、より理想的な仕事であることは、前にも述べた通りであるとすれば、理想主義的表現には、此の點に於て一味のもの足らなさが介在すると云ふことが出來ませう。

　かゝる表現は、如何なる心の狀態が生み出すものであるかと考へてみるのに、それには二つあると思はれます。第一は人の心が比較的衰へて或る倦怠が生じた時です、それはどちらかと云ふと、やゝロマンティシズムに近い夢想的な理想主義を生み出します。第二は其の時代の生活全體が個性を極端に壓迫する時です。其の時には個性はどうしても現在と妥協的な關係にある事が出來ない爲め、勢ひ現狀を打破して全く色彩の異なつた生活を未來に實現しようとするに至るのであつてギリシヤのクラシシズムとは全然反馳した姿を呈するに至るのです。ともあれ、かかる傾向は人間の生活が力に充ち合理的に行はれて居る際には決して表はれないのが常態です。だから理想主義的表現が著しく勃興する時代には私達は警戒の眼をもつてその時代の生活を反省する必要があると思ひます。

以上申し述べた所によつて、文學上表現的の傾向の大體を述べた積りです。或る時代若しくは或る作者に表はれるこれ等の傾向は、その時代が如何なる時代であり、その作者が如何なる性格境遇にあるかを、割合適確に告げ知らせると思ひます。それは文學を鑑賞する上に、多少の參考になるかも知れません。

六、文學の諸傾向

其の三　具體的傾向

詩——小說——劇——其の他

或る意味から云つて、藝術とは表現そのものであるといふことを前に述べました。勿論藝術の一部門たる文學も其の埒外に出ることは出來ません。此の章に於ては文學が如何なる形をもつて表現せられるかを述べる積りです。

思ふに、生物が發聲するに至つたのは、自己保存とか、種族保護とか、種族繁殖とかの目的に依つてなされたものに相違ありません。友と友とが生存の必要品を分ちあふ爲めに呼び交はし、敵の襲來に對して助けを求める爲めに呼び交はし、或は生殖の爲めに異性を求めて呼び交はしたといふやうなことが其の起原をなすに相違ありますまい。しかし乍ら人類に於いて或る程度の進化を遂げた狀態にあつては、必ずしも斯かる實用的な意味からのみ發聲されず、縱令又其の背後には實用的な動機が隱れて居るにせよ、意識にはそれを上すことなく、發聲する場合が非常に多くなつて來て居ます。例へば、痛みを感じた時に思はず叫び出す時、或は喜びを覺えた時に識らずしらず叫び出す時、美しい物を見た時ふと叫び出す時、人は其の背後に必ずしも實用的な要求を意識的には持つて居ません。此の實用的な意義なくして、自己の內部の痛切な感じを表現するそれが、とりも直さず藝術的表

現であります。しかし乍ら人類の生活が更に複雜多樣になるに從つて、人はもつと有目的な、換言すれば實用的要求に應じ得る發聲の手段を考へ出すに至りました。これが所謂言葉であります、言葉は人類に至つて其の生活が複雜になるに從ひ益々複雜となり、それにつれて藝術的表現の手段として發聲からは益々遠ざかるに至りました。

かく複雜になつた表現を、その純一な形に還さうとするのが藝術家の仕事であります。この意味から云ふと、前にも述べた通りに詩の形式が最も成功したものと云はれなければなりません。人間の生活が今のやうに複雜になる以前には文學上の表現は具體的には主に詩歌の形に於いてなされました。それは如何なる國に於いても符を合せるやうに同じです。併し生活の複雜化はその境地にのみ文學のあるのを許さないで、こゝに戲曲とか小說とか云ふ表現法が生れ出ました。この表現法に於いては、どういふ事が企てられたかといふに、實用的な言葉をかまはずに用ゐて、その結果に於いて或る藝術的な印象を浮び上らせようとしたものです。それ故そこに用ゐられた言葉そのものには、多くの場合亂雜な內容が附帶して居るのを免れません。讀者はその藪の樣に生ひ茂つた言葉の中を通過する間に、おのづから藝術的の雰圍氣を形づくつて行かねばならぬのです。畢竟藝術家は小說戲曲に於いて自分の內部に持つて居る表現の要求を、思ふ儘に言葉の上に沁み出させる力がないので、已むを得ずこの不純な材料に依賴して居るのです。これは具體的な藝術上の表現法としては、何んといつても不完全なものであると云はねばなりません。

或る人は云ふかも知れません。人間生活の複雜化は、勢ひ散文的な表現を必要とするに至つたので、これがあながちに文學の退步といふことは出來ない。此の後生活が益々複雜になるに從ひ、延いて人の心も曲折が綿密になるにつれて、散文的表現の傾向はいよいよ助長されるだらう。さうならなければ私共の文學に對する要求は決して充たされないだらうと。しかし私はさう考へない。將來に於いては詩歌的傾向が漸次に發達するだらう。即

ち言葉が、その實用的な蕪雜な內容から解放されて、純粹な藝術的行動の唯一の表現手段として用ゐられる程度に醇化されるだらう。何故ならば、藝術はその本來の性質として常に醇化から醇化へ赴かうとして居るものだからであります。生活が縱令如何に複雜にならうとも、よき詩歌は完全にそれを表現する事が出來ると私は固く信ずるものであります。此の意味に於いて詩歌は、文學の具體的表現の最高位に位するものであります。

さうは云つても散文的表現が全然跡を絶つだらうとは思ひません、世の中には何時でも純粹なもののみが獨存するのでは無いのですから。その上現在に於いては、この散文的表現の傾向が可なり著しく發達して居るのですから。そこでこれからその散文的表現について數言を費やしますが、散文的表現は標題にもあるやうに大體二つに分ける事が出來ます。一つは戲曲であり、一つは小說です。尤も小說に近い形を持つたもので、物語とでも云ふものがありますが、それが實際の物語であれ、架空な物語であれ、歷史的敍述と云つた方が適當で、藝術の圈內に屬せしむべきものではないと信じます。勿論小說の中にも此の歷史的敍述と云はるべき分子が、多少の程度に於いて混入して居るといふことも拒み得ない事柄ではありますが、しかしそれは小說に缺くべからざる要素といふことは出來ません。此の事は又戲曲を考へる場合にも云はれ得る所です。

戲曲と小說とが如何にして區別せられるかと云ふに、私には其の截然たる區別はどうもつき兼ねるのですが、以前印象藝術と具象藝術との區別をした時の氣持が、此の場合にも或る程度まで當てはめられると考へるのです。卽ち、戲曲にあつては、具象といふ事が主な目的になつて居り、小說にあつては、印象といふ事が主な目的になつて居ると考へるのです。

だから戲曲は、心なり、動作なり、事件なりの、或る場合に於ける外部に現はれた姿をその儘に表現して、見るものゝ感覺に訴へるのを旨とする。さうしてそれはその效果をたかめる爲めに、他の藝術との協力を要求しま

す。例へば音樂、繪畫、舞踊の如きそれであります。從つて、作者の内部に存する藝術的要求は、かゝる外面の附纏物によつて高調せられ得ると同時に、屢々歪め虐げられ易い。此の點に於いては藝術的表現といふ立場から見て、何處か突きつまつてゐない、緩漫な所があると云はねばなりません。それ故、戯曲の作者は人生に對しておのづから寛大な心の持主であるに相違ない。さうして猶、戯曲の特色として、生活の中からクライマックスが飛び飛びに拾ひ上げられなければならぬ必要があつて、その中間に介在する所の、平調な過程は省略されるが故に、生活の鳥瞰圖は展開されずに、云はゞ秀でた山の峰のみが示されて居ると云ふやうな結果になります。かゝる作品を生み出す爲めには、藝術家はおのづから詩人の持つて居るやうな資格の一面を持たねばならぬ筈であります。

尤も讀劇と稱して全く讀む爲めにのみ書かれた戯曲がないではない。しかし乍ら、私はこれを變則な現象と見ないではゐられない。戯曲本來の發生から考へてみても戯曲は必ず俳優によつて、舞臺の上に實演せらるべき約束の下にある。卽ちその表現が、直接感覺に訴へられて效果を生ずべき約束にある。この約束を無視せねばならぬ戯曲といふのは、その表現が具象的でなく、印象的であるが故であるに相違ない。卽ち感覺に訴へずして頭腦に訴へる部分が多いに違ひない。さうなると形式こそは戯曲であつても、内容に於いては小說に近寄つて來て居るのです。單に形が戯曲に似て居るからと云つて、それを戯曲といふことは困難ではないかと考へます。

小說になると、此の具象的傾向は全然なくなつて、その目指す所は印象的、卽ち鑑賞者の頭腦に訴へることになります。作者は單に生活のクライマックスのみを表現しようとする事なく、如何なる局部に對しても、その藝術的衝動を動かし、その儘を作者自身の氣稟を通じて云ひ表はさうとするのです。だから小說は結局人の心理の過程をその儘跡づけて行く結果になりませう。といつて、それは心理學の記述とは全然異なつてゐるのは申す迄もありません。科學は常に總括をもくろみ、藝術は常に特殊化を目指してゐるので、同じく心理過程を表現する

にしても、文學にあつては、それが最も確實に具體化されてゐなければならないのです。

私の小說に對するかういふ考へ方を非難する人が或はあるかも知れないと思ひます。お前の云はうとするのは、小說全體について云ふのではなくして、單に狹い意味の心理小說について云つてゐるやうに見えると。

併し、私一個としてはさうは思はない。小說に現はれる事件の推移といふ事は、單獨には藝術的に何等の意味も持つてゐはしない。それは單に、その中に表はれようとする心の働きを載せる車のやうなものであると、私は思ひます。若し、その事件の描寫とか、環境の描寫とかいふものが、强く美しく遂げられて居たとしても、それは小說としての價値を高くするものではなくして、詩歌の分子、又は優れた歷史的記述が混入してゐるに過ぎないのだと、私は思ひます。これ等の考への誤認から、よい小說が惡い小說とされたり、惡い小說がよい小說とされたりする場合が、極めて多いやうです。

以上戲曲と小說とが、如何なる區別の上に成り立つかといふ事は、大體述べた積りですが、要するに、散文的表現は何としても、藝術品として物足らないことを感じさせます。戲曲が他の藝術に俟たなければ、それ自身を十分に表現し得ないといふ點から考へても、又小說が人の心の平面的な若しくは分解的な記述に依つてのみ成り立つといふことを考へてみても、藝術的衝動の端的な發露からは、甚だ遠いといふことが察せられるでせう。音樂が持つやうな極めて直接な純一な表現は、到底これ等の藝術からは望むことが出來ません。私自身戲曲や小說によつて自分自身を表現しながら、かういふ事をいふのは甚だ忸怩たるものがありますけれども、よく考へてみると、さういふ表現法を選び乍らも、私は常に詩歌を考へ音樂に憧れてゐるのを發見します。それは單に私のものずきな心のさせる事のみではありません。そこにはもつと深い事實が潜んで居るのです。私の藝術的衝動が純粹であらうとすればする程、散文的表現には滿足が出來なくなるのです。それ故私は此處に敢へてこれだけの事

を申し述べたのです。詩歌、戲曲、小說の外にも文學の具體的表現の傾向は數あるに相違ありません。論文、寓話、散文詩、Essay の如きはそれでありますが、これ等は皆上述の具象的傾向の二つ以上の化合物であるか、或は藝術以外の要素を加入した藝術的混血兒かでありますから、私は此處にくど〳〵と申し述べるのを避けます。それは讀者諸君が少しく考へて下されば、直ぐ判ることだと思ひますから。

七、文學の鑑賞

生活と文學といふ標題を揭げて居り乍ら、私の講話は多少岐路に入つた趣きがありました。しかし乍ら、文學の概念を形造る上に於いて、多少の參考になるものがあるかと思ひます。生活と文學との交涉を考へる上にも、これだけの概念を形造つて置くことが、無益ではありますまい。

私は文學が藝術家の藝術的衝動の表現であり、その表現の中でも純粹に衝動を表現すべき方法が求められて居り、その表現は時代や作家その人の傾向に從つて、多樣の相を現はすものであるといふ事を概略述べて來ました。さて、かゝる藝術的表現は我々の生活の上に、何んの役に立つであらうか、如何なる角度をもつて存在するか、何等の價値を供給するかといふやうな問題が殘ることになります。此の問題の解決は前述の諸章を少し注意深く讀んで下されば私としての意見は自から抽出されると思ひますが、此處に暫く重複を厭はずそれを述べてみます。

私の考へから云ふと、凡ての物の存在はその存在自身の中に、價値と目的とを持つて居なければなりません。少くともさうある事が、その存在にとつての最上の條件です。若し、その存在が或る他の存在にのみ役立つやうな存在であるとしたなら、その存在は獨自的に存在する何等の理由もなくなつてしまつて、他の存在の屬性たるに過ぎないことになります。世の中には、往々にして文學を或る他の人間活動の道具であるが如くに考へる人が

あるやうです。

宗教家は宗教の要具としてこれを見ようとし、教育家は教育の材料としてこれに俟たうとし、社會改良家は社會改良の手段として、これをあしらはうとするやうに見える事さへあります。さうして、不幸にして文學がそれ等の人の要求の埒外に出ると、忽ち惡德文學とか墮落文學とかいふやうな汚名をきせて、それを葬り去らうとします。或は又生活の壓迫を緩和すべき遊戲の一つの種類として、これを見ようとする人もあります。俗な言葉で云へば疲れ休め、骨休めの爲めに文學を鑑賞するのだと、公然と云ひふらす人もあります。それ等の何れの人達に對しても、私は徹底的な抗議を申し込まずには居られません。或る學者が云ふやうに、藝術とは、生活の餘裕が出來て後、初めて生れ出るものだとの說が縱令眞であるとしても、餘裕が生み出したものであるが故に遊戲的であるといふ結論には斷じてなりません。少なくとも文學はさうしたものがあつてはならないと私は主張します。

宗教がその領土を儼然と守つて居るやうに、科學がその王國を固く守つて居るやうに、文學にも文學のみが要求し得る領土があります。それは何んであるかと云ふに、人の內部に潛んで居る大きな衝動――習慣、習俗、制度等の一時的な附帶物に煩はされる事なしに、それよりももつと深い所に純粹に保たれ、働いて居る所の本能――をその儘表現しようとする氣稟の働きであります。しかもその衝動が表現される爲めには、決して說明的であつてはならず、平面的であつてはならず、有機的な綜合に於いて生きて居る儘の衝動を表現しようといふのです。以前にはよく藝術は再現なりと云はれました。即ち一度經驗された生活を何等かの形態に於いて再び可感的にするのが藝術の使命であるやうに主張されました。その議論は併し肯綮には中らないと思ひます。再現はそれがどれ程巧みになされて居たとしても、結局模倣であり物眞似であるに過ぎません。そこには必ず原型の固定化が生じ、又本質的生命の退縮が結果されます。それは藝術の第二義的な要素とは云はれるかも知れませんが、第一義的に無

くて叶はぬ要素と云ふ事は出來ません。それなら第一義的の要素とは何んであるかと云ふのに、今申し述べた通りに、人の內部的衝動の能ふだけ端的な表現であります。縱令形式に於ては再現と見られるやうなものがあつたとしても、その奥に本能の力の生々しい搖ぎが無かつたならば、それはよき文學といふ事は出來ません。それだから作品の中に表現されて居るものは、必ずしも現在肯定されて居る生活の様式でなければならないとか、私共の五官が感知する自然の姿であらねばならぬとかいふやうな制限は加へる事は出來ません。表現派の美術を見た人は誰でも氣付くではありませうが、此の派の人が表現する自然の姿は、一見極めて不自然に誇張されたり、歪められたりして居るのを知るでせう。けれどもそれは無意味でさうされて居るのではありません。此の派の人にとつては、自然をその儘再現するのが却つて無意味なのです。それは寫眞によれば直ぐ成就される事だと彼等は考へて居るのです。さうして、藝術家の氣稟を通じて刺戟を受けた內部の本能が働いたその儘の姿を自然といふ素材を通じて表現する所に、藝術家としての眞の使命を感じて居るのです。實際現今の表現派の美術家達が、どれだけの程度に於て此の態度をその作品に表はして居るかと云ふ事は、此處では問題にする必要はないのであつて、その態度が正しいものであるといふのが認められゝば、私の企圖は足りるのです。

　文學に於いてもこれと同じ事が云へます。外界から作者が受ける刺戟を如何に眞しやかに再現するかといふのが、作者の問題ではなく、その刺戟に對して作者の本能が如何なる働きをなして居るかを、端的に表はすのが文學者の使命であります。であるから、その表現には現在の外界の事情、卽ち現在の生活に適合するやうな結果が、現はれるか否かは問題ではありません。さういふものが現はれる事を文學に要求せんとする人達は、必ず失望するでせう。文學が供給するものは、その後に潜んで働いて居る衝動の生き〳〵した姿の表現であります。此の衝動卽ち本能こそは、私共人間の生命の中軸をなすものであつて、しかもその姿は私達の日常生活の混亂によつて晦

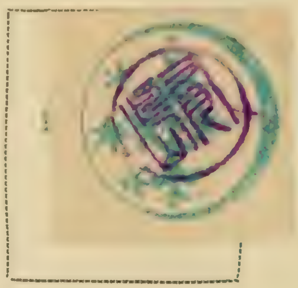
まされ、容易に把握することの困難なものであります。それを文學は朧げながら有機的な姿の儘で、私達の目の前に現はれしめようとするのです。かくして、人は現在の道德習慣制度を超越した赤裸々な氣持で、この本能の力に觸れ、そこに生命の躍進を促がすべき暗示を純粹な形に於て受取る事が出來るのです。これのみが文學の有する目的であり、價値であります。文學は本能の自己表現そのものに目的を持ち、價値を持ち、さうして其の點に於て、生活に對して正しい角度を以て儼存することが出來るのです。古來のよき文學は一つの除外例もなく、此の力を豐かに持つて居るものであるのを、少し注意深い讀者は容易に發見するでせう。さうして結果としての此の力が人生に進路を示し光明を與へ、最後の健全なる到達に意味深き暗示を與へるに違ひありません。

凡ての力はそれが善くあらうとも惡くあらうとも、必ず破壞の力を伴つて居ます。もつと正當にいふと力には惡い力はありません。其の力がその奧底から純粹に湧き出した場合には、必ず破壞すべきものを破壞し（それが現在に於て一見どれ程尊いものに見えようとも）、築き上ぐべきものを築き上げて行きます。人間の生活の凡ての現はれが力の働きである以上、文學も亦一つの嚴しい力です。その破壞力を恐れて、最も尊いもの丶隱されて居るのを忘れるのは、不幸だといはねばなりません。讀者が若し自分の書畫の上に火を積み重ねて置くやうな氣持で文學的作品に對したならば、そこには必ずよき收穫が生まれ、將來更によき文學が供給されるでせう。

（一九二〇年四月――一九二一年三月、「文化生活研究」所載）

――第六卷了――

昭和四年十一月五日印刷
昭和四年十一月十五日發行



非賣品

監輯者 有島生馬
　　　 里見弴
發行者 佐藤義亮

印刷所 富士印刷株式會社
製本所 共同印刷製本部

發行所 東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番

